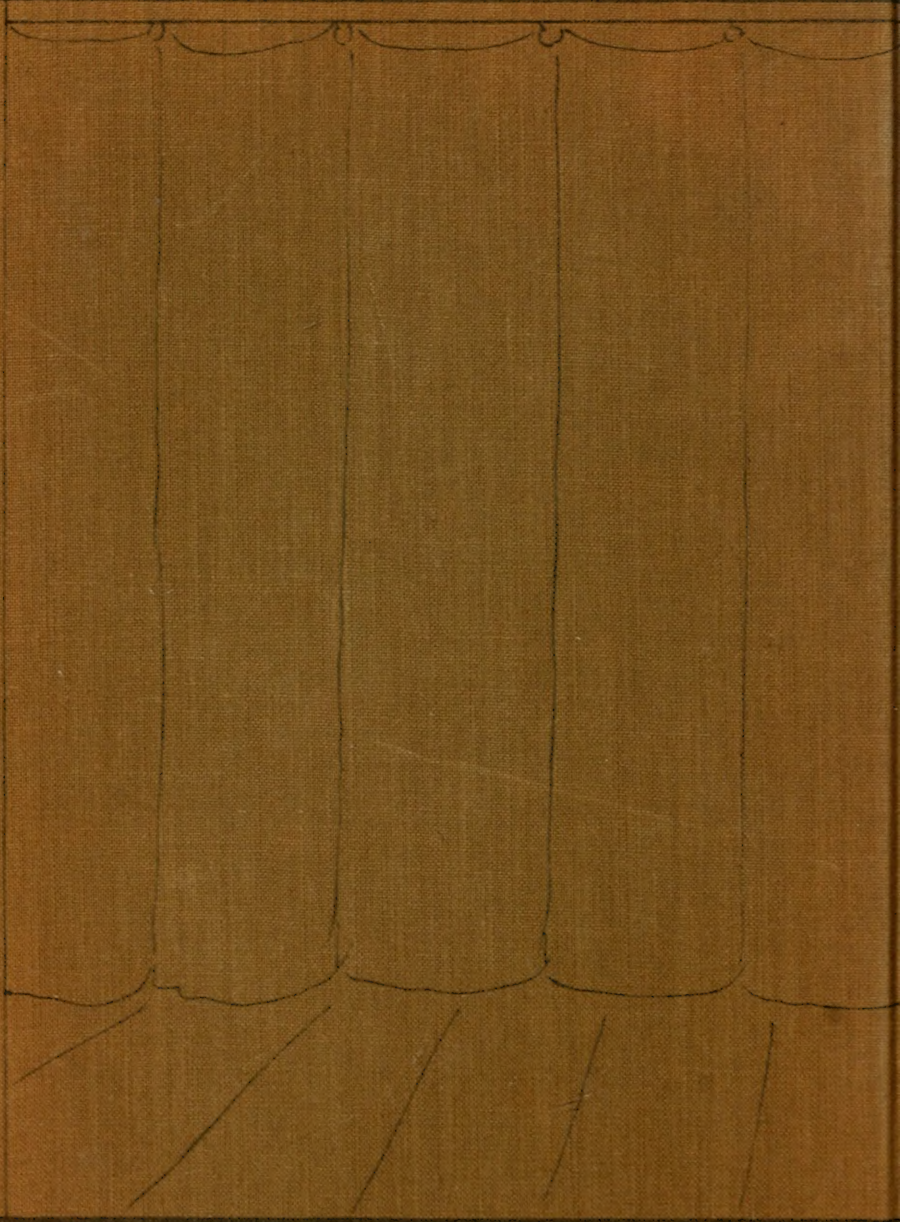


日本戲曲全集
第十二卷

鶴屋南北世話狂言集

東京
春陽堂版

「心謎解色絲」初演當時の錦繪で、墓所でお房が蘇生した所です。



日本戯曲全集　第十二巻　目次

鶴屋南北世話狂言集

人の噂も本町に隠れ中根屋の色相場早くも耳に入相のかねて持參の婚禮と女敵をこきまぜた白無垢のちらし書その千話文もお家流見通しのうらやさん目どは違はぬ掘出し女房時も東雲半時を爰で爭ふ夜廻りが安賣の片袖はほんに阿漕が裏借家輕き身過ぎも小石川に御存じの二人娘をちよつと隠して置炬燵島がらよきの蒲團をかけて

心謎解色絲

五さつもの



初演の繪番附

心謎解色絲

序幕　深川八幡の場

役名――半時九郎兵衞。蔦の者、お祭左七。赤城左京之助光若。乳人、竹川。本庄綱五郎。石塚彌三兵衞。山住五平太。醫者、東林。絲屋番頭、佐吾兵衞。廻し男、儀助。神原屋手代、金六。角力取、ずんぎり。蔦の者、權。同、八。同、源。藝者、お絲。仲居、お卷。鳥追ひ、お君。同、お八重、同、お六。九郎兵衞女房、お時。松本女房、お蔦。

本舞臺三間の間、下座の口石の鳥居、向う石垣の上に玉垣、この前に葭簀張りの茶屋、奉納の提灯開帳札、寄席、淨瑠璃の貼り札など誂らへの通り、深川八幡の景色、爰に五平太、家中侍ひの形にて、金六、質屋、ずん切、取的の角力とりにて、上手の床几に腰をかけ、次の床几に權、八、源、蔦の者、餘所行の形にて腰をかけ、茶屋の婆、茶を酌みゐる。大拍子、神樂、鳥追ひ唄にて幕明く。

權　ヤア、こりや關取の弟子、ずん切どのではないか。

ずん　どなたかと思つたら、お揃ひなすつて初買ひかえ。

八　イヤ、今日は何よ、山の手と下町と、いさくさがあつたところから、手合ひの衆がござるので

源　今日二軒茶屋で仲直り、そこでおいらも雜魚の魚まじり。

ずん　そりやア飲み口でござりやすね。そんならあの頭の子分

三人　そのお祭り兄イを、待ち合はせて居るのよ。

金六　待つといへば五平太さん、昨日わざ〳〵爰までと、お手紙でござりましたゆゑ、二百兩持つて參りましたが、彼の質物の色紙は。

五平　サア、藝者のお絲が身請けと頼んだ二百兩、いづれ後方。

ずん　モシ、そんなら、あなたもあのお絲さんかえ。そりやアとんだ事だ。私しは今日、あの子がお馴染の

五平　絲屋の番頭佐五兵衛か。大事ない〳〵。おれも佐五兵衛を待つて居る。

權八　おいらア爰で待たうより山へ行つて待つて居ませう。

三人　サア來やれ。

ト鳥追ひ唄、大拍子、神樂になり、鳶の者三人金六に附いて鳥居の内へ入る。直ぐにこの鳴り物にて、向うより佐五兵衛、手代の形、東林、醫者にて、楊枝を使ひながら出て來り、花道にて

東林　春もやゝ景色調ふ月と梅、ではない色と酒、粂本の二階で洒落足らず、また藝者を連れて山じやれとは妙々。

佐五　イヤ又、そよと南が吹いて來ると、白魚網で屋根船もよいが、兎角お絲めが酒ばかり喰つて、中の字をきめるにはあやまる。

東林　中の字といへば、アレ、仲町の眞中をヨロ〳〵と、とんだ絲性な藝者だ。オイ〳〵、早く來ないか。お絲坊、つんぼう

ト長く呼ぶ、向うにて

いと　何を悪洒落な。東林さん、待ちなさんせいなア。

ト誂らへの流行り唄になり、向うより、お絲、仲町藝者にて、お卷につかまり、酒に醉ひしこなしにて出て來る。儀助、廻しにて、三味線箱を持ち、附いて出て來り

まき　佐五さんと一緒に來ようと思うても、お絲さんが轉ばさんせうと思うて。

佐五　オツと、その轉ぶを願つて居ても、下駄が轉ばずやで辛氣辛苦だ。ドレ、手を引かうか。

いと　イエ〳〵、丼で三ツや五ツ飲んだとて、醉ふやうな弱い酒ぢやござんせん。昨夜も土橋の玉泉さんと飲み明かし、たうとう盛り潰したは、餘ツぽど手柄者でござんせうがな。

儀助　きつい御自慢。その度々に迷惑はこの廻し、酒と一緒に、お絲さんに廻されるには

いと　困るによつて、否かえ。

儀助　なにサ、御祝儀はパッ〳〵と、去年の雪のやうに、煩せえほど下さるし、これからまた山へ行つて、水風呂桶で始めやせう。

いと　こりやよいわいなア。

まき　サア、ござんせ。

ト唄の切れにて皆々本舞臺へ來る。

佐五　こりや五平太さま、ずんぎりも待ち兼ねたであらうな。
五平　佐五兵衛、きつう待たしたな。
いと　お前は五平太さん、そんなら佐五さんともお近附かえ。
五平　オツと、さしだと氣遣ひがるは尤もだが、これまでは身共も、そもじを口説いたれど、とんと思ひ切つて、これから佐五兵衛に取持つが嬉しいか。
いと　そりやマア、お禮から先へ云ひやんせう。
東林　イヤ、また得心さへすれば、本町筋の番頭株、石町新道あたりへ圍はれ、居ながら拜む撞鐘堂。
儀助　ざつと五十や三十の、小金には困るまい。
東林　妙々。
ずん　さう致したら、わしも折々參つて、地取りでもお目にかけませう。
　ト此うちお絲、お卷に囁いて、紙に包んだ物を渡す。
まき　アイ、モシ、ずんぎりさん、これはお絲さんから。
　ト金を遣る。
ずん　これは有り難うござります。よろしくお禮を。
　ト此うち、鳥追ひ唄になり、鳥追お八重、編笠にて三味線を彈き、鳥追ひお君、同じく盆にお捻りを入れ持つて下座より出て來て
きみ　ことぶき祝ふ初春に、七福神の寶船。エオイ〳〵。
　ト唄ふ。お八重は三味線を彈く。
まき　アレ、お絲さん、見なさんせ。
いと　ほんに、可愛らしい鳥追ひぢやわいなア。
きみ　御新造さん、入れさしやんせ、入れて下さんせいなア。
東林　イヤ、藝者を捕へて入れろとは、妙な事を云ふわえ。
佐五　マア、緣起がいゝ。ドレ〳〵、一文遣らう。
　ト錢入れより出してやる。お君盆にて受ける。
儀助　こんな子を鳥追ひにしようより、年一ぱいなら仲町代物。
きみ　旦那さん、金下さんせ
皆々　ヤ、なんと云ふ。
きみ　金が欲しい、金下んせ。
八重　コレ〳〵お君、そんなこと云はぬものぢやぞえ。
佐五　ハテサテ、つけ上がりのした乞食め。なんぞ買ひたい物でもあるか。
きみ　イヽエ、買ひたい物はござんせんが、金下さんした

ら、それを怖い伯母さんに遣つて、可愛がつてくれる外の小屋へ行きたうござんす。

いと　ハテナウ、どうやら哀れな物の云ひやう。其方は眞の兩親はないかや。

八重　ハテ、この子の親というてはござりません。貰ひ子か、拾ひ子か、此やうに門附に出ても、貰ひが薄いと、打つたり毆いたり、それは〱慘い目にあひます。わしはツイ隣でござりまするが、常住詫してやりますわいなア。

まき　ほんにそれは、むごい事にあふ子ぢやなア。

八重　それで、外の可愛がる内へ行きたがりますが、小さい時から世話したゆゑ、金取らにや遣らぬ遣らぬと、云ふ事を聞いて居るゆゑ、それで今のやうな事を申しまするわいなア。

きみ　錢や米を貰うて去なぬと、毆かれたり、縛られたり、飯も喰はさずに、それが怖い。眞の父さんや母さんに逢ひたうござりまするわいなア。

いと　聞けば聞く程、いぢらしいその子の身の上。待ちや待ちや。足るか足らぬか知らねども、お卷さん、これ遣つて下さんせ。

ト鏡袋より小判壹兩出して渡す。

儀助　ヤア、鳥追ひめに一兩とは、仕合せ者だな。

まき　ソレイナア、コレ〱そこな子、これを遣らうと云はしやんす程に、どうぞマア、その可愛がる小屋とやら、内とやらへ。

八重　これは有り難うござります。私しが又内へ歸りまして、外へやる相談してやります程に、それまでも人に見らるゝと、直に取上げられます。お君、戴いて仕舞うて置きや。

まき　ドレ〱、わしがよい所へ仕舞うて置いてやりませう。その守おこしや。

ト提げて居る守り袋を取つて、中より守を出して見て

モシ、お絲さん、でも此やうな守が入れてござんす。

ト お絲何心なく取つて

いと　こりや眞間の繼橋、手古奈のお守。

ト裏を反して

治承二年戊戌四月五日誕生の男子十吉。

儀助　お絲さん、何のこつたな、小穢い。

東林　乞食の守、早く返してしまふがいゝ。

いと　イ、エイナア、男子十吉と書いてあるが、この子は

女子、殊に
ト指を折つて
年の數の逢ひといひ、わたしも小さい時から持つて居る、この通りの手古奈のお守。こりや滅多にない守といひ、もしやわたしの兄さんか。
向うを見て
八重　モシ〱、アレ向うから、この子を酷うする婆さんが來ますわいなア。
トこれにてお卷、今の守へお札と金を入れ、お君が腰へ附けてやるうち、通り神樂にて、向うよりお六、乞食婆、編笠と三味線を持ち、キヨロ〱駈けて出て來り、お君を見て
ろく　この餓鬼は爰にうせたか、今朝小屋を一緒に連れて出たに、ちやんと小路隱れをしやアがつたな。
八重　イヽエイナア、最前一の鳥居より、はぐれたというて逢うたゆゑ、一緒に門付けして、分けてやらうと思うて、
ろく　ソレ、さういふ他人劫な。憎らしい。
トお君の頭をくらはす。
佐五　コレサ〱、さう酷うするな。

ろく　なにサ、どんなにしても大事ござりやせん。この餓鬼は、わつちが熊ケ谷に居る時、棄兒か、宿なしの子か、この守を着けた儘、狼が咬へて來たを、わつちらが內で可哀さうだと、雜巾に火をくッつけて、狼を追ひちらし、助けてやつて育てた餓鬼、頑是の出來るにつけ、仲間の奴等が、拾ひ子だの、纏ッ子だのと、他人劫つけられ、いけねえつちやアござりやせん。サア〱、早く歩びやアがれ。また晩は食止だぞ。
ト頭をくらはす。お君泣き出す。
八重　お六さん、其やうにせいでもよいわいなア。
ろく　イヽエ、打ッちやつて置きたせえ。これから深川中を引摺り歩く。うしやアがれ。
トお君お八重を連れて入る。
東林　なんと、酷い婆アぢやアないか。
佐五　酷いといふは、あの婆アよりお絲。今の乞食に壹兩やる、派手も器量もありながら、兎角おれにやア色氣なし、得心さへすれば、直ぐに身請け、年季を拔いてやるがなア。
いと　佐五兵衞さん、身請け〱と云うても下さんすな。上げたり下したり、調子違ひの三味線ぢやあるまいし……

お卷さん、儀助どん、此お客の座敷は勤めぬぞえ。

儀助　また惡い蟲を起して、そんな我まゝ。

まき　それ〳〵、皆醉うておいでなさんすによつて。

いと　イエ〳〵、人を弄り散らかして、わたしや下がるぞえ。

まき　それぢや惡いわいなア。お前が癇癪起しなさんすとわたしが座敷の廻しやうでも惡いかと、内の手前

いと　イエ〳〵、わたしが好いやうに云ふわいなア。

ト紙に包んだ金を遣る。

まき　モシ〳〵、これぢや猶惡いわいなア。

いと　イエ〳〵、何ぢやあらうと、下げて下さんせ。

儀助　モシ、それぢやアこの儀助が、中内へ濟みません。

いと　濟まうと、濟むまいと、わたしが知つた事かいなア。

ト包んだ金を額へ打ちつける。

儀助　オヽ、痛い。

ト取つて見て

こりやお金……こんな痛みはいくらでも、いた有り難い。

皆々　ハテ、とんだ癇癪持ちだ。

いと　ドリヤ、これから杵正さんへ行つて飲み直さうわいなア。

ト流行り唄になり、お絲、向うへ行きかける。これにて儀助、お卷も是非なく附いて行く。舞臺皆々呆れて居る。此うち花道よりお祭左七、五寸だるみの股引、半纏の上へ裏襟の掛つた小袖を着、革羽織、鳶の者にて出て來る。後より半時九郎兵衞、やつし股引、誂らへの形、頰かむりにて、鳥飼の蒸籠を兩掛けに擔ぎ出て來り、花道にてお絲に行き逢ふ。

九郎　妹のお絲ぢやアないか。

いと　お前は兄さん。

九郎　中内へ寄らうと思つたに、よい所で逢つた。

左七　ハヽア、そんならあの子は、こなさんの妹かえ。

九郎　面目次第もないが、わしが身性が惡くつて、今に強請りやす。イヤ、爰ぢやア何も話されない。妹、あすこへ歩びや。

いと　イエ、わたしやちつと。

九郎　ハテ、歩びやれといふに。

ト矢張り右の唄、彈き續けにて、皆々本舞臺へ來る。お絲、下の方の床几に腰を掛ける。九郎兵衞蒸籠を下ろす。

すん　これは左七さん、今し方まで皆さんが

左七　そりや大方權や八だらう。今日は仲間の仲直り。親分、風の神喜左衞門どのゝ名代に、帳場から直ぐに深川くんだり、顏を出すも面役、歸りは又、有象無象にとツつかれて、鶩でも買はにやアならねえ。
九郎　モシ、この蒸籠は、あの松本へ行くのだね。
左七　さうサ、擔り込んで下せえ。
九郎　合點でござります。時に絲屋の番頭さん、いま永代でお前の所の小僧が、山へ行くならこの袴を屆けてくれろ、その間におれは富藏を見ると、横着な奴サ。風呂敷が小さいから、わしが風呂敷へ包んで、くツつけて來ました。

ト蒸籠の棒に、括してある風呂敷取つて袴ばかり渡す。

佐五　あの丁稚め、また野良をこいてうせるか。

ト袴を取るうち、五平太、九郎兵衞が持つてゐる風呂敷に目を付け

五平　この風呂敷は覺えがある。
九郎　エ、。
五平　さてはこの間、鎧の渡しで、家來小者が包みを盜み取つたはわれだな。
九郎　ア、、コレ／＼、滅多な事を云はつしやんな。わしやアそんな者ぢやアごんせんぞえ。
五平　吐かすまい。コレ、この風呂敷の端に、山住氏と縫ひ印。
九郎　サア、それは。
五平　これでもおのれ、爭ふか。
九郎　イヤ、この風呂敷は拾つた。
五平　なんと。
九郎　後月から本町の夜番に雇はれ、町内を廻る折、大道で拾つたこの風呂敷、夜番は物を拾ふなとお觸れでもあつたか。
五平　ヤ。
九郎　このお侍は、滅多無性に人に難癖を云ひかける。おれも、ちつとやそつと、人に面を見知られた九郎兵衞、盜人と云はれちやアすまない。うぬ、どうするか、見やアがれ。

ト蒸籠の天秤棒を取つて立ちかゝる。

五平　おのれ、侍ひに向つて慮外吐かすと、ぶツぱなすぞ。

ト柄へ手をかける。

東林　モシ／＼、滅多な事をなされまするな。
五平　イヤ／＼、此方にも覺えある風呂敷ゆゑ。

九郎　なんの事だえ。二本棒の侍ひと犬ッころが怖くつて江戸の住居がなるものかえ。これから死ッくらだ。爰へ出やアがれ。

五平　おのれ、もう料簡が

ト拔いてぶッかける。九郎兵衞も天秤棒振りあげる。皆々怖がる。お祭左七、中へ入る。

左七　これサ危ない。

ト止めるも構はず、兩人、叩き合ふを、左七、棒の先と、拔身を持つた腕を引ッ捕へる。

五平　イヤ、退きやれ。

九郎　退いて居なんし。

左七　イ、ヤ、滅多に退かれない。大道中の段平もの、こんな中へ入るのが、血の氣の多い仕事師サ。先刻からの一部始終、型があつても跡のない、云つて見りやアこつぱ喧嘩、それに危ない拔身の眞中、合點で飛び込む鳶頭、互ひに堪忍、鐵棒の、火の用心より身の用心、お祭左七がこりやア貰つた。じゆんわりと、手を打つてくんなんし。

五平　イヤ／＼、若い者、なんぼお主が云ふ事でも

左七　わしが仲人で料簡ならざア、喧嘩に枝が咲きやすぞえ。

佐五　モシ／＼、お前が爰にお出なすつちやア悪い。マアマア、松本へござりませ。

五平　イヤ／＼、ぶッた切つてしまふ。

九郎　鮪の胴骨ぢやアあるめえし、ごたくをあげやアがんな。

五平　イヤ、おのれは

皆々　マア／＼、ござりまし／＼／＼。

ト喚く五平太を、佐五兵衞、東林、儀助、お卷連れて鳥居の内へ入る。

いと　どうなる事かと思つたら、癪が痛うなつたわいなア。

ずん　ほんに左七さん、大きにお世話でござりました。

左七　なにサ、おれも鳥飼からこの人を雇つて來て、いさくさがあつちやア氣障だ。何か間違ひの筋と聞えるが、得て武さといふ奴は、不理窟を云ひたがるもの。イヤ、理窟といへば、あの子に話があるといふ事。コレ、ずんぎり、この蒸籠を、松本へ擔ぎ込んでくりやれ。

ずん　アイ／＼、畏まりました。

九郎　そんならわつちは行かねえでも。

左七　よいとも／＼……ア、今日もまた友達めらが醉は

にやアよいが。

ト太神樂、獅の曲の鳴り物にて、お祭左七先に、ずん切、茶籠を擔ぎ、鳥居の内へ入。お絲、あたりを見廻し

いと　兄さん、まだお前、心が直らんな。

九郎　そりや何を。

いと　今も今とて、外聞が悪うてなるこつちやござんせん。

九郎　ハア、この風呂敷の事か。こりやアほんに拾つたよ。おれもてまへや女房のお時が事を思つて、モウ〳〵いたぶりや、手慰みをさつぱり止めようと思へばこそ、本町へ夜番に頼まれ、大家衆のお剩り酒を飲んで、たつた月に二貫五百、一年に四兩あまり、この夜番を三十年も辛抱すりやア、お主が身請けをする程に、喜んで居やれ。

いと　なにを、三十年藝者して堪るものかいなア。

九郎　イヤサ、さう云はねえものだ。お主もそれを樂みに今おれに

いと　また無心でござんすかいなア。

九郎　イヤサ、さうぢやないが、おれも兄弟の仲で云ひ憎い事だが、あの極樂水の相長屋の嚊アと懇ろして、からく亭主に見つかり、切るの突くのと亂騒ぎ。やう〳〵お定まりの七兩二分で濟ます筈だが、肝心のその金に行き詰まり、據ろなく來た。それで無くつて、なんぼ妹だといつて、又も今日も、どの面さげて云はれるものだ。モウモウこれに懲りぬ事はない程に、慈悲だ、情だ、兄一人救つてくりやれ。

ト泣く。

いと　もうお前の、その猫撫聲や空淚に、懲りたものぢやないわいなア。

九郎　お主がこの金を貸してくれにやア、おれもでんど沙汰になつて、恥面かゝうより、いつそ天水桶へ身を投げて死ぬぞよ。

いと　アレ、又あんな事を。

九郎　それで死なれにやア、せつかいで腹を切らうか。いつその事に、手拭で首を縊つて

ト手拭を出して首へ卷く。

いと　アヽ、もうよいわいなア。所詮さう云ひ出しては、只は去ぬまい。これなと持つて行かしやんせ。

ト後指しを貳本抜いてやる。

九郎　こりやア貳本で二兩か三兩、ばつたりに賣つたら、もうちつとにならうか。

いと　そんな事云はずと、持つて行かしやんせ……イヤ、行かぬうちに聞かうと思つて居たが、アノお前にもわたしにも、親達が下さんしたといふ、眞間の手古奈のお守、わたしや持つて居るが、お前はどうしなさんしたえ。

九郎　サア、あの手古奈のお守は

　ト云はんとする所へ、お卷出て來り

まき　モシ〳〵、お絲さん、ちよつと來て下さんせいなア。

いと　イエ〳〵、わたしやモウ、あのお客で、松本へ行くのは否でござんす。

九郎　ハテ、さう云はずと、何も商賣、行きやれた。

まき　アレ、兄さんもあゝ云うてぢや。マア〳〵、ちよつと。

いと　ア、モウ、藝者には何がなるぞいなア。

　ト辛氣な思ひ入れ。流行り唄になり、お絲とお卷、下座へ入る。

九郎　先づ妹めをせびつて、後指し二本に有りついた。…………それにしても、この間鎧の渡で、醉どれの中間めが風呂敷包み、よい代物とちよろまかして、明けて見たれば破れ熨斗目、風呂敷ばかり貳百がものもあると持ち料にしたら、思ひがけない先刻の侍ひめが風呂敷ださうだ。危ない所を云ひ拔けた、運に任して、よい仕事がありさうなものだが。

　ト向うを見て思ひ入れして、下の方へ小隱れると、直ぐに三味線入りの神樂、大拍子になり、向うより石塚彌三兵衞、胡麻鹽の侍ひ。左京之助、若殿。竹川お乳の人。腰元、守を持ち、後より本庄綱五郎、近習、菖蒲革の侍ひ・草履取り付き添ひ出て、直ぐに舞臺へ來る。此うち下座より五平太出迎ひ、平伏して

五平　これは〳〵若殿樣、今日は二軒茶屋へお立寄りとござりまするゆゑ、お先へ參つて松本へ、申し付け置きましてござります。

左京　彌三兵衞は直さま別當へ立越え、右の仔細申し達すであらうな。

彌三　御意にござります。お家の寶、小倉の色紙、即ちこれへ持參仕つたも

　ト懷中より袱紗包みの箱を出し

姫君お輿入れ御婚禮の夜の床飾り、氏神にて祈念いたすが御吉例ゆゑ、この段申し入れ、相賴みまするでござりませう。

五平　して、松本へ下さるゝお目錄は。

綱五　その儀は拙者申し付け、これへ所持致し居りまする。

ト小さな文箱を出す。

五平　お途中の儀は一色私しおかゝり。後方までに、家来にお渡し下されい。

綱五　承知いたしました。

五平　然らば私しは、お入りの用意申し付けませう。

ト五平太、下座へ入る。此うち下の方より九郎兵衛聞いて居て、下の方に蹲踞ひ、居眠り居る中間の脇差を盗み入る。

竹川　若様、お久し振りで富ケ岡への御参詣。お附きの衆も、さぞよい慰みでござりませう。

腰元　竹川さんの仰しやる通り、外珍らしい私しどもまで、見飽きませぬ春の景色、有り難うござりまする。

綱五　何は兎もあれ、先づ御神前へ。

彌三　イザお入りあられませう。

ト唄になり、皆々下座へ入る。綱五郎続いて行かうとする所へ、九郎兵衛、今の脇差を差し、摑み手して出で来り

九郎　ヘイ〳〵。暫らくお待ち下さりまし。

綱五　其方は。

九郎　私しは山住の中間、主人申し越しまするは、只今お約束の松本へ遣はさるゝお目録、あなたへ申して持つて参るやうにと、申し付けましてござりまする。ヘイ、私しは新参、お見知りないゆゑ。これを證據に持つて参れと、即ち主人が名前の風呂敷。

ト懐中より出して見せる。

綱五　ムウ、相違もあるまい。然らば其方に。

ト左の手に文箱を出さうとする。

九郎　ヘイ〳〵。慥かに私しが

ト取らうとする、その手を綱五郎しつかり捕へる。

アア痛々々、こりや何となされまする。

綱五　なんとするとは、慈な紛れ者め。

九郎　ヤア。

ト悄り。

綱五　中間小者が、主人の供に股引穿かうか。察するところ騙りの骨頂。

九郎　南無三しまつた。

ト振り切らうとする拍子に、九郎兵衛が利腕まくれる。綱五郎、腕の彫り物を見て

綱五　ヤア、小絲命の、この彫り物は

九郎　なにを。

ト立廻りに振り切り、九郎兵衛一散に向うへ逃げて入る。綱五郎、後を見送り

綱五　ハテ、油斷のならぬ。

ト袴の塵を拂ふ。佃の騒ぎになり、綱五郎、悠々と下座へ入る。右の鳴り物にて、この道具をぶん廻す。

本舞臺、正面一間の屋體、向う床の間、襖、上の方に一間の離れ座敷、障子をたて、この間鐵砲垣植込み手水鉢、下の方に正面へ見せたる萱門、建仁寺垣、二軒茶屋松本と書いたる行燈好みの通り、爰に左七、濁酒を取り、ずん切と鳶の者酒を飲み居る。お蔦、松本の女房にて、酌をして居る。鳶の者、裸にて取組みゐる。右の鳴り物にて道具とまる。

左七　こいつは面白い　夏ならば泉水へ飛び込んで擲き合ひといふ所だが、一番取れ〳〵。

兩人　どつこいな〳〵。

ト掴み合ふ。

ずん　ソレ〳〵、右の足が浮いた。左をさして、ソレ、殘つた〳〵。

權　よんやさ。

ト八を投げ出す。

ずん　勝角力、足場野々〳〵々。

ト給仕盆を團扇のやうに上げる。

左七　待て〳〵。あいらがのは無手だから、喧嘩がましだ。いつそずんぎり、三人がゝりを取つて見せないか。

ずん　何をするも稽古の爲だ。一番取りますべい。

ト裸になる。

三人　こいつは面白いやア。

ト權、八、源、かゝるを、ちよつと立廻つて、ずん切三人を面白く投げる。

つた　勝角力、ずんぎり〳〵。

左七　こいつは身ぐるみ遣らにやアならない。

ト半纏や革羽織を投げて遣る。

つた　東西々々、さるお方よりずんぎりに御祝儀下さる。

三人　どうでも商賣人には叶はない。いま〳〵しい。

ずん　こりやア有り難い。半纏に革羽織。併しほんの串談にお氣の毒、お返し申しませう

左七　ナニ、串談といつて、角力に遣つた物を取返されるものか。

ずん　そんなら、ほんに下されまするか。

左七　そこが江戸ッ子だワ。初松魚を喰つたと思やア濟むワ。

權　こりやアずん切、仕合せ者だ。伊勢久で貳兩通用の革羽織だぜ。

左七　外聞の悪い事を云ふな。質や八を置くものか。只入れ替へて來たばかりだ。

八　おきやアがれ……時に忌々しい、おればかり釘も拾はない。

ずん　お前にはこの革羽織を

源　くれるか。

ずん　なにサ、大事だから預けて置きやす。また着て歸ると、友達に借りられるから、半纏ばかり貰つた顔サ。

源　そんならおれが預かつて、關取の内へ屆けてやらう。

左七　權や、おれも裸ぢや居られない。これで仲町へ行つて、古着でも買つて來てくれ。

ト紙に包んだ金をやる。

權　モシ、古着とは氣障だな。いつそこの金を祝儀にやつて、あの料理番の松が布子でも、借りてあげやせう。

左七　そんならさうしてくりや。

つた　それまでもお寒うござりませう。ゆき丈の揃はぬ借り着より、これなと引ッ掛けておいでなさんせいなア。

ト襖の内より夜着を持つて來て着せる。

左八　おきやアがれ、とんだ辻法印だ。

八　オヽ、角力をとつて寒くなつた。

つた　風呂が沸いて居る。お入りなさんせ。

源　そんなら行つて溫まりやせうか。

ずん　左七さん、有り難うござります。

ト佃になり、ずん切と三人、着物を抱へて奥へ入る。

左七　ハヽヽヽ、とんだお帳につくやつサ。

ト奥にて

いと　又かいなア、もう〳〵云うて下さんすな。

トこれにて左七、上の方へ來る。お蔦、衝立を仕切りにするうち、合ひ方になり、奥よりお絲びんしやんと出て來るを、佐五兵衛、東林、眺めながら附いて出て

東林　これサ、お絲さん、番頭の心意氣が、肉桂薄荷ではあるまいし、さうツンとする事はないわな。

佐五　それサ、よく〳〵に思へばこそ、堀留から度々の通ひ船。今日は出番、今日は掛取りと、いろいろと名を附けて、口説いても〳〵、さう酷くはしないものだによ。



尾上松助の左七



二世澤村田之助のお絲

いと　佐五兵衞さん、藝者と云へば云ふもの〻、取るに足らぬ小僧のわたし、兎やかう云うて下さんすは、嬉しうござんすけれど

佐五　へ、、、、小僧もすさまじい。提灯小僧か、屋根小僧か、どうで化かされるは知れて居る、古狸の革羽織。

東林　否だといふは、外にちん〱の色があるな。

いと　イ、エ、ちつと古いが、色と土用干しぢやわいなア。

佐五　イヤ、そりや噓だ。いま深川で、一といつて二のない藝者のお絲が

つた　色男の無いは、そりやわたしが證人ぢやわいなア。

ト衝立の蔭より出る。

東林　オ、、こりやお蔦さん、さういふお前も一つ穴の

つた　イエ〱、狐でない事は稲荷様も見通し。マア、今のお絲さん。古鐵買ひに見せても、色がないとは思はねど、そこがござんせん。主の色は、たゞ酒と、人に物が遣り好き。

佐五　道理で内證は火の車、酒が好きなら、新川新堀伯父樣に持つて、物が遣り好きなら、大身の槍でも管槍でも、お望み次第。色なしと聞いちやア猶の事、これサお絲……お絲坊

ト摺り寄つて手を取らうとする。

いと　アレ、又かいなア。思ひ切りの悪い。

ト振り放す。

佐五　ウム、おれも本町筋で一軒の支配人、恥をかゝしてもよいか。……アノ、どうでも。

ト此うち、後へ五平太、儀助、金六出て來り

金六　否ならお絲さん、わたしが方の方を附けて下さりまし。

佐五　オ、、こりやア神原屋の金六、儀助、五平太さん。

五平　おれも共々取持つて、よい身にしようと思つても、お絲が得心せにやア、義理も絲瓜も無いから、この手合ひも

金六　ひど催促と出かけるのサ。サア、どうして下さるな。

ト お絲、金六をヂロリと見て思ひ入れ。

儀助　モシ、何もさうお前、落ちついて居ては悪い。わしも廻しをしてゐる。何とやらも釣り方、爲になるお客。佐五兵衞さんゆゑ、昨夜も中内の二階で、耳へ章魚のいるほど云つたぢやアござりやせんか。今時お前のやうな

いと　アイ、儀助どん、わたしや慾を知らぬ藝者ぢやわいなア。

儀助　なんの事たな。人をはぐらかすやうな。さう立派な藝者衆なら、この間玉松の船頭に立替へた祝儀と、粂本の女どもに遣つた前垂れの立替、四兩貳分、返して置いて口をきくがいゝ。

金六　それサ、この神原屋の手代金六も、質の捨て利から、種なしの貸小間物屋の請合ひ、金高は覺えてごんせう。

儀助がのも、おれがのも

儀助　たつた今、方を附けて、大風を云ひなせえ。

いと　サア、その金は

東林　無いのかえ。

五平　無くば佐五兵衞に得心して、方々の仕埒をつけるがよいではないか。名を取らうより、とつくりと思案をしやれ。

　　ト　お絲、思ひ入れ

左七　お蔦さん〳〵。

つた　アイ〳〵。

　　ト左七の側へ行く。

左七　あすこのいさくさアなんだえ。

つた　サア、なんぢややら。

左七　ちよつと聞いたところが貸借り、可哀さうに藝者一人を、口を出したくつても、ちやんころ無し。エヽ、錢の無いは、首の無いより劣つたものだ。マア〳〵、一つおあがりなさんせいなア。

　　ト酒をつぐ。

五平　コレ、佐五兵衞、ソレ、茲が金。

佐五　ハテ、ようござります。金六どん、その金を。

　　ト金六が首に掛けて居る貳百兩の財布を渡す。

コレお絲、ソレ、拂つてしまやれ。

いと　拂へとはえ。

佐五　ちよつとしても貳百兩。得心さへすれば直ぐに身請け。借金拂つて苦界を遁がれ、心にかゝる雲もなく、榮耀をしないか。

いと　イヽエ、否でござんす。

左五　エ。

いと　サア、因果な事で、わたしや藝者の苦みが、好きぢやわいなア。

東林　あゝ逆上が強くては、ぶし人參でも屆かぬワ。

儀助　それ〳〵、いつまで云つても出來ぬ金。

金六　頭の物から裲襠まで、云やアみんなおれが物。

東林　恥面かゝすがつれない見せしめ。
五平　可愛さ餘つて悄さが百倍。
金儀　いつそ爰でふん剝ぐよ。
ト立ちかゝる。お蔦、中へ入り
つた　モシ、金六さんは金六さんとも思はうが、平常恩になる廻しの身で、ちつとは料簡もありさうなもの。
儀助　イエ／＼、こんな子に達引をするはきつい損。
金六　それ／＼、お前口をきくからは、金でも立替へる氣かえ。
つた　サア、わたしぢやと云うて。
兩人　出來ざア退いて居なせえ。
つた　サア。
ト思ひ入れ。
左七　お蔦さん／＼。
つた　アイ／＼。
ト こちらへ來る。
左七　金の無いのは忌々しいの。
つた　アイ、わたしも口惜しうござんすわいなア。
五平　みす／＼ぶらつく金を取らずに
東林　石を抱いて川へ入るとはこの事。

佐五　ハテ、馬鹿な女もあればあるものだ。
いと　詞の强みや金づくで、藝者が自由になるものと、思うて居る番頭さん、野暮にも餘ッぽど間のある、苔の清水で洗ひあげ、粹になつて口說かしやんせ。名さへ苦界と覺悟して、身は三味線のどうなろと、意地を立てるが藝者の表、頭の飾りこの裲襠も、欲しくば持つて行かしやんせ。藁で結うてもわたしはわたし、心を飾つてみるわいなア。
ト差して居る櫛笄を拔いて投げつける。
金六　さう云やアいつそ
ト立ちかゝり、お絲の着物や帶をひッ剝ぎ、長襦袢一つにする。
東林　ハヽヽヽ、それが名うての藝者の形か。
四人　ハテ、よい態の。
ト これより三味線入りの靜かな神樂になり、この時、左七、見兼ねたる思ひ入れ。着て居る夜着を脫いで後よりお絲に着せる。お絲見て
いと　エヽ、お前は先刻の
左七　わしかえ……わしやアお祭左七といふお先者。先刻から聞いて居て、足は飛び出す、手はむづむづ。口を出

したいにも、こなさんが女だけ、どうやら味に思はれうと、飛び出す蟲を堪えて居たが、あんまりな猿松めら。サア、この襦袢は左七さんが、お着せ申した晴着だが、ひツ剝いで見ねえか。それこそ忽ち劍の錆、出刃庖丁を廻し夜話、ほんに蒲團のうらみな奴等だ。

ト向う鉢卷、あげ足で胡座かくと、皆々氣味惡き思ひ入れ。

いと　左七さん、嬉しうござんす。お前は知らしやんすまいが、その男氣と嫌味のないが、わたしや疾から……ほんに色があつたなら、否な男に口説かれもせまいに……ナア、左七さん。

ト思ひ入れ。

左七　それほど欲しかア、千本杉で拵らへるがよい。とんだ地形だ。

いと　アレ、また白烈たい事ばつかり。

左七　何が白烈たいよ。

いと　サア、お前が寒からうと思うて。

左七　なにサ、裸は傳法の當り前。土仕事にでもかゝりやア、寒のうちでも眞ツ裸。喧嘩と酒盛は身輕がいゝのサ。

つた　イエ〳〵、仲直りに山へ來て、風引いたと云はれては濟まん。ドレ、着る物を……取つて來るまでも、ナアお絲さんも、どうやら左七さんに……こりやいつそ、あの夜着の端を半分借りて、入つて居さんしたら、どうぢやえ。

左七　そんならあの夜着を、二人で着ろと云ふのか。

つた　入りごみの錢湯、着るものゝ來るまで、孫店に居なさんせいなア。

東林　コレ〳〵、そりやアあんまりだ。爰に惚れてゐる番頭も、この東林も見る前で

儀助　それ〳〵、藝者と俠ひと眞ツ裸。

三人　一つ夜着とは

左七　小胸が惡いか……おれは人の忌がる事が、きつい好きだ。そんならお蔦さん、あの中へ入るによ。

いと　そりやもう、嬉しいわいなア。

左七　冷え物でござい、御免なせえ。

ト　お絲が着て居る夜着の中へ入る。

五平　エヽ、忌々しいわえ〳〵。こりやアもういつそ、ぶちまけて武士の意地づく、刀にかけて

ト氣を揉み、立ちかゝらうとする。

佐五　これは五平太さん、急いては事を仕損ずる。殊に向

うはお先眞闇の俠ひ、何事も惚れて居るこの佐五兵衞さへ、ヂッと辛抱するほどにナ、お前も氣を揉ますと、マアマア、細工は流々、仕上げを見てござりませ。

五平　イヤ〱、根ッから仕上げが出來榮せぬ。角を矯すと、牛を殺すやうなもの。

東林　それ〱、こりやアどうやら斯うやら、お絲左七は

金儀　ほんの色に。

左七　なれ〱、こいつは面白いわえ。お絲さん。ぢやアない、これからお絲、色だぞ〱。

いと　アイ〱。眞の色は、マア、斯う煙草つけてあげようかいなア。

ト夜着の片袖より手を出し、煙草つけて出す。左七こちらの片袖より手を出し、取つてのむ。

五平　アレ〱、あの煙草ののみ態わえ、比翼鳥なら見世物にでもなるが

儀助　忌々しい、見る目、嗅ぐ鼻といふ態だ。

左七　オヽ、人の見る目や嗅ぐ鼻で、斯うして見せるが俠ひの色だワ。

いと　その詞を違へぬ杯、飲んで下さんすか。

左七　味な事から意氣張りに、ついした事の云ひがかり、いつそのくされに

つた　左七お絲と色の名披露目、わたしが仲人せうわいなア。

トつぐ。お絲飲んで、左七にやる。左七も飲む。

三人　佐五兵衞さん、あれを見てはお前

五平　もう料簡がならぬ〱。胸が燃えて、身が裂けて、頭で痺れがきれて、足の裏で頭痛がする。佐五兵衞、こりやどうせう〱。

佐五　ハテ、爰が辛抱所だわな。

五平　ぢやと云つて、これがマアどう

左七　云ひ分云やア誰れでも相手だ。サアお絲

いと　左七さん、眞實ぢやぞえ。

四人　そんならどうでも、爰で二人が

左七　近う寄つて、御縁を結ばれませう。

ト唄になり、お蔦、屏風を引廻し、皆々氣を揉む笑ひ

つた　ホヽヽヽ、逢ふは否なり思ふはならずとは、そりや昔の事……どなたもゆつくり氣を揉みなさんせ。

ト合ひ方になり、お蔦、奥へ入る。

五平　コレ、佐五兵衞、折角心を盡して、お主に頼んだ事

も水の泡。

佐五 まんまと無駄骨、御苦勞千萬。

東林 ヤア、そんならアノ番頭が、惚れて居ると思つたお絲には

五平 誠は身共ぢや。その譯は斯うぢやて。

ト皆々を花道の方へ連れて來り

一體あのお絲には首たけなれど、身共では得心せぬ面魂ひゆゑ、絲屋の番頭、店者で食ひつかせ、うんとさへ云つたら直ぐに身請け。ハテ、此方へ引取つてさへしまへば、本性は身共ぢやと云うて、本望遂げうと思うたれど、それでも行かねば、もう自棄ぢや。是でも非でも身請けする。金六、約束の貳百兩、持つて來たか。

金六 そりやア如才なく、佐五兵衛も、おれが持つて來た貳百兩を、玉に使つてやりかけたれど、行きません。して、質の代物はえ。

五平 こりや世にも稀なる小倉の色紙、必らず粗末にする事はならぬぞ。

ト懐中より出して渡す。

金六 斯ういふ物を質に取るには、一札を入れにやアならぬと、お約束いたしましたが、書付けをしてお出でなされましたか。

五平 オ、サ、此方所持の小倉の色紙、貳百兩の質物に入れ、外より異論ないといふ文言の一札、即ち身共が手蹟。

ト出して見せる。

金六 成る程、これでようござりまするが、肝心の判が

五平 南無三、生憎印形を持參せぬ。こりや、後から遣らう。マア、約束の貳百兩を

金六 左様なら早く遣はされまし。

ト色紙を取り、貳百兩を渡す。金六、今の一札を紙入へしまひ、五平太、金を戴き

五平 忝ない。これでお絲めが身請けを

儀助 これでは五平太さんはいゝが、語らねえは番頭さん、的もなくつて深川へ來たのかえ。

佐五 ハテ、盜人の晝寢も、五平太さまとの目算。後家持ちの絲屋を幸ひ、出入り屋敷から、しこしらへをして、身上を取るは易けれど、娘のお房を女房にするが、ちと行き憎いで氣を揉むのよ。

東林 ハ、ア、そんならあの娘のお房に、貴様が

佐五 イヤモウ、惚れたとこそいへ〳〵、首ツ丈の上を五六尺蔽つて居れど、どうもゆかぬ。東林老、こなたの龍

劑で
東林　出來るとも〳〵、圍ひ者や緣談、色事の取持ちで、過ぎて行く愚老。出來ぬ色を拵らへる工風も、疾から致してあるて。
佐五　そりやアどういふ工風だ。
東林　ハテ、手もない事、毒を盛るのサ。
皆々　ナニ、毒を。
東林　イヤサ、氣の毒だから工風はしてやらうが、マアマア、それは後の事。
佐五　成る程、ゆつくり。して、あの彌三兵衞めをしくじらすは。
五平　そりや斯う。
ト囁く。
佐五　合點でござります。それならわしやア奧へ行つて、その事にかゝりませう。サア、東林老。
東林　色の工風か。ハテ性急な。
佐五　ハテ、善は急げだわな。
ト合ひ方になり、佐五兵衞、東林、奧へ入る。
五平　マア、あれはあれでいゝが、いま〳〵しいはお絲左七め。

儀助　傍に人も無いやうに、目の前で床入り。
金六　どうぞ仕樣はござりませんか。
五平　今日若殿のお立寄りこそ幸ひ、借切りの座敷、無禮者と云ひ立て、ソレ、二人を引摺り出せ。
金儀　合點でござります。サア、お絲左七、出やアがれ。
ト兩人、屛風の内へかゝる。内より見事に投げ出される。五平太「うぬ」と屛風を引退け、立ちかゝらうとする。内に綱五郎、立派に坐り、煙草盆を控へゐる。皆々見て悔り。
儀金　ヤア、お絲左七と思ひの外
五平　こなたは
綱五　本庄綱五郎でござる。殿の御供、暫しがうち休息の別間へ、五平太どの、こりや何ゆゑの狼藉。
五平　イヤサ、これは。
綱五　貴殿は貴殿とも思はうが、不屆きなは町人ども。物をも云はず武士の胸倉、無禮の見せしめ。それで懲りずば、目に物見せうか。
ト刀を持ち、立ち上がる。
儀金　ア、御免なされまし〳〵。
ト儀助、金六、うろたへ逃げて奧へ入る。

綱五　おのれ、その分に致し置かうか。
ト立ちあがる。この時下座にて
竹川　サア〳〵、お越しあられませう。
五平　アレ、若殿のお立さうな。ソレ、綱五郎どの。
綱五　ハツ。
ト下に居るうち、合ひ方になり、左京之助先に竹川、腰元両人、彌三兵衛附いて出て来り
これは若殿様には、最早お立でござりまするか。
彌三　この二軒茶屋へお立寄りは、殊ない御意に入つて
竹川　御機嫌うるはしけれど、長居は却つて恐れあれば、
お立をお勧め申しましてござりまする。サア、何れも様。
綱五　若殿様のお立ち。
ト此うち奥より佐五兵衛、袴羽織にて、おづ〳〵出て
佐五　イヤ、恐れながら、暫らくお待ち下さりませ。
綱五　そちやお出入り、本町絲屋の手代
佐五　佐五兵衛と申しまする者、後家持ちゆゑ、主の名代に、お願ひにあがりましてござりまする。譯と申しまするは、この度若殿様へ奥様お輿入れにつきまして、お簾廻りその外、絲物一式の御用仰せ付けられましたる外に、御代々御吉例とござりまして、お家の寶、定家の色紙の表具方も仰せ付けられ、お好みに任せ、天地はいもり裂れ、中雲に鶴の緞子、風體一文字大和錦まで、御註文の通り揃ひましたるゆゑ、早速仕立てませうと、度々石塚彌三兵衛さままで
彌三　ヤイ〳〵、佐五兵衛、その儀はこの程も書中を以て申し遣はした通り
佐五　サア、まだ急がいでもよいと、お断わりではござりまするが、只今のうち仕立てませねば、好い職人が
彌三　まだ申すか。その儀ならば、身が宅へ参つて掛合へサ。
五平　イヤ〳〵、彌三兵衛どの、お上にも先達てより、お急ぎなさるゝ色紙の仕立、なぜ又延引召さるゝな。
彌三　イヤサ、それは。
五平　但し色紙が、何とぞして延しめさるか。
綱五　イヤ〳〵、大切なる殿の御重寶、預かる人は彌三兵衛どの、その寶が何と致さう。仕立を急ぐも延引も、預かり主の心次第。貴公が裁判めさるゝは、そりや從目違ひ。
五平　イヤ、さうでござらぬ。もし凶事あらばお家の恥辱、幸ひ今日持參召されたこそよき折柄、立會ひの上、佐五

彌三　兵衞へお渡しなされ。

佐五　但し紛失でも致しましたかな。

彌三　サア

兩人　サア〳〵

五平　早く色紙をお渡しなされい。

彌三　如何にも渡さう。

ト色紙の箱をそこへ出し、思ひ入れあつて

綱五郎、介錯頼む。

ト腹切らうとする。綱五郎、恟りして

綱五　ヤ、こりや何ゆゑの生害。

ト止める。

彌三　イヤサ、預かりの色紙を見やれサ。

ト綱五郎止めながら、色紙の箱を明ける。内より願書出るを披き

綱五　「願ひ奉り候ふ口上の覺え……一、私し儀御預りの小倉の色紙、去る極月改め候ふ節紛失仕り候ふにつき、早速穿鑿仕り罷り在り候ふ、もし急御用の節申し譯立ち難く候ふ間、その砌りは武道の掟是非なく切腹仕り候ふ、死後の御穿鑿偏に願ひ上げ奉り候ふ、以上。月日。石塚彌三兵衞」……ヤヤ、すりや、色紙は疾より

皆々　紛失とな。

ト皆々思ひ入れ。佐五兵衞、五平太は顏を見合せ、舌を出す。

彌三　サア、先達て色紙の仕立、御内意あると其まゝ改め見れば、何者が盗み取りしか、封も包みも其まゝは色紙紛失、直さまお屆け申し、切腹とは存ぜしが、人も知つたるお家の寶、この事世上へ流布あつては、殿の御恥辱、精力を盡してなりと、出るものなら詮議して、お家のお名を出すまいと、紛失のその日より心は早鐘、一夜さも工風に寢た夜はござらぬわいの。さほどに致す今日までも手掛り知れず。御前に於て露顯いたす仕儀となつたは自業自得、申し譯は兼ねての覺悟。……ア、これにつけても一人の伜左七、幼少の時御前に於いて無禮、打捨て置かれず勘當したを、懇意の町人、安野屋十兵衞が引取り、世話いたしくれたれど、不所存にて、あらぬ身持ちと聞いたれど、かゝる時節に、せめて手許に居つたなら……これとても返らぬ繰り言。綱五郎、介錯頼む。

ト此うち上の障子を明け、左七見てゐて、この時出ようとして、彌三兵衞綱五郎と顏見合せる。

ヤア、そちや悴。
綱五　イヤサ、悴同然のこの綱五郎、貴殿の御恩を受けたりし、遁がれぬ拙者が付き添ひ居れば、氣遣ひな事はない程に、ナ……物云うては悪い、何事も
　ト呑み込ます。これにて左七、障子しめる。
彌三兵衛どのゝ身に凶事はさせぬ程に、ナ、合點か。
五平　イヤ、合點がゆかぬ。みす／＼科極まつた彌三兵衛を、お身が
綱五　イヤ、この科人は拙者でござる。
五平　なんと。
綱五　サア、元來この色紙は、先達て內見の儀を彌三兵衛どのへ、達て頼めど承引なきゆゑ、虫干に小者を頼み、拜見せんと取寄する途中に於て、盗まれしと聞きて仰天いたせしかど、我が身の罪を隱さんと、箱は其まゝ返せしが、いま彌三兵衛どのゝこの越度を、なんと餘所に見られませう。重々厚きこの身の罪、明かして切腹。
　ト腹切らうとする。
彌三　イヤ／＼、跡方もない、そりや僞はり。科人は矢張り身共。
　ト刀に手をかけるを

綱五　ハテサテ、申さば拙者はお傅役、貴殿は何人、生先ある若殿のお守役、殊にこの節御本宅の、お跡目になるべき御沙汰といひ、お側には肌ゆるされぬ
　ト五平太へ思ひ入れして
イヤサ、心措かるゝ家中の方々、御成人まで守護なされずば、忠義の道が立ちますまい。寶が重いか、殿が重いか。この儀をとくと御勘辨。
彌三　ウム、イカサマ。
綱五　御合點ならば御介錯。
　ト腹切らうとする。
左京　ソレ、止めい。
竹川　御意ぢや。綱五郎どの。お待ちなされい。
綱五　ハツ。
　ト平伏する。
左京　家の寶は寶とせず、たゞ仁を以て寶とすとは書經の教へ。生害には及ばぬ。されど科ある綱五郎、竹川とさに申し付けい。
竹川　ハテ、流石は私しがお育て申した和子樣。オヽ、お出かし遊ばしました。……心ありげな科人の綱五郎どのは、暫らく遠慮と殿樣

の御意。
彌三　すりや、この身は遠慮
綱五　拙者は此まゝ御追放
兩人　エヽ、有り難うござりまする。
五平　寶の科人、閉門に追放とは
佐五　思ひの外な科の安賣り、なんのいらざる罪を被つて、これがほんの蓼喰ふ蟲、阿房拂ひのお定まり。ドレ、その大小を
ト綱五郎が兩腰を取りにかゝるを
綱五　こりや何と致す。
佐五　ハテ、御追放なら、その二腰を
綱五　わりや取上げる役人か。
佐五　ヤア
トきよつとするを、直ぐに取つて投げ、起きる所を杯臺にて打ち据ゑ
綱五　茲な素町人めが。お急ぎもなき色紙の仕立、途中へ推して願ひに出たは、こりや何か深い企み。
ト五平太を尻目にかけて
とくと糺す奴なれど、場所といひこの身の越度、今日は免し遣はす。以後も差出て無禮をなすと、打ち放すぞ。

ト突き放す。佐五兵衞しよげる。綱五郎思ひ入れあつて、兩腰を竹川が前へ直し
綱五　御家風通り、イザ、お取上げ下されませう。
竹川　如何にも。この二腰は彌三兵衞どの、お預かりなされ。
彌三　ハア。
ト受取り
この二腰を預かりの上は、綱五郎、腰が明いて何とも氣の毒。身が兩腰はこの場の寸志。浪人の表道具。
ト手前の二腰を抜いて綱五郎にやる。
綱五　お志し、しかと拜借。
ト取つて差す。
腰元　最早程なう日も黄昏。若殿樣にも、お立の伺ひ。
左京　如何にも竹川、供觸れ致せ。
竹川　疾より申し觸れました。イザ
ト皆々立ちあがり
彌三　然らば綱五郎。暫しは汚名に忍ぶとも、義心の惠み、いつか晴れ
綱五　寶を詮議いたすなら
竹川　その時歸參は

左京　身が許す。
綱五　エヽ、有り難うござります。
五平　若殿のお立ち。
ト唄になり、左京之助先に竹川、腰元、彌三兵衛、五平太心を殘して附いて、向うへ入る。奥より東林出て來り
東林　番業、五平太どのゝ云ひ合せは
佐五　コレサ、滅多な口をたゝくまい。
ト立ち上がらうとして
アイタヽヽヽ。
東林　どうした〳〵。
佐五　どうしたどころか、あの侍ひめに、とんだ目にあつた。これからは死にくらだ。必らず止めまいぞ〳〵。
東林　ハテ、止めはしないに、それは何を云ふのぢや。
佐五　イヤ〳〵、こなたが料簡しろといつてもならない。コレサ、止めまい、一番達引をせねばならない。
ト力みながら、東林を引ッ張つて花道の方へ行く。
東林　これサ、譯も知れねえ氣狂ひのやうな男だ。
佐五　イヤ〳〵、男がぶたれては濟まない〳〵。止めるな止めるな、放してくれ〳〵。

ト通り神樂、鳥追ひの合ひ方にて、佐五兵衛捨ぜりふ喚きながら東林を引ッ張つて向うへ入る。ト障子の内より左七、お絲、衣裳を着替へ、出て來り
左七　委細の譯は、あれで殘らず承りましたが、綱五郎さま、お目にかゝるも面目ない左七がこの形。
いと　何やら譯は存じませねど、今お出でなさんしたお年寄は、左七さんの親御さんとやら。
左七　切腹の、腹切るのと聞いても、勘當の身の出るにも出られず、兎角するうち、氣遣ひするなと謎のお詞、どうなる事と總身に汗。
いと　辛氣な思ひ、あの一間で、聞けば親御の身の科を
綱五　引受けた仔細、幼少の時ゆゑ、左七どの、御身は御存じあるまいが、もと身が親人は、赤城家でもずんと輕い足輕。彌三兵衛どのゝ取立にて、重役にも肩を並ぶる立身。身共とてもその引きで、押しも押されぬ御近習役。その大恩ある御親父、殊にお家に於て、たければならぬ古老の忠臣、なんと罪に落されう。この身の恩と、若殿のお爲を存じ、科を引請け、身を捨てたも、俗に云ふ大を助ける小の蟲。お腹は立てられな。御親父彌三兵衛どのには、似ても似つかぬ最前の體哉。折よく身共が居合

せたりやこそ。貴殿も先程、既に五平太が手籠のしたら。殿の御前の沙汰にもならば、その身ばかりか、親御の面皮。たゞ假初めの色情に、パッとしすぎた床の内、派手な浮名は立てぬものぢや。

左七　左七を左七と思へばこそ、有り難いその御意見。フトした事の達引から、思ひがけない云ひ約束。

いと　互ひに心を明かし合ひ、假初めならぬ夫婦の固め。

綱五　すりや應末來離れぬ氣か。

いと　三味線冥利

左七　今は俠ひの意氣地をかけて

綱五　出かした。この縁、親が許す。

いと　エ、、親御さんが

左七　許すとは。

ト合ひ方變つて

綱五　この二腰は御親父の魂ひ、勘當こそ叶はずとも、さほど固めた縁ならば、この親も得心と、この刀、この彌三兵衛どのが、取持たるゝも紛失の、色紙の在所を共々に。

いと　多くの客に附きあふわたし、藝子で居るも詮議の手蔓。

左七　身にかゝつたる左七めも、せめてあなたのお力に、なるも矢ッ張り親の爲。

綱五　夫婦和合は色紙も戻り、圓く治まるめでたい吉左右。

左七　お知らせ申す爲でもござれば、これより何處に落つきなされまするか。

いと　お宿をちよつとわしらに。

綱五　今日只今浪人の、何處をそれと定めなき、しるべを求むるそれまでは、青天井に土疊。天地の間は殘らず住家。

ト　ほろりと思ひ入れ。

左七　ア、、その御難儀は親人が、致さにやならぬ世の義理で

いと　忠義とやらで淺ましい

綱五　これも憂世の七轉び、八起きと申せば、いつか又

左七　元の御身に、それまでの

いと　忍び暮らしをどうぞマア

綱五　所は後よりお知らせ申さう。

左七　とは云へ、思へば

いと　お痛はしい。

綱五　ハテ……降らぬうちに、お暇申さう。

ト唄になり、綱五郎、向うへ入る。直ぐに奥よりお蔦、銚子杯を持つて出て來り

つた　お絲さん、左七さん、いま奥で聞いて居れば、綱五郎さんとやらが、親御さんに成り替り

左七　二人をほんの夫婦だと、許してくれたは忝ないが

いと　氣の毒なは、あのお方のお身。

つた　ハテマア、それもどうぞなりさうな事。マア〱、お前方二人は、めでたい女夫の杯。

左七　それもさうかえ。そんならお蔦さん

つた　仲人はわたしぢやぞえ。

ト酒をつがうとする所へ

儀助　ヤ、その杯はおれがさせぬ。

ト飛んで出て杯を取りにかゝるを

左七　わりやア廻しの儀助、なぜこの邪魔を

儀助　五平太さんのお頼みゆゑ。

左七　ナニ、五平太が

儀助　サア、祝言と聞き、氣が惡さ。女房呼んだらひいやりと

トかゝるを突き退け

つた　水祝ひより

いと　祝儀の行打ち

左七　腰骨四五十、祝つてくれべい。

ト踏みのめす。

儀助　ところをおれが、惡樽入れて

ト又かゝるを、左七銚子にて、儀助が頭を割る。

兩人　ア、モシ、それは。

ト隔てる。

左七　ハテ、命冥加な猿松めが。

ト銚子を振上げる。儀助へたばる。お蔦お絲、左七をとめる。よろしく拍子

幕

時の鐘、だらにて引返す。

本舞臺、向う一面の笹藪、雪たつぷり積る。竹しなへてある。爰に九郎兵衛、雪の積つた俵菰をかぶり頰冠りにて立つて居る。お君、以前の形、跣足にてウロ〱して居る。時の鐘にて幕明く。

きみ　小父様、わしが内へは何方へ行きます。

九郎　われが内は何處だ。

きみ　何處ぢややら知りません。



初演當時の錦繪　五世松本幸四郎の九郎兵衞



五世岩井半四郎のお時

九郎　滅法界な。わりや迷子だな。

きみ　イエ〳〵、內へ去ぬと叱られるが怖さ、歸らずに居たれど、寒うてなりませぬ。

九郎　さうであらう。去年から斯う雪の降る事もないものだ。可哀さうに。送つてやらうが、迷子札でも無いか。

ト　お君が腰を探る。

きみ　ア、、その守は、大事の金ぢやわいな。

九郎　ナニ金だ。

きみ　アイ、小判といふ物。誰れにも遣るなと、小母さんの云うてぢあつた。

ト　行かうとする。

九郎　コリヤ、爰へ來い。

ト　凄き合ひ方、時の鐘、無理に捕へ、腰の守を取らうとする。

きみ　あれい〳〵。

ト　逃げようとする。立廻りのうちに、お君、九郎兵衛が襟を掴む。

九郎　アイタ〳〵、途方もないませた餓鬼だ。

ト　守を取らうと帶を解く。お君怖がり、駈け出す。立廻りにこの帶、首へまとひ、引ッ張るはずみにお君、ムンと死ぬる。九郎兵衛、悄りして

ヤア、こりや死んださうな……なれども金を

ト　守を明けて、中より小判壹兩出し、見て悄り

こりやアたつた壹兩。南無妙法蓮陀佛。とんだ殺生させ居つた。

ト　守をそこへ捨てゝ、死骸を溝掘へ蹴込むうち、向うにて人音するゆゑ、下の藪蔭へ入る。バタ〳〵にて向うより五平太、頰被り、儀助、額へ紙をあてゝ鉢卷を締め、駈け出て來る。雪頻りに降る。

五平　コレ〳〵、儀助、して、あのお絲めは、いよ〳〵左七に

儀助　あの綱五郎めが策略で、女房の祝言のと、吐かすが小胸が惡さ、邪魔に入つて飛んだ目に遭ひました。

五平　そりやア捨てては置かれない。早く親方へ、身請けの金を渡してくれろ。

ト　最前の財布より百五十兩出して

ソレ、百五十兩。これでよいやうに、跡の五十兩は引取つた上の入用。

ト　財布の紐を締める。

儀助　合點でございますが、あの左七めが、まだわしを追

ひかけて、云ひ分でも云ふ素振りであつた。道を替へて
行きませう。

五平　すりや、あの野郎めが

儀助　わしが仕返し、頼みます。

五平　あの野郎は、暗闇でも見違へぬ目印の半纏。

ト目釘を濕す。

儀助　それにしてもこの雪、笠でも持つて來ればよかつた。

ト そこらを見て

こりやアおつな物が落ちてある。これでも被つて行かう。

トそこへお君が置きし編笠を取つてかぶるうち、向う
より鳥追ひ婆お六、キヨロ〱出て來る。

ろく　いま〱しい、あの餓鬼め、何處へうせたか。

ト舞臺へ來り

モシ〱、爰らで鳥追ひの餓鬼めは、お見かけなされま
せぬかえ。

ト儀助が編笠を見て

ヤア、この編笠は、あの餓鬼めが編笠。

儀助　ヤア、なんと。

ろく　こなたが知つて居よう。サア、出した。

儀助　べら坊め、おれが知るものか。そんな事にかゝつち
やアゐられない。

ト振り切り行かうとする。

ろく　イヤ、お君を返した〱。

儀助　知らないといふに、退きやアがれ。附くな〱。

ト振り切り、下座へ入る。

ろく　あれサ、おくんなさんやしな。大勢ぢやアござりや
せん。たつた一人の子だアなア。

ト追ひかけ入るうち、バタ〱にて向うよりずん切、
左七に貰つた着物、半纏を着て、大黒傘、中開きにて
駈けて出て來る。

五平　左七め、覺えたか。

ト ぶつかける。立廻りにずん切が鼻を削ぐ。

ずん　間違ひだ〱……左七ぢやアねえ〱

ト利腕を捕へ、云ひ譯しても分らぬ思ひ入れ。この時
五平太、今の財布を雪の中へ落し、兩人摑み合ひ、下
座へ入る。ト遠くにて迷子の鉦太鼓、しんとした合ひ
方になり、向うよりお時、やつし世話女房にて、粂本
の番傘、十九文下駄、小提灯を、提げ出て來る。

とき　こちの人九郎兵衛どのは、今日は深川へと聞き、叶
はぬ用ゆゑ、粂本へ行つて、妹御のお絲さんに聞けば、

疾に歸らしやんしたとの事。二人が中に無ければならぬ金を、急いで才覺が……また因果に降る雪ではあるぞ。

ト此うち下座より五平太引き返し、キヨロ〳〵出て來り

五平　エ、忌々しい、左七だと思つたらずんぎりめ、飛んだ所で大事の金財布を落した。

トそこらを尋ねるうち、お時、舞臺へ來る。五平太、お時が提灯を引ツたくり、そこらを尋ねる。

とき　滅相な、人の提灯を

五平　イヤ、金を落した。ちつと借りよう。

とき　ナニ金を

ト提灯取つてそこらを見る。

五平　ヤア、拾ふとは太い女め。

ト引ツたくるはずみに提灯消えて暗がりの思ひ入れ。兩人、突き退け〳〵尋ねる。此うち後の藪を押分けて九郎兵衞出て、五平太を取つて投げ、これも尋ねる。これより三人の立廻り。雪を蹴散らし、しなへて居る竹に引ツかゝり、財布上へ上がる。三人はこれを知らずに立廻りのうち、九郎兵衞が股間へ首を入れ、上へ上げる。九郎兵衞、思はず竹に手をかける。これにてお時の鼻の先へ財布ブラリと下がる。お時、探つて見て

とき　ヤア、こりや金財布。

九郎　さう云ふ譯は女房か。

とき　こちの人。

五平　それを

ト九郎兵衞、飛び下りて、五平太に以前の俵をかぶせる。お時、財布を戴き、思ひ入れ、よろしく、見得にて拍子

幕

二幕目　本町絲屋の場

役名――牛時九郎兵衞。本庄綱五郎。山住五平太。絲屋番頭、佐五兵衞。醫者、東林。家主、栗島權兵衞。神原屋左五郎。丁稚、與茂吉。肴屋、勝。手代、小助。同、條八。絲屋後家、おりの。同娘、お房。友達娘、おせん。同、おみき。宿老女房、おこの。按摩。德市。仲人、槌右衞門。

本舞臺、三間の間、軒に中根屋と染めたる紺の暖簾、正面に戸棚、札を貼りたる絲簞笥、三尺暖簾、萼の看板を掛け、下の方絲物品々と染めたる長暖簾、門口、すべて本町絲屋の店先。爰に振り袖なりの、娘お仙、おみき、手毬を突き居る。佐五兵衞、帳合をしてゐる。小助、條八、手代の拵らへ、十呂盤を置きゐる。東林、權兵衞、煙草盆を控へる。手毬唄に通り神樂をかぶせ賑やかに幕明く。

佐五　エヽ、七貫貳百五十八匁。

小助　ハイ、七貫貳百五十八匁。

佐五　三貫四百七十七匁五分。

條八　ハイ、三貫四百七十七匁五分。

東林　これサ番頭どの、どうぢや、鹽梅はよいかな。

佐五　ヤ、東林さま、お出でなされましたか。お庇で咳はとまりましたて。

東林　これはしたり、彼の毒、ナ、ソレ、あの、どく／＼の鹽梅はどうぢやな。

佐五　モシ／＼、その事ならば、爰ではないと差合ひ、左樣な事は船中にては申さぬ事にて候ふ

ト謠にてうたふ。

權兵　コレ、佐五兵衞どの、さる屋敷から頼まれましたが、なんと貳百兩ばかり、利金をよくして貸されまいかな。

佐五　それは出來まいものでもござらぬ。先のお屋敷はナ、

權兵　知つてゞござらう、山住さまサ。

佐五　ア、なにか、五平太さまか。

權兵　さうサ。

佐五　あなたの方は、そりやモウ、此方で埒明くやうにして置きましたて。

東林　それは御苦勞なさるゝた。此方で相談が出來まするて。

權兵　ア、さうでござるか。たんでも二百兩借りたら、しつかり禮金と思ひの外、無駄な事に骨を折りました。

ト通り神樂、鳥追ひ唄になり、向うよりおりの、後家の拵らへ。おこの世話女房、供の者一人附いて出て來り、直ぐに門口へ來て

りの　サア／＼、お入りなされませ。

せん　後家御樣、只今お歸りなされましたかえ。

みき　わたしらは、鞠を突いて、お留守を致して居りました。

りの　それはよう遊んで下さんした、サ、御新造樣、これ

へお通りなされませ。

この　ハイ〳〵、左樣なら御免なされませ。

ト皆々内へ入る。

權兵　これはお歸りさうな。イヤナニ、佐五兵衞どの、只今の相談の外、ちと貴樣に話がござるが、暫らく待ちませうか。

佐五　さうして下さりませ。

東林　この東林も、是非ともこの間の事を。

佐五　ハテ、呑み込んで居りまする。……モシ、東林さま、飯焚めが、今朝から、氣合が惡いと申しまする。どうぞ御覽じて下さりませ。

ト目顏にて思ひ入れあり

コレ小助、御案内申しやれ。

小助　畏まりました。東林さま二階へお出でなされませ。

りの　御苦勞樣にござりまする。

東林　これはしたり、醫者の役でござる。モシ、後家御には、ちとお脈を伺はうかな。ハテ、お若いに惜しいものを。ハヽヽヽ。ドリヤ、見て進ぜうか。

ト唄になり、小助案內して、東林、權兵衞、奧へ入る。

條八　ハイ、お茶をあがりませ。

トおこのへ茶を出す。

佐五　これは御宿老樣の御新造樣、ようお出でなされました。何か御用とござりまして、後家御をお招きなされましたが、なに御用でござりまするな。

りの　イヤ、佐五兵衞、案じやるな。其方も知りやる通り、連合ひ佐右衞門どの病死しられて、もう三年。娘は二人持ちながら、わしが爲には生さぬ仲。殊に姉の小絲は、赤城のお屋敷に七年前まで御奉公。

この　ほんに姉娘の小絲さんは、奧勤めの砌り、同家中の本庄さまとやらへ云ひ號け。しるしも濟んだその上で、お屋敷內に懇ろした男があつて　駈落ち。それから便り音信なう

りの　連合ひの病死の元も、姉の不埒が氣にかゝり、それからのぶら〳〵病ひ。

佐五　ア、モシ〳〵、それが御宿老樣の御用でござりまするかな。

この　イヽエイナ、後家御を招き、わしが附いて來たはナ、この間から話して置いた聟の事。妹のお房どのも嫁入り盛り、ひよつとした事の出來ぬうちと、主とも相談、先方から取急いで度々の催促。少分ながら五百兩の地面を

持參、好い聟どのぢやによつて、今夜マア內々で、お房どのと添はさすのぢやわいな。

佐五　エ、御新造樣、なんと仰しやります。アノ、お娘御のお房さまへ、今夜急に聟が來るえ。イヤ、呆れたものだ。この御身代で、こそ〳〵と入り聟がどう致されませう。殊に先旦那の御一家方へ、詳しう相談もなされいで、どうしてマアお房さまへ。

りの　イエ〳〵、そりや大事ない。別家十兵衞はこの間から眼病、何事も御宿老樣の御承知の事ならば、よろしう遊ばされませいと云うてぢやわいの。

佐五　サ、左樣ではござりませうが、餘り早急、少しは支度はせねばなりますまいに。

りの　サ、その支度の事も、旦那どのが息災のうち、嫁入り衣裳も拵らへて、どうで姉の小絲は門端も踏まされぬ、妹のお房へは百兩といふ支度金、それもわしが別に封じて置きました。その上、讓り狀も、コレ此やうに

ト懷中より讓り狀を出し

いま御宿老樣へ、お目にかけて來たのぢやわいの。

佐五　エ、、そりや讓り狀でござりまするか。

トよく〳〵見て

成る程、相違もない親旦那の御手跡。殊に百兩といふ化粧料もあるお房さま。ハテ、ござる聟樣は仕合せなお方だなア。

この　して、お房どのは、留守でござんすかえ。

條八　アイ、西河岸の地藏樣へお參りなされましたて。

この　もう、お歸りでござんせう。

みき　わたしらも待つて居りまするわいな。

佐五　今にもお房さんがお歸りなされ、聟入りとお聞きなされたら、ア、、さぞあのお子は

りの　ヤ。

佐五　アイヤ、お喜びでござりませう。ドリヤ、お讓り狀も簞笥の中へ納めませうか。

ト思ひ入れ。花やかなる唄になる。佐五兵衞、讓り狀を簞笥に入れる。この唄にて向うよりお房、振り袖、後よりお芳、下女の形、鉢植の紅梅を持ち、與茂吉、前髮丁稚にて枝なりの金柑を持ち、肴屋の勝、下駄がけ、鹽引を一本提げ出て來り、花道にとまり

勝　モシ〳〵、お房さんえ、西河岸の地藏詣りでござりやすね。

ふさ　お前は肴屋の勝さん、こりや、地藏さんへ參りしや

んしたかえ。
勝　なにサ、わつちやアあんまりいゝ鮭が來たから、お前さんの所へ、いま持つて行きがけサ。
よし　よい所で勝さんが連れになりなんしたで、いま惡口云うた若い衆は、みんな逃げて參りましたわいな。
ふさ　其方、よう禮を云やいの。
與茂　ナニお前、勝さんが來ねえでも、わつちが居たもの、どうして彼奴等が何を云ふ事がなるものか。ほんの事だが、云はゞ云つて見たがいゝ。とツ捕まへて、ひよい〳〵ひよいとぶん投げらア。
勝　そりや人をか。
與茂　イ、エ、四日市で當りのある蜜柑を、
勝　何を云やアがる、
よし　サア、お出でなされませ。
ト唄の切れにて、この人數舞臺へ來り
ふさ　母さん、いま戻りましたわいな。
りの　娘、いま戻りやつたか。
この　さぞ込み合うたであらうな。
みき　お房さん、待つて居たぞえ。
ふさ　ほんに、よう來て下さんしたの。

佐五　地藏樣は、さぞ賑やかでござりませう。イヤ、勝公來さツし。
勝　アイ、この頃はお遠々しいね。
ト皆々よき所へ住ふ。
りの　コレ娘、わがみの歸るを待つて居たわいの。
ふさ　そりや、何の用でえ。
この　その用はな、わたしが云ひませう。
ふさ　御宿老樣の御新造樣、ようマアお出でなされましたな。
この　ほんに、今日は取分けよう參りましたわいの。コレ、お房どの、マア、わたしがお內へ來たのはの、常々母御樣と相談して置きました聟どのゝ事、先方から急にと云うて來たゆゑに、今夜內々の杯をさせうと、その相談に來ましたわいの。
ふさ　エ、、そんならなんと仰しやります。あなたのお世話でわたしの所へ、聟さんが見えまするかえ……モシ母さん、そりやほんまの事かえ。
りの　サア、女暮らしでは町內が濟まぬゆゑ、急に今宵、其方の所へ。
ふさ　モシ、母さん、わたしや其やうな祝言は、アイ、否

でござんす。お果てなさんした父さんが、存生のうちから、祝言の白小袖、色直しの惣模樣、みな父さんが拵らへては置かしやんした。けれどわたしや妹、お行くへは知れねども、赤城のお屋敷にござんした。姉さんの小絲さん、惣領の事なれば、どうぞ姉さんの行くへを尋ねて

りの　ハテ、それがマア、いま急な事にならうかいの。姉も其方も、わたしが身腹を痛めぬ姉妹。何方をどうとも思はれねど

この　姉の小絲さまは、庭帳にも付いてあれば、急な事には

佐五　モシ〳〵、左樣でもござりませうが、どうしてマアあのお子が、聟をお取りなさるゝものだ。お房さまのお心は、云はずとしれた、それナ……ソレ、外の男でこのお内を、お納めなさるゝ思し召しで、ござりませうかな。

よし　こりや番頭さんの云ひなんす通り、お房さまはこの間から、夜に入ると、此方のお店の端へ出なんす、あの占屋さんの御浪人さんに

　トうか〳〵と云ふ。お房、氣の毒なる思ひ入れにて

ふさ　コレイナア、そりやわがみ何を云やるぞいの。よしとした事か、ツカ〳〵と、アヽ、占屋さんの若いお方には

りの　その占屋さんの若いお方には

ふさ　その占屋さんに

佐五　高野山なら弘法大師。

みき　たかやさんとは、三味線でもあるまいし

貝蔵　桶屋さんなら、朝からたがよう。

勝　大家さんなら、晦日に店賃。

佐五　エヽ、何を馬鹿々々しい。どうでお房さんが否と仰しやるうちは、内祝言は延引サ。

りの　ハテ、是非〳〵今宵と、御宿老樣とも對談して

この　仲人とやら、何やらに、名代に來たわたし、是非とも今宵

ふさ　さうでござんせうが、どうもわたしや、今夜の一杯は否でござんすわいの。

　トずんと立つて奥へ行かうとする。

りの　コレ〳〵、娘、マア〳〵、返事して行きやいなう。

よし　マア〳〵、お返事をなされませいなア。

ふさ　エヽ、わたしや知らぬわいな〳〵。

　ト振り切つて奥へ入る。

せん　ア、コレ、待ちなさんせ〳〵。
　ト捨ぜりふにて、おみき、お仙、お芳附いて入る。
りの　コレ、娘、それでは濟まぬわいの。
　ト行かうとする。
この　ハテ、ようござんす。わたしがよいやうに申しませう。マア〳〵、わたし任せに……ほんに、それはさうとせめて支度はしてお置きなされませ。
りの　合點でござんす。
この　コレ、お房さんえ〳〵〳〵。
　ト呼びながら入る。
勝　モシ〳〵、後家御樣え、何か急な事でござりますかね。
與茂　勝さん、誰れぞ死んだか。
勝　エヽ、默つて居やアがれ。
りの　ほんに、よい所へ來て下さんした。わざとなりと、祝言のまなびを
勝　合點でござります。そこはわつちが間に合はせるね。マア、この鮭は何に遣はうね。
與茂　コレ、鱈が冷してあるの。
勝　そいつはいゝワ。送りの手合ひの吸ひ物には奇妙だ。コレ、てめえ、胡椒の粉を買つて來たり。

與茂　べら坊め。アノ本鄕まで行くのか。
勝　なんのこつた、乾物屋にあるワ。
與茂　乾物屋で若衆を賣るか。
勝　エヽ、生藥屋にもあるワ。
與茂　オッと合點。芳町の河岸へソレと。
　ト向うへ走り入る。
勝　サア〳〵、若い衆、お前も手傳つて下さい。
條八　心得ました。なんでもしませう。
りの　マア、長熨斗の支度しませうか。
勝　サア〳〵、お出でなされませ。
　ト合ひ方になり、おりの、條八、肴屋、捨ぜりふにて奧へ入る。佐五兵衞、殘つて
佐五　サア〳〵、とんだ話になつて來たわえ。あの娘へ急に聟が入つては、ちつと此方の
　ト思ひ入れあり
玆が彼の毒の所だ。それについても、いま簞笥の中へ入れて置いた讓り狀も着服して
　トあたりを見廻し、簞笥の抽出しをソッと明け、讓り狀を出し
この文言に似せ筆して、絲屋の身代家屋敷、この佐五兵

衞へと

ト思ひ入れ。奥にて人音するゆゑ、うろたへて、そこにある鮭を見附け、この口へ狀を捻ち込み、知らぬ顏して居る。奥より東林、出て來り

東林　コレ／＼、番頭、この間から賴んで置く、あの後家御の事は、どうしてくれるぞ。

佐五　コレ、東林さん、そこどころぢやアござらぬ。今夜聟が來るとよ。

東林　サ、その噂も今聞いたて。今日わしが來たも、コレ、この毒を

ト紙入れより毒の包みを出し見せる。佐五兵衞、取つて

佐五　モシ、東林さん、お賴み申した毒の調合、これでござりまするな。

東林　左樣々々、愚老が家傳の毒でござる。

佐五　忝なうござりまする。この間までは一家の內に煙たい奴は、安野屋の十兵衞、彼奴と思うたが、こりやモウ今夜の入り聟めに、喰はせずばなるまいわえ。

東林　コレ／＼番公、そりやあんまり白木屋めいて古風な趣向だ。ハテ、聟が死んでも親類うちが合點せぬワ。こりやア祝言の瀬の中に毒があつたも知れませぬ、御詮議を願ひまするといふ時は、先づ一番に番頭へほしがかゝるワ。いま時分の世話狂言、その位の智慧はあまり遲蒔き唐辛子、相變らぬ僞だぞえ。

佐五　モシ／＼、そして、どうすれば後腹が病めぬの。

東林　サア、そこだて。內の手代に芥子ほども疑ひのかゝらぬ、珍らしい趣向といふは、コレ、貴樣の惚れたあの娘、いつそお房に毒を服ませるがよい。

佐五　エ。

ト思ひ入れありて

何を云ふな。お娘を殺す位なら、お前に毒は賴まぬワ。

東林　こりや疑ふも尤もだ。コレ、毒といふのは、斑猫、水蛭、ほうきう、この三味を酒の中へ調合して、飮ませるが最期の助、忽ち往生かんまみ陀佛。さて祝言はだりむくり、聟が持參の地面取込み、非難を附けにほひ出すワ。さてその跡へ乘り込んで、絲屋の身代呑んだ上、直ぐに娘を蘇生させ、貴樣の女房、死んだお房は蘇生へる、その良藥が、有馬の松／＼。

佐五　成る程、こりやア相談ものだわえ。これまでの趣向と違ひ、聟を助けて娘を殺し、後にてお房を生かへらす

仕様といふは。

東林　サ、服ました毒を下すも療治、それが俗に云ふ、毒薬変じて薬のところ。天水を以て服ませた毒を消す妙薬、誠にこれは、法事々々。

佐五　イカサマ、それに違ひがないならば、今夜お房に服ませた上、娘が死なば早々に弔ひを取急ぎ、蘇生らすはこの番頭。さすれば命の親も同然、義理にも聟にせずばなるまい。それにつけても、お前の手で、娘の命を殺しても、また生かすといふ證文を取りまするぞ。

東林　随分それも承知々々。

佐五　して、その薬の代金は

東林　兩方〆めて三十兩。

佐五　エ、それはあんまり

東林　高いも低いも色の道。お氣に入らずは此方もこの毒を

ト紙入れへ納めようとする。

佐五　ア、コレ〳〵、氣の短かい。買はうよ〳〵。

東林　そんなら毒は先づ渡すワ。

ト毒を取つて

佐五　コレ〳〵、當分手付けが爰に五兩。

ト紙入れより出して渡す。

東林　して、後はいつ寄越すのだ。

佐五　ハテ、首尾よく行けば直に遣ります。その代りには内の後家御を取持ちまするぞ。

東林　それは近頃忝ない。ドレ、マア、請合うたといふ證文を遣らう。

トかけ硯を引寄せ、さら〳〵と書いて、佐五兵衛へ渡す。よく〳〵見て

佐五　よし〳〵。斯ういふ慥かな請合ひなら、わしも丈夫に毒を娘に服ませまする。もしお前がわしを騙すと、この證文を以て

ト思ひ入れ

併し、何處へ願はうな。

東林　サ、おれもさう思ふ。

東林　何か忘れた事がある。慥かまだ一種、薬を渡さなんだ。

佐五　ソレ見なさい。殺し放しで堪るものか。ア、埒もない。早く下さりませ。

東林　渡します〳〵。コレ〳〵、三十兩のうち、五兩取つて、後金はまだ二十五兩でござるぞ。

佐五　承知さ。

東林　コレ、後家御を頼みますよ。

佐五　承知さ。

ト東林、紙入れを出し、氣付け藥を出さうとする。奥にて

よし　佐五兵衞さん〳〵。

ト呼びながら出るゆゑ、東林ちやつと紙入れを懷中へ入れ、知らぬ顏してゐる。奥より、お勞、勝、權兵衞出て來り

コレ、佐五兵衞さん

佐五　エヽ、悔りさせたワ。

よし　モシ、あのお方が、お前に御用があるとの事。そして、後家御樣がお呼びなされてござります。ちよつとお出でなされませ。

佐五　オヽ、今行くよ。あのお方とは、アヽ、權兵衞どの。まだ歸らずに居たか。

權兵　ハテ、この男は、ちつと貴樣に金口の相談があつての。

ト此うち勝、鮭を見附け、取上げて

勝　爰にあつたか。よく猫が附かなんだ。

ト提げて奥へ行かうとする。佐五兵衞うろたへ、これに縋つて

佐五　アヽコレ勝公、この鮭を何處へ持つて行く。

勝　ハテ、供の衆に切つて附けにやアなりませぬよ。

佐五　ナニ、この鮭を切る、そりやア濟んだ事だ。

勝　なに濟んだ話があるものか、切りやア惡いかな。

佐五　サア、この鮭を切つては

トいろ〳〵思ひ入れあり

コレ〳〵勝公、切つたらこの首は、おれが貰ふぞよ。

勝　ハテ、どうでもしなさいな。

權兵　これサ番頭、話しがあるわな。

ト引ツ張る。

佐五　エヽ、うるさい人だ。コレ、勝公、必らず鮭の頭は入れ札だよ。

勝　臺所の柱へ掛けて置くから、どうともしねえな。

權兵　これサ、ちつと相談があるよ。

東林　コレ、番衆、この藥はどうせう。

佐五　ハテ、今は惡いよ。

トあたりへ心を遣ふ。通り神樂になり、向うより店子、やつし股引の形にて驅けて出て來り

店子　本町の絲屋だと云つたが、大方向うの内であらう。
　ト門口へ來て
モシ〳〵、お内に淡島權兵衞さんは居られまするかえ。
權兵　ホイ〳〵、誰れだ〳〵
　ト門口を見て
ヤ、小石川の店子の衆だの。なんぞ急な用でも出來ましたか。
店子　モシ、大屋さん、とんだ事でござりやす。お前のおかみさんが、いま大黑障をしてネ、長屋の手やひが醫者を呼びに歩いたが、近所の醫者は淡島と聞いて、みんな留守を遣ひます。早く歸つて見さつしやりませ。ありや大の黑障だ。
權兵　なんだ、嚊アが大こくしやうだ。そりや鯉でも喰ひはせぬか。
店子　馬鹿な事を云ひなさいな。鯉を喰へば鯉の食傷、こくしやうか食傷か、巴屋が來たもの、如才があるものか。
權兵　コレ〳〵、嚊アは苦しがるか。
店子　イヤモウ、顏が青くなつたよ。
勝　青くなつたら、緑青ではないかね。

店子　早くござりませよ。
權兵　そいつは行かずばなるまい。
　ト行かうとして東林を見附け
イヤア、爰に醫者樣がござつた。モシモシ、急病人だ、ちよつと來て下さい。
東林　ア、コレ〳〵、愚老は急用がござる。餘人に見せさつしやい。
佐五　どうしてこの醫者どのが、ナニやられるものか。
權兵　ハテ、近所だからちよつと來て下さい。
東林　して、何處でござる。
權兵　小石川の極樂水だ。
東林　イヤア、本町から小石川が近所なものか。
權兵　ハテ、つい鼻の先だ。
　ト無性に引ッ張る。
よし　サア、番頭さん、お呼びなさるゝ。ちやつとお出でなされませ。
勝　ドレ、鮭を切らうか。
佐五　ア、コレ、それを
勝　ハテ、鮭がどうしたな。
東林　コレ番衆、薬は

ト いろ〳〵思ひ入れ、佐五兵衛、勝が鮭と東林が藥を出し心遣ひして、お芳に引ッ張られ、東林も氣付けを出して渡さうとするを、權兵衛店子無性に引ッ張り、向うへかゝる。佐五兵衛、人目あるゆゑ、何事も云はれず、下女に引ッ張られて奥へ入る。東林、氣付けを持つたまゝ引ッ張られ行く。此うち通り神樂。向うより與茂吉、胡椒の粉の袋を持ち、按摩德市が杖を引ッ張り、德市は笛を吹きながら引かれて出て來り、花道にて

與茂 イヤア、お醫者さん。泥坊でもしたのか、剛氣な目に遭ふの。

德市 與茂吉どの、泥坊か〳〵。

東林 コレ〳〵、丁稚々々、てまへ內へ行つたら、コレ、この藥を番頭に、キッと渡してくれろ。大事の藥だぞ、屆けてくれろ〳〵。

ト 云ひながら、袋入りの氣付けの粉藥を渡す。與茂吉取つて

與茂 よし〳〵、キッと屆ける。迷ひなさんな。

權兵 サア〳〵、來さつしやいな。いつそ引ッかつげ。

ト 東林を天上持ちにして向うへ入る。與茂吉、德市を連れ、舞臺へ來て

與茂 なんだかあの醫者めは、餘ッぽどな科人だわえ。

勝 コレ小僧や、胡椒を買つて來たか。

與茂 なんと早かつたであらう。

勝 サア〳〵、早く寄越せ。

與茂 オッと合點だ……とは云ふものゝ、袋が二つになつたから、ちつとむづかしい。

勝 コレエ、、早く寄越さ。

與茂 大方これであらう。

ト 一つ持ちたるゆゑ、藥の袋を肴屋へ遣る。

勝 エ、、べら坊め、何をまごつきやアがる。

ト 藥袋を取つて、鮭を持つて足早に奥へ入る。與茂吉、德市殘り

德市 コレ、丁稚どの、何か忙しさうだの。

與茂 今夜聟入りがあるワ。

德市 そいつはめでたいの。

與茂 ナニめでたい。目も持たないで

ト 爰にて佐五兵衛、袴を穿き、蝶花形の附きし銚子を持ち出て

佐五 コレ、東林さん〳〵。

ト 立ち尋ね廻り

エ、コレ、この酒の中へ彼の毒は仕込んだが、肝心の氣の附く藥を置かずに行き居つた。ア、コレ、氣付けを早く受取りたいものだ。

ト　これにて與茂吉心附き

與茂　モシ〳〵、番頭さん、今の東林さんがね、藥を出してね、コレ、この藥を番頭に屆けてくれろと云つてね、天上持ちになつて行きやした。

ト　胡椒の袋を出す。

佐五　ア、なにか、東林さんが藥を、われに屆けてござつたか。それで落ちついた。

ト　紙袋を取つて

ア、、これが彼の藥だな。

與茂　なにかえ、よこねを散らすのかえ。

佐五　エ、、默りやアがれ。

ト　袋を明けて藥を見ようとして、黄昏ゆゑ見えぬ思ひ入れにて

日の暮れるのに行燈も灯し居らぬ、たわけ面め。

德市　モシ、番頭さん、療治をなされまするかえ。

佐五　オ、、今は急がしいから、後に頼まう。

德市　左様なら臺所の二階に、飯焚どのを揉んで居りますから、お呼びなされませ。私しもしまひ次第、モシ、いつものこの笛を

ト　一つ吹いて

斯う吹きますから、お出でなされませ。

佐五　合點だ〳〵。

德市　お臺所の二階に居りまする。

ト　探り〳〵奥へ入る。

佐五　エ、コレ、五兩遣つたら、東林が氣付け藥と屆けた妙藥、二口〆めて三十兩とは、ハテ、高いものだ。

ト　袋の中を覗いて見る。與茂吉、同じやうに、ウカウカ覗いて見るはずみに、佐五兵衞と鉢合せする。この途端にこの藥、二人が鼻へ入る。

兩人　ア痛々々、

ト　頭を押へ

ア、くさみ。

ト　一度にする。

佐五　エ、、べら坊め、ア、、くさみ。

與茂　お前がべら坊だ。アくさみ。

兩人　ア、、、、ア、、くさみ。

ト　互ひに顏へ嚔をしかけ、佐五兵衞、思ひ入れありて

佐五　ア、金だけあつて妙藥の、效驗は違うた
ト兩人鼻をムグ〳〵して
兩人　ア、、くさみ
佐五　ものだなア。
兩人　ア、くさみ。
ト唄になり、向うより若い衆一人供にて、箱提灯を灯し、左五郎、麻上下、聟の拵らへ。仲人樋右衞門、羽織、町人にて、附き出て門口へ來り
樋右　ハイ、頼みませう〳〵。宿老の御新造は來てござりまするか。左五郎さまをお連れ申しました。
佐五　ヤア、、聟どのが來た〳〵。
ト銚子を持つてうろたへる。
與茂　そりや聟だ〳〵。聟だ三間兩隣、くさみ〳〵くさみ。
ト呼びながら奧へ入る。引違へておりの、丸行燈を下げ、おこの、三方に三組みの杯を載せ、持ち出て來り
りの　コレ、佐五兵衞、聟樣がお見えなされたではないか。
佐五　左樣でござりまする。
この　サア、左五郎さま、これへお通りなされませ。
左五　ハイ〳〵、然らば御免なされませ。
ト上へ通る。
樋右　今日はお日柄もようござりまして、おめでたうござりまする。
左五　イヤモウ、定めてお待ち兼ねでござりませうに、取急ぎまして參上仕りました。して、あなたが中根屋の御家御樣でござりまするかな。
この　左樣ぢやわいな。モシ、おりのさん、聟の左五郎さんへ御挨拶なされませいな。
りの　ハイ〳〵。これはマア、何か急な事ゆゑ、お待受けもそこ〳〵。御新造樣がお出でなされまして、お仲人やら、何やらに、お世話なされて內祝言の杯ごと。近所の披露目は追つての事、女主人では、町內の思惑も如何と、親類どもを呼び集めまする間もなう、今宵の取結び、お聞きもござりませうが、生さぬ仲の娘、可愛がつて下さりませいな。
左五　これは早、結構な御挨拶。私しが神原屋左五郎と申しまする、誠に商ひの道と申しても、一向存ぜぬ不器用者。御宿老のお世話をもちまして、今宵早急の聟入りお店の事も何もかも、お指圖下されまして萬事よろしく

へイ、お頼み申し上げまする。
この　何事も知れぬところは、あの番頭どのに、聞合はするがようござんすぞえ。
りの　左様でござりまする。コレ、佐五兵衛、聟さんにお近付になりやいの。
佐五　へイ〳〵、左五郎さま、これは早お初にお目にかゝりました。即ち私しが中根屋の見世を預かりまする、佐五兵衛と申しまする。至つて不調法者でござりまする。只今仰しやりまするには、商ひの道も御存じないとのお詞、してマア、何を御存じで、聟にお出でなされたやら。僅か少分の地面を持參で、まだ手入らずの娘御を〆めたその上、年若な後家御もなめる思し召しか。モシ、憚りながら商賣に抜け目のない佐五兵衛、絲屋の店にゐるじかつては、きなかの錢でも自由には致させませぬ。花聟樣、左五郎さま、左樣お心得なされませ。
ト思ひ入れあり
左五　ハテ、慇懃な番頭どのゝ御挨拶。小糠三合持つならば、ナニ入り聟に來ませうぞ。今もこなたの云ふ通り、僅かな地面がわしの持參。その上素人、どうで役には立ちますまい。何かとこの上、貴樣の世話で

佐五　いよ〳〵聟に、左五郎さまが
左五　宿老どのゝお世話ゆゑ
佐五　お娘を女房に身代まで
左五　存ぜぬながら行く〳〵は
佐五　ハテ、厚かましい
左五　ヤ。
ト思ひ入れあり
番頭どの、頼みまするぞよ。
トこなし。
りの　ほんにマア、この娘は、何を致して居りまするやら。
この　いま着更へてゞござんした。コレ、女中衆、房さんをお連れ申さんせいな。
よし　ハイ〳〵、畏まりました。
ト合ひ方になり、丸綿をかむり、白無垢なりのお房を、お芳介抱して出て來る。後よりおせん、三方の長熨斗を載せ、これを持ち、おみき附いて出て來り
サア〳〵、お房さん、おめでたいお內祝言、御機嫌ようお杯を遊ばしませ。お前さんのお望みの事は、私しがようナ、モシ、存じて居りまするから、マア〳〵、今宵のお杯は、皆樣の仰しやる通りになされませいな。

せん　友達のわたしらも、よい所へ來合せて
みき　お房さんのめでたい祝言にあうて、待ち女郎やら何やらに
兩人　ほんにあやかりたうござんすわいな。
トお房びんしやんとしてよき所へ坐り、脇の方を向いてゐる。
りの　サア〳〵、ちやつと祝言の杯をめでたう納めて。ナウ、佐五兵衞。
佐五　左樣でござりまする。お杯が濟んだと申しまして、後で貰ひ引は、いくらもある事でござりまする。
ふさ　エヽ、阿房らしい。わしやまだ得心せぬものを
りの　アヽコレ、それでは惡い。マア〳〵今夜のところは
ト思ひ入れ。
左五　モシ〳〵、おこのさま、どうやらお房どのは、祝言が不承知のやうではござらぬかな。
この　イヽエナニ、さうではござんせぬ。お房さんは、よう得心でござんすわいな。
佐五　左樣でござりまする。どうで杯さしたと云うて、後は大亂
ト云はうとして
アイヤ、早くお杯を濟まして、この佐五兵衞が白いか黑いか
トうぢ〳〵して
サア〳〵、お杯〳〵。こりや私しよりお酌を致しまする。祝言の杯は、嫁御の方からお始めなされて
ト無理矢理に杯をお房に持たせ、思ひ入れあつて銚子の酒をつぎ、こなしありて
サア〳〵、その酒を一思ひに、グッと飮んだり〳〵。
ト氣をいらち、お房飮みかねるを、側よりせりたて
それ〳〵、そこで謠ぢや〳〵。
徳右　オッと心得ました。四海波靜かにて
ト謠うたふ。お房、腹立てるこなし、グッと飮む。佐五兵衞うろたへ
佐五　アヽ、南無阿彌陀佛。
ト思はず泣き出し、また氣を變へて、念佛を謠の節に直しうたふ。皆々捨ぜりふにて喜ぶ。おこの、三方の杯を左五郎が方へ持ち行く。
この　サア〳〵、これから樂の左五郎さまへ。
ト差出す。左五郎杯を取る。佐五兵衞うろたへ

佐五　ア、、コレ〳〵、その杯をアノ、聟様が
りの　めでたう酌をしやいなう。
佐五　サ、この酌は
この　早うつがんせいな。
左五　番頭どの、憚りながら頼みます。
佐五　ア、、この酌はどうも
りの　エ、、なぜつぎやらぬぞ。コレ、お芳、わが身、つぎやいの。
よし　ハイ、畏まりました。
ト何心なく銚子へかゝる。佐五兵衞これを離さず
佐五　ア、コレ、酌しかゝつたこの番頭、こればつかりは
ト銚子を離さず居る。この時お房、俄に苦しき思ひ入れにて
ふさ　ア、コレ、どうやらわたしや、胸が苦しうなつて來たわいな。ア、、胸先が、コレ、苦しい〳〵、苦しいわいな。
ト胸を押へて苦しむ。皆々驚ろき立騒ぐ。
りの　コレ娘、どうしやつたぞいの。
皆々　お房さんいなう〳〵。
この　早う醫者樣を呼びに遣らんせいな。

槌右　ドレ、わたしが一ッ走り。
ト向うへ駈けて入る。奥より勝、駈けて出て來り
勝　モシ〳〵、お房さんは急病かえ、そりや折惡く持んだ事だ。持病の積であらうな。
ト介抱する。左五郎、杯を持ちたるまゝ、ウロ〳〵して
左五　コレ〳〵、この杯は、嫁御がさゝれたが、どう仕りませうな。
勝　どうともしなさい。杯どころぢやアないわな。コレ、熊の膽はないかの。
左五　でも、さゝれた杯、誰れぞ酌をして下さい。
勝　ハ、、娘御が積だに依つて、積を押へて居るに、側から酌々と、退いてゐなさい。
左五　これサ、杯の酌を頼みます。
勝　エ、、氣のきかない、積だから騒ぐわな。しやくは押へて居るよ
左五　お押へでござるかな。あの祝言の杯を押へていゝかえ。
勝　エ、、うるさい人だ。コレ、番頭さん、此お子を斯うしても置かれまい。お居間へ床を取りなさいな。

佐五　合點だよ〳〵。
勝　お房さんはわしが抱いて行くよ。
左五　モシ、酌はどなたがやな。
勝　ハテ、酌はお房さんだわな。
佐五　エヽ、聟さん、退きなさい。何をまごつかつしやるのだ。

ト左五郎を突き飛ばし、皆々捨ぜりふにて大騒ぎになり、勝、お房を抱き上げ、皆々介抱して奥へ入る。左五郎、杯を持つたまゝ突き廻され、一人残つて

左五　これはマア、どういふ話しだ。イヤハヤ、べら坊な目に遭つたとはこの事であらう。杯事の段になつて、お房が飲むとあの苦しみ。もしあのお房に色があつて、この祝言の邪魔をして、銚子の中へ毒を入れたか。さうした時には、おれも一緒に毒の相伴。

ト持つたる杯を見て氣味惡さうに、あたりへ投げ棄て

初春早々、命を一つ拾つたわい。

ト思ひ入れ。合ひ方にてこの道具このまゝぶん廻す。

本舞臺三間の間、上の方へ二階を見せ、正面は誂らへの段梯子、よき所に最前の鹽引、首の所釣りブラリと掛けてあり。下の方は惣銅壺の土竈、八間に燈を灯しかけてあり、臺所の道具。與茂吉、茶釜の下を焚いて居る。佐五兵衛、網の手燭を持ち、そこら中を尋ねて居る。暮れ六ツの鐘にて道具とまる。ト指し金の鼠一疋、八間の油へかゝる。與茂吉見て

與茂　道理で八間が暗くなつた。また鼠めが油を嘗めるか。畜生め、シイ〳〵〳〵。

ト棕櫚箒を取つて、追ひ散らす。

佐五　コレエヽ、與茂吉、何を騷ぐ。奥ではお房さんが、今をも知れぬ急病、面白さうに、靜かにしをらぬか。
與茂　ハテ、わつちやア鼠を追ふわな。お前また何を尋ねなさるな。
佐五　おれは鹽引の切かけを尋ねる。
與茂　そりやア大方、鼠が引いたかも知れねえ。
佐五　さう思ふから氣が氣ではない。われも釜の下を焚いたら、燃さしを差くべて置け。火の用心が惡いぞ。此やうに取込みな晩は氣を附けて居ろ。コレ、藥も掛けて置け。
與茂　承知サ。そりやアいゝが、お房さんはまだ氣が附かねえから困つたものだねえ……鼠に燃さしを引かれては

ならぬ。
ト捨ぜりふにて薪の燃さしを釜の下の灰の中へ差込み七輪を出して薬鍋を掛け、團扇にて煽ぎながら眠る。

佐五　ア、コレ、估劵の入つた鹽引を、何處へ吊して置きやアがつたやら。してマア、あのお嬢の氣付け藥も

ト思ひ入れあり

イヤ／＼、こりやアまだ早いわえ。

ト捨て鐘にて、手燭を持つて、そこら中を尋ねるとて、躓きて持つたる手燭の燈火消える。この時二階の障子を明け、德市、一文笛を吹く。佐五兵衛、思ひ入れ。按摩、障子をさす。

按摩が療治の相圖の笛の音。

ト段梯子へ駈け上がり、思ひ入れありて

イヤ／＼／＼、この取込みに療治をしても居られまい。ア、コレ、估劵の入つた

ト吊しある鮭を見附け、

これだ。「あがり口人の出入のしげけれど、鮭は頭へ障らざりけり」。

トふつと塵を吹いて

これでかゝりし埃も晴れ

ト鮭を取つて探り見て、頭の繩を摑み、八間の燈火へ翳し見る思ひ入れ。この時ドヽンと打込み、管絃と思はせ、通り神樂になる。與茂吉、下より火吹竹を持つて窺ふ。

これまで切つた鹽引の、頭の中に估劵證文。エヽ、忝ない。

與茂　番頭見附けた。

トこの聲に悧りして

佐五　ヤ、なんと。

與茂　人の事をば云ひながら、絲屋の長をもする人が、鮭の頭を目がけるは、天命知らずの番頭どの、キリ／＼おれに首を渡せ。

佐五　小積な丁稚め、この鹽引の

與茂　首を渡せ。

佐五　見事取るかよ。

與茂　おんでもない事。

佐五　どうして。

與茂　斯うして。

ト火吹竹にてぶつてかゝる。佐五兵衛ヒラリと飛び下り、擂粉木を取つてぶつてかゝり、これより兩人、段

梯子へ駈け上がり、駈け下り立廻りよろしく、兩人ども持つたる物を互ひに打ち落される。この時、八間へ鼠出て油を嘗める。これにて燈火暗くなる思ひ入れ。捨て鐘合ひ方。兩人闇の思ひ入れ、探り廻る。釜の下の燃えしを取つて兩人立廻り、段梯子へぶッつけ、この時パッと燃さしの火飛び散る。兩人顏見合せ、

佐五　大べら坊め。

ト丁稚を蹴飛ばし

おれまでも氣狂にしやアがつた。

與茂　餘ツぽど腹がこなれた。

佐五　おきやアがれ。頭が要らばソレ、うぬにやるワ。

ト鮭の口の估券を取つて懐へ入れ、頭を投げやる。與茂吉取つて

與茂　こいつはよい目覺ましだ。

トまた七輪へかゝり、鮭の頭をあぶりゐる。合ひ方になり、奥よりおりの、お芳に介抱されて出て來り

よし　番頭さんは爰に居られますわいな。

佐五　これは後家御樣でござりまするか。

りの　コレ佐五兵衛、老少不定とはいひながら、内祝言の今宵になつて、あのマア樣子、ありやもうどうで、娘は叶ふまいわいの。

ト泣き居る。佐五兵衛介抱して

佐五　ア、お心弱い。御臨終でもござりますまい。コレ、お芳、こなたはお房さまのお側を離れますまいぞ〳〵。

よし　アイ〳〵。

ト駈けて入る。

佐五　モシ〳〵、後家御樣、なんぼお若いと申しまして、只今仰しやつた老少不定、こりや安野屋の十兵衛方へも人を走らせませう。親類方も、お招き申さねばなりますまいて。

りの　サア、何事も其方、よいやうに計らうてたも。わしやモウなんぢややら、夢見たやうぢやわいの。

佐五　左樣でござりませう。殊にお前樣は義理ある娘御。まだあのお子の姉御樣もござりまするが、只今では音信不通。別してお房さまには、親旦那からお讓りなされたお化粧料の百兩の金。

りの　サア、あの子に附いた百兩も、今にもお房が、もしもの事がある時は、直ぐにお寺へ納めてしまふわいな。

佐五　そりや御尤もでござりまするが、もしその大金を寺へ納めたと申しまして、何の役に立ちませぬ。ハテ、あ

のマアなまぐさ坊主どもが、女狂ひにでも遣ひますれば、
却つて佛の爲にはなりませぬ。こりや矢ッ張りあのお房
さまへ。

りの　そりやどうなとあの子の爲に、なるやうにしてたも
いなう。

佐五　サヽ、それを私しが聞いて居りますれば、親類方が
なんと仰しやりませうと、御遺言と申しまして、お髮も
剃らず、あのまゝ祝言の白小袖で葬むりますれども、こり
や上つ方に隨分とござりまする。

りの　アヽモウ、あの子は叶ふまいかなう。

ト泣き伏すを介抱して

佐五　御尤もでござります。もしもの事がござりますれば、
あのお子のお金は、お房さまの衿に掛けさせ

りの　葬むつてくりやいなう。

ト思ひ入れ。此うち二階の障子を明けかけ、左五郎窺
ふ。與茂吉眠り居る。手代兩人、奥より駈けて出て來
り

手代　モシ／＼、お房さまが殊の外、取詰めてござります
る。只今も知れませぬ。ちよつとお出でなされませ／＼。

ト口々に云うて引返して駈け込む。

りの　娘は死にやるかいの。コレ、お房いなう。

ト立たうとして俄に癪の差込みし思ひ入れ。佐五兵衛
いろ／＼介抱して

佐五　コレ、お前までが同じやうに、コレ、氣をしつかり
と持たつしやりませ。番頭が居ります。モシ、佐五兵衛
が居りまする。只今私しが申した通り、お房さまへ附い
たる金は

トおりのが耳へ口寄せ

只今お前に申した通り

ト小聲にて云はうとする。與茂吉、眠り居て、七輪へ
こけかゝり

與茂　アツ／＼／＼。

ト目を覺ます。佐五兵衛、恟りして

佐五　まだうせたか。

トこの拍子に左五郎と顔見合せ、左五郎、障子をさす。
爰にて拍子木の頭。

モシ、私し任せになされませ。

ト時の鐘、五ツの拍子木、この道具をぶん廻す。

本舞臺、三間の間、絲屋の横手を見せたる道具、土

總板塀、忍び返し、見越しの白梅。下の方に火の番屋。すべて本町夜の景色。よき所に綱五郎、木綿頭巾をかむり、一本差し、浪人體にて、机の上に小さき行燈を灯し、八卦道具を並べ、腰を掛け、辻八卦の體。町人形の者、手の筋を見てもらひ居る見得、通り神樂、五ツの鐘、時の拍子木にて道具とまる。

ト下座より町人羽織の若い者三人出て來る。此うちに龜、晝鳶の拵らへにて、ウツ／＼と懷を窺ひ、下座へ入る。

町一　さて／＼、人はいつ何時も知れませぬ。惜しい娘を殺しました。

町人　葬禮は明日でござらう。

ト此やうなせりふよいやうに、花道のうちを途絶れぬやうに向うへ入る。

町一　ハイ／＼、左樣なら天道樣を信心しまするな。

綱五　隨分、御信心が第一でござります。

ト十二銅を置き、向うへ入る。此うち始終通り神樂、一つ鉦聞え、時の鐘のだら。向うより中間、留守居提灯を灯し、五平太、袴羽織にて出て來り、直ぐに本舞臺へ來て

五平　いま打つは五ツぢやな。

中間　左樣でござりまする。

ト行かうとする。

綱五　當卦本卦の考へ、失物、待人、走り人、男女合性善惡の考へ。

ト五平太、これを聞いて

五平　ア、男女合性。これはよいわえ。内々彼奴めが心意氣を見て參らう。コリヤ／＼。提灯待て／＼。

ト綱五郎が側へ寄つて

時に合性でござる。一算置いて下されい。

綱五　畏りました。あなたのお年はな。

五平　拙者、誠の年は、なんでござる。

ト近く差寄り、燈火にて顏見合せ

綱五　ヤ、貴公は五平太どのぢやござらぬか。

五平　左樣云やるは綱五郎どのか。

綱五　左樣でござりまする。これはマア、よい折柄

ト五平太、これにて挨拶なしに

五平　家來參れ。

ト行かうとする。綱五郎とめて

綱五　アイヤ／＼、山住どの、お屋敷をお暇の拙者、お詞

もござるまいが、そこが武士の情でござる。何卒朋友のよしみと思し召されまして

ト思ひ入れ。五平太こなしあつて

五平　家來、灯を消せ。

ト中間、灯を消す。

綱五郎どの、暇出ましたる其許と身共、夜中とは申すものゝ、御口談いたしたと申しては殿へ立ちませぬ。そこで燈火を消させましてござるが、身共へなんぞ御用でもござるかな。

綱五　これはマア、お志しの程、千萬忝なう存じまする。其許へお尋ね申したい一儀は、別の事でもござりませぬ。この間中深川にて、貴公も御存じの通り石塚氏の越度。その折柄、身共引請けまして、斯樣に浪人いたし、詮議仕るは彼の定家の色紙、承はれば、この邊の質屋方に、二百兩とやらの質物に入れあるとの事。貴公には、その儀お聞きなされたかな。

ト思ひ入れありて

五平　イヤ〳〵、承はらぬ。決して五平太承はりませぬが、質屋に入つて居らうも知れませぬ。ハテ、大金の品ゆゑ、そりやモウ、質屋にもござらうが、いま云はつしやりまする二百兩が三百兩、定めし高金でござらう。それを又貴公には、在所が知れますれば、お請けなさる思し召しか。

綱五　左樣でござりまする。色紙の在所詮議の爲、この浪人。身を粉に碎きましてなりと……サ、斯樣には思ひ居れど、只今にては浪人の世渡り。

五平　金子調達出來ませぬか、

綱五　お恥かしう存じまする。

五平　左樣でござらう。よし、質物に入りござらうが、身共が金子たん足致して質請けも仕る。必らずお氣遣ひなさるゝな。……じやが、それでは身共が立身も致さうが、アヽ、氣の毒なは石塚氏、四五日のうちには色紙を詮議し、彌三兵衛どのが差上げねば、腹を切らねばなりませぬ。アヽ、切腹せずばなりますまい。

トこれにて綱五郎、思ひ入れ。

ハテ、一家中の風説には、勘當いたした悴左七郎、町人と罷りなつたあの者に、その色紙を賣り渡して、金子合力いたしたと、專ら家中で取沙汰でござる。それゆゑこの間は、急に石塚の科が重うなりまして、アヽ、今にもいとしや縛り首にも、あはれうも知れませぬ。

綱五　モシ〳〵五平太さま、すりや私しが浪人仕つたる
その後にて、石塚氏へ
五平　殿様より殊の外のお咎め。ア、、氣の毒な儀でござ
る。
綱五　ハテ、その儀は何とも以て。
　　ト思ひ入れあつて
イヤナニ五平太どの、いづれ拙者めが金子調達仕り、
その質物に罷りある色紙の儀は、身共に請けさせては下
さるまいか。
五平　そりやモウ、御勝手になさるゝがよいが、その質屋
御存じかな。
綱五　ア、イヤ、その儀は
五平　それ御覽じろ。どうして滅多には知れますまい。併
し御苦勞なされて色紙の詮議おしやるがよい。して、其
許には、只今の御住宅はな。
綱五　ヘイ、小石川極樂水邊に、裏屋住居の微かな世渡り。
五平　左樣でござらう。アノ小石川極樂水とな。ドレ、ち
よつと所を記して置きませう。
　　ト懐の紙入れを出し、腰より矢立を抜いて、捨ぜりふ
にて鼻紙へ覺え書をせんとする。この時窺ひたる龜、

五平太が紙入れを奪ふ。五平太、肝を潰し
ヤ、盗人め。
　　トうろたへる。
盗人　泥坊々々。
　　ト東の歩みへ逃げる。五平太、供の中間うろたへて
五平　家來、灯を灯せ。紙入を取られたワ。大事の證文が
……家來、うろたへるな。泥坊々々。
　　ト二人ともうろたへて、消したる提灯を持つて、東の
方へ追ひかけて入る。掠めたる通り神樂、時の鐘。揚
幕より九郎兵衛、手拭を頭へ卷き、木綿やつし股引、
藤倉草履、夜番の拵らへにて、弓張りを灯し、鐵棒を
曳いて出て來り、下の番屋へ入り、提灯を消し、辻番
火鉢を出し抱へ居る。矢張り一つ鉦聞える。
綱五　ハテ、うろたへた五平太の今の樣子。懐中の紙入れ
を取らるゝとは、ア、、町中でも油斷のならぬ……それ
につけても、いま云うた事が定なれば、猶々以て片時も
早く、尋ね出さにやならぬ色紙。質屋にあつても金が先
立つ。ア、今の身で大金の
　　ト思案の思ひ入れ。矢張り通り神樂、一つ鉦聞え、下
座より勝、與茂吉出て來る。綱五郎また以前の店へ腰

かけ居る。

與茂　コレ〳〵、勝さん、昆布鱈はまだかえ。

勝　大べら坊め。昆布鱈どころか、花嫁のお房さんが、杯を引受けたが最期の助、氣合が悪いと云ひ出して、誠に夢を見たやうな話だわえ。

與茂　わつちもさう思ひやす。お房さんの頓死しなさつたも悲しいが、昆布鱈にあはぬも悲しうござります。

勝　エ、、何を吐かしやアがる。ほんに、われが買つて來たこの胡椒の粉も、出たちの八はい豆腐へも入れられまい。

ト袂より袋入れの粉藥を出し、フツと見て

こりやアコレ胡椒の粉ぢやアない……なんだ、「氣付け粉藥、三味調合いたし置き候ふ。」

ト讀んで

べら坊め、こりやアコレ粉藥だワ。昆布鱈へ入れねえで仕合せ。うぬ、飲んでしまやアがれ。

ト舞臺へ捨てゝ、花道へ行き

あゝ又急に取詰めるものか。あの番頭めも聟の噂を聞いたなら、おかやき餅もあらうのに、杯事を侑めたは、彼奴がどうも

ト振り返り思ひ入れあつて

小僧や、直に行つて來るぞよ。

ト通り神樂になり、向うへ入る。網五郎これを聞き居る。與茂吉、藥の袋を取つて

與茂　エ、、昆布鱈もないに、胡椒ばかり何にするものか。

ト小言云うてゐる、後より

網五　コレ〳〵、丁稚どの〳〵。

トこれにて與茂吉振り返り

與茂　アイ、わたしを呼ぶのは八卦屋さんか。どうだ、商ひがありやすか。

網五　コレ、貴樣に聞きたいは、なんぢややら宵から、お内は人出入りが多くて、今宵祝言があると聞いたが、アレアレ、あの鐘の音は貴樣の内か。

與茂　アイ、わつちらが内サ。八卦屋さん、聞きなさい、今夜の祝言がひツくりかへつて、明日の葬ひになりやした。

網五　ヤ、葬ひになつたとは。

與茂　サア、聞きなさい。花嫁のお房さんが、何か今夜の祝言を聞いて、いつそ癪を發してね、お家さんに向つて、忌だ〳〵と云ひなさるものを、無性に杯をしろ〳〵と云

つての、お房さんがその酒を一口飲みなさると、直にお前、アヽ苦しい／＼と云ふかと思ふと、めでたく往生しなされたわな。
　トしく／＼泣く。
綱五　アヽ、そんなら娘御のお房どのが、杯すると忽ちに死なれたか。して、その聟と、杯してか／＼。
與茂　イエ／＼、聟どのへ杯を指さうといふ所で、苦しい苦しいと云つたもの、その酒を後で誰れが飲むものか。
綱五　そんなら聟と杯はせずかやな。
與茂　アイ、聟どのは飲まずサ。そしてね、白無垢を着たなりで、棺の中へ入りなさつたが、アヽ、惜しい娘を殺したぞ。
綱五　アヽ、そんなら娘御は白無垢の形で、棺へ納めたか。
與茂　アイ、白無垢ばかりぢやアござりやせぬ。あの番頭の佐五兵衛めが云ふにやア、お髮もお剃りなされずとようござりますか、ハテ、お大名様は其まゝで埋めますから、ようござりますと吐かして、髮も剃らず、白無垢の形サ。
綱五　アノ、髮も剃らずにか。……ハテナウ。
　ト思ひ入れ。この時番屋の戸を明け、九郎兵衛、顏を出し、聴き耳立てゝ窺ふ。
與茂　モシ／＼、まだ／＼話しのやうな事がありやす。あの後家様が云ふにはね、お房さんの貯へ金が百兩あるとサ、それをお寺へ納めようと云ひなさつたら、番頭めが云ふにやアね、そりやア、御無用になされませ、寺へ遣つたとて、坊主が女郎を買つたり、圍ひ者をしたり、ほんの役に立たない事でござります。それよりは矢張りあのお子の衿へ掛けさせて、あの世の貯へにさせ申すがよいと勧めたれば、正直な後家御様、お房が身に附けた金ぢや、そんならさうしませうと、内外の者にも沙汰なしに、頭陀袋の中へ百兩入れて、土へ埋めるとは、世間には飛んだ話もあるものだね。
　トうか／＼と口走る。綱五郎、思ひ入れあつて
綱五　アヽ、なんと云ふぞ、百兩といふ金を、アノ、死なれたお房どのとやらの衿へ掛けて、アノ、棺の中へ
與茂　入れたに違ひないよ。わつちやアとつくりと見やした。それを番頭めが見附けてね。コレ、いま後家様と話した事を、必らず誰れにも云ふなと云つたがね、ツイお前に云ひやした。モシ、必らずお前、誰れにも云ひなさるなよ。アヽ、これに付けても、あの後家様がお心よし

だから、いゝやうになさる。エヽ、齒がゆくつてなるものぢやアねえ。エヽ、腹の立つ。

ト袋の藥をそこへ捨てゝ

モシ、いま云つた事は、必らず沙汰なしよ。云ひなさると、わつちア食止に遭ひやすよ。

綱五　決して誰れにも云ふ事ぢやアないが、アノ、いよいよ

與茂　違ひねえね。云ひなさるなよ。

トこの時絲屋の内にて

△　與茂吉や〳〵〳〵〳〵。

ト呼び立てる。

與茂　アイ〳〵、いま行きやす〳〵。

△　與茂吉や〳〵……與茂吉よ〳〵。

與茂　與茂よ〳〵と呼んでも見たが、可愛いお房さんは……

……土をかぶつて

トしく〳〵泣きながら

誰れと寢るの。

ト唄を謳ひ、下座へ入る。あと合ひ方。九郎兵衞、番屋の中より窺ひ居る。綱五郎、後を見送り

綱五　あの愚かしい丁稚が云ふ事、よもやとは思へども、女親の淺はかから、大枚の百兩、死んだ娘に萬一着けて、サ遣るまいものでもない。此方は金で苦勞するに、ある所には

ト捨てゝ置きし藥の袋を見附け、取上げて見て

胡椒の粉ぢやと云ひ居つたが、こりやコレ粉藥。しかも中の包みに、丁寧に上書がして

ト袋の中の包みを見て

「氣付け粉藥三味調合いたし置き候ふ、天水を以て用ゆる。」……アヽ、こりや胡椒の粉ではない、氣付け粉藥と書いてあるに、エヽ、粗相な丁稚め。

ト懷中の紙入れを出し、この中へ入れる時、内にある文を見附け取つて

ほんに、こりやこの間どこの下女やら、墨色の判斷と置いて去んだが、女子の手蹟、殊には艶書。もう取返しに見えさうなものぢやな。

トまた懷中する、この時絲屋にて頻りに鉦の音する。これにてキッと思ひ入れ。九郎兵衞も聽き耳立てる。

イヤ〳〵、どうでこの身に大枚な、無ければならぬ二百兩、今の話しが定なれば

九郎　寺へ仕掛けて娘が衿に

綱五　掛けて葬むる葬禮も
九郎　慥かに明日の七ツ時。
綱五　夜に入つたなら人知れず
九郎　塚をあばいて
綱五　盗みしたなら天道の
九郎　道に背いた強悪は
綱五　いつか一度は
九郎　世間の噂に
綱五　ア、人の口には
ト思はず互ひに振り返り、九郎兵衛、引戸をバッタリと、拍子木の頭。綱五郎、行燈を吹き消す。
トこの時早めたる一つ鉦の音、これにならつて拍子木のキザミよろしく、拍子
この間通り神樂にてツナギ、引返し。　　幕

三幕目　大通寺墓所の場

役名―半時九郎兵衛。本庄綱五郎。番頭、佐五兵衛。神原屋左五郎。醫者、東林。鳶の者、風の神喜左衛門。家主、栗島權兵衛。仲人、槌右衛門。信濃者、杢助。長屋の者、留六。絲屋娘、お房。

本舞臺三間の間、白壁の塀、上の方に黒き寺の門、この柱に「本所貳丁目絲屋佐右衛門寺」と紙に書き貼りてある。よき所に権八、小助、佐五兵衛、寝棺持、施主の形にて、大道へ莚を敷き、塀際に禮返しの見得、葬ひの鳴り物にて幕明く。
ト門の内より町人大勢、羽織股引、葬ひの歸りにて出て來る。門前に女非人、強飯の殘りを貰ひ居る。
非人　ハイ、旦那樣、お強飯のお殘りを下さりやせ。
町人　ア、無い〳〵。附くな〳〵。
ト施主の前へ行き、辭儀をする。
佐五　これは早、今日はどなたも遠々の所、有り難う存じまする。めい〳〵お宿へ上がりまする筈にござりまするが、自由ながらこれにてお禮を申し上げまする。
町人　これは御丁寧。さぞお力落しでござりませう。
手代　どなたも遠方御苦勞に存じまする。
ト矢張り葬ひの鳴り物にて、町人皆々向うへ入る。爰に

にて鳴り物忙しくなる。

佐五　イヤア、お葬ひはもう濟むさうな。コレ、てまへ達はお歸りの衆へ、丁寧に挨拶しませうぞ。

手代　心得ました。

佐五　わしはちよつと行つて、葬る所をよく氣を附けてやらねばならぬ。ア、世話の多い事ぢや。南無阿彌陀佛。

トうろたへて門の中へ入る。引違へて杢助、信濃者の拵らへ、淺黄の股引にて、炭俵を一俵天秤棒の先へ附け、寺の門より出て來る。

非人　ハイ、旦那さん、お強飯のお殘りを下さりやせ。

杢助　ナニ、お強飯をくれろ。飛んだ事をいふ乞食だ。今日の葬ひは饅頭だ。おらア五人前引廻して來た。てまへ達貰つたがあらば、此方へくれろ。國へ土産にするワ。

ト紙包みを出して見せる。

非人　ア、道理で旦那衆が下さらねえ。お鍋さん、強飯ぢやアねえ、饅頭だとよ。

非人　エ、不景氣な、しみつたれな葬ひだの。サア、來なさい〳〵。

ト葬ひの鳴り物にて下座へ入る。門の内、バタ〳〵して、龜、序幕の形にて駈けて出て來る。後より槌右衛門、麻裃、葬ひの形にて追ひかけ出て

槌右　ソレ、泥坊だ、捕まへて下さい〳〵。

杢助　オツと合點だ。

ト追ひ廻はして龜を捕まへる。手代兩人、捨ぜりふにて立騷ぐ。門内より所化僧、麻の衣にて駈けて出て

所化　なんでござる、泥坊が捕まりましたか〳〵。

槌右　此奴、太い奴では無いか。玄關で裃を脱がうと思ふうち、ちよいと紙入れを拔き居つた。サア、返せ〳〵。

トこづく。

龜　ア、コレ、靜かにしなさい〳〵。

杢助　おのれ、あの旦那の紙入れとやらを返さぬと、毆りいがめるぞ。

龜　なんだ、この鄕在野郎め。いらざる事によく四文と出やアがつた。覺えてうしやアがれ。

皆々　サア、出さねえか〳〵。

龜　アイ、出すよ〳〵。

ト懷より紙入れ四ツばかり出し

サア、この中だ。貴樣の盜られたのを搜して取らつしやい。

槌右　取らいでワ。

ト四ツの紙入れをあちこち見て
オヽ、これおや〳〵。
ト手前のを取つて懐へ入れる。

所化　エヽ、太い奴だ、いつその事に野郎め、墓場の隅へ生埋めにしませうか。

皆々　いつそ、坊主にさつしやい〳〵。

急　とんだ事を云やアがる。

ト振り切つて逃げる。

手代　泥坊々々。

ト追ひかけて向うへ入る。爰にて暮れ六ツの鐘鳴る。

穂右　さて〳〵、油断のならぬ事でござる。時に今の泥坊めは、コレ、紙入れを置捨てにしをつた。

所化　ほんにうろたへた奴でござる。アヽコレ、降りさうになつた。日が暮れずば持込むまい。アヽ、煩さい事だ。

穂右　また葬ひでもござるかな。

所化　エヽ、ナニ些細な、至つて貧窮な貧乏葬ひが参るて。なんの人そばえな、死なずともな事を。

穂右　アヽコレ、この紙入れは困つたものだ。

杢助　モシ旦那、わたしに下さりませぬか。

穂右　この男は埒もない、泥坊の物をか。

杢助　イヽエ、江戸では持ちませぬ、国へ土産にします。

穂右　ハテサテ、埒もない男だ。ソレ、持つて行かつしやい。

ト捨てる。杢助拾ひ取る。この中に前幕に五平太より投いたる紙入れある。

杢助　これはお忝なうござりまする。どうで投銭であらう。

ト紙入れを捻くつて花道へかゝる。

穂右　コレ、信濃者、ならうなら泥坊に返してしまへ。

杢助　さうしようかね。コレ、泥坊どの、紙入れを遣らう。コレ、泥坊々々。

皆々　アヽ、埒もない男だ。

ト禅のツトメになり、所化僧、門内へ、杢助、穂右衛門向うへ入る。五ツの鐘にて、この道具引いて取る。

本舞台、三間の間、向う黒幕、一面に玉椿の卒塔婆垣、所々に石垣、よき所に湯灌場、正面に今埋めし桶の縁出かゝり、その際に七本卒塔婆、大塔婆立ててあり、寺男鍬を持ち、その際を掘つてゐる。すべて墓所の體。時の鐘、一つ鐘にて道具納まる。

ト向うより綱五郎、頬被り、一本差しにて窺ひながら
出て來り、花道にて

綱五　ア、、どうやら降りさうになつて來たが、あの鐘がもう五ツでもあらうか。門の出入りを案じたが、幸ひの所へ葬禮が來たので、それに紛れて……丁稚子供の云ふ事を、誠に思ふも淺はかながら

ト云はうとして向うを見て

ア、、墓場に人が見えるわい。

ト本舞臺へ來り

モシ、物が尋ねたうござります。

寺男　オイ、なんだえ。この暗いのに愕りした。なんでごんすえ。

綱五　ハイ、モシ、いま來て居る葬禮は、絲屋の娘御の死なれたのでござりますかえ。

寺男　なにサ、ありや淡島權兵衛といふ人の、かみさんの葬ひサ。絲屋の娘御は、それ〱、そこに埋めかけてござるが、番頭どのゝ來るまでは、土を掛けるなと云うて行かれました。

綱五　ア、、そんならこの埋めかけてあるのが、絲屋の廟所でござるかな。

寺男　左やうサ。

ト空を見て

ア、、ぼろついて來た。あの番頭どのは、何をしてござるやら。ドレ、笠を取つて來ようか。

ト矢張り時の鐘にて、寺男、下座へ入る。綱五郎、跡を見送り。

綱五　そんなら爰が、志して來た絲屋の墓。どうぞ人の目にかゝらぬうちに

トあたりを見廻して、塚の方へ近寄つて思ひ入れ。この時向うにて

權兵　合點しねえぞ〱。

皆々　ハテマア、ようござるわいの〱。

ト人音するゆゑ、綱五郎うろたへ

綱五　ア、、爰へ來るさうな。ドレ、湯灌場へなりと。

ト湯灌場の戸を明け内へ入り、戸をさす。掠めたる通り神樂、禪のツトメ。向うより留六、誂らへの塔婆を擔ぎ、築地屋と書いた弓張を灯し、跡よりめど六、角助、股引やつしにて、女布子のかゝりし早桶を擔ぎ、權兵衛、編笠施主の形、木綿羽織、股引にて、片肌脱ぎ、立ちかゝるを、喜左衛門、股引、鳶の者にて、こ

れをとりさへながら、權兵衞を押へつけて出る。所化僧、酒に醉うたる體にて、管を捲き、矢八、所化僧を宥めながら出て來り、本舞臺へ來て

所化　これサ、施主どの、出家を捕へて、どうするのだどうするのだ。

喜左　ハテマア、坊さん、靜かに云ひなんしな。コレ、大家さん、お前もいゝ加減にしなさいな。

權兵　これサ、喜左衞門どの、聞かつしやいな。このぐづ入めが、おらが嬶アの髮剃をせずともよいと吐かしますワ。コレエ、夜夜中投込み同然に來た葬ひだと云つて、さう安くする事はねえ。小石川では小口もきく淡島權兵衞と云つちやア、七間間口の支配もする大家だぞ。髮剃がなぜ出來ねえのだ。なんぼ二百旦那だといつて、さう安くしやアがる事はねえわえ。

めど　これサ大家さん、靜かにしねえな。長屋の手合ひも居るからの。お前のへこむ話しもあるまいわな。

角助　道行は分つて居るわな。ナウ、頭、さうぢやござんせぬか。

喜左　さうサ〳〵、始末合ひはわしが付けるから、マア、わし任せにしなんしよ。

留六　大家さんのかみさんの葬ひだけ、長家の手合ひがこつそりと

矢八　持込んだ上、湯灌もべら坊によく洗つて、髮剃の幕になつて、なぜなりやせねえ。

留六　大家のかみさんの髮剃に、いさくさがあつちやア、店子の者も外聞が惡い。コレ、坊さん。

所化　コレナ、この衆は野暮な事を云ふ手合ひだ。湯灌さへ濟めば、髮剃は無駄なものだわな。それに今日は木町の絲屋の娘御の葬ひで、剃髮を片馬持込んで、寺中が繁昌に喰つたから、日はもらつくし、コレ、お施主さん、斯うさつしやい。二十八文持たせて、門前の髮結床へ遣りねえ、夜なべがあらう。あの下剃は剛氣に上手だて。エエイ。

ト醉つた思ひ入れ。

權兵　なんだ、おらが嬶アを髮結ひ床へやれ。コレエ、、このデモ坊主め、それをうぬに教はるものか。絲屋の葬ひだといつて、おらだといつて、佛に變る事があるものかえ。この薫心坊主めだ。

所化　なんだ、この大家め、大風な事を云ふな。葬ひだ葬ひだと、コレエ、、勿々しく來る佛なら、親類でもくれ

るものだワ。大所の犬猫は、これよりは結構なお葬ひをするわえ。髪剃をしたと云つて、高が布施は二十四文か。コレエ、、氣のきいた夜鷹は床花にも貰ふワ。エ、、大笑ひ、ちやんちやん坊主にでもして、ひつ天地獄へやりやアがれ。なんの事だえ。

權兵　このけづり廻しめ。權兵衞さんのお葬ひを、いきなりにケチを付けたな。この鍋太郎坊主め、ぶツ挫くぞ。

所化　何をこの長面め、怖いものかえ。

權兵　まだ太平樂を吐かしやアがるか。どもくり坊主め。

ト留六が持つたる塔婆を取つて、所化をしたゝかぶつ。

皆々　これサ大家さん、大概にしなさいな。

所化　オヽ、痛いぞ。御出家をぶつたな。コレ、施主がお寺をぶつても濟むか。和尙も頭は圓いが、心までが坊主ぢやアねえぞ。おれも三河島では小口も利いた鍋太郎道心だ。うぬ、願人坊主の緒が切れたぞ。

ト絲屋の墓に立てゝある大塔婆を拔いてぶつてかゝる。これより皆々捨ぜりふにて叩き合ふ。寺男、鍬を擔ぎ出かゝり、取さへる。矢張り掠めたる通り神樂、喜左衞門この中へ入り、

喜左　これサ、大家さん、お前腹も立たうがね、なんぼ腹を立つたといつて、死んだかみさんの爲になるといふ話しもねえわな。なんなら不承しなんしな。

權兵　そりやモウ、內外世話をして下さるこなさんも久しい店子だ。大家たるべき者が、長屋の衆の挨拶を、聞かねえも本意でもねえて。

皆々　さうサ〳〵。

權兵　鳶頭のこなさんの挨拶だ。ようごんす、濟ませやせう。

喜左　そいつは有り難いワ。男は當つて碎けろだ。大家さんも坊さんも、いさくさは、わしにくれて、一つ〆めなさい。

皆々　サア〳〵、〆めなさい〳〵。

皆々　アヽ、よい〳〵〳〵。

ト手を打つ。

所權　エヽ、お世話でござりました。

皆々　これは御不承でござりやせう。

喜左　コレ、坊さんは、ざつと佛の頭を剃つて遣りなさい。

權兵　なにサ、もうよしにしませう。昨夜までも抱寢をした嚊の髪剃を、亭主が見て居たら、髪剃程な血の涙が落ちて、精靈の爲にもなりますまい。

皆々　そこもあるね。
所化　時にお内儀は急な事であつたね。
權兵　さればサ、平常息災な女でござつたが、食中りサ。
皆々　何を喰はれました。
權兵　聞きなさい。鰒汁の中へ、天麩羅をさらひ込んで、ごまめ膾の殘つたのを、こげいたまに喰つたから、あかぎれが破傷風月とやらになつて、がらり頓死しました。シタガ實正な女サ。息を引取るまで、大福餅の事を云ひ死に死にました。そこで、迷はねえやうにと、頭陀袋の中へ、大福餅を入れて葬ります。
喜左　さて〳〵、大家さんは、かみさんには孝行だね。
皆々　こいつは御褒美が出やせう。
寺男　モシ、埋めてもいゝかね。
權兵　よしサ〳〵、わつさりと埋めてもらはうぞえ。
皆々　合點だ〳〵。
　ト立ちかゝる。
喜左　コレ〳〵、若い衆や、マア、その臺石を此方へ除けさつし。
留六　オツと合點だ。
　ト石を動かせども動かぬ思ひ入れ。喜左衛門見て
喜左　これな〳〵、此方へ退かツし。こんな事で動くものかな。ほんの事だが、わしが若い時は、大山の子安でも、王子でも、七十五貫といふ奴をやらかして三度さしたわ。今時分の若い手合ひは、女を見るとひよつくが、力といつちやア十六文がものもねえ話しだ。その位な石は、わしらは懐へ入れて溫石にするワ。退かツし。コレ、斯うやりねえな
　ト片肌脱いで臺石へかゝる。一向地離れもせぬ思ひ入れ。
皆々　どうだ頭、持てやすか〳〵。
喜左　待ちやれ。斯うやらかしてみ。
　ト動かせども一向動かぬゆゑ
　こいつは今日はどうかしたわえ。日が悪いせゐか
　トいろ〳〵あつて
　ア、持てない筈だ。今日は親仁の祥月命日だ。
皆々　エヽ、頭は負惜しみか。サア〳〵、やらかせ〳〵。
　ト早桶を穴へ下ろし
喜左　こりやア長屋の手合ひ、御苦勞だね。
皆々　アイ〳〵。モシ、大家さん、おめでたうござりやす
權兵　これはお世話でござりました。時に塔婆は何處へ行

つたの。

皆々　いま叩き合ひに使つたが、そこらに有りやせう。

　ト そこらを尋ねる。留六、大小の卒塔婆を二本拾うて

留六　コレ〳〵、爰に二本あるが、大家さんのはどれだえ。

喜左　ハテ、戒名があらう。坊さん、戒名は何と云ひやす。

所化　大家さんのかみさんは慥か。オヽ、それ〳〵、さぼてん信女と云ひました。

留六　こりやアどつちがどうだえ。

所化　ハテ、愚俗にそれが讀めて堪るものか。大家さんに見てもらはつしやい。

權兵　これはしたり、それが讀める位なら家主はしませぬ。一體大家の物を書くは、長屋の者が馬鹿にしますワ。大家が明き盲目だから、物を書く手合ひには店を貸しませぬ。

喜左　そこで長屋内はみんな無筆サ。

權兵　わしらが店は無筆長屋サ。

喜左　それだから長屋中が物知り澤山よ。コレ、大家さん、斯うしなんし。委細構はず絲屋の方へ小さいのを立てゝ、お前の墓へ大きいのを立てなさい。ハテ、大は小を兼ねやす。

權兵　成る程、錢の出る事ぢやアなし、大きいのが德だ。

皆々　左やう〳〵。

所化　ドレ、立てゝ進ぜう。

　ト 絲屋の卒塔婆を淡島の墓へ立て、小の方を絲屋の置土の方へ立てる。

皆々　サア、これで土を掛けうかの。

權兵　時に土を掛ける前に、一升提げて來たが、寺の臺所で、熱やつこでもしませうか。

皆々　なにサ、お構ひなされやすな。

喜左　併し、大家さんの志しだ。一杯づゝ飮んで行かつしやいな。

皆々　さうしませうか。

權兵　サア、來さつしやい〳〵。

所化　これは寺の役德だ。

　ト 桶の上の布子を肩に掛け、皆々捨ぜりふにて通り神樂になり、この人數殘らず下座へ入る。この時五ツの鐘、雨車の音して、向うより東林、赤合羽を着て、中間笠をかむり、駈けて出て來り、直ぐに舞臺へ來て

東林　こいつはどうでも雨だわえ。あの番頭めを出し拔いて、お房が襟に掛けたる百兩、彼奴が來ぬ間に

トあたりを窺ふ。捨て鐘。樋の方へ近寄り、手早く繩を引切り、手を差込み、思ひ入れあつて

さてこそ總身の温まり、二十四時が其うちはどうして。先づ此方は頭陀袋の百兩を

トいろ／＼死骸の襟のあたりを尋ねる。此うち綱五郎戸を明けかけ、聞き居る。

イヤア、聞いたに違はぬ、慥かに小判で

ト財布を取らうとする。綱五郎、蔭より出て東林を投げのけ、死骸の方へ近寄り、財布を浚ふ。

ア、コレ、それを

ト支へる。立廻り。綱五郎、東林を取つて押へる。時の鐘にて道具廻る。

本舞臺、矢張り玉椿の垣の裏通りを見せ、溝堀の流れ灌頂、千部開帳札などを立てたる寺の裏通り、爰に佐五兵衞、頰被りにて裾をからげ、鍬を腰にさし、龕火繩を持つて、卒塔婆垣を外より破つて居る見得、雨の音、時の鐘にて道具とまる。

ト直ぐ忍び三重になり、鐵挺にて垣をこぢる思ひ入れ。

佐五　エヽ、折惡く降つて來たな。シタが、この暗がりを幸ひに、桶の内なるお娘を引出し、コレ、この藥で

ト懷の紙入れを尋ね、手に當る證文を出し

ア、こりやアあの東林めが、お娘を殺さぬ請合ひの手形。慥か氣の附く藥は

ト藥包みと心得て、胡椒の粉の袋を出し

これだ／＼。この藥を天水を以て服ませる時は、忽ち氣が附く。

ト空を見て

ほんに、雨水がいつたわえ。それに俄にこの降りは、この佐五兵衞が正直を、天も感納ましくてや。エヽ、忝ない……併し、この寒さでは、なんぼ氣のつく死人でも、ひよつとこれぎり氣の附かぬその時は、おれは誠に仕損し。また首尾よく行く時は、内の後家御を騙かして、娘の襟に掛けさせた、頭陀袋の百兩を取出して、色紙の質請け。ちつとも早く、寺へ忍んで

ト忍び三重、時の鐘、雨車の音。佐五兵衞、火繩を振つて、垣根を鐵梃にてこぢる。この時向うより九郎兵衞、竹の大笠を被り、跣足にて、窺ひ／＼出て來り、本舞臺を透かし見て

九郎　向うの垣が大通寺の惣卿塔、夕方埋めた絲屋の娘は、

本堂の左の方。それ〳〵
ト窺ひ來る。この時縫ぐるみの犬、佐五兵衛を吠える。
佐五兵衛、鐵挺にて追ひ廻す。此うち九郎兵衛、合點
ゆかぬ思ひ入れにて蹲まる。

佐五　誰れだ〳〵、そこに居るは、誰れだ〳〵。
ト思ひ入れあつて
ア、、犬ださうな。
ト九郎兵衛、ニツタリと笑ふ。佐五兵衛、垣根へ半身
入る。九郎兵衛、さてはと思ひ入れ。この模樣、時の
鐘にて道具廻る。
元の墓所に戻る。爰に綱五郎、東林を引伏せ、頭陀
袋の内の金を啣へ、爭ひ居る。片脇にお房の死骸、
引出しある。兩人捨ぜりふの立廻りあり、東林を當
てる。東林「ウム」と倒れる。綱五郎思ひ入れあり
て

綱五　噂に聞いたに違ひなう。死人の女が襟の金。この間
に早う。
トつか〳〵と行かうとする。雨車の音烈しく、雨水咽
喉へ入りし思ひ入れにて、お房「ウム」とうめく。

ヤ、、、今の大雨に死人の女、息吹返せしあの樣子。
今この者が云ふに違はず、二十四時が其うちは
トお房を探り見て
こりやコレ惣身の溫まり、蘇生つたか。
ト思ひ入れあつて
人を助ける善根は爰のところ。昨日思はず手に入つた、
氣附けを含めて
ト紙入れより藥の包みを出し、飮ませんとして
イヤ〳〵、今この娘が蘇生つては、念がけて來たこの金
が、綱五郎が手には入るまい。金が調はぬ其うちは、石
塚氏の難儀となつた、色紙の質請け……というて今、眼
前に助かる女を、此まゝ置けば、死ぬるであらうし、見
殺しにしては本意でない。助けてやらうか……ア、助
かつたらこの金が……手に入らねば大恩請けた彌三兵衛
さまを、みす〳〵見殺し。此方を救へば娘の命。壽命の
あるのを其まゝに、見棄てゝどうも
トあちこちと思ひ入れありて
イヤ〳〵〳〵、こりや矢ツ張りこの女を助けた上にて、
命があらば無心云うても、この金を借りねばどうも……
よもやその時否とも云ふまい。オ、、さうぢや。さうぢ

や。
ト持つた薬をお房に含ませ、手向け茶碗を探りとりて、薬手桶の水を飲ませようとする。お房、口を閉ぢて居るゆゑ、抱きかゝへて、薬も水も、口移しに飲ませ、我が胸をあけ、お房を暖める思ひ入れありて
コレ、心が付いたか。コレ、娘御、氣を附けさつしやい、氣をしつかりと持ちませうぞ。
トあたりへ憚り、耳へ口を寄せ呼びいける。お房、やうやう心附きし思ひ入れ。ウムと又うめく。
コレ、女中々々、氣が附きましたか。心が附いたか。
ト耳に口寄せ、キッと云ふ。お房、眼を開き、茫然として
ふさ　母さん、祝言は、堪忍して下さんせ〳〵。
ト泣く。
綱五　コレ〳〵、母様どころかいの。母様は爰には居ぬ。お前は一旦死なれたれど、コレ、蘇生つたのぢやわいの。
トお房が耳へ口を寄せて云ふ。
ふさ　エヽ、コレ、誰れも居やらぬかいの〳〵。
ト呼びたてる。
綱五　コレ〳〵、爰は内ぢやない、菩提所の墓所ぢやわいの。
ふさ　エヽ、そんならわたしや一旦死んで
ト思ひ入れ。
恥かしうござんす〳〵。
ト泣き入る。
綱五　これサ、何も恥かしい事はない。葬禮も済んで、土へ埋んだお前、どうやら脈があるゆゑに、氣付けを含ませ、介抱して、やう〳〵お前は心が附いたのぢや。
ふさ　エヽ、すりやアノ、お前さんの御介抱で、わたしは心が附きましたかえ。
綱五　さうぢやわいの。
ふさ　そりやマア、有り難うござりまする。……さうしてあなたは、どういふ事で此やうに
綱五　サ、これは
ト思ひ入れあつて
もう斯うなつては隠すに及ばぬ。コレ娘御、わしはこなたの棺に掛けてござる、百両の金が欲しさに、寺へ忍んで、道ならぬその金、盗まんばつかりに
ふさ　エヽ、死んだわたしが、どうして金を
綱五　お前は知るまい。コレ〳〵、この頭陀の中に



初演當時の錦繪　五世松本幸四郎の



半時九郎兵衞　五世岩井半四郎のお房

ト お房に金を探らせ見せる。

ふさ ほんに、こりや金。どうしてわたしや持つて居やんす。そしてお前、その金を

綱五 サ、道ならぬ事ながら、無ければならぬ百兩の金。ある所には大枚な、金を埋める葬禮と、聞いたが因果、夜に紛れ、助からぬ身の小の蟲、大の蟲なる侍ひの、命にかゝはる事ゆゑに、盜み心も浪々の、尾羽打枯れし武士の果。コレ、手を合せます。この樣子、必らず沙汰して下さるな。歸參いたさばその節は、キッと返濟するほどに、どうぞ貸して下さりませ、下さりませ。

ト 思ひ入れ。お房こなしあつて

ふさ なんぢやゝら、わたしは存ぜぬ金の譯。一旦あなたの御介抱、命の親のお前さん、なんの否やを申しませう。暗うて黑白は分らねど、お侍ひさんと仰しやるが、して又あなたは何れのお屋敷。

綱五 アイヤ、以前は侍ひ、今の身は、お前のお宅本町の、絲屋の門へ夜に入ると、お店の端の占屋算。八卦置きの浪人でござりまする。

ふさ エ、アノお前さんが

ト 恍りして、我が思ふ男ゆゑ、顏を見たきこなしにて

そんなら夜毎にわたしが門へ

ト 思ひ入れあつて

エ、恥かしうござんすわいな〳〵。

綱五 これサ、何も恥かしい事はござらぬ。蘇生つてめでたうござるわいの。お前は寺へ便つてから、早うお内へ。わしは人目にかゝらぬ其うちに、この金借りて立退きまする。浪人なれど本庄綱五郎といふ武士の果。姓名明かして置くからは、必らず共に沙汰なしに。コレ、賴みまするぞえ。

ト 金を持ち、振り切つて行かうとする。お房縋つて

ふさ ア、コレ、待つて下さんせ。

綱五 サア〳〵、尤もぢやが、この金借りても、いま云ふ通り歸參の後は

ふさ エ、わたしや金の事は知らぬわいな。あなたにちつと

ト 立寄らんとして身節の痛む思ひ入れ。

ア痛々々。ア、こゝらがきつう痛むわいな。

綱五 さうであらう〳〵。棺の内に一日二夜ござつたもの、身内が痛むは、こりや尤も。コレ〳〵、それにつけても、どうぞ此まゝ見遁がして

ト行かうとする。お房縋つて

ふさ　アコレ、わたしも一緒に、連れて行つて下さんせ。

綱五　ア、、埒もない。お前は歸つてめでたう祝言。

ふさ　ア、コレ、その祝言が心にかゝつて、わたしや迷うて、蘇生つたであらうわいな。

ト恥かしき思ひ入れ。

綱五　コレ、男は格別、女子のお前を同道しては、この身に思はぬ密夫の

ふさ　サア、其やうな名が立つては、あなたは迷惑なされうけれど、わたしや疾から見初めた殿御……こんな事申したら、厚かましい女子ぢやと、思し召すであらうけれど、お近附きでもないお方へ、云ひ寄る品も內證で、下女のお芳に否み込ませ、云ふに云はれぬ心のたけ。文と見せずにこの墨色、よう御覽じてと宛名も書かず、上げました筈がござんしたが、あなた、覺えがござりますかえ。

綱五　オ、、成る程、其やうな事もござつた。何處の下女やらこの間、コレ〳〵

ト紙入れより文を出し

この墨色の判斷を、ようなされてと渡して行たゆゑ、披いて見れば女子の手蹟。文は切なる戀路の文、いづれの女中のいたづらに、某を弄るのか、但しは外へやる文を、墨色との間違ひかと、思うて持つて居ましたが、フム、そんならお前が

ふさ　アイ。

ト顏を隱して思ひ入れ。

綱五　アノ、眞實に

ふさ　サア、思ひこがるゝ心の中、文で推量なされてなら、可愛い事ぢやと、爰から直ぐに

綱五　サテ、連れ立たうにも定まつた、聟のある身のお前の事。

ふさ　それで合點のないならば、矢ッ張りわたしを元のやうに、死なして置いて下さりませ。

綱五　どうして今更

ふさ　死なされぬなら、お否であらうと、願ひを聞いて下されますか。

思ひ入れあつて

綱五　なんとせう、それ程までに思うてなら

ふさ　連れて行つて下されまするか。

綱五　如何にもこれから同道しませう。

ふさ　エヽ、そりやアノほんに
綱五　イヤ、これが誠に不思議の因縁、大方これも前生で
ふさ　結んだ縁の綱五郎さん、お前はわたしが命の親。
綱五　それ〳〵、慥か其方の名はお房、僞はりならぬ本町
の
ふさ　その色絲の結ぼほれ、所もあらうに此やうに
綱五　サア、墓所の前での馴染めは
ふさ　どうした粋な
綱五　御先祖の
ふさ　お仲人にて思はずも
綱五　蘇生つたは
ふさ　わたしが仕合せ。今からどうぞ
綱五　見捨てはせぬ。
ふさ　ア、嬉しうござんす。
ト思ひ入れ。
綱五　ア、かゝる珍事も
ト思ひ入れ。この時ちよつと月を引出す。兩人抱く。よきキツカケにて又月隱るゝ。玉椿の垣バツタリと音する。兩人恟りして
ふさ　オ、怖。

綱五　ア、コレ。
ト思ひ入れ。垣根メリ〳〵音する。綱五郎囁き、お房を介抱して、湯灌場の戸を明け、内へ入り、戸をさす。矢張り雨の音。捨て鐘。よき所の垣を破り、佐五兵衛、卷火繩を振つて、窺ひ〳〵忍び込み、暗がりゆゑ火繩にて、いま埋めし廟所の塔婆を探りあて、火繩を振つて、文字をやう〳〵讀む思ひ入れ。
佐五　容房院花月信女、施主本町絲屋。
トやう〳〵讀み
これだ〳〵。
ト探り寄つて早桶の繩を引ッ切る。内より權兵衛女房おさや、女の死人にて、頭陀袋を掛け、經帷子の形、これを抱へて出し、探り見て膽を潰し
ヤ、こりや白無垢ではない、帷子一つだ。エヽ、そんなら坊主めが剝ぎ居つたか。エヽ、あのづく入めが。
ト腹立てる思ひ入れ。懷の紙入れより以前の胡椒袋を出し、口移しに飲ませるとて、うろたへて鼻へ入り。無性に嚏をしながら、花手桶の水を飲ませ
コレ、お房さん。
ト思はず聲高に呼び、心付きて小聲になり、耳に口寄

せ呼ぶ事あり、肌を探り見て
エ、コレ、惣身が氷のやうだ。
ト思ひ入れあり、裸になり、布子をおさやに着せ、だき抱へ、介抱しても氣の付かぬゆゑ
ヤ、お房さんはほんまに死んだ。コレ、お房さん〳〵。
ト泣聲になり、ウロ〳〵して
ア、コレ、死なれては事だワ事だワ。この藥で氣の附かぬは、エ、、あの醫者めに騙られたか。マア〳〵、何よりは頭陀の中の百兩、こいつが命
ト頭陀袋を探し、内より大福餅を二ツ出し、肝を潰し
ヤ、百兩は無くて、こりやコレ慥か腹太餅だが
トうろたへる。この時九郎兵衛、佐五兵衛が出でし垣より忍び入り、窺ひ居る。
サア〳〵、無いワ〳〵。
トこれを九郎兵衛聞きつけ、死人の白き形を見つけ、さては先へ盗人廻りしかと駈け寄り、おさやを引附ける。佐五兵衛はうろたへ
ヤ、盗人はうぬだな。
トかゝるを見事に投げる。佐五兵衛、九郎兵衛にむしやぶりつく。この物音に、湯灌場の内より綱五郎、お房を介抱して窺ひ出る。九郎兵衛、おさやが掛けし頭陀の内を探し、金なきゆゑ、これもうろたへ、佐五兵衛を引附け、詮議せんとする。佐五兵衛は九郎兵衛が取りしと心得、逃がさじと組みつく。兩人立廻りのはずみに死人のおさやを引立て、これを楯に、小聲にて爭ふ。綱五郎、お房をいたはり逃げんとする。九郎兵衛、白き形を窺ひ見て、お房の袖を捕へる。綱五郎この中へ入る。立廻りにて片袖ちぎれ、九郎兵衛の手へ殘る。佐五兵衛むしやぶりつくを、九郎兵衛立廻り、綱五郎、佐五兵衛が脱ぎ捨てし布子を拾ひ、お房に着せ、兩人花道へかゝる。矢張り此うち忍び三重、時の鐘、一つ鉦の念佛。向うより左五郎、半合羽、ぱつちの形、一本差し下駄がけ、蛇の目の傘、花手桶へ樒を入れ、提げて出て來り、花道にて兩人に行き逢ひ、お房が白き形に愕りして、早足に舞臺へ來る。この時立廻りの兩人、左五郎へこけかゝる。これにて左五郎、また愕りする。佐五兵衛、盗人めと左五郎へかゝる。立廻りにて左五郎、佐五兵衛が下帶に挾みし紙入れを取る思ひ入れ。よき時分より、喜左衛門、貳升樽を提げて、醉うたる體にて、捨ぜりふにて出て來り、氣を

失ひ居る東林が上へフトこける。これにて東林心付き、起き上がり、喜左衛門に武者振りつき、立廻り。佐五兵衛、おさやに組附く、四人間違ひの立廻り。九郎兵衛は白の片袖、佐五郎は紙入れ、めい／＼思ひ入れありて懐中する。綱五郎、お房をいたはり、花道にて頸く。この仕組み途端一度に拍子 幕

雨の音、時の鐘だらにて、幕の外を、綱五郎お房向うへ入る。シャギリ

四幕目　安野屋の場

役名――鳶の者、お祭左七。安野屋十兵衛。山住五平太。番頭、佐五兵衛。醫者、東林。信濃者、杢助。中間、角内。廻し男、儀助。丁稚、岩松。藝者、お絲。十兵衛女房、おらい。

本舞臺三間の間、安野屋といふ軒暖簾に「御鼻紙袋ぎれ煙草入品々」と書きたる看板吊し、下に門口、正面戸棚、納戸暖簾、よき所におい、鏡立を置き、お絲が髪を直して居る。あたりに櫛だたう取散らし、角の柱に紙屑籠かけてあり。岩松、臺箱に向ひ、煙草入れを縫うてゐる。杢助、前幕の形にて、古き産所籠の掃除して居る。深川相川町安野屋の店、通り神樂、てんつゝにて幕明く。

岩松　コレサ、杢助どん、此方へ埃が來るわな。靜かにさつしやい。

杢助　ハテ、ちつとは埃がかゝらう。不承さつしやい。さて／＼鼠が、喰うたワ／＼。

いと　モシ、おらいさん、ありや何の籠でござんすえ。

らい　ほんにお前方は知らんすまい。ありや産所籠と云うてナ、女子の嬰兒を産む時、あの内へ入つて居るのぢやわいな。

いと　ハテマア、をかしい形の物でござんすなア。

岩松　モシ／＼、おかみさん、伊勢屋から借りに來るのは、この籠でござりまするかえ。

らい　サイナウ、お内儀さんが臨月ぢやと云うて、この間から借りに見えるわいな。

杢助　モシ、おかみさん、鼠の喰つた所は貼つて置きやせ

うね。

らい　さうして下さんせ。

杢助　時におかみさんえ、わしは紙入れの賣り物がござりますが、お内で買つて下さりませぬか。

　ト前幕の紙入れを四つばかり出す。

らい　この人としたことが、こちの内はの、誂らへ向きの紙入れは、お好み通りに拵らへれど、古い紙入れの賣買ひはせぬわいな。

杢助　エヽ、古いのはお買ひなされませぬか。この間拾うた紙入れがござりましたから、賣らうと思ひましたが、そんなら國へ土産にでも致しませう。

岩松　拾つた紙入れを誰れが買ふものだ。大笑ひだ。

杢助　ナニ、この小僧め。小さい形をして、默つて仕事をしろ。

岩松　エヽ、措いてもおくれ。

らい　コレ、杢助どの、こなさん用がなくばの、その籠の鼠の喰うた所を、ちよつと貼つて置いて下さんせ。

杢助　アイ〳〵、畏まりました。貼つてあげやせう。

らい　そこらに紙が有らうわいの。

杢助　ナニ、反故でもようござりやせう。待ちなさい、爰らにあらう。

　ト古き紙入れの内より手紙その外、五平太が紙入れより證文を出し、何心なくひろげて

モシ、この書いた物は遣つてもいゝかえ。ちよつと見つおくれ。

　トおらいへ反故を出す。岩松見て

岩松　アヽ、コレ〳〵、おかみさんはノ、書く事も讀む事もノ

　ト思ひ入れ。杢助呑み込み

杢助　アヽ、おかみさんは物を書かつしやらぬか。それは御不自由。わしも書きませぬ。ハヽヽヽ。

　トおらい、恥かしき思ひ入れにて

らい　サア、物を書かぬは、我が不器用は思はいで、ほんに親達を恨むものいなう。

杢助　小僧どん、反故はおれがおこらう。糊を出したり。

岩松　オイ、合點だ。ドレ、糊を附けてやらう。

杢助　アヽ、また碌な事をすればよいに。

　トてんつゝになり、岩松、杢助が出せし紙入れの反故をひろげて糊を付ける。杢助、在所籠の後の方、上い方を捨ぜりふにて反故にて貼る。お絲は顔を直して居

る。おらい、三つ櫛の掃除して居る。向うより駕籠舁き、四つ手駕籠を擔ぎ、スタ／＼と出て來り、門口へ來て

駕屋　ハイ、旦那のお歸りでござりまする。

らい　歸らしやんしたかえ。お前方、大きにお世話さまでござりました。

ト挨拶する。駕籠の内より、十兵衞、羽織、町人の形にて、衿卷頭巾、日拭を持ち出る。駕籠の者、草履を直す。

十兵　これは駕籠の衆、これまでは大儀でござつた。

駕屋　ハイ／＼、左樣ならば明日からは、もうよろしうござりまするか。

十兵　もう療治も今日限りでござるて。

駕屋　それはおめでたうござりまする。この上お大事になされませ。

ト駕籠を擔ぎ、向うへ入る。十兵衞、内へ入る。

いと　十兵衞さん、お歸りなされましたかえ。して、今日は、御鹽梅はどうでござりまするえ。

十兵　イヤモ、殊の外ようござつて、平生のやうでござるが、醫者どのゝ云はるゝには、今日一日は湯藥を致すがよい、明日からは煎藥ばかりでよいと云はれた。ア、久しう醫者へ通ひましたて。

いと　それはまア、おめでたうござりまする。わたしも春先の所爲かして、今朝から持病の癪が兆したやうぢやわいなア。

らい　とりかぶつて居なんすから、わたしが髮を撫で付けて上げたわいなア。

十兵　それはようしやつた。コレ、お絲さん、今日五平太さまがござりましたかな。

いと　イ、エイナ、まだござんせぬわいな。

十兵　して、左七さまは見えませなんだか。

いと　イエ、今日は見えずでござんすが、この頃二三度尋ねて見えても、逢うては惡いとある事ゆゑ、逢はなんだので、もしひよつと

ト思ひ入れ。

十兵　お絲さん、知らしやる通り、左七さんは赤城家の御家中、石塚さまの御子息。十五の年にお屋敷をお暇もの堅い彌三兵衞さまが、町人になされたいとわしへのお頼み、お世話申す其うちに、喧嘩好きにて友達附合ひ、喜左衞門といふ鳶の者も、石塚さまの御家來筋、その喜

左衛門が子分となり、今では勇みの町抱へ。この頃聞けば御親父様には、定家の色紙紛失より、御切腹にも及ぶところ、身に引受けて、綱五郎さまの御浪人。慥かに色紙は、お前をわしへお出入りの縁で、預けさしつたあの五平太どのゝ仕業ぢやと、誰れとはなしにその風聞。

らい　それに付けてこの中から、二人がお前に呑み込ますに、さりとはマア合點の惡い。お絲さん、立合せられたこそ幸ひ、なんであらうと、五平太さんの所へ行て

いと　ア、モシ、おらいさん、モウ〳〵、どうぞ五平太さんの事は

らい　サア、そりやモウ、心に入らぬは知れてあれど、お前、左七さんをいとしいと、ほんに思ひなさんすなら……ナア、こちの人。

十兵　それ〳〵、ちつとのうち辛抱して、五平太どのへ身を任せ、その色紙の手懸りが知れさへすれば、跡のところは、なんでもあのお人に、氣を許させて、その事を、サ、そこはお前の手段にある事。ハテ、何をするのも男の爲

らい　その色紙さへ左七さんから、綱五郎さんへ上げさんすりや、彌三兵衛さまの御閉門も赦り、綱五郎さまが御歸參なされば、左七さんもこの手柄で、元のお侍ひにならしやんすといふもの。可愛い男の身の出世が、お前は否でござんすかえ。

十兵　左七さんに打明けて、云つたところが向う見ず、結まらぬ事と思ふゆゑ、首尾するまでは矢ツ張り主とも、ほんに縁を切つて見せにやア、目代にうせるあの庵頭が、マア呑み込まぬといふもの。それゆゑこの頃二三度、左七さんが尋ねて見えても逢はせぬは、首尾よく遣ふ下拵らへ。茲は一つ、お前の料簡、左七と末始終夫婦にならうと思ふなら、色紙の事を、お絲さん

いと　いろ〳〵思ひ入れありて　成る程、この間からお前方が、いろ〳〵云うて下さんすけれど、左七さんを除けて、五平太づらと寢るが否なと思ふばつかり。可愛い男の御出世に、さつぱり心が付きませなんだ。その色紙の在所さへ、騙して聞けばよい事なら、人身御供に掛けたと思うて

十兵　五平太どのゝ心に隨ひ

らい　身を任す氣にならしやんしたか。

ト　お絲うなづく。

十兵　それでこそお前も女だ。

らい　そんなら今にも五平太さんが、引取ると云はしやんしたら、機嫌ようして、合點かえ。

いと　サア、それもこれも左七さんと、後ではどうぞ女夫にして。

らい　そりや氣遣ひしなさんすな。

十兵　夫婦にしないでどうするものか。

いと　アノ、キツとでござんすぞえ。

十兵　知れた事サ。

いと　それさへ違ひのない事なら、うまう丸めてその色紙、あの五平太が業ならば、手懸りなりと、品なりと。

十兵　さういふ心に据つたら、今にも目代のあの儀助がうせる所へ、左七さんがもしござつたら、すつぱり突き出して、向うへ行つたり。

いと　アイ。

トふさぐ思ひ入れ。

らい　お前、未練ぢや行かぬぞえ。

十兵　ア、コレ、さうして綱五郎さまも御歸參をさせ申し、左七さまをも元の御身に

ト思ひ入れ。

いと　モシ、十兵衛さん、付かぬ事ぢやが、その綱五郎さまといふは、久しい跡に奥勤めの女中さんとやらに云ひ號け、その仲人は石塚さま。綱五郎さまはお國詰めの留守のうち、御家來の若黨が、親御樣の金子を預かり、奥女中と二人連れ、駈落ちとやら聞きましたが、そんならその時

十兵　ハテ、よう知つてござるの。こなさんの今云はつしやる、逃げた女の名は小絲、お前はお絲、ハテ、似た名でござるの。その小絲といふはお小姓の時分から、赤城の屋敷の奥勤め。本町絲屋の惣領娘、この十兵衛が親方筋、暖簾も貰ふ筈なれど、それでは親仁の位牌所が絶えると云うて、親旦那のお指圖で、安野屋というて仕馴れた商賣。小絲どのを連れて退いたは、十右衛門といふ若黨め。今にでも二人の在所が知るれば、綱五郎さまは女敵。小絲どのゝ親御樣、末期の際に十兵衛へ仰しやるには、不所存な娘、行くへ知れゝば町人でこそあれ、綱五郎さまの手前、現在親が助太刀して、娘めは助けては置かれぬが、今をも知れぬこの老病、死んだ跡では、コレ十兵衛、其方助太刀して、主の娘であらうとまゝ、おれが遺言名代ぢや程に、必らず憐れをかけるなと、お腹立の片頬にも、涙を零してわしへのお頼み。こりや有や

らは助けてくれい、見遁がしてくれいと、今際の際の旦那のお頼み。
いと　ムウ。そして綱五郎さまが、女敵とやらが知れた時には、親御様の御縁で、あの左七さんも、そんな所へ。
十兵　そりや今も云ふ通り、左七さまの親御の科を、身に引請けし綱五郎さま。殊に小絲どのを彌三兵衛さま、彼れこれ以て今にても、女敵二人に逢ふ時は、左七さまも是非とも助太刀。この十兵衛も主人の娘御、手出しのならぬ家來筋でも、親旦那の御遺言、ア、ならう事なら二人とも
らい　目にかゝらぬ遠い國に、ござんすればよいけれど。
いと　そりやモウ、小絲さんとやらは、幼稚いうちから奥勤めと聞く。すりや勸めたは對手の男。なんのマア、小絲さんとやらは、誠に騙されなさんしたのでござんせう。
十兵　サ、騙されたにもせよ、綱五郎さまの手前、今となつては、いとしい事ぢやが、浮世の義理。
らい　跡は妹のお房さん、これもいとしや俄かの病氣、わたしが去年初產に、女子を一人殺してさへ、殘り多いと思ふのに、聞けばいとしや小絲さん、不義の男に添臥しの、お腹に宿せし一人子を、安產あると其まゝ、棄てさんしたといふ噂。それも活計に盡き果てゝ
　トお絲一々その身に當る思ひ入れ。
十兵　これはしたり、ナニ役にも立たぬ事。本家の絲屋に縁もなき小絲どの、惡者の十右衛門とやらいふ男めと、添うてござるは、親類内の面よごし。
らい　でも信實の初子を、我が手で捨てるとは、マア、よくよくな
いと　さうでござんす。わたしもこの頃八幡さんで逢うてあの子の年恰好、目許口許、どうやら兄さん
十兵　ヤ。
いと　サ、兄さんゆゑに、いかい苦勞もした事おやわいた。
　トめい〳〵思ひ入れ。此うち杢助、產籠を貼りしまうて
杢助　ヤレ〳〵、貼つたぞ〳〵。さて、よく鼠めが喰ひ裂き居つた。ドレ、爰へお日樣があたるな。こちらを向けて
　ト反故の方を表の方へ向けて干す。
十兵　オヽ、杢助か、何をしやつた。
杢助　ヘイ、產籠の繕ろひを。旦那、いつ頃いりますえ。
十兵　イヤ〳〵、モウ〳〵、今も女房が產の事を云ひ出し

て、ア、、否な事やの〳〵。

杢助　モシ、旦那、嘘ばつかり。また近いうちでござりませうかれ。

十兵　コレ、おらいや、蓮籠をなぜ爰へ持出したのぢや。

らい　アイ、伊勢屋から借りに來やんしたに依つて、鼠喰ひをこそくつてもらうたわいな。

十兵　ア、、伊勢屋ではもう産きたか。ハテ、精の出る事ぢやの。ハ、、、、。

ト思ひ入れ。通り神樂になり、向うより五平太、羽織袴、大小にて、角内、中間にて、草履を摑み出て來り、花道にて

五平　イヤナニ角内、忘れた事があるわえ。其方は佐賀町の會所へ參り、只今直ぐに參る程に、米方のかかりの者に、他行いたさぬやうにと申して參れ。

角内　ヘイ〳〵、畏まりした。

ト行かうとする。

五平　ア、、コリヤ〳〵、もう此方へは參らずとよいぞ。矢張り會所に待つて居れ。

角内　畏まりました。

ト通り神樂にて、引返して向うへ入る。五平太、門口へ來り

五平　十兵衞、宿にお居やるか。

十兵　これは五平太さまでござりまするか。サア〳〵、お通りなされませ。

五平　許しやれ。

ト内へ入り、上へ通る。

十兵　コリヤ、お茶をあげいよ。

岩松　ハイ、お茶上がりませ。

ト茶を持ち行き、火鉢を出す。

らい　五平太さま、ようお出でなされましたな。

五平　お内儀、この間餘儀ない物をお預け申して、お世話の段、忝なう存ずる。イヤナニ、十兵衞どの、貴様にもこの間話しました、あの深川の歸りがけ、儀助に渡した殘りの金、行違ひの女めに捲上げられたは、イヤモウ武士にあるまじき體裁。それからやう〳〵殘金の遣はし、今夜直ぐに洲崎の寮へ引取る積り。目代の役には、あの儀助めを賴み置き申した。今日までは何かとお世話。コレ、お絲、晩から身が寮へ引取る程に、さう心得てゐやれ。

ト思ひ入れ

すりや、わたしを洲崎の寮へ、今宵連れて行きなんすかえ。

五平　左樣々々、さぞ喜びであらうな。

いと　ア、、わたしや折惡う持病で

ト表の方を見て思ひ入れ。

らい　ほんにこのお子は、今日は氣合が惡いと云うて、只今やうく髮も撫つけてあげましたわいな。

五平　それは存ぜず。して、少しは快いかな。コレ、東林坊を呼ばつしやるがよいぞや。

いと　十兵衞さんの今のお話し、殊に晩には、寮へ行かねばならぬと思へば、一倍氣合ひが。

五平　ヤ。

らい　アイヤ、ちつとマア奥へ來て、炬燵へでも當りなさんせいな。コレ、岩松、わかみも來て撫つてあげやいの。

岩松　畏まりました。

いと　左樣なら十兵衞さま。

十兵　オ、、冷えさつしやるなよ。

いと　アイ。

らい　五平太さま、ゆるりとお話しなされませ。

ト通り神樂になり、お絲こなしあつて、おらい、岩松附いて奥へ入る。杢助、廓へ煙管にてほつく眠り居る。

五平　さて、十兵衞どの、この間は何かと貴公のお世話、千萬忝なう存ずる。五平太、改めましてお禮申すて。

ト手を突く。

十兵　これはしたり、左樣に仰しやりますると、却つて恐惑仕りまする。私し本家中根屋佐右衞門、初めまして御恩になつたお屋敷のお役人方、粗膝には仕りませぬ。別して殊に當時御閉門仰せつけられましたる石塚さまは、本家の御恩になりましたる私し。折惡う眼病と申し、本家の絲屋の娘の病死、彼れこれ持まして存じながらの御無沙汰、申しませう樣もござりませぬ。して、紛失仕りましたる色紙の行くへは、只今もつて相知れませぬかな。

五平　左樣でござる。何奴が盜み出しましたやら、御大切の色紙、今以て相知れませぬ。して、貴公には眼病でござるかな。

十兵　左樣でござりまする。付け藥いたしまする間、御覽なされませ、斯樣に盲人も同然でござりまする。

五平　それは不自由でござらう。

トこの時杢助、居眠りかゝり、雁首にて頭を打ち、フ

ツと目を、覺まし

杢助　これはしたり、晝中に眠りこけるとは、ア、不調法……南無三、日が蔭つた。其方を向けませう。御免なされませ。

ト反故にて貼りし方を正面へ向け

ア、、何か忘れたと思つたら、おせちを喰はなんだ。ドレ、お勝手でお振舞ひにあづからうか。

十兵　オ、、まだ支度前か。飯喰つて歸らつしやれ。

杢助　ハイ〳〵、左樣なら旦那、せちに逢はう。ハ、、、。

ト合ひ方になり、奥へ入る。五平太、產籠の形を見て

五平　アイヤ、十兵衞どの、この籠は何でござるな。

十兵　ヘイ、これは女中の產所へ置きまする籠でござりまする。

五平　ハア、この中へ入つて產みまするかな。

十兵　左樣さうにござりまする。

トこの時おらい、茶臺に茶碗を載せ、持つて出て

らい　ハイ、お煮花を入れました。お一つお上がりなされませ。

五平　これは忝ない。構はつしやるな〳〵。

ト茶碗を取る。

十兵　モシ、五平太さま、承はりますれば、紛失の色紙が神原屋とやら申しまする質屋にござりまするとの風說。いよ〳〵これに極まらば、マア、何奴が致した儀でござりませうな。

五平　さればでござる。主人の寶を盜みまして、質物に入れるなぞとは言語道斷、手前屋敷では左樣な事を致す奴は、町人になつた左七か、お暇の出た綱五郎か、いづれ此奴らは縛り首がものはござるて。

ト產籠に反故と心得、五平太が手蹟の色紙の證文貼つてあるを見て

ヤ、この籠に、こりやマアどうして。

ト驚ろく。

十兵　五平太さま、この籠がどう仕りました。

五平　サア、この籠が何とやら

ト證文を讀み見る事あつて

どういふ事で身が紙入れの

らい　エ、、なんでござりまするえ。

五平　イヤ〳〵、ナニ十兵衞どの、貴公、いよ〳〵眼病かな。

十兵　左樣でござりまする。洗ひ藥も今日きり、もう晩程

からは藥を止めまする。ア、、眼が我が物のやうになりませうて。

五平　ア、〳〵、それは困つた儀でござるの。

十兵　モシ、お聞きなされませ。私しが眼病で居りまするに、妻めが無筆。

らい　お恥かしいが、わたしが一向讀書が出來ませぬゆゑ、一人不自由にござりまする。

五平　ア、、お內儀は無筆でござるか。

十兵　左樣でござりまする。

五平　それは重疊、御亭主が眼病に、お內儀が無筆。誠にこれは、似た者は夫婦とやらでござるの。ハ、、ハ、、。

十兵　何を仰せられまする。

五平　ア、イヤ〳〵。十兵衞どの、身共この產籠を借用いたしたう存ずるが、出來ませうかな。

十兵　それは早、お易い御用でござりまするが、女房、伊勢屋から借りに來たではないか。

らい　アイ、それゆゑ貼つてもらうて置いたわいな。

五平　イヤ〳〵、御亭主、先約がござらうとも、是非とも借りねばなりませぬぞ。

十兵　イヤモウ、お貸し申すまいではござりませぬが、私しが小伜めを、去年七夜のうちに殺しましたゆゑ、あまり緣起ようない產籠でござりまするから。

五平　ア、イヤ〳〵、それはあやかりたいの。拙者子供にきつい嫌ひで、その上妻めが、宿へ歸りが遲いと、殊の外むづかしう申して、煩さい奴でござるから、今度の臨月がよい幸ひでござる、拙めも產みまする子供が、一度にあやかつて死にまするやうに、願うてめでたう借用仕るて。

十兵　イヤモウ、その思し召しならば、隨分お持ちなされませ。

五平　お借り申さう〳〵。然らばこれより直ぐに持參仕るでござらう。これはお暇申さう。

十兵　お歸りなされまするか。

五平　急いで歸らねばなりませぬ。

ト產籠を抱へたまゝ門口を出ようとして、出られぬ思ひ入れにて、手前の姿を見て

イヤ〳〵、十兵衞どの、どうか晝中に、武士が斯樣な品を持參しては、道の程も如何でござる。こりや斯樣仕らう、只今家來を寄越しまする間、キッと渡して下されい。

十兵　左樣なされませ。

らい　御家來へキツとお屆け申しませう。
五平　然らば直ぐに遣はしまするぞ。日當りのよい方を向けて置きませう。
ト證文の方を向うへ押しつけ、急がしさうに門口へ來る。
十兵　もうお歸りなされますか。
五平　直ぐに取りに寄越しまするぞ。
ト合ひ方になり、一散に向うへ入る。
らい　何ぢややら、ソワ〳〵してお歸りなされましたわいな。
十兵　イヤモウ、氣の知れぬお人ではあるぞ。
ト杢助出て來り、産籠を見て
杢助　これはしたり、なぜ日蔭へやらつしやりました。まだ碌々に干もせぬものを。
トよき所へ取直す。
十兵　アイヤ〳〵、その籠は、今お侍ひ樣にお貸し申したて。
杢助　エヽ、お屋敷へ行きまするかえ。お手前遣ひだと思つて、反故で貼りましたが、お屋敷樣へあげるに、反故貼りぢやア惡くはないかの。

十兵　アヽ、反故で貼つてあるか。それはマアどうしたものぢや。産籠は血の穢れもあるに、如何に物を書かぬというて、反故で貼るといふ事があるものか。アヽ、そりや貼り直してやるがよいぞ。
らい　イヽエイナ、僅か鼠が喰ひ裂いた所ばかりでござんす。ちよつと白い紙で、貼り直してあげませうか。
十兵　さうせいでわいの。杢助どの、手傳うてやつて下され。
杢助　ようござります。わしが貼りませう。モシ、おかみさん、糊を付けなさい。
らい　アイ〳〵、爰に白い紙がござんした。
ト半紙の紙を出す。
十兵　ドレ〳〵、わしが糊を付けてやらう。
杢助　そんならわしはめくりませう。
十兵　ハテ、二度手間をさせる程に。
ト通り神樂、鳥追ひの合ひ方になり、十兵衞、半紙へ糊をつける。杢助、そろ〳〵反故をめくる。此うち捨ぜりふ、反故の中に破るゝ紙あり。
杢助　アヽ、こいつは破れた。
らい　よいわいな、引めくりなさんせ。

杢助　アイ、損ねぬやうにしやせうよ。
らい　ア、、それ〱、破りなさんせ。
ト小さき反故はらぎれる。おらい丸めて、柱へかけ有る紙屑籠へ入れる。杢助證文をめくり
杢助　おかみさん、この反故は何處ぞへ貼りなさい。
らい　アイ〱、幸ひ櫛疊へ貼りかけうわいな。
杢助　オツと合點だ。
ト おらいが櫛疊へ貼りかけ置く。
十兵　サア〱、外の事は措いて、籠を先へ貼りませうぞ。
ト火鉢へ五郎八茶碗をかけ、紅絹の裂れで目を洗ひながら指圖する。杢助、捨ぜりふにて籠を貼りしまひ
杢助　成る程、白い紙で貼ると、又よく見えるわえ。
ト矢張り通り神樂にて、向うより角内駈けて來り、門口より
角内　頼みませう〱。
杢助　ハイ〱、どれからござりました。
角内　イヤ、五平太方から參つた。蒜籠とやらを急に遣はされい。只今入用でござるとの事。早うお渡しなされませ〱。
十兵　これは御苦勞、直ぐにお渡し申すがよい。

杢助　アイ〱。折助さん、お持ちなされませ。
ト蒜籠を門口へ出す。
角内　エ、、これでござりまするか、ハテサテ、持ち悩さうなものでござりまする。これは籠でした竈かな。珍らしい道具だ。
杢助　これは御苦勞。
角内　お暇申します。
ト通り神樂になり、引擔いで向うへ行く。向うより五平太、息せきと出て來り、花道にて行き合ひ
五平　コレ〱角内、何を致して居る。
角内　イエ、何も致しませぬ。直ぐに持つて參りました。
五平　エ、、埒の明かぬ、して、蒜籠はそれか。
角内　左樣でござります。
トよく〱見て
五平　イヤ〱〱、これではない。違うた〱。
角内　でも、これを渡しました。
五平　默り居らう。肝心の反故が貼つてない。
角内　何か存じませぬが、これを渡しました。
五平　エ、、たわけ面め。これではないわえ。サア〱、うせう〱。

ト通り神樂にて、ズッと內へ入る。

らい　これは五平太さま、只今御家來衆が

五平　サア／＼、その儀で參つた。あの籠は違ひましたな。

らい　イエ、違ひませうやうは。

五平　イエ／＼、違ひました。身共が好みは反故貼りの䕪籠。こりやコレ殘らず白紙を以て

十兵　エヽ、その事でござりまするが、お聞きなされませ。䕪籠のこそくりを、反故で致したさうでござりまする。あまり辨まへのない事と存じまして、只今白紙で貼り直し置きました。

五平　ヤ。

ト恟りして

コレ／＼、十兵衞どの／＼、してその反故は、どう致されましたな。

らい　エヽ、その反故でござりまするか。皆一つに致しまして、あの紙屑籠へ捨てましてござりまする。

五平　ナニ、あの反故は紙屑籠へ。

らい　左樣でござりまする。

ト五平太、紙屑籠をキッと見て

五平　シタリ、ハテサテ、結構な紙屑籠でござる。アヽ、見事な古びの鹽梅、誠に天晴れのお道具でござるわい。

らい　これはしたり、龜井町で十八文で求めました。

五平　ハテサテ、それは下直な儀でござるな。なんと御亭主、物は相談でござるが、あの紙屑籠を中の紙とも、身共にお讓りなされぬかな。

ト十兵衞、思ひ入れあつて

十兵　エヽ、左樣ならこの䕪籠は、御入用でござりませぬかな。

五平　左樣でござる。折角所望仕つたが、䕪籠はお返し申して、その代りに紙屑籠を頂戴したいな。

十兵　それはハヤお易い事でござりまする。勝手の隅の、薄汚ない紙屑籠がお好みとは、ア、味な物好きだ。

ト思ひ入れ。

あの屑籠は、親仁が代から持ち傳へ、云はゞ大事の

五平　サヽ、左樣見請けた。親代々の道具ならコレ

ト金子三兩出し

些少にはござらうが、晩方までもお絲を貴公に預け置く、この程よりのお世話のお禮、お內儀へ金子三兩、請けて下されい。

らい　モシ、こちの人、五平太さまがこの金子を

十兵　お氣の毒には存ずれど、折角あなたのお心ざし。
らい　そんならお貰ひ申しまして。
杢助　蓮臺代りの紙屑籠
　ト取つて渡し
　これでござりまするかな。
五平　近頃以て忝ない。コリヤ、角内、大切な籠、持參いたせ。
角内　ヘイ。
　ト紙屑籠を持ち、五平太先へ門口へ出る。
十兵　五平太さま、もうお歸りでござりまするか。
五平　暮れ方迎ひを遣はす間、お絲をその節渡しておくりやれ。
らい　左樣なら五平太さま
五平　十兵衞、眼病大事に。
十兵　ようお出でなされました。
　ト唄になり、通り神樂にて五平太先に立ち、籠の中の紙屑をひろげては捨て、改めては捨て、側より角内、紙屑籠を差出しながら尾いて行く。門口の犬、紙屑拾ひと思ひ、吠えかゝるを、角内、竹光を拔いて、シイシイと追ふ。岩松、出かゝり居たりしが、これを見て

岩松　暖簾掛けの竹を持つて
　オヽしき／＼。
　トけしかける。五平太は側目もふらず、紙屑ばかりひろげては捨て／＼、この人數向うへ入る。十兵衞、杢助殘る。丁稚奧へ入る。
杢助　成る程、紙屑籠が二兩になるとは、お江戸はとんだ物が値がしますね。
十兵　茶人の癖で、いろ／＼な物好きはあるものながら、あの五平太さまは、眞逆さういふお人でもなし、殊にあんな紙屑籠。
　ト考へる。
らい　エヽ、何の役にも立たぬ事を考へなさんすは、氣を遣うて、目の毒ぢやわいな。
十兵　イカサマ、云やればそんなもの。ドレ、ちと奧で目を休めうか。
らい　お前寢轉びなさるなら、風引かぬやうに搔卷でも……ほんに中じきりの障子へ、猫めが穴を明け居つた。大抵モウ寒い風が……杢助どの、お前、繼次手に、ちよつと塞いで下さんせぬか。
杢助　アイ／＼、その貼り次手に小僧どのゝ頭もはつてや

りませう。
らい　何を云はしやんすやら。コレ、その産籠も、奥へやつて置いて下さんせ。
十兵　オヽ寒……寒だけ立たずば、暖かになるまいぞ。
ト唄になり、十兵衛先に杢助、産所籠を持つて、この中へ糊盆刷毛を入れ、引ッ擔いで奥へ入る。おらい、そこら片付けてゐる。通り神樂になり、向うより儀助、羽織ばつち、尻端折りの形にて、額へ膏薬を貼り、足早に出て來る。儀助を見え隠れに左七、頬被りをして出て來り、儀助は直ぐに舞臺へ來て
儀助　さて、ようお日和が續きますな。
ト云ひながら内へ入る。
らい　オヽ、儀助どんでござんしたか。今の先、山住さまより
儀助　アイサ、その事で參りました。お絲さん、奥にでござりますか。
ト煙草盆を控へる。此うち左七舞臺へ來り、門口より内を窺ふ。
らい　アイ・今日は今朝から癪が痛いと云うて……お絲さん〳〵、儀助どのが見えたぞえ。

いと　なんのマア、見えいでもよい事を
ト鳥追ひ唄の合ひ方になり、奥よりお絲出て來り
オヽ、儀助どん、毎日〳〵こなさんの役も、大儀な事でござんすな。
儀助　サア、あの山住さまのお頼みで、左七に逢はせぬ日代の役。意地の悪いと思ひなさらうが、せう事がござりやせん。時にお絲さん、とんだ事があるものさね。ソレ、いつぞや八幡で、お前が可哀さうだと、金を一兩遣りなすつた、七つ八つな乞食の娘、あの晩に寺町で、縊め殺されて死にやしたとサ。
いと　エヽ……そりやアノ、ほんの事かいの〳〵。
儀助　サア、そこで死骸は小屋へ引取つたといふ事。菩提の爲に守り袋を、回向院の地藏様へ納めてやつたと、あの折の女太夫が、守を見せてわしへの話し。お前が可愛がらしつた事だによつて、二朱も貰うて付けて遣らうと守は預かつて、コレ、持つて來たが、定めてあの壹兩の金に、目をかけての事でごんせう。酷いこつちやアござりやせんか。
ト　お君が守り袋を出して見せる。
いと　ほんにこりや、あの子が提げてゐた守り袋。そんな

らその時わしが遣つた金ゆゑに……斯ういふ事を知つたなら、現在姪の事おやもの……イエサ、現在目の前に見た子の事、可哀さうにと思ふもの、知つてか知らぬか兄さんが……イヤ、親が聞いたら悲しからう。儀助どん、この守はわしが納めて、お念佛でも唱へてもらうてやらう程に、こりや此方へ置くぞえ。

ト此せりふのうち、氣兼ねして憂ひの思ひ入れ。

儀助　成る程、お前は奇特者だぞ。

ト此うち門口にて左七、様子を聞き、この時明けてズツと内へ入り

左七　御免なさい。

儀助　ヤア、こなたは左七どん。

トこれにておらい、ちやつと有り合ふ衝立にてお絲を隠す。

左七　アコレ、おらいさん、何もさう隠す話しはない。道理でこの頃うち尋ねて來ても、逢はせないと思つたて。こりやアなんだの、あの侍ひめに金轡でも箝められて、慾の深い女性根、こりや向うへ廻るのだな。よしサ、とお萬人並んでも、左七さんが色事を遂げはしたあのお絲、彼奴も又、隠されて雷光谷を通りはしまいし、默つて居る氣が知れねえ。ヤイお絲

ト衝立の側へ行かうとするを、儀助引戻して

儀助　待ちやれ。こなたには用があるワ。

左七　ナニ、おれに用がある。

儀助　オヽ、この中うちから尋ねて居た。よう先度はわしが額を

左七　打割つたといふ事か。癪に障つたせうがにやア、未練みしやくがあるものかえ。それがどうした。

儀助　どうしたも凄まじい。人の頭へ瑕を付けて、それから今日まで挨拶なし。外科から醫者から買ひ藥、〆めて見たなら二兩二三分、サア、たつた今寄越してくりやれ。

左七　この業晒め、とんだ僞託を上げやアがるな。コレ、人の頭をぶち毀して、左文出した話しはないわえ、そこを退きやアがれ。

ト引退けるをまた止めて

儀助　イヤ、さうは云はせない。話しがならざア見ねえ、あり、預けてなりと出入りをするが

左七　そりやアどうでも勝手にしろえ。マアそれよりは

ト振もぎつて行くを、おらい隔てゝ

らい　待ちなさんせ、左七さん。なんぼ心安い此方の内で

も、さうヅカ〳〵と、ほんにマア不躾な。成る程、お絲さんは此方ぢやけれど、五平太さまから預かり物、お前との譯も知りながら、逢はしてはこちの人が、五平太さまへ立ちません。それぢやに依つて逢はさぬ程に、サア、歸らしやんせ〳〵。

左七　インニヤ、歸るまい。斯うなつちやア敵の內でも、親の內でも、そんな立てわけがあるものか。逢はせまいといふ程、逢はにやアならない。エヽ、そこを退かつせえな。

ト引退ける。儀助捨ぜりふにて止める。三人この立廻りに衝立を打かへす。お絲、煙草をのんで居る。

お絲、わりやアなぜ默つて居る。サア來や。

トお絲を連れて行かうとする。

いと　何處へ行くのぢやえ。

左七　知れた事よ。これからお主が願ひの通り、連れて行つて女房にして、何奴等にも鼻を明かせてやらア。サア來やな。

ト手を取つて引立てる。お絲、その手を振り切つて

いと　おかたじけ。

左七　エ。

いと　左七さん、わたしやもう藝者ではないぞえ。五平太さんのお庇で座敷を退いて、奥さんになる身の上でござんす。それにマア小石川三界、そしてほんの內でもない所へ、ほんに馬鹿らしい。誰れが一緒に行くものでござんす。

左七　べら坊め、いつもとは違ふワ。人を焦らすも目かりを利かせろえ。コレ、何奴も此奴も向う面だ。こんな小胸の悪い所に居る話しがあるものか。サア、じやらけずと、立て〳〵。

いと　否でござんす。

ト合ひ方。

左七さん、ついした事の張合ひで、お前と色になつたけれど、もうさつぱりと切つた程に、さう思うて下さんせ。

左七　エ、思ひ附きでもない。冗談云はずと、キリ〳〵しろえ。

儀助　お絲さん、そんならお前眞實に、五平太さまの奥様に、なりなさる氣になんなすつたか。

いと　儀助どんの知れた事ばつかり。百五十兩といふ金出して、引かせて下さんした五平太さん、男は兎もあれ、その心意氣に惚れたゆゑ

らい　此方に斯うして居なんしても、早う側へ行きたいの、イヤどうしての、斯うしてのと、餘りの事で、聞き憎いやうな事でござんすわいな。

儀助　これがほんならお前の仕合せ。門端へも寄せない五平太さまを、さうなさるといふは、成る程女は金と辛抱だてな。

ト思ひ入れあつて

左七　ムウ、先刻から云つた事、酒の癖だと思つて居たが、お絲、お主やアほんに玉がへりか。

ト お絲なんのといふ思ひ入れ。

らい　アモシ……そこが浮世のみんな金づく。めん〳〵の身を考へたら、さういふ氣にもならうかいな。

左七　そんなら一旦五平太に、立て金させる狂言だと、今までのろく思つて居たが、お絲、眞實てめえ、さうした氣に

いと　ほんにお前もきつい自惚れ。成る程初手は五平太さんが、否で〳〵ならなんだれど、よく〳〵わたしを思うてなりやこそ、今時百五十兩といふ物出して、座敷を引かせて下さんした。その眞實がいとしうなつて

左七　おれが事は無茶にする氣か。

いと　無茶にする氣になつたりやこそ、この頃諦めてござんしても、隠れて逢はぬおやござんせんか。その後先の見分けもなう、又も諦れ操して、ほんに阿房らしいと思ふ程、一倍愛想が……マア、よう積つても見なさんせ。五平太さんの方へ行きや、御苦勞なしの御新造様。お前の女房になる時は、前垂れ掛の裏店住み、潮來節ではなけれども、手鍋提げよと口では云へど、實は乗りたや玉の輿、マア乗換へさうなものかいなア。

ト左七、ムッとして

左七　默りやアがれ、お多福め。うなアその筈ぢやアあるまいがな。しがない事も、ひつてんも、合點づくで云ひ交し、パッと浮名も辰巳ぢやア、人に知られた仲ぢやアないかえ。今更性根が腐つたと、どの面で吐かしやアがる。コレ、色にも相應義理があるぞよ。

いと　なんの、義理に搦まれ紙子着て、隅田川へはまるやうな、阿房が當世あらうかいな。

左七　こいつはもう打ッちやつちやア

ト盤板を持つて立ちかゝる。おらい、儀助とめる。

儀助　コレ、こなたは滅法界な。

らい　マア、それでどうさんすぞ、

左七　どうするものか。叩ッ殺しておれも死なア。退きやアがれ。
ト両人を突き退け、又かゝるを、儀助とめる。おらい、お絲を圍ふ。
儀助　コレ、死ぬなら額の算用しやれ。
左七　やかましいわえ……エヽ、あまめ。
ト儀助を引退け、お絲へ立ちかゝる。
らい　お絲さん、危ないわいな〳〵。
儀助　此方の方の付かないうち、さうはならない〳〵。
ト取りつくを投げ退ける。この中へ奥より十兵衛出て來る。
左七　サア、あまめ、そこへ出ろ〳〵。
ト十兵衛、左七を留めて
十兵　待たつせえ、左七さん。
左七　エヽ、退きやアがれ〳〵。
十兵　コレサ、わしだよ、十兵衛だよ。
トきつと云ふ。
左七　十兵衛どの、退かつしやい〳〵。
十兵　イヽエ、なりませぬ、わしが內でどうしたものだ。……、靜かにさつしやい〳〵。
トなだめる。
左七　十兵衛どの、マア聞いて下さいまし。
十兵　ハテ、聞かないでも知つて居ます。無法も程があるものだ。そしてマア、いつの事か知りませぬが、あの男の頭へ疵を付けて、それなりけりにして置いちやア、向うで腹を立つのも尤も。料簡付けてやらつしやりませ。
左七　十兵衛どの、料簡を付けてやれたア
十兵　おらい、先刻の金を持つて來い。
らい　アイ〳〵。
ト五平太より取りし金を持つて來て、十兵衛へ渡す。
十兵　サア、これを遣らつしやりませ。
ト左七へ遣る。
左七　ナニ、彼奴にこの金
十兵　ハテ、さうぢやアござりませぬ。もし、でんどへでも出る時にやア、お前の體にそれほどな……サア、早く遣つてしまはつしやりませ。
左七　ヤイ儀助、ソレ、療治代三兩あるぞ。受取りやアがれ。
ト儀助へ投げつける。
儀助　恩にもひらにもならない金、取らないでどうするも

のか。

ト金を取る。

左七　サア、これからあの畜生めを

ト立ちかゝる。

十兵　コレサ、こなさん。先刻からわしが出たなら、氣の毒だらうと、寢た振りをして居ましたが、尤もお絲どのと、固い約束の事もありませうが、そこをあの子も振り切つて、五平太さまの所へ行くにやア、譯があらうと推量して……サア、譯はなけれど抱への身、親方任せにならにやアならない。一つは身分の片付き時、慾もちつとは人間だもの、知らにやア立たぬ今の世の中。突出されたが口惜しいとて、切ッつはッつは我が恥を、大きく觸れるやうなもの、さつぱり切れておとなしく、ナ……ソレ、縁さへありやア又、どうか、マア、そんな事は儘にして、退いてやるのはお前の爲、イヤサ、あの子の爲。左七さん、男らしくさつしやりませ。

左七　イヽエ、男らしくしますまい。世話にもなるこなさんの云ふ事だが、此まゝぢやア顏がよごれる。

十兵　サア、その顏も又立つ時が

ト此うちお絲、煙草をのんで居て

いと　アヽ、モシ、十兵衛さん、もう構はずと捨てゝ置かしやんせ。彼方でなんと云はうとも、わたしさへ五平太さまの方へ行きや、相手のない一人角力、酒飲んで見て居るわいな。儀助どん、さうぢやないかえ。

儀助　お前、いつの間に好い料簡になんなすつた。

ト思ひ入れ。

いと　ハサ、ぞつこん惚れた……と云ふではなし、藝者の色と髷結ひは、かけ流しがよいわいな。

左七　さう吐かしやアこの左七を、うぬはてんから遊ぶ氣だな。

いと　のろいお前と思つたゆゑサ。

左七　うぬ、その口を。

ト飛びかゝつてお絲を引摺り倒す。十兵衛さゝへて

十兵　コレサ、どうしたものだ。女子供を捕まへて、怪我でもさせりやなりませぬよ。さりとはほんに料簡の惡い。

らい　マア、爰を放しなさんせ。

左七　否だ〳〵。

ト云ふを十兵衛、おらい、やう〳〵に引放す。儀助、お絲を介抱する。

十兵　コレ、今夜この子は五平太さまへ行く體だ、明日來て、わしに云ひ分云はつしやりませ。わしもその時とつくりと……サア、今日の騒ぎの禮も云ひます。

らい　サア〳〵、左七さん、歸つて下さんせ〳〵。

左七　歸らないでどうするものか。もう頼んでも居やアしない。ヤイお絲、いつか一度は綱五郎どのに逢ひもしよう。その時うぬはあの人が、親仁様の刀の前で、行く末永く夫婦になれと云はれた事を、氣の毒にやア思やアがらぬか。それぱつかりか、この左七はな。

ト口惜しき思ひ入れ。

いと　サア、それも縁づく。夢と思へば濟むわいなア。

左七　エヽ、うぬはなア〳〵。

ト慄へる。お絲、煙草をのみながら

いと　儀助どん、晩から洲崎の寮へ行つて、五平太さんとしつぽりと、積る話しをしようと思へば、わしや今から樂しみぢやわいな。

左七　エヽ、忌々しい、その顋たを

ト立ちかゝるを、皆々支へる。儀助、後より抱へる。此はずみに煙草盆を蹴返し、左七儀助ともに仰向けに倒れ、左七、起きながら手に當る茶碗を持つて

はツつけあまめ。

トお絲へ打ちつける。皆々思ひ入れ。

いと　氣が狂うたさうな。

ト左七、儀助を取つて投げ退け

左七　覺えてうしやアがれ。

ト曲撥になり、ツイと向うへ走り入る。お絲思ひ入れ。

儀助起き上がり

儀助　とんだ目に遭はしやがつた。

らい　お絲さん、お前これで、さつぱりとしなんしたであらうな。

十兵　成る程、あのお人さんも、ちつと思案をして見たら……正月早々縁起でもない。儀助どん、どこも痛めはさつしやれぬか。

儀助　イエ、なにサ、腰の骨を打つたばかりサ。時にお絲さん、よくお前すつぱりと切れなすつた。有やうはこの頃から、口ぢやア退くと云ひなすつても、どうしてと思つて居たが、今ので感心、この事を五平太さまに話したら、尻尾を振つて嬉しがらつしやるでござりませう。

いと　なんの、嬉しがつてもらふとて切らうぞいな。この身の爲を思うたりや、ちつとも早う譯云うて、五平太さ

んにも氣おきなう、お世話にならうと、それでさつぱり。

ト癪のさし込む思ひ入れ。

らい　お絲さん、また癪かいな。

十兵　コレ、氣の弱い……イヤ、氣の勇む折に、癪の發るものだ。それに、熱燗にして二三杯、そんな時には飲むがよい。

らい　それ〳〵、そんな事がようございませう。儀助さん、お前も一つ

儀助　イカサマ、迎ひの駕籠の見えるまで、御相伴いたしませう。

十兵　おらい、昆布鱈でも拵らへやれ。

らい　アイ〳〵。サア、お絲さん

トお絲、矢張り思ひ入れ。おらい見かね

エ、、これはしたり……まだ胡椒があつたかしらん。

ト鳥追ひ唄、通り神樂になり、おらい、お絲をせり立て儀助附いて奥へ入る。十兵衛、煙草のみながら思案して居る。ト直ぐに向うより佐五兵衛、羽織ばつち尻端折りにて、急ぎ足に出て來り、直ぐに舞臺へ來て

佐五　十兵衛さま、お宿にござりますか。

十兵　その聲は佐五兵衛どの、さぞお娘御の御病死で、何やかやとこなさんのお骨折り。内の者どもゝ云ひ暮らして居りまするて。

佐五　何が〳〵。それに付いて、大變な事がござりまするて。

十兵　ヤ、、何が〳〵。

佐五　イエサ、マア、葬ひめでたくしまつて、娘御を穴へも葬むり、シャン〳〵と手を打つて歸りましたその夜のうち、火車が見入つて浚つたか、但しあの夜も江戸のやうに、大雪でも節々降つて、往來でも止つたゆゑ、蘇生つてどこぞへか。桶を破つて死骸は無たし。十兵衛さん、もしお内へは見えませぬかな。

十兵　それは先づ怪しからぬ事。知つての通り、わしも今内證で、絲屋へ出入りはすれど、御一家方の前もあれば御病死の知らせもないゆゑ、わざと葬送にも行きませはが、ハテ、とんだ事もあるものな。

ト思ひ入れ。また鳥追ひ唄、通り神樂になり、向うより東林出て來り、直ぐに舞臺へ來て

東林　百川東林、お見舞ひ申す。

トずつと内へ入る。

十兵　これは〳〵、東林さま、ようお出でなされました。

東林　何かお絲どのが御不快ゆゑ、見舞ひまするやうにと山住氏の先刻仰せでござつたが、大方春氣で逆上の氣味でござらうてや。

ト佐五兵衛を見附け

ヤア、絲屋の番衆、この間の後金はどうして下さる。

佐五　東林さん、お前もよい氣な事を云ひなさい。もうきなかも遣られるものかな。

東林　なぜ〳〵。公、そりやア解らんぜえ。ソレ、三十兩と價を極めて、手附けに五ヲヤ受納して、ソレ、後金が天神様の御縁日、請合ひ通りコロリと、ソレ、お娘はいきみんたん。

佐五　シツ〳〵。

トそれを云うては惡いと思ひ入れ。東林これに氣も付かず

東林　あれは愚老が家傳の一藥、外へはなか〳〵施さねど、公が達てのお頼みゆゑ、その金に子の日と一炷きの、薰りほのめく奥座敷。

ト河東節を一口語り

コレ、ちつとつら山の武者所、あやま針の料簡がならないといふ奴だの。

佐五　エ、よく洒落る醫者ッぽうだぞ。コレ、あの藥でやらかす事は巧くやつても、肝心の治す藥に、どこの國に胡椒の粉をあてがつて、水ツ涕やら、くさめやら、その上とんでもない死人を掘出し、エ、イ、その臭ひとした事が、思ひ出しても、アレ〳〵、エイ。

十兵　そりやマア、なんの話しだえ。

佐五　エ。

ト兩人心づき、ギーツとする。

十兵　本家の娘御お房さまが、急死の樣子。今の話し。こりや二人を叩いたら

ト佐五兵衛東林、顔見合せ思ひ入れ。

ハテ、娘御にしろ、死骸にしろ、御新造樣が、さぞ大抵な事ではあるまい。

ト思ひ入れ。時の鐘、通り神樂になり、向うより駕籠舁き、四つ手駕籠を擔ぎ出て來る。左七、頰かむりをして、この後を尾け出て來る。駕籠舁き直ぐに舞臺へ來て

駕甲　安野屋十兵衛さまは、あなたでござりまするか。

駕乙　洲崎へ參るお迎ひ駕籠を持つて參りました。

十兵　オイ〳〵、それはお世話でござりました。……お絲

さん〳〵、アレ、迎ひの駕籠が來たによ。
ト奥にて
いと　アイ〳〵。
トこれを聞き、左七、下の方へ小隱れをする。ト鳥追ひ唄の合ひ方になり、奥よりお絲、儀助、おらい、行燈を持ち、出て來り
そんならおらいさん、わたしや、もう參りますぞえ。
らい　なんぼ知つた同士でも、今夜は何かをかしからう。わたしや明日、お喜びに行かうわいな。
佐五　誰れだと思やアお絲さん
東林　ハア、そんならいよ〳〵洲崎の寮へ
儀助　アイサ、今夜から、晴れて五平太さまのおかもじ樣サ。東林さん、お前もこれから一緒に行つて、飲みかけ山からこの方、大洒落はどうでござります。
東林　そいつは有り難い。さうめでたく値がなつたら、行かずんばあるべからず。併し今夜は
佐五　晝さへ病家はないもしないで
東林　なにサ、寒からうといふ事よ。
いと　十兵衞さん、段々お前の厚いお世話、どうぞ主へよいやうに、ナ……五平太さんへよいやうに。

十兵　そりやア氣遣ひしないがよい。明日にも見えりやアとつくりと……サア、わしが五平太さまには、よいやうにお賴み申して、お前の心も話すから、味な事を苦勞にして、煩らはぬやうにするがよいによ。
いと　わたしやモウ、そればつかりが
儀助　ハテ、とんだ事を云ひなさい。五平太さんはお前任せ。
東林　それ〳〵、さいこ湯でもゆかぬむづかしい性分だから、美人の匕には御意次第、氣兼ねはちつともないとこ唐人は新らしいか。
佐五　面白くもない。お絲さん、この頃うちに御祝儀ながら、押しかけて、久し振りでお前の名護屋帶でもねだりやせう。
らい　サア〳〵、ちやつと乘らしやんせいな。
ト　お絲、駕籠へ乘る。
東林　ドレ、そんならお供仕らうか。
ト尻を端折り
運ぶ足はちつと
佐五　又つら山の武者所か。
東林　イヤ、難遊羊羹はどうでごんす。

儀助　何を云ひなさるよ……これは大きにおやかましう。

十兵　儀助どん、御苦勞。お絲さん、此方の樣子も……二三日中には

ト思ひ入れ、

いと　どうぞこの譯、おらいさん

トおらい、うなづき

らい　駕籠衆、御苦勞でござんす。

いと　ア、、自烈たい。

ト泣くを見せじと顔へ袖を當て、片手にて垂れを下ろす。

儀助　サア、やつて下さい。

ト矢張り時の鐘、だらにて、儀助先に駕籠の提灯を持ち、四つ手駕籠跡より、東林、河東節を語りながら付いて向うへ入る。おらい跡見送り、門口を締める。ト下の方より左七出て、懷中より新らしき出刃庖丁を出して、手拭に卷き、腰へ差し、思ひ入れあつて跣足になり、この跡を追ひて向うへ走り入る。

佐五　よくそれでもあの藝者め、山住さまへは行つた事だぞ。

十兵　サア、色といふもほんの浮氣で、よく噛みしめて見る時は、讀みと唄であらうぞい。

らい　オ、、ほんに、何は無うても櫛道具がなくば、いつち不自由であらうに、杢助どんでも頼んで、わしがのを持たせてやらう……杢助どん〳〵、ちよつと來て下さんせ。

杢助　オイ〳〵。

ト云ひながら出て

ヤレ〳〵、腹がよくなつて、ぐつすりとやらかしたら、いつの間にか日が暮れたな……ハイ、お暇申します。

ト直ぐに表へ出ようとする。

らい　ア、、コレイノ、頼む事があるから呼んだのぢやわいの。コレ、こなさん、大儀ながら、今そこへ行た駕籠に追ッ付いてな。

杢助　オッと合點。

ト尻を端折りながら、また表へ駈け出さうとする。

らい　エ、、これはしたり、まだ用も聞かないでからにの。

杢助　わしやア晝間の紙屑籠に、また產籠でも賣るのかと思つて

佐五　十兵衞さん、餘ッほどな代物だな。

十兵　その筈サ、ありやアおしなよ。



初演當時の錦繪
尾上松助のお佐祭七

ト此うちおらい、以前の櫛疊を出し

らい　これを屆けてもらふのぢやわいの。待たしやんせ待たしやんせ。ちつと中を片附けて

ト行燈の側へ持つて來り、疊の內より落毛、手拭紙などを取出し

こりや先刻こなさんが、產所籠を剝がした反故であつた。

トこれも側へ取出す。佐五兵衞、何氣なうこれを取上げ

佐五　なんだ「入れ置き申す一札の事。一、此方所持の小倉の色紙、金貳百兩の質物に入れ置き申すところ實正なり、右之儀につき、外より異論申す者これなく候ふ、神原屋左五郎どの、山住五平太」。

十兵　世話でござつた。

ト書付けを取る。

らい　こちの人。

十兵　嬉しや色紙の在所が知れた。

佐五　ヤ。

ト驚ろき、初めて心づき

ほんに色紙のその書付け。マ、どうして爰に

ト取りにかゝるな、十兵衞、持つたる煙管にて、頭をぴしやつと、佐五兵衞思ひ入れ。

十兵　誠に燈臺下暗しと、寄りも寄つたり無筆と眼病、現在內にある證據を、それとも知らずお絲どの。

らい　道理であの五平太どのが、產所籠といひ、紙屑籠

杢助　そんならありやア買かぶりか。晝がんどうが拔いたる紙入れ、內にあつたるその反故が、十兵衞さまの尋ねさつしやる、あれが證據になりますか。

十兵　主が拾うた紙入れより、此方で尋ぬる色紙の手がゝり。

佐五　それをウカ〳〵讀み散らして、五平太さまの身の科を……マア、その書付け。

トかゝるな、其まゝグツと引きつけ

十兵　うぬも怪しい醫者との五音。絲屋の急死も白狀ひろげ。

佐五　南無三、それを

ト振り放し、逃げるはずみに、わざと行燈を打返す。皆々暗き思ひ入れにて、十兵衞、探りながら二重舞臺へ上がる。おらい、行燈を持ち。これも探りながら二重舞臺へ上がる。佐五兵衞まごつく。杢助捕へて

杢助　うぬ、番頭め

佐五　ト武者振りつくを刎ね返し

佐五　その間に爰を

ト逃げんとする。後へ岩松出かゝり居て、火鉢の灰を佐五兵衛が顔のあたりへ投げ付ける。これにて佐五兵衛、タヂ〳〵とするを、岩松、足を持つて引かへす。十兵衛、佐五兵衛と思ひ、杢助を引きつける。

杢助　ア、モシ、わしだ〳〵。

十兵　すりや、佐五兵衛は

岩松　爰に居ります。

十兵　女房、灯を

らい　心得ました。

トおらい火を打つ。この人数立廻りよろしく、時の鐘、木の頭にて、東の方より黒幕を引出し、この人数を隠す。

直ぐ上の方へ橋の袂、下の方へ辻行燈をふり出し、日覆より柳の吊り枝、この道具とまる。

ト矢張り時の鐘、だらにて、バタ〳〵烈しく、向うより左七走り来り、直ぐに舞臺へ来り

左七　十二軒から先へ抜けたが、あの提灯が慥かにお縁め……ソレ。

ト橋の袂へ小隠れる。ト佃の騒ぎになり、向うより儀助先に駕籠、東林出て来り

東林　なんと儀ス公、今夜はさぞあの左七めが、寝心が悪からうの。

儀助　そりやア知れた事サ、其心のよいは五平太さま、おいらも覗ていでもお貰ひ申して、粹としやれにやアなりませぬ。

東林　カウ、おれをお伴とする氣はなしか。どうだ〳〵。

ト此やうな事を云ひながら舞臺へ来る。左七出て、いきなり提燈を切つて落す。うろたへ、儀助逃げ出す。これにて駕籠舁き「とんだ奴だ」といふ所へ、出刃庖丁来るゆゑ驚ろき、其まゝ駕籠を捨てゝ逃げて入る。東林、腰の立たぬ思ひ入れにて

東林　人殺し〳〵。

ト慄へながら云ふゆゑ無闇に切る。これにて駕籠の内より

いと　左七さんか

ト出る所を

左七　イケ畜生め。覺悟しやアがつたか。

ト突く。お絲「アッ」と倒れる。東林、矢張り「人殺し〳〵」と云ひながら上の方へゐざり逃げるを、また切り倒す。お絲、起きあがつて

いと　モシ、これを見て

ト懐より書置を出す。

左七　やかましいわえ。

トいろ〳〵酷く切り倒して、上へ乗つかゝる。お絲、下から書置を突きつけ〳〵するゆゑ、左七何をといふ心にて引ツたくる。お絲、よろこび起きて苦しむ思ひ入れ。此うち始終佃ぶし、この時ゴンとまた捨て鐘になり、左七、書置を辻行燈にて讀み

ナニ、書置の事

ト思ひ入れあつて

コレ、お絲

トお絲を引抱へる。お絲ガックリと落入る。

ホイ。

ト思ひ入れよろしく　ひやうし幕の内、捨て鐘にてツナギ。引返し。

幕

大切　小石川の場

役名――半時九郎兵衛。本庄綱五郎。鳶の者、お祭左七。同、風の神喜左衛門。家主、栗島權兵衛。安野屋十兵衛。長屋の者、留六。神原屋左五郎。番頭、佐五兵衛。山住五平太。絲屋娘、お房。九郎兵衛女房、お時。

本舞臺、三間の間、向う赤壁納戸口、上の方反故貼り障子、よき所にしやちの縄どうづきの道具、長鳶。纏といふ字の油障子をたて、留六、勇みの形にて、百萬遍の珠數を繰り、眞中に喜左衛門、伏せ鉦を打つて居る。長屋の者大勢、珠數を繰つてゐる。百萬遍に通り神樂をかぶせ、幕明く。

喜左　願以此功德平等施一切發菩提心往生安樂。

皆々　南無阿彌陀佛々々々々々々

喜左　ア、、こりやア長屋の手合ひも御苦勞でござりやした。ぶツかけで、もう一杯飲まうぢやアねえか。

留六　ナニ、辭儀はしねえわな。蕎麥も酒も、かうてきに

馳走になつたの。時に頭、初々しく何の法事をさつしやるのだえ。

喜左　今夜の百萬遍はの、おらが息子の眞實の母親の、祥月命日の逮夜サ。そこでこなた衆を頼んで、お念佛を上げたのサ。

留六　そいつは奇特でごんした。時にコレ、頭、左七どのはどうしましたえ。

喜左　なんだかあの野郎は、年中氣紛れで、うぬが内へは寄り付かねえのサ。

皆々　ハテ、困つたものだなう。

喜左　時に隣の浪人どのと、後長屋の九郎兵衛どのは内にかの。

留六　アイ、内にだが、あの手合ひは、念佛は嫌ひでごんすよ。

皆々　こりやア頭、馳走になりやした。

喜左　まだ蕎麥も酒もあるよ。

留六　なにサ、十分に食つたの。頭、休まつし。

皆々　サア、行きませう。

ト通り神樂になり、皆々門を出て、下座の口と路地の内へ入る。留六、うろ／＼内を見廻し、路地の蔭へ思ひ入れにて窺ふ。喜左衛門、後を片付け、行燈を出し蕎麥の鉢を見て

喜左　ア、コレ、隣の浪人と半時が内へ、一膳づゝやりたいものだに。

ト思ひ入れ。この時捨て鐘、合ひ方にて、向うより左七、以前の形にて、頰被りにて、ツカ／＼と出て來り、思ひ入れあつて、

左七　せめて後の親の、喜左衛門に逢うたる上で、この書き物を頼んだ跡は

ト門口へ來り、内へスツと入り、しやんと戸をさす。

喜左　オヽ、左七か、歸つたか。何處を歩いて居たな。

左七　アイ、友達と妙義へ參つて、それから二三日するけやした。見れば百萬遍でもあつた樣子。こりやア何ぞ志しでもあつてかえ。

喜左　志しがあつてかえとは、コレ、母親の祥月を忘れたか。お主が親身の母親の、コレ左七、イヤサ、石塚さまの御子息左七さま、こなさん身持ちが

ト思ひ入れあつて

お前が今夜の百萬遍にも、いつもござらにやならぬ御身分。それにマアこなさんは

ト云はうとして

何の役に立たぬ事を。コレ、わしは長屋内へ蕎麥を配つて來るから、せめてちつとのうち、留守を頼みますよ。

ト唄になり、蕎麥の箱を提げて路地口へ入る。左七殘つて

左七　喜左衞門の話しで、思ひ出した母親の、今夜は逮夜。短氣なゆゑに昨夜の仕儀。人を殺したこの左七、可哀やお絲が書置を、届けた上は潔よく、明日はどの道死ぬる命。さすれば母の祥月命日、同じその日に死ぬのは定業、それにつけても不便なは

ト書置を出し

南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト回向の思ひ入れ。唄になり、路地の内より十兵衞、小提灯を提げ、矢張り目拭を持ち出て來り、障子の印を見て

十兵　小石川の裏家住居、路地を入つて角の家。ア、これぢや。

ト門口に來て

頼みませう。喜左衞門どのは留守でござるか。十兵衞でござりまする。

左七　ヤ、十兵衞どのか。

ト當惑のこなしにて、奥へ行かうとする。十兵衞、戸を明け、ズツと入つて

十兵　左七どのか。わしを見て隱れるのか。

ト左七、思ひ入れあつて

左七　なに隱れませうぞ。今こそしがない町抱へ、以前は赤城の御近習役、おれも侍ひ。なんでこなたへ隱れる科はしませぬて。

十兵　イ、ヤ、わしには隱れまいが、もし探されると廻り氣から、世上の人に恐るゝ眼色、眼病上がりの十兵衞が、赤筋はつたこの目にさへ、只事ならぬこなたの素振り。

左七　ヤ。

十兵　サ、尋ねて來たは左七どの、ならう事なら元の侍ひ、せめて兩腰差させたら、この災難も

左七　エ。

十兵　これを見さつしやりませ。

ト色紙の證文を渡す。左七取つて、よく〱見て

左七　ヤ、こりやコレ山住五平太が、色紙を質屋へ預け置く、頼みの一札、その金高も貳百兩。

十兵　質屋の家名は神原屋、左五郎どのとあるからは、こ

れぞ部屋へ入り鑿の、あの左五郎に違ひない。

左七　合點のゆかぬはこの證文、どうしてこなたの

十兵　昨日思はずわしが見世へ、持参らさんあげて來た、その紙入れの中の反故、わしは假染、危くも、その場に居合す五平太どの、詞の轉倒その上に、山伏どのゝこの手蹟、證據にならうとこなたの行くへ、尋ぬる道にて情なや、昨夜洲崎の人殺し。

左七　すりやアノ、お絲が切られた節

十兵　正しく色ゆゑ意趣切りに、違うたるものとお上の御沙汰、云はずとこなたへ疑ひの、かゝりや繋がる左七どの。ア、、こなたは親御に不行跡。

左七　ア、さう思つても持ち前の、短氣は損氣の基とやら、樂者手供に悪口の、腹に据ゑかね二つには、男を騙す畜生め、川上の女へ見せしめに

ト懐の出刃を出し思ひ入れあつて

懐さも探しと手にかけて、跡の祭のこの書置。

ト書置を出す。十兵衛取つて、行燈にかざす。留六、門口より窺ふ。

十兵　さてはこなたの親御様、石塚氏のお咎めを、身に引受けし綱五郎さま、女敵討の相手は勘當、その妹のお絲

ゆゑ、我はれぬ義理と諦めて、死を覚悟しこの書置。

左七　サ、その書置を反故にせず、身寄りの人の手へ渡し、わしあくたばる。

ト出刃にて死なうとする。十兵衛、その手を捉へ、キッと止めて

十兵　コレ、武士の情が見苦しい。この場所でこなたは死ぬか。コレ、女に迷つて大切な、命を捨てゝ親御へ立つか。殊に色欲の手懸りの、この一礼から詮議して

左七　サ、請け戻すにも二百両、金が先立つ

十兵　今のお前の御身分では、それも尤も。本庄さまとも折入つて

左七　すりや綱五郎の隠れ家も

十兵　正しくあなたも心あたり

左七　逢うた上にて詮議

留六　そんなら左七は人殺し。

ト声立つるを、十兵衛引きつけて、上の方へ突きやる。立廻りにて左七、畳な畳上げる。留六、床下へ落ちる。

左七、手早く上へ畳をどやんと置く。

十兵　既に耳、岩が物云ふ

左七　ムウ。

ト出刃を腹へ突立てようとする。十兵衛この手を止めて

十兵　コレ。

ト思ひ入れ、唄になり、この見得よろしく、道具逆に廻る。

本舞臺、三間の間、向う鼠壁、上の方に出入りの戸棚、下の方、臺所道具、一つ土竃、上げ流し手桶、すべて綱五郎一人住みの體。爰に綱五郎、一本差しにて、太平樽より米五合ばかり飯釜へ明けて居る。片脇に古行燈、よき時分より通り神樂、矢張り彈き流しの唄、道具とまる。

綱五　何ぢやゝら、近所に百萬遍があるかと思へば、隣長家では稽古所の長唄、或ひは木遣の稽古のと、さて〳〵町家といふものは、アヽ、物騒がしうて

ト思ひ入れありて表を見やり、門の戸をさし、かき金をかけ

定めし戸棚の内も、アヽ、この寒さでは

ト思ひ入れ。合ひ方になり、窺ひ寄つて、戸棚の戸をソツと明ける。内よりお房、矢張り白無垢の形にて出かゝり

ふさ　綱五郎さん。

綱五　コレ。

ト思ひ入れあつて

遠慮はない、サヽ、爰へ出さつしやりませ。

トお房出て來る。綱五郎、戸棚の内より辻番火鉢を持つて來り、思ひ入れあつて

アヽ、まだ炭團の溫りがござるな。

ふさ　今も近所のお方がござんして、戸棚を明けうかと、大抵心遣ひをした事ぢやござんせぬわいな。

綱五　さうでござらう。わしは又夜に入つたを幸ひに、この間其方に借りた百兩の金を持つて、神原屋といふ質屋を尋ね、不足の金は日限をして、何分色紙は片時も早う受取つて來たいが、それにつけても、慥か元金二百兩との事。その質の置き主も、皆五平太めが仕業と思へど、もし荒立てゝ手懸りをも失うてはと、心を碎く質請けの、慥かな證據もない事ゆゑ、向うでなんと云はうやら。せめて元金二百兩、揃うてさへあるならば、また分別もあらうのに、折角借りても百兩不足。

ト思ひ入れ。

ふさ　モシ、綱五郎さま、昨夜もお前が其やうに云うてぢ

やゆゑ、わたしも思案しやんしたが、よい事があるわいな。

綱五　オヽ、よい智慧があるか〱。

ふさ　サイナ、斯うしなさんせ。お前アノ、わたしが内へござんして、母さんに後金百兩の相談なさんしたら、よもや出來ぬといふ事はあるまいわいな。

綱五　これはしたり、アヽ、流石は女子ぢや。一旦葬むつた死人の金、借りたる上に其方まで、連れて退いたと知られては、盗人の惡名請け、この身の願ひも叶はぬ上に

ト思ひ入れあり

アヽ、又よい思案も出ようわいの……アヽ、ほんに空腹であらうに、ドレ、飯拵らへして進ぜませう。

ふさ　イヽエイナ、わたしやまだ欲しうござんせぬが、モシ、綱五郎さん、不思議な縁で此やうに、あなたのお内に匿まはれ、お世話になるはわたしや大抵、嬉しい事ぢやござんせぬが、この間の暗紛れ、コレ、此やうにわたしが袖のちぎれたは、そでない縁の切れ目かと、それが心にかゝるわいな。

綱五　ハテ、斯うなつたからは、本庄綱五郎、侍ひぢやわいの。刀の手前、其方を捨てゝは武士が立たぬ。この身の歸參が叶うた上は

ふさ　女房に持つて下さんすかえ。

綱五　眞以て僞はりは申さぬ。

ふさ　エヽ、嬉しうござんす。

ト思ひ入れあつて

あなたもしつけぬ水仕事、わたしも側から手傳うて上げうかえ。

綱五　これはしたり、大身代の箱入り娘が、どうしてマア。

ふさ　ハテ、世帯を持ては夫婦暮らし、飯拵らへは女房の役。

綱五　殊に持參は百兩の、誠にこれが掘出し女房、世間の人が聞いてなら

ふさ　迷ひの者と添ひ寢して、嬰兒持たぬ身は六道の、賽の川原で小石川。

綱五　爰は劍の山の手に、町の住居も占屋算、呵責の苦患遁れたら

ふさ　末は二人も西の空、極樂水へ宿替への、蓮の臺に有合ひの

綱五　蒲團一つが玉の床、思ひあふみの三幅對。

ト木綿蒲團を敷く。

ふさ　宵から二人手枕に

ト木枕一つと、有合ふ五合桝を取つて蒲團の上へ置く。

綱五　抱いてねはんの前方に、煮焚きが肝心。

ふさ　仕つけぬ業を

綱五　女夫が稽古に

ふさ　エヽ、嬉しうござんす。

長唄へ妄執の雲晴れやらぬ。

ト稽古所にて唄ふ。お房、悧りして

ふさ　ありやなんでござんすえ。

綱五　アヽ、ありや隣裏の稽古所ぢや。

ふさ　道理こそ、さう云ひなさんすりや、ありや、「鷺娘」の唄ぢやわいな。

綱五　なんぢや「鷺娘」ぢや。さう云やれば、白無垢の振り袖姿。わしは黒の小袖着て、しつかい鷺と烏が、世帯したやうぢやわいの。

ふさ　何を云ひなさんすぞいな。

綱五　ドリヤ、米を炊ぎませうか。

長唄へせめて哀れと夕暮に、ちら〳〵雪に濡れ鷺の、しよんぼりと可愛らし。迷ふ心の細流れ、ちよろ〳〵水の一筋に、恨みの外は白鷺の、水に馴れたる足どりも、濡れて雫と消ゆるもの。

トこの文句のうち、綱五郎、釜の中へ米を入れ、お房縁を押へて、米を磨ぐ思ひ入れ。捨ぜりふにて、直ぐに竈へかけ、水を入れ、柄杓を立て、加減する。よき時分より權兵衞、門口へ來り、内を覗き、お房を幽靈と心得「水に馴れたる足どりも」といふあたり、忍び足して内を覗き、門口にて慄ふ。唄切れる。

ふさ　今のわたしが身の上で、思ひ當つた姉さんの、色ゆゑ大事のお屋敷を、男を連れての駈落ちも

綱五　ヤ、なんと云やる。其方には姉があつて、いま云やるでは屋敷を駈落ち、男を連れてと云やつたが……殊に其方は絲屋の娘、もしやその姉は

ふさ　アイ、赤城のお屋敷、奥向に

綱五　すりや、身が主人のお屋敷に、勤めて居たと云やるといひ、その親許は絲屋と聞いたが、アヽ、割符を合はす。

ト思ひ入れ。

ふさ　エ、

綱五　ハテサテ、縁は

ト當惑の思ひ入れ。お房こなしあつて

ふさ　モシ、必らず見捨てゝ下さんすなえ。

ト縋る。門口に窺ふ權兵衞、憫りしてぶちかへる。この途端に九郎兵衞、下駄がけにて路地より出かかり、この體を見て

九郎　誰れだ、そこへ倒れたは

ト見て

大家さんぢやアござらぬか。

權兵　九郎兵衞どのか、とんだ事だ。コレ、爰の浪人は、幽靈を引摺り込んで、いま出合ひ最中だわな。

ト騷ぐを聞いて

九郎　モシ〳〵、そんならなんと云ひなさる。爰の內へ幽靈を

權兵　オヽ、しかも振り袖の幽靈サ。

ト思ひ入れあつて

九郎　そんなら此奴に違ひなく

ト白無垢の袖を懷よりソツと出す。

權兵　もう〳〵、今夜早々店立てだ。

ト大音に云ふ。綱五郎、思ひ入れ。

九郎　コレサ。

ト權兵衞に囁く。內にては綱五郎、お房へ囁き、合ひ方になり、ツカ〳〵と寄つて戶棚を明け、お房を隱し、しやんと戶をさす。權兵衞は呑み込み、囁き合ひ、路地の內へ入る。九郎兵衞、門口へ寄つて

モシ、お賴み申しやせう〳〵。

綱五　アイ〳〵、どなたぢや、只今明けますぞ。

トあちこち片付け、行燈の火を掻きたてたり、いろいろするうち、通り神樂、合ひ方にて、路地よりお時、世話女房にて、草履下駄の音ガタ〳〵として出て來り

とき　九郎兵衞どん、何をして居なさんす。

九郎　お時か、コレ

ト囁き

よしか。

とき　どうしてマア、滅相な

九郎　ハテ、大事ない、仕掛けて見ろよ。

ト合ひ方になり、九郎兵衞窺ふ。こなしあつてお時、門へ寄つて

とき　アイ、ちつとお賴み申しやせう。

綱五　ハイ〳〵、いま明けまする。

ト門口を明け、顏見合せ

これはしたり、男の聲ぢやと思うたりや、お前はどれか

ら。

とき アイ、わたしや脊中合せの裏長屋、九郎兵衛といふ者の女房でござりやすが、亭主は先へ來やして、門が閉つて居りやすゆゑ、わたしに云ひ付けて歸りやした。お前さんがこの間お越しなされやした

綱五 ハイ、一人住みの浪人でござるが、おてまへ、なんぞ御用でもござつてか。

とき アイ、お長屋の喜左衞門さんの内に、佛事がござんすゆゑ、長屋中が寄り合つて、精進物を遣はしまする。それを屆けに參りました。

綱五 それはお世話。勝手存ぜぬ私し、何分よろしく頼みまする。

とき 左樣なら、御酒の三升も遣はしやせう。

ト内へ入り

ほんにあなたはお一人かえ。

綱五 左やう／＼、獨身でござるて。

とき そりやア御不自由でござりやせう。お仕事でもあらば遣はされませ。

綱五 それは忝なう存ずる。

とき 御遠慮はござりませぬよ……モシ／＼、お前さん、袖口が綻びて居りまするよ。

綱五 イヤモウ、綻びは常の事でござるて。

とき ちよつとお出しなされませ。ツイ一針、縫うて上げやせう。

綱五 イエ／＼、また次手がござらう。殊に絲針とてもござらねば

とき イエ／＼、わたしが頭に、袖口ぐらゐの綻び。オ、コレ／＼

ト髷に刺したる針を取つて

丁度紺の絹絲がありやした。サ、お寒からうが、ちよつとお脫ぎ。

綱五 イヤ、ならうなら、此まゝにして縫うて下さりませ。

とき 左樣なら、さうしてお出で。

ト綱五郎が袖口を捉へ

ア、暗い行燈だの。

ト搔き立てんとて、腕を伸すと、「十右衞門命」と彫つてある。綱五郎見付け

綱五 ア、「十右衞門命」。

とき エ。

ト腕を引き袖口を縫ふ。

綱五　お内儀は、アヽ、浮氣者と見えますわいの。
　ト目を付ける思ひ入れ。
とき　エヽ、お前こそ獨り暮しと云ひなさんすが、コレ、見なんせ、蒲團の上に並んだ枕は、なぜござんすえ。
綱五　サ、これは
　ト思ひ入れあり
今來を計つて見ようと思ひまして
とき　エヽ、措きなさんせ。お前さんもこりや女にかゝつちやア、御如才のなさゝうなお方ぢやわいな。
綱五　イヤモ、女は至つて嫌ひでござるて。
とき　よう嘘を云ひなさんす。
　ト持つたる針にて突く。
綱五　アイタヽヽヽ。
　トこちらへ逃げる。お時、蒲團の上へこけかゝり
とき　エヽ、仰山な、何をマア其やうに
　トこの時戸棚の中にて、悋氣の模樣にて、パタ〳〵と出ようとする。
綱五　ア、コレ、出ては惡いぞ〳〵。
とき　エ、何が出るのぢやえ。
綱五　サ、爰の内は日が暮れると、凄まじう鼠が出るで、その鼠が宵に出ては惡いと存じて。
　ト思ひ入れあり
コレ、お内儀さん、綻びはもう出來ましたかの。
とき　アイ、もうようござんすわいな。
綱五　それは忝なうござります。
とき　ほんに、今の戸棚の内は、鼠にしては大きな音でござんした。この行燈で、ようマア御覽じて
　ト行燈を引廻さうとして灯を消し
これは粗忽な、ツイ消したわいな。
綱五　そりやモウ、一倍鼠めが騷ぐであらう。ドレ、ちよつと灯を點けて
　ト火打ち箱を探りあたり、捨ぜりふにて、カチ〳〵と打ちつける、この音を聞いて九郎兵衞、ソツと内へ入り、よき所に坐る。お時、床の上に坐る。綱五郎、附木へ火を移し
サア〳〵、つけました〳〵。どこにまア不遠慮な、お長屋のお内儀樣とたつた二人、灯を消して
　ト行燈へ點し、フツと九郎兵衞を見て
ヤ、こなたは何處から。
とき　ほんにお前は、いつの間に。

九郎　ふんばりあまめ、動きやアがるな……モシ、御浪人、わしやア棟割裏長屋、半時九郎兵衛といふ、不職で暮らす貧乏人だが、人の女房を引摺り込んで、慰みものにさしつて済むか。間男は御定法、並べて置いて四つにするワ。

とき　ア、コレ、滅相な。なんでマア其やうに。ナ、モシそりや間違ひでござんせうぞえ。

綱五　エ、、そんなら貴公が、このお內儀の御亭主でござるか。誠にこれは珍事ちうよう。決して左様な。

九郎　モシ〳〵、御浪人様、おらが嬶アを引摺り込み、間男せぬとの云ひ譯か。コレ、その間男の證據、一人暮らしのこなさんが、枕二つはなぜ置いた。但しは嬶アと寢ぬならば、外に隱した女があるか。

綱五　サ、それは。

九郎　女がなけりやア、寢たのは此奴か。間男されちやア野郎がすたつた。斯う云ひ出しちやアたつた今、譯を附けやれ、後ともいはず、一時待たねえ半時九郎兵衛・御浪人。性根を据ゑて挨拶しやれ。

　ト合ひ方。

綱五　すりや、どうあつても間男と。

とき　斯うなるからは胴を据ゑ、いつそ貰うて下さんせいな。

　トすつかりとなる。

綱五　ア、、そんなら內儀も間男ぢやと。

とき　もう遁がれツこはあるまいわな。

九郎　あれ聞け、あれでも僞はるか。

綱五　これで讀めた。身共これなるお內儀に、毛頭不義は致さねど、夫婦寄つての目論見か。內儀の腕に入れ黑子、その名は慥か十右衞門、命と彫れば御亭主の、九郎兵衞どのは小絲命と、二人が二人彫り物の、その上、慥か深川にて。

　トきつとなる。九郎兵衞うろたへ、ちやつと肌を入れ、思ひ入れあつて

九郎　そりやアこなさん見た筈だ。一つ長屋の棟割に

綱五　胸氣な人のあらうとは

とき　知らで今日まで附合ふも

九郎　ツイそれなりの知らぬ同士。

綱五　逢ふと其まゝ間男と

とき　疑ひ請けたもお前の災難。

九郎　枕二つは拔けられまい。但しは外に隱し女房が

ト戸棚へ目を付ける。

綱五　イヽヤ臆した女は無い、二つ枕はこの内儀と、間男したに違ひない。

九郎　こりやさうなけりや叶ふまい。包めば外に詮議のある、獨り暮らしのこの内へ、もしや浮かまぬ幽靈が迷うて來たか、その時ば、お前の回向で、未來永劫、浮かめてやらんすお心か。

綱五　ナニ幽靈とは面白い。事に依つたら侍ひの、迷ひの者と見たならば、この世は愚か、あの世まで。

九郎　この片袖で

ト白の袖をちよつと見せる。

綱五　すりやその袖を。

九郎　戒名俗名そんじよそれ、施主は本町絲屋の娘。

とき　エ、すりやその袖は、アノ、絲屋の……そんならわたしが

ト戸棚へ思ひ入れ。

九郎　コレ、われも滅多に動かされぬ。サ、浪人どの、こんな餘計の仕事があつちやア、よもや女房と間男を

綱五　仕つた。

九郎　いよ〱こなたが

綱五　間男いたした。

九郎　間男ならば首代もらはう。

綱五　その首代とは、如何程いります。

九郎　小判で百兩。

綱五　ヤ、あの百兩の……コレ、貯へも無い浪人が

九郎　イヽヤ、無いとは云はせませぬ。事に依つたらこの袖で、物を云ふ氣だ、御浪人、耳を揃へて首代百兩。

綱五　渡すからには振りの袖、此方へ所望仕るぞ。

九郎　賣つて進ぜう。百兩ならば、首代かねてこの袖を

綱五　然らば所持のこの金子、手詰めとなつて

ト財布に入れし百兩を出す。九郎兵衛、白の袖を出し、互ひに引替へ

九郎　首代慥かに受取つた。

綱五　此方は袖を買切り百兩、それで身共の惡名が

とき　間男沙汰もこれぎりに

九郎　算用濟んだ。

綱五　其方の出入りが濟んだなら、九郎兵衛夫婦は身が讐の、また改めて不義密夫、女敵討たにや歸されぬ。爰一寸も動くまいぞ。

ト刀を取つて詰め寄る。この時門口へ十兵衛出かゝり

九郎　出入りの濟んだ間男沙汰、引くりかへしに御浪人。
　　窺ふ。

とき　わたしら二人を間男とは

綱五　吐かすな女め。おのれら胸に覺えがあらう。赤城の屋敷に勤めし砌り、小絲と云ひしはおのれならん。不義の對手は若黨の葛飾十右衛門、その時某、國詰めの留守のうち、仲人ありしは彌三兵衛どの、互ひに印を取交し、某歸國と聞きしゆゑ、懷姙の身の云ひ譯なく、雙方の金を奪ひ、逐電なしたるおのれら兩人。本庄帶刀が悴綱五郎、願うてもなき女敵ども。この家へウカ〳〵來りしは、これ天命のなすところ。サア、覺悟極めて、それへ直れ。

九郎　すりやこなさんが聞き及びし、本庄綱五郎といふ浪人か。

とき　なんでわたしら夫婦の者が、お前の爲の女敵ぢや。サア、證據があらば見せさんせ。

綱五　證據なき事云ふべきか。面は互ひに見知らねど、この程ちよつと深川にて、見付け置いたる彫り物の、今まで身共が目にかゝりし、夫婦の者の腕の彫り物、證據を見せうか。

　　ト腕へかゝる。

九郎　南無三。

　　ト振り切つて駈け出す。この時十兵衛、ツカ〳〵と入り、九郎兵衛をキッと留める。綱五郎、お時を引きつける立廻り。

とき　ヤ、其方は安野屋の

綱五　十兵衛か。

十兵　コレ、小絲どの、無事であつたか。エヽ、お前はなう……女心に後先の、辨まへないとは云ふものゝ、お主の目を拔き不義の科、姙娠になつたその後にて、本庄さまと緣談の事、極つて屋敷を駈落ち、妹のお房どの
　　ト落ちある振り袖を取つて
コレ、この如く世を早う、又は迷うてござるやら、四十九日が其うちは、魂魄離れぬ家の棟か、但し緣なき戸棚の内に
　　ト綱五郎と顏見合せ思ひ入れあつて
サ、緣なき家に迷ひ來て、その幽靈の出所が違ふ。云はば絲屋の家來筋、見て見ぬ振りもしたけれど、親旦那よりくれ〴〵も、お賴みあつたこなたの行くへ、斯う見付けたら百年目。本庄さまの腰押しして、女敵討の腰押し

ます。さう心得てござりませ。
綱五　すりや云ひ號けの、これなる小絲が妹は、本町絲屋の娘のお房。すりやアノ
ト戸棚へ目を付け思ひ入れ。
十兵　妹も迷うてこの内へ、その上不義の兩人が、落ち込んで來て兄弟の、天命遁がれぬ小絲どの、御親父樣に、代つてわしが
ト お時へかゝらうとする。
とき　親とお主の目を盜み、本庄さまに侍ひの、一分捨てさすその科人、見付けられたる上からは、お刀穢しのおいとひなくば、サ、綱五郎さま、お手討に。
九郎　返す刀に私しも、小絲と同罪、科は遁がれぬ十右衞門、疊の上で死ぬが本望。
十兵　その覺悟なら十兵衞が、町人ながら助太刀の、目當は葛飾十右衞門、主の娘をかどわかし同然。親御の遺言、主の娘の容赦はない。跡でこの身を大身の槍、磔刑合點、サ、助太刀を、本庄さま。
綱五　すりや十兵衞は現在の、主の娘の容赦なく
十兵　この身を捨てゝ助太刀を
綱五　ア町人ながら健氣な十兵衞、願ひの通り、助太刀頼む。
十兵　それで旦那へ私しも其方の手にかけ、殺されても
とき　十兵衞どのは親御の名代。
九郎　武士を捨てさす不義者二人。
綱五　命はこなたに
九郎　身共が貰つた。
綱五　相手のわたしも
とき　家來のわしが
十兵
ト入れ替つて立廻り。綱五郎、お時を引きつける。十兵衞、九郎兵衞が腕を取つて
綱五　身が目を盜みし女敵二人。
十兵　その助太刀は家來の十兵衞。
兩人　まツこの通りに。
ト綱五郎、お時が彫り物の命といふ字を小柄にて突く。十兵衞、九郎兵衞が彫り物の命といふ字を、有りあふ燒火箸を取つて燒き金に當てる。四人一度に思ひ入れあつて
とき　これは。
綱五　ハテ、成敗は二人が命、命かけての腕の彫り物。其

方も小絲が命を取らうが、身もこの者の命を取れば、これにて本望達せし道理。

十兵　アレ小絲どの、聞かしつたか。

とき　御恩の程は詞にも

九郎　云ふに云はれぬ本庄さま。

兩人　エヽ。忝ない。

十兵　これに付けても安からぬ、心がゝりは左七さま、武士ならぬ身の人殺し。

綱五　ナニ、左七が人を害めしとや。この綱五郎も浪人の、色紙の金の足しにもと、道に背きし百兩も、この身に付かぬと諦めて

九郎　騙りおふせし美人局、首尾よくいつて此方の身の科、不義間男のその騙り、盗んで逃げた御用金、償ふ爲の惡黨も

とき　女夫稼ぎの惡企み、これまで二人が溜め金の、足しにもがなと深川にて、雪のその夜に五十兩、

九郎　数もやう／＼百兩まで、殘りの不足は五十兩、都合したなら二人とも、その金持つてあなたのお屋敷、名乘つて出でて討たれんと、金才覺の其うちに、惡い尻尾を見込んだ百兩、正しくこの家と思ふから、女房を玉に美人局、百兩强請らば二口〆め、金高丁度二百兩、色紙の質請け、石塚さまの御難儀を、モシ、お助け申さば幸ひの、これまで溜めたこの百兩。

ト胴卷より出す。

とき　爰に住居と知らぬ身の、あなたのお在所知れたなら、尋ね參つて討たるゝ覺悟。僞はりならぬは七年以前、產み落したる一人の娘、女敵討るゝその時は、兩親のみじめを見するが悲しさに、中仙道に忍ぶうち、岡部の在の畔道へ

九郎　捨てる娘も後々は、成人せよとこの親が、餓鬼の時分の腰提げに、眞間の繼橋手古奈のお守。外に添へたる書き物は、治承二年戊の四月五日誕生の男子重吉とはわしが幼な名。いづくで育つて死んだやら。モシ、何卒溜めた百兩を、せめてお役に本庄さま。

ト差出す。綱五郎取つて財布の百兩と合せ

綱五　惡人ながら九郎兵衞が、前非を悔いての身の懺悔。某とても道ならぬ、この百兩と都合して

九郎　色紙は請けて下さるか。

綱五　二人の者が志し、情は情、仇は仇。

兩人　エヽ、忝ない。

十兵　色紙の代金揃ひなば、請け戻すのも今宵のうち、即ち割符のこの一札。

ト件の證文を出す。

綱五　すりや、一札が十兵衛の

十兵　手に入りましたも不思議な廻り。この片袖を憚りながら、綱五郎さま、縁なきお房の御回向を。

ト思ひ入れ。戸棚にて物音する。

とき　絶えて久しき姉妹の

ト立寄るを十兵衛止めて

十兵　イヽヤ、この場へ迷ひの妹御、よもやウカ〳〵出られまい。迷ひを晴らすこの一札。袖と證文、替へ〴〵に

ト質屋へ遣る一札を投げる。綱五郎取つて

綱五　こりや五平太が入れ置く一札。

十兵　アモシ、この十兵衛は眼病の、宛名は何とあらうとも、定かに分らぬ反故同然。金の催促付いたる一札、揃ひし上は本庄さま。

綱五　質屋に逢うて片時も早く

九郎　色紙の質請け御油斷なく

とき　跡構はずと、あなたは直ぐに

綱五　必らず頼むは左七が事。又は戸棚のあの内の

十兵　モシ、氣遣はずとも、夜更けぬうちに

綱五　十兵衛、必らず

三人　本庄さま。

綱五　ドリヤ、一走り。

ト唄になり、綱五郎、二百兩と一札を持ち、足早に向うへかゝる。この時左五郎、尻端ばつちの形にて出て來り、花道にて擦れ違うて、綱五郎は向うへ入る。左五郎、花道より舞臺を窺ふ。お時、跡を見送り

とき　明けて云はれぬ戸棚の内の

十兵　アヽコレ、主は他行

九郎　必らず指でもさすまいぞ。

ト思ひ入れ。バタ〳〵にて、路地の内より左七出て來る。内を窺ひ

左七　そこにござるは、十兵衛どのか。

十兵　さういふ聲は左七さま、色紙を請ける二百兩、揃ひしゆゑに本庄さまは

トこれを聞き、左五郎思ひ入れあつて、舞臺へ來る。

左七　ナニ、その金が出來たとや。エヽ、忝ない。

ト内へ入る。

左五　すりや、いま逢うたるは綱五郎、その金出來たは、

慥かにお房が金たらば、疑ひもなき亡者は戸棚に
トつか／＼と戸棚へかゝる。左七支へる、立廻り。
十兵　こりやこなさんは花架左五郎。
九郎　そのこなさんが、なんで戸棚へ
左五　お房の縁を切らうと思つて。
ト合ひ方。
とき　あの子の縁を切らうとは
左五　ハテ、小鬢な小野郎に、あんなうツついお房ぼう、誠に下世話の泥龜に、月なき夜半の暗紛れ、認めて來た三下り半、この去り狀は十兵衞どの、お房へ屆けて下さいまし。
ト佐五兵衞より渡りし紙入れを投げてやる。十兵衞、取上げ見て
十兵　こりやコレ絲屋の讓り狀。今一通は
ト見て
ヤ、、、、醫者東林が番頭へ、毒の請合ひ、入れ置く一札。
九郎　そんなら娘の病死の元も
とき　みな番頭が拵らへ事。
左五　廁所で拾うた二通の書き物、これで絲屋の納まりも、綱五郎さまの詮議の色紙も。ア、危ねえ事、知らぬ事とてわしらが内に、その置き主も佐五兵衞、五平太。一足早くばこの色紙、本庄さまへ渡さうもの。毎年變らぬ世話事に、質屋はいつでも敵役。そこをひねつて惡者の、置き主めらに渡さぬつもり。口嘴青き小二才でも、わしも江戸ツ子、水道の水、憚りながら、ア、つがもねえ。
ト色紙の箱を出す。
三人　すりやその箱が、尋ぬる色紙。
左七　在所が知るればこの身の明り。只この上は九郎兵衞どの、わしが死んだらその跡にて、この書き物を
ト書置を九郎兵衞へ打ちつけ
こなたの見る前
ト出刃を出し、腹切らうとする。皆々うろたへ、これを止める。
十兵　こりやこなさんは最前の
左七　譯合ひゆゑに、くたばる命。
九郎　氣が違つたか左七どの。併し渡したこの書き物。
ト開く。中より附け守落ちる。
合點のゆかぬこの守、この書き物の手蹟は妹。
ト見て

ヤヽヽヽ「書置の事」。

とき　エヽ。

　ト驚ろく。

二人　こりやどうぢや。

九郎　ナニ〳〵「この程二軒茶屋にて末かけて云ひ交し候ふ左七さま御事は、實の親御の彌三兵衛さまの、御身の難儀をその身に引請け、御浪人なされ候ふ、綱五郎さまの云ひ號け遊はしたる、奥女中小絲さまを連れて駈落ち致し候ふは、兄九郎兵衛に候へば、左七さまにも助太刀なされ候ふとの御事、左樣に候へば、とても左七さまに添ふ事叶はず、この身に思はぬ愛想づかしにて、あなたの御手にかゝり候はゞ、何卒女敵と仰せ候ふ兄の命、小絲さまをお助け下され候ふやう、くれ〴〵も願ひ上げ候ふ」

　ト思ひ入れ。此うち權兵衛、門口に窺ひ居て

權兵　さてこそ左七は人殺し。

　ト左七へかゝる。

左七　それだに依つて

　ト腹切らうとする。左五郎これを止める。十兵衛、權兵衛を取つて引敷き

十兵　モシ、門口を閉めさつしやりませ。

九郎　合點だ。

　ト書置を捨て、門の口をさす。その間にお時、書置を取り

とき　「その上深川にて、七歳あまりの娘の鳥追、生れを聞けば以前は捨子、乞食の手汐に育てられ、何卒自の兩親に逢ひたさに、金拵らへて親方へ渡し」……モシ、七歳餘の娘の子、殊に捨子と、聞いてござんすわいな〳〵。

九郎　サア〳〵、後を讀め〳〵。

とき　「兩親の行くへ尋ねたく、それにつき金が欲しうござんすと、幼な心の不便さに」

權兵　此まゝ訴人に

　ト刎ねかへし駈け出す。左五郎引きつけて、引敷き、左七、腹切らうとするを、十兵衛とめて

十兵　アコレ、わしが代つて讀みたいが、眼病あがりでちらつくやうだ。サヽ、その後〳〵。

とき　「わたしが兄さんの捨てさんしたる、娘の事思ひ出し、有り合せの金一兩、守の中へ入れ置き候ふところ、中には眞間の手古奈のお守、改めんと思ふうち、仲間の乞食が連れ行くゆゑ、是非なう別れ、後にて聞けば、僅

か一兩の金ゆゑに、その子は殺され、守の中の書き物はかり、人殺しの證據と申し候ふを見れば、疑ひもなき兄さんの年月時日、すりや一人の姪を一兩の金ゆゑ殺させしも、皆わたしが業、御堪忍なされ下され候ふやう願ひ上げ〻〻、これまでお世話下され候ふ十兵衛どの御夫婦へ、よろしく御傳へ下され候ふやう、心懸りは兄の身の上、義理ある小絲さま御事、何卒怪我あやまちのないやうに、草葉の蔭より祈り〻〻、申したき事山々御座候へども、涙にむせび惜しき筆とめ〻〻、綱五郎さま、左七さまへ、絲」……エ、コレ、そんならこの書置を殘したかえ。

左七　左七が思はぬ手にかゝり、可哀やお絲は死にました。

十兵　して、書置の中にある、幼なき鳥追ひの娘とは

九郎　只今申した九郎兵衛と、小絲が仲に誕生の

とき　夫の手古奈の守を添へ、捨てたその子が成人して

左五　乞食の手汐に育てられ

左七　親の行くへを尋ねんと、血筋と知らずお絲が合力。

十兵　道引く緣の伯母と姪、その一兩と金ゆゑに

とき　可哀や娘は慘たらしう、殺した奴はそりや何者。顏は知らねど娘の敵。

九郎　女房、われは討つ心か。

とき　手汐にかけねど血を分けし

九郎　娘を殺した科人は

とき　お前、知つてか。

九郎　コレ、知らぬ事とて、おれだわい。

とき　エ、。

十兵　ナニ、現在の娘をば

左七　九郎兵衛どのが

佐五　殺したとは。

權兵　また人殺しか

ト　かゝるを、左七引きつけ、當てる。お時、九郎兵衛に縋つて

とき　コレ、九郎兵衛どの。我が子を殺して落ちつき顏。サ、コレ、七年逢はぬあの娘、なんでお前は殺さんした。その譯云はんせ、コレ、九郎兵衛どの。

ト　胸づくしを取つて思ひ入れ。

九郎　尤もだ〳〵。嗅ア、道理だ。コレ、娘と知らず殺したも、守の中には金と聞き、日頃非道な九郎兵衛が、騙して取らうとするうちに、帶に絡かれて首を締め、絕入る息のその死骸。腰に付けたる守の中、探せば僅か一兩

の、金ゆゑ可哀や殺したかと、いつに變つて胸騒ぎ、これも肉身分けし子を、親の手づから殺したと、知らぬ凡夫の悲しさは、掘へ蹴込んで立歸り、今日までわれにも沙汰なしに、隱した事も恐ろしや

とき　天の御罰で殺したる、その子は一人の我が娘。僅かな金ゆゑあの子の災難。お前の妹御お絲さん、その一兩を遣らしやんせずば死ぬまいに、いたはる心が仇となり、顏も知らねど一人の娘、產むと其まゝ捨てたもお前。他人の手汐に育てられ、兩親戀しと尋ねるを、又ぞろ親が殺すとは、如何なる過去の約束事。常からお前の惡心が、妹に報い、我が子にまで、報うて來たと九郎兵衞どの、こなさんは知らんせぬか。コレ、今日まで作る身の科が、一度に報うて來たのぢやわいなう。

ト守り袋を以て、樣々と口說く。九郎兵衞、思ひ入れ。

左七こなしあつて

左七　現在妹のお絲の敵だ。九郎兵衞、左七を存分に

九郎　イヽヤ今更こなさんを、妹が敵と討つたならば、可哀やお絲があの世の迷ひ。

十兵　妹い娘ゝ菩提の種。色紙を差上げ左七どの、御出世なさるがお絲どのゝ、これに增したる追善あらん。左五郎さまの持參の色紙、後追ひかけて本庄さまへ。

左五　わしが心も反故にせず、持つて參つたその色紙、商人だけに元金は

九郎　この九郎兵衞が一走り、金と色紙を引替へに。

左七　歸參の後は、お絲が敵を

十兵　先づ大切な色紙を早う。

とき　せめて妹を、この場へちよつと

ト駈け寄つて戶棚を明ける。後の壁切り拔きあり。

ヤ、ヽヽ、裏壁切つて、妹は爰には

左七　後隣は九郎兵衞どのゝ

九郎　わしが內から壞つた壁が

左五　こりやまだ九郎兵衞、根性が

ト立ちかゝる。

九郎　思はぬ疑ひ。お房の詮議に

ト心づき

權兵　お房は番頭佐五兵衞が、葛籠にぶッ込み、連れて行つたワ。

左五　さてこそ此方のどさくさ紛れ

とき　壁をこぼつて妹を

十兵　盜み出した番頭佐五兵衞。

左七　遠くは行くまい。
九郎　色紙もろとも。
ト門口へ出ようとする。
權兵　ソリヤ。
ト捕り手三人、弓張り、十手にて、ツカ〳〵と出て
捕人　捕つた。
トかゝるを、九郎兵衛、千鳥に内へ投げ込む。十兵衛、左七、左五郎、三人の捕り手を引敷く。お時、權兵衛に蒲團をかぶせる。
十兵 左七 左五　爰構はずと色紙を早う。
とき　こちの人
九郎　合點だ。
トごん〳〵にて、九郎兵衛、向うへ走り入る。舞臺はこの見得にて道具廻る。
本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、白壁の塀、爰に網五郎、五平太を引とめ、葛籠の合せ目より白振り袖の出かゝりしを背負ひゐる佐五兵衛を引きつけ居る見得。禪のツトメにて道具留る。三人立廻りあつて

綱五　こりや山住五平太、さては身共が持參せし
五平　色紙の金の二百兩、殊に證據のその一札、われに遣つてはこの身の破滅。
佐五　こなたが内に隱して置いた、お房も裏からひん盗み、おれが女房だ、爰離した。
綱五　さてこそお房を葛籠の内に
五平　綱五郎、覺悟。
ト切りつける。立廻り。後より九郎兵衛、色紙の箱を持ち、ツカ〳〵と出て
九郎　綱五郎さま。
綱五　九郎兵衛か。
九郎　お尋ねなさるゝ小倉の色紙。
綱五 佐五 五平　手に入つたか。エヽ、忝ない。
　それを
トかゝるを兩人、キッと留めて見得。
九郎　先づ今日はこれぎり。
トめでたく　　打出し

心謎解色絲（終り）

こなた白藤〳〵方屋おしゆんと
夕暮に家根船と洒落て乗り出す
色には強き町藝者恋の手取と渡
り合ひ四つに組んだる妹脊の中
入團扇を上げて傳兵衛が二世を
結びし行司役

勝相撲浮名花觸

〆て五まく



初濱の繪番附

勝相撲浮名花觸

發端　柳橋の場

役名――船頭、長助。箱持ち、善八。中間、又助。藝者、お俊。角力取り、白藤源太。足駄の歯入れ權助。

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕。東より西へ柳橋の欄干、橫を見たる道具。舞臺一面に、浪板にて、所々に小船大分、よき所に屋根船一艘、簾を下ろし、提灯を點し、繫ぎある。花道より舞臺へ棧橋を掛け、橋の袂、誂らへの石垣。時の鐘、四ツの拍子木、雨の音にて幕明く。

ト長助、船頭の拵らへ、剃身笠にて、鼻唄を唄ひながら川岸をつけて居る見得。空を見て

長助　ア、、小降りになつたわえ。

ト枕箱を出し、煙草をのんで居る。矢張り時の鐘。向うより善八、下駄がけにて、大黑傘をさし、繫ぎ棒の三味線箱を萌葱の風呂敷に包み、これを脊負ひ、丁字車の附きし留守居提灯を點し、出て來る。後よりお俊、江戸藝者の拵らへにて、蛇の目の傘、黑の長合羽、塗り下駄にて出て來る。花道にて

善八　モシ、お俊さん。伴之進さまがお船に待つてゞござりませう。ちつと早く歩きなさいな。併し道が惡うござります。氣を附けて歩きなさいよ。

しゆん　コレ、善八どん。こなさん、マア、伴さんの雇ひなら、留守ぢやと云うてもよい事を、このマア雨に、早う歩くも張合ひが無いわな。

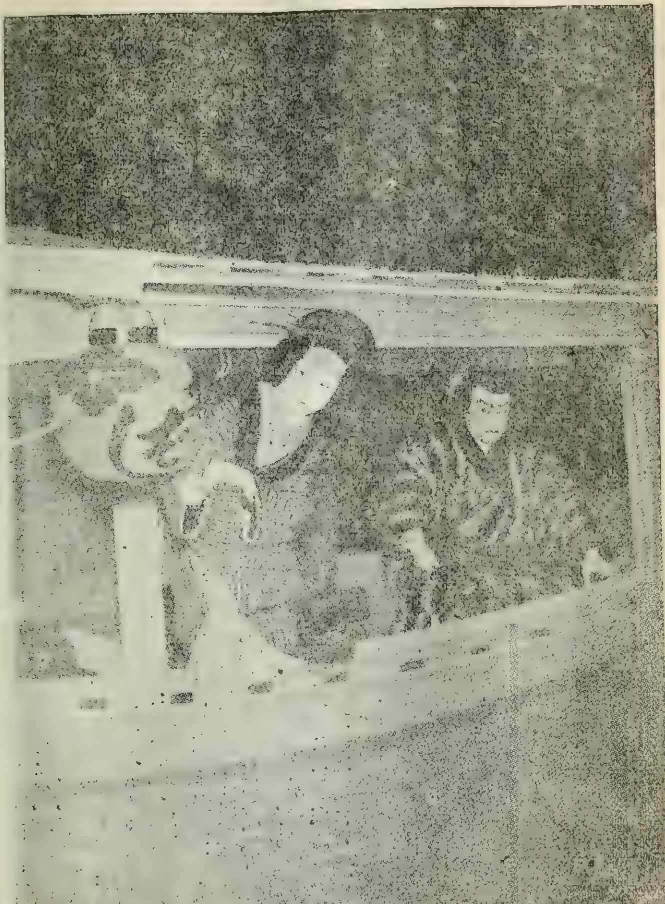
善八　ハテ、どこへ出なさるもお客だわな。小言を云はずと、お出でな。

しゆん　なんだな、きいた風な。靜かに云つてもいゝわな。

ト小言を云ひ〳〵、本舞臺へ來る。長助、提灯の印を見て

長助　ア、、八つ丁字の紋はお俊さんだの。コレ、善公か。

善八　オイ、長スか。剛氣な雨であつたの。して、旦那はお船か。



大正十四年二月本郷座所演　實川延若の源太



市川松蔦のお俊　市川左團次の權助

長助　待つて居なさるわな。
善八　サア、お俊さん、棧橋が辷りますよ。
しゆ　コレ、善八どん、やんだの。
善八　アイ、晴れて來やした。
しゆ　傘を持つてくんな。
長助　サ、爰へお寄越し。
ト船より傘を取る。此うち、お俊、合羽を脱ぐ。長助、船より取る。
しゆ　長助どん、お利口だな。伴さんはお連れがあつてか。
長助　イ、エ、お一人サ。
しゆ　氣障だなう。
長助　ナニ、氣障な事がありやせう。ちよつと見なさい。ソレ、お開帳。
ト簾を上げる。中に白藤源太居る。お俊見て
しゆ　オヤ、白藤さん。
源太　剛氣に待たせたの。
しゆ　エ、、人ぢらしな。
ト思ひ入れあつて船へ入る。
善八　人ぢらしも凄まじい。お前、道々剛氣に小言を云ひなすつたが、どうだえ、善公は通り者だらうね。

しゆ　善八どん、奇妙だよ。
善八　エ、、雨もやんだが、御機嫌も直つた。
長助　善公や。三味線箱を寄越したり。
善八　オツと合點。
ト提灯を消し、箱も一緒に船へ入れる。長助手傳ひ、よろしくあつて
長助　コレ、善公。その小船を傳つて來さつし。向う河岸におつりきな幕があるの。
善八　飲める話しか。
長助　勿論サ。
善八　面白いの。
長助　危ねえぞ。辷るまいよ。
善八　オツと來たり。
ト小船を傳つて、二人とも土藏の際へ上がる。
源太　コレ〱、この手合ひは、いま時分どこへゆくぞ。
しゆ　なんだな、話しねえな。
長助　ナニ、直ぐに行つて來やすよ。關取、枕箱に蠟燭がありやすよ。
善八　オツと、後は云ひッこなし。
長助　おきやアがれ。

ト捨て鐘になり、兩人、上の方へ入る。あと合ひ方になる。

しゆ　コレ、源太さん。お前もマア、わたしが氣性も知らねえかなんぞのやうに、伴さんの雇ひだと云つて、わたしを呼びに寄越したは、こりやア飛んで來るであらうと疑つて書いた狂言だの。そりやアお前でもねえよ。

源太　コレ〳〵お俊、毛頭おれア、そんな遊ひを考へ出すやうな生れでもなし。ハテ、商賣はなんだな、角力取りではないか。人を投げる手は知つても、藝者を韓ばす手は知らねえの。

しゆ　エ、、知らねえ者が、あの兼松はどうして産ましなすつた。お前の子ぢやねえかえ。

源太　兼松をおれが子でないとはいつ云つた。

しゆ　サア、わたしやア生れついて、色氣のある男が嫌ひ。それでツイ、お前と眞に斯うなつたぢやアねえか。お前の爲には總領のあの子、乳母でも置いて育つて見たいが、それぢやアわたしがしみツたれに見えやうと云ひなさるから、あの善八の世話で、本所の岩淵とやらへ里に遣つて置けど、この頃はもう大きくなつて居やう。マア、笑ふわいな。

源太　サア、おれもちよつと兼松を見に行かうと思うても、この商賣で乳飲ツ子を抱きかゝへるも薄鈍いものよ。殊に、贔屓にして下さる衆が、家を持てと云はつしやるが、この江戸で、白藤が家を持つた事、在所へ知れちやア

しゆ　悪いのかえ。そりやア大方、お前の話しなさんした、云ひ號けのお澤さんとやらが

源太　ひよつと尋ねて來られては、お主が手前云ひ譯も無い話し。殊におれが親の源兵衛どのゝ、恩になつた石濱の御家中、主水さまの弟御、御浪人さしつた勝次郎どの、身狀のわるい生れつき。貢いで置くも、あの人にするではない、兄様にすると思ふから。お邸で紛失の短刀といひ、詮議して差上げれば、主水さまの御推擧で、この白藤は殿様へお目見得。お長屋を貰つてその時は、てめえも阿母も引取つて、お邸へ引越し女房だ。こんな相談も阿母が聞かれて、何を木に餅の生るやうな事をと、蔑げすまれるも氣の毒ゆゑ、あの長助を頼んで、今夜はゆつくり話さうと、釣り出したものよ。

しゆ　なんのマア、耳の不自由な母さんに、遠慮がいらうぞいな。あの兼松が事も、里親の手にかけずとも、わしが育つて見たいと云はしやんすが、それではどうも、世

間の手前
源太　イヤ〳〵、藝者の內で、しめしを干す程、しみつたれなものはねえ。阿母が心善しだけに、猶々物に遠慮があつて。それにしても主水さまと、應對した勝次郎どの、不埒な金が五十兩。二人の手から役所へ上げろと云はしつたが、どうもその五十兩が。
ト屈託の體。
しゆ　わたしもそれが氣に掛つてな。まだその外にお前の在所、東金とやらに居なさんす、お澤さんとやら、ひよつと今にも逢うたなら
源太　ア、役にも立たぬ事を。なんであのお澤が、江戶三界へ。……イヤ、この六月はキツと來るて。
しゆ　六月になりや、なぜ來なさんすえ。
源太　ハテ、回向院に嵯峨の釋迦の開帳がある。
しゆ　エ、阿房らしい。
ト思ひ入れあり
オヽ寒。風邪ひいたやら、寒氣がして來たわいな。
源太　おれもこの間まで瘧を病んで、コレ、見やれ、腕の細つた事を。
ト思ひ入れあり
お俊や、寒氣がするなら、コレ〳〵、蒲團を着て居やれな。
ト五幅蒲團を取つて、お俊に着せる。
しゆ　お前も病みあがり。冷えなさんすな。爰へ入りなさんせ。
ト蒲團を半分着せる。
源太　イヤモウ、この春はべら坊に寒かつた。ドレ、提灯を消さうか。
ト立たうとする。
しゆ　コレ、なぜ灯を消しなさる。
源太　ハテ、暗くして話さうわな。
しゆ　エ、矢ツ張り灯して置きなさんせいなア。
源太　サア、灯して置いちやア、此方で
ト云はうとして
話しは暗くつても出來るわな。
ト立ちかゝつて提灯を消す。
しゆ　サア、早く話しねえな。
ト横にならせる。源太、氣の毒さうに
源太　ア、綱の目にも風とまるだ。
ト船の簾を下ろす。時の鐘を打込む。雨車の音。向う

より岩淵權助、汚なき形にて、素足を端折り、跣足にて、破れし番傘をさし、頬かむり。中間又助、やつしの形にて、同じ拵らへ、襟へ手拭を卷き、相合ひ傘にて出て來る。花道にて

權助　ア丶、どうか小降りになつた。コレ、又助、向うの橋詰めか。

又助　さうサ。この間から話す通り、石濱の屋敷の重寶、千代鶴の短刀、銘は慥かに

ト思ひ入れ。

權助　國安と云ふぢやアねえか。

又助　それ〱、その國安々々。國安とは云へど、値は高い短刀だげな。捨賣りにしても、百兩からの代物。

權助　それをお主の主人勝次郎どのが

又助　サア、お邸を暇が出て、彼處や爰に居候ふ。わしを呼んで云はるゝには、勝手を知つた邸の內、あの短刀を盜んで來いと云はるゝから、直ぐにその晩邸へ仕掛け、盜みは盜んだが、滅多には渡さぬの。

權助　われが主だと云つた勝次郎は、人の惡い奴ぢやアねえか。

又助　サア、二文でも手放さねえ生れ附き。折角おれが夜盜に入つて、旨味を彼方へ取られた上、もくが割れゝば、首はおれが切られて、金は彼方で巧うやるワ。そこで氣が變つたの。

權助　そして、未だ勝次郎には渡さねえか。

又助　どうして〱。シタガ、彼處や爰に居候ふのこの又助。盜み物の短刀、持つても歩かれずと、あの石垣の間へ突ッ込んで、隱して置いたて。

權助　いゝかえ。用心は惡くはないかえ。

又助　ナニ、あの石垣はおれが庫も同然。盜み物を度々隱して置くが、さて賣らうといつて、口がかゝらねえ。どうぞお主、賣つてはくれまいか。

權助　そりやア知れた事だ。お主が風體で、そんな代物がナニ、捌けるものか。殊にてめえ無宿ぢやアねえか。古布子や雪駄とは違ふワ。誰れが相談するものか。おれに寄越しやれ。値を好く捌いてやるワ。

又助　賴んだぞよ。百兩になれば、コレ、二十兩遣るゾ。

權助　面白いの。併し、こんな代物には、鑑定書があつたであらう。

又助　サア、その折紙はノ、つい勝次郎どのゝ方へ渡したて。



天保九年八月大阪中座所演



中村富十郎のお俊　　三桝源之助の源太

権助　ア、そりやア惜しい事をしたなア。併し、代物さへあればいゝわえ。

又助　さうサ。折紙は又どうともならう。サア〳〵、來さツし〳〵。

ト兩人舞臺へ來り、棧橋より川へ下りて、又助、石垣の際へ寄り

爰だ〳〵。コレ〳〵、人が來るが、賴むぞえ。

権助　合點だ。

ト方々を見張つて居る。又助、石垣の間をほじくり、古風呂敷に卷きし短刀を出し

又助　コレ〳〵、これだ〳〵。

ト差出す。権助、上より手を出し、短刀を取り

権助　ア、これが短刀か。

又助　さうサ。それでも百兩にはなる代物よ。ドレ、後をならして置かう。どうで盗んだ物は爰へ持つて來ねばならぬ。おれが大事の庫だ。

ト権助、上にて彼處爰と見廻す思ひ入れあつて、手を倚し、又助が襟の手拭を直ぐに首にまとひ、兩手にてグツと締める。又助、聲立てる間もなく苦しんで死ぬ。捨て鐘、権助、息の通ひをよく〳〵見て、直ぐに蹴返す。

又助、川の中へ落ちる。水音烈しくする。権助、短刀を拔き、見ようとしても、暗き思ひ入れ。この物音に驚ろき、船の中の簾を上げて

しゆ　オ、怖。今の音はなんであらうな。

源太　大方、身投げかも知れねえ。

しゆ　オ、氣味の悪い。それだから、灯を消しなさんなと云うたに。

源太　ハテ、枕箱に火繩も附け木もあるわえ。コレ〳〵、爰にあるワ。

ト枕箱を出し、中より火繩を出し、お俊が方へ出す。兩人捨ぜりふ。お俊、附け木を取つて火繩の火を移し、附け木へパツと燃え附く。提灯へつけんと、お俊立ちかゝる。権助、灯の附くに、幸ひと、思はず短刀を見んと、探り寄つて、お俊が目先へ突き出す。お俊、ハツと云うて、附け木を川へ落し、源太に抱き附く。この聲に権助恟りして、短刀を後へ隱す。源太、お俊を抱へて、刀を取つて立たうとする思ひ入れ。この仕組みよろしく、時の鐘、だらにて、拍子

幕の内、捨て鐘のツナギ、引返し。

幕

序幕

大のしの場
割下水の場

役名——潮田伴之進。船頭、長助。番人、作右衛門。若黨、左吾平。角力取り、穂山島右衛門。尾張屋勘吉。呉服屋、六之助。草履取り、丹八。渡江川丈七。お澤姉、お富。大のし下女、お倉。同お美代。讀賣り、三五郎。大のし、富八。東金稲のお澤。津川勝次郎。藝者、お俊。角力取り、白藤源太。足駄の齒入れ、權助。坂間傳兵衛。

本舞臺、三間の間、正面、上の方に九尺の格子を附け、それより下の方へ掛けて、尾根附きの門拵らへ。左右へ開き戸、これに引き戸の滑り取り附けてあり。門の鴨居に神田川參會といふ札下げてあり。すべて柳橋大のしの門口。幕の中より大のし富八、やつしの形にて、入り口に長火鉢を据ゑ、これに串に刺したる大きなる鯛を焼いて居る。長床几にお倉、お美代、前垂れ、下女の拵らへ、笊に入れたる嫁菜を拵らへ居る。辻打ちにて幕明く。

ト呉服屋六之助、町人、羽織、やつしの形にて出て來る。後より尾張屋勘吉、やつし、前差しの形にて、仕出し大勢に交つて出て來る。

六之　勘吉どん。どうぞ今日は捕まへたいものだの。

勘吉　イヤモウ、兩國あたりに毎日まごついて居る筈でござる。

ト云ひ／＼、舞臺へ來て、富八を見て

六之　富八さん、お忙がしいの。

富八　オ、、お前方はなんだ。今日は出番か。ちつと寄つて行きなさいな。

勘吉　イエ／＼、ちつと尋ねる者がござるて。

富八　エ、、駈落ち者かえ。

勘吉　なにサ、勝次郎といふ浪人サ。

くら　ア、、そりや向う河岸にござります、勝次郎さんの事かえ。

兩人　左やうサ。

富八　あの人なら、毎日おれが内へお遊びにござるて。

兩人　そんなら、お前のお座敷を借りて、待つて居やせう

か。

みよ　モシ、六之助さん。今日此方の內に來て居なさんす
お俊さんが、お前に逢ひたいと云うてござんしたぞえ。

六之　エヽ、お俊さんが來てかえ。あなたのお賴みの櫛の
誂文、幸ひと持つて來たに。

勘吉　いゝ幸ひだ。お俊さんに逢つて行きやせう。

富八　さうしなさい。今日は神田川の參會、坂間の旦那傳
兵衞さまの座敷に出て居なさる。てまへ達、敎へて進ぜ
ろ。

くら　アイ〳〵。サア、お出でなさんせ。

六之　そんならさうしませう。

勘吉　勝次郎どのに逢ふまで、富八さん、お座敷を塞げま
すよ。

富八　ゆつくりと用を足しなさい。

下女　サア、お出でなさんせ。

ト辻打ちになり、六之助、勘吉、お倉、お美代、附い
て內へ入る。富八捨ぜりふにて、燒き物の鯛を臺所へ
運んで居る。矢張り辻打ちにて、向うより岩淵の權助、
やつし、そぼろなる形にて、素麵櫃へ抱き子を入れ、
片荷の箱に道具を入れ、これを天秤棒にて擔げ

權助　足駄の齒入れ。足駄の齒入れ。

ト云ひながら出て來る。富八見て

富八　オヽイ。好い所へ齒入れが來た。コレ、下駄や足駄
の齒を、みんな出して入れさせないか。

下女　アイ〳〵。

ト古下駄を二三足持つて出て來て

サア、これを入れて下さんせ。

富八　コレ、値切り小切りはしないに依つて、丈夫にして
もらはうぜ。

權助　なにサ、齒入ればつかりは、掛け値はござりませぬ。
いつも致しますから、如才はござりませぬ。

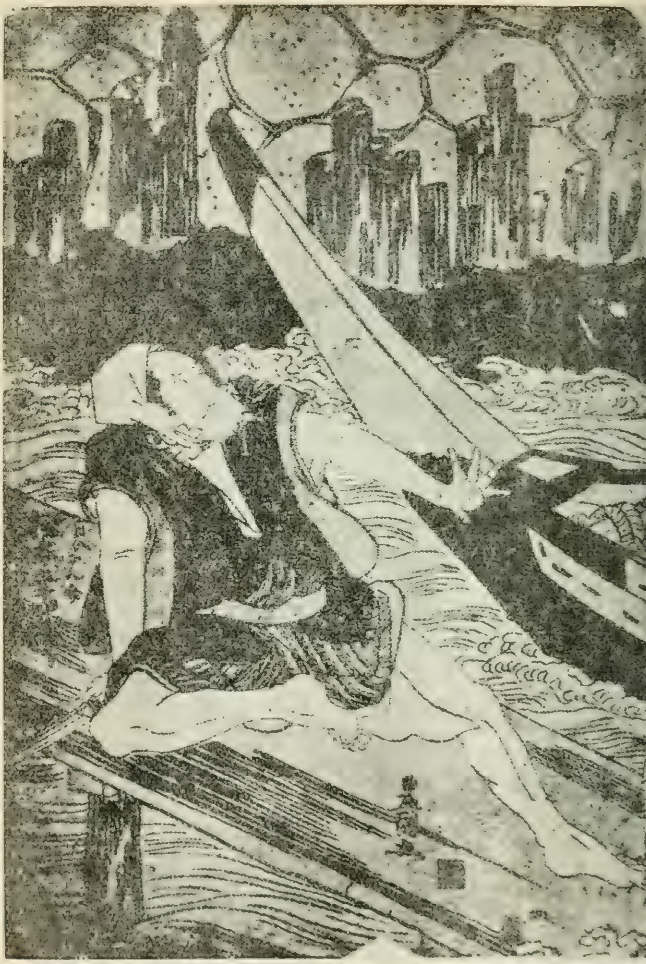
ト云ふうち、下座より若い者、足駄と下駄を繩に吊し
持つて來て

男　コレ〳〵、これをみんな入れて下さい。そして、こ
の差し齒の方は、ギク〳〵しないやうに入れて、この河
內屋へ持つて來さつし。その時、錢を遣るよ。

ト云ひ捨てゝ下座へ入る。

富八　ソレ、見さつし。おれが呼び掛けたばつかりで、段
段近所から持つて來るワ。その格子の際が好からう。

權助　アイ〳〵。日當りが好い。ドリヤ、爰らで仕事を始



初演當時の錦繪　五世松本幸四郎の權助

めようか。

ト辻打ちになり、格子の際へ荷を下ろし、鉋、鋸、才槌など取出し仕事にかゝる。向うよりお富、やつし、女房の拵らへ、後ろ帶、振り袖、眼病體のお澤、錦繪を懐へ入れ、紅絹の目拭きを持ち、供の男一人、附いて出る。後より潮田伴之進、羽織、着流し、大小ばつちにて、出て來る。後より丹八、紺看板、供の形にて、持ち草履を持つて出て來る。皆々直ぐに舞臺へ來て、伴之進、富八を見て

伴之　オヽ、大のしか。先日はいつもながら喰べ醉つたこ。今日は、あの時の勘定を致さうと思つて參つた。

富八　それは有り難うござります。マア〳〵、これへお掛けなされませ。

丹八　お旦那、御覽じませ。いつも〳〵、よく客のある內でござります。

伴之　左やう〳〵。大分取込みだ。

ト床几へかける。

富八　イヤモウ、今日は參會と伊勢講で、殊の外取込んで居りまするて。

トお富を見て

コレ、お富さん、今日は大分手間どりましたね。

とみ　サア、今日は行きやうが遲うなつたゆゑ、療治は後へ廻つたその代り、ゆつくりとお療治も受けて、歸りはちつとこの子にも氣を晴らさゝうと、あの廣小路で方々見せて居りましたが、豐國とやらの畫いた錦繪を、在所へ土產にしたいと云ふゆゑ、それを買うて、見附けを越して、藏前の傳兵衞さんの所へ寄つたれば、今日は參會で、此方の內へ來てぢやと聞いて、それからそこ〳〵にして戻りましたが、其方も草臥れはせなんだかえ。

さは　イエ〳〵、わたしもヂッとして居るより、步いて居る方がようござんすわいな。

富八　それがよいのサ。そんなら濱町から見附けを出て、傳兵衞さんの所へ寄つて歸つて來たのか。道理で妙な方から歸つて來たと思つた。なんでも今、この子の云ふ通り、紛れてよい事もあるものだ。なんと、それ程步くうち、ちつとづつ方々が見ようなつたやうか。

さは　どうしてマア、心にこれが見たいと思うたとて、自由にならぬこの病。いつそ一思ひに、この目が潰れてしまうたら、結句思ひはあるまいと、思へばいとゞ氣合ひが惡うござんすわいなア。

とみ　又其やうな事云やるかいの。此やうに何から何まで、お世話になる富八さま、なんぼ心安立てぢやとて、ほんにお氣の毒な事ばつかり。必らず氣に障へて下さりますなえ。

富八　なんの、大事ないのサ。どうしてわたしが氣にかけるものだ。そんな事は打ッちやつて置くがよい。時に、國へ土産に買つて來たといふ、錦繪はこれか。

ト見ようとすれば、お澤押へて

さは　アモシ、なんのわたしが物好きで買うたこの錦繪。見やしやんせいでもようござんすわいな。

富八　ハテ、何も恥かしい事はない。ちよつと見せなさい。

ト云ひながら取つて錦繪を開き

なんだ、國へ土産にする繪は、豐國の描いた坂三津に、杜若か。大和屋に大和屋、有り難いの。今では田舍の衆も江戸へ出ると、直ぐに浮氣になる奴サ。

伴之　イヤモウ、面妖な。娘子供は三津五郎を贔屓にするて。時に、あの二人は、大のしが親類といふやうな事か。

富八　イヤ、別して左樣な儀でもござりませぬが、坂間の旦那傳兵衛さまの、母方の御親類。在所は上總の東金、江戸見物やら療治やらにござりましたが、どうでも坂間の内はお取込み。殊に私しどもの内は川を見晴らし、保養にもならうかと、お二人ながら此方の内へ、御逗留でござりますて。

伴之　ア丶、斯う見たところが、どうやら姉妹と見えるわい。ハテサテ、田舍にしては好い生れぢや。殊にまだ嫁入り前と見えまするな。

富八　左樣でござりまする。シタガ、あの子には云ひ號けの男があれど、そのマア男が、一向國へ歸らぬに依つて

伴之　ア丶、男に捨てられたか。

トうか〳〵いふ。お澤ハツと恥かしきこなし。

とみ　ア丶コレ、富八さん。なんのマア、云うても云はいでもの事を。

ト思ひ入れ。富八、氣の毒なるこなし。

富八　そいつは悪かつた。ツイうか〳〵と、イヤハヤ、我が身ながら、よく無駄を云ふ奴サ。

トこの時、荷の中にて抱き子泣く。

權助　ア丶、また吠え出したな。

ト荷の中より抱き子を出し、思ひ入れあつて

エ丶、又グツスリやりやアがつた。また寒い目をしやアがれ。

ト上の着物を剝ぎ、荷の上へ掛けて干す。皆々見て

富八　なんだ、この男は。足駄の齒入れの荷の中に、小さい子を入れて歩くの。

とみ　ほんに、好い子ぢやが、こりやお前、母親が無いのかえ。

權助　アイ。有つたといつて、無いも同然。この小僧は里に取りやした。

さは　エヽ、そんなら男のお子かえ。

權助　アイ。よく肥つて居りやすよ。

とみ　アレ、妹、其方に見せたい。よい男の子ぢやわいの。

さは　ほんに、里に取りなんしたとあれば、定めしそのお子の親御さんも、乳が無いといふやうな事でござんせう。申し姉さん。どうぞそのお小さいのを、わたしに抱かせて下さんせいなア。

とみ　ほんに其方は子煩惱。ドレ、わたしがあなたに譯云うて。……ア、モシ〱、お聞きなさる通り、あの子は常から子可愛がり。どうぞちつと、抱かせてやつて下さりませ。

權助　お易い御用サ。併し抱き賃が出やすよ。ハヽヽ、ハヽ。

とみ　ドレ、叔母がちつと抱いてやりませう。……サア、妹、このお子ぢや。抱いて見や〱。

さは　アイ〱。

ト抱き取り

これはマア、よう肥えて居なさんすなア。……シタガ、こりやいかう肌薄でござんする。

權助　アイ。たつた今、拔きやしたから、彼處へ干して置きました。

富八　コレ、齒入れどん。こなたはその子を、どこから里に取つた。

權助　アイ、あの小僧はね、當時盛んの角力の關取、白藤どのと、藝者のお俊さんとやらの仲に出來た子サ。モシ、シタガ、こんな事は沙汰無しだよ。

トこれにて皆々思ひ入れあつて

伴之　ナニ、その餓鬼があのお俊の

ト思ひ入れ。

とみ　お俊さんとは、この間、爰のお內でお目にかゝつた

さは　あの藝者さんと白藤さんの、仲に儲けた、アノ、この子が。エヽ。

ト掬りする途端に、抱き子頻りに泣く。お澤いぶりつけながら、抱き子の顏を見たきこなし。

とみ　エヽ、ソレ、お小さいのが、おむづかつてぢやわいの。

さは　でもマア、この子の。

ト下ろして思ひ入れ。

權助　アヽ、寄越しなさい。泣き出すと止度の無い小倅だ。大の泣き面だ。サア、爰へ寄越しなさい。

さは　サヽもつとこの子を、抱かせて置いて下さんせいな。

とみ　いま聞きやつた譯ならば、尤もな事ながら、それではどうもそのお子を

さは　サヽさう思へども、床しいお方の。

ト抱きかゝへて思ひ入れ。

權助　ハテ、また泣きやすよ。

ト差寄つて取らうとする。向うにて

大勢　喧嘩々々。

ト云ふ。

丹八　お旦那、喧嘩が出來たさうでござります。

富八　アヽ、喧嘩がある。お富さん、危なうござりますよ。

權助　巾着切りでも捕まつたか。ドレ、お寄越しなさいやし。

ト無理にもぎ取る。また抱き子泣く。

エヽ、又吠える。

ト振り廻す。

さは　せめてあの子に

とみ　ハテマア、來やいなう。

ト辻打ちになり、お澤、抱き子へ心殘すを、お富無理に手を曳き、内へ入る。權助、矢張り荷の方へ寄つて抱き子をいぶりつけ、細工にかゝる。向うより津川勝次郎、下駄がけ、着流し、大小の形にて、讀賣りの體の三五郎の襟髪を引摑つて出て來る。後より船頭長助下駄がけの形にて、捨ぜりふにて取押へながら、出て來て、直ぐに舞臺へ來て、勝次郎、伴之進と顏見合せ、あたりへこなしあつて、三五郎を引据ゑる。

伴之　アヽ、御身は勝次郎どのぢやござらぬか。

勝次　これは伴之進さまでござりましたか。

伴之　其許は町人を捕へて、晝中に何を仰山に。

勝次　サア、聞かつしやりませ。大抵太い奴ぢやアござらぬ。コレ、エヽ、われが請け判をして寄越した又助は、大切な用事を申し附けたに、折角首尾好くしおほせて、

その短刀を

ト云はうとして、思ひ入れあり

サア、大切な物を貰つて來ますと、持つて出たが最期の助、それから直ぐに隨徳寺。いま逼塞の身で、家來に駈落ちをされちやア、第一、此方の工面が違ふ。聞けば、われが内に、あの又助を匿まつて置くげな。わりやア請け判の身分で、奉公人に盗みをさせるか。サア、又助を出せ。出しやアがれ〳〵。

三五　モシ〳〵、旦那、仰しやる事は御尤もでもございますが、なんだか根ツから譯が解りませぬ。

勝次　何が解らねえ。

三五　サア、成る程、又助を私しが宿になつて、あたなへ上げました。奉公人の取逃げ、駈落ちをするを、ナニ私しが馴れ合つて致しませう。その上、何をマア盗んで逃げました。小袖か、お羽織か、代物が解らねば、詮議の致しやうがございませぬ。して、品は何でございまする。

ト これにて勝次郎、困つた思ひ入れにて

勝次　サア、なんであらうと、大切な品だ。又助を連れて來れば解る。うぬ、宿の役だ。たつた今連れてうせろ。

三五　ハテサテ、それが御無理でございまする。

勝次　何が無理だ。

ト立ちかゝる、長助留めて

長助　モシ〳〵、勝次郎さん。その中間の又助とやらが、請け判を据ゑたこの三五郎どの、遁がれ手はねえが、今もあの人が云ふを聞けば、その又助が駈落ちをしても、おらア旦那と内證は、一つ釜だと云つたけにございます。そんならお前様御得心で、家來に駈落ちをさせなすつたのでございませう。

勝次　默りやアがれ。主が家來と馴れ合ひの駈落ちと吐かすのか。何を茲な房州船頭め。うぬが知つた事ぢやアねえ。すツ込んでうしやアがれ。

ト これにて長助ムツとして

長助　なんだ、すツ込め。イヤ、すツ込むめえ。こなさんも二本差せど、萬更主家來の馴れ合ひの、駈落ちをさせかねえ人でもねえ。この中もわつしが附いて、深川へ行つて、一兩二分の下がりを、この長助の顔で借りてやつたよ。まだその上にこの間、茅場町の角力で、千疋といふもの花を遣つて、それもわつしが請合ひ。向うからは催促を受けるし、して見りやア。マア、こなさんも、あんまり又助と遁がれた仲ぢやアねえ。サア、その請合

ひの金を、いま寄越さつしやるか。
勝次　コレ、エ、。うぬは人中で、おれに天井見せやアがるな。
長助　見せりやアどうする。こんたは二本差しだとて、怖かアねえよ。
勝次　どうしたと。
長助　やかましい。借りた物を出して云はつしやいな。
勝次　うぬ。これといふも、この讀賣りの野郎め。
ト三五郎へ立ちかゝるを、富八、この中へ入り
富八　これはしたり。マア、靜かになさいやし。コレ、こなたもおれが内へでも行かつしやい。
三五　なにサ、打ッちやつて置きなさいやし。
富八　ハテ、人の云ふ事も聞くものだ。
丹八　サア〳〵。マア、どこへか行かつしやいな〳〵。
三五　ハテ、打ッちやつて置きなさい。
ト辻打ちになり、捨ぜりふにて、丹八、三五郎を引ッ張つて、大のしの中へ入る。
勝次　コレ、エ、、なぜあの野郎を逃がした。エ、、長助、うぬはあの野郎と共謀だな。
長助　措かつしやい。駈落ちの中間と、こなたさんが共謀であらうが。
勝次　どうしたと。
ト下駄を脱いで、長助へ打つてかゝる。長助、この手を摑まへて、あちこち振り廻す途端に、この下駄權助の前へ飛ぶ。下駄の歯は缺ける。權助、これを取上げ
權助　モシ、この下駄へ歯を入れますかえ。
ト下駄を見せる。
皆々　ア、、今の下駄の歯が缺けて
勝次　コレ、歯入れ。ツイ粗忽で、お主の前へ飛んだ下駄、ドレ、爰へ寄越しやれ。
權助　わしが面へ、當る分にやア構はぬが、すんでの事に、預かり物のこの小僧に
勝次　ハテ、お主は、小さいのを連れて商賣に歩くか。
權助　この節は一職ぢやアいかねえから、足駄の歯入れと里ツ子を、一つ荷にして歩くのサ。
富八　ハテ、商賣にやア精を出すなう。時に、旦那、一つ召上がりませぬか。
伴之　身も左やう存じて參つたが、この人にちつと用事もあれば、マア〳〵、てまへは先へ行つて。コレ、あのお俊が來て居るぢやアないか。

富八　左樣でござります。

伴之　然らば追ツつけ行く程に、お俊にも左やう申してくりやれ。

富八　畏まりました。あなた、御一緒にお出でなされませよ。

ト辻打ちになり、勝次郎に挨拶して内へ入る。

長助　コレ、勝さん。下駄を振り上げる程なら、立替への金を寄越しなさいな。

ト權助は又元の所へ坐り、仕事にかゝる。

伴之　コレ〳〵。長助、身もあれで聞いて居つたが、當時不自由な勝次郎どの、大概な事は

長助　イエ〳〵、折角の御挨拶でも、どうもこの事ばかりは

伴之　待たれんと云ふのか。勝次郎どの、ハテ、氣の毒な儀でござる。

ト勝次郎、思ひ入れあつて

勝次　思ひ出した。好い物がある。コレ、長助、大切な物だが、金の出來るまで、この折紙をわれに預けて置く。サア、これで二三日待つてくれろ。

ト懷の折紙を長助に渡す。

長助　ナニ、折紙え。こんな反故で五兩餘りの請合ひを待てかえ。モシ、わしやア金で欲しいわな。

伴之　コリヤ〳〵、わいらは何も知らぬから、尤もな事ぢやが、その折紙といふは、そりや大金になる品。二三日のところ待つて進ぜろ。ハテ證文も同然、身が請合ふ程に、その折紙を預かつて。

長助　エヽ、左樣なら、お前さん請合ひかえ。ようござりやす。さう仰しやるからは、證文だと思つて、預かつて置きませう。

伴之　それで身共も、勝次郎どのも立つて、マア、喜ばしいわえ。

勝次　コレ、反故だと思つて、また粗忽にするなよ。

長助　イヤモウ、證文だと思やア、しつかりと預かつて置きませうよ。

勝次　併し、人に決して見せめえぞ。

長助　伴之進さま、こりやアお世話になりました。

ト辻打ちになり、長助、大のしの中へ入る。勝次郎見送り

勝次　成る程、下司といふものは、仕方のないものだ。時に、伴之進さま、わしが邸をだりむくつた後で、お金が

二百兩紛失して、兄の主水が難儀になつて居るといふ話しを聞きましたが、貴殿には其やうな事御存じないか。

トこれにて伴之進ギョッとして、また思ひ入れあつて

伴之　それは珍說。……一向承らぬが、そりや虛說でござらう。

勝次　イヤ〳〵、なんでも兄の主水は、不首尾に違ひない。大方、外に惡い奴が、二百兩まき上げて、おッせいがッせい、この勝次郎に、冠せる工面でした事であらうが、これぱつかりは、わしが出た跡だによつて、萬更わしが科にもなるまいが、なんと好い事をする奴があるではござらぬか。

ト伴之進こなしあつて

伴之　ハテ、それ程の事を、拙者が知らぬといふ事はござらぬが、先づ密かに樣子を探つて見ませう。

ト此うち勝次郎も思ひ入れ。權助、荷箱の中より、短刀を出して、伴之進が前へ持つて行き

權助　モシ、お侍ひ樣。あなたをお見かけ申しましてのお願ひでござります。どうぞこの短刀をお買ひなすつては下さりませぬか。

ト出す。勝次郎見て、悧りして

勝次　オヽ、この短刀は、今最中、尋ねて居るおれが短刀だ。ハア、そんならうぬは、駈落ちした又助めと馴れ合ひだな。サア、此方へ返しやアがれ。

ト手を掛けるを拂ひのけ

權助　エヽ、措きやアがんなさい。ナニ、おれがその譯を知るものだ。あの駄折助めが、そこら中から附き馬や、尻を持つてうしやアがつて、トヾは云ひ譯無さに、どうぞこの短刀を賣つてなりと、方々の借りを拂つて下さいと、云つて置いて行つたッきり、行くへが知れない。なんでもこの短刀にやア、剛氣に種々な足が附いてあるが、それとも盜人になりやア、お前も抱いて入るから、マア、さう思つてござい。

勝次　エヽ、コレ、もうちつと早く出しやアがると、双方都合よくやらかすものを、見す〳〵おれが物を

權助　何がどうした。忌々しい。いつその事に、おれが方から持ち出さうか。

伴之　コレサ町人。それは短氣。コリヤ、短氣は損氣ぢや。こりや、この伴之進が買うて遣はさうか。

權助　そりやア有り難い。達て買ひたいと云はつしやれば、商人も足許を見て賣り切るところが、小判で百兩な

ら、賣りませう。
伴之　アノ、百兩。
權助　左やうサ。
伴之　成る程。早速買ひ取らう。幸ひ、これに金子はあれども、
　ト勝次郎へ隱すこなしあつて
是非身共が求めるに相違ないが、なんと、晩まで待つてくれまいか。
權助　ようござります。御人體な伴之進さまとやら、違ひもござりますまい。待つて上げませう。もう斯う値の出來た上からは、わつしが持つて居るも心遣ひ。こりやアあなたへお渡し申しませう。
　ト伴之進へ渡す。
伴之　すれば、聞分けて短刀を、身共へ渡してくれるか。
權助　アイ、岩淵の權助でござります。泥の中でもこの足駄、口と心は入れ替つて居ります。
伴之　ハテ、頼もしい。然らば、キッと晩方まで。
權助　エ、、有り難い。そんなら短刀はお渡し申しましたよ。ドリヤ、錢を集めて來ようか。
　ト抱き子を懷へ入れて、足駄を二三足持つて、下座へ入る。

伴之　先づ、短刀は手に入つたワ。
勝次　茲に一つ、好い事が出來たは、その以前、おれが親仁が、白藤が親の源兵衞といふ奴を、世話をして郷士にした、その大恩があるゆゑに、白藤はお俊が所に、居候ふとなつて居ても、この勝次郎へ仕送りをしてくれる白藤、この短刀を玉に遣うて、あの白藤に首尾よく買はせて、身共が邸へ歸參の手蔓。
伴之　又その上に、今の歯入れめは、高が町人、コレ、
　ト勝次郎に囁く。勝次郎呑み込む。
ナ、ソレ、斯うして彼方へ、おれは返してしまふワ。ところで、こなたが白藤めに、百兩拵らへさせて買はせれば、正味の短刀は此方へ〆め上げて、貴樣の手先で百兩出來るワ。よしか。そこで又
　ト囁く。勝次郎ヅク〳〵して
勝次　合點だ。うまし〳〵。
伴之　ざつと一つ飲まうか。
勝次　飲むべい〳〵。
伴之　サア、お來やれ。
　ト辻打ちになり、伴之進先に勝次郎、勇み立つて大の

しへ入る。直ぐに向うより白藤源太、關取の形、羽織を肩に掛け、誂らへの提げ煙草入れを提げ、裏附き草履にて出て來る。後より槌山島右衞門、浪江川丈七いづれも弟子角力の拵らへにて、出て來る。花道にて

島右　モシ、親方、大のしへ寄つて見なさりやすか。

源太　インニャ、今日はお俊がキッと出て居るであらうから、寄つたら又、口がやかましからう。

丈七　それサ。併し、坂間の傳兵衞さんに逢ひなさらずば、折角呼びに寄越したものだに依つて、ナア槌山。

島右　それサ。いま、場所から歸りがけだと云つて、ちよつと寄つて見るがようごんせう。

源太　成る程、それもさうだ。そんならわいら二人大のしへ行つて、誰れぞ呼び出して聞いて見るがよい。

兩人　アイ。

源太　直ぐに先へ行けよ。

兩人　アイ。

ト島右衞門、丈七、先へ立つ。源太、後より舞臺へ來る。此うち、權助、下座より古下駄足駄を提げて出て來る。懷の子泣くゆゑ、下駄を枕にさせ、叩きつけ、仕事にかゝらうとしてフッと源太を見て

權助　モシ、お關取樣。どうぞお煙草一服、お貰ひ申したうござります。

源太　煙草か。ソレ。

ト提げたる煙草入れごと權助へ渡す。權助取つて見て、愕りして

權助　こりやア大層なお煙草入れでござりますね。どうしてもお關取は違つたものだ。そして金物は、す、〳〵、こりやアしかも、銀で蝶花形だね、成る程、豪氣な煙草入れだ。そして鎖ばかりがいゝ金だ。これが一つ有りやア、一かどの元手になります。ハ、、、、、、

ト云ひながら、煙草を取つて煙草入れを源太へ返し

有り難うござります。

ト直ぐに仕事にかゝる。

島右　ほんに親方、いつの間にか煙草入れが出來ましたね。

丈七　見やれ。なんと云つても、越川は古狸だよなア。

島右　モシ、そんなら古いのを、わたしにおくんなさいやし。

丈七　コレ、お主はお俊さんをいたぶつて、煙草入れを取つたぢやアないか。今度はおれが番だワ。

島右　なにサ。なんでも

丈七　剛氣に慾張つた奴だ。こりやアおれが物よ。

島右　ナニ、われに遣つてつまるものか。

源太　エヽ、此奴等は役にも立たない事を吐かしやアがる、それよりおれが云ひつけた事をしやアがれ。

兩人　アイ。

ト大のしの門口へ立寄り

オイ。誰れぞちやつと頼みたうごんす。

ト合ひ方になり、奥よりお俊、着流しの形にて、少し醉うて居るこなしにて、出て來る。兩人、お俊を見て

オヽ、お俊さんかえ。

しゆ　なんぢやいな。お前方は大きな聲で、けたゝましい。ちと嗜なんだがよいわいな。

丈七　お俊さん。わしらも親方と一緒に。

島右　いま場所からの歸りがけサ。

しゆ　ほんにさうでござんすか。白藤さん。お前、なんで爰へござんしたえ。

ト云ひながら、床几へかける。

源太　イヤ、おれもお主が爰へ出て居る事を知らぬではなし、爰へ來たうもないけれど、坂間傳兵衞さまが呼びに寄越してぢやゆゑ、ちよつと呼び出して逢はうと思うて、彼等に云ひつけてやつた所へ、お主が出合ふも、味な事であつたなア。

しゆ　ソレイナア、わたしもお前に逢うて、急に話さにやならぬ事が

トあたりへ思ひ入れ。源太こなしあつて

源太　コレ、わいらも爰の内へ行つて、逢はれるなら、傳兵衞さまに逢つて、おれが來て居るといふ事を話してくれろ。

丈七　アイ、合點でごんす。わしらも爰の内で待つて居て、船頭の長助に逢うてなア。

島右　そんなら親方。

兩人　行つて來ますぞえ。

ト兩人大のしの内へ入る。あと合ひ方。

源太　時に、お俊、話したい事とは、なんぞ又、氣遣ひな事ではないか。

しゆ　サア、外の事でもないがな。困つた事は、あの勝次郎さまが、いつの間にやら、あの下座敷で、例の惡たれ酒でござんすわいな。

源太　ヤ、そんなら奥に勝次郎さまが。エヽ、情ない。そして一人か。外に連れでもあつてか。

ト云ふ所へ、内より

伴之　イヤ、その連れは身共ぢや。

ト合ひ方になり、伴之進、以前の形にて出て來る。お俊、思ひ入れ、伴之進こなしあつて、床几へかける。源太、思ひ入れあり

源太　イヤ、これは伴之進さま。ようお出でなされました。

伴之　オヽ、白藤關取か。ハヽア、見ればお俊と二人、なんぞ遠慮な事ではないかな。

源太　どう致しまして。私しも只今場所から歸りかけ、爰の内へちと用事がござりまして、參りかゝつた所へ、ツイお俊と引合ひましてござります。それは格別、旦那、明日あたり、場所へ入らつしやりませぬか。

伴之　成る程、今度の角力は大入りぢやげな。取分け、伴之進は角力が好きぢや。女と取るが好きぢや。ハヽヽ、ハヽ。兎角、色酒でなければ、面白くない。併し、色戀も金が無うては始まらぬ。近年は、色男ぢやとばかり云うて居ても、金が無くてはいかん事の。身共などはさのみな男でもないが、コレ、これでする。

ト紙入れを出し

此やうに、懐には、三十と五十の金を貯へねば面白うないの。世の中には、色戀をしても、女には働らかせて、それで身過ぎをするやうな男もあるて。ナウ、關取。

源太　左やうでござります。當世は名を取らうより得を取れで、何事も金でござります。殊に、あなたは行き渡つたお生れ。御身上はよし、立派なお武家樣ゆゑ、定めし女の方から、無性矢鱈と持たせかけ、定めしハヤ、お困りなさるでござりませう。

伴之　ナニ、さまでの事もないのさ。……イヤ、今日は、大丸の支拂ひも致して參らねば相成らぬが、慥か吳服代も五六十兩あつたかも知れぬ。

ト紙入れを明け、いろ／＼あつて

慥かその位は有ると思つたが。……ア、これは一角、これは熊の膽。

ト紙入れの中をいろ／＼搔き探す。抱き子泣く、權助、いぶりつけながら、伴之進が云ふ言を聞いて、おづおづと側へ寄り

權助　モシ／＼、あなた。その熊の膽をちつと下さりませぬか。地びたへ寢かして置いたせゐか、蟲がかぶると見えます。

伴之　オヽ、遣らう／＼。先刻の里ッ子か。

權助　左樣でござります。

ト　これにて源太、伴之進、顏見合せ思ひ入れ。伴之進抱き子の着物を見て

伴之　コレ、關人れ。どうも合點のゆかぬ事があるわえ。この餓鬼が着て居る裂れは、去年おれが大丸へ誂らへて、しかも上方へ染めにやつた身が留形。この裂れは……オヽ、お俊、お主が所へも持たせて遣つたが、去年から今年までに、ついに着たのを見た事がないが、お俊、あの留形は拵らへたか。

しゆ　アイ、お前の方から下さんした物ぢやによつて、直ぐに仕立てさうと思うて、慥か

ト　いろ〳〵こなしあり

今に持つて居りますわいなア。ハテ、似た物は烏、なんぼでもあらうわいな。

ト　此せりふなどぢぐちに云ふ。此うちに權助、薬を持つて

權助　ハイ、有り難うござります。

ト　元の所へ來る。源太、お俊、顏見合せ、思ひ入れ。伴之進、目を附け、合點して

伴之　成る程、大概それで餓鬼が素性も解つたぞえ。なんだか味な詞のめりはりで、どういふ緣か、あの小倅がどうも可愛くつてならぬ。世は樣々な人心だ。どこの奴か知らねえが、頑是もない子を里に遣り、乳が無けりやアたい。ハヽヽ、身共とした事が、要らざる人の疝氣で、癇の蟲で、今の間にころりばつたり。エヽ、親の面が見ア、大分鬱いで來た。オヽ、おればかりと思へば、お俊も白藤も、目に淚を持つて、鬱いだ顏附きだの。コレ、なんと茲は氣を變へて、わつさりと酒にせうぢやないか。

ト　お俊、思ひ入れあり

しゆ　ほんに、それもようござんせうわいな。

ト　辻打ちになり、奥より三五郎、丹八出て來り

丹八　モシ〳〵、お旦那、あの若い者が面白い流行り唄を覺りまする。お召しなされませ。イヤ、面白い文句でござります。

伴之　アヽ、なんぢや、流行り唄ぢや。そりや好からう。本は殘らず、身共が買ふ程に、サア〳〵、そこで唄へ唄へ。

三五　ハイ〳〵、それは有り難うござります。併し、餘り珍らしい唄でもござりませぬ。私しは、度々此やうな商ひを仕りまするゆゑ、御覽じませ、四つ竹を所持して

居りまするて。

ト懷より四つ竹を出し、格子の方へ來て

モシ〳〵、お內の女中さん、ちよつと三味線をお賴み申しやす。

トこれより三味線入りの四つ竹節になり、仕出し大勢出かゝり、これを聞いて居る。

東上總の市見の郡、村の小名をば金置村と、疋田源兵衞が總領息子、角力取りにて白藤源太、親の源兵衞が果てられて後、五十五石の田畑屋敷、とんだ藝者に皆入れあげて、今は互ひに心底づくで、情のおどもり、子のある仲では、着替へも質屋へ鳶色縮緬、お金をねだつた金無し鍋の、帶を蒲團にしのぎもさらつて、いとし可愛の子ゆゑに星扶持、ぶち〳〵肥つた角力取り草、戀ゆゑ細つた顋で蠅、ほう〳〵、はい〳〵、ほら〳〵〳〵。

トこの唄のうち、舞臺の人數よろしく思ひ入れ。源太物云はずに引ッ捕へる。

皆々　喧嘩だ〳〵。

ト立騷ぐ。

源太　白藤が聞く前で、もう好い加減に唄やアがれ。

ト取つて投げる。

仕出　ソリヤ投げられたワ。

ト足早に下座へ入る。三五郎、起き上がつて

三五　オヽ、痛い〳〵。コレ、關取、讀賣りの商人を、なぜこなさん、力に任せてぶん投げた。骨が碎けて、アヽ痛い〳〵〳〵。

トねだりかゝる。奧より富八、刺身庖丁を持ち、ツカツカと出て來り

富八　コレ、エヽ、この野郎め。うぬ、大のしの店先で、關取とあの子の事を、四つ竹節に拵らへたは、われが細工か。外に賴んだ奴でもあるか。おれが內で唄はれちやア、この富八が立たねえ。持つて來た庖丁で、うぬが鼻を削いでやらうか。

ト立ちかゝる。三五郎、向うへ逃げる。伴之進、駈け寄つて

伴之　コレサ、富八、大人氣ねえ。あんな者を相手にして、マア〳〵、離しやれ〳〵。

富八　ナニ、あの野郎め。

ト振り上げる。伴之進留めて、もぎとる途端に、庖丁飛んで、門口の天水桶へ落ちる。

伴之　この男も氣の短かい。あんな者を、大人氣ねえ。

三五　あんな者とは、お前頼みなすつたから

伴之　エヽ、やかましいわえ。氣をきかせて、早く行きやアがれ。

ト目顏で知らせる。

三五　それだといつて、あの野郎までが同じやうに、鼻を削ぐも凄まじいわえ。エヽ、しみツたれ野郎、エヽ。

ト辻打ちになり、這々向うへ入る。富八、立ちかゝつて

富八　アレ、又、あんなたわ言を。

伴之　エヽ、料簡しやれな。

富八　エヽ、極樂蜻蛉め。

ト思ひ入れあり

モシ、旦那え。只今の庖丁は、どうなりましたえ。

伴之　サア、どう致したのか。そこから飛んだであらう。コリヤ、尋ねて遣はせ。

丹八　ハイ／＼。どこへ參りましたかな。

トあちこち尋ねる。

富八　イエ／＼、捨てゝお置きなされませ。そこいらから出るでござりませう、……イヤ、そりやア、さうと、モシ、旦那え。お誂らへのお吸ひ物が出來ました。サア、一つ召上がりませ。

伴之　オヽ、左やう致さう。コレ、お俊、おてまへも座敷へ參つて、一つ飲みやらぬかいの。

トお俊が手を取る。

しゆ　ハイ、只今、參じまする。わたしやちつと爰に。

伴之　イヤ／＼、白藤が側には置かれぬ。來やれと云ふに。

ト手を取る。お俊その手を拂つて

しゆ　イエ、參りますまいわいな。

伴之　そりや、なぜ／＼。

しゆ　ハテ、お前さんの雇ひぢやござんせぬぞえ。

伴之　ヤ。

しゆ　今日の雇ひは、神田川の傳兵衞さん。あなたのお召しなされたわたしなら、お側に引附けてもお置きなされぢやが、外の雇ひで參つたわたし、今日ばかりは、アイ、餘り自由にもなり憎うござりまする。

伴之　サ、そりやア

しゆ　左樣なものぢやござんせぬかえ。

伴之　イヤ、こりやお俊の云ふのが皆尤も。ナウ、關取、さうではないか。

源太　どうでござりますか。私しは存じませぬのサ。



初演當時の錦繪　五世松本幸四郎の權助

伴之　イヤモウ、お俊ばうが、皆尤もぢや〳〵。アヽ、お連れ申すまい〳〵。それといふのも、あの足駄の齒入れが

ト權助聞いて

權助　エ、先刻のかえ。

ト短刀拔く仕方をする。

伴之　アコレ、それではない〳〵。ソレ、その下駄箱に居る、オギヤア〳〵に心が殘つて。

ト權助思ひ入れ。

アヽ子供と申す者は、さて〳〵汚い、穢いものぢや。あの小僧めを見て、身共一倍滅入つたやうぢや。コリヤ富八近所の藝者を殘らず呼びに遣れ。コレ、與一兵衞では無いが懷には五十兩、今宵はパツ〳〵と遣ふ。お俊、わが身も御用をおしまひなされたら、ちとお出で。この五十兩を、アヽ、遣ひたい〳〵。

富八　どうでもなされませサ。

伴之　ハテ、つれない挨拶。ナウ、お俊ばう。

しゆ　アイ、間があらば、あなたをお留めに參りませう。

伴之　そりや忝ない。關取も飲みに來やれ。

源太　有り難うござります。

富八　旦那、サア、お出でなされませ。

ト唄になり、伴之進、思ひ入れあつて、丹八、富八附いて奥へ入る。三人殘る。合ひ方。お俊、源太と顏見合ひ居る。

しゆ　こりや兼松ぢやわいな〳〵。

ト駈け寄つて抱き上げる。權助恟りする。

ほんに、よう大きうなりやつたなう。

ト抱きかゝへて思ひ入れ。

權助　モシ〳〵。その里ツ子を兼松と云はつしやるお前は、アヽ、そんならお俊さんとはお前かえ。

しゆ　アイ、恥かしい事ながら、この子を生んだ、わたしは藝者の

源太　お俊とは色戀と、小ツ恥かしいが、浮名の立つた

權助　エヽ、お前が關取の白藤さんかえ。知らねえ事とてわつちの嬶アが乳で預かつた、北本所の岩淵に、今日と暮らして明日の日は、足駄の齒入れで世を送る、權助とはわしが事でござります。

源太　エヽ、貴樣が御亭主權助どのとな。

しゆ　これはマア、おかみさんとは度々お目にかゝつたれど、お前には初めて。何かとこの子が、いかいお世話に

なりますわいな。

權助　イエモウ、嚊アは度々參りまして、御馳走になりますと、歸りますと吹聽いたしまするて。イヤモウ、此やうにお世話を致しますも、これもお前、なんぞの因縁づくでござりやせうよ。ハヽヽヽヽヽ。

源太　誠に縁づくでござらう。イヤ、それはさうと、見れば內儀も同道せず、こなさん男の身で、商賣先までこの子を連れて

權助　サア、お聞きなされませ。この間、この子がね、嚊アが乳を喰ひついてね。なにが、乳がこんなに脹れ上がつて、外科樣へかゝつて、延齡藥だの、膏藥だのと、むづかしい身上が、一倍亂騷ぎでござりやす。そこでお前死かゝつて居る嚊アに、この子を預けても置かれず、と云つて、こんな事をお前方へ知らせたら、どうか強請り事でも申すやうで、お氣の毒と存じやして、御沙汰は致しやせぬが、嚊アは今も知れやせぬ。因果な事にやア、嚊アよりか、この子が可愛くつて、商賣先まで荷へ入れて、彼處や爰で貰ひ乳の、モシ、お案じなさいやすな、煩らはせる事ぢやアござりやせぬ。ソレ、御覽じやせ、よく肥つて居ませうが。ほんに、愛嬌のあるところは、お母さんに似申して、それ〳〵、目鼻立ちはお父さんに其まゝ。

ト兩方の顏を見比べて、思ひ入れ。

しゆ　エヽ、そんならお內儀さんは、乳が脹れて、御病氣かえ。そりやお氣の毒な事でござんすなア。

權助　なにサ、お前、この子に喰ひつかれて、それが元になつて、嚊アが死んだといつて、この子を下手人にも取られまいし、お案じなさる事はござりやせぬ。併し、たつた一分二百で、嚊アを一人殺すかと思へば、あんまり外聞の好い話しでもござりやせぬよ。

ト空淚をこぼして思ひ入れ。源太、氣の毒さうに

源太　イヤモウ、辨まへ無しの當歲子。ハテ、そりやア困つた事をしましたの。

權助　なにサ、お案じなさる事はござりやせぬ。サア、爰へ遣はされませ。廣小路で一杯飲ませて來やせう。サア、モシ、爰へお寄越しなさいやし。

トお俊渡し兼ねる思ひ入れ。權助抱き取る。お俊心附き、懷の鏡袋の間より、紙包みの小粒を出し

しゆ　モシ、こりやあまり僅かなれど、お內儀さんのお口に合ふもの、なんなりと買うて上げて下さんせ。

ト權助に渡す。權助、捻り見て、思ひ入れあり

權助　へ、、、、。およしなされやせな。ナニ、お前、こんな事をなすつて、却つてお氣の毒でござりやす。へ、へ、、。左やうなら、お貰ひ申して置きやせうか。

ト空笑ひをする。

源太　醫者にでも見せさつしやらば、必らず遠慮無しに、云うて寄越さつしやりませよ。

權助　ハイ／＼、その時はお願ひ申しやせう。左やうならお二人さん、又この間にお目にかゝりやせう。お案じなされますなえ。

しゆ　そんならお頼み申しまする。御病人大切に

源太　氣を附けて進ぜさつしやい。

權助　ハイ／＼。こりや有り難うござりやす。サア、お乳を飲ませるよ。泣かねえものだ。ドリヤ、參りやせうか。……足駄の齒入れ。足駄の齒入れ。

ト辻打ちになり、抱き子を懷へ入れ、荷を擔いで、下座の方へ入る。兩人殘り、こなしあつて

しゆ　源太さん、堪忍して下さんせ。お前の爲には總領のあの千松、わたしが藝者の身過ぎゆゑ、育てる事も世間の手前、他人に預けりや、あのやうに。

源太　云やればさうかえ。辨まへのない餓鬼だといつて、この白癡が眞實親身の一人子を、錢にかけたる泥足駄、それと一つに荷の中へ、轉がし込んで育てるは、犬や猫にも劣つたかと、思へば／＼泣かぬ目に、熱い涙が先立つて

ト思ひ入れあり

エ、馬鹿に涙をこぼす奴サ。

しゆ　尤もでござんす。思ひ廻せば思ふ程。

トこなしあつて

ホ、、、お前ばかりかいな。わたしまでが同じやうに、ホ、、。これだもの。子を持つちやア、もう段切れだなう。

ト兩人涙をこぼし合うて、思ひ入れ。辻打ちになり、向うより若黨左五平、一本差しにて、息せきと出て來り、源太を見て

左五　これは關取ではござらぬか。

源太　左やう仰しやるは、主水さまの御家來、左五平どのかな。

左五　左樣でござりまする。内々其許へ急御用ござつて、當時の旅宿と承る、藥研堀まで參りしところ、他行と

の儀。せめてお使ひの印、お俊どのになりとお目にかゝつて參りたく、雇ひ先を承り、これへ參つてござるて。火急の御狀、サ、拜見なさるがよい。

ト懐より一通を出し、渡す。

源太　これはハヤ、御苦勞に存じまする。暫らくお控へ下さりませ。

ト封を切る。

しゆ　なんぞ案じる事ぢやござんせぬかえ。

源太　サ、おれもさう思ふて。

ト狀をいろ／＼讀む事あつて

この御狀の趣きにては、この白藤めがお抱へと罷り成り、お目見得延引仕るも、お屋敷内にて樣々とのお取込み。殊に短刀の儀も、御舍弟勝次郎さまに一家中の疑ひ。その上お出入りの商人へ、騙りがましき事ござるとの御紙面。何とも以て

左五　イヤモウ、申さうやうもない體裁。この間よりお聞きの通り、いつの間にやらお役所の通ひを盜み、吳服屋或ひは小間物屋、騙り同然な事ども、金子〆高五十兩も主勝次郎方より償はねば、盜賊の惡名。合ひ役家中へも水が立たぬと、殊の外の御立腹。明日までに金子調達いたさねば、お役所の手前。ハテサテ、氣の毒な儀でござりまする。

トこの時、奥の方バタ／＼にて、勝次郎逃げて出る。尾張屋勘吉、吳服屋六之助、追ひかけ出て

六之　勝次郎さま、見附けました。吳服物の通ひの一件

勘吉　小間物の御用も、お役所では知らぬとある。

兩人　サア、お前は騙りだ。ござりませ／＼。

ト立ちかゝるを、突き退け／＼、兩人を投げ退け、刀に手をかけて、立ちかゝるゆゑ、二人は這々と逃げて入る。源太駈け寄つて、勝次郎を引きつける。

勝次　エヽ、離せ／＼。慮外な奴等だ。ぶツ放して

源太　コレ、勝次郎さま、今の二人がお前へ慮外も、元の起りは、コレ、これでござりませうがな。

ト手紙を見せる。勝次郎取つて、よく／＼見て

勝次　すりや、お役所の通ひの譯を

源太　明日までにこの金子、五十兩を差上げねば、あたのお身に關はる事。兄御樣には御家中へ、面が立たぬとこの文體。騙られた今の二人、こなたは切つて濟みますか。お屋敷内で紛失の、その短刀の疑ひも、お前にかかつて、モシ、それに心が附かつしやらぬか。エヽ、お

前はなう。

ト思ひ入れ。勝次郎、悄げたるこなしあつて

勝次　さう聞いては、云ひ譯も無えこの體裁。關取、よいやうに頼みます。

しゆ　モシ、僕はしやんす五十兩、ちつとはお前、お心當りがござんすかえ。

勝次　どうして〳〵。てめえ達の世話になる身分で、ナニ五十兩の働らきが

源太　ようござります。元水さまのお顏が汚れる事ならば、出來ないまでも五十兩、工面して見ませうて。

左五　然らば拙者も御返事を、承るまでお待ち申して。

源太　晩程までには善惡の、キツと御返事いたしませう。

勝次　兄貴が難儀になる事なら、どうぞ工面を

源太　ハテ、わしも白藤。關取でごんす。どうか仕樣もごんせう程に、お使ひどのとお前は一緒に

しゆ　勝次郎さま。

勝次　頼んだぞよ。

ト合ひ方になり、左五平附いて、大のしの内へ入る。お俊、源太の側へ寄つて

しゆ　コレ、白藤さん、晩程までと使ひを待たせて置かしやんすが、五十兩といふ金が

源太　ハテ、どうして出來やう。出來ないと知りながら、まんざら使ひの聞く前で、僅か五十兩そこらの金で、白藤といはるゝ關取が、どうマアあらはに

ト思ひ入れ。お俊もこなしあつて

しゆ　尤もでござんす。朝夕世話にしなさんす、あの若旦那勝次郎さん、手足纏ひの多い上、また降りかゝる五十兩。

源太　久しいやつだが、お主の方でも、よもや工面は

ト裏問ひかゝる。

しゆ　サ、それも馴染みの客先へ、頼んで見たら、出來まいものでもなけれども、何を云うても晩方と、刻限極まる五十兩。

源太　出來ぬ時には、白藤が、男の一分。

ト思ひ入れ。

しゆ　エ。

源太　ハテ、なんとせう、それからそれまで

ト、お俊、思ひ入れあつて

しゆ　拵らへませう。

トこの時、お澤、門口へ出かゝり居る。

せ、お前も関取、白藤さん。わたしも藝者の身ながらも、人さん方に知られた仲。今から急に頼んだら、馴染みのお方で、ひよつとその金

源太　どうぞ工面を、コレ、お俊。度々ながら、頼んだぞよ。

しゆ　アイ。

ト思ひ入れ。この時、お澤、そろ〳〵出て

さは　モシ、お俊さんとやら。そこにお出でなさんすかえ

しゆ　アイ。お前は田舍のお客さん、御眼病ぢやござんせぬかえ。

さは　アイ、保養ながらの出養生。今日で大方二周り。まだ碌々に、はつきりとも致しませぬわいなア。

源太　アヽ、あの子は田舍者か。ハテ、それにしては好い生れだの。

さは　申し、お俊さん。わたしや今日姉さんと、在所土産に廣小路で、求めた錦繪。こりや役者繪でござりますかえ。ちよつと御覽じて下さりませ。

ト三津五郎、半四郎の春狂言の錦繪を出す。

しゆ　アイ、大方さうでござんせうが、わたしは急な用があつて、今はどうも見て居られませぬ。

ト屈託顏にて行かうとする。お澤引きとめ

さは　サア、お取込みではござんせうが、わたしや今宵にも迎ひが參ると、在所へ行かにやなりませぬ。どうぞ御面倒ではござんせうが

源太　アレ、あゝ云うてぢや。ちよつと見て進ぜやいの。

しゆ　ハテ、困つたものぢやなア。

ト錦繪を取上げ見て

ほんに、こりや杜若と坂三津でござんすわいな。……もうようござんすか。ドレ、マア、わたしや

ト行かうとするを縋つて

さは　アモシ、まだお願ひがござりまするわいな。

しゆ　エヽ、まだでござんすかえ。サア、早く仰しやりませ〳〵。

さは　外の事ぢやござりませぬが、その坂三津とやらの繪は、あの白藤さんに、よう似てあるぢやござりませぬかえ。

しゆ　ハテ、樣々な事を云はしやんすわいな。

トよく〳〵見て

成る程、この繪はどうやらお前の顏に

源太　イヤモウ、そこら中で其やうな噂をするて。

さは　サ、その白藤さんによう似てあるといふその役者繪、
わたしや在所へお土產にしやんすわいな。
ト錦繪を抱きかゝへる。お俊こなしあつて
しゆ　主に似た繪を其やうに、大切がりなさんす娘御さん、
ア、コリヤ、お前
ト思ひ入れあつて
こりや、滅多に妾は離されぬわいな。
源太　コレ〱。いま約束の金の才覺、ちつとも早う。
しゆ　アイ、行きやんす。サア、來なさんせ。
ト源太が手を取る。
源太　アコレ、おれも一緒に行くのか。
しゆ　このお子の側にや置かれぬわいな。
源太　馬鹿を云へ。娘ッ子と角力取りが、どう取組みがな
るものか。
しゆ　隨分取組みが出來ますわいな。
源太　コレサ、無駄を云ふ手間で、今の事を賴むと云ふに。
しゆ　エヽ、まからうでな。
入れ　馬鹿を云ふなえ。
トこの時奥にて
○　お俊さん〱。
ト忙しく呼ぶ。
しゆ　アイ〱、いま行くわいなア。
トお澤を見て
お前さん。その繪をたんと
トこなしあつて
お土產にしなさんせえ。
○　お俊さん〱。
しゆ　エヽ、行くわいなア。
トぴんしやんして入る。あと合ひ方。源太、思ひ入れ
あつて
源太　エヽ、藝者のやうにもねえ。よくむかッ腹を立つ奴
だ。
トお澤の側へ寄つて
モシ、姐さん。お前、田舍だと云はつしやるが、在所は
何處だえ。
さは　アイ、上總でござんすわいな。
ト恥かしき思ひ入れ。
源太　ナニ、上總だ。わしもづう國だ。上總は何處だ。
さは　アイ、わたしが在所は東上總、東金宿でござんすわ
いな。

源太　ハテ、そりやアわしが近所だ。して、親達は何とい
ふ人だ。
さな　サア、それはな。
ト支へて居る。よき時分に、お富出かゝり居て
とみ　その親の名は、わたしが申しませう。
ト源太見て
源太　ヤ、こなさんはお富どの、どうして爰へ。
とみ　アイ、妹が眼病、療治ながらに江戸三界、姉妹づれ
の逗留も、皆こなさんゆゑ。
源太　ナニ、姉妹づれとあるからは、そんならあの子は、
白藤が
とみ　云ひ號けしたお澤ぢやわいなア。
源太　エ。
ト思ひ入れあり。
こりや斯うしては
ト逃げようとする。お富支へて
とみ　ア、コレ、久しく便りも無いお前、ちよつと妹に
さは　ア、申し、わたしや疾から白藤さんに、逢うて居
やんす。丁度幸ひ眼病の、見えぬも増しでござんせう。
ト思ひ入れ。この時、門口より坂間傳兵衛、羽織、一
本差しの町人にて、出かゝつて窺ふ。
とみ　サア、その見えぬのがいぢらしう、思ふがゆゑに、
逢うたを幸ひ
ト源太を留めようとする。この時、傳兵衛この中へ入
り、源太を突きやり
傳兵　關取、孝親達が尋ねて居たぞえ。
源太　ヤ、傳兵衛どのか。
とみ　ほんに、お前は
さは　お藤は慥か
傳兵　傳兵衛でござります。コレ、お澤ぼう、眼病に風が
浸みちやア悪からう。關取も目はしを利かせて
ト思ひ入れあり。
早く行きやれな。
源太　でも、此まゝに
傳兵　ハテ、尋ねて居たわな。
源太　ハイ。
ト二人を見て
お富さま、後にお目にかゝりませう。
ト合ひ方になり、氣の毒さうに、門の中へ入る。お澤
ハツと泣く。お富さしより、介抱して

とみ　オヽ、尤もぢや〳〵。少さい時から云ひ號け、男は無事にありながら、角力を好んで內を外。國へといふては、これ程も、歸つて來ても下されぬ、その胴慾を、恨みもせず

さは　また逢ふ事もあらうかと、待つ甲斐も無き眼病の、在所の家が土產にと、江戶の角力の番附に、白藤といふ關取が、あると云うたを力草、そんなら江戶へ廻つてと、姉さん頼んで漆山を、越えて尋ねた甲斐も無う、どうか譯あるお俊さん、どうでわたしが

傳兵　添はせてやらう。

さは　エ。

傳兵　この傳兵衞が母方に、由緣のこなた衆姉妹が、わしへ頼んだ白藤は、女房ならねど子までである、戀仲の、コレ

ト半四郎が錦繪を取り

杜若に似たるあのお俊、爰へ呼んだも主逹に、逢はせもせうし、成らうなら、義理に搦めて退去りの

とみ　その相談も只ならぬ。

さは　子仲まであるお俊さん。どうでわたしは

傳兵　ハテ、そこが談合。

とみ　添はれぬまでもお優しい

さは　せめて詞に色あらば

ト思ひ入れあり。

それが樂しみ。

ト錦繪を抱きしめて思ひ入れ。

傳兵　ハテ、白藤は

兩人　エ。

傳兵　あやかり者だよ。

ト唄になり、三人よろしく、この見得にて、道具ぶん廻す

本舞臺、三間の間、向う茶壁、床の間附き、左右に小座敷あり、塗り骨の障子をたて、すべて大のし奥座敷の體。爰に伴之進。杯臺を枕にして、寢ころび居る。これにお俊もたれかゝつたる見得。流行り唄にて道具とまる。

ト奥よりお美代、お倉、燭臺を持ち、出て來る。

みよ　お俊さん、爰にお出でなさんしたかえ。

くら　いま、傳兵衞さんが、お前を尋ねてござんしたわいな。サア、ちやつと參會の座敷へ

兩人　行きなさんせいなア。
しゆ　サア、今まで主の座敷に居やんして、大勢の相手になつて、あまり酒が過ぎたゆゑ、伴さんの座敷へ、うたた寢ながら來やんした。アレ、ちつとの間、斯うして置いて下さんせえ。
みよ　アイ、ようござんす。傳兵衞さんへは好いやうに申しませう。ナウ、お倉どん。
くら　それがようござんす。トロ〳〵となさんせいよ。
しゆ　頼むぞえ。
兩人　アイ〳〵。
　ト燭臺を殘し、奥へ入る。お俊あと見送り
しゆ　ちつとの間寢かせて下さんせえ。コレ、沙汰無しに頼むぞえ。
　トいろ〳〵思ひ入れ。此うち合ひ方。伴之進にもたれかゝり
モシ、伴さん。先刻には、ついした事から、アノ、お前に。コレ、目を覺ましなさんせ。コレイナア。
　トいろ〳〵嫌らしく仕掛ける。伴之進大いびきにて、現な事云うて寢返りをする。この時、懐より紙入れ落ちかゝる。お俊、これを見附け、思ひ入れあつて
お前、先刻に云ひなすつた事は、ありや嘘かいな〳〵
　ト伴之進をゆする。益體なき事を云ふ。この時、奥座敷にて拳を打つ聲する。これにてお俊、わなわなと顫ふ事あつて、懐より出かゝりし紙入れを、そろ〳〵取上げ、中の金を出さうとする。この時、大勢の聲にて
若衆　〆めませう。シヤン〳〵〳〵。
　ト手を打つ。お俊これに驚ろき、其まゝ紙入れを懐中する。この途端に、傳兵衞出かゝり居て
傳兵　お俊や。コレ、お俊。
しゆ　ア、イ。
　トこなしあつて
エ、傳兵衞さんかえ。
傳兵　コレ。てめえ、大分悔りしたの。
しゆ　アイ、思ひがけなう、呼びなさんしたに依つて
傳兵　悔りしたか。ハテ、仰山な。コレ、ちつと話しがあるぞえ。
しゆ　エ。
　ト思ひ入れ。
傳兵　コレサ、また悔りか。何もさう驚ろく事はねえ、マア〳〵、下に居さつし。

しゆ　アイ〳〵。ちつとわたしや
　トわな〳〵する。
傳兵　ア、用があるか。そんなら今でなくともいゝ。行つて來さつし。
しゆ　アイ〳〵。ちつとお待ちなさんせえ。
　ト思ひ入れあつて、懷を押へ、ツカ〳〵と奥へ入る。
傳兵　なんだ、あの女は。剛氣に驚ろいた顔をして行つたが、もし此方の事を聞き嚙つたか。
　ト思ひ入れ。この時、伴之進、ウムと伸びをして
伴之　誰れぞ水を一杯くれろ〳〵。コレ、お俊や〳〵。
　ト目を覺まし、起きる。
傳兵　ア、、伴之進さま。
伴之　てまへは傳兵衞か。
傳兵　左やうでござります。……ア、、これで讀めた。道理でお俊が今の氣振り。モシ、旦那、イヨ、色男々々。
伴之　コレ〳〵〳〵、ナニ、色男だ。おれがどうした。併し、お俊とどうやら寢たやうでもあつたが、ア、、夢だらうよ。
傳兵　エ、、好い加減な事を云ひなさい。今まで爰にお俊と、たつた二人
伴之　アノ、二人居たか。
傳兵　白を切りなさるな。
伴之　おれもさう思つたが。
　ト帶を締め直さうとして、フツと心づき
　ヤ、無えワ〳〵〳〵。
　ト無性に騷ぐ。
傳兵　モシ〳〵、何が見えやせぬ。
伴之　サ、ちつとした物が見えぬが、よもやあの奥へは置くまいし、たつた今まで
　トうろたへて、尋ねる事あつて
　コレ〳〵、そんなら爰にお俊が居たか。
傳兵　いや奥へ行きやした。
伴之　それで讀めた。
傳兵　エ。
　ト思ひ入れ。この時奥にて
丈島　うぬは泥坊だ〳〵。
　トこの聲を聞き
伴之　ナニ、泥坊だ。誰れだ。何を盜んだ〳〵。
　トうろたへて入る。
傳兵　なんだ、氣が狂つたさうな。

ト見送る。奥より長助、丈七、島右衛門、爭ひながら、
出て來り

丈島　うぬは泥坊だ〱。

長助　何をわしが盗んだな。この手合ひも聞分けのねえ衆ぢやアねえか。

丈七　それだと云つて、花觸れをさせて、今日まで挨拶無しだワ。こりやアてめえが、引摺り込んだの〱。

島右　二人の頭へ千疋遣つたと、あの勝次郎さんが云はしつたワ。その花もお主に、疾に渡したと云はしつたわえ。

長助　よく嘘を吐く侍ひだ。コレ、お前方がさう云はうと思つての、先刻あの人に逢つて、催促をしたら、一文も無いワ。その代りにはこれを預けるから、二三日待てと云つて、コレ、こんな物を預けたワ。伴之進さまが、取つて置けと云はつしやるから、萬更取らねえよりはと、コレ、これを預かつて置いた。

ト最前の折紙を出す。傳兵衛これに目を附ける。

丈島　コレ〱。そりやア、なんだ〱。

長助　これか。こりやアなんとか云ふもんだが、金になる物さうな。

丈七　おきやアがれ。なんとか反故が、何になるものか。

島右　おらア金で取らう。

兩人　そんな物は、要らねえ〱。

ト長助を突き飛ばす、ヨロ〱として、長助、傳兵衛の方へこけかゝり

長助　エヽ、この手合ひは滅法界な。……モシ、御免なされませ。

ト傳兵衛を見て

ヤ、お前は傳兵衛さまかえ。

傳兵　長助、何を騷ぐのだ。

長助　モシ、お聞きなさりませ。あの勝次郎といふ侍ひがね、この衆に花を進ぜて、その催促を受けて、モシ、こんな物をわしに預けて、二三日待つてくれろと云ひやすが、こりやアモシ、一二兩になる物かえ。

傳兵　ドレ、見せやれ。

ト手に取り、よく〱見て

千代鶴の短刀、銘は國安。こりやア折紙だな。

長助　左やう〱。その折紙々々。

傳兵　その位な金にはならうよ。

ト返さうとする。

長助　モシ〱、旦那え、只今お聞きなさる通りでござり

ます。どうぞお前樣、その折紙とやらをお預かりなされて、二兩二分お貸しなされては下さりますまいか。

傳兵　イヤモウ、馴染みのてまへが云ふ事、出所さへ慥かなら。

長助　アイ、あの勝次郎といふお侍ひでござりやす。

傳兵　ア丶、あの若い侍ひか。

長助　左やうでござりやす。

傳兵　い丶ワ。預かつて貸してやらう。

長助　そりやア有り難うござりやす。

傳兵　ソレ、小判で三兩。

長助　ハイ、切つて參りませうかえ。

傳兵　ハテ、それなりで遣やれ。

ト折紙を懷中して、紙入れの三兩を渡す。

長助　こりやア有り難うござりやす。コレ〳〵、こなた衆見たか。金になつたワ。

丈島　そいつは奇妙だ。

長助　コレ、三兩あるが、殘つた二分はおれが遣ふワ。きれん丸で切つてやらうワ。

兩人　早く頼むよ。

長助　承知サ。モシ、旦那、お忝なうござりやす。

ト流行り唄になり、捨ぜりふにて、三人向うへ入る。

傳兵衞殘つて、折紙を出し

傳兵　石濱家にて紛失の、その短刀の折紙が、廻り廻つて來るといひ、お上の極印打つてある、金子の中が二百兩、その盜人も慥かにそれと

ト伴之進であらうといふ思ひ入れあつて

お役所からの云ひ附けで、事荒立てぬ詮議の手蔓。どうか段々

ト思ひ入れ、奧にて人聲するゆゑ、ちやつと懷中なし、衝立を引寄せる。流行り唄、五ツの鐘にて、左五平、源太出て來り

左五　モシ〳〵、關取、もう五ツでもござらうが、最前お約束の金子は、どうでござるな。

源太　イヤモウ、如才無う働らきまするが、さて出來惽いのは金でござりまする。折角お約束申したが、どうも今晩の所は、合點が參りませぬて。

左五　ハテサテ、それは、どう致したものでござりませうな。

ト當惑の思ひ入れ。よき時分に、お俊出かゝり居て

しゆ　モシ、源太さん、ソレ、金。

ト包み金を渡す。

源太　ヤ、こりや、お使、そんなら其方が働らきで

しゆ　やう〳〵拵らへた五十兩。早う其お使ひへ

源太　してマア、どうして大枚の

しゆ　ハテ、氣遣ひはござんせぬ。見世二階に居なさんす、參會のお客のうち、手詰めな事と譯云うて

ト云はうとする。

源太　アコレ。

ト左五平へ思ひ入れあつて

よくしやつた。サア、お使ひ、先程對談いたしたる、五十兩の金、即ち勝次郎さまの働らきで、出來仕つた。この由を主水さまへ仰せられ、少しも早うお屋敷へ、お召し返しのあるやうに、サヽ、早う御持參なされいな。

左五　それは大慶。勝次郎さまのお心も直り、あなたのお手より金子差上げられゝば、主水さまのお顏も立ち、これに増したる儀はござりませぬ。然らば、お暇仕らう。

ト包み金を手拭へくるみ、懷中する。

源太　只今も申す通り、私しどもの手より出來ましたる金子ではござりませぬ。即ち勝次郎さまのお働らき。この段よろしく、御披露頼みまする。

左五　畏まりました。キツと申し聞けまするでござりませう。

源太　夜道でござれば、私しが送つて上げませう。

左五　イエ〳〵、それには及びませぬて。

源太　サア、ござりませ。

左五　これは御丁寧な。

ト合ひ方、時の鐘にて、左五平、源太向うへ入る。此うち始終、傳兵衛聞いて居る。

しゆ　エヽ、有り難い。あの金の出來たので、主水さまのお顏も立ち、白藤どのゝ一分も立つて、マア、此やうな

ト喜び、思ひ入れこなしあつて

嬉しい中にも恥かしい、割つて云はれぬ

ト思ひ入れ。

傳兵　コレ〳〵、お使。

しゆ　エヽ。

ト恟りして、傳兵衛が方へ寄り添ひ

傳兵衛さんかえ。

傳兵　ハテ、御山な。最前其方に云ひつけた、この傳兵衛が其方にちつと

しゆ　なんぞ御用でござんすかえ。

傳兵　ハテ、藝者を捕へて話したい、用は云はずと
ト思ひ入れ。
しゆ　アイ、わたしはなんぞ、また外に、云はしやんす事
あつてかと、疵持つ足の
傳兵　ヤ。
しゆ　マア、どのやうな用事でござんすえ。
傳兵　サア、其方へ話しは、コレお俊。つい斯う〳〵とは
云ひ惜い。幸ひ爰に酒もあり、云ひ出すからは
ト有り合ふ銚子杯を取つて
野暮な事だが、てまへに爰で
ト お俊、思ひ入れあつて
しゆ　傳兵衞さん、なぜ改めて杯を
ト合點のゆかぬこなし。この時、左右の障子を明け、
お澤、お富窺ふ。
傳兵　云ひ出すからは傳兵衞も、男の切れ端、キッと其方
に承知させねば
しゆ　お前のお顏が立たぬかえ。
傳兵　そんなものサ。
しゆ　でもわたしには白藤と、人の知つたる色がござんす。
さは　アレ、聞かしやんせ。とても願ひは……ハア。

とみ　コレ。
ト思ひ入れ。兩方一度に、障子をバッタリ閉す。お俊
思ひ入れ。傳兵衞、お俊が手を捕へ
傳兵　一つ注ぎや。
ト、チャンと唄になり、この道具をぶん廻す。
元の門口へ戻り、大戸締り、提灯を吊し、大のし夜
の體。唄、捨て鐘にて道具とまる。
ト爰に三五郎、割り木を持ち、内を窺うて居る。門口
より、富八、ぶら提灯を下げ、出て來り
富八　あの廻しの善八めは、もう迎ひに來さうなものだが。
ト行かうとする。三五郎窺ひ居て
三五　野郎め、覺えたか。
ト打つてかゝる。富八、この手を捕へ
富八　うぬは先刻の讀賣りだな。
三五　先刻の事を
ト打つてかゝる。立廻り、三五郎、割り木にて脾腹を
突かれ、ウムと氣絶する。富八。手早く天水桶を取つ
てぶつかぶせる。この時、最前の庖丁、三五郎が頭へ
當りし心。富八、思ひ入れあつて

富八　大べら坊め。

ト流行り唄になり、向うへ走り入る。内より丹八、留守居提灯を持ち、伴之進、勝次郎出て來り

勝次　コレ〱、潮田氏。先刻の短刀は買ひ切らしつたか。どう致されたな。

伴之　これはしたり、そこ所ではござらぬ。懐中に持ち合せた、あの五十兩も、コレ。

ト囁く事あつて

斯樣でござるワ。

勝次　アヽ、そんなら貴公のその金も、大方行くへは

伴之　睨んだゆゑに、事荒立てぬ身共が詮議。

勝次　して、短刀の納まりは。

伴之　それも仕樣が

ト思ひ入れ。この時、用水桶を突き退け、三五郎小鬢に少し疵を受け、刺身庖丁を持つて、ツカ〱と出て

三五　合點しねえぞ〱。

ト立騒ぐ。丹八これを捕へて

丹八　コレエ、〱。われは先刻の讀賣りだな。氣でも狂つたか。

三五　お前方は先刻の旦那方。モシ、お聞きなされませ。

爰の亭主を待ち伏せして、冠らせられたこの天水桶。水の中にこの庖丁がござりまして、わしやア面を切りました。この分ぢやア、濟みませぬ〱

ト立騒ぐを伴之進見て

伴之　べら坊め。そりやア相手の無い喧嘩といふもの。何が讀賣だ。

三五　これでござります。

ト庖丁を差出す。伴之進、取つて

伴之　勝次郎どの、好い代物が出來ました。

勝次　そりやア、何が代物に

伴之　細工は流々。コレ、氣を附けろ。

丹八　心得ました。

トあたりへ思ひ入れ。伴之進、短刀を出し、中身を抜いて刺身庖丁と摺り替へ、鞘に納め

伴之　コリヤ、丹八、われが差した竹光を

丹八　ネイ〱。

ト抜いて出す。勝次郎取つて

勝次　この竹光へ短刀を

ト兩人手早く中身を摺替へ

コリヤ、他言いたすな。

丹八　呑み込みました。
　ト腰へ差す。捨て鐘になり、下座より權助、荷を擔ぎ、出て來り
權助　そこにござるは先刻のお侍ひ樣。短刀の代金を、只今下さりますかえ。
伴之　サ、今晩とは申したが、ちと此方に手支へるて。
勝次　明日の晩まで待つてくりやれサ。
權助　ようござります。外といつても、むづかしい代物。そんなら必らず明晩は、百兩と引替へにお賴み申しまする。
伴之　氣遣ひ致すな。明日の晩には揃へて百兩。マア、それまでは
　ト短刀を渡す。權助取つて
權助　して、取極めをする場所はえ。
勝次　身が横綱の住家に於て。
權助　エ、お前の所でこの短刀。こいつはどうやら。
　ト思ひ入れあり。
　ア、儘よ。
勝次　權助、必らず
權助　明日の晩、お目にかゝりやせう。
　ト流行り唄になり、荷を擔ぎ、向うへ入る。
伴之　流石は下郎。一ぱい嵌めて
勝次　これにつけても添へたる折紙、あの船頭の長助に
丹八　あの野郎なら、わしが騙して
勝次　大事な折紙、われは必らず
丹八　呑み込みました。
伴之　勝次郎には白藤に、矢張り短刀は權助が、手にあるやうに騙し込み
勝次　彼奴に百兩働らかせ、其奴を取ッ手に、また一花。
伴之　金はおてまへ
勝次　貴殿は短刀
伴勝　これで五分〳〵、
丹八　物事めでたう。
伴勝　コレ。
　ト唄、時の鐘になり、伴之進、東の歩みへかゝり、丹八先に提灯を持ち、思ひ入れあつて入る。三五郎、下座へ入る。揚げ幕より源太、息せきと駈け來る。勝次郎を見て
源太　そこにござるは、勝次郎さまではござりませぬか。
勝次　關取ぢやアないか。して、先刻に兄貴の所から、使

ひを寄越した五十兩は、どうしてくれる。コレ、心柄とはいふものゝ、役所の通ひで騙つた事の、もくが割れちやア首が飛ぶ。コレ、白藤、こいつはマア、とんだ話になつたぞえ〳〵。

源太　ハテ、氣遣ひさつしやりまするな。そのお役所の五十兩。あのお俊が働らきで、お前の手から出さしつたと、主水さまへは申し上げ、たつた今、使ひの人を送つた歸り、追つけ首尾は直ります。吉左右を待つてござりませ。

勝次　エ、、そんなら屋敷の兄貴の所へ、おれが手先で拵らへたと、五十兩持たせてやつて下さつたか。エ、、有り難い〳〵。コレ〳〵〳〵。これに就いても、おれに疑ひのかゝつた短刀の在所を、嗅ぎ出したよ〳〵。

源太　ヤ、なんと云はつしやる。その短刀の在所が

勝次　サア、知れたところが、血で血を洗ふ、駈落ちをした又助めが仕業ゆゑ、只取らうと云はれもせず、買はうといつては小判で百兩。

源太　して、短刀の持ち主は

勝次　北本所の權助とて、その日暮らしの夫婦住み。殊に潮田伴之進、短刀求むる相談あれば、彼方で買はぬ其うちに、サア、おれが買ひ戻して來る。サ、ちよつと百兩工面してくりやれ。いま取つて來ねばならぬ。サア、ちよつと百兩、拵らへてくりやれ〳〵。

ト苛立てに催促する。

源太　コレサ〳〵、待たつしやりませ。其やうにどうマア大枚百兩が。今もお俊が働らきで、屋敷へ上げた五十兩、其ほとぼりのさめぬうち、どう百兩の

ト思ひ入れあり

して、その先は、何とやら云ひましたの。

勝次　北本所の岩淵に、足駄の齒入れで權助といふ者だ。

源太　エ、、そんならわしが兼松を、預けて置いた里の親。そんならどうとも相談が

勝次　サア、さうであらうが潮田が、明日早々買ふ約束。もしも向うへ買はれちやア、兄貴の手前云ひ譯無い。是非是非今宵その金の

源太　さう仰しやる事なれば、金は明日にも白藤が、どの道工面にかゝりませうが

勝次　コレサ。かゝりませうで濟まうと思ふか。たつた今その金の

ト じろ〳〵見て

いゝワ。金が出來ずば、いつそおれが、死んで見せべい。

ト刀へ手をかける。源太押へて

源太　アコレ、こなさんを殺しては、この白藤が、世間へどうも

勝次　立たずば金を拵らへやれ。但し、短刀はたつた今、取つて來るか。

源太　モシ、また無理を云はつしやるか。

勝次　無理なら、いつそ死ぬべいか。

トまた死なうとする。

源太　アコレ、待たつしやりませ。それ程に云はつしやれば、爰から直ぐに、權助が所を尋ねて

勝次　取つて來るのか。

源太　ツイ、一走り。

トつか／＼と行きかゝる。思ひ入れあり

如何に恩ある人だとて、あんまり非道な

勝次　エ、まだ居るかえ。

源太　エ、行きますわな。

ト唄、時の鐘にて、源太、向うへ入る。勝次郎、門口へ入り、後を見送り、二枚開きをシヤンと締める。この模樣にて、道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、後ろ黒幕、上の方、白壁の境。下の方、町家の戸をたてたる夜の景色。すべて本所割下水のあたり。爰に權助、荷箱を下ろし、抱き子に小便をやつてゐる見得。時の鐘にて道具とまる。

ト權助思ひ入れあつて

權助　さても／＼、通用のいゝ餓鬼だ。又グツスリ寐かれようとした。

ト抱き子泣く。

やかましいワ、また吠えるか。白雪糕でも嘗めたいか。ソレ／＼。おれが乳でもしやぶつて居ろ。また拔きやアがるな。抓りあげるぞ。

ト捨ぜりふにて抱き子を懷に押込み、荷の中より短刀を出し

百兩になる代物。夜道はどうやら物騷だ。

ト腰に差して、荷を擔ぎ、行かうとする。矢張り時の鐘にて、向うより源太、息せきと出て來り、權助に行き合ひ、兩方よいためらひ見て

源太　コレ、權助どのぢやアないか。

權助　さう云ひなさるは白藤さん。

源太　オ、好い所で逢ひました。今こなたの内へ尋ねて

行くところ。ハテ、好い所で逢ひましたて。

權助　エヽ、そりやアこの子の事でかえ。

源太　イヤ〳〵、里子の事でもないが、爰でこなたと話して居るうち、その兼松がひもじからう。マア〳〵、こなたの所へ、サア、連れ立つて、行きませう〳〵。

ト荷繩を引ッ張り、行かうとする。

權助　なにサ、ひもじい事はねえよ。いま、横綱で一杯貰つた。腹はいゝのサ。用があるなら、爰で云ひなさい〳〵。

源太　そんなら、かい摘んで話さうか。こなたの方へ、勝次郎さまの身にかゝつた

權助　エヽ、この短刀の事か。

ト腰を見る。源太こなしあつて

源太　千代鶴といふ短刀を、こなたが持つて居るとの事。物は相談だが、なんと、この白藤に賣つてはくれまいか。

權助　そりやモウ、現金に金さへ取れば、賣るまいものでもないが、關取も知つてゞあらう、伴之進さまといふお侍ひが、明日はキッと百兩で買ふと、値が出來て居る代物。今更どうも、こなさんの方へ、賣らうとも云へやすまいが。

源太　サア、そこが相談。伴之進さまが百兩に附けたら、その上の所は、どのやうにでも、餘計を遣らう程に、この源太に買はせてくりやれサ。

權助　モシ〳〵、關取々々、お詞の中だがね。僅か一月に一分二百の里扶持さへ、滯らせるおやねえかえ。それに百兩からの代物、不躾ながら、お話は出來やすまい。この事に附いては、御免なさいやし。先約の方へ賣りやす。さう思つて下さりませ。

ト行かうとする　源太とめて

源太　コレサ〳〵。こなたにも似合はぬ。よく〳〵な事なればこそ、お主が内へ出かけて來たおやアねえか。是非ともわしが買はねばならぬぞよ。

權助　モシ〳〵、買はうと云はつしやるが、そこに金が有りやすかえ。

源太　サア、そこが相談ではないか。

權助　その位なものであらう。どうで話は出來まいよ。

ト行かうとする。源太ムッとして、權助を引きつけ

源太　コレ、權助。その短刀は、云はゞ元は盗み物、でんどへ出されぬその品を、賣られぬといふのみならず、相談づくに乘られぬとは、お主はそりや無法といふものだ。この白藤が買はないうちは、五分でも爰は動かされぬ。

ト引き戻して突きやるはずみに、權助どつさり轉ぶ。此はずみ抱き子泣く。權助思ひ入れあり。

權助　誰がよ〳〵。

ト　いぶりつけ、源太が側へ摺りよつて

コレ、關取、イヤサ、源太どの、こなさん、里親のわしを、情が剛いといつて投げたの。イヤサ、抛るのかよ。コレ、こなさんは角力取りだから強からうが、わしは弱いよ。ぶん投げて手柄になるか。この權助が憎いといつて、こなさんこの子まで憎い事はあるまいの。コレ、この子は、こなたの實の子ぢやアねえかな。……コレ、てめえを泣かせたのはナ、アレ、あの父様だよ。ぞん氣な親もあればあるものだなア。

ト源太に見えぬやうに、したたかに抓る。抱き子泣く

オ、、誰がよ〳〵〳〵。

源太　そりやモウ、達てわしがいふ事を用ひねば、里親のこなたでも男の意地づく、我が子の事にも替へられぬ。否でも應でも、その短刀、この白藤が命にかけても

權助　取返すといふのか。さうはならないワ。こなたが名代の關取ゆゑ、先約を變替へしたと云はれちやア、わしも男だ。その上、こなさん、今なんと云はしつた。その短刀は、根が盜み物と云はつしやるが、こりやアわしが盜んだのかえ。コレ、盜人を出す日には、こなたの世話をする勝次郎が先馬だワ。

源太　サ、そりやア

權助　それでもお身様は、盜人を出すのか。この權助は白きちやうめんだぞよ。その上、こなたの爲には里親だぞよ。恩のあるわしを盜人にするのかよ。エ、、茲な恩知らずめ。

ト源太をくらはす。

源太　うぬ、この白藤を、くらはしたな〳〵。

權太　オ、、ぶツくらはした。こなたの餓鬼を育てゝやるこの權助を、盜人の同類と吐かしたから、くらはした。

ト源太、思ひ入れあつて

源太　ア、、こりやアわしが惡かつた。我が子の恩を顧みず、腹立ち紛れにツイ云うた。コレ、料簡して短刀を

權助　否だワ。……おれも男だ。その日稼ぎの貧乏人、食ふや食はずの野郎でも、相手が關取、こなさんゆゑ、死んでもおれが短刀は

源太　是非渡さねば、この上は、伜が爲には大恩ある、里親のお主といひ、手にも足りねえ素人を、大人氣なけれ



大正十四年二月本郷座所演
實川延若の源太　市川左團次の權助

ど白藤が、相手にせにやならぬ。約束事を諦らめて、その短刀をおれに渡しやれ。

権助 エ、、そんならどうでも、爰を素手では通さぬな、どうするものか是非がない。殺して取るならいざ知らず息の通ひのあるうちは、決してならねえ。マア其處を。

ト短刀を腰へ差し、抱き子を懐へ捻ち込み、身拵らへして駈け出す。白藤追ひかけ、引戻す。立廻り。権助、抱き子を一心に抱へる。子は頻りに泣く。

こりやアわれが子だぞ／＼。わりやア子を殺し、おれを殺すか。盗人だ／＼。白藤が人を殺すワ／＼。

源太 コレサ、静かにしろ。短刀さへ賣つてくれゝば

権助 否だ／＼。人殺しだ。盗人だ。白藤が盗みをするわえ。近所の者は出ないかえ。番人は居ぬかえ。

ト大聲に呼び立てる。源太、思ひ入れあつて

源太 エ、、モウ、是非に

ト抜いて、後より一刀切る。権助ウムと倒れ、抱き子を抱へて、これを放さず

権助 切つたぞ／＼。人殺しだ／＼。

ト抱き子を械に、荷の中の下駄、足駄を打ちつける。伏せ鉦・念佛になり。源太、抱き子を引ッたくり、上の方へ置くうち、権助、血だらけになり、正面の白壁へ取りつき、上がらうとして落ちる。源太後より切る。この立廻りのうち、白壁へ蘇枋にて、手の形、所々に附く。権助、短刀を持ち、花道へ逃げる。源太追ひかけ行く。後にて、子は頻りに泣く。源太後先へ心使ひあつて、やう／＼引ッ捕へ、舞臺へ引き戻して來る。源太、抱き子を懐へ入れ、短刀を引ッたくり、また切り下げる。権助、これにて、ウムと倒れるはずみに、源太が提げ煙草入れを帯際より引ッ切り、これを握り居る。源太これを知らず、滅多切りに切り伏せ、抱き子を懐へ入れ、権助を仕留め、血刀を拭ひ、手に入れし短刀の風呂敷を明けて、いろ／＼尋ね

包みの中に短刀はあれど、折紙らしき品とても

トいろ／＼尋ねる思ひ入れ。この時、抱き子また泣き出すゆゑ、いぶりつける。この時、下座より作右衛門、番人の拵らへ、ぶら提灯を腰に差し、四ッの拍子木を打ちながら、出て

作右 大分子が泣くが、捨子でもありはせぬかな。ア、又町内の厄介だ。

ト拍子木を打つて、歩く。源太、下の方へ寄つて、短

刀を抜き、切尖を探り見て、思ひ入れあり

源太　ヤ、、、この切尖は、短刀ならぬ

ト悄りする。作右衛門これを聞き、窺ふはずみに死骸を見附け、ワツと云うて、提灯を捨て、仰向けに倒れ

作右　切つた／＼／＼／＼。

ト拍子木を無性に打つ。源太、似せ物と心得、無念の思ひ入れ。抱き子頻りに泣く。源太、ツカ／＼と花道へかゝり、ホツと息を吐き、抱き子をいぶりつける。直ぐに作右衛門が早拍子木にて、

幕

幕の外、時の鐘にて、源太、一散に向うへ入る。あとシヤギリ。

中幕　藥研堀の場／神田川の場

役名 ― 神田伴之丞、箱持て、善八。若黨、左五平。呉服屋、六之助。下女、お作。權助女房、お鳥。お俊母、お萱。津川勝次郎。津川主水。藝者、お俊。白藤源太。東間傳兵衛。

本舞臺、三間の間、世話場屋體。上の方、鼠壁、格子古三味線を掛け、正面、暖簾口。下の方、押入れ、佛壇、下座の方、二階障子立。揚幕下に、丁字車の紋附いたる腰障子建て、誂らへの門口、樋の口に簾を掛け、この外路地口、幕の内よりお萱、やつし姿にて、上の方に縫ひ物をして居る。下にお作、下女の形。善八、序幕の廻しにて、兩人寄り合ひ、枕拍子を取つて居る。右の唄にて幕明く。

ト兩人一くさり取つて、善八取り損ふ。

さく　アレ、不器用な善八さん、身に染みて取らしやんせいなア。

善八　コレサお作、おれが不器用なのぢやアない、お主の間が惡いのだ。

さく　なにを。唄も碌に覺えずに、この枕拍子が取れるものぢやないわいなア。

善八　イヤ、枕拍子は取れないでも、お主さへ取りやすいいが、コレ、どうだ、

ト手を取るを振り放し

さく　アレ、悪い事を。阿母様が見てぢやわいなア。
善八　イヤ、見ても譯は聞えぬ。耳が圓通寺、大事梨地の硯箱。
　　ト抱きつかうとする。
さく　アレ、滅相な。退かしやんせいなア
　　ト枕を取つて打ちつける、これにてお萱、仕事をやめ
かや　コレ〳〵、なんぢや。譯は知れぬが、お作、善どんといさかひかいなう。
さく　イエ〳〵、冗談ばつかりするに依つて。……と云うても聞えぬ阿母様。
善八　おれが口說くも聞かねえ、忌々しい、はッつけ阿魔の、業人阿魔め。
　　トお萱が前へ辭儀をして、お作を睨める。
かや　なんぢや、行儀を躾ける。……ウム〳〵。そりや奇特な。コレ、お作。此方の内はお客もござる。ちと善どんに、行儀でも習うたがよい。
さく　アレ、まだあんな事を。ホヽヽヽ。
善八　何を笑ふ事がある。惚れたから口說く。今に無理にでも本望を遂げるぞ。
　　トまた辭儀をする。
かや　ヤレ、おれそれの好い人ぢや。お俊は好い廻しを持つて仕合せ。イヤ、お俊といへば、あの子は錢湯へ行つたぢやないか。
さく　ハイ、最前お出でなされました。
　　ト大きく云ふ。
かや　飯の支度や、鏡臺も出して置いたかや。
さく　アイ、奥へ皆揃へて置きました。
善八　イヤ、お俊さんの歸るまで、もう一遍やつてくれないか。
さく　無理な事さへ云はしやんせずば、
善八　イヤサ、この枕拍子は坂三津が拵らへたと云ふからなんでも覺えて、女をぶち殺さにやアならない。
さく　そんなら。
　　トまた枕を持つ。
兩人　ヨイ〳〵〳〵。
　　トまた右の唄になり、兩人よろしく取つて居る。この唄にて、向うよりお俊、湯あがり、浴衣を抱へて出る。少し後より傳兵衛、序幕の形。丁稚一人、甲斐絹の風呂敷包みを脊負ひ、附いて出て來て、花道にて
傳兵　オイ〳〵、其處へ行くのはお俊ぢやアないか。

しゆ　ヤ、お前は傳兵衞さん。

傳兵　いま湯か。きつい朝寢をしたと見えるな。

しゆ　サア、昨夜も夜が更けたゆゑ、ツイ。……時に今日は何方へ。

傳兵　サア、仲間の相談を八百善といふ事ゆゑ、歸りは隅田川の夜櫻と出かけて來たが、お主にちつと用があり、そこでこの藥研堀へ廻りかけたのよ。

しゆ　そんならマア、ちよつとお寄んなさんせいなア。

傳兵　イカサマ、立ちながらも出來ない話し。……コレ、銀藏、おれは用がしまふと、後から小船で追ッ付くから、わりやア仲間の手合ひと、先へ行け。

丁稚　ハイ〳〵、畏まりました。

ト取つて返す。

傳兵　コレ〳〵、また何かをたんと食つて、食傷でもするな。

しゆ　そんなら、傳兵衞さん。

傳兵　サア、行きやれ。

ト矢張り右の唄にて、兩人本舞臺へ來り、内へ入る。

オヽ、こりやア善八、妙な事をするな。

しゆ　又、作と枕拍子か。なんの出來もせぬ癖に。

善八　なにサ、もう本間、本式。お客の前でもやられやす。

傳兵　藝者の廻しが枕拍子とは、ハテ、勸學院の雀だな。

しゆ　モシ、母さん、アレ、坂間の

ト教へる。

かや　オヽ、旦那樣、ようお出でなされました。

ト辭儀をする。

傳兵　オヽ、母さん、お前はいつも達者で。……と云つたところが

しゆ　お氣の毒でなりませぬわいなア。

ト此うち、お作、煙草盆を出し。茶を酌んでくる。傳兵衞、茶を飲み

傳兵　イヤモウ、斯う南風が吹込むと、内に居る氣は無い、なるてな。併し、まだ船は早いス。

ト懷を探し、煙管ばかり出して

南無三、こりや煙管筒を

しゆ　何處ぞへ落しなされましたかえ。

傳兵　イヤ〳〵、出がけに道で呑んで、内の氣で、煙管ばかり懷へ入れて出る奴サ。

善八　そりやア大きに御不自由でござりませう。

傳兵　善八どん、何ぞあるまいか。

善八　ハイ、ござります。この間按摩が置いて行つた、コレ〳〵。

ト押入れより張り子の煙管筒を持つて出る。

傳兵　オヽ、こりや、ポンといふやつだの。

しゆ　そんな物が、どうしてマア。

傳兵　イヤ〳〵、これを借りよう。これも洒落のうちだ。

善八　モシ、洒落といへば、この間頼まれた杵屋の

しゆ　ほんに、お氣の毒でござりまするが、この摺り物、お願ひ申してくれいとて

ト本文庫より摺り物を出して渡す。傳兵衛取つて

傳兵　「淡ひ興行仕り候ふ。晴雨とも」　よし〳〵。當日に挨拶しませう。

ト右の本文庫より、序幕の作之進が紙入れ出かゝり居るを

善八　こりやア妙な紙入れ。お俊さん、お前、どうしてこの男の紙入れを。

ト取上げるを

しゆ　ア、コレ、それは

トちよつと取つて、懐へ入れる。

善八　モシ、わたしやアこの間落して不自由だが、くんなさらぬか。

しゆ　イエ〳〵。こりやお客に預かつて居るのぢやわいなア。

ト思ひ入れ。

かや　お俊さん。お久し振り、お杯でも

傳兵　イヤ〳〵、内ぢやア面倒だ。何もかも、善八、ちよつと川口へ行つて、ちよつぴり

善八　裏通し、誂らへて參りませう。

傳兵　お俊ばう、その出來るうち、お主に、とつくり

しゆ　そりやアノ、昨日の事でござりまするか。

ト重々しく云ふ。

傳兵　サア、おれも退引きならねえ譯ゆゑ

しゆ　モシ。そりやマア、奥でゆる〳〵と

ト善八、お作思ひ入れ。

傳兵　そんなら、一杯飲みながら

しゆ　お作、奥は片附いてあるかや。

さく　ハイ〳〵、掃除して置きました。

傳兵　そんならお俊。……母さんも

しゆ　マア、お出でなさんせ。

ト唄になり、傳兵衛、お萱、お作、善八、暖簾口へ入る。

る。お供、後より思案しい／＼、これも奥へ入る。この唄返して、向うより源太、序幕の形、羽織に抱き子を包み、抱へて來て來る。後より六之助、序幕の形、萌葱の風呂敷包みを脊負ひ、附いて出て來る。直ぐに本舞臺へ來て

六之　關取さん、爰がお前のお宿でござりまするか。

源太　江戸に居るうちの旅宿。六之助どの、此方へ入らつしやれ。

六之　ハイ／＼。

ト兩人内へ入り

時に、お誂らへの小立ち。

ト風呂敷より仕立てた着物を出す。

源太　オヽ、思ひの外早かつた。代は濟んであるぞや。

六之　ハイ／＼。又お願ひ申しあげます。今年も相變らず名物切れ正寫し、珍らしい浴衣の新形。いろ／＼世間廣いあなた、お得意樣方へよろしう御吹聽お願ひ申せと、親方が申しつけましてござります。

源太　イヤ又、旦那衆や、仲間の者へも、吹聽しませう。ドレ／＼、オヽ、可愛らしうよう出來たわい。

ト羽織を取つて、抱き子に着せかへようとする。

六之　オヽ、よいお坊樣でござりまするの。お子樣にはこの縞柄は、ようお似合ひなされませう。

ト抱き子の着て居る着物を見て

モシ、こりや夥しい血が附いて居ります。

ト源太ちやつと捺らへた着物を引ッかけ

源太　サ、こりやおれが怪我。地取り場の[illegible]めして

六之　そりや隨分、お大事になされませ。イヤ、大事といへば大のしの誂らへ物、私しはお暇申しませう。

源太　オヽ、こりや御苦勞。

六之　左樣なら、また御用お願ひ申しあげます。

ト合ひ方になり、六之助、門口へ出る。源太、戸を締め、此方へ來て、思ひ入れあつて、抱き子の着物を着替へさせ、羽織の上へ寢かせ、血の附いて居る着物の置き所に困り、二重舞臺の疊を上げ、炬燵の[illegible]を出し、椽の下へ入れる。この時、抱き子頻りに泣く。これにて源太うろたへ、疊を直す。此うち六之助、門口の節穴よりこの樣子を見て頷き、向うへ走り入る。源太、子を抱き上げ、ゆすぶりつけて居る。奥よりお供、お客出て來り

かや　オヽ、源太どの、歸らしやつたか。

しゆ　こちの內で不思議な、子供の泣き聲と來て見ればか。

源太　オヽ、坊主めぢや。なんと愛らしうなつたではないか。

しゆ　ドレ〳〵。

ト抱き取り

昨日も、知つての通り、柳橋で逢うたけれど、あの里親の權助どのが

かや　娘、この子は何處の子ぢやぞいなう。

しゆ　アレ、母さんとした事が……兼松でござんすわいなア。

ト耳に口を寄せて、大きく云ふ。

かや　ハヽア、石原へ里に遣つた兼松か。……ヤレ〳〵、笑ひ居るワ。わしも初孫の事ゆゑ、其方があの人のほんの女房と、披露目もしたり、座敷でも引かせるやうになれば、手鹽にかけて育てたいは山々なれど……早うなうそんな事も

源太　イヤ、商賣づくで、江戸が江戸に立たぬわしが身の上。それもマア、遲からぬ事でござります。

トちよつと頷いて見せる。

かや　ウム〳〵。それもさうかいなう。

しゆ　時に、お前はこの子を、どうして連れてござんしたぞえ。

源太　聞きやれ。昨夜は上方の角力の相談で、回向院前へ泊つて、今朝朝湯の出合ひ頭、あの權助めに逢うたところ

しゆ　また、乳の述懷云うたのかえ。

源太　イヤ、そればかりでない。坊主が事について、又ゆたぶり、困るところを知つて、足許を見られるが忌々しさ。そんなら返せ、と取戻して來たのよ。

しゆ　ほんに、又しても面の憎い。そんな事なれば、此方から遣つた物、皆取返してござんすりやよいに。……イヤ、取返せといへば、この子の着物、わたしが拵らへて遣つたのとは違うてあるが。

源太　エ。

しゆ　どうして、マア此やうな

源太　そりやア、なによ。今朝取返して、アノ、一つ目の岡田屋の前を通つたら、見世で呼び込まれ、また今年も新規の浴衣お願ひ申す、格別下直も久しいやつ。見るは目の毒で、ツイ坊主めに拵らへてやつたのよ。

しゆ　ほんに、こりや可愛らしい縞柄。わたしも袷の表に

取寄せて見ようわいなア。
源太　イヤ、大分當世に向く物を賣るて。
ト抱き子泣き出す。
しゆ　オヽ、誰がよ〳〵。
源太　坊主めは、そりや大方ひもじいのであらう。
しゆ　ひもじいというて、もう乳は上がつて、無し。……モシ〳〵、母さん、里親があんまり憎いに依つて、主がこの子を取返してござんしたが、どうぞ乳はあるまいかいなア。
かや　なんぢや、酢があるまいか。喰初めもせぬうちに、どうして
しゆ　アレ、まだいなア。
ト書いて見せる。
かや　ムウ、なんぢや、里親が憎いに依つて、取返した。それで、乳に困る。……そりやさうであらう。乳母も里も急にあるものぢやない。マア〳〵、裏の三つ物屋のお内儀に
しゆ　それ〳〵、貰うて飲ませて下さんせ。
ト お萱、抱き子を受取る。
源太　こりや又、世話をかけずばなるまい。
しゆ　そりやそウ、母さんは正眞の孫ぢやもの。ひもじいを見て……イヤ、お前もひもじからうに、奥に川口から、いろ〳〵おいしい物が來てござんす。あがらんかいな。
源太　イヤ、まだ食ひたうもないが、川口とは、きつう奢りかけるな。
しゆ　イヽエイナア、神田川の、坂間の旦那がござんして
源太　アノ、傳兵衞さまが
しゆ　お前にも逢ひたがつてゞあつたわいなア。
源太　何かにつけて賴もしい旦那。そんなら、ちよつと行て逢はうか。
しゆ　母さん、お前は早うその子に
かや　なんぢや、磨り粉。磨り粉より白雪糖がよい。
しゆ　アレサ、これぢやわいなア。
ト乳を教へる。
かや　オヽ、ちよつと行て、貰つて來ませう。
源太　ドレ、御挨拶申さうか。
ト唄になり、源太、思ひ入れあつて奥へ、お萱は抱き子をゆすぶりながら、下の路地口へ入る。バタ〳〵になり、向うより勝次郎、序幕の形、あたりを、キョロキョロ見ながら、駈けて出る。あわたゞしく内へ入り、

戸を締める。お俊悔りして
しゆ　ヤア、お前は勝次郎さま、
勝次　お俊、どうぞおれを、隱してくれ〳〵。
しゆ　そりやマア、なんでござりますぞいなア。
勝次　なんだどころではない。今朝屋敷の小者に逢つたら、どうでもおれに詮議があるゆゑ、搦め捕ると、兄主水どのが、尋ねて歩くと聞いて、白藤に相談せうと、來かゝる廣小路で、兄貴のすッ影、見附けられちやア大事だ。どうぞ何處ぞへ。
しゆ　そりやマア合點のゆかぬ。その事で源太さんも、いろいろと苦勞して居やしやんすゆゑ、あなたの引負ひなさんしたお屋敷のお金、やう〳〵と昨日拵らへて、主の手から納め、マア一方は片附いたと喜んで居るに
勝次　なんでも見附かつちやア、むづかしい。兩國あたりをぶらつくは、慥かに
ト戸を細目に明け、向うを見て
アレ〳〵、兄貴が爰へ。こりや、どうせう〳〵。
トうろたへる。お俊もうろたへ、あたりを見廻し、二重舞臺の炭櫃を見附け、思ひ入れあつて疊を上げ
しゆ　窮屈でもござんせうが、マア爰へなと。
勝次　イヤ、牢へ入るにはましだ。
ト緣の下へ飛び込む。お俊、手早く疊を元のやうにするうち、唄になり、向うより津川主水、羽織袴の侍ひ、左五平、序幕の形にて供をして出て來る。
主水　コリヤ左五平、白藤の旅宿はあれか。……案内しやれ。
左五　へイ〳〵。
ト門口へ來て
關取白藤どのは在宿でござるかな。
しゆ　ハイ、宿に居られます。
トうぢ〳〵思ひ入れ。
主水　宿に居るとか。……然らば、其方は立歸り、もし火急な用事あらば、早速に相知らせい。
左五　へイ〳〵、畏まりました。
ト合ひ方になり、左五平、向うへ入る。主水はズッと內へ入る。
しゆ　あなたは。
主水　身は石濱の藩中津川主水。白藤在宿なら、ちよつと面談いたしたい、と申し次いでおくりやれ。
しゆ　ハイ。そりやモウ隨分申しますでござりませうが、

自由がましうござりまするが、只今、據ない客を受けて居りますれば、済みます事なら

主水　ムウ。其許が後と申すお女中かな。

しゆ　左樣でござります。

主水　然らば關取に申すよりは、却つて早う解る事もあらうか。

しゆ　してマア、御用は。

主水　弟勝次郎、搦め捕つて引かにやならぬ。

しゆ　エ、。

主水　包まず在所を、云うておくりやれ。

しゆ　そりやマア、どういふお咎めで。

主水　この金子ゆゑに。

ト金包みを出す。

しゆ　こりや昨日源太さんより

主水　弟が調達いたしたと、差越したこの金は、先達て此方御金藏にて紛失、內々詮議のこの金子。證據は月星の極印。

しゆ　エ、。

主水　殊にこの金子は、今度御菩提所梅柳山、御建立寄附の金ゆゑ、新たに御定紋の月星を、極印に打ち、外にあらざる五百兩のうち、二百金先達て紛失。金奉行の面々申し譯立たず、內々の騷動如何ばかり。然るところ、昨日弟めが、吳服所の引負ひ金、早速調達いたしたと、家來左五平へ源太よりの取次ぎ。オ、出かした。先づ一方の申し譯立たんと、同役共へひけらかし、差出したるこの金子。滿座の中にて印の極印。ハッと赤面、言句も出でず。科に科を重ねる弟め。兄の武士まで廢つたわやい。

しゆ　すりや、この金がお屋敷で紛失の

ト改めて

ほんに月星の極印。ムウ。そんならあの伴之進が

主水　なんと。

しゆ　サア、萬事勝次郎さまの事は

主水　引受けた白藤。弟を庇うて、兄の難儀を餘所に見るか。

しゆ　サア

主水　勝次郎を渡すか。

しゆ　サア

主水　是非出さにや、家探し致しても

トお俊を引退け、立ちかゝる。奥より源太出て來る。

源太　暫らく〳〵。暫らくお待ち下さりませ。

主水　其方は白藤。

源太　委細はあれにて、殘らず承りました。昨夜勝次郎さまより調達の金子と申すは、全く弟御樣のお手より出ました金子ではござりませぬ。

主水　して、その出所は。

源太　コレ、お俊。おれが苦勞を助けようと、大枚のあの金、馴染みの客に貰やつたと云うたが、その客は、何處の何といふ者ぢや。

しゆ　サア、その客はな

源太　云はねば其方が盜人になるがや。

しゆ　サア

源太　サア〳〵。コレ、默つて居ては事が濟まぬわい。

ト　お俊ハツと思ひ入れ。主水「ウム」と手を組み、思案。此うち、流行り唄になり、向うより伴之進、序幕の形に、權助女房お鳥、裏店の嚊の形にて出て來り、花道にてちよつと囁き、伴之進は直ぐに路地口へ入る。お鳥、門口へ來て

とり　關取樣、内にござりまするか。

源太　貴樣は權助の內儀。

ト　はつと思ひ入れ。

とり　申し譯がござりませぬ〳〵わいなア。お預かり申しやした大事のお子。あの兼松さまを何處へやら、失してしまひましたわいなア。

ト　大泣き。

しゆ　ヤア〳〵。合點のゆかぬ。コレ、その子は

ト　云はんとするを

源太　コレサ。……此方から預けた大事の子を。泣いてかかるは、譯が解らぬ。どゞ、どうして失したのだ。

とり　これが泣かずに居られませうか。私しどもの內の權助は、昨夜切られて死にましたわいなう。

しゆ　エヽ。……そりやマア何處で。

とり　サア、この間、あの子に乳を喰ひつかれて、此やうに腫れあがり、寒氣はする、心持ちは惡し、寢て居て飲ませる事はならず、ひもじがつて泣きはする。顏はあんなに怖らしいが、ずんと心の優しいわしらが夫、晝商賣に出るにも、箱の中へ入れて、得意先で貰ひ乳。昨夜も抱いて出て、それツきり歸らぬから、今朝六ツ起きで尋ねに出たら、あの割下水の石橋で、酷く切られて居ましたわいなう。

ト泣く。

しゆ　エヽ。

ト源太が顏を見て、思ひ入れ。

とり　サア、一緒に殺されたら、あの子も死骸がありさうなもの。見えないは何處へ遣つたか、失したと思はれます。權助を殺した奴が知れたらば、あの子の行くへも知れませう程に、どうぞ

源太　料簡してくれろと云ふのか。

とり　亭主に別れ、泣きの涙の其うちで、お詫びに參りました。どうぞマア

源太　エヽ、やかましい。默りやアがれ。……人の大事の子を、金を取つて預かりながら、提灯か傘を見るやうに、ツイ失しましたで、事が濟まうと思ふのかい。

とり　サア、それだに依つてお詫びを

源太　詫びをすれば、人の生死も構はぬのか。

とり　サア、それは

源太　行くへを尋ねて、キリ〳〵と返しやれサ。

とり　サア、尋ねると云つたとて、何處を當に。こりや又足を擂粉木。おらが夫でも、氣のきかねえ。隙な時に死んでくれゝばいゝに。

ト門口へ出かゝり、思ひ入れ。此うち路地よりお萱、抱き子を抱へて、出て來る。

かや　サア〳〵、もう明日まで、こたへるやうに、しつかりと飲ませて來ました。

ト内へ入る。源太悔りして

源太　アモシ

ト立ちかゝつて、隱さうとするを

かや　コレマア、腹がようなつたら、ニコ〳〵笑ふ。愛らしい子ぢやないかいなう。

トお鳥、抱き子を見て

とり　ヤア、この子は内へ歸つて居るか。

ト源太思ひ入れ。お萱、お鳥を見て

かや　こなたは里に遣つた權助の內儀。酷うして取返されたが面目なさ、又あやまつて預けてくれいと、わせられたか。

とり　なにを、どう聾め。

トお萱を引退け

とり　サア、關取さん、イヤサ、白藤どの。この子はどうして内へ歸つて居るよ。

源太　サア。

ト術なきこなし。

しゆ　イヤコレ、お鳥さん。あの坊はな、昨日わたしが柳橋で、權助さんに逢うて取戻したを、主は知らずぢやに依つて

とり　へゝ、そんならアノ、お俊さん、お前が……取返したと云つたら、ムウと云ひさうな噪アだと思ひなさるか。なんでも詮議の絲道はこの餓鬼。

ト抱き子にかゝるを、源太ちよつと突き廻す。お萱、此方へ來て

かや　なにを。この子を預からうとて、なんの預けやう。これから大切にこの婆が育てる程に、斷わり云うて早う去なしや。

トこの時抱き子泣出す。

オゝ、誰がよく。

ト叩きつけながら、ツイと奥へ入る。

とり　ハゝア、これで讀めた。おらが夫を殺したも、そんじよそれ。コレ關取、この胴亂覺えて居るか。

源太　ヤ。

とり　權助が殺されて居た所に、落ちてあつたといふ蝶花形。……金物打つた煙草入れ。こりや、こなさんのであらうがな。

源太　イゝヤ、知らない。廣い江戸。同じ紋はいくらもある。それが證據に

トお鳥、思ひ入れあつて、門口へ出かゝる。

こりや内儀、何處へ行く。

とり　知れた事。斯う〳〵いふ筋道、餓鬼を御詮議下されましたら、人殺しも知れませうと、お願ひ申すワ。

しゆ　イヤ、それは聞分けないといふもの。わたしが連れて戻つたあの子。

とり　イゝヤ、女を相手にやせぬ。どこまでも白藤

ト出かゝるを

しゆ　さう云や遣られぬ。待たしやんせ。

ト引留める。立廻りに、お俊が懐中より以前の紙入れ、門口の外へ飛ぶ。此うち、路地口より伴之進出て居て、この時、紙入れを取つて

伴之　お鳥待て。人殺しより盗人の詮議。

トずつと内へ入る。

とり　お前は

しゆ　伴之進さん。

伴之　昨日、柳橋の茶屋で、身が所持の金子五十兩、入れ



初演當時の錦繪

三世坂東三津五郎の源太　　尾上松助の主水

置きし紙入れ紛失。その紙入れが爰に有るからは、お俊、盗人はわれだな。

しゆ　エ、。

ト思ひ入れ。

伴之　エ、も凄まじい。表向きは立派な藝者、內證は人の懷を目がける巾着切り。それでも關取を情夫で侠ふの、白藤が女房氣取りで、人がちよつと觸つても、ぴんしやん刎ねる潔白な藝者か。

しゆ　サア。

伴之　斯ういふ慥かな證據があつても、盗まぬと云ひ譯するか。

しゆ　サア。

伴之　サア／＼／＼。茲な大盗人め。

ト源太、お俊の膝を取つて、此方へ向け

源太　お俊。すりや昨日の金の出所は

しゆ　堪忍して下さんせ。御放埓な若旦那も、お主をお主と思へばこそ、蔭になり日向になり、さま／＼に辛苦しなさんす、側で見る目のいとしさ。アヽ、どうぞちつとたと、心便りになりたいと、思うても悲しいは、お前といふもの出來てから、爲になるお客は皆離れ、なんぼあつても座敷ばかりは、高の知れた花代。ところに昨日切迫の金。お前の苦しみしやんすを、助けたいばつかり、ツイ出來心で、伴さんの紙入れ

源太　五十兩掠めて

主水　弟が爲に調達いたしたか。

しゆ　面目ない。恥かしうござりますわいなア。

伴之　さては所持した金の行き場。

主水　すりや、この金の出所は

伴之　身共でござる。

主水　然らば、お侍ひ。腕廻した。

ト反りを打つ。伴之進悔りして

伴之　ヤア、身共に繩かけうといふ其許は。

主水　貴殿と同家、石濱の家中。

伴之　なんと。

主水　お國詰めゆゑ面體御存じあるまいが、この程罷り上つた津川主水。貴殿所持とあるお俊が掠めたこの金子は、先達てお屋敷御金藏へ納めある、御菩提所へ寄附五百金のうち、二百金紛失の金、證據は一兩々々、月星の極印。すりや其許が、お金の盗賊よな。

伴之　サア、それは

主水　サア／＼／＼、なんと。

伴之　アヽ、コレ／＼、身共存ぜぬ。

主水　ヤア。

伴之　サア、一體紙入れも盜まれた覺えござらぬ、覺えござらねば身共が金であらうやうも無し。とッとモウ、入我々入でござるて。

主水　すりや、お俊は紙入れの盜賊ではござらぬか。

伴之　なんの／＼。潔白な正直者サ。

主水　すりや、矢張り解らぬ金の出所。詮議は白藤。

源太　暫らくこの場を拙者にお預け。

主水　その詮議は預けても、預けられぬは人殺し。この胴亂を白を切れば、まだ／＼岡田屋の若い者に、聞いて置いた餓鬼の襦袢。血の附いたは、慥かに爰に。

ト上の方へ行かうとする。源太、お俊立ちかゝるを、伴之進ちよつと留めるうち、お鳥、疊を上げる。中より勝次郎ヌッと顏を出す。皆々見て恟り

源太　そちや、弟。

主水　勝次郎さま。

ト　お俊ツカ／＼と行き、疊をしやんと直し、その上へ乘つて

しゆ　サ、こりやわたしが隱し男。

一同　なんと。

しゆ　浮名が立つては迫き迫かれ、晴れて逢はれぬ白藤の身と、なればなる程いとしうなるも、因果な縁のこの下家へ、隱して置いたは恥かしたから、この俊が、アイ、情夫でござんすわいなア。

伴之　すりや、白藤といふ

源太　由縁を退けて

しゆ　幾人あろと、色と情で世を渡る、藝者の表でござんすわいなア。

主水　ハテ、思ひもよらぬ下家より、それと云はれぬ弟めが、身は三味線の絲筋に、搦めてひくもひかれぬは、隱し男と胴据ゑて、意氣地を立つる心根を、無下にもならず此まゝに、海老尾とは思へども、刀の手前概棹の、思案の極意、この場の納まり。

伴之　ウム。

ト合ひ方になり、主水は源太の前、伴之進はお俊の前へ、兩方より捕り繩を投げる。

源太　この捕り繩は。

主水　男まさりの魂ひに、詮議をゆるめる金の出所。お俊

へ問ひ状。
伴之　それと明かさぬ人殺しの、白藤が實否。
しゆ　すりや、わたしら二人に
源太　二人が詮議を
伴之　縛めも、拷問も
主水　水入らずに尋ねいサ。
ト包み金を懐中する。
とり　して、證據の胴亂は
伴之　どうならうとも身共が預かり。
とり　敵を取つて下さりませ。
ト胴亂を投げる。バタ〳〵になり、向うより左五平、走り出て來り
左五　お旦那、先程御意の通り、お役所の樣子承りましたるところ、先達て紛失の短刀、明日未明に差上ぐべきやう、お上屋敷より御使者到來。御同役中樣も、早くその旨申し上げよとの儀でござりまする。
主水　ムウ、すりや、國安の短刀を
源太　明日未明に
主水　聞く通りの仕合せなれば
源太　もし手に入らざるその時は
主水　切腹とは兼ねての覺悟。
しゆ　すりや、今宵のうちに
伴之　その捕り繩の返答も
主水　いづれ、夜中の鐘を合圖。
伴之　それまで身共はこの家の奧で
とり　わつちやア歸つて待ちやせう。
主水　然らば白藤
源太　主水さま
伴之　あの下家の
ト立ちかゝるを、お俊、源太隔てる。立廻りに、伴之進が懐中より、序幕の掏り替へた短刀を落す。源太取つて
源太　これは。
ト伴之進ちやつと取つて、懐へ捻ぢ込み
伴之　イヤサ、この場の落着、
主水　キッと糺して
しゆ　いづれ役方。
源太　よろしい吉左右。
主水　ハテ、頼もしい男ぢやなア。
ト唄になり、主水、思ひ入れあつて左五平を連れ、向

うへ入る。お鳥、花道へ行く振りをして、取つて返し、路地口へ入る。伴之進こなしあつて、奥へ入る。源太お俊、撚り縄を見てホッと思ひ入れ。時の鐘。

源太　ありやもう入り相。夜中までに約束の、その短刀の事に就き、お俊、わが身に相談があるが、なんと聞いてはくれまいか。

トお俊挨拶なく、俯向き居る。

コレ、なぜ物を云はぬのぢや。

しゆ　恥かしいわいな〳〵。

ト行かうとす。

源太　恥かしいとは、最前の金の事か。

しゆ　サア、如何に男の為ぢやとて、さもしい心が日頃から、あるやうに思はるゝのが、恥かしい〳〵。

源太　コレ、すりや矢ツ張り他人向き。披露目こそせね、斯うして居れば、女房なり亭主のおれに、なに外聞。

しゆ　ぢやと云うて。

源太　ハテ、それ程に思ふなら、おれも云うて聞かす。割下水の石橋で、権助を殺したはこの白藤。

しゆ　エ、。

源太　慥かに短刀所持と聞き、後追つかけて様々と、騙せどすかせど附け入る悪者。是非に及ばず

しゆ　して、短刀は。

源太　真赤な偽せ物。

しゆ　エ、。……して、真の物は誰れがマア

源太　慥かに其の伴之進。取落したを、これぞとも、打捨てられぬ詮議の最中、……相談とは爰の事よ。

しゆ　アノ、わたしに盗みをせいかいなア。

源太　サア、常からお主に惚れて居るあの侍ひ。色で仕掛けて

しゆ　取戻すも、有る事ではござんすけれど、一筋縄では行かぬ奴。もしもこの身を任せと云うたりや

源太　ハテ、それまでに行くものか。こんな事はアノ、わが身が、平常語る浄瑠璃に、いくらもある筋ではないか。

しゆ　ほんに、さう云はしやんすりや、芝居で常住する愛想づかし。狂言気取りになつて、せまいものでもござんせぬが、酷う辛う云ふを、お前、得心して聞いて居やんすか。

源太　ハテ、とゞの詰まりは、宝物を取らう為。何もかも書置で解る趣向は、田舎者のおれでも知つて居る。

しゆ　そんならお前も、その心になつて

源太　先づ短刀はそれでもゆかうが、まだ一種の折紙が

しゆ　それはちつと心當りがあれば、

源太　何もかもわが身に任す。

しゆ　ア、此やうに苦勞したとて

　トちよつと思ひ入れ。

源太　ハテ、それも女房の役ではないか。

しゆ　それでも、お前には、昨日ちよつと逢うた、云ひ號けの娘御が

源太　なにを、ありや在所での約束。斯うなつて見れば、田舍臭うて七里けつぱい。

しゆ　そんならわたしは

源太　どこまでも女房。

しゆ　子まであるのが

源太　腐れ緣ぢや。

　ト奥にて

かや　お俊や〳〵。傳兵衞さまがお呼びなさる。ちやつとおぢや〳〵。

しゆ　アイ〳〵。

　ト立ちあがり

源太さん。今の事はそれでよけれど、もしも其うち人殺しの詮議が廻らば、それからそれ。

源太　名さがの立つ二人が罪科。

しゆ　どうでしまひは讀賣りや

源太　四つ竹に乘る

しゆ　覺悟の前。

源太　苦は色かはるものぢやなア。

　ト唄になり、お俊、思ひ入れあつて、奥へ入る。ト二重の疊を上げ、勝次郎、以前の抱き子の着物を持ち出て來り、門口へ出ようとする。

源太　勝次郎さま、何處へござる。

勝次　サア、緣の下で樣子を聞けば、齒入れの權助も殺され、短刀も手に入らず。兄貴は兄貴で縛つて行かうと、どうでしまひのつかないおれが體。何もかも引ツ脊負つて、暗い所へ行く心よ。

源太　すりや、その着物を持つて

勝次　お主の體を明るくしてやるワ。

　トまた行かうとするを、源太、勝次郎を引留め

源太　マア、待たつしやりませ。

　ト勝次郎を引据ゑる。合ひ方になり

勝次　モシ、お前の體へ難癖を附けまい爲、苦勞をするが、こなたの目にはかゝりませぬか。
源太　ヤ。
勝次　なんぼ若いとて、ちつとは思ひやりもありさうなものぢやがな。
源太　そんなら矢ツ張り、不身持ちのおれを
勝次　大事にするも、親御樣への恩送り。
源太　その大事にする者が、なぜ極印のある金を遣つて、おれを盜人にした。
勝次　サア。
源太　この白藤の不忠者めが。
勝次　サア／＼、御尤もぢや／＼。これも矢ツ張り大切の、思ひあまつて拵らへたれば、廻り廻つて先刻の體裁も、お前の灰汁が抜けた上、歸參の種の短刀も
源太　慥かに權助と思ひの外、あれが似せ物で、また外に
勝次　心當りも今宵の九ツ、
源太　それまでおれはこの褞袍、ちよつと捨てゝ
ト立ち上がるを
勝次　ハテ、また出ると碌な事は仕出かさつしやらぬ。そりや矢ツ張り緣の下へ
源太　ぶち込んで置かうか。
勝次　それ／＼、内で遊んでござりませ。
源太　そんなら遊び賃に、二分くりやれ。
勝次　ハテ、御苦勞無しの氣ではあるぞ。
ト唄になり、源太、思ひ入れあつて、奧へ入る。勝次郎、後を見送り、ニツコリして、小立ちの着物を袂へ無理に捻ぢ込んで居る所へ、伴之進先に善八、銚子杯持ち出で來り
善八　伴さん、お前も爰で一獻お上がりなされませ。
伴之　ハテ、何奴もよく喰ふ奴だてな。
勝次　コリヤ、伴之進どの。
伴之　勝次郎か。
勝次　又お俊に釣られて來たか、とんだだぼ沙魚だ。
伴之　イヤ、また釣られるも憎くない。ずぶ杜若といふ面の藝者。
善八　貸元がずるくないが玉に疵。わしもあの白藤ぢやア、よく幕を切るお杉役にも頼まれ、氣が悪くつてならぬものぢやアない。
伴之　エヽ、忌々しい。いつそ場所で投げ殺されゝばよいと思へば、意地悪く強い角力め。

勝次　イヤ、そんな廻り遠い事より、つい寂滅させる
伴之　工風があるか。
勝次　外でもない。これだ。
　ト着物を出す。
善八　そりやア餓鬼の着物ぢやアないかえ。
勝次　サア、こりやアあの白藤めとお俊が、仲へ出來た餓鬼の一つ身、これが血みどろになつて居るは、慥かに割下水の人殺し。
善八　そんならアノ、わしが口をきいてやつた、權助めを、あの角力めが
勝次　コレサ、しかとそれとも判らないが、これを以てやツつけたら、どうかそれになつて寂滅しさうなもの。
作之　成る程、最前お鳥めから、預かつて置いたこの胴亂。こればかりでは齒切れがしないが、その褞袍では慥かだ。
勝次　それでおれが尻割りに出てやらうが、規模をするかえ。
善八　そんなら金さへ見りやア
勝次　主家來の見境があるものか。
善八　ハテ、頼もしいお心な。
作之　さういふ事なら、金を遣るまでの抵當に、この笄の片しを預けて置かう。
　ト懐より出す。
勝次　こんな物をか。
伴之　ハテ、割り笄は金の割符といふ心。
勝次　そんならこれを預かつて
作之　うまくやつてくりやれ。
　ト奥にて
しゆ　善八どん。何處へ行つたぞいなア。
勝次　ありやア、お俊
　ト伴之進、目で知らせる。勝次郎、思ひ入れあつて、着物を袂へ捻ぢ込み、屋體の上へ入る。伴之進、上の二枚折りの屏風の蔭へ寄つて居る。合ひ方になり、奥よりお俊、杯を持ち、少し醉うたるこなしにて、出て來て
しゆ　善どん、合ひを頼んだ杯を飮まずに、爰へ來たは、手が惡いぞえ。
善八　サア、あんまり坂間の旦那に强ひられて、醉うたんぼうになる苦しさ。
しゆ　イエ／＼、逃げても逃がしやせぬ。
善八　そんなら、どうでも酒を飮めかえ。

しゆ　サア、酒も飲まさにやならず、相談もせにやならぬ事があるわいなア。

善八　お前の相談なら、大概知れたもの。また關取との幕を切れかえ。

しゆ　イヽエ、切るは切るぢやがな。

善八　なんだえ。

しゆ　あの人と縁が切りたうなつたわいなア。

善八　エ。

しゆ　サア、たつた今、切りたいには、どうしたらよからうぞいなア。

善八　藪から棒に、飛んだ事を云ひなさるが、サア、お前が、それをほんの事にしろ、平常關取の世話になるこの善八、この相談にはマア

しゆ　乘られぬかえ。

善八　サア。

ト思ひ入れ。

伴之　イヤ、その相談には身共が乘らう。

ト前へ出る。

しゆ　お前は伴さん。そんならアノ

伴之　掻摘んで樣子は聞いたが、今さら白藤と退かうといふは、合點がゆかないながら

しゆ　サア、浮名の立つたこれまでの譯ゆゑ、さう思はしやんすは尤もでござんすが

伴之　達て相談したいと云ふなら、乘つてやるまいものでもないが、マア、どういふ譯であの關取に

しゆ　愛想が盡きたわいなア。

伴之　ヤア。

しゆ　また愛想が盡きまいものか。人間並でもない大きな體、世辭も金も無い不器用な人に、どうして今まで心易うした知らん。

伴之　お俊、そりや嘘だ。

しゆ　エ。

伴之　さう云つて、おれを乘せ、白藤が首にかゝる、證據の胴亂をせしめる氣か。

ト懷より出す。

しゆ　エ。

伴之　矢ツ張り彼奴が可愛いのであらう。

ト　お俊、思ひ入れあつて

しゆ　なんの。愛想が盡きて、縁を切る氣になつて見れば、行き倒れて死なうが、どうせうが、わたしの構ふものか

いなア。
伴之　そんならほんに、こりやア要らぬか。
トぶらつかせる。
しゆ　なんの。それが事になつて、此方の內を出て行けば勿怪の幸ひ。そんな物が爰にあるゆゑ、これまで兎やかう深切に、云うて下さんしたお前の氣が惡い。早うどこぞへ遣つて下さんせいなア。
善八　よし〳〵。物を云はせるまで、わしが預かりませう
ト胴亂を取る。
しゆ　こなさんが預かつたら、早う持つて行かしやんせ。エヽ、氣の利かねえ。
善八　ほんに、どうか邪魔になりさうな座敷の樣子。
しゆ　早う何處へなと
善八　行けといへば、傳兵衞さまが、駕籠を誂らへてくれろと云はしつた。ドレ、駕籠屋から
伴之　錢湯へでも行つて來やれサ。
善八　伴さん、御祝儀は〆めたものだね。
ト流行り唄になり、善八、胴亂を懷へ入れて、向うへ入る。
伴之　あれを見たら、身共もちつと落ついたやうだが
しゆ　落ちついたら、世話して下さんすかえ。
伴之　イヤモウ、白藤さへ目の前で、突出してしまへば、掛替への無い首でも遣る氣だ。
しゆ　エヽ、モウ、そんな氣にかゝる……それ程わたしを思うてなら
伴之　金か。
しゆ　イヽエ。
伴之　着物か。
しゆ　イヽエ。
伴之　そしてなんだ。
しゆ　アノ、お前の持つて居やしやんす、國安とやらの短刀を
伴之　エ。
しゆ　ホヽヽヽ。きつい愕りの仕やう。サア、あれを下さんせと云うたら、定めて源太さんにでも遣る事かと思はんせうが、さら〳〵さうぢやござんせぬ。外にちつと
伴之　眞實欲しいといふなら遣りもせうが、お俊、ほんに白藤を突出すかよ。
しゆ　アレ、また疑ひ深い。
ト抓る。

伴之　ア、辯い。もうめかすとは有り難いが、すりや、いよいよ

しゆ　お前の見る前で、すつぱりと

伴之　突出したら

しゆ　その短刀

伴之　切れ文と引替へに

しゆ　必らず詞を、モシ、番へたぞえ。

ト嫌らしいこなし。合ひ方になり、奥より源太出て來り、この體を見て

源太　エヘン〱。

ト咳ばらひをする。これにて兩人別れる。

お俊、わが身は先刻から爰に居たか。

しゆ　アイ。わたしが内で、わたしが何處に居やうと心次第。お前はマア、爰へ來るなら來ると、お客の座敷、ちつとは遠慮したがようござんすわいなア。

源太　イヤ、おれはそんな事は氣が附かなんだ。……こりやア伴さま、飲んで居りますね。

ト煙草盆を控へ、下へ坐る。

伴之　イヤモウ、藝者の喰ひ倒れは當り前。お主もちつと粹になりやれな。

しゆ　野暮も野暮、脊負つて立たれぬ箱附きの大象といふは、主の事ぢやわいなア。

ト呑み込ます。

源太　そんなら

トさてはといふ思ひ入れあつて

ム、ハ、、、、その又、大象になんで惚れて、兎やかう吐かして斯うして居るのぢや。

しゆ　そりやツイした時の表裏で、安本丹も喰うて見たれど、長うはいけぬ。これから又、伴さんのやうな、見つきの肴を。

ト寄りかゝる。

伴之　旨いとお見立ては、菰の星鰈をさゝれたり。

ト嫌らしく衣紋を作る。源太ムツとしたるこなしにて、立つて行かうとする。

しゆ　待たしやんせ。

源太　用があるか。

しゆ　お前、今のやうに云はれたのが腹が立つかえ。……腹が立つなら、男らしう、物を云うたがよいわいなア。

源太　男らしう、物を云へとは。

しゆ　サア、女子に斯う云はれ、料簡して行かずと、存分

にして、美しう、手を切つたがよいわいなア。

源太　ヤイ、お俊、酒の上の悪いはいつもの事と、胸で納めて居たが、手を切れとは、そりや重いせりふだぞよ。

しゆ　重いも輕いもいつた事か。高が縁切つて欲しいわいなア。

源太　縁が切つて欲しくば、斯うして切つてくれう。

ト踏みにかゝるを、伴之進隔てゝ

伴之　オツと關取、逆上ろは尤もだが、これがほんの女房といふではなし。疵附けられては、後の膳に据る身共が難儀。

しゆ　ソレイナア。なんぞと云ふと、力自慢に瘤を出して、あの鈍い顔見やしやんせ。ホヽヽヽヽヽ。

源太　ムウ。おのれはなア。摑み殺しても飽足らない奴だやが、心の腐つた奴に、べん〳〵とぐツついて居て、恥に恥を搔かうより

しゆ　縁を切る氣にならしやんしたら、爰はわたしが内。どこへなと出て行かしやんせ。宿無しさん。

源太　エヽ。うぬはなア……。よくもそんな口が叩かれた事ぢや。よいワ。望み通り出て行つてくれう。

ト行きかゝる。

しゆ　行かしやんすなら、別れた證據、向後構ひないと云ふ、切れ文書いて行かしやんせ。

ト合ひ方。

源太　うぬがやうな奴になんの未練。望みの通り

ト源太そこにある硯箱にて、卷紙へ切れ文を書く。此うち、二階の障子を明け、傳兵衛、下を見い〳〵、これも何か卷紙へ書いて居る。源太書き終り

ソレ、切れ文。大事にかけて、うしやアがれ。

ト投げつける。

しゆ　三度戴いて、禮を云ふぞえ。

源太　エヽ、うぬ。

ト立ちかゝる。

しゆ　どうしたとえ。

ト源太を門口へ突き出す。

源太　人の皮着た畜生めが。

ト門口をシャンとしめる。尤も、これまで、始終表面ばかり腹の立つこなし。お俊も右の思ひ入れよろしく源太ツカ〳〵と足音して、花道中程まで行き、ニツコリ思ひ入れあつて、そろ〳〵取つて返し、門口に立聞く。

伴之　オヽ、お俊ぼう、出かした〳〵、よく云つた、釋迦でも腹を立てにやアならない、今の愛想づかしで、のろくなり切つて居る白藤めも、思ひ切つて書いたその切れ文。

しゆ　なんの、土俵の上では強からうが、手もなう突き出してしまうたれば、これでは、お前も

伴之　疑ひが晴れいでどうするものか。モウ〳〵、襟元がゾツとして、頭が痺れる程、嬉しい〳〵。

しゆ　嬉しくば、約束通り

伴之　ソレ短刀と遣りたいが、あんまりうま過ぎて、心の程が覺束ない。

しゆ　アレ、まだ、それほど疑はしやんすなら、まだこの上に

ト伴之進が脇差にて、指をポンと切る。

伴之　ヤア、そんなら指まで切つてくれる氣か。重ね〳〵の心中を見て、この上どう疑はれう。サア〳〵、約束の短刀。

ト渡す。お俊、此うち、指を紙に包み

しゆ　これでわたしも嬉しいわいなア。

伴之　嬉しくば、此方も約束の、ドレ、その切れ文と今の指を

ト取らうとするを、此方へ持ち替へ

しゆ　イエ、これを遣るはお前ぢやない。

伴之　エ。……そんなら矢ッ張り白藤か。

しゆ　イヽエ、これを遣るのは

伴之　外に誰れだ。

トこの時傳兵衛、書いた物を巻いて、懐へ入れ、二階の梯子を下りながら

傳兵　小賢ながら、この傳兵衛さんだ。

ト舞臺へ下りる。

伴之　ヤア。

ト恟りする。外に源太も恟り、思ひ入れ。

傳兵　コレ、お俊。こりやマア、どういふ譯だ〳〵。どうも斯うも理窟は無い。高が、お俊がおれに惚れて、白藤が手を切りたがつても、この傳兵衛がある事を聞いちやア、おいそれと退きもせず、切れ文も書かない事を知つて居るゆゑ、幸ひ、おれが方に折紙もあり、短刀も取れば、これも揃つて役に立つゆゑ、お家様をだしに使ひ、白藤くるめ一ぱい嵌め、短刀に切れ文を、骨折らずに取つたのだ。なんと、うまく〳〵した狂言か。

ト源太もハツと思ひ入れ。

伴之　ヤア／＼。そんなら白藤ぐらめ嵌めたのか。こりや大事だ／＼。

ト立つたり居たり、気を揉み

さういふ事なら、その短刀を

傳兵　ありやア元が盗み物。指でも附けると、盗人にして縛し上げるぞ。

伴之　ヤア／＼。そんなら返してもくれないのか。

傳兵　これも皆、お俊が働らき。

しゆ　子までなした源太さんにさへ、今まで切らぬこの指も、浮世の中の義理詰めに……イヤサ、お前の深切、白藤さんを突出して、退いたといふ證據のこの指。傳兵衛さん。

ト指と短刀を渡す。

傳兵　オヽ、短刀もろとも受取るからは、お俊

しゆ　疑ひ晴らして下さんせ。

トこれを聞き、源太、門口をブッと明け、内へ入る。

伴之　ヤア、白藤、腹が立つ／＼。お主も腹が立たう／＼。こりやマア、どうせう／＼。

ト取りつくを突き退け

源太　ヤイ、お俊。いま門口で聞いた事、ありや誠か、眞實か。

しゆ　お前は何處へやら行かしやんしたと思うたに、立聞きしなさんしたら、是非がない。如何にも、あの通りぢや程に、お前も諦らめて下さんせいなア。

源太　エヽ、そりや、その筈ぢやあるまいがな。

伴之　さうだ／＼。モウ／＼、腹が立つて、臓腑が沸え返つて、どうも斯うも、斯うもどうもならぬ。どうぞしてくれ／＼。

ト立騒ぐ。

源太　エヽ、やかましい。

ト殴り倒し

外の者なら、遣り事にかけても、黙つて居やうが、おれも白藤、わりやそれで濟むかよ。

しゆ　濟まぬと云うて、どうするえ。

源太　イヤ、うぬ。

ト立ち上がる所へ、お萱、抱き子を抱へ、走り出て、源太へ差しつける。合ひ方になる。

かや　コレ、源太どの。委細はあれで聞きました。腹が立たう、尤もぢや／＼。

伴之　オヽ、尤もとも〲。尤も中の尤も頭だ。……コレ。阿母、様子を聞いたと云ふが、こなたは耳が聞えるかよ。

かや　サア、蟻の嚏くまで聞え過ぎれど、藝者の母になつて居れば、どうの斯うのと面倒さ。三年あとの病氣から聞えぬと云うては居れど、聞かにやならぬこの場の仕儀。イヤ娘、わりやいつの間に

ト傳兵衛を見て

と云ふも面目ない。……尤もハヤ、お客の座敷を勤める藝者、堅いばかりでもゆかず、事と品にては寢るとやら、轉ぶとやらもあるこつちやさうなけれど、そりや外の藝者衆の事。其方ばかりは、コレ、この源太どの、色戀を離れ亭主分、好い事ばかりはない商賣なりや、仕合せの悪い折々は、溜つた金の貢を受け、人の暮しはからくりもの、身上の居を出さぬとなりや、拜んで居る白藤どの。殊に、斯ういふ子仲までありながら、おのれは、ようマア、今のやうな事が

ト腹立ち泣き。お俊もヂツとこなしあつて

しゆ　サア、そりやモウお前が云はいでも、汲み分けては居るけれど、云ふに云はれぬ

ト傳兵衛、睨める。これにて

事もなんにも無い。高が嫌になつて乘替へる氣。男がようて、金持ちの傳兵衛さん。母さん、お前もこれから御隱居様。樂しんで居やしやんせいなア。

かや　エヽ、おのれはなア。

伴之　エヽ、おのれはなア。

ト立ちかゝるを

源太　ハテ、默つてござれ。

ト引据ゑる。傳兵衛、思ひ入れあつて

傳兵　イヤ、默つて居ちやア事が解らない。突き出されたら、思ひ切つて、得心の挨拶して

しゆ　居候ふの當り前。キリ〲内を出て行かしやんせ。

かや　イヽヤ、そりやならぬ。親の詞も用ひぬからは、おのれ勘當してなりと、白藤どのに置かにやならぬ。出たくば、おのれ出て行き居らう。

しゆ　出て行かいで。その勘當も、疾から待つて居たわいなア。……年寄りと古骨は、抱へて居る程、邪魔ぢやわいなア。

源太　エヽ、おれはおれとも思はうが、現在親にその斷。

ト立ちかゝるを、お萱とめて、抱き子を突きつけ

かや　コレ、切つても飽足らぬ憎い奴ぢやが、可愛うござ

るこの子が。……あれを切らば、こなたも死ぬ。
源太　生れながらの孤子に
かや　するも彼奴が心柄。エヽ、おのれはなア。
ト赤子泣き出す。
しゆ　こりやモウどうも
ト堪えかね、寄らうとするを
傳兵　コレ、水離れを忘れたか。
かや　ハヽア。
ト抱き子を抱へ、泣く。源太、思ひ切つたるこなしに
て
源太　アヽ、恩も恨みもこれまでの、夢と思へば事は濟む。
人に知られたこの白癡。心の腐つた女めに、未練な事は
もう云はぬが、無ければならぬその短刀。まんと手切れ
にくれまいか。
傳兵　さう和らかに出りやア、おれも傳兵衛。短刀に折紙
添へて
源太　くれたらお俊もくれてやらう。
傳兵　ソレ、改めて
トお俊へ渡す。
しゆ　後で似せぢやと云はぬやう。

ト折紙も見せ、短刀も抜いて渡す。源太、よく〱見
て、鞘へ納め
源太　しつかりと受取つた。
傳兵　男と男が齒と齒の切れ文。この切れ文は返してやら
う。
ト二階で書いた物を源太が懷へ入れるうち、中を割つ
て
伴之　その短刀を
ト二品へ立ちかゝるを、傳兵衛、門口へ突き出し
傳兵　また泥坊になりたいか。
伴之　サア、それは。
傳兵　一緒に歸るが、無事であらう。
伴之　ウム。
ト是非なく堪える。
傳兵　サア、お俊、駕籠は善八に云ひつけて、廣小路に出
來て居る。これから連立ち、向島の別莊。サア、出やれ。
トお俊が手を無理に取つて、門口へ連れて出る。此う
ち、暖簾口より勝次郎出かゝり居て
勝次　この短刀は、おれが兄貴へ
ト短刀と折紙を持つて、門口へ駆け出すを、傳兵衛引

ツ捕へ、短刀と折紙を引ツたくる。この立廻りのうちに、傳兵衛、眞の折紙を懷へ入れる。勝次郎、傳兵衛が懷へ手を突ッ込み、以前の煙管筒と摺り物を二品と間違へ、摑み出すを、其まゝ內へ投げ込む。源太、勝次郎を引きつける。この立廻りに、勝次郎、以前の着物を落し置く。

傳兵　ソレ、短刀、折紙。持つて居るぞ

源太　女房と釣替へ、動かつしやるな。

ト赤子泣き出す。

しゆ　アレ、又、あの子が

ト思ひ入れ。

傳兵　ハテ、もうお主の子ぢやアあるまい。

源太　男の子は男に附くと

かや　貰ひ乳でなと育てませう。

しゆ　とはいへ、これが

傳兵　ハテ。

ト思ひ入れ。

しゆ　義理は切ないものぢやなア。

伴之　イヤ、呆れました。

ト不承々々に先に立ち、お俊心を殘すを、傳兵衛思ひ入れしい／＼、連れて向うへ入る。

源太　こなたがこれを持つて駈け出すは、また外へくれる氣か。人殺しなり、女房去り、千辛萬苦もこの二品。兄御の事も思はつしやらぬか。

勝次　それだに依つて

ト起き上がつて、二品を見て

勝次　ヤア、こりや張り子の煙草筒に摺り物。

ト源太取つて

源太　誠に。……すりや、お俊と傳兵衛めに、又やられたか。

かや　ヤア／＼／＼。

トうろ／＼する。

勝次　この捕り繩で二人の奴等を。

ト最前の二筋の捕り繩を持つて駈け出すを、源太ちやつと留めるうち、路地よりお鳥出て來り、落ちてある着物を拾ひ

とり　さてこそ人殺しの證據の着物。白藤、おのれ

ト源太にかゝるうち、勝次郎、振り切つて一散に向うへ走り入る。源太、お鳥を蹴り倒す。ヨロ／＼となり、有り合ふ棕櫚箒を取つてお萱に打つてかゝる。立廻り、

四ツの鐘。

源太　南無三、後夜。夜中までには、もう一時。

かや　行てござれ。

ト源太、見事に尻をからげ、曲撥、時の鐘送り、源太、一散に向うへ走り入る。舞臺はお萱、お鳥よろしき見得にて、この道具をぶん廻す。

本舞臺、三間の間、三つ程並び土藏の、うしろ黑塗りの駒寄せ。下座の口、木戸、誂らへの道具に納まる。ト時の鐘、佃にて、花道より駕籠舁き、垂れを下ろし、提灯を附けたる四つ手を搔ぎ出て來る。後より、傳兵衞、以前の形にて、附いて出、舞臺へ來る。伴之進、後より駈けて、出て來り

伴之　オイ〳〵、そこへ行くのは傳兵衞ぢやないか。

トこれにて駕籠を立てる。

傳兵　さういふは伴之進どのか。

伴之　傳兵衞ならば、われを、

ト拔いて切りかける。これにて駕籠舁き、アツと逃げ込む。傳兵衞、伴之進が利腕を捕へ

傳兵　このおさぶは危ない。何をするのだ。

伴之　知れた事だ。この駕籠は慥かにお俊。短刀まで捲き上げられ、道で云ひ譯云はうと、藥研堀から一緖に出たを、廣小路の暗闇で、よくおれをまいて、つん逃げたな。ぬく〳〵お俊と添はさうか。破れかぶれだ、覺悟しろ。

ト振り解いて切つてかゝるを、見得よく留め

傳兵　ヤレ、待たつしやい。女房子のあるこの傳兵衞、ナニあの藝者に迷ふものだ。お俊はこなたに遣る心。

伴之　なんと。

傳兵　サア、主持ちのこなた、お身樣が手を切らしては、向うが角力、後々の爲にならぬと、そこでおれにかづけて、緣を切らせ、こなたの所へ行かうと、お俊が皆賴んだわな。

伴之　ヤア。

傳兵　それ程、心中者に思はれるとは、玆な畜生め。

伴之　それに又、おれが大切な短刀を遣らせたは。

傳兵　オツと云ふまい。それもあの勝次郎めと、取合ひのうち掏替へて、似せ物を渡し、誠は爰に在します。

ト短刀と折紙を提灯の側へ出す。伴之進見て

伴之　ほんに、こりや眞の短刀。ハテ、とんだ手品遣ひだな。

傳兵　この短刀にお俊を添へて、こなたに遣るが、嬉しいか。

伴之　イヤモウ、傳兵衛大明神樣々々。ドレ、その短刀を

ト取らうとするな、此方へ持ち替へ

傳兵　オツと、この位な物、只はならぬ。骨折り賃の金と引替へ。

傳兵　尤もだ。して、その高は。

伴之　百五十兩。

傳兵　イヤ、その金

伴之　無いとは云はさぬ。持つて居る事知つて居る。

傳兵　イヤサ、この金はどうも

伴之　否ならおれも、マア否だ。

伴之　そんならどうでも

傳兵　金を渡すか。

伴之　サア

傳兵　サア〳〵。ハテ、離れ際の惡いお人だ。

伴之　ア、、せう事が無い。ソレ、丁度百五十兩。

ト財布より出して渡す。傳兵衛取つて

傳兵　ソレ、改めて見さつしやい。

ト駕籠の垂れへ打込む。

勝次　月星の極印。紛失金に相違ない。

ト駕籠よりヌツと勝次郎出る。伴之進悄りして

伴之　ヤア。こりやお俊と思ひの外

勝次　オ、、勝次郎だ。若氣の至りと云ひながら、おのれらに煽てられ、これまでの惡事放埓、どんな天魔の見入りでも、白藤夫婦が最前の、身を粉に碎く辛苦を見て、どう改めずに居られるものだ。

傳兵　この傳兵衛もお出入りゆゑ、云ひつけたる盗人詮議。掛てゝ加へて白藤に、云ひ號けの上總のお澤。おれも遁れぬ緣といひ、里は大盡、白藤が、末の爲と心根の、不便な義理を柵に、云ひ聞かしてお俊に賴み、一旦緣切り祝言させ、後はどうとも捨て詞。やう〳〵お俊に得心させ、手切れの短刀繼ぎ際で、摺替へさせたも、この金を

勝次　其方に出させう爲。お俊が手より五十兩。今また爰に百五十兩。これで丁度二百金。

伴之　ヤア〳〵、そんなら殘らず云ひ合せか。

勝次　知れた事だ。爰でこそ兄貴の捕り繩、役に立つた。引ツ縛る。腕廻せ。

ト繩捌きする。

伴之　ア、コレ、その金を持つて居たとて、盗人の金借り

まいものか。金藏へさへ入らねば

勝次　ドッコイ。さう云はせまい爲にこそ、最前取つたこの笄。

ト 笄を出す。

傳兵　御金藏に落ち散つたその片しは、コレ爰に。

ト 同じく笄の片しを出し

これでも陳じ爭ふか。

作之　サア、それは

三人　サア〳〵〳〵

勝次　なんと。

作之　ムウ。……してお俊めは何處へやつた。

傳兵　知れた事。外の駕籠でおれが別莊。原庭へ四五日逗留。

勝次　して、この譯を白藤へは

傳兵　口上書きに認めて、切れ文と見せ、最前懷。後で讀めば、得心する。

勝次　すりや、何もかも

傳兵　手都合、上首尾。

ト ばた〳〵にて、向うより善八走り出て來り

善八　ヤア、傳兵衛さま。いま本所河岸でお俊さまの駕籠に逢つたら、先刻わしが預かつた、關取の胴亂を、しやにむに浚つて一目散に、駈け出して行くへが知れぬが、ありやマア、どういふ譯でござりませう。

傳兵　ヤア、そりや慥かに人殺しと、名乘つて出る氣か。但し、別れを悲しんで、死にゝでも行きはしないか。

勝善　ヤア。

傳兵　エヽ、コレ。後の思案も聞かず、早まつた女だなア。

善八　まだその上に廣小路で、役人衆がヒソ〳〵と、話すを聞けば關取を、縛れ括れといふ噂。

勝次　すりや、白藤も

傳兵　サア、行くにも行かれぬ。爰にも盜賊。

善八　その泥坊は善八が

作之　そんならわれも

善八　矢ツ張り此方の内幕サ。

作之　さう云や、うぬから

ト かゝるを立廻りに、傳兵衛、作之進を見事に四つ手へ打込み、垂れを下ろし、捕り繩にて括る。

勝次　これは。

傳兵　當座の牢輿。

勝次　出來ました。

傳兵　白藤お使が、後も氣遣ひ。

ト花道へかゝる。

勝次　ちつとも早く。

傳兵　コレ、駕籠を急がうぞえ。

勝次　やつとせ。

ト駕籠を舁き上げる。尻をからげる。佃騒ぎにて、ひやうし幕

ト幕の外、矢張り佃にて、傳兵衛向うへ入る。あとシャギリ。

大切　道行の場

淨瑠璃　おしゆん 白藤　風誘笠四竹　富本齋宮太夫連中

役名──潮田作之進。船頭、長助。藝者、お俊。白藤源太。坂間傳兵衛。

本舞臺、下の方まで、一面の黒幕、柳の吊り枝。舞臺先へ流れの浪板、芽吹き蘆のあしらひ、すべて石原、夜の景色。爰に白藤源太、尻からげ、一本差しの形。これを黒の捕り手四人にて、十手を構へ、取圍んで居る見得。寺鐘にて幕明く。

四人　動くな。

源太　待つた、お役人様。こりやなんとなされまする。

捕一　ヤア、吐かすまい。おのれ昨日割下水にて、權助と申す者を殺害の由。

捕二　即ち女房が訴人によつて、召捕りに向ひしところ、逐電ゆゑに手分けなし

捕三　この所にて見つけし上は

捕四　最早遁がれぬ白藤源太。

四人　尋常に、腕廻せ。

源太　成る程、露顯いたせし上は、全く陳じは致しませぬが、ちつと仔細ござつて只今は、どうも繩にはかゝれませぬ。暫しのうち、御宥免下されませうならば、此方より名乘つて出で、御刑罪を受けませう。何卒この儀お聞濟み。

捕一　仔細あるにもせよ

捕二　見附けし科人、それなりに

捕三　見遁がして置かうや。

捕四　無益な事を申さずと

四人　尋常に、腕廻せ。

源太　さう仰しやれば是非に及ばず。お手向ひ致してなりと

四人　無法な奴の。腕廻せ。

ト四人一度に打つてかゝる。一つ鉦になり、源太一刀を抜いて、ちよつと立廻り、捕り手四人を向うへ追ひ込み、花道にて白刃を納め、ウム、と思ひ入れ。ゴーン、と時の鐘の頭を打込む。これにてチヨンと黑幕を切つて落す。向う椎の木屋敷の道具。下の方、齋宮太夫連中居並び、直ぐに淨瑠璃。

へ身を捨鐘と突きいだす、男の立端こゝかしこ、お俊が行くへ白藤は、見果てぬ夢の今更に、破れかぶれとなりふりも、宵の儘なる亂れあし、片葉の蘆の角芽ぐむ、心一圖に騒がれて、あと追ふ風の音さへも、もしやそれかと立ちどまり。

トこれにて花道より舞臺へ戻り、よろしくあつて

源太　慥かにあのお俊めは、傳兵衛めとこの道へ、先へ失せたか、但しは後か。身に科のあるこの白藤、縲目の恥にかゝらぬうち、どうぞ彼奴をぶッ放し、返す刀に何奴も此奴も……マア何にしろ、傳兵衛めが、寮を尋ねて。オヽ、さうだ。

へ胸の曇りもおのれやれ、晴らさんものと息せきし、岸をあなたへ見覺えの、庵崎さしてぞ。

ト三重、雨車の音になり。一散に下座へ入る。ト掠めたる時の鐘、雨車、直ぐに淨瑠璃。

へそれぞとも、知らでぞ歩む夜の道、泪の雨と降りしきる、その春雨にしよんぼりと。

トばた／＼になり、向うよりお俊、大のしの番傘を中開きにして來り、花道にて

へお俊は獨り濡れ羽鳥、干す方も無き憂き事に、命一つを投げ島田、神ならぬ身は昨夜まで、變るまいぞと抱きしめて、嬉しの森の睦言も、今日は悲しの森となる、淺い縁のその仲に、あゝ羨やまし女夫石、ならう事ならあのやうに、契りもかたう朽ちもせで、添はゞ心の竹町も、屆かんものと女氣の、あどなき思ひ行きなやむ。

トお俊、空を見上げて

しゆん　嬉しや、雨もやんださうな。白藤さんとやう／＼で、云ひ替してから一年三年、兼松といふ嬰兒まで儲け、改めて祝言せねど、女夫の心で今日が日まで、睦まじう暮らして居たも、云ふに云はれぬ仕儀になり、今宵の體裁、白藤さん、さぞ憎かつたでござんせう。

へその云ひ譯もしたけれど、云はれぬ義理と間違ひと、千代鶴とやらの短刀を、どうぞと思ふ心から、愛想づかしの有り條もへ心で泣いてへ死ぬ覺悟、さうとも知らず亡き後の、四十九日も立たぬうち、傳兵衞さんが世話やいて。

あの

へ云ひ號けのお澤さんと、女夫は知れて居るけれど。

二世を

へかけてと。

云はれたら

へわたしや

あの世で

へなんとせう、死なぬうちからその事がと、袖にかこつぞ哀れなり

ア、なんぼどのやうに思うたとて、死んでしまうたその後での事。それより早う主の代りに、石濱のお邸へ、人殺しと名乘つて行て、殺されたなら、可哀い事ぢやと主の口から一遍の、回向をしても下さんせう。そればつかりが樂しみとは、果敢ない事になつたわいの。……アア、なんのこれも愚痴といふもの。未練殘さず、さうぢや〱。

へ出でゝ心を取り直す、空も朧の月影に、見えぬお俊を尋ねわび、氣も間取ようろ〱と。

トこれにて源太、下座より出で來り、お俊に行き合ひ、チヨンと月出る。源太、お俊を見て

源太　ヤ、お俊か。

しゆ　白藤さん。

源太　うぬを一遍尋ねて居た。

へ云ふ間も荒氣に、切り込む大刀。

しゆ　マア〱、待つて

へ潜りつ拔けつへ遁がしはせじと捻ぢつけて、思ひ知れよと只一突き、刎ね退くはずみに、大地へぐつと、力に任せ立つたる白刃へお俊は落ち散る一通を、冴ゆる刃合の月あかり。

トこの立廻りのうち、源太が懷より中幕の一通落ちる。お俊、捻ぢつけられた形にてこれを拾ひ取り

しゆ　白藤どのへ、坂間傳兵衞。

源太　なにを。

ト白刃を拔かうとする。その手に縋つて

しゆ　サア〱〱。その腹立ちは尤もでござんす。尤も

ぢや。尤もぢやが、モシ、今お前の懷から、落ち散つたこの手紙。どうやら樣子のありさうな。マア／＼／＼、氣を鎭めて、ちやつとこれを

ト目先へ下より突きつけるを

源太　おのれが書いたその切れ文。見たくでもない、それよりは

トまた白刃を取らうとする。お俊、手紙を持ちながら。其まゝ留める立廻り。

しゆ　モシ、それでも坂間傳兵衞と

源太　どうしたと。

ト立廻り、源太フト手紙を見て

ナニ／＼「お澤こと我れら母方の縁者にて、云ひ號けの其許を慕ひ……」こりやおのれが切れ文とは

ト思ひ入れ

ハヽヽ違うてあるには、何かゝ樣子の

ト源太取上げ

「其許を慕ひ、眼病となり候ふ事、あまり不便に候ふ折から、お俊こと、短刀の折紙を苦に致し候ふ所へ附け入り退引きさせぬ義理詰めにて相頼み、愛想づかしを致させねば、其許にもお俊を捨てゝ、お澤と夫婦にはなられまじくと、それゆゑ無理なる頼みにて、緣切らせ申し候ふ」……ヤヽヽヽ。

しゆ　そりやわたしに傳兵衞さんが、頼ましやんした今日の入り譯、お前にさうと打明けては

源太　べら坊め。そんならさうと

しゆ　マア／＼、後を

源太　「一旦お俊と手を切り、お澤と祝言いたされ候ふ上にては、お俊が事、何となりと名を附け、一緒に置き遣はし申すべく候ふと存じ候ふ。斯樣に申し候うても、似せ物の短刀を引替へ渡し候ふ我れらゆゑ、疑はるべく候はんなれども」……疑はねえでどうするものだ。折角手に入る短刀は似せ物。

しゆ　エ、。

源太　それだに依つて、お主も、こりやア、傳兵衞めに嵌められたな。

しゆ　サア、どうもそれでは手紙の文體……ドレ、

ト取つて

「疑はるべく候へども、その儀は貴殿お世話なされ候ふ勝次郎どの身の上にかゝりし、梅柳山寄附の金子、正しく伴之進が盗み候ふものと存じ候ふゆゑ、彼れに同心いた

し候ふ體に見せ、眞の短刀にて心をゆるさせ、盜賊の證據見出ださん爲に候へば、折紙諸とも短刀は、慥かに所持いたし候ふゆゑ、少しも氣遣ひ致されまじく候ふ。」

源太　ムウ、すりや、あの短刀にて、伴之進を、盜賊と見出さう爲……ドレ、……「且つ又、勝次郎どの事も、其許方の厚き志しを感じ、眞人間になられ候へども、これとても、伴之進に油斷させ、盜賊の證據見出だし候はゞ、心安う捕へん爲の、惡しき身持ちに候ふ間、左やう思し召し下され候ふ。右の段々、話したく候へども、伴之進心附き候うては、首尾いたし難く、それゆゑ荒增し書面に認め申し候ふ。」オヽ、

しゆ　わたしも、これ程まで、傳兵衛さんの御深切なといふ事を

源太　夢にも知らず、お俊、其方を犬畜生と思つて居た。堪忍してくれ。免してくれ。

しゆ　イエ〳〵、愛想づかしの事ばかりぢやござんせぬ。わたしが手よりお屋敷へ、上げたお金の事よりして、勝次郎さまへお咎め、これもわたしがした科ゆゑ。云ひ譯と一つには、添はれぬ緣の悲しさに、死ぬるこの身を人殺しになつて、お前の命の代り、あの不忠のお屋敷へ、覺悟極めて死にゝ行くわたしが心、白藤さん、さらばでござんす。

ト行かうとするを、源太、其まゝ留め

源太　コレ、待てお俊。

しゆ　イエ〳〵、この事云うては得心がと、これゆゑ獨り覺悟のわたし。留めずと離して

ト泣く。

源太　コレサ、待ちやれよ。

ト引廻して

それ程おれを思つてくれる、志しは嬉しいが、人を殺したその科を、女にかぶせて、のめ〳〵と、生きて居さうなおれでもない。その下手人と腹切つて、死ぬのは矢ッ張りこの白藤、あの頼もしい傳兵衛どのに、短刀の事、何もかも、世話の次手に皆任せて

しゆ　さういふお前の心なら、後に殘つてわたしばかり、とても生きては居ぬ心。ならう事なら一緒に死んで

源太　そりや斯うなつたら、互ひの因果。

しゆ　得心して下さんすか。

源太　明日は世間の笑ひ草。笑はれ次手に

しゆ　二人共々。さうして死ぬるは

源太　ハテ、死ぬ所はお定まり、田を三圍の神過ぎて
しゆ　人白髭の、森の彼方。
　ト、チヨンと月入る　源太思ひ入れあつて
源太　ア、、定まり事であらうかい。
　トこれにて淨瑠璃のうち、三圍の道具になる。
へ二人つれ立ち道芝も、春の限りも山吹の、露重げなるその風情、外には知れぬ仇名草、浮氣な風に夜櫻の、船で散りゆく早歸りへどうでこの世で添はれぬならば、長い未來を樂しみにへあれあの唄の心意氣、可愛らしいぢやないかいなへ此方も明日は極樂へ、二世の世帶の宿場入り、お內儀さんと云はれたら、緣道附いたこの指に、仕事覺えてなるたけは、手桶で水も汲み習ひ、地味な暮らしがこれまでの、派手に增したる眞實の、女夫ぢやぞえと寄り添へば、へよしないおれに繫がれて、京大坂の角力へも、連れ立つやうに喜ぶを、思ひやる程猶更に、この白藤は人殺し、とても死なでは叶はぬ命、其方は老いた母もあり、殊に幼ないあの兼松。
藁の上より、外人へ預けて、手鹽にかけぬさへあるに、兩親が死んだなら、誰れがはごくみ、育ててくれう。
へ玆の所を汲み分けて、後に殘つて坊主めを、見立てゝ母へも孝行が、死ぬよりこの身の喜びぞや。
お俊、どうぞこの事聞分けて、お主は爰から歸つてくりやれ。頼んだぞ。
へお俊はぢつと目に泪、そりや聞えぬぞえ白藤さん、源太さん、如何に關取さんぢやとて、力ばかりか心まで、そんなに强いものかいな、ほんに角力の噂にも、手取り手取りと聞き馴れて、思ひ染めにしその日より、氣に癖ついて忘られず、どうぞお前と取組んで、百手碎いて一度なと、投げの情があるならば、藝者冥利と茶斷ちして、願ひ願うたお庇にや、金輪奈落と云はしやんした、今際に獨り長らへて、女子の道が立つものか、一緒にやいの。これ申し、拜みますると取りついて、伏し沈むこそわりなけれ。
源太　ア、、なんとせう。せう事がない。それ程までに云
　やる事なら
しゆ　そんなら聞分け死出三途
源太　連れ立つて去なうかえ。
しゆ　エ、、嬉しうござんすわいなア。……そんなら人目
　にかゝらぬうち
源太　死恥かくな。覺悟はよいか。

しゆ　疾から覺悟は
　ト源太、思ひ入れ。
源太　アヽ、まゝよ。
〽後の噂も白藤の、草葉に結ぶ花角力、既にこの世の土俵際、危ふき所へ傳兵衞か〻。
　トこの文句のうち、兩人身拵らへしてよろしくあつて、源太、白刃に手をかける所へ、向うより傳兵衞、尻からげ、一本差しにて、短刀と折紙を持ち、走り出て來る。後より長助附いて出て來る。
傳兵　お傍白藤、早まるまいぞ。
しゆ　ヤア、傳兵衞さん。
源太　面目ない。
　トまた死なうとするを、傳兵衞留めて
傳兵　ヤレ、死ぬにやア及ばぬ。委細は手紙で承知な筈。伴之進めが盜賊の、尻尾を捕へ、ぐる〳〵卷き。お屋敷へと思ふうち、駕籠を蹴破り何處へか逐電。いま來る道の大川端、これと思へど見遁がしたは、お主達を留めたいばつかり。あの侍ひさへ捕へて出せば、人殺しの科は主水さまが、よしなに計らひ下さる由。そんなら死ぬにやア及ばぬ白藤。ちつとも早く大川端へ
源太　そんならお傍は、こなたに預けて
傳兵　オヽ、この二品と共にお傍は
しゆ　すりや、それが眞の
源太　禮はゆるりと、傳兵衞どの。
　ト立ち上がる。この時
長助　白藤、うぬは人殺し。
　トかゝるを源太、投げ退ける。傳兵衞これを押へて
傳兵　爰構はずと
源太　合點だ。
　ト禪のツトメになり、尻をからげ、向うへ一散に入る。長助刎ね退けて、ちやつと立廻り
長助　人殺しの白藤を、ふけらした坂田傳兵衞。その代りにやアお傍と一緒に、その二品をおれに渡せ。
傳兵　この野郎めが、イケふざけた。……お傍、お主はこれを大切に、あの寺島の立て場まで。
しゆ　心得ました。
長助　彼奴をやつちやア
　トかゝるを傳兵衞引きつけて
傳兵　早く行きやれ。
しゆ　アイ。

長助　ト禪のツトメにて、お俊、下座へ入る。
白藤お俊は逃がしても、その折紙は。
　トかゝる。
傳兵　何をしやアがる。
　ト叩き退ける立廻り、どつこいと見得。これより誂らへの鳴り物にて、よろしくタテあつて、どつこいとなる。
〽團扇を入れて預かりし、この心中の勝負附け、ぱつとその名や立ちぬらん。
　トこれにてよろしく立廻つて、兩人見得、勢ひ三重になり、この道具をぶん廻す。
　本舞臺、一面の波幕、眞中に屋根船の舳より正面を見せし飾り附け。團子提灯を掛け並べ、爰に源太、肌脫ぎ凛々しき拵らへ。伴之進、中幕の形。船頭四人源太を圍み、皆々よろしき見得にて、道具とまる。
源太　イケ泥坊め。動きやアがるな。
　トちやつと立廻つて
伴之　某が盜賊より、白藤の人殺し。
船一　おいらが仲間へ匿まつた
船二　伴之進どのに指でも附けりやア
船三　人殺しの白藤源太。
船四　關取でも煎鳥でも
船一　おいらが寄つてふん縛るぞ。
船二　ソレ、白藤を
一同　合點だ。
　ト皆々源太へかゝる。好きキツカケに、誂らへの鳴り物になり、源太、この人數を相手に、大ダテいろ〳〵あつて、トゞ下座より傳兵衛出て來り
傳兵　關取か。
源太　お金の盜賊、伴之進。
　ト伴之進を引きつける。
傳兵　出來た〳〵。
　先づ今日はこれぎり。

幕

勝相撲浮名花觸（終り）

月吉原仁和賀榮

藤屋あづまが對手姿男なりけり女の意氣地夫婦が縁も淺茅が原におはや與兵衛の草枕も薄に露の居候互に胸もさつぱりと割た茶碗と茶碗酒は引窓から見る裏家の月見然も其夜の四ッ手駕に甚兵衛が仕事の振袖道もしら歯のほつとりを味く乘たる口車蝶々に狂ふ與五郎が粹な兄貴の將棊のだん愛が異見の山崎與次兵衛ずつしり取込

金銀の藏入

當穐八幡祭

競に競ふ　十幕續



再演の繪番附

當穐八幡祭

序　幕

鴻野館の場
八幡侍塚の場

役名――南方十次兵衛。同弟、南與兵衛。鴻野後室、護橋御前。三原有右衛門。佐倉郡八。松戸伴藏。關宿兵馬。香取文次。若黨、丹平。倉岡新三郎、荒川左近。南方中間、市助。和泉新田のおくめ。腰元、楓。同、小萩。同、絲萩。山崎屋淨閑倉岡丈左衛門。

本舞臺、三間の間、中足の二重舞臺、一面の緞子障子、左右柴垣植込みなどよろしく、所々に飛び石、すべて鴻野本國館の體。爰に兵馬、文次、麻上下の肩を脱ぎかけ、摑み股立ちにて、兩人、竹刀を持ち掛け聲して立合つて居る。有右衛門、麻上下大小にて煙草盆を提げ、煙管を持ち、立ちかゝつて指圖して居る。白囃子にて幕明く。

ト よろしく立廻りあつて、兵馬、竹刀を打ち落される。

有右　見えた〳〵。

伴藏　イヤ〳〵、香取氏には、きつい御上達でござる。

文次　これは〳〵。

有右　すべて試合は一眼二早足、目を第一に致さねばならぬ。

兵馬　その儀は兼ねて心得居るゆゑ、鯛の潮と承れば、目は人先へ心掛けまする。

有右　エヽ、何をお云やる。サア、松戸氏、お立ちなされ〳〵。身共お相手仕らう。

伴藏　これは〳〵、三原氏のお相手とは、ぶたれぬうちから痛み入ります。

兵文　ドレ〳〵、我れ〳〵は拜見いたさう。

ト 兩人は扣へる。有右衛門ちよつと股立を取る。伴藏いかめしく襷をかけ股立を取つて、兩人眞中へ出で、竹刀を取つて、ヤツと立合ふ。また白囃子になり、兩人立廻り。この白囃子をかり、新三郎先に、郡八、麻上下にて三方へ神酒の瓶子を載せて出で來り、舞臺へ

來るまでに有右衛門、伴藏よろしくあつて、伴藏したたかぶちすゑらるゝ。
伴藏　アヽ、見え過ぎました〳〵。
郡八　これは〳〵、いづれもにはお稽古でござるな。
伴兵　倉岡氏、佐倉氏、只今御下向でござるか。
新三　左樣にござる。例年の通り、當所八幡の八幡にて放生會、即ち神前に捧げし御酒、八幡臨降の時刻違へず、頂戴あるが當家の舊例。それゆゑ持參し、只今下向。
有右　誠にお役目、御兩所とも御苦勞。とは申すものゝ又御用もない後室樣の、この御殿に日がな一日、しやに構へ居るも退屈。それゆゑ慰み半分に、いづれもへ試合の指圖。
伴藏　イヤモウ、有右衛門どのゝ達者な竹刀。
兵馬　女や若衆は喜びませうが、我れ〳〵は大辟易。
文次　併し稽古の勵みには、お手强ほどが相成るものだ。
三人　千萬忝なう存じまする。
有右　それ〳〵、脊骨にとつくり覺えねば、身共がやうな上手にはなられぬと申すもの。御兩所、左樣ではござらぬか。
郡八　左やう〳〵。ちと又身共も折々は、いづれも方へ稽古いたして進せう程に、非番の節はお出でなされい。
新三　イヤモ、何に依らず、稽古の功積らねば至らぬもの。武藝を勵むはこれ全く、その身〳〵の爲ならず、皆御主人への御奉公。御奉公と申せば今日の役目、首尾よく勤め下向の由、後室樣へ申し上げん。郡八どのには、これにて休息。

ト立上がる。

郡八　然らばよしなに、新三郎どの。
有右　倉岡氏。
新三　いづれも、後刻。

ト唄になり、新三郎、下座へ入る。

有右　先づ堅藏の新三郎めが立つたからは、お神酒でも引摺り出し、これで一獻たべようではござらぬか。
郡八　それは何より。身共もひよんな相役で、今日はまだ杯の顏さへも見ませぬ。成る程、同じ兄弟でありながら、兄の倉岡丈左衛門には、似ても似付かぬ新三郎。
有右　誠に盜跖、柳下惠も、そこのけでござらうて。

ト向うにて

よび　豐島さまよりのお使者。
郡八　ナニ、豐島家よりのお使者とは。

有右　定めし姫君輿入れの、その催促の使ひならん。いづれもにも出迎ひ召されい。

ト また向うにて

よび　お使者。

ト呼び、太鼓謠になり、有右衛門先に、皆々出迎へる。向うより左近、麻上下、大小にて、三方へ掛け物の箱を載せ、これを持ち出で來り、花道にてとまり

左近　豐島家よりの使者として、荒川左近罷り越す。誰ぞお取次下されい。

有右　これは／＼、遠路のお使者、御苦勞千萬。

皆々　先づ／＼これへ。

左近　然らばいづれも、お許し下され。

ト また太鼓の切れにて左近舞臺へ來り、上の方へ通る。

有右　先づ以て武州より、當野の本國八幡まで、遠路のお使ひさぞかしお疲れ。間違ひまして未だ知らぬ人にござらぬ。手前は三原有右衛門。

郡八　即ち拙者は佐倉郡八。

伴藏　松戸伴藏。

文次　香取文次。

兵馬　關宿兵馬。

皆々　以後はお見知り下されい。

左近　兼ね／＼お名前は承知いたす。以來御懇意に申し請じませう。

有右　して、今日お使者の趣きはな。

左近　罷り越したは餘の儀にござらぬ。先達て當家の嫡、千島正さまへ、手前姫君御婚姻の取結び。即ち結納の印として、互ひに家の重器を取替へ、めでたく申し納めたところ、折惡しき千島正さまには御不例ゆゑ、これまで延引。この儀について何事も、御母様の計らひと聞き、江戸お館の當主を差措き、この御本國下總まで、わざわざ今日使者の役目。この儀後室樣へ、よしなに御披露願ひ入りまする。

有右　すりや、結納代りの胡蝶の香合。

郡八　延引ゆゑのお使者とな。

有右　何は兎もあれこの趣き。

四人　後室樣へ申し上げん。

纜橋　イヤ、披露に及ばぬ。豐島のお使者へ、纜橋が逢ひませう。腰元ども、障子を開きや。

絲萩　畏まりました。

ト琴唄になり、静かに障子一面に開くと、眞中の褥に

座し、繼橋御前、裲襠切り髮、後室の拵らへにて、左右に楓、小萩、絲萩、腰元の形にて扣へる。楓、手飼ひの狆を抱いて居る。舞臺の皆々もよろしく住ひ、辭儀して居る。

有右　後室樣には端近のお入り。即ちこれに豐島家のお使者。

繼橋　荒川左近、はる〴〵大儀。

左近　ハツ、先づは繼橋御前さまにも、御機嫌よう入らせられ、恐悦至極に存じまする。

繼橋　其方も無事で、めでたい〳〵。さうしてお使者の趣きは、千島正へ婚姻の、結納を急ぐ使ひとな。

左近　仰せの通り、その砌り千島正さま御不例にて、結納の一條延引。高いも低いも親心、一旦申し交せし緣邊、もしや異變もあらんかと日夜の案じ。それゆゑ今日お館へ使者の仔細は、即ち豐島の重寶たる、唐土の吳道元が蝶の掛け物、御契約の通り送り奉るの間、當家の重器胡蝶の香合、直さま拙者にお渡し下され、めでたう印を互ひに納め、御婚姻首尾ようあるやう、取計らへよと使者の役目、何卒御許容下さりませう。

繼橋　成る程、そりや此方も同じ事、豐島のお家に聞き傳ふ蝶の掛け物、當家の重器胡蝶の香合、二つ蝶々睦まじう、比翼の袖を重ぬるやう、互ひに取替へ婚姻の印と、約束せし上からは、女ながらも鴻野の後室、異變あるべきやうはなけれど、折惡しき千島正が、病氣ゆゑ思はぬ延引、何とも氣の毒。

有右　ア、イヤ〳〵、後室樣、そりや何を仰せられまする。江戸屋敷に御安泰で、お出で遊ばす殿を捕へて。

繼橋　ア、コリヤ〳〵、そりや何云ふのぢや。千島正はいつぞやより、病によつて出仕も止め、病架に籠ると日每の便り。再々なれば婚姻の、賴みの印を豐島家へ。

郡八　イヤ、送られぬのは肝腎の、胡蝶の香合紛失ゆゑ。

繼橋　コリヤ郡八、そりや何事。大事の寶紛失とは、家の守の疎かゆゑと、他家へ謗らせ笑はすのか。元より顯然有る寶を、紛失なぞとは麁相な事を。

ト左近へ思ひ入れ。郡八しよげる。

楓　ほんに常からツカ〳〵と、よう何事にも出過ぎなお方。

小萩　餘所のお使者の前といひ

絲萩　後室樣の思し召し。

文次　それ〳〵、こりや腰元衆の云はるゝ通り、何事にも

出過ぎなお方、ちとお嗜なみなさるが
有右　イヤ、文次どの、默らつしやい。いま郡八の申され
たは、僞はり飾らぬ武士氣質、みな正道といふものだ。
伴藏　如何にも左樣、御息才な殿を病氣と云ひ立て
兵馬　無い寶を有るにして、事を左右にお寄せあるは
繼橋　すりや、有右衞門を始め、其方達まで
有右　虚言は申さぬ武士の一徹、論より證據はその盜賊、
只今拙者がこの所へ。
繼橋　ナニ香合の盜賊を。
ト思ひ入れ。左近も思ひ入れ。
左近　ムウ、後室樣には殿の御病氣、それゆゑ印延引とあ
るに引かへ、胡蝶の香合紛失なりと、我を立て、その盜
賊をアノこれへ。
有右　引摺り出すが何より潔白。
ト立ち上がる。
足輕中、盜賊めをこれへ。
ト向うにて
足輕　ハア、。
ト時の太鼓になり、向うよりおくめ、田舍女の拵らへ
にて繩をかゝり、足輕兩人繩を取りて出で來り、直ぐ
に舞臺へ來て
下に居らう。
ト　おくめを引据ゑる。繼橋御前見て
繼橋　アノ、この女が
皆々　寶の盜賊。
左近　金銀衣類に事かはり、重器の香合。よもや女が。
有右　イヤ、現在女が盜みしと、自身の口から訴人の白
狀。
繼橋　すりや胡蝶の香合を
左近　盜み取りしと我れと我が。
有右　如何にも左樣……サア、女め、重器の香合盜み取り、
いづれへやつた、それを吐かせ。
くめ　サア、その大事の香合とやら、盜む事は盜みました
が、天道樣の憎しみにや、直ぐに何所へか取失ひ、この
身に能はぬ寶の行くへ、露聊かも存じませぬ。承れば
その香合、お預かりの十次兵衞さまとやら、お咎めゆゑ
御閉門と、ほのかに聞いて、この身ゆゑ、人に難儀をか
ける事、空恐ろしく覺悟の繩目。その代りに、お咎めの
十次兵衞さまの御閉門、お赦し下さるやう、モシ、お願
ひでござりまする。

ト思ひ入れ。

左近　すりや女、なんと申す。寶の香合盗みしかど、直ぐにその場で取落し、行くへは知らぬと申すのか。

繼橋　それゆゑ其方が科を訴へ、命を捨てゝ十次兵衛が、閉門赦免を願ふのぢやな。

くめ　どうぞお慈悲を持ちまして。

ト繼橋御前、左近思ひ入れ。

繼橋　ハテナア。

有右　ヤア、まじ／＼とした僞はり事、水喰はせて拷問いたさう。

郡八　ソレ、責め道具の用意おしやれ。

ト向うにて

中間　ハア、。

トまた時の太鼓になり、中間二人、水手桶、階子を持ち、後より丹平、足輕の形、割竹を持ち出で來り

ハツ、責め道具持參いたしてござりまする。

丹平　お責めなさるゝ科人は、何者でござりまする。

郡八　外でもない、胡蝶の香合、盗み取りし科人めを。

丹平　ア、イヤ、その香合の盗人は。

有右　ア、これサ、彼の香合の盗賊と、自分に名乘つて出た女、寶の行くへ責め詮なみ、もしくたばつたら香合の詮議はそれからそれまでとナ……致さにやならぬ重器ゆゑ。

ト呑み込ます。丹平思ひ入れ。

丹平　成る程／＼……して、お家の寶を盗みし盗賊、只の奴ぢやアござりますまい、定めし一癖

郡八　イヤ、卽ちこの女が盗賊。

ト丹平、おくめを見て

丹平　ヤア、わりやアおらが在所の。

くめ　ほんにこなたは。

ト思ひ入れ。

繼橋　コリヤ／＼下部、そちや、その女、存じて居るか。

丹平　存じた段ぢやござりませぬ。こりや十次兵衛さまをお育て申した乳母の娘、和泉新田のおくめと申しまして

くめ　ア、コレ、わたしやそんな者では。

丹平　ハテ、隱す事はない。どういふ事でお主やアマア。これにはなんぞ。

有右　仔細は知れた。こりやアてつきり十次兵衛が、預かりの香合は質入れ、せう事なしに女を騙し、盗賊にして、その身の罪を。

くめ　なんの左樣な。

有右　云ふた、女め……後室樣へ申し上げまする。御閉門の十次兵衞これへ召寄せ、とくと御詮議。

丹平　其うち女を拷問なし、寶の行くへ申すなら、十次兵衞さまは僞はるとても、遁がれぬ罪科。

縫橋　そんなら絡めの十次兵衞を。

ト思案の思ひ入れ。

郡八　身共が參つて直ぐに同道。

ト立ち上がる。

くめ　イヽヤ、十次兵衞さまには御存じない。科は私し。

有右　さうは云はさぬ彼の同類。

郡八　急ぎ御前へ召連れん。兩人お來やれ。

伴兵　心得た。

ト三人行かうとする。おくめ心意氣。有右衞門、引きつける。バタ〳〵にて三人向うへ入る。

左近　これにて樣子承るに、何か分らぬ香合の在所か但し盜賊に、頼まれての僞はりか。

有右　責める役目はこの丹平。在所に居るうち口說いても、得心しない意趣晴らし、詮議の割り竹・容赦はない。サア、盜んだ寶の行くへを吐かせ。

ト打つ、

くめ　ハテ、今も云ふ通り、盜みし事は盜んでも、落して行くへは知らぬわいの。

有右　そんなら寶の盜賊とは、十次兵衞か。

丹平　噓僞はりと白狀しろ。

トまた打つ。

吐かせ〳〵……吐かさぬか……サア、キリ〳〵と吐かしやアがれ。

トさん〴〵に打ち据ゑる。おくめ苦しき思ひ入れあつて

くめ　イヤ、どのやうな責苦に遭ふとても、頼まれもせぬ、寶も知らぬ。知らぬ〳〵、知らぬわいなう。

有右　ハテ、イケ死太い女めだ。

丹平　水喰はせて泡吹かせう。

ト階子と手桶を出し

覺悟ひろいで、そこへ直れ。

トおくめが襟髮を取つて階子の上へ引倒す。此うち左近始終思ひ入れ。縫橋御前も思ひ入れあつて

縫橋　コリヤ〳〵、待ちや。

丹平　ヘイ。

ト控へる。

繼橋　その盜賊、自らが詮議せう。

有丹　アノ、御前樣が。

繼橋　家の寶といひながら、豐島へ送る大事の香合、盜み取つたるその女子、人手に掛けず自らが、自身に嚴しい拷問せん。女子ども、あの盜賊、これへ引きや。

女三　畏まりました。

ト合ひ方。女形三人、おくめが側へ來り

楓　サア、女子の盜賊どの。

小萩　後室樣が御詮議遊ばす。

綵萩　ちやつとあそこへ

三人　おぢやいなう。

くめ　すりや、いまはしい盜賊を

有右　後室樣が自身の御詮議。

文次　女、御前へ。

三人　早うおぢや。

くめ　ハイ。

トおづ／＼するおくめを、女形三人伴ひ、二重舞臺へ上がる。

楓　仰せに任せその盜賊。

女三　召連れましてござりまする。

繼橋　サア、女子、盜みしとある胡蝶の香合、取落したに相違ないか。但し行くへを知つてなら、この繼橋に有やうに云うて聞かしや。サ、、どうぢや。

くめ　勿體ない、あなた樣に、なんの僞はり申しませう。盜みは致せどその場所で、取落したにさらさら相違は。

繼橋　イヤ、さうではあるまい。盜みもせねば賴まれず、元より知らぬ胡蝶の香合、十次兵衞が難儀と聞き、その身に犯さぬ罪を着て、わざと繩目に遭ふのぢやな。

くめ　イヤ／＼、全く。

ト思ひ入れ。繼橋御前キッとなつて

繼橋　イヤ、知るまいと思ふか、十次兵衞が乳母の娘と、あの足輕が云つたからは、古主の科を身に負うて、難儀を救はん心から、命を捨てに盜賊と、名乘つて來たに違ひはあるまい。

くめ　サア。

繼橋　手飼ひの狆も此やうに、主をば知つて馴れなつみ、尾を振り側へ親しむもの。まして人なら主家來、恩義に命を捨てるは道、健氣な女子……と云ひたいが、館を僞はる不屆き者、この繼橋が手を下ろして。

ト立ち上がり、手づからおくめが縄目を解く。おくめ恟り、皆々思ひ入れ。

くめ　これは。

織橋　今日は八月の半ば、當國八幡の放生會、生けるを放すが所の報恩。

くめ　それでは折角、

女三　でも、後室樣のお心ざし。

織橋　コレ……ではない、今日は國の習ひぢや。

左近　イカサマ、罪の疑はしきは、輕う行ふ後室の、天晴れな御賢察。荒川左近め、甚だ感心。

有右　イヤ、なんぼお使者は感心でも、自身に訴へ出たる女、ろく〳〵事も解らぬうち、お赦し遊ばす後室樣。

織橋　イ、ヤ、此まゝ赦しやるではない。氣儘育ちの藪雀、放して矢ツ張り自らが、側で使ふがこれ糺明。これでは誤まりあるまいがや。

トこれにて有右衞門行詰まる。織橋御前思ひ入れ。

サア、囚人の奉公人。目見得は濟んだ。奥へ一緒に。

くめ　否と云はれぬお慈悲のお捌き。

ト思ひ入れ。

丹平　ハテ、仕合せな女めだ。

左近　して、この印の一軸と、お引替への御返事はな、

織橋　十次兵衞が來るを待ち、いづれお使者は、マアそれまで。

左近　奥にて有無を。

文次　御案内。

女三　後室樣には、先づ奥へ。

有丹　ア、コレ、女め。

左近　後室樣、いづれも後刻。

織橋　休息しや。

ト左近へ思ひ入れ。唄になり、織橋御前付いて、おくめ皆々思ひ入れあつて一緒に入る。左近、一軸の三方を持つて文次付き下座へ入る。足輕中間は下へ入る。

有右　なんの事だ。あの女めを盗賊と責め殺し、彼の香合の詮議の道を絶つてしまへば、丈左衞門どのゝ盗んでござる。寶の事はそれなりと、思ひの外にあの女。

丹平　併し胡蝶の香合は、おらが旦那の倉岡さまが、御所持なされてござらつしやれば、氣遣ひはござりませぬて。

ト唄になり、向うより丈左衞門、麻上下大小にて、草履取り付き、後より淨閑、附け髯、やつし、おしよぼからげ、脚絆三尺帶の形、籐柄の脇差し一本差し、古

き網代の笠を持ち、付いて出で來り、直ぐに舞臺へ來る。

有右　倉岡氏には只今お上がり。ホウ、誰れかと思へば、後のは山崎屋の淨閑。こりや、如何いたして頭の樣子が。

丈左　出仕の道にて出合ひし與次兵衞。三原どのにはまだ彼れが。

有右　野郎頭に還俗した、仔細はさつぱり……如何の譯で。

淨閑　譯と云うたら絲瓜の皮、表を張ると屋敷勤めが隙かきゆゑ、身上は讓られねど、與次兵衞といふ名を悴に讓り頭を剃つて金の事、一三昧と思ひの外、どういふ事にか子の方から、親を勘當しくさつて、いつぞやから家出いたす。弟の與五郎めは、箸にもかゝらぬのらくら者、名前も讓られず、據ろなく淨閑を、また改めて山崎屋與次兵衞、附け鬘ゆゑに面倒と、廻りの髮結ひに百づつ、餘計な損をさせ居りました。

丹平　でもそれは勿怪の幸ひ、以前の白髮が黑かと變り、年の二十も若く見えます。

淨閑　オツと若いと譽められても、一合も買やしませぬぞ朝飯腹で鳥越から、この下總の八幡まで、二八一杯喰はずに來たは、爰で思ひ入れしてやる料簡。なんでなりと三原さま、茶漬食はして下さりませ。

ト懷中より煙管を出し、莨入れを探し、膽を潰し

南無三、十六文で買うた莨入れ、たつた七年持つて落してしまうた。ケチ忌々しい。

ト思ひ入れ。

丹平　成る程、しわい親仁どのだぞ。

丈左　して、與次兵衞には郡八より、書狀を以て申した品を。

淨閑　サヽ、その事でござります。お聞きなされませ。どこの國にマア、コレ〳〵。

ト懷の紙入れより手紙を出し、開いて

大事の事を此やうに……「蠻國麝香の毒藥の一種斑猫の蜘蛛、急ぎ御越し給はりたく候ふ……與次兵衞どのへ、佐倉郡八」……手ぶしに任せて、こんなに書き散らすのみか、名宛もべつたり、急ぎ御越し給はれませうか。滯りの利金をせびりがてら、わざ〳〵持つて來ました。ソレ、見さつしやりませ。

ト手紙を有右衞門の方へ投げてやる。有右衞門取つて見て

有右　成る程、こりや郡八が麁忽。流石は老功、お心付か

れた。イヤナニ丹平、大事の密書、人目にかゝらぬやう火中いたせ。

丹平　畏まりました。

有右　して、お願ひ申した彼の一品、御持參ならば倉岡どのへ。

ト淨閑、懷中より袱紗包みの一角の茶入れを出し

淨閑　蠻國の射岡に用ゆる毒藥の蜘蛛の一種、お受取り下されい。

ト丈左衛門へ渡す。

丈左　すりやアノ、これが斑赤の蜘蛛とな。

淨閑　左樣。

ト此あたりより新三郎、何心なく襖を明け、出ようとして、これを見て窺ふ。

丹平　モシ、旦那、その斑赤とやら、痰咳とやらは、一角のやうな物でござりまするが、それが毒でござりまするか。

淨閑　何を云はつしやる、ありや矢ッ張り一角ぢやわいの。

丹平　ウム、そんなら斑赤といふは、一角の俳名だな。

淨閑　エヽ、馬鹿な事を。斑赤の蜘蛛を懷中してさへ、忽ちその身に當るゆゑ、毒氣をよけるその爲に、有り合せし一角の、茶入れの中へ入れて來たのぢや。

丹平　ハヽア、さうかえ。

ト此うち丈左衛門、茶入れの蓋を取り、中を改め見て

丈左　誠に正物、射岡の毒は黃烏頭、斑赤、この二種は調うたれど、何卒交趾の斑赤の蜘蛛の一種、調へたしと思ふ折から、淨閑が所持と聞いたるゆゑ、先達て申し遣せしところ、郡八の書狀に依つて早速の持參、幸ひ今日こそ當家の吉例、後方後室八幡の神酒、頂戴あれば、その折から。

有右　この神酒丁度この所に。

ト神酒を持つて來る。

コレ、この中へ仕込み、後室さへ毒害すれば、あの江戸屋敷の殿は若年、おッ殺すにどうなりと、こんな時の邪魔になる、あの橋本次部右衛門は、先達てしくじらせ

丹平　跡に一人の氣ぶつさいな、十次兵衛どのは閉門ゆゑ手足も出にやアお旦那の、思し召しには好い折から。

丈左　滸野の家さへ身共が取つたら、與次兵衛、望みは何なりと。

淨閑　サア、その時は約束通り、この下總の山を殘らず。

丈右　そりやモウ何より。

淨閑 有り難い。吹き流されの船頭めが、持つて歸つた交趾の蜘蛛、二百で買つたも擔ぎものと、年久しう悔んで居たが、下總の山殘らずになるといふは、一分で百兩取つたよりも、ちつと割がよからうかえ。

ト手を組んで思ひ入れ。

丹平 そりやこなさん、與次兵衛ぢやアない慾兵衛だ。

ト顏見合せ

淨閑 ハヽヽヽ。

丈左 三原氏、兼ね〲調ふ二種に、この斑赤の蜘蛛を交へ、急いであれなる神酒の中へ。

ト懷中より紙包みを出し、茶入れと一緒に渡す。

有右 呑み込みました。

ト丈左衛門、淨閑、丹平思ひ入れ。

丈左 あたりへ心を。

ト管絃になり、淨閑、丹平、あたりを窺ふ。これにて新三郎、襖を立て切る。有右衛門、紙包みの藥を出し茶入れの蜘蛛と一緒にして、兩方の神酒德利へ仕込み

有右 して、この茶入れや包み紙は、如何いたさう。

丈左 人の目褄にかゝらぬやう、あの飛石の下へ埋めて。

淨閑 あつたら物を、勿體ない。

ト思ひ入れ。此うち有右衛門、つゝ包み紙茶入れを飛石の下に埋める。

丈左 よし〱。神酒頂戴は未の上刻。いつもの如く後室が、一口咽喉を通すのが、我れ〱が開運時。

有右 倉岡どのは當家の殿、我れ〱が知行は十倍。

丹平 この丹平も足輕から、一足飛びに千石取り。

淨閑 わしは國中山々の、諸木を伐つて黃金の山。

ト三人思ひ入れあつて

三人 ても日の長い事ではあるぞ。

丈左 ハテ、忙しない。たつた一時待ちさへすれば。

ト此うち新三郎、後へ來り、この時

新三 竹鋸の罪科は遁がれぬ。

トずつと前へ出る。皆々驚ろき

三人 ヤア、。

ト丈左衛門、新三郎を見て

丈左 そちや弟新三郎、最前よりの樣子殘らず

新三 承つた。兄者人……エヽ、こなたはなア。

ト思ひ入れ。合ひ方。

君、君たらずとも臣、臣たり、例へ非道な主君でも、忠義を盡すは家來の役。それになんぞや勿體ない、後室樣

を毒害なし、殿をも失ひ、此お家を横領せんと、恐ろしい惡事の段々。血を分けた弟が、聞いて嬉しからうか。兄のこなたへ御意見も憚りながら、倉岡の苗字を無事に立てたさと、淺ましい死を見るが悲しさ。コレ、どうぞ聞き分け、さつぱりと、思ひ止まり下されい。

ト いろ／＼思ひ入れ。

丈左　ヤア、聞きたくもないその意見、先へ產まれた兄の事、知つて居る事長々と、口費やしな、止めにしろ。

新三　イヽヤ申さにや相成らぬ。これまで主の家國に、心をかけて一人も、榮えた例しはござらぬわいの。

丈左　例しがあらうが、あるまいが、望みをかけた鴻野の家、治めて見せう。

有右　野暮を云はずと新三どの、兄御の船へとも／＼乘り榮耀をするがこれ當世。

丹平　時代違ひの御意見は、さらりと柳にやらしやんせ、柳々にやりぱなし、お日和次第と待つてござれサ。

淨閑　それ／＼、まだお若いゆゑ慾がない。年寄りのわしが、惡い事は云ひませぬ。主であらうが、親であらうが突き轉ばしても身を立てるが、ハテ、めん／＼の德といふもの。

新三　ヤア、おてまへ方の心に比べ、某までも惡事の道へ誘引せんとはそりや何事。餘人は兎もあれ兄者人、是非とも心を改めて。

丈左　まだ／＼吐かすか。慮外な奴。キリ／＼そこを立つてうせい。

新三　イヤ、聞き屆けないうちは、新三郎は立ちませぬ。

丈左　おのれが立たずば、身共が立つ。三人ともに、奥へ一緒に。

ト 奥へ行かうとするを、新三郎引留めて

新三　さう仰しやれば毒の次第を、後室樣へ。

ト 立ち上がる。三人思ひ入れ。

丈左　現在兄が惡事を告げ

有右　主殺しにさつしやるか。

ト 新三郎思ひ入れ。

新三　すりや、云へば現在兄の身の上、云はねばお主のお身の上……ムウ。

ト 新三郎ヂツとなる。

丈左　彼れめに構はず、有右どの。與次兵衛には直さま歸宅。江戸にて吉左右。

淨閑　畏まりました。左樣なれば私しは、好い夢でも見て

待つて居ります。
ト新三郎思ひ入れ。丈左衞門見て
丈左　うつけ者めが。
ト唄になり、丈左衞門先に、有右衞門、神酒を持ち、丹平付いて奥へ入る。淨閑は向うへ入る。新三郎この時立ち上がり、後見送り
新三　ホイ。
ト撲と下に居て思案の思ひ入れ。
十次　尾籠な各々、なんと召さるゝ。
ト早舞になり、向うより十次兵衞、五十日かづら、上下大小にて、伴藏、兵馬が腕を取つて、ツカ／＼と出で來る。後より郡八、引添うて出で來る。伴藏兵馬、振りほどいて十次兵衞が大小へかゝる。十次兵衞、これを手早く左右へ突き退けて思ひ入れ。
郡八　ヤア、お咎めの身を以て、帶劍叶はぬ南方氏。
伴兵　その大小を渡し召されい。
十次　イヤ、相成らぬ。お咎めは蒙むれど、罪極まらぬ其うちは、鴻野の家來十次兵衞、無刀は却つて失禮至極。
ト立廻り。
矢張り此まゝ同伴召されい。

ト袴の塵を拂つて思ひ入れ。靜かな舞になる。三人これに氣を呑まれ、後へ下がる。十次兵衞見向きもやらず、しづ／＼と舞臺へ來る。三人も舞臺へ來る。
郡八　イヤ、待たれい南方氏、御前へ披露のその間。
十次　サヽ、拙者は扣へ罷りある。
ト眞中に住ふ。此うち新三郎、思案の思ひ入れあつて
新三　こりや南方十次兵衞どの。
十次　新三郎どの。
新三　先づはその後は。して今日御出仕なされしは。
郡八　豐島の使者へ相渡す、結納代りのお家の重器。
新三　すりや紛失の。
郡八　胡蝶の香合、有無の返答、しかと其許召さるぢやまで。
十次　御念に及ばぬ。十次兵衞申し開きは……これにござる。
ト扇子にて胸を叩く。
伴藏　そんなら御前へ
兵馬　右の樣子を
郡八　申し上げよう。南方氏、腹をさすつて待つてお居やれ。

ト唄になり、彌八先に伴藏、兵馬奧へ入る。この唄のうち、向うより市介、年輩なる中間の形にて、手紙を持ち出で來り、直ぐに舞臺へ來り、十次兵衞を見て

市介　お旦那、これにお出でなされますか。ヤレ〳〵、もう御前へかと存じまして。

十次　そりやなんぞ用事あつて。

市介　イエ、外でもござりませぬ。御閉門のうち外へは出られず、只今御門の明いたを幸ひ、一杯たべに御城下へ出ましたところ、思ひも寄らぬアノ弟御の與兵衞さま。

十次　コリヤ〳〵市介、これに新三郎どのも御出であるに陪臣のツカ〳〵と、控へて居れ。

市介　ヘイ〳〵。

ト下の方に控へる。

新三　イヤ〳〵、苦しうござらぬ。さぞかしこの程は、何かと御心痛、ちよつとお見舞ひとは存ずれど、御閉門ゆゑそれなりに。して、少しなりとも香合の、お心當りはござらぬかな。

ト此うち十次兵衞、向うを見て、いろ〳〵思案の思ひ入れあつて、新三郎がせりふに心付き

十次　ハ、、、、左樣にござる。御大切なるお家の重器、日夜油斷は仕らねど、人に不時の禍ひありと、その夜は雨の庚申待、酒も長じて夜半まで、お出での其中に、貴殿の御舍兄丈左衞門どのを始めとして、皆同家中の方々ばかり、外より來りし者もなきに、夜明けて見れば預りの、胡蝶の香合紛失ゆゑ、南無三ぼうと、隅々くまぐま探せど、さしてこれぞといふ證據もござらぬ身の災難……心中お察し下されい。

新三　爾餘の品とは事違り、お家の重器へ心をかけしは、貴殿へ仇ある者の仕業か。但し濱野の家內を……奧には使者の入來といひ

十次　今日に迫りし寶の返答。

新三　斯樣な折に、先達てお暇出でし、橋本次部右衞門どの勤め居らば、また外によき料簡もござらうもの。後には誰れかと差當る、我が兄ながら丈左衞門、心よからぬのみならず、慾に上なき最前の。

十次　ヤ。

新三　云ふに云はれぬ血筋の兄弟、主と兄とへ……十次兵衞どの、早う仰せ聞かれませい。

ト唄になり、新三郎ツイと下座へ入る。ト十次兵衞、合點ゆかぬ思ひ入れあつて

十次　新三郎が今の素振り、何とも合點が。

市介　左樣でござりまする。腹でもお立てなされたか、ツイと奥へでござりまするな。

十次　して、市介、與兵衞とは。

市介　ヘイ、御城下で與兵衞さまにお目にかゝると、此お手紙を、あなたへお上げ申してくれと。

ト手紙を出す。

十次　ナニ手紙。

ト取つて開き讀む。

市介　途中で一杯樂しまうと、伊勢屋へ參る後の方で、見れば與兵衞さま、お屋敷へ行きたいが、聞けば兄貴は閉門とやら、それゆゑこれをとそのお手紙。成る程また御兄弟とて、あのやうにも似るものか。殊に成田へ願ほどきと、御病後の長髮ゆゑ、どう見ましてもあなた樣。

ト此うち十次兵衞、手紙を讀み、思ひ入れあつて

十次　コリヤ〳〵、さうして與兵衞は城下に居るか。

市介　左樣でござりまする。銚子屋と申す旅籠屋に。

十次　ムウ。

ト懷中硯を出し、鼻紙へ何やら書く。

市介　イエサ、餘程の大病さうにござりましたが、隔つた所と申すものは。

ト此うち十次兵衞思ひ入れあり、書きかけて引破り

十次　コリヤ〳〵市介。

市介　ヘイ〳〵。

ト十次兵衞これへといふ思ひ入れ。市介呑み込み、側へ來る。十次兵衞市介に囁く。市介は「ヘイヘイ」と呑み込み、驚ろく思ひ入れ。

アノ與兵衞

十次　コレ……心得たか。

市介　畏まりました。

十次　ドレ、身共はお次まで。

ト立ち上がる。

市介　左樣なら旦那樣。

ト下座にて物音する。

十次　口外いたすな。

ト思ひ入れ、唄になり、十次兵衞奥へ入る。市介殘る、下座よりおくめ出で來て、市介は行かうとする。

くめ　モシ〳〵、こなさん、いま爰へ後室樣の狆が來はせなんだかえ。

市介　イヽエ、御門に地犬が……ヤ、こなさんは和泉新田

の婆アどのゝ娘。

くめ　ほんに、お前は市介どのぢやないかえ。

市介　おくめどのかえ。ヤレ〳〵。さうして、いつお屋敷へ。

くめ　サア、わたしが來たのは十次兵衞さま、香合ゆゑに御閉門、殊に依つたら何とやらと、悲しい噂を聞くと其まゝ、死なしやんした母さんが、お育て申した旦那の御難儀。どうぞお救ひ申さうと、泣き手のない身を幸ひに盜賊となり、命を捨てに來ましたところが、お館の後室樣のお情で、直ぐに今日からお屋敷勤め。斯うして居ても旦那の事、お案じ申して居るわいな。

市介　ハテサテ、そりや機轉な事。わしも朝晩旦那の事が氣になつて〳〵、聞いて下さい、一昨日もあんまり旦那の事ばかり思つて、草鞋を作つたら、草鞋の長さが三尺六寸。

くめ　さうして、旦那を御殿へ呼び寄せ、どうなさるゝ事であらうぞいの。

市介　サア、そこはどう行くものであらうか、さつぱりわしには……これはしたり、急な御用があつたつけ。

ト思ひ出して向うへ駈けて入る。おくめ後を見て

くめ　ほんに、あの人とした事が、何事ぢや知らん。

ト思ひ入れ、合ひ方になる。下座より以前の狆、聞きし手紙を咬へ走り出る。おくめ、これを見て

オヽ、慥かこの狆であつた……何やら啣へて來たわいの……來い〳〵〳〵。

ト狆、側へ來る。

よう來たな〳〵。

ト狆を捕へ、何心なくこの手紙を見て

「右の毒にて後室始め千島正どのを首尾よく失ひ候ふに於ては」……ヤア〳〵、こりや大膽な手紙の文言、誰が名宛やら。

ト上書の所を見て

佐倉郡八……コレ、先の宛名を咬へて居るゆゑ、知れぬわいの。わしにくりや。放せやい。

ト狆をとらへ、いろ〳〵する。狆啣へ引ッ張る。

コレ、それでは破れるわいの。大事の手紙、放さぬか放さぬか。

ト手紙を捕へ、いろ〳〵引ッ張るうち、先の所引裂け、手紙はおくめが手に殘る。

エヽ、コレ、上の一字が破れたゆゑ、誰れやら知られど、

下の名に佐倉郡八とあるこの手紙、十次兵衛さまの科を償ふには、こりや好いものが手に入つたわいの。

ト思ひ入れ。この時下座にて物音、これにておくめ、ちやつと手紙を懐へ入れる。狆は此うち下へ入る。下座より丹平、ウロ〳〵と何やら尋ねて出て來る。

丹平　どこへ持つてうせたか知らん。

トおくめを見て

オヽ、誰れかと思やアおくめぼう。いま爰へ狆が、なんぞ啣へては來なんだか。

くめ　アイ……イヽエ。

丹平　イヽエだ……帶を締める間、下へ置いたうちださうだが、畜生といふものは

ト此うちおくめ思ひ入れあつて奥へ行かうとする。丹平見付け

ア、コレ〳〵、おくめぼう〳〵。

ト捕へる。

さりとはお主は仕合せ者、殺される命を助かり、後室様のお側勤め、その仕合せにあやかるやうに。

ト抱きつくを突のけ

くめ　エヽ、嫌らしい丹平どの、在所に居るうちも付けつ廻しつ。こなさんのやうな意地悪に。

丹平　オヽ、こりやア尤も。併し先刻酷くしたのは、奉公振りと料簡してコレ、畜類め、どうだ〳〵。

ト手を持つて思ひ入れ。

くめ　エヽ、コレ、放して下さんせ。そんなどころぢやないわいな。

丹平　そんなどころでないならば、こんな所を。

ト懐へ手を入れる。おくめうろさがり、手をもぎ放す。丹平、今の手紙を掴み出し、ちよつと見て

コレ、この手紙が今尋ねる

くめ　そんならこれを知つてかえ。

丹平　ヤ。

ト思ひ入れ。

くめ　讀むさへ怖い中の文言。

丹平　それ見られちやア。

くめ　ドレマア早う。

丹平　此方へくれろ。

くめ　イヤ、ならぬ。

トこれより三味線入りの鳴り物になり、おくめ丹平、世話のタテ、手紙を爭ひ、トヾ兩人、二重舞臺へ上が

り、よろしく見得。序の舞に變り、この道具ぶん廻す。

本舞臺三間の間、高足の御殿、一面の金襖、爰に繼橋御前、褥に座し、下の方に左近、舞臺眞中に十次兵衛、上手丈左衛門、下の方有右衛門、刀を持つて立ちかゝり、これを十次兵衛よろしく支へ居る。道具とまると、下座より郡八先に、伴藏兵馬文次出で來る。

十次　こりや倉岡氏、十次兵衛が紛失させし香合を、拷問なして行くへとは。

丈左　イヤ、盜まれしとはそりや僞はり、まこと實は人手へ渡し

有右　金子に替へたで

伴兵　ござらうがな。

十次　ハテ、いづれもには異なお詞。元より寶は拙者が預かり、人手へ渡しその罪の、來るを知りつゝ左樣な事を。

丈左　全くせぬとも云はれまい。いつぞや鹿島詣での折、潮來の遊里に全盛盡し、それのみならず日頃の奢り、榮耀の金子に香合は、質入れしたであらうがな。

十次　イヤ、その噂はみな虛說。この身に取つて聊かも

有右　覺えの有無しお使者の面前、後室樣の御前に於て、

郡八　いま我れ〳〵が拷問して。

ト　みな〳〵立ちかゝる。

繼橋　皆扣や、

皆々　おやと申して。

繼橋　ハテ、扣へいと云はゞ扣へぬか。

ト押へる。皆々これにて靜まる。

左近　フム、他家の拙者が見聞いたすに、いづれといふうちに、詞を以て鏡とやら。

繼橋　誠はそれと……知れねども、日頃を見るに十次兵衛、よもや主家の大事の寶、人手へ預け、身の榮耀極める者でも……守り手の隙を窺ひ、盜賊の業に違ひない。

丈左　然らば紛失なしたる香合、在所は知れしか。この行くへは。

十次　相知れませぬ。

皆々　なんと。

文次　アモシ、左樣に仰せござりましては

有右　ハテ、文次どの、默り召されい。申さば香合紛失より、今日まで日數立つうちに

郡八　これぞと云ふべき事もなく、ましてや行くへも夢さ

んぼう
伴藏　それでは婚姻猶々延引。
兵馬　結納代りの胡蝶の香合、相知れませぬで
皆々　濟みますかな。
十次　そも紛失の砌りより、倉岡どのゝ執成しにて、直ちに閉門仰せつけられ、守り嚴しき門戸の內、禁足いたした十次兵衞、鼠が申してくれうは格別、香合はどこそこにと、云うて聞かする者がござらぬ。
左近　ムウ、ナニサマこれは尤も至極。閉門いたせし身の上では、尋ね詮議もならぬも尤も。
丈左　さうしてお使者、後室樣へ、南方氏の申し譯は。
十次　サ、その云ひ譯は……斯樣いたして。
ト腹切らうとする。皆々思ひ入れ。
繼橋　それ留めい。
文次　ハッ……御意でござるぞ〳〵。
ト抱きとめる。
繼橋　自らがまだ云ひ付けもせぬうちに、氣儘に切腹とは女子の主と侮つて、さしつけ業な十次兵衞、アノ茲な不屆き者めが。
トきつと思ひ入れ。
十次　ハッ。
ト平伏する。
繼橋　切腹はならぬ程に、必らず……イヤサ、叶はぬ事ぢや。扣へて居い。
ト思ひ入れにて云ふ。敵役皆々思ひ入れ。
丈左　アイヤ、後室樣、寶の香合云ひ譯に、切腹いたす十次兵衞、お止めあつて豐島のお使者へ
皆々　御返答は如何遊ばす。
繼橋　サ、それはの。
ト當惑の體。左近此うち思ひ入れあつて
左近　その返答承つた。
丈左　とは又どうして。
左近　ハテ、千島正さまは未だ御病氣。
繼橋　ヤ。
左近　御病氣なれば、詮方なう、御全快までいつまでも、お取交しの印は延引。
有右　それも、香合紛失ゆゑ。
左近　サア、紛失せうが、ござらうが、他家の身共は存ぜぬ事。一旦殿には御病氣と、後室樣のお詞が、卽ち使者への御返答。それとも主人の後室樣、僞はり者と流布召

さるか。

有右　サ、そりやア。

左近　結んだ御縁はどこまでも、ほどけぬやうに一軸は、後室樣へお預け申す。御全快さへ遊はさば、その節お家の香合受取り、直ぐにめでたく。

ト掛け物の三方を出す。

繼橋　それで互ひに武士の、詞も立つて何程か、

十次　我が誤まりの香合を、それと云はずに御病氣と、後室樣の憐愍ある、お詞といひ荒川どの、禮は何とも。

左近　これはしたり、禮を受くべき覺えはござらぬ。

丈左　ハヽヽヽ。いつ出やうやら知れぬ香合、それまで婚禮延引とは、ても氣の長い使者のお捌き。

左近　それゆゑ短かうこの席を、使者はお暇……後室樣。

繼橋　そんならよきに。

左近　萬事拙者が……いづれも方。

皆々　お役目御苦勞。

左近　お別れ申す。

ト唄になり、左近、十次兵衞へ思ひ入れあつて、向うへ入る。

丈左　後室樣、使者はあれでも濟みも致さう。十次兵衞が身の上は。

繼橋　香合詮議申しつくる。

十次　すりや拙者めに御詮議を。

繼橋　紛失させた科により、暇をくれた十次兵衞、早う首を手に入れて、首尾よう……婚姻調ふやう。

十次　そりやモウ、粉骨碎身いたし、日ならず求め立歸り、その時お禮を、後室樣。

丈左　それが肝腎、せめての事、命がはりに駈けめぐり

有右　早う尋ねて御婚禮。

郡八　遲いと不忠を重ねる道理。

伴藏　神佛でもせつちやうして

兵馬　素手でおめ〳〵歸らぬやう

文次　十次兵衞どの、御歸國を、必らずともに相待ちまする。

十次　その儀は氣遣ひおしやるな。日本の内にさへあらば早速身共が尋ね出し、いづれも方へもその節面談。先づ差當る江戸表、これより直ぐに……後室樣。

繼橋　早う出立。

ト立ち上がる。

丈左　へヽヽヽ。口では立派にお云やれど、何を當途に

香合詮議、日數の立つに随つて、尾羽打枯らす浪人者、
破れ編笠古扇で、合力受けぬ手段をしやれ。

十次　へ、、、、イヤモ、倉岡氏の御深切、失念いたさず不日に香合……いづれも、其うち。

ト唄になり、十次兵衛花道へかゝり、向うを見て、思ひ入れあつてツイと入る。丈左衛門思ひ入れ。八ツの時計鳴る。

織橋　あの時計は

皆々　未の上刻。

丈左　お家の舊例八幡の神酒、急ぎ頂戴遊ばされませう。

織橋　腰元ども、その神酒土器持參しや。

楓　畏まりました。

ト合ひ方になり、奥より楓、以前の神酒、小萩三方へ土器、絲萩、三方を持ち出で來る。

仰せに任せ八幡の神酒

女三　持參いたしてござります。

織橋　武運を祈る八幡の神酒、時刻違へず頂戴せん。

ト土器を取上げる。楓、小萩、兩方よりつぐ。敵役皆皆、丈左衛門と顔見合せ思ひ入れ。丈左衛門ニツタリと笑を含む。織橋御前、土器を取上げる。この時揚げ幕にて、新三郎

新三　暫らく／＼。

ト云ひ／＼出で來り、花道にて

アイヤ後室樣、その神酒暫らく。

ト織橋御前、土器を下に置き、合點のゆかぬ思ひ入れ。敵役皆々思ひ入れ。新三郎、舞臺へ來る。

丈左　ヤイ／＼、弟め、當家の吉例八幡の神酒、頂戴遊ばす土器を

有右　止め召さるは

皆々　慮外でござらう。

新三　イヽヤ、慮外ではござらぬ。すべて貴人へ奉る膳部は元より、神酒にも致せ、鬼役なうては叶はぬもの。それゆゑ暫しとお止め申した。

丈左　默り居らう。それ式の事辨まへぬ、丈左衛門ではなけれども、八幡の神酒は八幡より直ぐに主人が頂戴の、心を以て鬼役用ひず、きこし召すのがこれ舊例。譜代の家來でありながら、それをも知らぬ愚鈍な弟、御前に叶はぬ、下がり居らう……イザ／＼頂戴。

ト織橋御前これにて又、土器を取上げる。

新三　ヤレ後室樣、その古例はさる事ながら、いつは兎も

あれ今日の代參、勤めし倉岡新三郎、異變もござらば拙者が誤まり、是非ともその神酒鬼役を。

有右　これサ〱、新三郎どの、今日代參は貴殿と郡八、その相役が押へて居るに

郡八　其許ばかりが支へ召さるは、近頃身共を押付け業。

新三　ウム、お云やらばこの神酒を、貴殿もとも〱鬼役召されい。

郡八　ヤ。

トぎよつと思ひ入れ。繼橋御前、合點のゆかぬ思ひ入れ。

新三　飲まれぬ神酒の入譯も……割つて云はれぬ、瓶子の中は。

ト丈左衛門へ思ひ入れ。

丈左　古例の時刻を遲滯さす無禮な弟、遠ざけ召されい。

件藏　心得ました。

ト件藏兵馬、新三郎を引立てようとする。文次これを支へる。有右衛門引きつけて居る。新三郎兩人を左右へ投げのけ

新三　先づあの神酒を。

ト二重舞臺へ駈け上がり、瓶子を取る。

郡八　イヽヤ、その神酒。

ト續いて上るを新三郎、手早く取つて押伏せ、土器へ神酒をグツと飲み

新三　お身も相役、相伴いたせ。

ト瓶子の口より郡八が口へつぎこみ突き放す。皆々「ヤアヽ」と思ひ入れ。

郡八　こりや身共にまで無理やりに、キア……アヽヽヽ

ト血を吐き、苦しみ倒れて死ぬ。繼橋御前、楓、小萩、絲萩、文次、吻りして

これは。

ト此うち新三郎苦しき思ひ入れあつて

新三　忠義と恩に毒酒の鬼役、死ぬる弟が心を察し、不便と思うて兄者人。

ト刀を杖に立ち上がり、丈左衛門が側へ寄らうとする、丈左衛門、刀の鐺にて新三郎が胸を突く。新三郎これにてタヂ〱となり、アツと血を吐き、其まゝ死ぬ。皆々思ひ入れ。

繼橋　ヤヽ、郡八といひ新三郎、ても恐ろしい非業の死は。

文次　こりや何者の業ならん。

丈左　ソレ、腰元に繩かけ召されい。

伴兵　ハツ。
　ト立ち上がる。
女三　ア、モシ、何ゆゑ。
丈左　吐かすまい。代參勤めし二人の外、神酒へ手ぶしをかけたは其方達。サア、何者に賴まれて、瓶子へ毒は入れ置いた。
楓　イエ〱、私しどもはお床の間より、これまで持參いたしたばかり。
小萩　どうしてそんな勿體ない。元より誰れにも賴まれた
絲萩　覺えはサラ〱ございませぬ。お免しなされて
三人　下さりませ。
有右　イヤ、免されぬ、野太い女め。
伴兵　繩かゝれ。
　ト此うち下座にて
くめ　イヤ、その毒の證據は爰に。
　トばた〱になり、おくめ、以前の手紙を持ち、丹平と爭ひながら出で來る。
皆々　ヤア、わりやア先刻の。
くめ　後室樣、これ御覽遊ばしませい。
　ト手紙を繼橋御前へ渡さうとする。丹平やるまいと立廻り。上より繼橋御前これを引取る。丹平思ひ入れ。
繼橋　慮外な下部、下からぬか。
丹平　ヘイ。
　ト扣へる。繼橋御前、手紙を讀み
繼橋　その下部に繩をかけや。
文次　ハツ。動くな。
　ト立ちかゝる。丹平思ひ入れ。
丹平　マア〱お待ち下さりませ。こりや私しには何の科でな。
繼橋　惡事の一々毒藥を、諜し合する手紙の文體、名宛は佐倉郡八より、上の宛名は切れ、次兵衞と殘りし一字の詮議。
有右　ヤ、そりやア最前與次兵衞が。
　ト云はうとするを、丈左衞門、顏で抑へる。
丹平　ア、モシ、モシ、後室樣、一字知れない御詮議に、私しが縛られても、どうしてそれを
繼橋　知らぬ者ならなぜに又、この手紙を爭うたぞ。
丹平　サア、それはな。
　ト行詰まる。
くめ　モシ、よう存じて居られます筈、アノ、その手紙を。

繼橋　ハテ、もうよい。例へ知らぬと云ふとても、嚴しく責めてその宛名。

丹平　エヽ

ト思ひ入れ。此うち丈左衛門思ひ入れあつて

丈左　イヤ後室樣、彼れめを吟味に及びませぬ。そりや知れて居ります。

繼橋　ムウ、知れぬ一字のその名宛が。

丈左　憚りながらその一札。

ト受取り見て

コレ、上の一字は切れ散つて、次兵衛と殘るは、出立いたした十次兵衛めでござりまする。

くめ　エヽ……そりや又なんで。

丈左　丈左衛門が思ふには、胡蝶の香合紛失させ、閉門なしたをおのれが罪と、その身は悔まずお上を恨み、あの郡八と云ひ合せ、毒酒を以て後室樣、殿をも失ふ所存と見えた。いづれも、さうではないか。

有右　如何にも貴殿の仰せの通り。さすれば香合紛失も

伴藏　最前これにて申せし如く

兵馬　日頃ほたへの鐺が詰まり

丹平　榮耀遣ひに質物と、やらしつたのに極まつた。

繼橋　そんなら手紙は十次兵衛とな。

ト思ひ入れ。

有右　なんぼ御贔屓強からうが、大罪犯した十次兵衛、これなりには相成りますまい。

繼橋　分明ならぬ手紙の宛名、何は兎もあれ出立した、十次兵衛を、一先づ屋敷へ。

くめ　アノ、お後を追ひ駈けて。

丈左　早速召連れ立歸らん。

くめ　すりや、香合紛失の、科を償ふ端にもと、思うた手紙が、却つてあなたの

丹平　科は遁がれぬ悪事の密書。

くめ　エ、情ない、引破つて。

ト丈左衛門が持つたる手紙を引取る。丈左衛門、直さまおくめを引廻してポンと切る。落ち散る手紙に有右衛門取る。

女文　これは。

丈左　主の悪事を訴人も同然。

繼橋　それゆゑ女を

丈左　不忠の成敗。

ト刀を納める。

綴錦　とは云へどうやら。

ト丹平へ思ひ入れ。

丈左　最早程經し

トつか〳〵と下の方へ行く。

皆々　十次兵衞。

ト丈左衞門向うを見て

丈左　いづれも用意。

皆々　ハツ。

ト立ち上がる、綴錦御前「コレ」と思ひ入れ。丈左衞門、股立を取り、キツとなる。カケりにて、よろしく　ひやうし幕

ト幕の内、禪のツトメにてつなぎ、引返す。

本舞臺、三間の間、松並木、少し上へ寄せて地藏堂のやうなる道具、兩扉格子、これに大小を書きし繪馬澤山に懸けならべ、前に線香立て、樒の花など立てあり、日覆より松の吊り枝、下の方葭簀圍ひ出茶屋。茶屋男、茶道具を片付け居る。すべて下總の國侍ひ塚の飾りつけ、テンツヽにて幕明く。

ト下座と向うより百姓町人の仕出し出で來り、捨ぜりふにて双方へ別れ入る。

茶屋　もう追ツつけ入相であらう。ドレ、一荷、内へ運んで來ようか。

ト行列三重になり、茶屋男、素麪櫃の内へ茶釜手桶などを載せ、これを一荷にて下座へ擔ぎ入ると、向うより、旅乘り物一挺、陸尺二人、若黨二人、兩掛け挾み箱、草履取り、いづれも旅形にて出で來り、直ぐに舞臺へ來る。此うち花道より市介、以前の形にて草鞋を持ち、大汗になり出で來り

市介　オヽ、イ〳〵、お駕籠を暫らく〳〵。

若黨　市介どのか〳〵。

市介　オヽ、サ、旦那にちよつと〳〵。

ト息の切れし思ひ入れ。乘り物の内にて

十次　ナニ市介。

ト乘り物の戸を明け

けたゝましい。何事ぢや。

市介　イエ、何事か存じませぬが、御出立のその跡を、取片づけて居りますうち、お屋敷は大騷動、毒とやら茶粥とやらで、新三郎さま郡八さまは、その座でお死になされましたを、十次兵衞が業だとあつて、あなたを後から

追手の衆が、大勢見えまするを申す事ゆゑ、葛籠を半分片付けて、宙を走つて參りました。マア、早くお隱れなされませい／＼。

ト思ひ入れ。皆々思ひ入れ。

十次　すりや市介、たんと申す。毒藥にて兩人が、即死なせしを我が業と、これへ追手の參るとな。

市介　左樣でござります／＼。

十次　ムウ、こりや全く某を、失はんとする佞人どもの企み事と思はるゝ。此まゝにして立退かば、いよ／＼我れに決定せん。急ぎ屋敷へ乘り物返せ。

皆々　イヤ、左樣ではござりませうが。

十次　ハテ、其方達が存せぬ事。

ト刀を取つて

市介、この刀は親重代、死後の證は弟與兵衞に。

市介　すりや、お屋敷へお歸りあつて。

十次　コリヤ。最前申した香合の、詮議を與兵衞へとつくりと、

皆々　それでは。

十次　ハテ、乘り物を返せと申すに。

ト內より戶をさす。

皆々　ハア、

市介　こりやどうしたらよからう知らん。

皆々　どうと云つても、旦那の仰せ。

市介　屋敷へお歸りなされたら、これ／＼のお心か。

ト腹を切る思ひ入れ

皆々　ひよんな事になりました。

ト乘り物の內にて、ばた／＼。

市介　ハツ……もう事がない、いづれも屋敷へ、

ト又た行列三重になり、皆々駕籠を舁き上げると、向う、バタ／＼にて南與兵衞、矢張り五十日かつら、一本差しにて出て來り、乘り物を見やり、市介を見て

與兵　そちや市介、乘り物返して、こりやどこへ。

市介　お旦那の御意にお屋敷へ。

與兵　イ、ヤ、そりや惡い。先づ／＼下に。

ト乘り物を下へ据ゑさせる。乘り物の內より戶を明けようとするを、與兵衞ちやつと押へて

ア、モシ、戶を明けまい兄者人。城下で只今承れば

ト駕籠の內にて物云ふ心。

すりや市介に委細お聞きなされ、それゆゑ屋敷へ……イヤ、そりや惡い。側へ事を明るうせんと、只今屋敷へ、お

歸りあるとも、佞人どもがどのやうな……斯う云ふうちにも心遣ひ。マア〳〵、あれなる葭簀の内へ、早う〳〵。

ト駕籠の戸を押へ、無理やりに乗り物に附き添ふ。時の鐘、日ぐらしの聲にて、皆々と一緒に與兵衛、葭簀の内へ入る。また在郷唄になり、向うより仕出しの百姓、旅人、下座と揚げ幕より出で來る。これと一緒に茶屋男も出で來り

百姓　せなア、どこへ行くえ。

同　行徳の町まで行て來るわえ。

旅人　なんと鎌がへまで、暮れぬうち行かれませうか。

百姓　もう、七ツが疾に過ぎましたから、どうしても暮れませうて。

茶屋　お前、鹿島へ御參詣かな。

旅人　イエ、佐原の方まで行きますのサ。

百姓　あそこまでござるなら、次手に參詣なされませ。

旅人　わたしどもは成田の歸りでござりまするが、御利生はあると見えました。いつでも籠りがござりますて。

百姓　利生といへば、この侍ひ塚が、近年は流行りますてな。

旅人　ヘイ、そんならこれが侍ひ塚かな。

百姓　左やうサ。おんぢい、明日逢ひませう。

茶屋　おれも見世を片付くべい。

皆々　ドレ、わしらも急ぎませう。

ト矢張り在郷唄にて雙方へ別れ入る。茶屋男殘る。葭簀の内より、以前の人數、乗り物を舁き、急ぎ下座へ入る。引つゞいて南與兵衛、野袴、紫縮緬のしごき、大小の形に改め、市介付いて出で來る。

茶屋　こりや、お茶もあがりませいで。

與兵　イヤ〳〵、大きに見世の邪魔を致した。

茶屋　なんのお前。

ト云ひながら葭簀を卷き

ドレ、歸つて夜食にしべいか。

ト葭簀をかたげ、下座へ入る。與兵衛跡見送り

與兵　市介。

市介　與兵衛さま。

與兵　コリヤ……兄弟顔の似たるを幸ひ、十次兵衛どのに成り濟まし、追手の者を欺むきて、事に臨まば身共は切腹。

市介　アノ、十次兵衛さまに成り代つて。

與兵　サア、紛失の香合知るゝまでは、兄者人はこの南與

兵衞……身共は爰で兎も角も、相成るならば、兄の身にマア氣遣ひはないといふもの。

市介 成る程、あなたを追手の者に、いよ〳〵兄御の十次兵衞さまと思はせるには、譜代親仁のこの市介が附き添うて。

與兵 イカサマ。併し與兵衞に附き添ふは。

市介 ハテ、生き延びた命、惜みはちつともござりませぬ。

與兵 出かした市介。

市介 與兵衞さま。

與兵 コリヤ。どこまでも十次兵衞ぢやぞ。

市介 ヘイ。

ト思ひ入れ。禪のツトメになり、向うより伴藏、兵馬、以前の形、肩衣を脱ぎかけ、股立にて走り出で來り、兩人を見て

伴藏 ヤア十次兵衞。

兩人 動き召さるな。

市介 すりやあなた方。

ト思ひ入れ。

與兵 この十次……兵衞に御用あつてか。

伴藏 お上の上意で

兵馬 貴殿の追手。

與兵 とは又なぜ。

伴藏 貴殿が出立召されし後、八幡の神酒にて倉岡新三、

兵馬 佐倉郡八二人は即死。

市介 それを旦那が

兵馬 黙り居らう。遁がれぬ證據は毒の一札。

伴藏 それお見やれ。

ト以前の手紙を出す。與兵衞取つて

與兵 ナニ……「兼ねて申し談じ候ふ貴殿所持いたされ候ふ蠻國射岡毒薬の一種斑赤の蜘蛛、急ぎ御越し給はるべく候ふ。右の毒にて後室始め千鳥の正どのを、首尾よく失ひ候ふに於ては、契約の通り貴殿お望みの儀本望たるべく候ふ」……上の一字は切れ散つて、次兵衞どのへ、佐倉郡八。

伴藏 十の一字は散り失せても、慥かな女が訴へゆゑ、十次兵衞と事極まり

兵馬 後室樣の甚だお怒り。かゝる惡事を企むからは、彼の香合とても人手へ渡し、金子に侍へたに相違なければ、急ぎ追ッかけ討つて取り、首は武州の豐島家へ

伴藏 香合代りに渡すとあつて

兵馬　我れ〳〵へ追手の役目。
伴藏　サア尋常に
兩人　覺悟しやれ。
與兵　イ、ヤ手紙は拵らへ事、斯樣な惡事を企つる、十次兵衛……にはあらねども、申し掠めし上からは、例へ屋敷へ立歸り、云ひ開くとも御許容あるまじ。丁度所も侍ひ塚、死後の面目切腹なす。十次兵衛が冥途の道連れ。お身達、とも〳〵覺悟おしやれ。
伴藏　ヤア、追手に刃向ふ十次兵衛。
兵馬　市介もろとも、ソリヤ。
ト兩人拔き連れかゝる。これより烈しき禪のツトメになり、與兵衛拔き合せ、二人を相手に立廻りのうち、市介もちよつとあつて殺される。トヾ與兵衛、伴藏兵馬を當てる。この時向うより丈左衛門走り出で來り、この體を見て、有無を云はずに與兵衛を後より切り下げる。與兵衛「アツ」と思ひ入れ。蟲の聲、掠めたる忍び三重。
丈左　もう踠いても十次兵衛、叶はぬ事だ、覺悟をしやれ
與兵　チエ、、口惜しい、無實の罪に命を捨つるか。
ト思ひ入れ。
人手にやみ〳〵死なんより、武士の覺悟に切腹せん。
丈左　どの道殺す御身が命。そりやどうなりと勝手次第。
ト白刃を納める。この時チヨンと月出る。丈左衛門、與兵衛が顏を見て思ひ入れ。
ハテ、十次兵衛には高頬に黑子が。
ト與兵衛思ひ入れ。
與兵　イヤ、黑子は疾に拔き捨てても、劍難遁がれず。
丈左　この場で切腹。
與兵　今ぞ南方十次兵衛、生年積つて三十七歲。
トこの時、伴藏、兵馬、心付き、與兵衛へかゝる。立廻りよろしく引据ゑ、白刃を取り直し、腹へ突き立てる。
丈左　見屆けた……首は武州の豐島家へ、丈左衛門が介錯して。
ト拔きかける肱を、與兵衛しやんと留めて
與兵　聲かけるまで
ト突き放す。これにて丈左衛門しやんと納める、木の頭。
介錯無用。
ト諸手をかけて引廻す。キザミにてよろしく。

後シヤギリ。

ひやうし幕

二幕目

吉原仲之町の場
駐春亭座敷の場
吉原田圃の場

役名——山崎屋與次兵衞。吾妻の兒、鷲の森の長吉。三原有右衞門、男藝者、北右。同、小猿馬次、講中、川瀧屋市兵衞、茶屋廻り、山谷の鐵。中間、杢助。藤屋の若い者、藤助。船橋丹下。藝者、お箱。同、お花。同、お岩。同、米吉。山崎屋番頭、權九郎。萱蔦、佐渡七。藤屋娘、お常。藝者、藤屋の吾妻。山崎屋與五郎。相撲年寄り、幻竹右衞門。與女中、關屋。

本舞臺、三間の間茶屋場、軒暖簾、青簾を懸け、長暖簾、懸け行燈、藤屋と記し、正面桝組みの障子、立派なる神棚、眞鍮の燈籠など極彩色の貼り壁屋體、前は揚げ縁、青簾下がり、雪洞付きの燭臺三挺燈し毛氈懸けたる長床几三脚直し、下の方丸太の籬を結ひ、金書造と書きし高札を建て、揚げ幕の際へ大門を取付け、清掻、屋體囃子にて幕明く。

ト舞臺に藤屋の若い者藤助、そこら片付けて居る、ト下座と花道より侍ひ町人の仕出し、いろ／＼行き遊び入る。この中へ交り向うより、講中川瀧屋市兵衞、町人の形、風呂敷包みを持ち出て來る。下座より山谷の鐵、茶屋廻りにて、提灯を持ち、鐵棒を引いて出て來り

藤助　鐵さん、御苦勞だね。

鐵　藤公、太夫樂の盆踊りと、法印の俄は、揚屋町へ行つたか。

藤助　アイ、今ちつときれサ。

鐵　今夜は剛氣な人で、ゐじろぎならない。イヤモシ、市兵衞さんではござりませぬか。俄見物かえ。

市兵　そんな事ではない。ちつと尋ねる者があつて來たがあの鳥越の山崎屋の、與次兵衞どのゝ居る所は知らつしやらぬか。

藤助　アヽ、そのお人は、與希の親方の所に遊んでござる

人だらう。
鐵　さうサ。
市兵　イヤモシ、わしは少つと逢はねばならぬ用がある。これから大音寺前の湯治へ行つて待つて居るほどに、もし逢つたらあれまで
藤助　お出でなさるやうに。
鐵　わしもさう申しませう。
市兵　そんなら頼みましたぞ。
ト矢張り右の鳴り物打續きにて、市兵衛は下座、山谷の鐵は向うへ入る。此うち揩れ違つて向うより鷲の長吉、提灯を提げ、後より三原有右衛門、侍ひの形。權九郎、手代にて、王子土産を頭へ差し出て來り、花道にて
權九　モシ、三原さま、この頃のお洒落は、どこでござります。
長吉　どこと云つたら、五丁町中お馴染み。もう大概ふさがつたには、この長吉もこまり名古屋サ。
有右　そこで此ごろは、しやに片向ひで大色事、なんとお主も
長吉　オツと、うら山吹は古し。時に山吹で思ひ出した。わしが妹の藤屋の吾妻、いよ／＼表向きはお前の名前で、お國許の丈左衛門さまが、身請けなさる御相談でござりますか。
有右　サア、表向きは身共、內證で身請けして、密かに國へ送らせてくれと、手附け金百兩寄越されたを、ツイ身共が
長吉　サア、わしも妹を玉に樂がしたいから、昨日相談した通り、彼の奴に云ひ附けてやつたら、コレこの通り承知の手紙。
ト手紙を出し、見せる。
權九　ムウ……この間頼みの與五郎が紙入れ、取つてやらうと云ふ文言……「長吉どのへ、佐渡七」……これでは慥かだ。この手紙は、おれが預かつて置かう。
ト懷へ入れる。バタ／＼にて向うより佐渡七、巾着切りにて出で
佐渡　オヽ、長吉さんか。
長吉　佐渡七、首尾はどうだ。
佐渡　どうだの斯うだのと、わしが呑み込んだら、どんな物でもやりやアしない。五十間で揩れ違ひしなに……なつたり／＼と云ふと、直ぐにこの紙入れ。とんだ品玉だ。

ト出す。

權九 成る程、覺えのある與五郎が紙入れ。

佐渡 わしを頼んで渡はしたは、どういふ理窟だえ。

權九 サア、このお侍ひが金の入用、おいらも半口乘つて、思ひ付いた與五郎がこの紙入れには、この間お渡しなされた、お拂ひ米の金の受取。

有右 この間右の玄米三百俵相渡したといふ受取、此方へ取置いたを、金子濟んでその節引替へに致す筈を、折よく持參せぬを幸ひ、明日と云うて身共が所持して居る、この書付けに、物を云はせう爲。

長吉 受取つた金も、受取がなければ闇。おれは又妹めが所から遣つた起證が入用。

ト紙入れより出し、莨入れへしまひ、受取も出し

これを卷き上げうばかりに、佐渡七、お主を

三人 頼んだのだ。

佐渡 シタリ、又おれが上を行く、極上々の太印め。時に約束の金はえ。

有右 ハテ、そりやアこの受取を、百兩にした上の事。

佐渡 ハテ、そりやアちつと中位な話しだね。

長吉 成る程、さう思ふも尤も。これなら受取の入つて居るこの紙入れ、金を遣るまでの形に預けて置かう。

佐渡 そいつは少つと、働らくには邪魔だが、せう事がない。そんなら早く紙入れの身請けを頼みますよ。

ト懐へ入れる。

權九 それは承知だ。これから藤屋の見世で

有右 俄を見てやらざアなるまい。

長吉 七ぼうも今夜らは錢だ。

佐渡 それサ、今夜はべら坊に賑やかな晩サ。

ト清搔になり、掠めたる祇園囃子にて、皆々本舞臺へ來る。佐渡七は、ウロ〳〵あちこち歩き居る。藤助、捨ぜりふにて挨拶して居る。此うち向うより、この鳴り物にて、お常、茶屋娘、後より關屋、屋敷女中、杢助、供にて、革文庫と御用箱を割がけにして出て來る。

つれ 關屋さま、ちつとのうち俄を御覽じても、よいぢやございませぬか。

關屋 御用先ぢやによつて、どうあらうか。ナウ、杢助。

杢助 ハイ、明日の朝、七ツ上がりになされたら大事ござりますまい。

ト此うち向うにて

竹右 野郎め、引摺つて行く。うしやアがれ。

ト右の鳴り物になり、竹右衛門、角力年寄の形にて、勇みの若い衆を引摺りながら出る。山谷の鐵これをとりさへながら出て

鐵　モシ〱關取、間違ひでござりませう。料簡しておやんなさいまし。

若者　それサ、ツイ喰ひ醉つて麁相申しやした。御免なされまし〱。

竹右　何もおれが構つた事ぢやアないが、どこのか女中に毒を吐かすから、見て居る事のならないおれの氣性だ。會所へ連れて行く。うしやアがれ。

關屋　ヤ、お前は、幻し竹右衛門さんぢやござんせぬか。

竹右　オ、、お主はお早、ではない。今はお屋敷へ行つて關屋どのとやら。今日はどこへ。

關屋　アイ、ちとお上の御用で。……それはさうと、ついにない

つれ　お前の腹立てさんすは餘程の事。

竹右　イヤサ、この關屋どのゝ事を、此奴らが毒を云ふが頻りに癪に障つて來たのよ。

若者　モシ〱、間違ひでござります〱。

鐵　お常さん、どうぞお詫びを。

竹右　イヤ、屆ける所へ屆けねばならぬ。マア、こなさん達は、あれへ。

關屋　サア、參りませうか。

ト右の鳴り物にて、皆々本舞臺へ來る。佐渡七この人數を見て下座へ入る。若い者振り切つて逃げて入る。山谷の鐵續いて入る。

竹右　エ、、ひでえ目に遭はさうと思つたに、つん逃がしたか、忌々しい。

關屋　ハテ、もう、ようござんすわいなア。

竹右　イヤ、これは關屋どの、今日は朝日の如來へ御代參と承つたゆゑ、途中でお出合ひ申さうと、お待ち受け申した。サア〱、これへお出でなさい〱。

ト床几へかけさせ、その次へ手前もかけて居る。

つれ　これは有さん始め權九さん、ようお出でなされました。

藤助　お常さん長吉さん、今夜は有さんは、どこへお連れ申さうね。方々で色が出來て、さしを突かれるには。

有右　コレサ身共がナニ女郎買ひ……目端を開けて物を云へ。

長吉　それサ、たゞ俄を御見物のお客、お杯の支度でもさ

つしやいな。氣のきかない。

有右　イヤコレ藤助、俄といへば、ちつと頼みたい、行つて來てくりやれ。

藤助　そんならアノ吾妻さんの口を。

權九　これサ、口をきかずと行つて來やれ。

藤助　合點でござります。

ト清搔にて向うへ入る。

關屋　コレ〳〵杢助、その御用箱にある御佛へ參拜の金子この紙入れへ入れてたも。

杢助　ハイ〳〵。

ト關屋が紙入れを取り、箱の中の金子を出して入れる。此うちに佐渡七これを見て、いろ〳〵うろ付き居る。關屋紙入れを取り

關屋　先達て奧樣御不例の折柄、御願籠め遊ばし、その御利生やら御全快、これに付き佛前のお道具一式御寄附、お出入りの山崎屋へ申し付けしが、出來いたしたかな。

權九　イヤモウ、お誂らへより出來榮え致しました。御參詣の節、とくと御覽下さりませう。

長吉　イヤ、月々の御代參も外々と違ひ、賑やかなこの吉原。

關屋　その繁華な土地ゆゑ、一しほ途中の心遣ひ。

有右　ナニ心遣ひに及びませう。色と酒とで夜を明かす身共なぞは、折々參つても、とんと心は移りませぬ。お屋敷内に、ちと存じ寄りな女子がござつて、心中立てに堅い身持ち。なんと關屋どの、餘所外には、氣強い女子もあるものでござる。ツイ、オツと得心すれば、手前もよし、後のへる物ではなし、鼈甲細工より正眞正銘、上がる氣はないかな〳〵。

ト手を取り、だん〳〵側へ寄る。關屋逃げながら立つ、これにて床几倒れ返り、有右衞門ころげる。

關屋　ア、危ない事、有右衞門さまには、きつう御酒上がりましたさうな。

ト外の床几へ腰かける。此うちに佐渡七、關屋が紙入れを盗む。關屋ちよつと見て佐渡七が腰を取つて、簪にて佐渡七が手を床几へ突き立てる。佐渡七、痛むこなし。有右衞門起き上がり

有右　オ、痛い〳〵。

關屋　痛む筈でござります。お嗜なみなされませ。有右衞門さま、御代參の私し、佛の罰でもこの位な事はある筈。不義を致せば人が免しませぬ。

　ト佐渡七、簪をゆすられ、痛むこなし。

得心もない者に心を寄するは、盗みをするも同然。必らず愼みや……とサア、先の女子は此やうに、申すでござりませう程に、愼みや。この上お嗜なされませいなア。

　ト兩方へ掛けて云ふ。

有右　ア、これサ、今のは酒興。其許もお心にかけられな。爰で御意見聞かうより、俄でも見物仕りませう。

權九　それ〳〵、關屋さまには後程。サア、長吉どん、お連れ申しな。

長吉　サア、わしは大音寺前へ行つて參ります。マア、藤屋へお出でなされませ。

　ト清搔になり、有右衛門權九郎、藤屋へ、長吉は向うへ入る。

關屋　サア、若い者、取りやつた紙入れ、爰へ出しや。

　ト簪を抜き、竹右衛門方へ突きやる。竹右衛門、佐渡七を捕へる。

つれ　先刻にから、怪しいと見て居りましたが、お前さんが默つてお出でなされますに依つて。

竹右　それ〳〵、おれも容赦して置いた。サア、イケ泥坊め、盗んだ紙入れを出さないか。

　ト締め上げる。

佐渡　オヽ、痛い〳〵。出すわな〳〵。女だと油斷して、とんだ目に遭つた。せう事がない、紙入れを返すから、爰を放さつせい。

竹右　サア、出しやアがれ。

佐渡　ソレ、紙入れ。

　ト投げ出す。竹右衛門取上げるうち振り切つて

泥坊〳〵。

　ト逃げて下座へ入る。

竹右　ハテ、逃げ足の早い奴だ。併し、これさへ取ればよい。

　ト關屋に渡す。關屋見て

關屋　ヤ、こりや男の紙入れ、わしがのとは違うてある。ソレ、杢助早う。

杢助　ハツ。

　ト佐渡七が後追ひかけ、下座へ入る。

竹右　ハテ、どうして間違つたか。よい〳〵、おれが又、探しやうがある。

關屋　何は兎もあれ、先づ朝日の彌陀へ參詣して

つれ　町の內では人目あれば、大音寺前の駐春亭で、お支

度なされませいなア。

竹右　その湯治風呂へは、おれも用があれば、先へ行つて待つて居よう。

關屋　そんなら竹右衞門さま。

つれ　兼ねてのお話しは道々。

關屋　コレ……サア、參りませうわいなア、

ト淸搔になり、關屋、竹右衞門、お常、下座へ入る。

ト向うより藤助駈けて出る。奥より權九郎、有右衞門出で

權九　藤助、吾妻が事は、どうだ〳〵。

藤助　サア、丁度獅子の俄は今しまつて、先口をかけて、吾妻さまも來なさいます。

有右　そりや妙だ。まだ一二番殘つて居る。俄も見ながら

藤助　も一つお上がりなされませ。

ト揚げ幕にて拍子木打つ。

權九　コレ、そこへ來る俄は誰れだ。

藤助　米吉と仙吉でござります。

有右　こりやよからう。酒を持て來い〳〵。

ト下がり葉になり、米吉、師直の拵らへ、仙吉、判官にて文箱を持ち出で、舞臺へ來り

米吉　判官どの、遲い〳〵。内にばかり粘り付いてござるに依つて、御前の事はお構ひないおやまで。

仙吉　ハ、、、、これは〳〵師直どのには、御酒機嫌か御酒參つたか。

米吉　イヤ、いつ盛らしやつた。御酒下されても、勤めるところはキッと勤めるこの師直。

ト此せりふにて兩人睨合ひあつて

鮒やい、鮒侍ひやい。

仙吉　すりや師直、今の惡口、本性でお云やつたか。

米吉　オ、、本性、本所で云つたらどうする。

仙吉　オ、、本所ならば本所、五ッ目。

米吉　五百

仙吉　やくわん。

ト藥罐を出す。チヨン〳〵と拍子木。

お茶上がらんかお茶。

米吉　饅頭やおこし。

ト兩人駈けて下座へ入る。皆々褒める。淸搔になり、花道より與五郎、羽織、一本差しにて出で、花道にて

與五　さて〳〵、今度の俄のやうな人の出る俄もない。それはさうと吾妻が俄は、もう果てたか。どこへ出て居る

か知らん。仲の町中歩いたら、どこのか見世に居るでもあらう。

ト思案して取つて返さうとする。此うち大太鼓入り獅子の鳴り物になり、向うより吾妻、手古舞の形、俄の扇を持ち、若い者、留守居提灯を持ち、送り出て來る。與五郎、頰かぶりして、ちよつと當る。吾妻心得、立ちどまつて、若い者に囁く。若い者吞みこんで舞臺へ來り

若者　ハイ、吾妻さんの箱。

ト二重へ突出し、下座へ入る。此うち兩人花道にて

あづ　與五郎さんかいな。

與五　吾妻、今夜の座敷はどこぢや。

あづ　內の座敷ぢやわいな。

與五　藤屋なら、又あの屋敷の有侍ひぢやないか。

あづ　さう思ふゆゑ、わたしも氣障でならぬわいなア。

與五　ナニ、お樂しみであらう。早く行きや／＼。

あづ　又かいなア、お前に話しもあり、焦らさずと聞いて下さんせいなア。

與五　サア、おれも話しがあるが、爰に立つても

あづ　ソレイナア、江戶町を廻つて、話しながら行かうかいなア。

與五　それでは座敷が遲うならうぞや。

あづ　なんの、否な客には待たすがよいわいなア。

與五　手古舞ぢやと思うて、氣が强うなつたなア。

あづ　諸事太ッ腹サ。

與五　おれも、この形では、茶屋で目を付ける。地廻りの振りで。

ト羽織を脫ぎ、頰かぶりして尻をからげる。

あづ　受取り憎い地廻りぢやわいなア。

ト三味線入りの神樂になり、兩人向うの步みへかゝりながら

與五　時に吾妻、あの有右衞門が、いよ／＼其方の身請けすると相談するかいなう。

あづ　サア、あの身請けにも、譯のある事と思うては居るけれど、なんの身請けしたとて、どうしたとて、行かうぢやなし。

與五　身請けされても行かぬとは。

あづ　サア、互ひに取交した起證の通り、詰まらぬ時は駈落ちしても

與五　女房になるか。

あづ　ならいでかいな。例へ二人が手鍋提げ……新内節で
暮らすのが、樂しみぢやわいなア。
ト此うち下座より按摩出で來り、何心なく兩人が側に
て笛吹く。兩人恟り飛びのく、按摩は向うへ入る。
エヽモ、恟りしたわいな。
與五　時に吾妻や、わが身も慥か五ツ月ぢやな。
あづ　サア、それぢやに依つて、人さんの目に立たうかと
思うて、大抵心遣ひな事ぢやないわいな。
與五　さうであらうよ。丁度正月が產み月ぢやの。
あづ　アイナア。
與五　コレ、あんまり酒を過しやんな。ひよつと身にでも
障らうかと。併し、誰れが子やら知れもせぬに。
あづ　モシ、そりやお前、なんの事ぢやいな。
與五　大方、胞衣は紋盡しの、若い者中であらうぞえ。
あづ　コレ、あんまりな事云はしやんす。吉原の藝者は、
お客と色事するはきつい法度。それを知りつつ云ひ交
し、深い印はお腹の嬰兒。モウ／＼、わたしや嬉し
うて、お前に似た好い子をと、樂しんで居るものを。
與五　エヽ、眞面目になつた奴サ。
あづ　そんなら矢ツ張り焦らしかいなア……エヽ、面白う
もない。
與五　コレ、吾妻、慥かアノ左孕みは男の子、右ならば女
とやら。ドレ、ちよつと見てやらう。
ト側へ寄る。
あづ　エヽモ、よして下さんせ。
トぴんとする。
與五　コレ、そんなにツンとする事はない。ちつと見せて
ト引寄せ、懷へ手を入れる。此うち東の花道より折助
の生醉出で、これを見て
折助　エヽ、畜生め、うまくするな。腹が立つぞ。はツつ
けめ。
トよろ／＼する。二人はこれと摺れ違ふ。折助、花道
へ入る。
あづ　ほんに、いろ／＼な奴が來て。
與五　さうよな。そしてマア、男の子なら、なんと名を付
けような。
あづ　サア、お前の名が與五郎ぢやによつて、與三郎か、
與之松か。
與五　與次郎、與吉、與勘平。
あづ　それでは奴のやうなわいなア。

與五　もし又ひよつと女の子なら、吾妻は江戸の事、お江戸でもあるまいし。

ト此うち下座より鮨賣り出で、東の歩みへかゝり、入る。

あづ　紫の縁もあれば、お村かお崎、もしどうぞ成らうなら、わたしや男の子が欲しいわいな。

與五　吾妻、男の子が欲しいなら、男を産む呪ひがある。

あづ　アノ、呪ひがあるかいな。

與五　サア、その呪ひはの。

トあたりを見廻し、側へ寄る、ト藤助、吾妻を見て

藤助　サア／＼、吾妻さまが、お出でござります／＼。

有右　ヤア、吾妻、きつう待たしたな／＼。

權九　吾妻さん、待ち兼ねました／＼。

あづ　これは有さん、權九さん、今日は伏見町の一番ぢやに依つて、いつち早いのでござんすわいなア。

權九　さうサ／＼、待たうがどうせうが、お顔さへ見りや堪能するわいなう。

あづ　ほんに、お禮から先へ申しやせう。

藤助　そこが獨り勤めの吾妻さん。一つ〆めませう。

三人　ヨイ／＼／＼。

ト手を打つ。與五郎、思ひ入れあつて小隱れする。直ぐに時の鐘、唄になり、向うより北石、箔置き釋迦の形。勘次、天人の形、回向院の番傘を差し、道中姿にて出で來り

北石　天人か。

勘次　お釋迦さん。

北石　コレ……戀といふのも、菩提の道、回向院のこの寢釋迦も、本堂の合天井の其方に逢ひ

勘次　夜な／＼通ふ其うちに、賽錢の遣ひ過し。

北石　心中して死なねばならぬ身になつたか。ハア、……同じ釋迦でも嵯峨の釋迦は、開帳にござつての繁昌。それに引替へ淺ましい。

勘次　モシ、お前の遣ひ過しを、嵯峨のお釋迦さんに、無心云うてはどうぢやえ。

北石　あのやうに見えても、金づくの事。

勘次　吝いお方かえ。

北石　さうではないが、出來まいよ。

勘次　そりやなぜかえ。

北石　ハテ、體中が、しやくせんだんぢやわい。

皆々　イヨ／＼／＼

ト褒める。兩人床几へかけて酒飲む。また拍子木を打つ。時の鐘、大拍子、神樂になり、お梅、お岩、お花、鹿島踊にて出で、花道にて振りあつて三人舞臺へ來る。渡り拍子。

有右　成る程、妙だ〳〵。

あづ　鹿島踊もようござんす。

權九　何もかもよいうちにも、一番といふは、吾妻さんの獅子の音頭。

藤助　ぶッ渡ひでござります。

有右　さればこそ、この有右衞門が心を懸けて口說き、得心さへすれば直ぐに身請け。コレ、色よい返事は有馬の松よ、藤屋に卷かれて寢とござる。

あづ　モシ、わたしは藝者、女郎衆になんぼも美しいのがござんす。身請けなりと、店請けなりとしなさんせいなア。

有右　ハテ、さゝ、ピンシャンしないものだ

ト引ッ張り、しなだれる。下座より與五郎、若い者を連れ出で、囁く。

若者　ハイ、吾妻さんのお迎ひ。

權九　ハテ、とんだ早い迎ひだ。まだ三味をピンとも云はさぬうちに。

藤助　直し〳〵。

有右　イヤ、まだ湯治風呂に用もあれば、後の事〳〵。

あづ　左樣ならばお近いうちに。

若者　庄八玉屋に後口が懸つて居ります

あづ　嬉しいの。

ト清搔になり、吾妻、先に、若い者、箱を持ち、付いて入る。

有右　なんの事だ。俄を見せに呼んだやうなものだや。

ト此うち與五郎、吾妻が後を見て下座へ行くを

ア、コレ〳〵、そこへ行くは山崎屋與五郎ではないか。

與五　ヤ、あなたはお出入り屋敷の三原有右衞門さま……權九郎か。

權九　私しも今日は王子へ參りましたところ、有右衞門さまにお目にかゝり、あなたに御用と仰しやるゆゑ、これでお待ち申しましたが、モシ旦那、よい所でお目にかゝりました。

藤助　よい所といへば、モシ、與五郎さま、親方は江戸へ參りましたが、もしあなたがお出でなら、今日までのお約束、吾妻さんの手附けの百兩、是非〳〵今日。

與五　ア丶コレ、その金の事も、いろ／＼にしたれど、都合合ひは惡し、五十兩持つて來た程に、どうぞこれで。

有右　イヤ、その吾妻は身共も執心で、身請けの相談いたしかけてある。與五郎、身請けする金があるなら、此方の金子返しやれな。

與五　此方の金子と仰しやるは。

有右　ハテ、先達て藏屋敷のお拂ひ米三百俵、渡し置いた代金。

與五　エ丶。

權九　物覺えの惡い。私しさへ覺えて居る。先月廿五日お渡しなされた、ソレ、三百俵サ。

與五　コレ、わが身まで其やうに。その代金百兩は、この間お渡し申したわいの。

有右　ヤ丶、何を云ふ。この有右衞門、受取つた覺えはないぞ。

與五　モシ／＼、そりやマアどういふ事でござります。

權九　どういふ事はござりませぬ。受取らないから、受取らぬと仰しやるでござりませうワ。

與五　何を其やうな……云うても百兩。しかも當月二日、お渡し申した受取もござりますぞえ。

權九　受取があるなら、サア、早くお出しなされませ。

與五　サア、それはの。

　トうぢ／＼する。

有右　無いか。

與五　サア、その受取を入れ置きました紙入れ、落しましたが、取られましたか。

權九　モシ、若旦那、そんなにふがにふを云つて濟まさうとは、ア丶、こりやアなんでござりますな。吾妻どのの手附けに困り、渡さぬ金を渡したと、云ひかけを仰しやるのだな。

與五　コレ權九郎、大切なお屋敷へ上げる金、吾妻でも色でも、そんな事せうかいの。

有右　イヤ、さうであらう。コレ、身共が方には……右お拂ひ米三百俵受取つたといふ、受取があるが

　ト一札を出す。この時紙入れより以前の長吉が取つたる佐渡七が手紙を落す。

サア、其方でその金子、受取つたといふ受取が有るか。

與五　サア、それは。

兩人　サア／＼／＼、どうだ。

與五　エ丶、コレ、見す／＼渡した金の、受取を失くしたばか

り。
有右　身共に云ひかけひろぐ泥坊め。
權九　盗人根性さげさつしやると、旦那とは云はさぬぞ。
この權九郎が折檻しに。
有右　權九郎、藤助、ぶちのめして、金を吐き出させろ。
權藤　合點でござります。
ト兩人して與五郎をぶつ。下座より吾妻出で來り、これを支へる。
イヤア、吾妻さん。
權九　番頭の折檻を女の身で、なぜ
皆々　邪魔をするのだ。
あづ　イヽヤ、わたしや女ぢやないぞえ。
三人　なんと。
あづ　サア、俄の趣向と云へど、これ見やさんせ、男の姿
三人　ヤ。
あづ　男も男、心に角の角繋ぎ、堅木の棒ぢやなけれども、
巾の字きめた、ちよつと邪魔しに……イヤ、さしやくを
付けに來やんしたわいなア。
ト男の身振り、誂らへの鳴り物になる。
有右　ムウ、そんならわれが俄の手古舞。

權九　侠になつて。
あづ　サア、こなさん方の喧嘩の起りは、屋敷の米三百俵、
與五郎さん……イヤ、この若いのに渡し、その代金を渡
した、受取らぬといふのが、いざこざの序開きかえ。
權九　如何にも、お屋敷からお渡しなされた三百俵、賣り
拂つて、その金を上げぬから起つた事。
有右　此方には、コレ、右の金渡したと有る一札握つて居
る。
與五　コレ、吾妻……ではない頭、聞いて下され。その金
はキツと渡したれど、受取を落したに付け込み
あづ　ハテマア、ようごんす。わしも巾に入つたからは、
例へ向うに角が生え、恐れ入谷の鬼子母神、剛力稻荷を
云はうとも、此方も黒助苦勞人、互ひに料簡聖天川岸、
大さん橋の船ぢやアないが、じゆんわりとくんなんしな
有右　おきやアがれ。鳶の者の聲色で
權九　この場をちやアふうにしようと思つても
有右　此方には慥かな一札。
あづ　ハヽヽヽ、一札々々と、貸本屋の一作が聞いて呆
れる。ドリヤマア、その書付けを。
有右　とつくりと見て物を云へ。

ト吾妻取つて

あづ　成る程、こりや與五郎さんが惡い……此やうな慥かな物が有つては、お前の云ひ譯は立たぬぞえ。

ト一札を燭臺の火にて燒く

有右　ヤア／＼、ヤア、コレヤイ、なぜ大事の一札を燒いた。

あづ　イヤ、この書付けは紙屑同然。

三人　なんと。

ト吾妻、懐より關屋が持つて居た與五郎が紙入れを出し、中より書付けを出し

あづ　「覺え……一つ金百兩、右はお拂米賣り拂ひ申し候ふ代金相渡され、慥かに受取り申し候。」

皆々　ヤア。

あづ　「山崎屋與五郎どのへ、三原有右衛門。」

皆々　それがどうして。

あづ　手に入る所で手に入つたこの受取、なんとこれでも與五郎さんが盜人か。

皆々　サア、そりやア。

あづ　サア／＼／＼……誰れだと思ふ、水道の水で鯱鉾と膝組みの兄さん、おどけた奴等ぢやないか。

皆々　ムウ。

ト思ひ入れ。

あづ　これからは與五郎さんを苛めた仕返し。オイ／＼、みんな、早く來てもらはう。

三人　合點でごんす。

ト下座よりお花、お梅、お岩出で來る。

與五　ヤ、そんならわしが仕返しを。

はな　憎い人は、叩くより、抓つたり

梅岩　擽ぐるがようござんす。

ト三人、有右衛門權九郎藤助を抓つたり、擽ぐつたり、いろ／＼する。敵役せつながる。下座よりお常出で

つね　こりやまア、どうしたのでござんすえ。

うめ　與五郎さんを苛めた代り、わしらが

女皆　止めの擽ぐり。

權九　ア、ぶたれるより叩かれるより切ない。

敵皆　もう免せ／＼。

ト三人こけつ轉びつ逃げて下座へ入る。

女皆　ホヽヽヽ。オヽ、をかし。

あづ　お常さん、お前のお庇で、お屋敷のお女中樣から貰うた、紙入れの書付けがあつたばかり。

與五　この與五郎が無實を遁がれ、忝なうござりますが、この中へ入れて置いた起證が。
つれ　そりや又聞いて上げうわいな。時に、その關屋さまが、今宵は駐春亭へ。吾妻さん、お前も支度して來て下さんせいなア。
あづ　さうしてアノ三朝さんも、どこやらのお客でござんすぢやないかえ。
與五　コレ、吾妻。三朝とは役者の三朝か。おぬしやアあの座敷へ行くのか。
はな　アレ野暮な。その三朝さんはナ、日本橋のお客で外の座敷。例へ又一座ぢやというて、何を其やうに
うめ　ソレイナア、その三朝さんに似て居さんす與五郎さん、燒餅は通らぬぞえ。
あづ　お前が行くなら行くまいわいなア。
與五　イヤサ、さうぢやないが、どうか怪しく思ふから。
つれ　オツと、これから舞臺を二人にして、口舌をさせたいが、お前方の濡れは、皆樣が見飽きて居なさんすといなア。
はな　それぢやに依つて與五郎さん、お前は今夜は歸らしやんして、吾妻さんをやらしやんせいなア。

與五　さういふ事なら、歸りは歸らうが。
いは　大門まで送つて上げうわいなア。
あづ　そんならわたしも、髮結ひ直して行く程に、道寄りせずに歸らしやんせえ。
與五　そんなら吾妻、明日の晩。
あづ　待つて居るぞえ。
女皆　サア、ござんせ。

ト流行り唄になり、お常、吾妻は下座へ、與五郎と女形三人は向うへ入る、ト下座より與次兵衞、羽織町人の形、下駄がけにて出で、花道の方へ行かうとして、フツと有右衞門が落したる手紙を拾ひ、明りにてちよつと見て、

與次　合點のゆかぬこの手紙、取つて置いたら何ぞの役に一

ト懷へ入れる。この唄のうち、向うより丹下、胡麻鹽、羽織袴の侍ひにて、家來付いて出る。

丹下　それにお居やるは、山崎屋與次兵衞どのではないか。
與次　ヤ、あなたは親どもお出入りの、鴻野の御家中、舩橋丹下さま。
丹下　一別以來堅固で
與次　あなたも御機嫌よう。マ、、これへ〳〵。

ト床几に腰かけさせて

さて今日は、思ひもよらぬ當所へお出では。

丹下　サア、其許に、ちと御相談申したい儀ござつて、山崎屋へ申し遣はしたら、何とやら味なお噂。只今は當所にと聞き。

與次　それは遠方、私しも商賣の世話が嫌さ、と申すも我まゝ、家出いたして居ります。

丹下　さてこそ〳〵、時に其許へ……イヤナニ、コレ家來其方は大恩寺前の、申し付けた料理屋へ參り、待つて居れ。

家來　畏まりました。

ト下座へ入る。

與次　して、私しへの御用の筋はな。

丹下　お出入りならでは明かさぬ儀なれど、お家には佞人多く、種々の詭動あるが中にも、大切な殿を毒殺。

與次　エ。

丹下　サア、御運強き加護にや、企みし者仕損じ、御身に恙もなく、十次兵衛と申す者に疑ひかゝり、落着して事は濟めども、分明ならず思ふ折から、この程お庭掃除の者、飛び石の下より取出したる、一つの手掛り。

ト袱紗包みを出し

彼の毒藥を祕め置く器が、一角を以て拵らへたる器物、上包みの書付けが手掛り。

與次　ドレ。

ト取つて、燈臺の灯にちよつと透かし見て

ヤ、、こりや慥かに親淨閑が。

丹下　サ、、正しく蠻國に用ひる

與次　射罔の毒藥。

丹下　包み紙に山與の所持と書きつけあり

與次　ア、、これがどうして。

丹下　覺えがあるか。

與次　サ、それは。

丹下　覺えあらば引ッ縊つて、お國許へ引かねばならぬ。

與次　イヤ、全く覺えはござりませねど、お出入りと申し拙者めへ御內談、何卒この詮議は。

丹下　申し付けてくれいか。

與次　御恩を送る拙者が働らき、尋ね出して差上げませう

丹下　オ、。さうあらうと、これまで參つた。併し、大切な科人。

與次　例へ一門一家たりとも、容赦いたさず

丹下　糺明なすか。
與次　お家へ忠義を
丹下　一筋に。
ト捕り繩を出す。
與次　搦めて出すが
丹下　男の魂ひ。
與次　磨き上げて、お目にかけませう。
ト繩捌きする。唄になり、この道具ぶん廻す。
本舞臺、上の方、九尺の障子屋體、内に床の間、駐春亭の額、下の方一間の離れ座敷、向う障子、この間柴垣植込み手水鉢など、いつもの所に門口、爰に關屋、お常、北石、勘次、太鼓持ち、賑やかなる鳴り物にて道具とまる。吾妻も藝者の形に着替へ、ともとも關屋を取持ち居る。向うより四つ手駕籠を擔ぎ出で來り
駕舁　アイ、ちとお頼み申します。
つれ　アイ〳〵……アレ、お光さん、お客樣が。
ト云ひながら此方へ來り
よう入らしやりました。サア、マアこちらへ。

ト駕籠の内にて
三朝　ア、モシ、お常さん、お客がござりませぬ。三朝でござります。
つれ　オヤ、三朝さん、ようマア、お前お一人かえ。
三朝　イエ、今日は日本橋のお客がお約束ゆゑ、早く參らうと存じましたが、ちと樂屋に用があつて。
ト此うち關屋、三朝が來たと聞き、前を合す振りにて立ち上がり、覗いて見たり何かして、吾妻に囁く。
あづ　そりやモウ隨分、マア、わたしが
ト此方へ來て
三朝さん、この間は。
三朝　オ、、吾妻さんか。お前に聞かせたい親仁の新物があるよ。
あづ　ほんにかいなア。お前知つてならどうぞ。
三朝　イエモウ、わたしもまだ本當には。
北勘　音羽屋の親方、よう。
三朝　オ、、これはどなたも。
あづ　モシ、お常さん、ちよつと耳を。
ト囁く。
つれ　アイ〳〵……モシ、三朝さん、お前のお出を聞いて、

あづ　お屋敷のお方が、お近付きになりたいと仰しやるが、どうぞ少つとの間、此方へ付合うて上げて下さんせぬか。
あづ　わたしらがお頼みぢやわいな。
三朝　それはマア、有り難うござります。併し、柳枝さまの方がどうも。
つれ　エヽ、柳枝さんなら、わたしがよいやうに云ふわいな。
三朝　そんならちよつと參りませうか。
あづ　嬉しいね。サア〳〵。
鶯昇　お常さん、お宿からお包みが。
つれ　ほんにお世話でござんした。
ト此うち彼方は酒盛りして居る。吾妻、お常。三朝を此方へ連れて來り
關屋さま。
あづ　三朝さんが見えましたわいな。
三朝　ヘイ、御免なされませ。
北勘　サアモシ親方、此方へ。
三朝　あなた、よう今日は。
關屋　ハイ。
ト恥かしき思ひ入れ。

あづ　サア、關屋さま、其お杯を三朝さんへ。
三朝　戴きませう。
關屋　憚りながら。
トさす。
三朝　どうぞ又相變りませず……吾妻さん、憚り。
ト飲んで
左樣なら、これは獻じませう。
ト關屋へ杯を戻す。關屋、心の内にて返事して杯を取る。お常つぐ。
あなた、少と御見物に入らつしやりませ。
關屋　どうもお屋敷がむづかしうて。それでもこの春は、やう〳〵の事で
三朝　入らつしやりましたか。
關屋　二番目がいつそ好うございました。
つれ　お前が左七の折、お出でぢやさうなわいな。
關屋　いつそ田之助が殺される所が、可哀さうでござりました。
北石　親方、あの中の字はきついお出來ね。
關屋　中の字とは、なんの事ぢやえ。
あづ　アノ中の字とは、俠の事を申しますわいな。

關屋　わたしは又、やいとの事かと思うて。

勘次　こりやアよい。ハヽヽヽヽ。

北石　モシ親方、中の字で一つ話しがござりませう。

勘次　大かた宗叔の燒き直しであらう。

つれ　コレイナア、その話しは日待ちの晩にして、あなたも先刻から、惡い洒落もたんと受けてお出でなされたに依つて。

あづ　それ〳〵、これからお杯をグル〳〵廻しにして、お開きはどうでござんせう。

つれ　それがよいわいな。併し、わたしやお歸りの支度や何やかや。吾妻さん、お前、後を好いやうに賴むぞえ。

あづ　そりや合點ぢやわいな。

北石　左樣ならあなた樣、これにお懲りなされずと又近日。

關屋　アイ、また近日ゆるりと。

勘次　三朝さん、この間に參つて、大飲みに致しませう。

三朝　ちと又内へ來なさい。

北石　そんならあなた。モシ、親方。

勘次　重ねて逢はう。

ト力む。

つれ　エヽ、措かしやんせ。

ト流行り唄になり、おつれ、北石勘次奥へ入る。關屋吾妻、三朝殘る。

三朝　左樣なら私しも……吾妻さん、ちと二丁町へも來なさい。

ト立たうとする。此うち關屋、三朝を留めたき思ひ入れ。

あづ　アモシ、三朝さん、マアよいぢやないかいな。

三朝　それでも又あちらが。

あづ　ハテ、彼方は、お常さんがよいやうに云ふと云はしやんしたわいな。

關屋　吾妻さん、それでも折角お留め申して、お樂しみの邪魔をしては。

三朝　なにサ〳〵、そんな事ぢやござりませぬ。彼方のお客は男ばかり、皆私しを御贔屓の。

あづ　三朝さん、彼方ばかりが御贔屓ではないわいな。あなたもきつい御贔屓で、お前の錦繪ばかり亦、お文庫に三つ有るといな。

三朝　それは有り難うござります。

あづ　それぢやが、女房さんの有る事をこの間お聞きで、ちつと憎いさうわいな。

三朝　なんのお前、女房は女房サ。
關屋　吾妻さん、ありやみんな嘘ぢやぞえ。
三朝　ナニお前、嘘を云ふものでござります。
關屋　ほんにかえ。

ト三朝を見て思ひ入れ。

三朝　大誓文、親の頭に松三本。
關屋　ホヽヽヽ。

ト笑ひ、吾妻立たうとするを

關屋　ア、コレお前。
あづ　イエ、直ぐに參りますわいな。
三朝　コレ〳〵、吾妻さん、そんな事は惡いによ。
あづ　何がいな。同なじやうに。

ト合ひ方になり、吾妻、此方の座敷へ來り、屛風を立てる。三朝、こなしあつて

三朝　なんでござりませうね。お屋敷がむづかしうござりますなら、どう致しても芝居なぞは。
關屋　ハイ〳〵、せつ〳〵は參られませぬ。どうぞわたしも嫁づくなら、お前方の御近所へ。
三朝　イエ、どこぞ好い所がござりましたら、お世話いたしませう。

ト關屋が額を見て、こなし。

關屋　有り難うござります。
三朝　ほんに、あなたのお屋敷にも、お狂言がござりませうね。
關屋　ハイ、お客樣でも入らつしやります節は。
三朝　ヘイ、稽古なぞは、誰れが致します。
關屋　藤間のお紋がお出入りでござります。
三朝　大方、あなた方もなされませうな。
關屋　なんの、私しのやうな不器用者が。
三朝　イエ〳〵、立役か、女形か、取分け濡れ事なぞは、常からお稽古なされて、お上手らしう見えます。
關屋　どう致しまして、其やうな事は、誰れも敎へてくれる者はござりませぬわいな。
三朝　嘘々。いま時お屋敷の女中方に、滅多に油斷はなりませぬて。
關屋　イエ、そりやアノ、ほんの事。

ト杯のやり取りしながら、この模樣よろしく、此うち吾妻

吾妻　關屋さん〳〵。

ト此方へ呼ぶ。

關關　アイ／＼、なんぢやいな。
ト此方へ來る。吾妻、隱にて、次の間へ行けと思ひ入れ。關屋、恥かしがる。吾妻、手を引いて連れて來る。此うち三朝、見ぬやうに見る事などある。
吾妻　三朝さん。
三朝　吾妻さん。お前、どこへ入つて居た。
吾妻　モシ。
ト嚏く。
三朝　そんな事、よいかえ。
吾妻　なんの大事あるものかいなア。
三朝　しよげる奴サ。
ト三朝も次の間へ來る。
吾妻　關屋さん、……三朝さん、よく教へて上げなさんせ。
ト合ひ方になり、吾妻思ひ入れあつて奥へ入る。三朝我が煙管にて關屋へ煙草をつけてやる。關屋、これを戴きのむ。
三朝　どうかこんな所は、春狂言の左七のやうで。
關屋　ほんにあの折、田之助と……わたしや田之助になりたいわいなア。
三朝　モシ。

トこなしあつて障子を締める。唄になり、此うち有右衛門、權九郎出で來り
權九　有右衛門さま、今の樣子御覽じましたか。
有右　さうサ、身が惚れて居る奥女中の關屋め。
權九　朝日の彌陀へ御代參の途中、この湯治風呂へ立寄つて今の放埒。
有右　なんと權九郎、どうしたら腹が癒やうな。
權九　どうと云つたら、あの關屋が假親と聞いた船橋丹下が、奥へ來て居るこそ幸ひ
有右　引摺り出して恥づらかゝせ、腹を癒よう。
權九　有右衛門さま。
有右　合點だ。
ト障子を明ける。内に屏風立て廻し、この合せ目より關屋の守の紐長く出て居る。有右衛門この紐の端を探り見て引ッ張る拍子、屏風の内にて
關屋　誰れぢや／＼。
ト此うち權九郎、手燭を袖に隱し、思ひ入れにて窺ふ。有右衛門は守の紐を引ッ張る。屏風の内より出で
關屋　何者ぢや。關屋が守を引出すは盜賊か。
有右　イヤ、三原有右衛門、關屋が放埒見届けた。

關屋　エ、。
有右　丹下どの、放埒者ぢや、橫道者ぢや。出合はつしや
　い／＼。
　トこれにて奧より丹下、長吉、お常出で來り
丹下　有右衞門どの、聲高に騷ぎ召さるは
長吉　どんな騷動が出來ました。
權九　どうといつたら、奧勤めの關屋どのが男狂ひ。
有右　爰の座敷で乳繰り合つても事が濟むかな。
つれ　ヤア、そんなら關屋さまは。
丹下　なんとお云やる。身が娘同然の
　ト關屋が側へ、ツカ／＼と行く。
　コリヤ關屋、其方は放埒の覺えあるか。
關屋　サア。
丹下　覺え無くは無いと云へ。女中預かりの身共、殊には
　其方と緣あれば猶更濟まぬ。サ、、云ひ譯せい／＼。
　ト急く。
關屋　サア。
長吉　イヤ、こりやア云ひ譯はござりますまい。なぜと仰
　しやりませ。此お女中が出たあの屛風に、男の帶が懸け
　てあるからは、寢て居たに違ひござりませぬ。

つれ　コレ、長吉さん、ありやわたしが平括け、そんなお
　方の帶ではござんせぬわいな。
有右　なにを／＼。好い所へ長吉、その男を引摺り出せ。
長吉　合點でござります。
　ト行かうとするを、お常、支へるを突きのけ、明きか
　かつた障子を明け、入らうとするを、內よりこの手を
　しつかり握る。長吉ギヨツとして
　ヤイ／＼、いま放埒の合摺りめを、引出さうとするおれ
　が腕首を、摑まへた奴は誰れだ。
　ト云ふ。內にて
與次　オ、、山崎屋の總領、今は無宿の與次兵衞だワ。
　ト合ひ方になり、障子を明け、與次兵衞、浴衣、置き
　手拭、湯上がりの見得にて、長吉が手を取つた儘に出
　で來る。
有右　こりやア。
與次　俄の世話にホツとして、この大音寺前の湯治上がり、
　汗を入れるお座敷へ、臑腰を踏ん込む、うぬは何といふ
　猿松だ。
　ト突き放す。
長吉　口に地代が出ないと思つて、大きな熱を吹くが、コ

レエ、、おれを知らないか。われが恥だか知らないか。
與次　イヤ、夢に見た事もない。
長吉　恐らく女郎の一つ買ひもする吉原通ひは、長吉船の乘り心を知らぬは野暮と唱へる、鷲の森の長吉といふ、三谷堀の土地ッ子だワ。
與次　その鷲の森の長吉が、なぜおれが酒を飲む座敷へ、泥臑を踏み込むのだ。
長吉　サア、そりやア、有右衞門さまといふお侍ひ、おれがお客の云ひつけゆゑ。
與次　侍ひならば無禮といふ事を知つて居やう。それを知りつゝ慮外ひろげば眞暗闇。勘當の一德、親もなければ兄弟もないこの與次兵衞、それでも臑を踏ん込むか。オオ、ちつと古いが、江戸ッ子だワ。
長吉　サ、それは。
與次　サア／＼。どうだ。
長吉　ムウ。
有右　イヽヤ、例へ證據なくとも、この所へ立寄つたが放埒の證據。
丹下　コリヤ關屋、この所へ立寄つたは、外に何ぞ御用あつてか。さうか／＼。假親なれど親は親、明白に云はにや武士が立たぬぞ。
關屋　義理あるあなたへ、どうも申し譯はござりませねど、如何にも有右衞門どのゝ仰しやる通り、この身の放埒。
つれ　イヤモシ、關屋さま、私しは何にも存じませぬが、さう云はずとも、どうか云ひ譯。
有右　なにを／＼、關屋、違ひはあるまいが。
丹下　ハテ、是非に及ばぬ。
ト思案する。
權九　イヤ、呆れたものだ。さう聞いては、早々受取るものも受納せねばなりませぬ……モシ、朝日の彌陀の厨子佛具一式、奥樣の御寄附、御用仰せ付けられた五十兩、お渡しなされて下さりませ。
關屋　如何にも越度は越度、御用は御用……ナニ、杢助は居らぬか、居らぬか。
ト杢助出て
杢助　ヘイ／＼、關屋さま、御用でござりまするか。
關屋　御用箱に入れ置きし五十金、これへ持ちや。
杢助　ア、モシ、其お金は、最前あなたのお紙入れへ入れて上げました。
關屋　エ……紙入れへ入れさせたは、お側衆その外より、



天保五年七月森田座上演　四世坂東三津



五郎の與次兵衛　六世岩井半四郎の關屋

銀包みの御さん物。

杢助 イエ〳〵、彌陀へ上げる金と仰しやつたゆゑ、五十兩を入れました。

ト御用箱より銀色包みを五つ六つ出し

コレ〳〵、御さん物は爰にござります。

關屋 ヤ、すりや、いよ〳〵五十金は紙入れ。

ト驚ろく。

丹下 その紙入れ、如何いたした。

關屋 サア。

丹下 サアでは濟まぬワ。

關屋 ぢやと申しまして。

トうろ〳〵する。

丹下 樣子はどうぢや。

關屋 盜人に取られました。

丹有 ヤア〳〵。なんと。

杢助 最前の巾着きりめ、どこへうせたか、なんでも尋ねて。こりや斯うしては居られねえ。

トうろたへ、向うへあわて走り入る。

權九 ハテ、重ね〳〵の御愁傷、察し入ります。

ト嘲弄する。丹下、關屋を引きつけ

丹下 エヽ、爰な不所存者めが。身が方へ出入りの竹右衞門が賴みゆゑ、奧方のお側仕へに差出すには、町人では叶はぬゆゑ、身が養女分にして差出し、僅かのうちに立身、今は重役の御奉公を勤めながら、如何なる天魔が見入つてか、かゝる場所へ立寄るゆゑ、大切な御寄附金まで盜み取らるゝとは、見下げ果てたる不所存者、依估贔屓なき身が成敗、局中へは身が屆け、この所より永の御暇。

有右 こりや、さうなけりや叶はぬ。

權九 イヤ、お暇が出ましては、私しへ受取る五十兩は。

丹下 この丹下が返濟までお待ちやれサ。

權九 イヽヤ、さうは成りませぬ。しわん坊の親方淨閑が手前。

與次 イヽヤ、親仁どのゝ吝嗇は兎も角も、悴のこの與次兵衞が待つて上げませう。

權九 イヤコレ、悴とは誰れが事。尤もこなたは、淨閑さまのほんの子なれど、我まゝ氣まゝ、親に暇をくれと願つて勘當請けたれば、山崎屋のやの字も、こなたの自由には成りますまい。

與次 サ、それは。

權九　サア〳〵……關屋さま、丹下さま、たつた今、片附けてもらひませう。

與次　待て……忌々しい。せう事がない。ほんの親でも、心意氣を惡く金を溜め、それを、ともども人喰ひ馬に、胸が惡さに見限つて勘當請け、風來者ゆゑ云ふ事が立たない。この場の押しのきくやうに、今日只今、勘當赦されてくれる。

權九　なんと。

與次　モシ、講中の市兵衞どの、ちよつと來て下さいまし。

市兵　オイ〳〵。

ト合ひ方になり、市兵衞、風呂敷包みを持ち出で來り

與次兵衞どの、わしを呼ばつしやるは、奧で段々云つた通り、親淨閑どのゝ頼み、講中一統世話を燒くを聞き屆け、勘當赦りて、内へ歸る心にならしやつたか。

與次　サア、これまで段々、親仁が手を下げる樣子、お前方の話しで聞けど、斷わりを云ひましたが、急に少つと山崎屋の、旦那にならねば理窟の惡い事があつて。

市兵　得心して内へ歸る氣になれば、皆の喜び。コレ〳〵よく〳〵なればこそ、爪へ火をともす淨閑どのが、身形も惡からうと、羽織着物まで心付けて寄越された。

ト風呂敷を明ける。與次兵衞見て思ひ入れ。

有右　着物といへば、お暇の出た不首尾の關屋が着て居るは、お屋敷の御紋付き。

長吉　仰せつけなら引ッ剝ぎませう。

ト立ちかゝる。

つれ　ア、モシ、そりやあんまりな。

長吉　何があんまりだ。よい事をした後は、いつでも赤恥をかくが見せしめ。容赦なく引ッ摑むが、鷲の森の長吉だ。

ト關屋を剝ぐ。關屋、長襦袢一つになる。

有右　我れ辛からば人にも辛し

長吉　みじめな態だ。

關屋　ハア、。

ト締泣きに思ひ入れ。

つれ　エヽ、憎々しい。關屋さん、サア〳〵、最前のわたしが着物が爰にござんす。これなと着なさんせ。

トそこにある着物を着せ、帶を締める。

市兵　サア、與次兵衞どの、こなたも着替へさつしやれ。

與次　こりや御慮外でござります。

トやつし羽織になる。

長吉　與五郎の兄御なら、與次兵衞どの、鷲の長吉が、ちよつと逢ひたい。
與次　アノ、おれに。
長吉　如何にも。
與次　ムウ。
　ト肩で笑ふ。合ひ方になり、兩人中腰になり
　鷲の長吉、この與次兵衞に用といふは。
長吉　外でもない、養ひ金が貰ひたい。
與次　なんと。
長吉　おれが妹の吾妻が蟲、與五郎に云つても、部屋住の一文なし。兄は弟を憐れめと御條目の通り、弟に代つて養ひ金くりやれ。
與次　ハ、、、、吾妻は遊所の藝者、色戀は掛け放し、それに養ひ金取らうとは、夫婦とでもいふ堅い證據が無くつて云はうか。そん所、そこらのお侍ひ、よい身になるを、かぶり振らせるこの起證。
　ト出して
　其許樣と夫婦の契約いたせし上は……後は讀むに及ばぬ與五郎さまへ吾妻……なんと證據であらうが。
　ト差出す。與次兵衞、最前の手紙を出し

與次　ドレ。
　ト取つて
　成る程、キツとした證據であらうが。
長吉　成る程……これが役に立つものか。
與次　ト折つて懷へ入れる。
長吉　ヤイ、與次兵衞、なぜその起證卷上げた。
與次　役に立たぬ反故ゆゑに。
長吉　イヽヤ、お主は反故とも、無駄書とも、役に立つ所で立てゝ見せるワ。
　ト與次兵衞が懷へ手を突込むを、ちよつと立廻りに長吉、起證と思ひ、手紙を引き出す。
與次　それ程欲しくばやらうが、その一札讀んで見やれ。
　ト長吉ひろげて見て
長吉　「先刻お頼みなされ候ふ彼の者の紙入れ、キツと盜みとり差上げ申すべく候ふ」
與次　鷲の長吉さまへ佐渡七。
長吉　サ、こりやア。
　ト思ひ入れ。有右衞門懷を尋ね、「南無三」と思ひ入れ。

與次　養ひ金、しつかりと受取れ。

ト持つたる煙管にて長吉が眉間をぶち割る。

長吉　ヤ、男の生面を。

與次　男とは盗人根性、人の廢りもの、紙入れの詮議仕抜かうか。

長吉　なんと

與次　云ひ分あらば與次兵衛が聞かうか。

長吉　長吉が云はうか。

ト兩人立ちかゝらうとするを。關屋思ひ入れにて中を引分け

關屋　ア、モシ、わたしが事から、爰へ來なさんした與次兵衛さまとやら、紙入れの詮議も、すればする程この身の恥、思し召して下さりますなら、兎角この場を事ゆゑたう。

與長　でも。

關屋　ハテ、長吉どのとやらも、詮議されぬが、爲であらうが。

つれ　與次兵衛さま、お前も今までとは違ふ。今日からは山崎屋の子息ぢやござんせぬかいなア。

與次　成る程、こりやわしが誤まつた。勘當ゆりて、眞面目な商人を忘れて、傳法かたんきのやうに、長吉どの、氣に障つたら免して下さい。

長吉　ハテ、免せとあるに、角付合ひもなるまいわれ。

與次　心が折れたら、つい向う見ずに額の疵、膏薬代ではない、持ち古しのこの煙管。

ト投げて遣る。

長吉　こりやア。

與次　四十五匁、ちと重くとも持つて下さい。

ト長吉、思ひ入れにて納める。

丹下　其方が済めば關屋の身の上、奥方の手前、不便ながらも、頼まれた元へ引渡さにやならぬ。ナニ、竹右衛門竹右衛門。

ト合ひ方になり、障子の内より竹右衛門出て、

竹右　丹下さま、委細はあれにて残らず承りました。關屋どの、ではない、お暇が出れば、お身が身の上御尤も。幻しの竹右衛門め、慥かに引取りましてござります。

權九　この場は一件は、これで済みましたやうだが、済みませぬのは五十兩。

與次　そりや、この與次兵衛が丹下さまと相對。

丹下　彼れが諸道具賣り代なして、追つて返進。最早身共

は立歸るが、有右衞門どのには
有右　イヤ、身共は後に用事がござる。先づお先へ。
與次　コレ、お常さん、もし與五郎に逢つたなら、この紙屑も小判の端、身を持つ起證になり居れと、屆けて下さい。
つね　畏まりました。
ト起證を受取る。
權九　王子歸りに、こりや化かされたか知らん。
與次　權九郎、王子には相應な、一つ穴の野良狐、キヨロキヨロせずと供をしろ。
市兵　サア／＼、早くござれ。
ト丹下、關屋が着物を抱へ、與次兵衞、市兵衞、權九郎、花道へかゝる。關屋あと見送り
關屋　アモシ、丹下さま、これまでの御恩を無下に、この身の不所存、御免なされて下さりませ。
ト殘り多き思ひ入れ。
竹右　心がらとはいひながら
有右　お羽利きの奧女中が
關屋　見すぼらしいこの姿。
權九　勘當の極樂とんびが
與次　分限の旦那と早替り
つね　悟れば佛。
長吉　迷へば修羅。
關屋　夢と思うて。
トほろり。丹下、有右衞門、關屋思ひ入れあつて
與長　サア、ござりませ。
ト唄になり、丹下、與次兵衞、市兵衞、權九郎向うへ入る。有右衞門、長吉奧へ入る。屏風の內より吾妻、與五郎、ソッと出で來り
與五　お早さま、まんまと首尾よう
あづ　お暇を、
關屋　モシ。
ト時の鐘、合ひ方。
御首尾がようて、モウ取り惡いお暇も、お前方の世話で望みも叶ひ、嬉しうござんす。
竹右　ヤア／＼。コレお早、お暇の出るその身持ち、意見云はうとも思ふところに、こりやどうだ。
あづ　サア、お早さまの不身持ちは、お暇望む拵らへ事。
竹右　なんだと。
關屋　譯を云はねば、御合點が參りますまい。竹右衞門さ

ま、堪忍して下さりませ。お前を頼んで鴻野のお屋敷へ、御奉公に上がりましたも、云ひ交した男があるゆゑ。

與五　折角上がりなすつても、其お人はお門詰めとやらで、顔を見る事さへならず、名ばかり聞くを樂しみに、勤めてお出での其ところが

あづ　不慮の事で其お方は、他國なされたさうなゆゑ、例へ何國の果までも、後を慕うて行かしやんすお心で

つね　御恩のあるあの丹下さまとやら、幻しさん、お早さんがお屋敷の、お首尾がよいやうにござんすゆゑ、お暇も貰はれず、それで役方からお暇の出るやうにと、今日の趣向も

關屋　みんなわたしが此お方々に、譯を云うて頼んだゆゑ、

竹右　それでもアノ三朝と

與五　サア、その三朝はこの與五郎、お常さんが呑み込んで、音羽屋へ人をやつたところが、今日は二番目の稽古とやらで、よんどころない斷わり

あづ　わたしに相談をしなさんすゆゑ、幸ひわたしが云ひ交して居る與五郎さん、色の慾目ぢやないが、三朝さんに生寫し。いつそ與五郎さんを三朝さんに仕立てゝ、斯う斷うしてはどうであらうと、作者はわたし。

つね　それから音羽屋へ人をやつて、三朝さんの衣裳や着物を借り寄せ、急に役者衆を拵らへて、お早さんの望みの通り

與五　お暇の出るやうに、三朝氣どりで、どうか斯うかやツつけ、お早さんの望みも叶つたといふもの。様子といふは

女三　この通りでござんすわいなア。

竹右　シタリ、云ひ交した男の他國、行くへを尋ねて遊びたいばかり、結構な身の上を、拵らへ事して暇を取るとは、男の意氣地も女の操も、そこらだ〳〵。お早ばう、出かした〳〵。

關屋　お前に話したら、叱らさんせうと思ひの外、喜んで下さんして、モウ日本晴れがしたやうに、嬉しうござんすわいなア。

竹右　時に、改め云ふには及ばねど、お主が親甚五兵衛とは呑み友達、死ぬ枕頭へおれを呼んで、兄の甚兵衛めは、あのやうな惡者、親のない後は、どのやうな見苦しい事公にも出し兼ねない奴、わしが死んだら、あづまを世話してくれと頼んで往生。それからおれが引取つて置くうちに、兄めは江戸に帆をかけて、上州あたりへ行つたと

聞いたが、今は千住の先の、竹の塚に居るとの噂。心が直つたら、これにも尋ねて逢はせようと思つて居るが

關屋　イヤモウ、兄さんの事は後へ廻して

竹右　その男の行くへを尋ねる、と云つたところが長の旅。

與五　路銀の用意は

あづ　ござんすわいなア。

ト奥より

佐渡　その金はわしが持つて居ります。

ト合ひ方になり、佐渡七出て來る。皆々思ひ入れ。

與五　ヤ、こなたは先刻の

佐渡　佐渡七といふ巾着切りサ。

あづ　エヽ。

佐渡　わしがこんな態で、晝鳶と聞いたら、怖い者とも思ひなさる筈。成る程これまでは、兇状きる度遠島へも、七度行くところを、どういふ廻り合せか遁がれたゆゑ、人が佐渡七々々々と、仇名を呼ぶ程に惡い者であつたが今日奥山の茶屋で、あのお女中樣が片蔭へ呼ばしつて、斯う／＼した入り譯、云ひ交した男の行くへを尋ねに出ねばならぬが、御奉公の身分なれば、着類諸道具も賣り代なされぬ。これゆゑお上のお金なれども、こなたの盜んだ分にして、戻して下さい。お屋敷への濟み方は、右の品々が引當。男と見かけて頼むと一言。

竹右　そんならお早が、お主を頼んで

佐渡　サア、女でさへ一旦云ひ交した男を變ぜぬ深切。これを思へばア、、おれは淺ましい根性、もと盜人は不義理からと、フッと思つて惡念發起、呑み込みましたと請合ふ矢先、長吉どのゝ又ぞろ頼み。

關屋　樣子を聞いて、最前の紙入れも、皆この人と云ひ合せ。

與五　すりや、この與五郎が難儀も、佐渡七どのが

佐渡　根性を直す手始めの立役。摺替へて駈け出した、お前の紙入れは爰に。サア、よく金を改めて、受取つて下さいまし。

ト以前の紙入れと金を渡す。

あづ　ほんに、見たところは怖いが

つれ　優しい心ざしぢやわいなう。

竹右　惡に強いは善にも強し、これからおれが無盡でもして、商ひでもさせてやらう。

佐渡　關取、お頼み申しませう。

つれ　イヤモウ、何もかも首尾よう行た、お早さんの身の

上。これからそのお方にも、ツイ逢はしやんして。
あづ　ソレイナア、相惚れ同士、仲のよいのが見たいわい
なア。
闇屋　さう云うて下されますと、どうやらモウ其お人に、
逢うたやうな心がしこ
與五　イヨ、嬉しがり樣め。
闇屋　アレモウ、弄つておくれなされますな。それはさうと、
其お人に逢うたら、眉も落し
竹右　女房風にやらにやアならない。
闇屋　形も高等にせにやなるまいし。
佐渡　簪も朝夕取り繕で
三人　エヽ、羨やましい事ぢやなア。
竹右　時に肝腎の事を聞かなんだ。お早や、お主が云ひ交
してあるといふその人の名は。
闇屋　濃野の御家中、南方十次兵衛さまといふお方。
佐渡　待ちなさい。その南方十次兵衛といふ人は、八幡の
侍ひ塚で腹を切つて、その首が千住で獄門に懸つて居ま
すぞえ。
闇屋　エヽ。
竹右　成る程、先刻丹下さまの話し、上の空で聞いて居た
が、その十次兵衛といふ人は、獄門に懸つたとの噂。
闇屋　エヽ、そりやマア、ほんの事でござんすかいなア。
竹右　ナニ嘘を云ふものか。
闇屋　モシ、お前もほんの事でござんすかいなア。
佐渡　なに僞はりを云ふものかな。
闇屋　そんならアノ
竹右　死んだよ。
闇屋　そんなら、いよ〳〵
佐渡　首になつて居るよ。
闇屋　ヤア〳〵〳〵、昨日までも今までも、行くへを尋ね
て、逢はう〳〵と、樂しみに暮らして居たが、こりやマ
アどうせう、なんとせうぞいな。ハア。
ト狂氣の如く、ウロ〳〵して泣き落す。與五郎吾妻お
常も、あちこち付きまとひ
あづ　モシ、お早さん、そりや尤もでござんすが、其やう
に氣を揉んでは、煩らふわいなア。
與五　それ〳〵、何事も約束事と、諦らめるがよいわいな
う。
つね　こりやマア、氣の毒な事になつたわいなア。
ト皆々氣の毒なる思ひ入れ。

竹右　コレ、お早、どうするものか。と云つたとて、死んだ子の年、マア〳〵、さうして居て、癪でも發れば惡い。コレ、佐渡七、これをおれが內へ送り屆けてくりやれ。

佐渡　合點でごんす。サア、お早さんとやら、わたしと一緒に歩びなさい。

ト關屋、物云はずに、脊負守りの紐にて腹帶して、茫然と思案して居る。此うち向うより藤助出で

藤助　モシ、モシ與五郎さま、親方才兵衞が歸りまして、吾妻さんの手附け、今日までのお約束、埒が明かねば此方のお侍ひ、有右衞門さまの手附け受取る。たつた今返事聞いて來いと、云ひ立てゝの催促でござります。

與五　サア、その手附けに五十兩は、用意して持つて居るが、マア、半金受取つて。

藤助　イエ〳〵、百兩でなくば受取るなと、此お常さんには似ない兄御の氣質。

あづ　與五郎さん、手附けが濟まいで、ひよつと侍ひの手附けが濟めば、わたしや生きては居ぬぞえ。

與五　サア、そりやわしも同じ事。どうぞお常さん、仕樣は

つね　サア、兄さんでも、愛想の盡きた無得心。

與五　こりやマアどうしたら

あづ　よからうぞいな。

ト此うち關屋、いろ〳〵思案して

關屋　ソレ。

ト以前の五十金を投げる。

與五　これは。

關屋　申し、與五郎さん、今日のお世話も他生の緣、手附けの高は百兩とやら、足らぬ五十兩は、わたしが貸して上げませう。

あづ　ヤ、そんならアノお前が

佐渡　わしが持つて來たこの金を

竹右　貸してお主は

關屋　サア、云ひ交した男が、生きて居るといふではなし、どうでこの身は

ト思ひ入れありて

いらぬ金、せめて役に立てるが、あの世の爲。

ト金を與五郎が前へ突きやる。

與五　そんなら貸して下さるか。

竹右　あゝ云ひ出しては梃でもいかねえ。

與五　忝ない。ソレ、爰に五十兩。

ト懐の内がひより出して
これで丁度百兩

あづ　お常さん、キッと渡して下さんせえ。

藤助　わしは有右衞門さまに、この事をお屆け申さねばならぬ。

ト下座へ入る。

つれ　イヤモウ、この金さへあれば、兄さんに無理は云はさぬ。受取はわしがキッと……イヤ、受取と云へば、最前兄御の與次兵衞さんが、お前に上げてくれいと、コレ

ト起證を渡す

與五　こりや、吾妻が起證。

あづ　失うたと思うたに、戻るといひ、手附けも濟んで此やうな

與五　嬉しいか。

あづ　これが嬉しうなうてかいなア。

竹右　二人の喜びに引替へ、お早が身の上。早く内へ行つて、酒でも飲みやれ。

あづ　お早さん、御恩は忘れぬ。

與五　佐渡七どのとやら、頼みましたぞ。

つれ　わたしは手附けの事を、兄樣へ早う。

竹右　おれも一緒に、コレ、お早、もう、奥へ行くぞよ。

ト關屋、いろ〳〵思ひ入れあつて

關屋　モシ、その千住へは、爰からどう行きますぞいな。

佐渡　小塚ッ原へは、山谷を下りて田中を抜け

竹右　左へ附いて眞直ぐに行けば

關屋　お仕置の場所とやらかえ。

竹右　さうサ。

關屋　忝たうござんす。

ト時の鐘、流行り唄にて、ツイと向うへ走り入る。竹右衞門、お常思ひ入れあつて奥へ入る。ト奥より有右衞門、山谷の鐵、藤助・頬かむり、尻からげにて窺ひ出で、與五郎へかゝるを、吾妻支へ

あづ　ヤア、こりや與五郎さまを、どうするのぢや。

有右　手附けが濟んだら遣れかいれ。

鐵　與五郎、われに意趣返し。

藤助　疊んでくれろと頼まれた。

三人　うしやアがれ。

ト揉み合ふ。吾妻「ア、コレ」と支へる。下の方より長吉、頬かむりにて出で、この體を見て、枝折り門の笠木にて、この三人を毆り据ゑる。三人、這々下座へ、

逃げ込む。

與五　ヤア、どなたか知らぬがこの場の難儀。

あづ　救うて下さんして、有り難うござんす。

長吉　禮に及ばぬ、妹、おれだ。

ト頬かむりを取る。

與五　ヤ、長吉どのか。

あづ　兄さん、日頃お前が送る侍ひ面を、叩かしやんしたは。

長吉　氣遣ひせまい。今日からおれも與五郎さん方。

あづ　そりやマアどうも。

長吉　疑がふは尤もだが、最前兄御の與次兵衞さんに逢ひ、頼むとの一言、呑み込んだ證據は、貰つたこの煙管。

ト與次兵衞に貰ひし煙管を見せる。

與五　成る程、こりや兄貴の好み、覺えがある。

あづ　そんならお前も共々に。

長吉　世話をするのも侍ひへは内證。コレ、手附けが濟んだやら腹立ち、與五郎さんに、どんな仇をせまいものでもない。ちつとも早くこの所を

ト連れて行かうとして

イヤ、歩いては不用心、駕籠の衆や〳〵。

ト下座より以前の駕籠屋出で

駕籠　ハイ、お召しなされませ。

長吉　サア〳〵、これへ乘つて、少つとも早く。

與五　そんならおれは歸る程に。

ト駕籠に乘る、

あづ　明日の朝は早う便りを。

長吉　ハテ、おれが送つて、歸りに返事は……駕籠を急いでもらはう。

ト三重、時の鐘にて、與五郎の乘つた駕籠に長吉付き向うへ入る。吾妻、跡見送り居る。奧よりお常出で來り

つね　モシ〳〵、吾妻さん、いま侍ひと勘次北石が話し、與五郎さんを騙して連れ出し、存分にすると、三人連れだつて、土手の方へ行つたわいなア。

あづ　ヤ、そんなら矢ッ張り兄さんも

つれ　侍ひと一つ。與五郎さんが氣遣ひな。

あづ　こりや斯うしては居られぬわいの。

ト帶引締め行かうとする後へ、藤助、山谷の鐵出で

兩人　さうはさせまい。

トかゝる。竹石衞門出で、兩人を兩手にて捕へ

竹右　久し振りで揉んでやらうか……ヨンヤサ。
ト山谷の鐵を見事に投げる。
あづ　これは。
つれ　構はずとござんせ。
あづ　さうぢや。
ト屋臺囃子に時の鐘にて、吾妻、一散に向うへ走り入る。竹右衞門は藤助を引きつける。山谷の鐵、起き上がるところを、お常押へる見得にて、よろしく、
　　　　　　　　　　　　　ひやうし幕
ト幕の内、聖天囃子にてツナギ、直ぐに引返す。
本舞臺、三間の間、高足の土手、なだれに棕櫚の葉にてしたる草生ひ茂り、尤もこの上手廣くしてよき所に前へ出し、後ろ黒塀に白壁の土藏二つ、田町の裏を見せたる道具。爰に北石、勘次、鉢卷き尻からげ、息杖を持ち、駕籠の脇に立ちかゝり、長吉、有右衞門は與五郎を引きつけ居る。屋臺囃子にて幕明く。
與五　すりやこの與五郎を、こなた衆は、騙して爰へ連れて來たのか。
有右　知れた事だ。吾妻に身共が惚れたと云ふは嘘、實は國許の重役、倉岡丈左衞門どのゝお執心で、頼まれて身請けの相談。
北石　得心して行けば仕合せ、藝者仲間の、とも／＼吾妻へ勸めても、お主といふ蟲が有るゆゑ不得心
勘次　内は名代の分限でも、自由にならぬひつてん客、そこでおいらが有右衞門さまに附いて、お主に思ひ切らせるのだ。
長吉　妹が出世を妨げるのみならず、最前うぬが兄の與次兵衞に、眉間を割られた意趣返し、嵩なんで腹を癒るのだ。妹と退いたと吐かしてしまへ。
與五　ムウ、兄貴の煙管を證據に實らしく見せ、人を騙す人でなし。どのやうに云はうと、吾妻と退いたと云ふものか。
有右　何を小癪な。云はねば有右衞門が斯うするワ。
ト握り拳にて打つ。
勘次　それ／＼、退かねば小猿勘次が斯う引拔くワ。
北石　頭は丸いが、氣は角のある石井北石。
有右　話しの種だ。この野郎を存分にしろ。
皆々　合點だ。

ト皆々して與五郎を寄なむところへ、屋體囃子にて向うより吾妻走り出で來り、與五郎を圍ふ。

長吉　わりやア妹

三人　吾妻、どうして。

あづ　どうと云うたらこの樣子、聞く所で聞いて來た。サア、有右衛門さん、その外どなたも男のやうにもない、たつた一人の與五郎さんを大勢して、ほんにお手柄な事でござんすなア。

三人　サ、それは。

あづ　サア、わたしが來るからは、指でもさゝす事は……と云うたところが女子の事、殺すなりと突くなりと、存分にしなさんせ……わたしに疵か附いたなら、お前方も、頼まれてござんした、丈左衛門さんとやらへ濟まらわいなア。

三人　サア、それは。

あづ　知つて居やんす。お前は表向き、内證は丈左衛門といふ田舍のお侍ひ、玉屋で一度出たお客の指し金といふ事は、知つて居るわいなア。

有右　ア、コレ、與五郎こそ存分にすれ、お主にちつとでも、手出しをしては、重役の丈左衛門どのへ。

あづ　サア、濟まぬに依つて切らしやんせ。ぶたしやんせ。

ト有右衛門へ身を摺り附ける。有右衛門、小さくなる。

サア、勘次さん、お前も猿智慧な。與五郎さんをするやうに、わたしを叩かしやんせぬかいな。

ト勘次へ右の通りする。勘次、後向く。

サア、北石さん、お前もかみ新と云はれた時分の力瘤を出して、どうぞしなさんせぬかいな。

ト北石に右の通りする。北石、困る。吾妻思ひ入れあつて

ホヽヽ、女子のわたしが、それ程にも怖いかえ。與五郎さんと一緒に殺さるれば本望ぢや。吉原の藝者にも、少つとは蟲があるわいなア。

三人　こりやア梃でも行かねえワ。

長吉　ようごんす〳〵。この料理方はわしがする程に、お前方はこの長吉に任して、八百善へでも行つて、上かつてござりまし。

勘次　そんなら親分、八百善を叩き起して

北石　有さまと一緒に待つて居る程に

有右　必らず吾妻が得心するやう、長吉ぬかるな。

ト脇差を長吉へ渡す。

北勘　サア、ござりませ。

ト時の鐘にて三人奥へ入る。吾妻思ひ入れあつて、長吉が肩づくしを取る。会ひ方になる。

長吉　こりや何をしやアがる。

あづ　何をするとは兄さん、エヽ、お前はなア。改め云ふではござんせぬが、元お前は、ほんの兄さんぢやござんせんぞえ。わたしが少さい時、両親に死別れ、田舎の伯父さんが引取つて行かしやんすところを誘拐したとやら……江戸に身寄りのなさに、其まゝいつともなしに妹と云うて置いたも、この身を二枚證文の、藝者に売らう為。わたしや他所で聞いて知つて居るぞえ。でも、兄といふ名があればこそ、主と云ひ交しても、これまでの貢、マアたんぼぢやと思はしやんす。それにマア、あのやうな悪者と一つになり、ようも與五郎さんを。

長吉　やかましいわえ。昔はどんな事をしようと、今は妹のうぬ。部屋住みのしみつたれに、くッ附けては置かれない。サア、與五郎めを思ひ切つたと吐かせ。

與五　それ程云ふなら思ひ切らうが、コレ、此やうに起證まで寄越した吾妻、あれが得心する心なれば、その上に返事しよう。

長吉　サア、あまめ、與五郎と切れてしまへ。

あづ　否ぢや〱。

長吉　否だと吐かせば斯うだ。

ト縫ひぐるみにてぶつ。

與五　こりや又あんまり。

長吉　寄りやアがるな。おれが妹をおれが折檻、うぬも邪魔をすれば斯うだワ。

ト與五郎をぶつ。

あづ　こりや與五郎さんまでを。

長吉　ぶつてもよい。おれは小舅、われが為にも兄だぞよ……コレ。

ト與五郎が持つて居る起證を引ッたくり、読む。

「夫婦の契約いたし候ふ」……女房の兄なら、うぬが為にも目上だ。弟め、妹め。

ト両人を打ち据ゑる。

手出しをして、磔刑にかゝりたいか。

あづ　すりや兄を柳に。

與五　男を云ひ立て、手出しもならぬか。

両人　エヽ。

ト口惜しがる。

長吉　その面はなんだ。口惜しくば、サア、これで切れ切れ。

ト與五郎が脇差を抜き、與五郎に持たせ、我が體へ摺り付け

おれを切るとも、縁を切るとも、二つに一つの返事をしやアがれ。

あづ　否ぢや〳〵、どのやうに云うても、起證に書いた神おろし、夫婦の縁は切らぬわいなう。

長吉　エヽ、忌々しい。さう吐かせばこの起證、斯うしてしまふワ。

ト引裂き

斯うして、おのれが縁を切つてくれるワ。

與五　縁が切るれば、他人の長吉、覺えたか。

ト長吉が突きつけた脇差を取つて、グツと突ッ込む。

これにて立廻りあつて、長吉、踈立て

長吉　ヤ、切つたな〳〵。

トしがみつく。立廻りよきキツカケに、誂らへの鳴り物になり、三人、草土手の上にて掴み合ふ模樣の眞の面白きタチ。此うち長吉、與五郎が小指を喰ひ切る。

ト吾妻も手傳ひ、思ひのまゝに仕留める。時の鐘、忍び三重にて、止めを刺し、これより兩人慄へ出し、怖氣立つて腰の立たぬ思ひ入れにて、起證の破れしたを拾ひ、よき程に兩人花道へかゝる。ト奥より土手の上へ與次兵衛、小提灯を灯し、何心なく出で來り、長吉の死骸に爪づき、明りにて見て

與次　こりや人が

與五　エ。

ト驚ろく拍子に、與次兵衛、手提灯を取落す。ト拍子木の頭、チョンと打つ。與次兵衛、こなしあつて

與次　ハア、生酔ださうな。

トこれをキザミにて、よろしく、ひやうし幕。

幕の内、時の鐘、三重にて、與五郎吾妻向うへ入る。

三幕目　千住札の辻の場
仕置き場の場

役名——甚兵衛女房、お陵。入間彥助。質屋、善六。奥女中、關屋 實ハ 甚兵衛妹お早。與兵衛 實ハ 南

方十次兵衞。駕籠の甚兵衞。

本舞臺、三間の間、上の方へ寄せて高札場、下の方葭簀張りの掛け茶屋、後ろ黒幕、茶見世の床几に仕出し三人、善六、質屋にて腰をかけ、銀平、茶屋の亭主にて茶を汲み居る。在郷唄にて幕明く。

銀平　サア／＼、どなたもお茶をお上がりなされませ。

仕一　時に御亭主、今日はこの千住の札の辻に、追放者があると聞いたが、ほんの事でござるか。

銀平　左樣でござります。どんな惡い事をした奴か知りませぬが、以後の見せしめ、この御條目の下で拂はれるとの御沙汰がござります。

仕二　この有り難い世の中で、強請りをしたか、巾着を切つたか。

仕三　但し、親の腹の上でも乘つたか。なんでも惡い奴でござらうて。

善六　イヤ、今日爰で拂はれる奴は、駕籠舁きを商賣にする、甚兵衞といふ者。わしやア懇ろだが、牢へ入る科を仕出すとは、人の心は知れないものサ。

仕三　どんな奴か見て行きたうござるが、日脚も七ツ下がり。

仕二　拂ひ者より腹の用心、晝飯でも喰ひませう。

仕一　サア／＼、ござれ。

ト また在郷唄になり、仕出しは向うへかゝる。此うち花道よりお賤、やつし世話女房にて、前垂れに着物を包み抱へ出で來り、仕出しは摺れ違うて揚げ幕へ入る。

善六　オヽ、こりやお賤どの、何をしてござる、時の間かぬ。

しづ　オヽ、善六さん、そんならモウこちの人は、見えられましたかいな。

善六　イヤ、まだ來はしないが、甚兵衞の來ぬうちに、何かよく極引きをしようと、わしは先刻から來て待つて居るわな。

しづ　サア、わたしも早う來ようと氣は急けど、五十日餘りも牢舍して居る甚兵衞どの、內へ連れて行かぬまでも着る物や何やかや、見苦しうないやうに、この支度やら、お家主への屆けやら、嬉しいと忙しいで、爰へ來るにも道を違へ、ほんに、急げば廻り道して來たわいなア。

善六　そりやア尤もでごんすが、甚兵衞どのが赦免するも、

この善六が庇でござるぞや。
しづ　そりやモウ、云はいでも知れて居りますわいなア。
善六　そればかりではない、五十日餘り內の暮らし。
しづ　それも存じて居りますわいなア。
善六　まだ〳〵、牢見舞ひから町役人の附け屆け。
しづ　キッと忘れは致しませぬわいなア。
善六　サア、そのつゞまるところを相談して置いたが、それはよいかえ。
しづ　ハテ、女子でこそあれ、わたしも甚兵衞が女房殿、御對談申した事を、間違うてよいものでござんすかいなア。
善六　これさへ極めれば……ア丶、しやべつて咽喉が乾く。御亭主、茶を一杯下さい。
銀平　ハイ〳〵、ぬるくして上げます。
　ト善六、茶を呑み
善六　時に御亭主、科人はもう來やうかの。
銀平　さればでござります。お代官様の事、私しどもにも知れませぬ。
善六　程の知れない事。殊に亭主が追放に逢ふを、側で見ても居られまい。ナウ、お賤どの。

しづ　左様でござります。ちつとの間なら、主の心も直る爲、天王様へでもお詣り申して參りませうわいなア。
善六　そんなら、牛に曳かれて善六も一緒に……御亭主、天王様はどつちだの。
銀平　私しも水を一下げ汲みながら、教へて上げませう。
善六　そんならお賤どの。
しづ　御一緒に參りませう。なんぢややら、足も地に付かぬほど嬉しうござります。
善六　あのやうな恐ろしい者でも其やうに。
しづ　ハテ、亭主と思へば、可愛うござりますわいなア。
　ト唄になり、銀平、手桶を提げ先に、善六お賤付いて下座へ下る。ト直ぐに時の大鼓になり、向うより菖蒲革股立の侍ひ二人、棒を持ち、跡より甚兵衞、お仕着を着たる科人にて縛られ出る。この繩を菖蒲革股立の侍ひ扣へ、跡より彦助、股引、ぶツ裂き羽織の侍ひにて、警固して出で來り、直ぐに舞臺へ來て
侍皆　下に居ろう。
甚兵　へエイ。
　トよろしく下に居る。此うち彦助、上へ通り
彦助　コレヤイ、甚兵衞、其方こと、此方領分竹の塚にて、

辻駕籠を渡世に致し、商賣は出精せず、喧嘩博奕を心がけ、無法の胥悪。殊に此方領分草加宿にて金百七十兩、騙り同然の掠め金、殘らず酒食諸勝負に遣ひ捨て、死罪にも仰せ付けらるべきところ、妻賤、右の金子先方へ相濟まし、雙方より度々のお慈悲願ひといひ、この度濤野家のおめでたに付き、命を助け、この所より追放仰せ付けらるゝ。お慈悲有り難う存じ奉れ。

甚兵　有り難うござります。

彥助　向後性根を改め、おのれ眞人間にならぬと、聊かな惡事でも、今度科を犯し入牢なすと、命がないぞ。

甚兵　イヤモウ、血の氣の多い向う見ず、人の意見も空吹く風、喧嘩嵩じてぶツたくり、強請り騙りの詞質、取つても〳〵燒け石に、水責め火責めはなんの事、二言めには大それた、暗い所で御扶持の飯が喰ひたいと、口から出次第無法が嵩じて、これで丁度三度目なりや、今度は赦免はあるまいと、身にしみ〳〵と後悔いたして居りました。慈悲は上から、御追放とは、有り難いやら冥加ないやら、イヤモウ、これに懲りぬ儀はござりませぬ。

ト空泣きする。

彥助　後悔し居つたとはまだしも。以後はキッと愼め。……ソレ、彼奴が縛め解け。

侍皆　畏まつてござります。

ト甚兵衞が繩を解く。

サア、いづれへなりとも立退き居らう。

ト甚兵衞、立たうとして立たれぬ思ひ入れ。

甚兵　ハイ、久しく牢に居りましたせゐか、どうも急に足腰が立ちませぬ。

侍皆　野太い事を、早く立ち居らう。

彥助　コリヤ〳〵、荒氣に致すな……そりやその筈、暫し猶豫は致してくれう。氣を休めて早く立退け。

甚兵　有り難うござります。

彥助　身は當所の庄屋へ、外御用に立寄れば、其方ども、直さま役所へ。

侍皆　畏まつてござります。

彥助　コリヤ甚兵衞、必らず領分へ足踏みは叶はぬぞ。

ト合ひ方、時の鐘にて、彥助は下座へ、侍ひは向うへ入る。甚兵衞後見送り、立ち上がつて舌を出し

甚兵　見狀を着る時、弱い音を出すは科人の付け目。臑腰立たぬと云つたら、ほんの事だと思やアがつて、荒氣にするなとは大笑ひだ。[illegible]で拵らへた體ではあるまい

し、こんな事で弱つてお堪りがあるものか。大べら坊め
……時に、赦免して出は出たが、ちやんころ無しでも詰
まらない。これから千住の權が所へ、いたぶりに行かう
か……但しは騙りを思ひ付かうか。なんでも金の蔓を工
風せねばならない。
ト手を組み思案。この時後へ彦助、取つて返し
彦助　甚兵衞、おのれ、まだ心が直らぬな。
甚兵　ヤ。
彦助　斯程の糺明にも、魂ひを入れ替へぬからは。
甚兵　また繩かけて曳かつしやるか。
彦助　イヽヤ、目をかけて贔屓する。
甚兵　どうしましたと又。
彦助　サ、身共は入間彦助というて、鴻野の重役、倉岡丈
左衞門どのと同腹中の者。即ち丈左衞門どのの密事。
甚兵　モシ。
ト合ひ方になり、甚兵衞あたりを見廻し、摺り寄つて
して、その仔細は。
彦助　兼ねて其方も存じ居ると承り及ぶ、丈左衞門どの、
お家を窺ふ手始めに、南方十次兵衞めが預かりの胡蝶の
香合、先達て盗み取り、まんまと科を十次兵衞に塗り付
け、八幡侍ひ塚に於て自滅させ、首は即ち、昨日領地千
住に於て、獄門に掛けさせ、事は濟めども、猶詮議きび
しい右の香合。密かに其方に預け置けよと、今日の赦免
も達ての執成し。
甚兵　成る程、その丈左衞門さまに、前かた若黨を勤め居
つた私し、その縁を以て、度々御用も勤めたこの甚兵衞
さほど主從の事を思はつしやるなら、騙りの金百七十兩
償はいでも、御赦免の執成しはありさうなもの。
彦助　ハテ、愚かな事を。例へ金を償はうが、云はゞ大金
命助かつたは、全く丈左衞門どのゝ執成し。
甚兵　成る程、今々思へば、わしもどういふ事で、赦免し
たかと思つて居ました。
彦助　命の恩を重いと思はゞ
甚兵　その胡蝶の香合とやらを
彦助　暫しのうち、大切に預かつて居やれサ。
ト懐より香合の箱を出す。甚兵衞、取つて明けて見て
甚兵　すりや、これが大切の……鴻野の重寶、胡蝶の香合。
ト思ひ入れ。
しつかりと預かつた。
彦助　必らず入手に。

甚兵　ハテ、馬鹿念押さずと、落ちついてござりませ。
彦助　我れ〳〵始め丈左衛門どのゝ望み叶はゞ
甚兵　わしも駕籠舁きをやめて
彦助　息杖も槍に持へるワ。
甚兵　こいつは野暮でない相談たわえ。
ト香合の箱を懐へ入れる。合ひ方になり、下座よりお
賤善六出で來り
しづ　ヤア、こちの人、甚兵衛どのかいなア。
甚兵　オヽ、わりやア女房……質屋の善六どん。
しづ　ようまめで居て下さんした。逢ひたかつた〳〵わい
なア。
ト取縋り、嬉し泣きに泣く。
甚兵　エヽ、べら坊め、外聞が惡いワ。
ト突きのける。
しづ　ぢやというて、これが逢ひたうあるまいか。なんぼ
邪慳なお前でも、夫ぢやと思や、牢屋といふ所は、きつ
う怖い所ぢやと、戀しくあるまいか、案じまいか。
甚兵　やかましいわえ。世迷ひ言なら内へ行つて吠えやア
がれ。
彦助　イヤ〳〵、女房の身では尤も。堪能する程聞いてや
りやれサ。
しづ　申し、こちの人、あなたは、どこのお侍ひ様ぢやえ。
甚兵　サア、あなたは今日おれを追放の
彦助　入間彦助といふ鴻野の役人。
しづ　ムウ、そのお役人様と、科人のこちの人と、懇ろな
今の挨拶。
彦助　ヤア。
甚兵　イヤナニ、懇ろな事があるものか。悪事を犯したこ
の甚兵衛、御領分に叶はぬ、爰に又何か嗅ぎ出して御意
見……サア、行け、早く歸れと、仰せ付けられて居ると
ころだ。
ト彦助に呑み込ます。
彦助　成る程〳〵、爰に長居は叶はぬ。身共も立歸る程に、
必らず今の儀を。
甚兵　サア、いま仰せ渡された儀は、キッと相守りまする。
彦助　然らば甚兵衛。
甚兵　お役人様。
彦助　必らず領分へ立歸るな。
ト唄になり、彦助向うへ入る。
善六　さて甚兵衛どの、無事に赦免してめでたうござる。

喜びやら何やかに。
甚兵　善六どん、面目次第もない。五十日ぶりで娑婆の人に逢ひます。
しづ　エヽ、縁起の悪い。死んだ者かなんぞのやうに。サア〳〵、その着物脱いで、これと早う着替へさんせ。
ト前垂れより着物、鼻紙、莨入れを出し
サア〳〵、鼻紙も莨入れも持つて來たわいなア。
甚兵　こりや御臺所お出かし。なんだ、着物は結城木綿、鼻紙は半紙の四つ折、莨入れは、せいしつのあぶみ。
しづ　ほんに、それで昨夜から、忙がしい目をしたわいなア。
善六　イヤモウ、鬼の女房に鬼神ではない、佛と云はうか神と云はうか、結構なお内儀、必らず仇に思はつしやるな。
甚兵　とんと合點がゆかない。おれが内濟の尻金が百七十兩、牢見舞ひも三日にあげず、今日の支度や何やかや、〆めて見れば餘ツぽどの金高、この金の出所は。
しづ　サア、その金の事も、案じさんすは尤もぢやが、マアマア、めでたい、無事で赦免されしやんした祝ひに、ナ、善六さん。

善六　それ〳〵、ちよつと杯をさゝうと、あそこへ買つて來た、こなからと中がさ。
ト袂より貧乏德利と中がさを出す。
甚兵　こりやアよく氣が付いた。牢内へ行つてから據ろなく禁酒。ドレ、久し振りで、やツつけばゝアに茶ぢやアない、酒にせう。
ト善六つぐ。甚兵衛飲んで、お賤思ひ入れにてこの酒飲むうち
善六　さらばお肴を進上いたさう。
ト懐より證文を出して甚兵衛に遣る。甚兵衛取つて開き
甚兵　「遊女奉公人請狀の事……一、この賤と申す女、三年季二百兩に相定め、遊女奉公に召抱へ候ふところ實正なり」……ヤ、そんならわりやア、身を賣る氣か。
しづ　こちの人、堪忍して下さんせ。これが別れでござんすわいなア。
甚兵　べら坊面め。駕籠舁きこそすれ、おれも甚兵衛さまだ。女房賣つて濟まうと思ふか。なぜこんな事をしやアがつた。
しづ　これもみんな、お前の心がらぢやわいなア。

ト膝合を取る。合ひ方。

コレ、この人、これが否さに、不断わたしが云はぬ事か。知らぬ奥殿より知つた小袖、商ひとやら、細い儲けも、正道に精出して下さんせ、夫婦共挊ぎにしたならば、過ぎられぬ事はあるまい程に、悪氣をやめて下さんせと、意見云ふのも糠に釘、またしも慰み悪戯、揚句の果に。

ト思ひ入れ。

此やうに牢屋へ入る科を仕出かし、償ひ金何やかや、力づくにも、器量にも、つぱめたところが二百兩、なんのわたしが手仕事の、女髪結ひ位して、大枚が調ひませうか。飽かぬ別れも不埒ゆゑと、心を入れ替へて下さんせえ、……苦界と云へど現在の、お前の命代りと思や、わたしや笑うて、勤めに行きますわいなア。

ト縋り泣く。

甚兵　べら坊め、どんな事があらうとも、われをふんばりに賣つて濟むものかえ。

善六　イヤ、甚兵衛どの、お詞のうちだが、知つての通りわしやア質屋の手代、ぜげん中次ではあるまいし、こんな世話をする筈もござらぬが、心安くするお賤どの、さて斯う〳〵いふ金の要る道、どうしたらよからうと、おつけて相談されたが因果の始まり。そこで思案を付けて、心安い判人に約束し、こなたが出てさへ來れば直ぐにの約束で、親方の金を二百兩、證文書いて間に合せた。女房の勤めがさせられぬと云へば、こなたが、この二百兩濟まして出るか。

甚兵　サ、それは。

善六　命代りの恩金、甚兵衛どのたけに踏まれまいが。

甚兵　サア。

善六　サア〳〵〳〵、この金の筋道は。

甚兵　ハテ、やかましい事はない。質を遣らう。

善六　エ。

甚兵　おれが大事の預かり物だが、寶は身のさし合せ。ソレ、二百兩の抵當。

ト以前の香合の箱を出して渡す。

善六　これを二百兩の質とは。

甚兵　それこそ下總鴻野の寶、胡蝶の香合。

ト善六明けて見て

善六　成る程、聞き及んで居るこの香合、如何にも二百兩の質に取らうが、道具質は十日ぎり。

しづ　モシ、何ぢややら譯も知らぬが、また咎めの來るものぢやないかえ。

甚兵　ハテ、まだお仕着せも脫がないうち、尻の來る事をするものか。

しづ　ぢやと云うて、最前の侍ひの素振りといひ、勤めせぬのは嬉しいけれど。

甚兵　ハテ、底の底まで念を押す女だ。

しづ　して、マア十日がうちに。

甚兵　十日がうちには、また面白い風も吹くわえ。

善六　この香合が二百兩の質と極れば、こんな物には取交ぜの一札が要る。ちよつと爰で

　ト矢立にて鼻紙へ二枚書き

　こなさん方からも、間違ひないといふ一札。又わしが方からは質物を、質に取つたといふ。

　ト判を押して甚兵衞に見せる。甚兵衞取つて

甚兵　「一つ金二百兩、右は胡蝶の香合質物に預かり置き候ふところ實正なり、十日切りに請戾させ候ふ、對談に御座候ふ、甚兵衞どのへ、質や手代善六……」成る程、こりやアよいが、わしが方からやる一札には、いま印形が。

善六　ないも承知、跡から捺して寄越さつしやい。

甚兵　そんたらさうよ。嚊ア、預かつて置きや。

善六　時に、そんならわしは、もう歸りませう。

しづ　これは何かと、大きにお世話樣でござんした。

善六　甚兵衞どの、十日限りを忘れさつしやるな。

　ト合ひ方、時の鐘にて、善六、香合の箱を懷へ入れ、向うへ入る。あと合ひ方。

甚兵　ハテ、よく馬鹿念を押す野郎めだ。

しづ　其やうに云はしやんすな。あの人が世話したりやこそ金も出來たといふもの。

甚兵　べら坊め、それも利足や分一を取る慾づらだワ。

しづ　それはさうと、お前も歸らしやんせぬかいなア。

甚兵　イヤモウ、ちくらになつて來たよこれ、歸つた面を友達に見られるも氣障だ。とつぷり暮れてから。

しづ　そんなら着物を着替へさんせいなア。

甚兵　どうか夕立が來さうだ。仕立て卸しを濡らさうよりは、お仕着で歸るべい。

しづ　エヽ、ほんに人の苦勞を無にして……さうしてマア、暮れてからでは髮結床もしまはうぞえ。

甚兵　仕舞つたら明日の事よ。

しづ　ぢやというて、ちつとのうちもむさくろしい。

甚兵　むさくつても穢なくつても、濡髮のお賤と名を取つた、お主といふ美しい女房を持つて居るわえ。

ト引寄せる。

しづ　エヽモウ面白さうに、措かしやんせいなア。

ト振り切り、此方へ寄る途端大雷。お賤、慴りして

オヽ怖し。

ト甚兵衛に寄り添ふ。

甚兵　ハテ、野暮でない雷だ。

トお賤を引寄せる。時の鐘のだら、雷の音にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、上の方へ寄せて石の地藏、正面獄門臺、切り首、側に誂らへの捨て札、地藏の前に花立、水向け茶碗などあり、うしろ黑幕、薄原、よき所に据ゑ物の松。上の方、流れ灌頂、誂らへの通り、爰に關屋、茶屋場の形、手拭にて顏を隱し、立ちかゝり居るを、野伏り三人、關屋が小腕を取つて居る見得。右の鳴り物にて道具とまる。

野一　サアヽヽ、みんな、この女を、薄の中へ攫き込め。

二人　合點だ。

ト引立てるを

關屋　マアヽヽ、待つて下され。こたさん方に見付けられたら、せう事がない。如何にもわしや、あの首を盜みに來た者。

三人　そりやこそな。

ト首に向ひ

關屋　モシ、十次兵衛さま、淺ましいお姿になりなさんしたなア。わたしや云ひ交した早でござんす……この場の樣子を聞くよりも、恐ろしいやら口惜しいやら、おのれやれ、女子でこそあれ夫の死恥、いつまで人に曝さうぞ。人知れず取隱し、如何なる寺へも葬むらんと、此やうな恐ろしい氣苦勞をしますわいなア。

ト三人に心遣ひして泣く。

野一　聞けば聞く程、氣の惡い話しだ。

野二　大聲立てゝもこの繩手。

野三　誰れも外に來る者はない。

野一　夜の明けるまでにおッ放せ。

皆々　それがいゝヽヽ。

ト關屋にかゝる。關屋、突き退ける。よろしく立廻り。此うち時の鐘、合ひ方にて、向うより南與兵衛、半合

羽、股引、脚絆、一本差しにて、紙合羽を肩へかけ、三度笠をかざし、ツカ／＼と出で來り、花道にて獄門臺を見て思ひ入れあつて、舞臺へ來かゝり、この體を見て與兵衞、三人を取つて投げる。三人起き上がつて與兵衞にかゝる。與兵衞、有り合ふ割木を取つて打ち散らす。三人これにて、バラ／＼と下座へ逃げて入る。關屋、息切れして茫然として居る。

與兵　ヤ、コレ、見れば女中さうなが、今のは慥かに乞食めら。こりや、物取りか理不盡か。コレ、お女中。

ト　あたり見廻し、地藏の前の水向け茶碗に溜りし水を飲ませ

コレ、女中、氣を慥かに持たつしやい。

ト　關屋、人心地付きし思ひ入れ。

關屋　ハイ／＼、どなたか存じませぬが、今の難儀をお救ひ下さりまして、有り難うござります。

與兵　なにサ、わしは往來の旅人、來かゝる矢先に今の體裁、高が乞食めら、追ひ散らして進ぜたが

ト　關屋をよく見て

併し、合點のゆかぬは夜更けて一人、この繩手、女の身で、どうして爰へござつたのぢや。

關屋　サア、それはな。

與兵　道に迷うてか、但しは駈落ち。連れにはぐれた、と云ふやうな事で爰へ。

關屋　成る程、仰しやる通り、道に迷ひまして。

與兵　して、町所はどこでござる。

關屋　江戸の淺草……並木でなし、藏前でなし。

與兵　淺草と云うても廣い事。ア、コレ、送つて進ぜたけれど、わしもちつと叶はぬ用で奧筋へ急ぎの旅。道も違ふといひ、氣の毒ながら、一人早うござるがよい。サアサア、また今のやうな惡者に出逢はぬうち。

ト　首へ目を付け、關屋をせり立てる。

關屋　サア、參りは參りますが、少つとわたしも。

ト　首を見て思ひ入れ。

與兵　どうさつしやれた。

關屋　今の難儀に足を痛めましたに依つて

與兵　ムウ、疵所とあらば藥を進ぜう。

ト　出しさうにするを

關屋　ア、モシ、藥はわたしも所持して居りまする。お急ぎならば、あなたマア早う、私しにはお構ひなく、お出でなされませいな。

與兵　ア、、參りは參らうが……ア、コレ女儀、其許が歸らつしやるを、見屆ければ不安心。

關屋　御深切が歸つて……イヤ、それ程に仰しやる事なら私しもソロ／＼參ります程に、あなたもお出でなされませいなア。

與兵　其許も行かつしやるなら、拙者も參るでござらう。

關屋　左様なればお旅人様。

與兵　お女中。

關屋　いかいお世話様。

與兵　お別れ申す。

ト合ひ方になり、與兵衛は東の歩み、關屋は花道へかかり、雙方思ひ入れあつて、取つて返し、拔け道して獄門臺へ兩方一緒にかゝり、行き當り、吃りして

ヤア、こなたは今の女中。

關屋　お旅人様。

與兵　まだ行かつしやらぬか。

關屋　あなたも、まだお出でなされませぬか。

ト慄へる。

與兵　サア、身共は、こなたの事が案じられて、ツイ爰へ。

關屋　お戻りなされたは。

與兵　サ、袖振り合ふも

關屋　他生の縁と

與兵　女中へ深切。

關屋　ハテナウ……御深切とあるなら、あなたにちつと折入つて、お願ひ申したい儀がござりますが、お聞き屆け下さりませうか。

與兵　そりやハヤ、身に叶うた事なら何なりと。早く云はつしやれ／＼。

關屋　サ、そのお願ひと申しますは。

與兵　願ひとは。

關屋　爰にかゝつてあるあの首を

與兵　ヤ。

關屋　どうぞ盜んで下さりませ。

與兵　なんと。

關屋　サ、斯うばかり申しては、御合點が參りますまい。私しはあの首に由緣の者、如何に御成敗じやと云うて、あのやうに曝され、死恥が悲しさ。夜半に紛れ。盜み取らうと參りましたが、どういふ事にやあなたも、爰に長うお出でなさるゝうち、見咎められては水の泡と、是非なう様子を



天保五年七月森田座上演　澤村訥升の



十次兵衛　　六世岩井半四郎の關屋

與兵　ムウ、この首に由緣とは……してマア、こなたは、どういふ緣ぢや。

關屋　サア、わたしやあの首の、女房でござります。

與兵　ヤ。

關屋　南方十次兵衞と記しあるあの首は、わたしが夫。

與兵　コレ、合點が行かぬ、その十次兵衞といふは卽ち

　ト云はうとして思ひ入れ。

關屋　エ。

與兵　ハテ、こなたが、その十次兵衞の女房でござるよなア。

關屋　サア、それぢやに依つて。

與兵　取隱したいといふも尤も、さりながら、女の身でそれ程に、思ふは慥かに。

關屋　云ひ號けと云ふでもなし、祝言はせず、お顏も知らず、恥かしながら、フトした御緣。

與兵　ついした轉び合ひといふやうな事か。

關屋　思ひ出せば去年の秋、友達衆に誘はれて

與兵　鹿島へでも參らしやつたか。

關屋　妹背を願ふ常陸帶、浮き立つ旅の木嵐に

與兵　頃しも月の入江潟、闇はあやなき夜船の內。

關屋　乘合ひ同志の手が觸り、蘆間の風も戀風に……變る姿の

　ト獄門の首へ思ひ入れ。

與兵　死顏も、思へば果敢ない。

　トこれも首へ思ひ入れ。

關屋　サア、夢に夢見る人の身の

與兵　水の流れと定めなき

關屋　戀は無常の

與兵　初めの噓も

關屋　後の誠と

與兵　その馴染めが

關屋　二世の約束

與兵　一生の

關屋　固めも

與兵　かたい

關屋　我が夫。

與兵　女房。

關屋　舟玉かけて

與兵　語らひし

關屋　その時の

與兵　女子は
關屋　男といふは
與兵　南方十次兵衞といふ、あの獄門の首ではないか。
關屋　サア……その時の荒ましを、とうに御存じのお前は。
與兵　イヤ、今の話しも、ありや身共が當て推ツ。
關屋　ハテナア。
與兵　云ふに云はれぬこの場の仕儀……只一言の云ひ交せを、死法の跡までよく守り、首を葬りたいとあらば、如何にも盜み道はすまいものでもないが、なんと女中、こなた、身が女房にならぬか。
關屋　エ。
與兵　サア、云はゞ盜賊盜人の荷擔人、他人では致し惜い。
關屋　成る程、御尤もではござりますけれど、望み叶へた上からは、千筋と撫でし黒髪を、剃つてわたしは尼法師と。
與兵　ハテ、愚癡な。尼になれば別れた夫が浮ぶといふ、キツとした事もあるまい。
關屋　おやと云うて。
與兵　サア、身共も氣が急く。あの首級、あゝして置けば取捨てられ、鳶や烏の餌食となるが、何とも不便。

關屋　それおやに依つて
與兵　女房になるか。
關屋　サア。
與兵　否なら此方もこの事を、明らさまに訴人せうか。
關屋　ア、モシ、それでは。
與兵　これが誠に首と見替へ。女中、返事はどうでござるな。
關屋　是非に及ばぬ。そんならお前の
與兵　詞に任すか。
關屋　サア、それも年切つて三年がうち。
與兵　ムウ、三年切りとは夫の年忌。
關屋　それが過ぎたら三下り半。
與兵　半座を急ぐ法の道、年切りの女房、承知いたした。
關屋　して、お前の所、名はなんと。
與兵　サア、名も云はれねばそれぞとも、行くへ定めぬ浪人同然。
關屋　わたしも丁度その通り。
與兵　ハテ、似たもの夫婦。
關屋　してマアこの末、何を當てに。
與兵　ハテ、互ひの心はこの石ごさ。

ト合ひ方になり、最前の水向け茶碗へ、流れの水を酌んで、關屋の前へ置く。

關屋 これは。

與兵 茶碗へ斯う水を汲んだところは、取りも直さず月の形、縁と月日を待つ心で

關屋 水杯も祝言も

與兵 程は雲井に隔つとも

關屋 空行く月の

與兵 巡り逢ふまで。

關屋 割符の驗。

ト此うち兩人、茶碗の水を互ひに飲み、與兵衛、茶碗を二つに打ち割り、片々を關屋に遣る。

與兵 割れた茶碗も

關屋 繼ぎ合はせ

與兵 夫婦も固き

關屋 縁に任せて

與兵 女中。

關屋 お旅人樣。

與兵 必らず詞を

兩人 番ひましたぞ。

ト四ツの鐘鳴る。

關屋 ありや夜中。

與兵 更けぬうち……ソレ。

ト合ひ方、時の鐘にて、與兵衛探り當り、切り首を取りにかゝる。關屋あたりを窺ふうち、與兵衛、首を持ち來り、思ひ入れあつて

出離生死頓生菩提南無阿彌陀佛。アヽ、持つべきものは。

關屋 エヽ。

與兵 女房……夫の首級ぢや、少しも早う。

ト與兵衛關屋に囁く。關屋、探り廻り、下の方流れ灌頂を引切り、與兵衛の首をこれに包む。

關屋 忝ない。

與兵 コレ。

ト押へる、忍び三重にて、上の方の薄原を押し分け、甚兵衛、以前の形にて、この體を見て居て、よき程に出る。此うち與兵衛、關屋に早く行けと思ひ入れ。關屋、首を持ち行かうとするを、甚兵衛引留める。與兵衛、甚兵衛が探り見て恟り。甚兵衛は兩人の顔見たき思ひ入れ。與兵衛、白刃を拔きかける。甚兵衛、兩手にて頭を押へる。兩人思ひ入れ。甚兵衛、尻餅をつく

これを木の頭、三人烈しき立廻りよろしく

ひやうし　幕

跡シヤギリ

四　幕　目

鳥越山崎屋の場

役名――山崎屋與次兵衛。山崎屋浄閑。若黨、丹平。小揚げ、百介。同、九郎八。川瀧屋市兵衛。丁稚、善太。肴屋、ぶえんの七。藤屋次兵衛。鬼あこや孫六。米屋仁右衛門。講中、妙貞尼。山崎屋番頭、權九郎。藝者、みやこ實ハ甚兵衛女房お賤。下駄の市實ハ三原傳藏。山崎屋與五郎。次部右門娘、お照。橋本次部右衛門。

本舞臺、三間の間、上の方障子屋體、正面戸棚のれん、下手に土藏引戸の門口、出入りの番屋、すべて鳥越米問屋のかゝり、權九郎、番頭にて帳合ひして居る。善太、丁稚にして莨盆の掃除して居る。百介九郎八、小揚げの形にて土藏へ俵を運び居る。次兵衛、藝者の親方にて下の方に扣へ、浄閑、魚の値をして居る。ぶえんの七、魚荷を下ろし居る。この見得、チンツヽにて幕明く。ト捨ぜりふにて百介、九郎八、米を藏へ運ぶ。

七　モシ〳〵、旦那、その松魚は四百五十では、ぢぎりが切れますわいの。

浄閑　これはしたり、お主もマア滅相な。ぢぎりの切れる商賣を、商人の身でなぜするのぢや。

七　ハテ、そこが商賣でござりまする。

浄閑　損をするも商賣なら、とてもの事に、もう五十損して四百にしやれ。

七　イヤ、呆れた旦那だ。モシ、拵らへませうかえ。

浄閑　イヤ〳〵、その代り手は頼まぬ。おれがせにや魚に無駄が出る。先づ片身を刺身にして、片身は鹽にして、あらは煮附け、頭は叩いて鹽辛ぢや。

七　モシ〳〵、頭迄あがりますか。

浄閑　松魚の頭が喰はれいでかいの。この男は商人のやうにもない。

百介　コレ〳〵、旦那は松魚の頭どころではない。毎日出入りのおいらには、水瓜の皮の香の物を食はせるワ。

九郎　汁と云つては鏡汁、髮に白髮の何本あるといふ事が
百介　あり〳〵と映る。
善太　コレ、魚屋さん、額でも拔かば、此方の內へ來て、おつけを鏡に拔きなさい。イヤ、奇妙だよ。
淨閑　默り居らう。また內の噂しをるか。コレ、權九郎、あの餓鬼め、今日一日喰はすな。われに云ひつけたぞ。
權九　ハイ〳〵、御料簡なされませ。善太めは餓鬼とも思ふが、コレ〳〵、こなた衆まで同じやうに、お出入りを止められぬ用心さつしやいよ。
百九　それでもお前、あんまり吝い內だから。
權九　これはしたり、その噂は云はずとも知れて居るわな。
次兵　モシ〳〵、權九郎さまえ。若旦那の與五郎さまは、まだお歸りではござりませぬかな。
權九　サ、昨日から出られて、まだお歸りはないのよ。
淨閑　コレ〳〵、權九郎、ありやどこの人ぢや。
權九　ヘイ、あの男は。
　トうぢ〳〵する。
淨閑　コレサ權九郎、なんの用で見世へ來て居らるゝのぢや。間には茶の一杯も飲ませにやならぬ。これも勘定の內、身代へかゝるわい。モシ、こなさん、聞けば與五郎を尋ねさんすが、何の用ぢや。儲け口なら、わしに云はんせ〳〵。
次兵　イエ〳〵、別して左樣な儀でもござりませぬが、私しは吉原の藤屋と申す茶屋でござりまするが、先達て內の抱への吾妻と申す遊者を、爰の與五郎さまから、身請け金のうち百兩受取り、後金二百兩參りますれば、早速吾妻をお渡し申しまするが、今以て御沙汰がないゆゑ、それゆゑ參つたのでござりまする。
淨閑　なんぢや、吾妻とやらを身請けするとて、三百兩に極めて、後金二百兩を取りにござつたのか。
次兵　左樣でござります。
淨閑　默らつしやい。
次兵　ハイ〳〵。
淨閑　この身代は、あの與五郎に讓りくれいと、死なれた旦那の遺言ゆゑ、おれが實の子の與次兵衞にも家を遣らず、養子嫁まで貰うて置けど、不埒者の與五郎。その上實子の與次兵衞も、親の氣に違うて家出して居たゆゑに、隱居のわしが附け傳して、元へ歸つてお屋敷の勤め。講中の衆が挨拶で、やう〳〵內へ呼び戻した悴め。實の子でさへ容赦はせぬに、家附きなれど他人同然の與五郎、

なんで一分も出すものぢや。さう心得てござれ。

次兵　ヘイ〳〵、左樣なら、いづれとも仕りませうが、それでは手附けの百兩が流れに相成りまするか。
ト淨閑これを聞き

淨閑　コレ〳〵、待たつしやい〳〵。百兩の手附けが流れる。アノ百兩が
ト思ひ入れあつて

流れるなら相談ものぢや。その手附けを取込んで、後金遣つて、わしが身請けせう。

次兵　エヽ、アノお前樣が

權九　吾妻の身請けをなされるか。

淨閑　コレ權九郎、聞けば吾妻には、あの倉岡どのが惚れてござるといふ噂。

權九　成る程左やう。大金出して身請けをなされ、丈左衛門さまへ遣はしたら、まだこの上に、あなたのお願ひ。

淨閑　サ、そこがあるゆゑ、繫いで置くは

權九　與五郎さまの手附けの百兩、散らさぬ勘定。

次兵　イヤモウ、外のお內へ遣るではなし。お內へならば、その證文で遣はしませう。

淨閑　そんなら、何かはゆるりと相談。

權九　小揚げの肴を貢にさんせ、

九郎　一膳やらうか。

七　ソレ百姓、松魚は奥へ置きまするぞえ。

淨閑　錢は晦日に取りにごんせ。コレ善太、鉢を持つて來い。

善太　アイ〳〵。

次兵　左樣なら御勝手で、ドリヤ、お待ち申しませう。
ト唄になり、次兵衛、百介、九郎八、七、暖簾口へ入る。善太、大鉢を持つて來る。淨閑、松魚を拵らへる。この唄なかり、向うより仁右衛門、町人、門徒肩衣を着たる形。市兵衛、孫六、町人にて、門徒肩衣を着て珠數を爪繰り出る。後より與次兵衛、羽織、一本差し。供の男、袱紗包みを持ち、お寄り講の歸り。妙貞、後家の拵らへ、黑絽のお角隱しをかむり、珠數を爪繰り出で來り、花道にて

與次　これはどなたも、御苦勞でござりました。

仁右　イヤモウ、世話いたした甲斐がござつて、めでたうござります。

妙貞　今日のお寄りに、與次兵衛さまのお顏が出たので、講中も安堵いたしましたわいの。

市兵　この後とも與次兵衞どの、親御に氣を揉ませぬやう氣を附けさつしやりませ。

孫六　御講中のお執成し、何かと忝なうござります。

與次　親仁どのも待ち兼ねてゞござらう。サア、參りませう。

仁右　左樣ならば。

與次　ト唄の切れにて皆々本舞臺へ來る。

權九　モシ旦那え。御講中がお出でゞござります。

淨閑　これは〳〵仁右衞門どの、イヤ、妙貞どのも、どなたも、マア〳〵、あちらへ〳〵。

ト手を拭きながら出迎へる。

皆々　お許しなされませ。

ト内へ入る。

權九　これはどなたも、ようお出でなされました。與次兵衞さま、お歸りなされましたか。

與次　オヽ、權九郎か。段々と仁右衞門さまのお世話を以て、宿老どのにもお目にかゝり、山崎屋跡式相違なく讓り請け、家相續いたすやうにと、町内の連印相濟み、禮云うて歸り申したて。

權九　それはおめでたうござりまする

仁右　これと申すも與次兵衞どのが、一體町内の衆に惡う思はれぬゆゑ、先祖與次兵衞どのゝ讓り狀と、相違いたしてあれど、そこを兎やかう申す者もござらぬ。して二男の與五郎どのは、どれへぞ行かれましたかな。

淨閑　イヤモウ、あの與五郎には困り果てまする。云はゞ死なれたる親旦那の實子、わしはその節番頭上がり、暖簾貰うて小見世を出し、女房持つて、それに出來たはこの與次兵衞。その時の名は三之助。產後に嬶めは病死して、親子二人で暮らすうち、爰のお内の御新造も御病死。その時乳吞みのあの與五郎、殊に旦那は御病身、枕の許へわしを招ぎ、どうで今度は助かるまい、おれが死んだら、われが身代片付けて、この家の跡を踏まへ、山崎屋を立てゝくれい。代々鴻野の屋敷へお出入り、有り金は十萬兩、他人のわれに遣る程に、悴の與五郎我が子にして、其方が悴は兄に立て、主家來ぢやとて、分け隔ては決して無用。併し末々この家を與五郎めに、遣つてくれと賴みはあれど、この頃のあの不身持ち。

與次　サ、その御先祖の御遺言を、小耳に覺えし私しゆゑ、兄とは云へど末々は、弟に山崎の家繼がせんと思ふうち、親仁樣の氣に違ひ、暫く内を遠ざかり罷り在るうち、弟が不身持ち。屋敷の勤め、彼れこれに、御隱居なさ

れた浄閑さま、附け髮なされて以前の與次兵衞、男形にて屋敷の手前、御苦勞なさるが氣の毒さ、仁右衞門さまのお世話にて立歸つた私し、御町内の披露目も濟めば、直ぐに今日只今より、家の跡目は卽ち私し、弟が事はまた追つて、惡いやうにも致しますまい。

仁右　左やう〳〵、何を云ふのも家の爲め、あの與五郎どのも、樂者狂ひの惡心止んだなら、ハテ、身代は二つに分け、出見世出しても世間は濟みます。殊に有り金は十萬兩。嫁御も貰うてあるといひ、この上の事はござらぬて。

浄閑　サ、その貰うて置いた嫁の照は、鴻野の家中、橋本次部右衞門といふお方の娘、これも實の娘でもないとの事。

權九　その次部衞さまも、今ではお屋敷をお暇、浪人なされて、橋場の邊にお出での樣子。マア何事もさて措きまして、仁右衞門御宿老御町内にも、御總領に跡式をお讓りなさるを、御承知でござりまするかな。

妙貞　ハテ、そりやモウ、女でこそあれ、この妙貞が證人でござんす。ナウ、皆さん、さうぢやござんせぬか。

市兵　左やう〳〵、御子息與次兵衞さまに山崎屋を讓られても、町內に一人でも不承知な者はござらぬて。

孫六　斯う物が極まつたからは、早う跡式の讓り引、與次兵衞どのにも、早う落ちつかせるがようござるわいの。

浄閑　左樣ござらば仁右衞門どの、この親仁が身代を、與次兵衞に讓るといふ慥かな證據は、印形より書き物より、コレ、これが慥かな證據でござるわいの。

ト附け髷、附け髮を取り、坊主頭になり

ソレ、仁右衞門どの、この髮お前に渡しまするぞ。

ト附け髮を仁右衞門へ投げてやる。

仁右　イヤモウ、これでわしも安堵しました。コレ、コレ與次兵衞どの、親仁どのは、この通り。今日からは有り金の十萬兩、家屋敷も大切に、必らず親御の恩を忘れさつしやるな。

ト附け髮を渡す。與次兵衞取つて

與次　何から何まであなた方のお世話。大身代の山崎屋、私しが踏まへまする上からは、萬事に心を附けまして、家の榮えが先祖へ孝道。いづれも樣、親仁樣、有り難う存じまする。

ト附け髮を戴き

この上ながら與五郎が身の納まり。別家なりとも。

仁右　ハテ、何事も又わしが、好い思案がござるて。

妙貞　イヤモウ、これで安堵しました。仁右衛門さんもお前方も、跡へ殘つて讓り引の立合ひ。わたしや女の事。居たというて役には立たぬ。もうお暇しませうわいなア。
與次　ハテマア、わざと御酒なりと。
妙貞　イエ／＼、わたしや大の下戸、お杯ならお預けぢや。追つて何なりとねだりませう。
淨閑　それ／＼、人に物振舞ふは、頭數の少ないが勝手ぢやて。
市孫　ハテ、金持ちはあの通りぢや。
淨閑　然らば仁右衛門どの、御苦勞ながら。
仁右　ドリヤ、御相談仕らうか。
權九　サア、お出でなされませ。
ト唄になり、仁右衛門、市兵衛、孫六、淨閑、權九郎奥へ入る。與次兵衛殘る。妙貞向うへかゝる。揚げ幕より與五郎出て來る。後より下駄の市、やつしの形、夜番にて、與五郎に付き出で來り、花道にて妙貞は摺れ違うて向うへ入る。
市　モシ／＼、與五郎さんえ。又お前俄かえ。モシ、いい加減になされませ。しわん坊の大旦那が、大抵な事ぢやアあるまいに、ちつと内にござりませぬな、
與五　なにサ、おらア昨夜から友達の所に、謡ひ講があつて、そこへ泊つて今歸りがけよ。
市　エヽ、謡ひ講かえ。謡ひ講やら、念佛講やら、御會が出さすね。與次兵衛さんも、今日は町の衆と宿老へござつたが、大方跡目は與次兵衛さんが
與五　ア、戻つて居らるゝか。それは重疊、逢うてこの身の
ト思ひ入れあり
サ、市ばう、來やれ。
ト唄になり、兩人門口へ來て内へ入る。
市　モシ、お見世の衆え、若旦那がお歸りだよ。
與次　オヽ、與五郎か、いま戻つてか。
與五　ハイ、友達どもに誘はれまして
與次　俄はどうぢやな。
與五　イエ、謡ひ講へ參りました。
與次　それは珍らしいの……コリヤ、誰れも居らぬか。女子どもは居らぬか。與五郎が戻つた。平常着を持つて來やいの。
てる　ハイ、畏まりました。
ト合ひ方になり、振り袖のお照、與五郎が着替へを持

ち、暖簾口より出で來り

只今お戻りなされましたか。サ、御平常召しを。

與五　オヽ、お照どの、下女のりくが居やうに、これは手づから、戴きます。マア／＼、そこへ置いて下さりませ。

市　アヽ、お照さんかえ。モシ、わつちやア今、道でお目にかゝつたから、お連れ申しやした。晝のうちはいゝが、夜に入ると物騒でござりやす。必らず一人で出し申しなさるなよ。

てる　サ、わたしも左樣思つて居れど、いつの間にやら與五郎さまのお一人歩き、いかうお案じ申しまするわいなア。

與五　なんの案じる事があつて。其やうに秘もない者を、誰れが滅多に

市　イエ／＼、さうでござりやせぬよ。お話しは長い事だが、わつちが親仁も、人に切られやした。

與五　アヽ、てまへの親は人に切られたか。

與次　して、そりやアいつの事だ。

市　なにサ、そりやアわしが餓鬼の時のお話しサ。お聞きなされませ。譯に存じませぬが、わしの親仁は、足駄の歯入れでござりました。

與次　アヽ、親仁は足駄の歯入れか。

市　ハイ、左樣でござります。足駄の歯入れで、岩淵の權助と申しました。足駄の歯入れの子息ゆゑ、そこでわしの異名が下駄の市サ。

與五　エヽ、そこでお主が下駄の市。

市　左やうサ、親仁が切られたその時分は、まだ[illegible]まへ、もなき水子同然。併し餘ツぽど小胸が悪い、わしが親仁といふ噂、向うの相手は關取株、白藤といふ角力取りに、割下水で切られました。その權助が實の息子。倅し町人の悲しさには、敵討に出られもせず。いづれも樣のお取立で、どうぞ一度は足駄の歯入れになりたいが願ひ。薄樣ない商賣でも、親仁の職ならその昔の事でもあり、與次兵衞さまのお世話にて、川岸の土藏の寢ずの番、アヽコレ、話すうちにも、流石は親子だ。親仁が非道に死んだと思やア、心細くなるやつサ。

てる　エヽ、そんならこなさんの父さんは、アノ、人に切られて。

市　アイ、それだに依つて、お氣をお附けなされませ。昨夜も吉原田圃にて、鷲の長吉といふ者が、切られて死んだといふ噂。

與次　ヤア、田圃でか。
市　アイ、相手は誰れか知らねえが、その長吉が死骸の側に、切れた小指が落ちてあつたで、小指の切れたその者が、人殺しの科人と、町中は嚴しい詮議サ。
ト　これにて與五郎、思ひ入れあつて
與五　すりやアノ、鶯の長吉が、切られた場所に小指が落ちて。小指がなければ人殺しの
ト　はつと思ひ入れ。與次兵衛何心なく與五郎が小指の切れしをフト見つけ、恟りして顔見合せ
與次　アノ、小指のないが人殺し。
與五　エ。
ト　こなし、
與次　ハテ、物騒な事ぢやなう。
ト　思ひ入れ。唄になり、向うより次部右衛門、羽織袴大小にて、老けたる拵らへ、中間一人連れ出で來り、直ぐに門口へ來り
次部　橋本次部右衛門でござる。主には御在宿かな。
與次　これは次部右衛門さま、マア／＼これへ。
次部　免さつしやりませ。
ト　上へ通る。
てる　父さん、ようお出でなされました。
次部　オヽ、これは娘照か。與五郎もこれにお居やるし、見ますれば、總領の與次兵衛どの、この程は他行いたし居られしと承つたが、ア、いつお歸りでござるな。
與次　ヘイ、昨日講中の世話を以ちまして
次部　歸り召されたか。それは重疊……コリヤ娘、お茶一つ所望いたさう。
てる　アイ／＼、私しが
與五　ア、コレ、氣の附かぬ。お茶を持たぬかえ。
ト　奥より善太、茶を汲み出で來り
善太　ヘイ、お茶を上がりませ。
ト　差出し、お照を見て
オヽ、お照さま、とんと忘れて居りましたが、先ほど小間物屋の清七どのが、この間中お誂らへの、七寶繋ぎの櫛が出來ましたと申して、私しへ預けて參りましたが、サア、御覧じませ、なんと好く出來たではござりませぬか。
ト　蒔繪七寶繋ぎの黑の木櫛、紙に包みたるを出す。お照取つて差し、善太見て
善太　こりや、ようお似合ひなされました。
與五　ヤア、七寶繋ぎとは。

ト見て

そりや慥か、わしが替へ紋を

トお照と顔見合せ、ちよつとこなしあつて

これはハヤ、次部右衛門さま、あなた様には御用ばしござりまして、お出でゞござりまするかな。

次部　如何にも、身共参つたるは別儀でもござらぬ。知らるゝ通り、實子なき身共、女房めが存生の間、十次兵衛の末の妹、この照めを養女に致したところ、母めは病死。その後身共はお暇賜はり、浪人仕り、最早二君に仕へまする所存なきゆゑ、照めを與五郎へ養子嫁、次部右衛門一代にて朽ち果てんと存じ居つたところ、又ぞろ古主よりお尋ねござつて、召歸されて以前の如く、劍術御師範仕れと、役人中より支度の金子、二百金拜借仕つてござる。即ちこれへ金子持参仕つたは、拙者貯へあつて益なき金子、娘照めが何なりと、望みの品がござるなら、調のへて遣はされませ。その儀を頼まん爲ばかり。サ、この金子、お預かりなされて下されい。

ト財布入りの封金の二百兩を懐中より出し、差置く。

與次　左樣ならば、この金子を申し請け、アノお照に

次部　頭の道具、何なりと、よろしう頼み存じまする。

ト思ひ入れ。この時奥より次兵衛出で來り

次兵　與五郎さま、吾妻が後金二百兩の儀を

せうか、早速申しま

ト云はうとする。與五郎急いで

與五　これはしたり／＼、爰では悪い。サア、何事も後方までにナ、エヽコレ、機轉のきかぬ。

トいろ／＼思ひ入れ。お照もさてはトこなし。

市　コレサ、藤屋の親方、こなさんも粋な商賣する程にもない。吾妻々々と、吾妻とは、アヽなにか、おれ達東ッ子といふ事か。東ッ子どころか、おらア交りなしの江戸ッ子よ。

與次　イカサマナウ、吾妻とやら何とやら、その金高も二百兩。次部右衛門さまの御持参ありしも二百兩。ハテ、割符を合す。

ト金をしまはうとする。

次部　アイヤ、總領どの、待ち召されい。承れば、貴公には別宅おしやり、與五郎事は未だお屋敷、お目見得なき部屋住み、それゆゑにこそ粹閑どのが、附け備して、お上の御用聞き召さると承つたが、すりや、與次兵衛どのには立歸つて

與次　山崎屋の跡式は、今日只今私しめが讓り請け、親仁樣はこれまでの通り隱居、卽ち山崎屋與次兵衛と、町內へも披露いたしました。

ト與五郞お照思ひ入れ。

次部　すりや、跡式は其許が踏まへ、娘を進上いたしたるあの與五郞は、現在家續ぎ、紛れなき親身でござれど。

與次　サ、その儀は存じて居りまする。御先祖の血のあまり、跡式踏まへる御身分でも、ハテ、山崎屋の家には易へられませぬ。

與五　家に易へぬと兄貴の詞、この身の不埒が募りては、親身たりとも遠慮なう。

與次　イヤ、勘當は仕らぬ、

與五　アノ私しをえ。

トこなし。

てる　なんぢややら、與五郞さんの身に取つて、もし間違うた事あらば

ト思ひ入れ。

市　エ、小自烈てえ、縺れた身代。これを思へば金持ちより、貧乏人が、はるかましかえ。

次兵　身請けの後金出來ませずば、大旦那のお世話にて、吾妻はお屋敷倉岡さまへ。

次部　ナニ倉岡とは、御家中にて、底意の知れぬと噂ある丈左衛門へ御隱居が、身請けのお世話を。

與五　ト思ひ入れ。よき時分より淨閑出かゝり居て

淨閑　イヤ、後金二百兩、わしが渡して身請けする。

ト合ひ方。

次部　こりや主には以前の如く、法體あつて淨閑どの。こりや斯うなけりや叶ふまい。

淨閑　一別以來次部右さま、お恥かしいが只今の、吾妻が身請けは卽ち我れら。ハテ、手かけ妾もござらねば、この淨閑が請け出して、朝夕寢間の上げ下ろし、腰膝揉まする。コレ、與五郞、その時兎やかう云ふまいぞ。

與五　親仁樣のなさる事、ナニ部屋住みの私しが。

ト思ひ入れ。

市　併しこれまで若旦那も、多くの金を……アイヤ、先約なれば與五郞さんに、親方は義理があるといふもの。マア、何事も、二三日待つて進ぜさつしやい。

次兵　お馴染みだけに明後日まで。御隱居樣もその通り、明後日キツと御返事。

市　わしも番屋の古行燈、油の掃除にかゝらうか。

次兵　左樣ならば若旦那、何分よろしう。
ト思ひ入れ。與五郎氣の毒なるこなし。
市　ハテマア、ござれな。
次兵　ハイ、お暇申しませう。
市　ドリヤ、行燈掃除にかゝらうか。
ト合ひ方になり、次兵衛は向うへ、下駄の市、門口の番屋へ入る。淨閑、二百兩の金を見て
淨閑　コレ、與次兵衛、財布入りの、その金は。
與次　ハイ、この金は次部右衛門さまより、此お照どのへ、櫛笄なと求めよと、お心ざしのこの金子。
淨閑　ハテ、それはお照は仕合せな。ドレ、わしが預かりませう。
ト取らうとする。與次兵衛、支へて
與次　アイヤ、この金子は其まゝに、コレ、お照どの、其方の手箱の内へなりと。
てる　イエ／＼、それではどうやら我が物顏な致し方。矢張りお内の金簞笥へ、おしまひなされて下さりませ。
與次　成る程、用心も惡からう。小間物屋の見えるまで、わしが預かりませう。今にも要らば、あの戸棚の内へ。コレ、其方、しまうてござれや。
てる　アイ。
ト戸棚を明け、金簞笥へしまふ。淨閑、ヂロ／＼見し
淨閑　ハテ、惜しい金を、小間物屋に取らるゝとは、エヽ扨は樣々なものぢやなア。
次部　淨閑どの、ちとお目にかゝりたうござる。
淨閑　アノ、わしに、
次部　如何にも。
トよろしく住ふ。與次兵衛見て
與次　コレ、お照どの、親御樣が何やらお話しもある樣子。其方は奥へ。
てる　アイ。
トうぢ／＼して
何ぢややら、心がゝりな父さんの御樣子。殊に大枚二百兩、わざ／＼お持ち遊ばして
ト思はず與五郎と顏見合せる。
與五　ハテマア。奥へ。
てる　アイ。
ト合ひ方になり、お照、心を殘し、奥へ入る。
淨閑　次部右衛門さま、して、御用の筋はな。
次部　イヤ、別儀でもござらぬが、貴公御當子の、これに

居らるゝ與次兵衛どのが、跡式を納め召さるれば、誠に與五郎は無うても濟みまする。して、身共が娘と與五郎は、如何いたさるゝ存じ寄りでござるな。

淨閑　別して存じ寄りもござらぬが、お聞きの通り、藝者狂ひに大金を費す與五郎、親方筋でござらうが、家に易へぬが年寄りの片意地、事と品とに依りますれば

ト　あと云ひかねる思ひ入れ。

次郎　そりやモウ、親といふ字の附いた其許、よしや勘當いたされても

與五　エ。

次部　サ、與五郎方に申し分はござりますまいが、貴殿へ養女に遣はした、娘照めが身分は、どこで立ちまする。サ、そこがとつくり御思案どころ。親子の衆、なんと思し召さるゝ。

與次　こりやハヤ、御尤ものお尋ねでござりますが、何を申すも、爰に聞いて居りまするが、吾妻と申す藝者に迷うて

次部　アイヤ、そりや若い時には、誰れしも有る儀でござる。云はゞ娘を進ぜた拙者、此方より何とやら申す筈なれど、そこを申さぬが當世とやら承る。與五郎ばかりか、まだ外に、藝者狂ひを致さるゝ人もござるサ。それ式ならば何事も

ト　思ひ入れ。

與次　こりや改まつた次部右さま。外に藝者に狂ひ居る者がござると、仰しやらぬばかりのお詞。この與次兵衛も物堅き親仁様への氣兼ねして、女房氣のない男ゆゑ、閨ひ女房隱し妻、致したとてもそれ程に。

ト　少しムツとする。與五郎立寄つて

與五　サ、御尤もでござります。何を申すも、みな與五郎が身持ちが惡さに……私しが惡うござります。斯樣な事が云ひ募り、ひよつと間違ひ出來ましては、私しが迷惑仕ります。サ、何事もお構ひなう、次部右衞門さま、奧にてお禮に粗酒一つ。兄貴、よろしく御馳走頼みまする。

淨閑　イカサマ、折角お出での次部右さま、云ひ募つては後の後悔、そんならわしが、隱居家々々々

次部　御馳走になりませうか。何を申すも娘が可愛さ。

與次　サ、其お心は與次兵衛が、よう汲み分けて居ります。

次部　與次兵衛どの

與次　次部右衞門さま

淨閑　斯うござりませ。
ト唄になり、淨閑先に次部右衞門、與次兵衞附いて奥へ入る。與五郎殘る。
與五　日頃から、頑ましい親仁樣。それに引替へ、次部右衞門さまのお心ざし。お照が爰の飾りなと買うてもらへと、二包み御持參ありしも、與五郎が金に詰まりし二百兩。情の程は詞にも、云ふに云はれぬあの體裁。吾妻が兄の長吉を、殺した科は、今の間に召捕らるれば、云ひ譯ないは小指。
ト思ひ入れ。よき時分よりお照出かゝり居て
てる　エヽ。
ト驚ろく。與五郎もこなしあつて
與五　こりやお照どの。こなたは爰に。
てる　アイ、與五郎さま、そりやお前、聞えませぬわいな。
與五　そりやアなんで與五郎が。
てる　サア、お前とわたしは云ひ號けゆゑ、まだ杯はせぬけれど、貰はれて來て養子嫁、今に女夫とならぬのも、頑ましい淨閑さま、御實子の與次兵衞さまに家を繼がせ、もしもの事がある時は、お前さんを此お内に、お置き申さぬ相談も、あの權九郎と度々の事ぢやわいな。親御樣に其お心がござりましては、お前のお身が立ちますまい。幸ひ先刻に父さんが、お持ちなされた二百兩、あの金で吾妻さんの身請けして、どうぞお前は爰にお出でなさんすやうに、與次兵衞さまへ譯云うて、山崎屋の跡を納め、お内儀さんは吾妻さん。その時わたしや物縫ひとも、針妙とも思し召して、どうぞお内に置いて下さりませ。もし父さんがその節に、去り狀取らうと仰しやつても、どうぞ書いて下さんすなえ。お前と緣を切る事は、否でござりますわいな。
ト縋り附いて思ひ入れ。
與五　コレ〳〵、お照どの、その心ざしは忝なうござる。一生この身の恩に着る。併し不身持ちな與五郎、所詮山崎屋の跡式は思ひも依らぬ。勘當うけて流浪する、科は遁がれぬ事ながら、科ないこなたに苦勞をかけては、次部右衞門さまへ、どうしても申し譯がない程に、ふッつりおれが事、思ひ切つてはくれまいか。
てる　すりや、どのやうに申しても、吾妻さんに心が殘り、わたしと緣切るお心かいな。與五郎さん、そりや聞えませぬ〳〵。
與五　コレ〳〵、なんの吾妻に心が殘らう。モウ〳〵、

モウ〳〵身請けもせぬ。ハテ、いま聞く通り、親仁樣が身請けして、妾手かけになさる吾妻。悴のこの身で、どうして親の

てる　サア、あゝ仰しやれどなか〳〵に、御隱居樣が、どうして大金右左、出して身請けをなされませう。ありや決して、嘘ぢやわいな〳〵。

ト この時、與次兵衞出かゝり居る。

與五　サ、さは思へども、みす〳〵親の

與次　心に違はゞ不孝の上塗り。

與五　ヤ、お前は兄貴、與次兵衞どの。

てる　與五郎さまを御不孝とは。

與次　ハテ、みす〳〵僞はり事ながら、親の手かけに抱へる吾妻、子としてよもや身請けもなるまい。その身のもや〳〵思ふなら、モウこの內を

與五　エ。

與次　家出をしやれ。ハテ、うか〳〵この家に居やつては、悪い噂の弟與五郎、この跡式も何もかも、隱居の自由にさせぬが與次兵衞。この程俄の歸りがけ、土手で頓死か急病か、ぶち殺しても死にそもない、あの長吉が

與五　エ。すりやあの場所へ。

ト 思ひ入れ。

與次　サ、それぢやに依つて遠ざかり、暫らく影を隱すのが、よささうなものぢやぞよ。

與五　すりや、私しは暫らくこの身を

與次　隱れ忍ぶは、其方の乳母が娘のお賤は、髮結ひの世渡り、爰を賴んで少しの間。

てる　そんならわたしも御一緒に

與五　アコレ、どうしてこなたを連れられやう。

てる　イエ〳〵、わたしやお前と共に

ト 左の手を取る。

與五　アイタ、、、、、

ト 指の痛む思ひ入れ。

てる　これやコレ左の

與五　指は吾妻へ

てる　アノ、心中に。

ト 思ひ入れ。

與次　サ、それゆゑ影を隱すがよからう。

與五　情のお詞、爰から直ぐに

與次　氣遣はずとも

與五　兄貴。

與次　與五郞、早う。
てる　どうぞわたしも。
與次　行きやれ。
ト行かうとするを、與次兵衞隔てゝ、與五郞を突き出し、門の戸をシヤンとさす。唄、七ツの鐘。與五郞、向うへ走り入る。引違へ揚げ幕より四ツ手駕籠の垂れを下ろし、妙貞附いて、スタ〳〵と出て來り、駕籠は門口へ下ろし、妙貞囁く。駕籠舁き呑み込んで下手へ入る。あと合ひ方。
てる　コレイナア、與五郞さん、どうぞわたしも、ござんす所へ。
與次　これはしたり、其方は他家より貰うた娘、與五郞が家出したとて、どうして一緖にやられうぞ。マア〳〵、わし次第に。
てる　して、與五郞さんは、ありやマア、どこへ行かんしたのぢやえ。
與次　ハテ、内に置けば親御の心に違ふといひ、殊に家附きの與五郞、勘當しては世間の手前、與次兵衞が立たぬ。そこで首尾よう目論んで家出さすれば、親を捨て家出の悴、どうでお帳に附けねばならぬ。
てる　エヽ、アノ、與五郞さんをお帳とやらに、お附けたされますのかえ。
與次　ハテ、我れと我が身を自滅の與五郞、毛頭親仁にも隱居させ、この跡式は、枕を高う與次兵衞が
てる　アノ、この山崎屋の身代は
與次　總領ぢやもの、納めいで。弟與五郞日蔭者、嫁に貰うた其方をば、コレ、この兄が女房に持つ。
てる　エヽ、そりやマアお前、貞實かえ。
與次　杯もせぬ弟嫁、殊に世間へ披露目はせず、兄が女房に持つたとて、なんの大事が
てる　イエ〳〵、わたしも武家の娘、左樣な約束いたしませぬ。杯せねど云ひ號け、與五郞さんがござんせにや、わたしやお内に居りませぬ。
與次　イヤ〳〵、さうは云はれまい。たつた今もこの内を出る事は、否でござると云うたぢやないか。弟は身より出たる錆、其方になんの科はない。料簡し替へてわしが女房に
てる　イエ〳〵〳〵、道に背きし夫は、どうしても持ちませぬ。
與次　そこを我れらが持たせて見せう。

てる　どうしてあなたに
　ト逃げんとする。立廻りあつて、見世にあつたる魚を拵らへる出刃を取上げ、手早く我が手に左の小指を切る。お照恟りする。合ひ方。この時門口の駕籠の垂れを上げる。内に都、藝者の形にて窺ひ居る。上の障子を明けかけ、次部右衛門窺ひ居る。與次兵衛、思ひ入れあつて
與次　コレ、お照、あの與五郎は吾妻への心中なりと、左の小指切つて居るを、いま爰で其方は、あれ程見たではないか。わしは其方へ心中の、指を切つたが固めの印。返事さつしやれ。
てる　エ。
與次　心中見せても男に持たぬか。
てる　サアそれは。
與次　女房になるか。
てる　サア。
てる　サア〳〵〳〵。
與次　お照、切つたこの指、必らず無駄には。
　ト振りかへる拍子に次部右衛門と顔見合す。次部右衛門、障子ピッシャリ閉す。與次兵衛思ひ入れ。外より都と妙貞、ツカ〳〵と入り、與次兵衛が胸づくしを取つて思ひ入れ。權九郎出かゝつて窺ふ。
みや　コレ、惡性男の與次兵衛さん。
與次　ヤ、わりや都、なめらさんぼう。
妙貞　外からしつかり見屆けました。エヽ、こなさんは
與次　これは阿母、尤も〳〵。
みや　イエ、イエその尤もは、もう〳〵聞きたうござんせぬ。其方に附いた身の代の金は、如何程あるとても、立て金はわしがして、女房にするゆゑ、今日爰へ同道せいとのお頼みに、母さんと相談して、門には親子が居るとも知らず
妙貞　與五郎さんの云ひ號けのお照さんに、指を切つての惡口說き。コレ、與次兵衛さん、お前アノわたしが娘、都が事はどうさんす。お前を爰の代取りにせうと、宿老どのまで驅け步き、骨を折つたも娘を爰の、御新造樣にしたいが山。向うの見えぬウカ〳〵と、世話燒くやうな妙貞ぢやござんせぬ。サ、山崎屋の御新造樣は、娘の都ぢや。さう思つてもらひませう。エヽ、アタ阿房らしい。
てる　ほんにお前は慥か講中
妙貞　アイ、妙貞でござんす。わしが娘は藝者の都、疾か

ら主の囲ひ者、今日改めて山崎屋の御新造、わしや姑御さんぢや。アイ、大身代の阿母様ぢや。さう思うて下さんせ。

てる　そんなら都さんは、與次兵衛さんの

與次　ア、、コレ〳〵、モウ〳〵何も云うてくれな。立派顏したこの與次兵衛、面目次第も

權九　イヤ、無いとは云たさぬ。堅い顏する兄御様、イヤハヤ呆れた身持ちだわえ。與五郎どのは吾妻へ打込み、身請け手附けは濟んでも、後金の二百兩に行き詰まり、身請けの出來ぬを附け込んで、御隱居様が、百兩安いと聞くと其まゝ、拂ひ物なら買ふべしと、吾妻を手かけに抱へる心。兄貴は都を引摺り込み、それが足らいでお照さまに足を附け、指を切るとは言語道斷。有やうは與五郎どのをぼいまくり、お照さまを申し請け、別家と成つて見世でも出してもらはうと、樂しんで居るこの權九郎が手前も恥ぢず、あまり不埒な與次兵衛どの。イヤハヤ、爰の内に、ろくな奴は一人もない。モシ、お照さま、只今から、私しへ〳〵。

　トしなだれ寄る。

てる　エ、、なんぢやぞいな。其方までが同じやうに。茲放しやいなう。

　ト振り切り、ツイと奥へ入る。

妙貞　サア〳〵、娘、聞けば聞く程、油斷のならぬ爰の内。モウ〳〵、ちよつとも待たれぬ。われも早う與次兵衛さんから、身の代の百兩いま取つて、わしに寄越しや。サア、早うしや〳〵。サア、立て金して、女房にさんせさんせ。

與次　これはしたり、マア〳〵、靜かに云うてくれい。

權九　コレ〳〵、都さん、お前、藝者の身で、生娘に見替へられては立ちやすまい。お前も面當てに指を切りなさい。心中しなさい。コレ〳〵〳〵

　ト出刃を取つて來り

サ、この出刃で、指を切りねえ〳〵。

みや　エ、、滅相な。どうしてわたしが。

妙貞　さうぢや〳〵。滅多に娘を疵物にはさせませぬ。

權九　エ、、卑怯な事を云ふ阿母だ。指の切りやう知らずば、わしが教へて進ぜう。マア、この出刃を斯う持つて、コレ、ちよつきりちよつと出刃を斯う持つて、左の小指と見たならば、右に持つた庖丁で、まツこの通り

　ト思はず我が手に指を切り、「ツツ」と倒るゝ。皆々驚

ろく。
みや　ソレ、いつそ血が流れるわいな。
妙貞　どうでも今が汐時であらう。
権九　ア、、痛い／＼。コレ、お照さま、血留を下さりませ。血留はどこにある。どこだ。堀留は近所だが、汐留は遠いワ。
ト「痛い／＼」と手を抱へ、奥へ入る。
みや　コレ、與次兵衛さん、あのお照さんへ切らしやんした心中は、ありや、ほんまでござんすかいな。
與次　何をマア、わけもない。身請けせうと呼び寄せた、其方は女房、ありや正眞の座興といふもの。コレ、この切り指はわがみへ心中。
ト小指を取つて遣る。
みや　すりや、わたしへお前が心中。
與次　切つた小指が夫婦の固め。
妙貞　そんなら娘と、いよ／＼祝言。
トこの時奥より
仁右　千秋萬歳の千箱の玉を奉る。
市孫　ア、、めでたい／＼。
ト肩衣のまゝ仁右衛門、銚子杯を持ち、市兵衛、孫六出で來り
仁右　サ、お二人の固めの杯、都さまから與次兵衛さまへ。幸ひ我れら講中の、この肩衣の役に立つたる仲人役、跡式何かの讓り引、親御が得心いたされて、又ぞろ二度の法體で
市兵　物事丸う頭の如く、事納めた上からは、わしが勘定呉服代、都どのゝ身の廻り、積つたところが五十五兩の三分二朱。
孫六　さて小間物屋〆め高が、四十三兩二分あまり。
妙貞　娘が立て金百兩と
與次　合せて僅か二百兩には足らず。ドレ、勘定して
ト戸棚を明け、金箱を取出し、明けようとする。此うち淨閑、障子屋體に出かゝり、この體を見て膽を潰し、この時ツカ／＼と出で、明けんとする金箱を押へ
淨閑　ドツコイ／＼、さうはさせぬぞ。マア／＼／＼、どこの國にか、この親が爪へ火ともしたと云はうか、旨い物を食ふや食はず、十萬兩の在り金の、まだその上へ貯めた金、湯水のやうに遣ふとは、さうはさせぬぞ。與五郎めはあの不埒。實の子の偏屈者、われが斯うした心とは、今の今まで知らぬわい。ヤイ／＼、このマア同行

の仁右衛門どの、こなた衆まで同じやうに、藝者を引込み、親にも沙汰なし祝言沙汰、呉服代も小間物の金も、遣る事は親がならぬ。一文きなかも、ならぬぞ〳〵。

ト千兩箱へ跨り、押へて居る。

仁右　これはしたり淨閑どの、こなた、老耄さしつたか。

淨閑　なんで淨閑、老耄いたさぬ。

仁右　ハテ、それでもこなたは身代を、あの與次兵衛へ讓つたではござらぬか。

與次　その上お前は、元へ戻つて樂隱居、この山崎屋はわしが物。十萬兩の金のうち、二箱三箱違うたとて、別して痛まぬこの身代。お前は御隱居、隱れ居る文字の通りに、どこぞへ隱れてござりませ。

淨閑　エ、マア、おのれは

與次　ハテ、わしが物でござります。

ト淨閑を突きのけ、箱の内よりみだけ二包み出し

ソレ、よいやうに分取り〳〵。

妙貞　エ、、忝ない。

ト金を取つて

コレ〳〵、跡は差詰めお前方、よいやうに分けさんせ。わたしや百兩取つたその上に、山崎屋の姑御樣ぢや。ホヽヽヽ……ソレ、お前方、よいやうに。

ト百兩渡す。

市兵　オツと、此方の勘定も……二口〆めて百兩あまり。

孫六　二人は慥かに受取りました。

仁右　コレ〳〵、都どの、あなたは爰の御隱居ぢや。行く末の事、頼まつしやれ〳〵。

みや　そんならあなたは舅御樣。この上ともに嫁のわたし、お氣に入らずと御隱居樣、實の娘と思し召し。

ト思ひ入れ。

淨閑　エヽ、知らぬわい。

ト腹立てる。

妙貞　内祝言は奥座敷。わしや開いてから跡の片附け。ナウ、與次兵衛さん……アイヤ、さんぢやない與次兵衛どの、わしや姑御ぢや。孝行しなさんせえ。

仁右　然らば講中、宵の程うち、日暮れぬに開きませうか。

ト皆々門口へ出かゝる。

與次　これはどなたも、何かと御苦勞。明日お禮に

市孫　イヤモウ、それには及びませぬ。

與次　さて金箱も不用心。ドリヤ、錠前をピンと卸ろして。

ト海老錠卸ろす。

淨閑　ドレ、その鍵を
　ト與次兵衛が腰の鍵を取りにかゝる。
與次　オツと最前この鍵も、お讓りなされし上からは、御隱居樣でも、滅多にこれは
淨閑　エ、、腹の立つ。勝手にしをれ。
妙貞　そんなら道まで仁右衛門さま。
仁右　同道しませう。淨閑どの・今日からお樂ぢや。
淨閑　知らぬわい。
與次　サ、女房は居間へ。
みや　御隱居樣。
淨閑　知らぬわい。
仁右　與次兵衛どの、ゆるりとおしげり。
與次　講中方
妙市　開きませうか。
淨閑　知らぬわい。
　ト唄になり、與次兵衛、都が手を引き、奥へ入る。仁右衛門先に、妙貞、花道にて百兩をちよつと仁右衛門に渡し、市兵衛、孫六も、めい〳〵心意氣あつて向うへ入る。淨閑一人ウツトリとして居る。入相の鐘、合ひ方。

淨閑　なんの事ぢや。家附きの與五郎め、不孝者ぢやと思うたが、どうでもまた眞實親身の與次兵衛は、その上を行く覆輪かけた不孝者。イヤ又、悴は違うたものぢや。
　ト横手を打つ
　ハテ、惡い夢を見た事ぢや。
　トうつとりとしてゐる。矢張り入相の鐘、唄にて、向うより丹平、若黨の形にて出で來り、門口に窺ひ
丹平　ア、、爰ぢや〳〵。鳥越の米問屋、山崎屋は爰ぢや爰ぢや。コレ、頼まう〳〵〳〵。
淨閑　エ、、やかましい、知らぬわえ。
丹平　これはしたり、山崎屋は爰か。
淨閑　知らぬわえ。
丹平　これは無作法、倉岡方よりお使ひに參つた。コレ、丹平でござる。
淨閑　知らぬわえ。
丹平　コレサ、氣をしつかりと持たつしやれ。知らぬ事はあるまい。丹平でござる。丹平でござるワ。
　トこれにて淨閑、思ひ入れあつて
淨閑　ア、、丹平どのか。
　ト見る。

丹平　左やう〱、丹平どのは三十になるかならぬに、主人のお使ひ。ア、、草臥れました。

淨閑　左様でござらう。辻駕籠にでも乘られいで

丹平　定めて足が

淨閑　あいたかつたでござらうに、なぜ

丹平　ツン〱。

淨閑　駕籠にでも乘らつしやらぬぞ。

　ト淨瑠璃にて語る。

丹平　エ、、何を仰しやります。コレ、與次兵衛さま、密事の御用もござれども、書いたる物は、もし落ちるの大事を存じ、拙者直さま御口上にて申すでござらう。

淨閑　それは御苦勞。此方もよん所なき取込みござつて、只今の不挨拶。して、倉岡氏より御用の趣き承りたい。

丹平　イヤモウ、丈左衛門どのと同腹中のあなた様、先達て十次兵衛が越度と成つたる胡蝶の香合、屋敷へ置くも氣遣はしく。幸ひ主人の以前の家來、今は駕籠屋の甚兵衛と申す者、大丈夫と見込みしゆゑ、彼れに暫らく預け置いた。まだ〱御口上がござる。彼の藝者吾妻が事、身請け金三百兩と承る。何卒貴公方にて右の金子を調達あつて

　ト淨閑が頭を見て

イヤ、與次兵衛さまには、こりや又ぞろ、御元服でござるな。

淨閑　左やう〱、今日より致して又ぞろ淨閑、

丹平　それはおめでたう存じまする。時に只今申しかけたる、三百金の御返事はな。

淨閑　ア、コレ〱〱、丹平どの〱、お詞の内でござるが、今日よん所なう身代を倅に讓つて、後の後悔御覽の通り、又ぞろ頭の隱居淨閑、金簞笥の鍵までも取上げられ、イヤモウ、二朱の工面も致し憎い。その儀よろしうお斷わりを頼み存じまする。

　トよき時分より下駄の市、番屋の外にて、火の用心の行燈の掃除してゐたりしが、フツと二人が相談を聞き門口にて聞き耳立てる。

丹平　それは近頃氣の毒千萬、まだござる〱。イヤ、別儀でもござらぬが、家中橋本次部右衛門娘お照こと、丈左衛門どの至つて御懇望のところ、貴公の御子息與五郎どのへ養子嫁、只今以てお照ことも

淨閑　サ、、お待ちなさい〱。其お照が事には、ちと御相談ものでござる。それと申すも、與五郎めをほいまくる

手段。さすればお照に構ひはござらぬ。こりや斯うなされ。貴公には後程夜に入りお照が迎ひ。その節ソッとお渡し申さう。ふん縛つてお連れなさい。

丹平　然らば後程、お照を盗みに参る程に、キッとお渡し、なされいよ。

浄閑　何がさて〳〵。コレ〳〵、丹平どの、兼ね〳〵認め置き申した、倉岡どのへ遣はす御状、屆けておくりやれ。

丹平　承知いたした。早速身共へ

浄閑　お渡し申さう。

ト見世の欄間に釣りし神棚の箱守より、封じたる状を出し

この状慥かに倉岡どのへ。

丹平　心得てござる

ト懐中する。下駄の市、門にて思ひ入れ。

然らば後夜の鳴るを相圖に、お照を揚げに

浄閑　御大儀ながら丹平どの。

丹平　後方参らう。浄閑さま

浄閑　何かと御苦勞。

丹平　ドリヤ、出直して。

ト合ひ方、暮れ六ツの鐘、丹平向うへ入る。下駄の市、跡を見送り、この跡をつけ向うへ走り入る。浄閑、門口を締めて

浄閑　こりや日が暮れたに、見世へ灯をともさぬかえ。神棚へ御燈火あげぬか。コリヤヤイ、善太め、男どもは居らぬか。

ト呟やきながら暖簾口へ入る。矢張り合ひ方、時の鐘、障子屋體よりお照、硯箱と書置の書きしまひを持ち添へ、窺ひ〳〵出で來り、奥の方へ思ひ入れあつて

てる　先刻に父さんが、わたしが方へ持つてござんしたあの金は、心あつての二百兩、吾妻さんの身請けの後金、先へ渡したその後は、どうでこの身を

ト書置へ思ひ入れあり、帯へ挾み、そろ〳〵と戸棚へ窺ひ寄り、ソッと戸を明け、簞笥の抽出しより財布入りの二百兩を取出し、財布へ書置を結びつける。矢張り合ひ方捨て鐘。この時向うより下駄の市、丹平、状を奪ひ合ひ、立廻りながら出で來り、門口へ來て状を奪ひ取る。この途端にお照、窺ひ〳〵門口を明けんとする。下駄の市、丹平を當てる。ウンと悶絶して、タヂタヂと番屋の内へ倒る丶。下駄の市、しやんと戸をさす。この物音にお照驚ろき、戸に縋つて外を窺ふ。

権九　この音を聞き権九郎、行燈を提げて窺ひ出で
　誰れだ〳〵。門口で今の音はなんだ。
　ト行燈あげ見る。外にて下駄の市、思ひ入れ。お照ハ
　ッと當惑の體。権九郎よく見て
　ヤ、そこにござるは、お照さんではござらぬか。コレ、
　お前はマア、何をしてござります。
　ト手を取る。
てる　ア、コレ、わしやちつと。
権九　モシ〳〵、どうかお前は味な素振りだわえ。サア、
　奥へござりませ。
てる　サア、わしや少つとナ。
権九　エ、來なさいと云ふに。
　トお照が持つたる財布を見附け
　ヤ、こりやお前、そりやア金だが。
てる　ア、コレ、それを。
権九　ヤ、こいつは油斷が。
　トお照を無理に奥へ連れ行かうとする。この時下駄の
　市、ツカ〳〵と入り、お照を外へ突き出し、権九郎を
　引きつける。この間に嬉しきこなしにて、財布を持ち
　向うへ走り入る。権九郎、振りほどいて下駄の市へか
　かる。立廻りにて権九郎が左の手をキッと捻ぢあげる
　アイタ、、、、。
　ト小指の跡痛む思ひ入れ。下駄の市、よく〳〵見て
市　左の小指の切れたるは、此奴も詮議の。
権九　ヤ、うぬは夜番の。
　ト云はうとするを取つて押へる。
　アイタ、、、。どうする、どうする。
市　まさかの時は。
　ト土藏の明いてあるを見附け、思ひ入れあつて、権九
　郎を引立て、土藏へ打込み、ガラ〳〵と戸をさす。奥
　にて
次部　與次兵衛どの〳〵。
　ト聲するゆゑ、下駄の市こなしあつて、門口へ出で、
　番屋へ入る。合ひ方になり、奥より次部右衛門、與次
　兵衛出で來り
與次　次部右衛門さま、もうお歸りでござりまするか。
次部　日暮れましたれば、最早お暇仕らうが、與次兵衛
　どの。先刻も申し、御家内の樣子、一々身が心に會得仕
　らぬ。おてまへの家督となれば、部屋住みの與五郎に、
　女房はいらぬもの。娘照めを受取つて罷り歸る。さう心

得て下されい。

與次　すりや、與次兵衞めが家督とござれば、弟嫁のあの照を。

次部　ハテ、添はせる男がござるまいが。

與次　イヤ、品に依つては私しが。

次部　ア、、お云やるな。弟嫁が兄の女房になりませうか。殊にこなたは都といふ、藝者とやらを引入れて、身持ち惰弱がし足らいで、娘の照めを弄さみ物に致さるゝ。そりやこの親が罷り成らぬ。イケ馬鹿々々しい。サ、娘を爰へ連れてござれ。

與次　左樣ござれば是非がない……コリヤ、女子ども、お照をこれへ、連れて參れ〳〵。

ト奧の方へ云ひつけ

次部右衞門さま、お照をお渡し申すからは、先程あなたの御持參なされし二百兩、お持ちなされて下さりませ。

ト合ひ方になり、戸棚の內にある簞笥の抽出しを明け金なきゆゑ思ひ入れあつて

ヤ、、、、、。最前お照がしまひ置きし、財布のまゝの二包み。

次部　如何いたしたな。

與次　もし強慾の親人が。

次部　ヤ。

ト思ひ入れ。奧バタ〳〵にて善太、慌しく出で來り

善太　モシ旦那樣、お照さまが、お居間にお見えなされませぬ。

與次　ナニ、あのお照が見えぬと申すか。

善太　どこを尋ね申しても、さつぱりお見えなされませぬ

與次　すりや、この金の行き道も。

次部　どう仕つた。

與次　アイヤ、夜道いとはず心願に、また觀音へ。

ト思ひ入れ。

ソレ、提灯付けて迎ひに行きやれ。

善太　畏まりました。

ト奧にて

七　オツと合點だ。

ト暖簾口より、ぶえんの七、山崎屋といふ弓張り提灯をともして出で來り

サア、どうで歸りだ。おれが一緒に行つてやらう……コレ、あのお照さんは、慥か駈落ちぢやないかえ。

善太　ア、、これサ……役にも立たぬ事を。ハイ、行つて

參りませう。

ト五ツの鐘、拍子木にて、三人とも向うへ急ぎ入る。

次部　娘へ遣はす二百兩、大金持ちのお內ゆゑ、そこらあたりへ紛れ込み……金の行くへが知れたなら、娘が在所も。

與次　歸り次第にお跡から。どうござつてもお照が緣を。

次部　これまで長々お世話の段、氣の毒ながら取戻し。

與次　其お心ならお照が諸道具、云ひつけ置いたを其まゝ爰へ。

百九　畏まりました。

ト暖簾口より、重ね簞笥、挾み箱など、若い者手傳うてよき所へ並べ

九介　お照さまの三荷のお荷物。

百九　殘らず爰へ。

與次　持つて來い。

百九　ハイ。

ト奧へ入る。

與次　次部右衞門さま、お照どのをお戾し申す上、お附けなされしこの荷物、これはあなたへ。

次部　受取りませう。諸道具よりは照めを去り狀、三くだり半が貰ひたい。

與次　御尤も。左樣あらんと與次兵衞が、舉與五郎の名代に、認め置いた數通の去り狀、お氣に入つたをどれなりと、次部右衞門さま、御覽なされて下さりませ。

ト次部右衞門思ひ入れあつて、書き物など、よく〳〵見て

次部　ヤ。こりや去り狀と思ひの外、諸所へ貸しつけ置かれたる、或ひは估券貸し金の

與次　サ、その證文を暫らくあなたへ。

次部　預かり置いた納まりは

與次　我れなき跡は弟が家督、その節めでたく與五郎へその去り狀をお返しあり、お照どのとも末長う。それゆゑ新たに去り狀を、書かぬ心をお察しあつて。

次部　身が預かりの數通の去り狀、樣子あらんず心ざし。さほど實義のおてまへが、技前みだらなあの振舞ひ、定めてあれにも。

與次　サ、それと云はれぬ實の親、淨閑どのゝ無得心、血を分けたりし我れさへも、辛く當れば猶更に、義理あるお主の血のあまり、子で子にあらぬ與五郎に、家も讓らず剩さへ、大恩請けし鴻野のお家、佞人ばらに一味して、

この山崎のお家にも、かゝるがどうも御先祖へ。

次部 さてこそ讒者の倉岡に。

ト思ひ入れ。

與次 サ、それゆゑ又も無理隱居、弟に難儀もかけまい爲。

次部 心望みのおてまへが、藝者狂ひにあの都。

トよき時分より都、世話女房の形に着替へ、仁右衛門、年季證文を持ち、出かゝり居て

みや 身の代の百兩ねだり取り、女房約束しやんした、都といふは與五郎さんに、乳を上げたる乳母が娘、今は駕籠屋の甚兵衛が、夫婦拵ぎの女業、お賤と申す女髮結ひ、與次兵衛さんのお賴みゆゑ、似付かぬ藝者の拵らへもの與五郎さまはこの賤が、お預かり申しました。とはいふものゝ、常々から、心よからぬこちの人。ア、また主の心も。

ト思ひ入れ。

仁右 都へ遣つた立て金百兩、殊に呉服屋小間物屋へ、渡した金を取り集め、都合合せて二百兩、吾妻どのへ後金に、持つて行つたは講頭、この仁右衛門が賴まれて、受取つて來た年季證文。

ト見せる。

次部 さうとは知らず早まつて、娘が家出、財布の金の行くへ知れぬのも、正しく吾妻が身請けをと。

與次 貞女のお照もこの家に、置かれぬ義理に持ち返す、荷物の内を改ためて。

ト簞笥の引出しを明ける。内を殘らず包み金詰め置く。

こなしあつて

次部 受取り歸るは次部右衛門……こりや抽出しに包み金。

與次 荷物の内は在り金の、十萬兩をお照に附けて。

次部 すりや與五郎が家督とならば。

與次 その節めでたく。それまでは、橋本氏へ預ける荷物。

次部 娘が品は受取らんが、故なき多くのあの金は。

トよき時分下駄の市、對の上下、大小に改ため、門口に窺ひ居て

市 代々續く山崎屋、役目に是非なく封印いたす。

トつか〳〵と内へ通る。

次部 ヤ、すりやこの家へ封印の。

市 役目は即ち三原傳藏、鴻野の大恩請けながら、底巧みある丈左衛門、身が別家たる有右衛門、それに組みするこの家の主。

與次　サ、その親人を助けたく、講中方と連れ立ちて、宿老どのにて何かの樣子。
仁右　所詮お上のお疑ひ。
與次　晴れるまで牢舍のこの身。
ト肌を脱ぐ。下着の下へ繩をかけある。
みや　ヤヽ、與次兵衛さまはあの繩目。
與次　小手をゆるめて羽搔締め。
市　それも誰れゆゑ強慾の、親の難儀に義理ある弟、憂き目を見せじとその身に引請け
次部　例へ牢舍を致すとも、云ひ譯立たば直ぐに赦免の
與次　濟まぬは人を殺せし科人。
市　惡者鷲の長吉を、殺せし者は證據の小指。
仁右　與五郎どのにも疑ひが。
與次　イヽヤ、弟ばかりでない、この與次兵衛も小指がござらぬ。
みや　そりやソレ先刻にお照さんに。
與次　コリヤ。いらざる女の、控へて居やれ。
市　小指の無いはまだ外に、打込み置きし權九郎。
トつかつかと土藏を明け、權九郎を引立て
彼奴も左の小指がござらぬ。

次部　すりや、人殺しは權九郎。
權九　アコレ、どうして私し。
トうづくまる。淨閑、ツカツカと出て
淨閑　毛頭知らぬ權九郎、その人殺しはあの與五郎。して又なんでこの家へ封印。
市　科はその身に覺えはあらうが。
淨閑　してその證據は。
ト番屋より丹平出で
丹平　其お使ひはこの丹平。旦那の惡事を見限つて、傳藏さまへ返り忠、歸り仕事のこなたのこの狀。
ト密書を見せる。
淨閑　ヤ、その狀までもうまうまと。
ト立ちかゝるを、與次兵衛引ッ捕へ、キッとなつて、
與次　コレ、お年寄りの老耄か。なんであらうとお前は御隱居。狀の名宛は矢張り與次兵衛、あなたは淨閑、すりやその返書はこの與次兵衛。こなたに科はかけませぬ。うろたへずとも、ナ、モシ。
ト思ひ入れあつて
イザ、傳藏さま。
市　緣の切れたるお照が諸道具。構ひござらぬ、引取り有

されい。
與次　ア、重々厚き。
淨閑　どうやら荷物に。
權九　正しく、在り金。
ト兩人かゝるを、次部右衞門、淨閑を引附ける。傳藏、權九郎に早繩かけ、グツと引きつける。
皆々　これは。
市　お上のお咎め、一卷きは、是非なくかゝる山崎屋、外に決して咎めはござらぬ。
與次　でもこの小指の疑ひが。
市　イヽヤ、彼奴にも指はござらぬ。その人殺しは權九郎、あまり横合ひ出ぬうちに
與次　御苦勞ながら
次部　引取る諸道具。
市　引取る囚人。
ト權九郎を突きやる。丹平、繩を控へる。
丹平　科人立たう。
仁右　やがて赦免の
みや　その時めでたう。
與次　命ござらば。

市　ト顏見合せ、思ひ入れ、
次部右衞門どの。
次部　傳藏どの。
與次　お役目御苦勞。
淨閑　多くの金を。
トつか〳〵と行くを、與次兵衞、淨閑を引きつけ
與次　親仁樣。
淨閑　ヤ。
トきつとなる。
與次　これがこの世の。
トほろりとして次部右衞門と顏見合せ、思ひ入れあつて
市　武士にもまさる
次部　男一疋。
與次　アモシ。
ト淨閑を下へ引き廻して引据ゑる。木の頭。
サ、お引きなされませ。
ト兩手を廻す。めい〳〵思ひ入れよろしく
ひやうし　幕

五幕目　大川橋の場

役名――夜麥蕎賣り、與兵衛 實ハ南方十次兵衛、駕籠舁き、土手の又。質屋、善六。小揚げ、百介。同、九郎八。魚屋、ぶえんの七。山崎屋娘、お照。惡者、野手の三。駕籠の甚兵衛。

本舞臺、三間の間、向う黑幕、千部開帳札澤山に建て、橋の袂に番屋あり、すべて大川橋夜の體、水茶屋の葭簀床几、片寄せある。この上に單物をすつぽりかぶりし男寢て居る。四ツの鐘、拍子木の音にて幕明く。

トよき所に四ツ手駕籠を置き、又、客を引き居る。仕出し、捨ぜりふにて出て入る。

又　ハイ旦那、お廉く參りやせう。ハイ、駕籠々々。ア、、今夜は歸りがねえわえ。コレ、甚兵衛どの、一服のまつしやいな。

ト これにて駕籠の內より甚兵衛出て

甚兵　又や、今夜はきついものだな。

又　さればサ、通りはあるが、みんな假をひやかす椋鳥同然サ。

ト煙草吸ひつけて居る。矢張り時の鐘にて、向うより善六、質屋の手代にて、小提灯を提げ、すた〳〵出で來る。

ハイ駕籠、お廉く參りやせう。

甚兵　モシ、歸り駕籠でござりやす。酒手で參りやせう、

ト善六に附く。思ひ入れあつて

善六　ヤア、こなたは甚兵衛どのぢやアねえか。

甚兵　ア、、善六どのか。

善六　見附けたぞ〳〵。コレ、內へ行つても留主ゆゑ、大方爰へ出てゐやうと思つて來たが、彼の品はどうしたのだ。

甚兵　コレサ、こなたも大概知れたものだ。二朱や三朱の質ではなし、さうこれが急に。

善六　ハテ、大金だゆゑ、此方も催促せにやアならぬ……約束は十日ぎり、親方はわしばかりせがむわな。して、ありやア、いよ〳〵屋敷の

甚兵　知れた事だわな。駕籠舁きが、あんな香合を持つて何にするものだ。斯うさつしやい。明日。おらが內へ來

さつし。

善六　行きませう。おどけは退け、どうぞ片を付けて下さい。時にわしが方から遣つた書き物はあるかえ

甚兵　無くつては。コレ、

ト大叺の紙莨入れより、提灯の灯にて以前の質札を出し

これであらう。

善六　見せさつし。

ト提灯の灯にて

「一札の事、一つ金二百兩なり、右は胡蝶の香合質物に預かり置き候ところ實正なり」……よし〳〵、おれが書いた預かりに違ひない。併し、紙莨入れへ引ッ挾んで落すまいよ。

甚兵　ナニ落すものか。相談があるワ。明日來さつし。

善六　必らず頼むよ。これから向う河岸まで行つて來ねばならぬ。

甚兵　夜更けだよ。氣を付けて行かつしやい。

又　剛的に精出すな。

善六　ドレ、早く行つて來ようか。

ト捨て鐘にて善六、橋へかゝつて入る。甚兵衛跡を見送り

甚兵　べら坊め、ナニ金が有るものか。

又　して、こなたは請けないのか。

甚兵　先づあゝ云つたのが今晩の茶番サ。ハヽヽヽヽ。

又　大笑ひだ。ハイ駕籠々々。

ト呼びかけて居る。揚げ幕と東の口にて、

九百　迷子やアい。お照さまア。

七　迷子のお照さまア。

ト揚げ幕より百介、山崎屋の弓張と棒を突き、九郎八、若い者、鉦太鼓を打ち、東の口より、ぶえんの七、同じ弓張と棒を突き。善太、首へ鉦太鼓を掛け、叩きながら出で來り、本舞臺にて落ち合ひ

百九　誰れだ〳〵。善太に七ぢやアねえか。

七　イヤア、百介どんも九郎八どのも來たのか。

九郎　まだお照さんの居所は知れねえか。

百介　コレエ、鉦と太鼓を首へかけて、うぬは又いたづら、好い機嫌な奴だなア。

善太　コレサ、無駄どころぢやアねえ。手が足りぬから、鉦と太鼓を二役勤めまする。即ち八人藝が裸足で逃げる。

九郎　大べら坊め。もう一人頼むがいゝわえ。

善太　それでも、助けてくれ手がねえわえ。
ト思ひ入れ。駕籠の者を見て
コレ〳〵、駕籠の衆や、なんと、駄賃はいくらでもやるから、一役助けてくれまいか。
又　物は相談だ、駄賃がよくば行つて進ぜう。コレ、甚兵衞どん、行つてやよからうか。
甚兵　隨分行つて進ぜろ。シタガ、行がけに、番所に虎か条が居やうから、寄越してくれろ。
又　合點でごんす。
甚兵　して、お前方はどこからござつた。
九郎　アイ、わしらは鳥越の山崎屋でござるが、娘御が家出をしましたよ。
甚兵　エヽ、アの山崎屋の娘御が見えねえのか。
皆々　さうサ。
甚兵　ハテ、そりや氣の毒な……コレ、又や、早く棒組を寄越せよ。
又　合點でごんす。サア、行きませう。
百介　これから本所の方を尋ねませう。
七　おいらは江戸の方へ行かうわえ。
皆々　迷子のお照さま〳〵。

ト土手の又は此うちへ交じり、鉦を叩き、向うと橋へ別れて入る。
甚兵　アヽ、そんなら米問屋の山崎屋の内の娘が、駈落ちと見えたわえ。
ト捨て鐘になり、向うより與兵衞、やつし形にて、八ツ、わたやと書いたる行燈を付けたる風鈴蕎麥の荷を擔ぎ出て來り、直ぐに本舞臺へ來り、甚兵衞を見て
與兵　ヤ、甚兵衞どんか。この頃は逢ひませぬの。
甚兵　オヽ、蕎麥屋の與兵衞どのか。どうだ、商ひがごんせう。
與兵　アイ、もう十四五あります。今に賣つてしまひやす。
甚兵　そいつはいゝの。一杯つけてくんねえ。
與兵　アイ、熱もりか。
甚兵　オイ、辛味をしつかり入れて下さい。
與兵　承知サ。
ト荷の内より蕎麥笊へ蕎麥を入れ、思ひ入れよろしく、捨ぜりふにて盛つて出し
サア、出來やした。唐辛子はしつかり入れたよ。
甚兵　その事サ。
トさら〳〵とかつこむ。

もう一杯下さい。

與兵　オイ、お代りかな。

ト皿を取る。

甚兵　コレ、皿に移り香がするによ。ちつと洗ひねえ。

與兵　ア、、どうしたの。洗つて盛りやせう。

ト片荷にある手桶にて洗はうとする。この時、箍の切れたる音して桶の水溢れる。

甚兵　ア、、なんの音だ〳〵。

與兵　サア〳〵〳〵、大變だ〳〵。

甚兵　どうした〳〵。

與兵　桶の箍が切れて、水がみんな溢れたワ〳〵。こいつは大變々々。

甚兵　そいつはとんだ事だ。蕎麥屋に水がないとは、河童が皿を割つたやうなものだ。

與兵　ア、コレ、どの道、水がなくてはならねえが……アア、好い事があるわえ。コレ、甚兵衞どん、お前にちつと御無心があるワ。

甚兵　なんだな。

與兵　わしは向う河岸の番所で、米かし桶に水を一ぱい貰つて來るから、其うちこの荷をこなた、ちつとのうち見て居て下さいな。

甚兵　アイ、よし〳〵、見て居て進ぜう。早く行つて來さツし……エ、コレ、棒組の粂野郎でも來さうなものだが。

與兵　そんなら頼みますよ。この桶も番太が所へ預けて置かう。

ト箍の掤れた桶を取つてちよつと行つて來ますよ、頼むよ。

甚兵　早く歸らつしやいよ。

與兵　直に行つて來ます。

ト捨て鐘になり、桶を持つて捨ぜりふにて橋の方へ入る。

甚兵　ハテ、あの野郎どもは、もう來さうなものだが。

ト呼びかけて居る。向うバタ〳〵にて、お照、裸足にて、襟へ財布を掛け、一散に走り出で來り、直ぐに本舞臺へ來る。

甚兵　ハイ、駕籠々々、お駕籠參りやせう。お廉く參りますぞえ。

ト呼びかける。お照窺ひ見てゐる

モシ〳〵、駕籠屋さん。

甚兵　ア、、女中だね。お召しなさるのかえ。

てる　アイ、どうぞ乘せて下さんせ。早う乘せて下さんせいな。

甚兵　畏まりました。アヽコレ、マア、野郎めら、何をしてうせるやら。あの又野郎めも、あの位に云つてやつたに……モシ／＼、お急ぎなら、マア、お召しなされませ。

てる　どうぞ早う連れて行て下さんせいな。

甚兵　ようござりやす。サア、お乘りなされませ。

ト介抱して駕籠へ乘せようとする。お照とつかはして爪づき、爪を蹴かへす。此はずみに懐の金財布ブラリと下がる。

てる　ア痛々々。

甚兵　どうなされました／＼。

てる　爰の石に爪づいて、爪を怪我しました。アイタヽヽタヽヽ。

甚兵　アヽ、そりやお危なうござりました。ドレ、莨入れに治丹坊があつたかしらぬ。

ト紙莨入れの内を尋ね、思ひ入れあつて、

アヽ、また折惡くみんなにした。待ちなさい、結へてあげよう。紙があつた。

ト莨入れの半紙を出し、引裂いて足の指の血を拭き、捨ぜりふにて介抱する。この時襟に掛けたる財布、甚兵衞が頭へ觸る。思はず甚兵衞これを見附け、思ひ入れあつて

甚兵　モシ、こりやなんでござりますえ。

てる　金でござんす。

甚兵　アヽ、金かえ。

ト思ひ入れ。捨て鐘、烈しく打つ。

てる　モシ、草履を買うて下さんせいな。

甚兵　なにサお前、お駕籠でござりやす。草履はいりやせぬに。して、お前はお一人かえ。

てる　アイ、一人ぢやゆゑに、犬が怖うてならぬわいな、

甚兵　モシ、そしてお前、どこまでござりますえ。

てる　エ。

甚兵　イヽエサ、先はどこまで行きなさるのだえ。

てる　アイ、與五郎さんの居さんす所まで、連れて行て下さんせ。

甚兵　エヽ、與五郎。そりやどこに居られます。

てる　サア、その居なさんす先は知れぬわいな。

甚兵　そいつは空な尋ねものだ。いま懐から出かゝつた、高もしつかり、娘の身で、徒歩や裸足の駈落ちは、てつ

きりお前は山崎屋の。

てる　よう知つて居なさんすの。

甚兵　モシ、向うから爰へ追手の衆が。

てる　エヽ。

　ト恟りする。向う揚げ幕にて大勢の聲して

皆々　迷子のお照さまア。

　ト呼ぶ。お照恟りして

てる　早う連れて行て下さんせ〳〵。

　ト甚兵衛が後に縋り。慄へて居る。

甚兵　ようござりやす。こんな事がわしらの商賣。お前を尋ねる人が來やうが、滅多に渡す事ぢやアござりませぬ。落ちついてござりませ。

てる　それでも、どうも心が急いてならぬわいな。

甚兵　よし〳〵、今連れて行つて、と云つたところがおれ一人。エヽ、コレ、棒組めらは焦らしやアがる。と云つて一人でも舁けまいし。

　トまた向うにて

皆々　迷子やアい〳〵。

　ト聲する。

てる　アレ、爰へ來るわいな〳〵。

　ト思ひ入れ。

甚兵　アヽコレ、困つたものだ。

　ト蕎麥の荷を見付け、思ひ入れあつて

モシ、お嬢さん、駕籠でお前をやりたいが、棒組が居ないから、あの大勢に見らるゝが否ならば、斯うしなさい、ちつとのうち、この蕎麥荷の中へ隠れなさい。さうして、わし一人で擔いで行き、わしが内から送らせてやりやせう。さうなされませ〳〵。

てる　どうなりと、好いやうにお頼み申します。

甚兵　そんなら爰へ入りなさい〳〵。ドレ〳〵、片荷ずらねえやうに、此方の道具を此方へぶッ込んで

　トとつかはと片荷を明ける。この拍子に紙莨入れを落す。

てる　サア、早う隠して下さんせ。

甚兵　ようござりやす。わしが附いて居ちやア、指でも付けさせる事ぢやアござりませぬ……ソレ、こゝみなさい。頭が危ないよ。

　ト介抱してお照を、蕎麥荷の内へ入れる。また財布プラリと下がる。甚兵衛思ひ入れ。向うにて

皆々　迷子やアい。

トまた呼ぶ。甚兵衛フッと氣を替へ、手早く荷の內へお照を隱す。矢張り捨て鐘、向うを見て居る。若い者大勢、弓張り六尺棒を持ち、鉦太鼓を叩き、向う揚げ幕より出て、下の閒の歩みを通り、東の口へ入る。甚兵衛キッと見送り、

甚兵　この閒に內へ。

ト行燈の火を吹き消す。九ツの鐘鳴る。思ひ入れあつて甚兵衛、荷を擔ぎ、向うへ入る。矢張り捨て鐘。橋の方より與兵衛、小桶に水を汲み、捨ぜりふにて出で來る。

與兵　ヤレ〳〵、甚兵衛さん、待ち遠でごんせう。やうやう水の工面をして來ました。大きにお世話でござりやした。

トあちこち見廻し

こりやアどうだ。甚兵衛どのも、おれが荷もねえワ。こいつはどうだ。サア〳〵、大變だ。荷が見えないワ荷が見えないワ。

トいろ〳〵尋ねる。駕籠を見附けて

イヤア、、こりや慥か甚兵衛どのの駕籠だが、この駕籠があるからは、爰らに甚公も居るであらうが、イヤハヤ、焦らすワ〳〵、大事の一身代だ。尋ねて來にやアならねえ。ドレ一走り。

ト行かうとして又立戻り

イヤ〳〵、おれが荷ばかり探しても、あの駕籠を爰へ捨てゝも行かれまい。何にしろ、甚兵衛が內へ、この駕籠を持つて行つたら、おれが荷の行方が解らう。ア、コレ、とんだ話しだ。あの駕籠甚の內は、慥か田中であつたわえ。

ト四つ手駕籠を一人して擔ぎ、行かうとして、落ちてある莨入れに爪づく。この途端に時の鐘烈しく、床几の上に寢て居る男、手足を伸ばし、グツと伸びをして起き上がる。野手の三、月代、古單衣物を振るつて着る。與兵衛、莨入れを取上げ

與兵　なんだ、莨入れが落ちて居たワ。ア、中になんだか書いた物があるわえ。なんだ。

ト思ひ入れあつて、莨入れの中より書付けを出す。この聲に野手の三、思ひ入れ。手拭を帶に締め、そろそろ出で來る。空へ月出る。與兵衛、書き物を月に透かし見て

ア、、なんだ、一札の事、一つ金二百兩なり。

ト讀む。野手の三ツと前へ廻り、書き物を下から取る。與兵衞こなしあつて野手の三を捕まへる。野手の三、振り切り逃げんとする。與兵衞、野手の三を捕へ面白き立廻りあつて、トヾ與兵衞野手の三、書き物を爭ふ。書き物ちぎれ、初めの方、與兵衞の手に殘り、名宛の方、野手の三の手に殘る。これより兩人、暗がりの思ひ入れ、駕籠を枷によろしく立廻りあつて、駕籠を横に倒す。與兵衞、駕籠へ入り。兩手にて駕籠を横に持ち、思ひ入れあつて

泥坊め。

ト云ふを木の頭、野手の三、思ひ入れあつて、書き物を透かし見る。與兵衞、思ひ入れあつて

とんだ奴だ。

ト云ふ。キザミにてよろしく、

拍子幕

六幕目　田中駕籠屋の場

役名――夜蕎麥賣り、與兵衞實ハ南方十次兵衞。三原有右衞門、質屋、善六。駕籠舁き、土手の又。同、田中の辰。同、入谷の金。下女、おなべ。藝者、お光。甚兵衞女房、お賤。入間彥助。惡者、野手の三。山崎屋與五郎。山崎屋娘、お照。甚兵衞妹、お早。駕籠屋甚兵衞。

本舞臺、三間の間、茅屋根の二階作り、小屋根に引窓あり、反古張り障子を建て、よき所に丸太階子を掛けたる上がり口、下家は反古貼りの壁、暖簾口一枚開きの押入れ。上の方寒竹の藪の外、隣りの二階を見せ、四ツ目垣に葉鷄頭、紫苑、萩、秋草の盛り、よき所に井戸、細釣瓶下ろしあり、門口にかご甚と書いたる掛け行燈、路地口、すべて田中駕籠屋の內の體。外に前幕の蕎麥荷を下ろしある。隣り二階の琴唄にて幕明く。

トお賤、前垂れがけ女房、女髮結ひにて、お光、藝者の形、平常着にて鏡臺に向ひ、お賤、お光が髮を結うて居る。おなべ、下女の形、團子を丸めて居る。この見得にて幕明く。花道へ入谷の金、田中の辰、駕籠舁きにて土手の又を駕籠に乘せ、花道の內を捨ぜりふに

ト駕籠の稽古して居る。

なべ　サア〳〵、お賤さんえ。月見の團子も、わたしがみんな丸めてしまうたぞえ。

しづ　そりや大儀でござんした。サア、お光さん、もうようござります。ヤレ〳〵、お前もさぞ待ち遠でござりました。今日はどうでも月見ゆゑ、大分仕事がござんしたわいなア。

みつ　わたしも昨夜結うてもらはうと思うたに、お屋敷がござんして、結ふ間もなう撫で付けて、今日また下谷のお客と、根岸のお下屋敷ぢやわいな。

しづ　そりや大方夜が更けませう。今日はマアこれで堪忍しなさんせ。また明日は結ひ直してあげようわいな。

みつ　ナンノイナア。隨分ようござんす。外の手と違うてお賤さんの結はしやんしたは、また違ふわいなア。

なべ　イヤモウ、そりや世間で評判のある、濡れ髪のお賤さん、わつちもお前の弟子になつて、濡れ髪が弟子の塵紙のおなべといふ、キッとした女髪結ひになる氣ぢやわいな。

しづ　ア、モウ、あんまり習はいでもよいものぢやわいな。

ト手を拭いて居る。門口の三人稽古を止めて

又　ヤレ〳〵、駕籠の中でおらア龜の尾が痛かつた。

辰　どうでも龜井戸だけに、龜とひねるやつサ。

金　又は乘りざまが惡い。ビク〳〵として舁けるものぢやアねえ。

又　よしてもくれろ。この五月からおらア乘りづめに乘るやつサ。

辰　時にお賤さん、頭はどこへ行かれたかえ。

しづ　ナンノイナ、昨夜遲う戻らしやんして、眠いと云うて二階に寢てぢやわいなア。

又　モシ、ちよつと起して來ようかえ。

ト行かうとする。

しづ　ア、コレ、起すと跡で機嫌が惡い。構うて下さんすな。

金　モシ、お賤さんえ。あの蕎麥荷はどこから來て居るえ。

しづ　サレバイナ。昨夜主が、あの荷を預かつたと云うて擔いでござんして、主の駕籠は先へ預けてござんしたわいな。

なべ　ほんに、道理で門に風鈴の荷があると思つた。そんならわたしやア、明日結うておくれえ。

しづ　アイ〳〵、どうぞ今日は免して下さんせ。
みつ　そんならわたしも行きやんせう。
　ト行かうとして、
　ほんに、お早さんは、どこへござんしたえ。
三人　成る程、お早さんが見えねえの。
しづ　あの子は月見の買ひ物に行てぢやわいな。お前、歸りがけに逢ひなさんしたら、戻らんすやうに云うておくれえ。
みつ　アイ〳〵。合點ぢやわいな。
又　お光さん、送つてあげようか。
みつ　アイ、おかたじけ。
辰金　エヽ、附合ひなさるの。
なべ　わつちを送つておくれぬか。
三人　狼に頼みな。
なべ　オヤ、好かねえなう。
みつ　お賤さん、明日え。
しづ　ようお出でたえ。
　ト二階の唄になり、お光おなべ向うへ入る。
又　アレ〳〵、あの唄はどこだ。
辰　ありやア隣の下屋敷よ。

金　アヽ、今夜の月見に洒落るのか。ほんに今日は、今戸の八幡様も影祭だな。
又　さうサ、いざり屋臺を拵らへたな。ちつと囃しに行かうか……アイヤ、そりやアさうと、月見の支度はいゝかえ。
しづ　今おなべどのが、いし〳〵を拵らへて居てぢやわいな。
三人　ドレ、見せなさい。
　ト桶の中の團子を見て
辰　コレ、見なさい。斯うあらうと思つた。うぬが面を見るやうに丸めやアがつた。
しづ　よいやうに直して下さんせ、
三人　オツと合點だ。ドレ、丸めべいか、
　ト捨ぜりふにて團子を丸める。お賤、七輪を引寄せ、土瓶を掛け、煮花を仕掛ける。聖天の鳴り物になり、向うより善六、質屋にて、スタ〳〵と出て來り、門口へ來り
善六　お賤さん、お急がしいの。
しづ　善六さんかえ。
善六　アイ、昨夜の約束、甚兵衛どのはお内かえ。

又　なにサ、頭は二階に
　ト云はうとする。
しづ　コレ、……イエ、留守ぢやわいな。
善六　ア、、また留守かえ。さうあらうと思つた。毎日毎日、留守だ〳〵も久しいものだ。若い手合ひは二階と云へば、お内儀は留守だと云はれる。どうするものだ、留守ならよしサ。コレ、お賤さん、いつぞや千住で、忘れはしまい、十日限りだと云ふゆゑに、香合一つが二百兩。あいつもこの頃惡い噂。マア、無駄な事は後へ廻して、コレ、かみさん、請けらるゝなら請けなさい。あの時わしが達引で、質に取つたばつかりで、こなさんは勤めをしねえぢやアねえか。すんでの事に賣られるところを、善六が料簡一つで、勤め奉公に行かねえよ。サ、請けて下さい、と云つたところが二百兩の金はあるまい。お賤さん、サア、來なさい。
　ト お賤が手を取つて引立てる。
しづ　善六さん、わたしをどうしなさんす。
善六　ハテ、香合とお前と入替へにして、二百兩埋め方をするわな。サア、來なさいな。
しづ　エヽ、放しなさんせ。

又　なんだ、この質屋の唐變木め。頭が留守だと云ふにかみさんを捕まへて、どうしやアがるのだ。
　ト振り切る。三人の者これを見て
辰　さうだ〳〵、なんだ、入替へ物にかみさんを連れて行く。コレエ、、うぬが内ぢやア、人間で質の出し入れをするか。面白いワ。コレ、盆前にぶッ殺した結城木綿の單衣物と、黑七子の帶の代りに、この金野郎をやるから、入れ替へて貸してくりや。カウ、金公、ちよつと行つてくりや。
金　行かねえでどうするものだ。コレ、てつか質屋のさはてん野郎め、うぬが内へおれをお連れ申してな、この辰が雜物と入れ替へて貸してくりや。コレ、代物が米を喰ふよ。三度づゝ据ゑ膳で、菜肴を付けやアがれ。御酒もあがるぞ。とつけもねえ狼唐人めだ。
善六　なんだ、この極樂蜻蛉めら。うぬらが知つた事ぢやアねえ。死んだやうにしてうしやアがれ。
又　おきやアがれ、大きな頤をつくと、番頭に引渡して、吠え面をかゝせるぞ。
辰金　この野郎を連れて行くべい。
三人　うしやアがれ。

善六　どうしやアがる〳〵。
しづ　ハテマア〳〵、ようござんすわいな。
三人　退きなさい、連れて行くわい。
善六　否だわえ。
三人　うしやアがれ〳〵。
ト屋體囃子になり、捨ぜりふにて三人、善六を引立て行く。お賤支ゆるを振り切り、爭うて向うへ入る。お賤跡を見送り
しづ　ア、コレ、手荒うしなさんすな。ほんに若い衆といふ者は、騙さんしてもよい事を。ア、、氣の揉めた。
ト思ひ入れあり、向うを見やるうちに、七輪の土瓶煮えかへりて、パツと灰立つ。お賤、駈け寄つて土瓶を取上げ
これはしたり、そこら中が灰だらけになつたわいな。ドレ、出花をちよつと。
ト茶碗へつぎ、二階へ行かうとして
イヤ〳〵、また起したとて、いつもの小言。目の覺めるまで。
トよき所へ置き、また茶碗を取つて茶をつぎ、盆へ載せて、二階の方に心遣ひあつて、押入れ方へ差寄り、思ひ入れ。合ひ方になり
モシ〳〵、與五郎さま、さぞお氣詰まりでござりませうが、樣々と惡いお噂。主にも譯を打明けて、云はうと思へど、その間もなう。目が覺めたなら間を見合せ、あなたの事を……モシ、お茶一つ上げませう。
ト開きを明けかける。内より與五郎、手を出し茶碗を取る。この時揚げ幕にて
三人　打ッちやつて置きやアな〳〵。
三　ハテ、好い加減に料簡しやれな。
トこの聲を聞きお賤、開きをたてる。屋體囃子になり、向うより野出の三、下駄がけ、柄樽を提げ、三人をなだめながら捨ぜりふにて出で來り
三人　兄イや、打ッちやつて置きやな〳〵。
三　ハテ、もういゝわえ。向うは一人、てまへ達は三人、一つづゝぶつても堪らないワ。質屋には又用もあるものだ。好い加減にしやな〳〵。
又　サ、用があるから頼めばの、くらひそばへた事を云ふから、始まつたいさくささ。
三　おれも今日は、てまへ達の親方といふ、駕籠甚が所へちつと用があつて、一升提げて來たのよ。亭主は内か。

三人　まだ寢て居られるわな、
三　起きた時分なら行つて逢はうか。
三人　サア、來さツし。
　ト鳴り物の切れにて本舞臺へ來て
三　ハイ、おかみさん、御免なさい／＼。
三人　サア、入らつしやい／＼。
　ト皆々内へ入る。
しづ　つひに見馴れぬ若いお方、主はどこからござんしたえ。
三人　アイ、この男はね。
三　道行はわしが話しやせう。モシ、お前がおかみさんのお賤さんかえ。こりやアお初にお目にかゝりやした。わつちやア野手の三といふ、無商賣で暮らすづるけ者サ。友達手合ひが云ふには、遊んで居ずと、ちつと夜駕籠にでも出るがよいと申しやすから、何も商賣と、差詰め此方の頭を頼んで、この手合ひ同然に、辻駕籠の弟子入りに、わざつと一升提げて來やした。おかみさん、今からお世話をお頼み申しやす。
　ト柄樽を出す。
しづ　これはマア改まつた。いらぬ事を、よしになさんせいで。甚兵衞どのも昨夜遲う歸りまして、自由ながらまだ寢て居られまする。目が覺めたら話しやんせう。遊んで行きなさんせえ。
三　アイ／＼、お茶なうござりやす。モシ　おかみさん、ちつと外に聞きたい事がござりやすが、爰の妹御のお早さんとやらは、なにかえ、まだ御亭主はねえかえ。
しづ　アイ、あの子は、まだ獨り身ぢやわいな。
三　人の世話にでもなつて居なさるかえ。
しづ　イ、エ。
三　おもしろ狸。
しづ　エ。
三　とんだ化け物だ。
　ト眞面目になり、お賤、思ひ入れ。
しづ　モシ、三さんとやらえ。どうでも主の目の覺めるのは間がござんせう。ならう事なら後方に。
三　アイ、併し又と云つても臆劫だ。起きなさるまで待ちやせうよ。
しづ　でも昨今なお前とわたし、馴染のないので、なんの話しも。
　ト押入れの内へ心遣ひあつて、歸したき思ひ入れ。

又　カウ〳〵、三公や、おらが内へ來さツし。
三　ア、又が内はこの裏か。
長　下齒が剛的だア。歩んで見や。
三　嬶アがあるか。
又　三公、ソレ千住の彼のよ。
三　久し振りでとんだ一座だ。一升取るべい。
又　そいつは話せるの。
三　そんならおかみさん、又が所に居やすよ。起きさしつたら、必らずわつちを。
しづ　アイ、知らせやせう。
三　お賤さん、待つて居やすよ。
三人　サア來さつし。
ト合ひ方になり、野手の三、三人に交り、捨ぜりふにて門口路地の内へ入る。此うち二階の障子を明け、甚兵衞、引窓より覗き居る。
しづ　なんぢややら、つひに見た事もないあの男、見掛けからどうやら一癖ありさうな。殊に匿まふ押入れの。
ト寄らうとする。引窓より
甚兵　嬶アや〳〵。
ト覗いて呼ぶ。お賤恟りして
しづ　エ、お前、目が覺めたかえ。
甚兵　今の若い者はなんだ。
しづ　野手の三とやらいふ男がな、駕籠の弟子になりたいと、お前の起きなさんすを、あの又どのゝ所で
甚兵　待つて居るか。
しづ　アイ。
ト甚兵衞、思ひ入れあつて
甚兵　野手の三、聞いた名だが……オヽ、其奴は慥か胸氣な奴だが。コレ、嬶アや、質屋の善六が來たら留守だと云へよ。
しづ　サア、その善六どのがな、今も來て、あの香合を流すか、但し二百兩金を拵らへるか、勤め奉公にアノわたしを。
甚兵　エヽ、打ツちやつて置け。出來る時にやア出來やうわえ。
ト聖天の鳴り物になり、向うよりおなべ、足早に出で來り
なべ　モシ〳〵、お賤さん〳〵、おかみさんが急にお前を呼んで來いとの事。ちよつとお出で〳〵。
ト お賤が手を取つて引ツ張る。

しづ　ア、モシ、先刻も云ふ通り、わたしは今日はどうも
なべ　ハテ、ちよつと來ておくれな。
　ト引ツ張る。
甚兵　コレ／＼嫁アや、外の所ぢやアない。ツイ行つてあげやな。
しづ　それぢやと云うて、わたしやあの押入れに。
甚兵　ナニ。
　ト思ひ入れ。
しづ　追ツつけ行かう程に、マアお前は先へ。
なべ　サア、一緒にお出でな。
甚兵　ハテ、ちよつと行きやれな。
　ト唄になり、びんしやんとして押入れへ心を殘し、お賤をおなべ、捨ぜりふにてせり立て、向うへ入る。甚兵衛、二階より跡を見送り
妹も嫁アも居ないから、心措きなく、あの子の素性。
　ト合ひ方になり、二階の障子を明ける。お照、蔦蔴の形にて、財布へ入れたる二百兩の金と、書置を持つて居る。
コレ／＼、娘御さん、お前、ひもじくはないかえ。
てる　イエ／＼、まだ欲しうはござんせぬが、昨夜から深切に、いたはつて下さんすお前、お禮は詞に述べられませぬ。有り難うござりまする。
甚兵　なんの禮に及ぶものかな。聞けばお前も、大身代のあの山崎屋の娘御とあれば、まんざら先の知れない人でもなし、定めて聟どのが、お前の氣に入らぬのか、また男がむづかしく、よんどころなく淵川へ、身を沈めると云ふやうな事と見たゆゑ、それで菰荷へ入れて連れて來たは、お前の心意氣を聞いて、内へ戻して上げようと思つて、昨夜から二階へ隱し、妹にも嫁アにも沙汰をせぬのは、悪く氣取ると小むづかしいから。コレ、大概な事なら、わしと一緒に、晩には歸りなさいよ。
てる　成る程、深切なお詞、嬉しうござりまするが、わたしやその聟さんが氣に入らぬので、男御に惚いたのと、申すやうな事ぢやござりませぬ。—一旦家出したからは、もう内へは歸られませぬ。
甚兵　ア、内へ歸られぬとは、外に色でも。
てる　エ、なんのマア、さういふ事ぢやござんせぬ。わしたが殿御は與五郎さん、大身代とはいふものゝ、また部屋住みの心に任せず、苦勞さしやんす二百兩、どうぞ心を休めうと、何をお隱し申しませう。親御さんの目を

忍び、持つて參つた二百兩、與五郎さんに渡したうござりまする。この金渡したその跡は、所詮わたしは。

ト財布入りの金を出し、思ひ入れ。甚兵衛見て

甚兵　そりやアノ、ほんの金か。

てる　アイ、二百兩ござりまする。

甚兵　ハテ、有る所には。

トぢろ〳〵見て

その書いた物はなんだ。

てる　アイ、こりや少つと私しが。

ト思ひ入れ。

モシ、そこらに、私しが櫛は落ちてはござんせぬかえ。

甚兵　ナニ櫛が。

てる　アイ、七寶繋ぎの蒔繪の櫛が。

甚兵　アヽ、そりやア昨夜落しはしねえかの……マア、その書き物をちよつと。

ト寄るを、ちやつと懷中して

てる　イヽエ、こりやどうも。

ト思ひ入れ。

甚兵　ハテ、大枚の二百兩、娘の身分で。

トきつと目を附ける。向う揚げ幕にて

しづ　お早さん、わたしが持つてあげようわいなア。

トこれにて甚兵衛、障子をピッシャリと閉す。テンツツになり、向うよりお賤、枝豆を持つて出て來る。跡よりお早、提げ籠に入れし蛤を持ち、片手に薄二三把持つて出て來る、花道にて

はや　モシ、お賤さん、わたしが持つて行きやんせう。サ、爰へ寄越しなさんせ。

しづ　これはしたり、お前ばかり持つ役でもござんすまいわたしが持つて上げようわいなア。

はや　して、兄さんは目が覺めてかえ。

しづ　アイ、慥か起きてゞござんした。月見の買ひ物も、其やうに忙しなうせいでも濟む事を、朝からお前を使ひに出して、わたしや氣の毒ぢやわいな。

はや　イエモウ、兄さんの忙しいは、いま始まつた事ぢやござんせぬ。さぞお前、うるさうござんせう。

しづ　イエモウ、あの氣性を知らいでは、どうで一日も女房になつて居られぬわいなア。ホヽヽヽ。サア、來なさんせ。

ト矢張りテンツヽにて、兩人本舞臺へ來り

はや　兄さん、いま戻りましたぞえ。

ト上の方の井戸端にある手桶の中へ薄を入れる。二階より甚兵衛下りて來り

甚兵　大分使ひが遲かつたの。お賤はもう歸つたか。

しづ　ハイ、早い筈ぢやわいな。ツイ撫でつけるばかりぢやわいな。

甚兵　道理で早かつたな。コレ、蛤を買つたか。

はや　アイ、買うて戻りました。

甚兵　よく洗つて、砂を吐かして置かッし。

はや　アイ、洗うて置きやせう。

ト立たうとするを甚兵衛留めて

甚兵　コレ〳〵、嬶アにさせやな。

はや　なんのいな、ちよつとわたしが。

甚兵　ハテ、てまへにやア話しもあり。ドレ、寢轉んで。

ト思ひ入れ。

嬶アや、枕はないか。

しづ　アイ、二階にござんした。ドレ、取つて來て。

ト行かうとする。甚兵衛うろたへ

甚兵　ア、コレ、二階なら行くにやア及ばぬ。そんなら寢轉ぶにも及ばぬ。サアコレ、お早、ちよつと來さつし。話しがあるよ。

はや　アイ。

ト合ひ方になる。

甚兵　妹や、今てまへに蛤を洗はさず、水仕業をさせねえも、手足を太くしまい爲に。この間から云ふ事だが、お主はどうでも、てかけ妾の口があつても、その奉公は不承知か。

はや　アイ、いま此やうに兄さんのお世話になる身を以て不承知のなんのと、其やうな我まゝな事も申しませぬが、

甚兵　サ、我まゝな事を云はねば、コレ、爰に嬶アも聞いてゐるが、まさかの時に力になるは同胞の役だワ。お主は知るまいが、いつぞや牢へ入つたも、元は金から起つた事。その時はまだ竹の塚に居た時よ。あの土地にも住居がならず、この頃田中へ引ッ越したが、その砌りは旣に嬶アも賣らうとしたが、その借金が今におれが骨がらみ、質屋にはせがまれる、屋敷からは催促。イヤモウ、どうにもなるものぢやアねえ。

はや　サア、それも大概お賤さんの、噂に聞いて知つて居やんす。よし又お前が、事譯云うて頼まんせいでも、親のない跡は兄さんは親も同然、お前の爲になる事なら、わたしがやうな女でも、妾奉公、月圍ひ、勤め奉公に賣

られても

甚兵　大事がなくば、相談して

はや　サア、あげたいものぢやが、どうもわたしは

甚兵　亭主があるか。

はや　アイ。

甚兵　亭主はなんだ。

しづ　ハテ、それまで顯に訊かいでも。

甚兵　コレサ、兄が訊くのに誰れに遠慮。妹が亭主は、

はや　アイ、侍ひでござります。

甚兵　ア、、武士か。名はなんといふ。

はや　それはどうも

ト思ひ入れ。

甚兵　云はれねえと。ハア、あんまり疎な者でもあるまい。

はや　サア、身状が良いか惡いかは、親兄弟の許しなき、相對づくのころび合ひでも、キッとした夫は侍ひ。今にも尋ねてござんすりや、女夫にならにやならぬ約束。それゆゑどうも兄さんの、手詰めも知つても儘ならぬ、我が身ながらも主あるわたし、聞分けあつて、巡り逢ふまで

甚兵　兄が所の居候ふ、妹ながら愛嬌も、色氣も持つた生れ付き、いま金になる最中に、向うの知れぬ男を待つは

しづ　分明ならぬ事ながら、先のお方も侍ひの、今にもござんすその時は、云はゞお前は兄の事。

はや　武家の小身不足なら、左團扇の樂隱居、孝行盡すは妹の役。

甚兵　駕籠の蒲團も綾錦の、あんぺらで張る四つ手駕籠、さて息杖は紫檀か黒檀。

はや　なんなとお前の好き次第。

甚兵　矢ッ張り駕籠を舁かせるか。コレ妹、お主は一人呑みこんだが、いよ〳〵尋ねて來るといふ、證據があるか。

はや　ござりまする。互ひに巡り逢ふといふ、證據は爰に。

ト合ひ方になり、片脇の針箱の内より、袱紗に包みし片割れの茶碗を出し

モシ、兄さん、この茶碗の片割れを、持つてござるがわたしが夫、繼ぎ合すれば夫婦一對。

甚兵　割れた茶碗が證據なら、お主が亭主は武士ぢやアあるまい。てつきりそりやア

はや　エ。

甚兵　燒繼屋であらう。

しづ　何をマア阿房らしい。コレ、お早さん、云はゞ茶碗

のその缺けは、お前の爲には殿御おやぞえ。
はや　アイナア。云はしやんすりや男も同然。わざと今日は祝ひ日の、それを敬まふこの神棚、茶碗の片々を。
ト袱紗のまゝ神棚へ茶碗の片々をあげる。
しづ　ほんに、いま貰うたこの酒、お神酒に上げて置かうわいな。
ト柄樽を出す。甚兵衞見て
甚兵　成る程、酒があるなら、こいつは幸ひ、鼠入らずに鮭の燒いたが。ドレ、一杯やらうか。
トずつと立つて押入れへかゝる。お賤うろたへ、引きな押へ
しづ　ア、滅相な。どうして爰に。
はや　でも今朝までもあの膳棚に。
しづ　ア、コレ、それは先刻に、あの猫が。
甚兵　引いて行つたか。
しづ　アイ。
はや　それでも今まで。
しづ　ア、申し、粗相な事をしやんしたわいな。
ト思ひ入れ。お早、甚兵衞、合點のゆかぬこなし。唄になり、向うより有右衞門、彥助、羽織大小にて出で來り、跡より以前の善六付いて來り、花道にて三人非打ちして、善六は路地の內へ入る。兩人、門口に立つて
有右　駕籠の甚兵衞、宿に居るか。
甚兵　これは有右衞門さま、ようお出でなされやした。
ト思ひ入れ
有右　サ、彥助どの、貴公にも。
兩人　心得ました。
ト兩人上へ通る。
甚兵　こりやア彥助さまも、御同道でござりまするか。
彥助　今日は內々用事あつて參つた。
有右　ちと密々に。
甚兵　承りませう。コレ嬶アや、てまへは妹を連れて、わざと團子でも拵らへねえ。
しづ　アイ、もう蒸かすばかりでござんす。
はや　蒸かすといへば、あの蛤も洗うて置かうわいな。
しづ　さうしやんせう。
甚兵　コレ、次手に酒も燗をつけさッし。
しづ　合點ぢやわいな。
はや　ハイ、あなた方、ゆるりとお話しなされませ。

ト唄になり、お賤、蛤と團子を持ち、お早、樽を提げて奥へ入る。有右衛門は始終お早に見惚れ居る思ひ入れ。甚兵衛、思ひ入れあつて

甚兵　モシ、旦那方。して今日のお出では、アノお預かり申した

有右　イヤ、その儀もあれど、内々頼みと申すは、コレ、この人相書ぢやて。

ト懐より繪姿を出す。

甚兵　エ、、その繪姿を。

彥助　甚兵衛へ頼みとは、即ちあれなる人相書。其方も聞いたであらう。先達て切腹なし、獄門に掛け置きたる、寶の盗賊南方十次兵衛、彼奴が死首、紛らはしくは存ずれども、もしや身寄りの者どもが尋ね參つて、誠か嘘か、實正糺さん其ために、倉岡どのゝ計らひにて、獄門に掛け置くところ、案に違はぬ首の紛失。跡にて様子を聞くところ、十次兵衛には高頰に一つの黒子あり、彼の死首に黒子のないのは、合點行かずと、面體とくと評議の上にて。

ト此あたりよりお早、銚子杯臺を持ち、何心なう出で來り、後に窺ふ。

甚兵　エ、、その南方十次兵衛といふ奴は、この間獄門に掛りましたを、アノ、盗んだ奴が。

ト後にてお早、思ひ入れ。

有右　サ、もしや身寄りの者なるか、又は十次兵衛めが生き殘り、隠れうせるも計られずと、認め參つた人相書。風來者の入込むこの家、もしや似寄りの者あらば。

ト人相書を渡す。甚兵衛取つて

甚兵　畏まりました。幸ひ爰へ貼り置いて、入込む奴等を一々吟味。

ト鏡臺の鬢付け油をつけ、繪姿を傍の六枚屏風へ貼り置き

彥助　斯様に致して貼り置けば、町々小路の建て札同然。

有右　首を盗んだ十次兵衛めは高頰に黒子、彼奴が詮議と

甚兵　詮議しぬいて甚兵衛が

はや　エ。

ト悄りして銚子杯を取落す。三人も思ひ入れあり

甚兵　コリヤ、妹、何をうろたへて。

はや　ハイ／＼、これはマア不調法な。御免なされませ御免下されませ、あなた方、お免されませいな。

トあちこちとする。有右衛門、思ひ入れあつて

有右　コレ、コレ〳〵、關屋どのではないか。

はや　有右衛門さま、お久しうござります。

有右　てもさても、一別以來でござる。

甚兵　コレ〳〵お早。誰れも呼びもしねえに、なぜ爰へ來たよ。

はや　アイ、御酒の燗が出來たに依つて。サア、一つ飲みなさんせ。

ト側へ差寄り思ひ入れ。

甚兵　コレサ、あなた方のお出でといひ、不作法な。あなた方へ御馳走には、そんな鬼殺しは上げられない。何も用はない、奥へ行けよ、行けよ。

はや　アイ〳〵、左樣なら有右衛門さま、ゆるりとお話しなされませ。

ト行かうとするを、有右衛門引留め

有右　ア丶、コレ關屋どの、ちと爰で、話して行きやれ行きやれ。

彥助　酒なら身共もお相手いたさうか。

ト兩人お早へしなだれる。

甚兵　モシ〳〵、お前さん方は、滅多に妹に足をお附けなされますな。これにやアお前、亭主がござりますよ。

兩人　ヤ、アノ、亭主があるか。

甚兵　ある段か、しかもお侍ひでござりやす。

兩人　イヤア。なんだ、侍ひだ。

彥助　同じ武士とは、ちと氣がもめの吉祥寺。

有右　して、その武士の家名は、なんと申すな。

トこれにてお早、當惑の思ひ入れにて

はや　サア、その名はどうも。

兩人　申されぬとは、あやかり者ぢやな〳〵。

甚兵　モシ〳〵、如何にわしがやうな者でも、側に兄が居りまするわな。ちつとマア……コレ、コレ妹、われも爰に居る事はねえ。勝手へ行つて、團子の手傳ひでもしやれな。

はや　アイ〳〵、參りまするが、今お前が屏風に貼りなさんした物を。

ト云ひ寄るを隔て丶

甚兵　これサ、何も女の見る物ぢやアねえ。勝手へ行けよ。

はや　でも、何やら屏風に。

甚兵　ハテ、行けといふに。

はや　アイ、參りまするわいな。

ト屏風へ心を殘し、奧へ入る。

有右　コレ〳〵、甚兵衞、この間中から、妹のお早が事を賴んで置くが、どうでもお主は不承知か。

甚兵　私しは不承知ぢやアござりませぬが、妹めが女房約束した、先の男が侍ひと、それもたつた今聞きました。男まさりの妹め、こりやアお前樣のお賴みは

有右　斷わると申すのか。

甚兵　左樣なものサ。

彥助　有右衞門どの、この者が斷わるとあれば、此方も亦ちよつとも待ちませぬぞ。

有右　左やう〳〵、妹が事が出來ぬなら、丈左衞門どのより、お主が方へ。

彥助　この彥助が預け置いた胡蝶の香合、いま渡しやれ。

甚兵　へイ、お後から持つて參りませう。

彥助　イヤ〳〵、後も先もいらぬ。身共が手から渡した品、身が受取るに誰れに遠慮。サ、甚兵衞、渡しやれよ。

甚兵　ハテ、丈左衞門さまへ私しが持參いたせば、いゝぢやアござりませぬか。

有右　イ、ヤ、身共兩人が受取らう。甚兵衞、渡されぬか、渡されぬか。よもや渡されまい。どうして〳〵、二百兩といふ金がなくては渡されまい。

甚兵　どうしましたと。

有右　知つて居るわえ。善六、來やれ。

善六　畏まりました。

ト路地より出で來り

コレ、甚兵衞どの。今日あなた方に、わしへのお尋ねで、成るたけは隱したが、もう叶はねえ。こなたが香合を二百兩に、わしが內へ預けた事も、みんな申し上げてしまつたワ。

彥助　あの通りだ。主人の大事な道具を預かり、二百兩の質に入れ置き

有右　云はゞおのれは引負ひ同然。使ひを寄越せば嘲弄し、相も變らぬ挨拶いたし

善六　質屋も每日催促に、足を運べは、ぶち打擲。イヤハヤ、おへない代物でござります。

有右　只今渡すか、返答ぶて。

彥助　甚兵衞、どうだ。

甚兵　返答しませう。

有彥　すりや、いま戾すか。

甚兵　否だ。

三人　ヤ。

甚兵　返す事はならねえ、否だ。

有彦　そりや又なぜ。

甚兵　盜み物だワ。

三人　ヤア、

甚兵　鴻野の家のあの寶、盜みは盜めど、置き所がないゆゑに、おれを頼んだ胡蝶の香合、此方に金が入用ゆゑ、質に置いたがなんとした。金の工面の出來るまで、待たつしやりませ、否なら直ぐに代官所へ、其方から持出しやれ。盜み物ゆゑ、つうくつに、置いたがどうした。賣つたら大事か。待たぬと云へば命づくサ。

ト のれん口より出刃庖丁を引ッ下げ出で、疊へ突き立て

歸られざア死ツくら。高で金なら二百兩、出來さへすりやア請けてやる。キリ〳〵さぶ達、歸らつしやい。

ト きつと云ふ。三人ブル〳〵慄へ出し

彦助　有右衞門どの〳〵、サヽ、歸らつしやりませ〳〵。

有右　左やう仕らう。身も最前より罷り歸らうと存じ居つた。ヤイ〳〵質屋、われは何しに來た。

善六　お前方がお頼みゆゑに參りました。

彦助　ヤイ〳〵〳〵、たわけめ、此奴、よく嘘をつく奴だ。我れ〳〵は歸る。われも歸れ。

善六　歸るのをお前方に教はるものか、併し親方の前へ、此まゝにはどうも歸られまい。

ト 門口へ出る。

甚兵　歸り憎くば出刃庖丁の、劍の舞を。

ト 立ちかゝる。皆々花道へ逃げる。

三人　アヽ、コレ〳〵、歸り申す〳〵。

ト 三人花道へとまり、思ひ入れあつて

善六　斯うもあらうか。

有彦　なんと〳〵。

善六　運つきて

有右　嵐が誘ふ惡企み

彦助　切つてしまつた金の鶴十。

有右　お早どのには亭主が出來る。

彦助　香合は手に入らず。

有彦　これぢやア築地へ歸られめえ。

善六　ハクショ。

ト 合ひ方になり、三人捨ぜりふにて向うへ入る。甚兵



初演當時の錦繪　　五世幸四



郎の菩兵衛　五畫岩井半四郎のお照

衛出刃を持ち、跡を見送り

甚兵　二本棒だといつて怖いものか。此方が太けりやア其方も太いワ。質を請ける二百兩がナニ有るものか。よし有つたとて二百兩ナニやるものか。大枚の二百兩。

トよき時分二階よりお照出かゝり、引窓より下を窺ふ。甚兵衛、お照が金の事を、フト心づきたる途端に、鏡臺にかけてある鏡に、引窓よりお照の影うつるを見付けし思ひ入れにて、キッと見て、持つたる出刃を口に啣へ、キッと思ひ入れ。これをキッカケに時の鐘、隣り二階の唄になり、蟲の音して、お照思ひ入れ。甚兵衛、井戸端の石を持つて來り、奥の方へ思ひ入れあつて、薄を入れし手桶を引ッ下げ出で、石の上にて出刃を磨ぐ事。思ひ入れあり、始終合ひ方、唄切れる。甚兵衛、手拭へ出刃を包み後へ挾み、跡を片付け、合ひ方、捨て鐘にて、そろり／＼と二階へ上がり

姐さん／＼、ひもじからうぞえ。

ト障子を明ける。

てる　イエ／＼、お構ひなさんすな。モシ、どうぞお前アノ、與五郎さんに逢はせて下さんせいな。

甚兵　キッとわしが逢はせて進ぜるワ。姐さん、お前、先刻見せた物は、有るかえ。

てる　先刻見せた物とは、なんでござんすえ。

甚兵　ハテ、二百兩の金は、持つてござるかといふ事よ。

てる　アイ、そりや持つて居りまするわいな。

甚兵　サ、その金の事サ。與五郎さんに渡さうから、わしに預けな。

てる　アノ、この金をかえ。

ト財布へ書き物を卷きつけ出す。

甚兵　サ、おれに渡しな。

ト取らうとする。

てる　ア、モシ、こりやお前に渡す程に、アノ與五郎さんに、どうぞ今逢はせて下さんせえ。

甚兵　逢はせてやるよ。その金を見せな。

てる　これかえ。

ト出す。甚兵衛、財布を摑み、思ひ入れあつて

甚兵　サア、連れて行く。わしと一緒に。

てる　アイ、いま行くのかえ。サア、參りませう／＼。

ト二階の上がり口の方へ行くを、後より出刃にて切り下げる。お照、苦しみ

ア、コレ、與五郎さんに、逢はせて下さんせ／＼。

甚兵　やかましい、聲を立てるな〳〵。

ト金をもぎ取り、また切りつける。

てる　ア、コレ、わたしを切るのかいなう。コレ、どうぞ與五郎さんに逢うて、この金渡したうござんす。コレ、どうぞ與五郎さんに。

甚兵　エヽ、やかましい。逢はせるワ。聲を立てるな〳〵。

ト滅多切りにする。この時隣二階にて何か太鼓入り所作の鳴り物になり、この音に紛らし、二階にて甚兵衛、お照と立廻りのうち、財布を奪ひ合ひ、お照、表の方へ投げる。この財布、書き物もろとも引窓の引戸の間へ入る。程よく繩へまとひつく。甚兵衛、お照を仕留め、思ひ入れあつて、死骸を二階の壁際へ押しつけ、上へ寢莫蓙をかぶせ、手に血の附いたる思ひ入れにて小屋根へ出、引窓の間へ手を差引み

金は慥かに引窓の間に。

ト手を差込み、尋ねる思ひ入れ。この時向うにて

與兵　エヽ、向うの内かえ。忝なうござりやす。

ト、テンツヽになり、與兵衛、前幕の形、夜蕎麦賣、絲立てへ一腰を包み、これを四つ手駕籠の棒へ結び付け、息杖を腰に差し出で來り、花道にて門口を見て

ア、、向うの門口にあるは、おれが蕎麦の荷だわえ、さんなら、あすこが甚兵衛が内だらう、やうやう尋ねつけた。

ト矢張りテンツヽにて本舞臺へ來ると、此うち甚兵衛は二階より下りて、井戸端にて出刄と手を洗ひ居る。

與兵　モシ、甚兵衛どのは内かへ。

甚兵　オイ、誰れだ〳〵。

ト出刄を疊の下へ隠し

甚兵衛は内に居るが、誰れだ〳〵。

ト門口を見て

ア、、蕎麦屋の與兵衛どのか。

與兵　コレ、甚兵衛どん、こなさんマア、昨夜ちよつと預けたわしが荷を、先へ持つて歸つて、こなさんの内には打ッちやつて置いたゆゑ、捨てちやア歸られず、コレ、あの鶯籠も、コレ、息杖も持つてよ、慥かに渡しましたよ。

甚兵　イヤモウ、昨夜なにサ、こなたの行つた跡へ、生酔ひが大勢來てノ、何か蕎麦を食ふ〳〵と云ふから、こいつはウッカリとはならねえ、此奴等は、てつきり[illegible]平を、性悪するを思つたから、わしが駕籠を打ッちやつ

てノ、あの荷を擔いで、一目散に駆け出したのよ。そこで、こなさんの荷を、わしが内へ持つて來たのよ。

與兵　エヽ、なにかえ、生醉ひの客が來たのかえ。そりやア大きにお世話でござりました。さうとは知らず今朝から、こなさんは、とつけもねえ人だと、正直は恨んだのよ。甚兵衛どん、昨夜からのお世話、荷を一荷拾ひました。エヽ、忝なうござりやす〳〵。

ト無性に手を突いて禮を云ふ。

甚兵　これはしたり、お禮で痛み入ります。ハヽヽヽ、コレ、與兵衛どの、そりやアさうと、道具は揃つて居るか、よく荷を改めて持つてござりまし。

與兵　なにサ、それにやア及びませぬよ。

甚兵　ハテ、わしが念だ。改めて持つて行かつしやれよ。

與兵　さう云はつしやるなら、こなさんの氣休めにドレ、ちよつと見て行きませうよ。

ト捨ぜりふにて荷の中の膳皿などを改め居るうち、お照の櫛、荷の中にあるを、不思議さうに取上げ見て

なんだ、こりやア風鈴蕎麥が荷の中に、思ひがけないこの木櫛。しかも模様は磨出しに、こりやコレ慥か七寶繼ぎ。

甚兵　エ。

與兵　サ、しつぽこ煮かけ南蠻の、皿も小鉢も違ひなし、割れたが一枚ござらぬが、昨夜ちぎれたこの書き物、詮議の蔓と思ふうち、思ひがけねえこの櫛の

トちぎれし質札と拾ひし木櫛とを、一緒に持つて思ひ入れ。

甚兵　どうしました。

與兵　アイヤ、道具は揃つて居ますよ。

ト懐へ入れる。

甚兵　それでわしも安堵したの。

與兵　ドレ、一服のんで行きませう。

ト合ひ方になり、内へ入り、莨を吸ひつける。この時奥よりお賤、酒徳利を盆に載せて、これを持つて來り

しづ　モシ、お前、ちよつと神棚へ上げて下さんせ。

甚兵　なんの事だ、えてゞなくば、上げてもいゝわえ。

しづ　そのお役は疾に濟んだわいな。

ト神酒を上げるとて、お早が上げ置きたる袱紗包みの茶碗の片々を取落し、悔りして

ア、鼠が居たわいな。

甚兵　べら坊面め、いま落したは鼠ぢやねえわえ。

しづ　それ〳〵、茶碗の割れぢやわいな。ほんにマアうろたへた。わたしとした事が

ト茶碗の片々を袱紗へ包むを、與兵衛、よく〳〵見て さてはこの女と思ひ入れあつて

與兵　モシ〳〵、その茶碗の缺けを、ちよつと見せなんし。

しづ　アイ、これかえ。

ト出す。與兵衛、取つて見て

與兵　ヤ、、、、これだ〳〵。コレ〳〵女中、お前は爰の甚兵衛どのゝ爲には、なんだえ〳〵。

ト思ひ入れ。

しづ　エヽ、わたしかえ。わたしや主の女房ぢやわいなア。

與兵　ナニ女房だ。ハテ、その筈ぢやアあるまいがの〳〵

ト腹の立つこなし。お賤、合點のゆかぬ思ひ入れにて

しづ　なんの事でござんすぞいな。モシ、わたしや爰の甚兵衛の女房に、違ひはござんせぬわいな。

與兵　そんなら、三年添ふと云つたも嘘で

しづ　なんぢややら、根ッから合點がゆかぬわいな。

與兵　この缺け茶碗を持つて居ても

しづ　エヽ、その茶碗の片々は、主の妹御のお早さんの

與兵　エヽ、そんなら割れた茶碗の主は、甚兵衛どのゝ妹の、アノ、お早と云ふか。

ト思ひ入れ。この時奥よりお早、ツカ〳〵と出て、與兵衛が持つたる割れ茶碗を取つて

はや　この片割れは、わたしが大切の

與兵　こなたがお早か。

はや　アイ、割れた茶碗のこの持ち主。

與兵　成る程、物ごし、思へばその夜の

はや　エ。

ト四人顔見合せ、思ひ入れ。

甚兵　嬶アや、肩を揉め。

しづ　アイ。

ト合ひ方になり、甚兵衛の肩を揉む。與兵衛、思ひ入れあつて

與兵　その持ち主がこなたなら、この片割れを合せて見やれ。

ト懐より茶碗の片割れを出して見せる。

はや　同じ模樣の茶碗の片割れ。そんならいつぞや行き會ひし

與兵　月も朧の雨あがり、夜道も嫌な小塚ッ原、犬をいとはぬ大膽は、男まさりか眞實か、頼むに是非なく掛けて

ある
甚兵　ヤ。
　ト振り返る。お早、心遣ひあつて
はや　ア、モシ、それを顯に今宵で、云はしやんしては、
どうもわたしが
與兵　サ、身が術なくば、わしが女房に
はや　でも、現在の夫はあの體。
與兵　サ、亭主に恥をかゝせしと、思へど女の手一つに、
成就しまいと手傳うた、わしも年季は三年の、日限りを
切つた亭主だぞよ。
はや　サ、それも男の死恥を、世上の人に見せまいと、女
のあるまい大膽は、後で思へば恐ろしい。
與兵　そのあらましをこれ程も、口外せぬは此方も男、男
思ひに頼まれた、男の魂ひ見拔いたら、割れた茶碗の繼
ぎ合せ。
はや　夫思うて持つ夫、土より出でゝ土となり。人の成行
き水向けの
與兵　茶碗も同じ土くれと、ならで逢うたが
はや　夫婦の結ひ、
與兵　亭主にしやるか。

はや　サ、あの大恩には約束の
與兵　三回忌まで
はや　夫婦仲よう
與兵　年が明くれば
はや　この身は尼に
與兵　それも合點。
はや　茶碗と
與兵　茶碗が
はや　互ひの固め。
　ト割れた茶碗を重ね合す。甚兵衛見て
甚兵　そんなら妹が約束の
しづ　御亭主さんは蕎麥賣り
與兵　小體ながらこの與兵衛。
しづ　アノ武家方と今までも、云はしやんしたが急にこの
はや　サ、町人の與兵衛さんに、云ふに云はれぬ義理あつ
て。
　ト思ひ入れ。
與兵　これサ、あらましを、こなたの口から、云はずばわ
しが代つて
　ト云はうとする。

はや　ア、モシ、これ程云はぬあの譯を、今さら主に話し
ては。モシ、わたしに免じて
ト術なき思ひ入れ。
與兵　女房にさへなるならば、別して云ふにも及はぬの、
はや　成る程、お前と約束通り、佛を誓ひに添ひまする。
甚兵　イヽヤ、兄貴がならねえの。
はや　エ、そんならお前が
甚兵　ならない譯は、今までも、亭主は武士だと云ひ散ら
し、わが身も出世、この兄も、大金に成る先を變替へ。
駕籠舁きの妹に、夜蕎麥賣りは當り前。左團扇はどこで
遣はせる。澁團扇も遣へまいわえ。
ト　お早、術なき思ひ入れ。與兵衛ムッとして
與兵　コレ〳〵、甚兵衛どん、そんならこなさん不承知か
え。コレナ、駕籠舁きを小舅に持つからは、聟の與兵衛
が商賣は、晝は見えても、夜ばかり、風來者が風鈴の
甚兵　蕎麥荷を擔ぐこなさんに、この妹は遣り憎い。
しづ　ハテ、さう云はいでも好いた事なら。
甚兵　いらざる事を、退いて居ろ。
ト突きのけて立ち上がるを、與兵衛キッとなつて
與兵　妹をくれねば云ひがかり、女房約束した時の

はや　ア、モシ、その事ばかりは、どうぞ爰では
ト切なき思ひ入れ。
甚兵　妹、われもよしにしろ。その日暮らしの聟ならば、
幾人なりと取つて見せる。われにはしつかり持參の附く
與兵　甚兵衛どの、持參の附くが望みなら、わしにも持參
が附きますの。
甚兵　ナニ、こなさんに持參が附くか。
與兵　望みとあらばわしが持參、ドレ、見せませうか。
ト合ひ方になり、以前蕎麥荷の内に在りし蒔繪の櫛
書き物のちぎれを出し
與兵衛が持參は、これでごんす。
ト三人目を付ける。路地より野手の三、出かゝり居て
門口を窺ふ。
甚兵　反古にくるんだ蒔繪の櫛。
しづ　蒔出し磨繪の七寶繫ぎ
はや　頭の道具は女子の嗜なみ、それをお前が持參にかえ、
與兵　心覺えのない櫛が、わしが蕎麥荷にあつたから
甚兵　ヤ。
トぎつくりする。
與兵　サ、出所云はぬが舅御へ、聟が寸志のこの持參、殊

に破れた質屋の預かり、その金高も二百兩。大金持ちの
山崎屋の、娘が家出も二百兩。割符の合うた

早賤　エヽ。

ト皆々思ひ入れ。

甚兵　聟に取らう。

與兵　ヤ。

甚兵　持參の道具が氣に入つた。妹を進ぜる、聟に取らう。

はや　すりやアノわたしを、主の女房に

しづ　それで物事納まる形。

與兵　併し初めて持つ女房、頭の道具を遣る時は、緣が切れると世の譬へ。今更どうか

ト思ひ入れ。

はや　求めませう。

甚兵　ヤ、アノ、お主がこれを。

はや　賣上けの附くその櫛を、求めて差せばお前から、別して貰うた品でもなし、氣にかゝるなら賣らしやんせ。わたしが買うて差しませう。

與兵　女房に賣るは異なものと、思へど與兵衞は夜商人、商賣違ひの拂ひ物、お氣に入つたら賣りませう。して、その價は

はや　サ、求める價のその金も

三　貸して進ぜう。

はや　エ。

三　御昨今だが野手の三、その挨拶はわしがしよう。

トすつと入る。お賤見て

しづ　お前は先刻弟子入りに、來なさんしたお若いの。

甚兵　ア、そんならこなたが、噂アが話した

三　弟子入りかこつけ有やうは、この妹御のお早さん、下齒に貰ふ算段で、來たその先へ夜蕎麥賣り、與兵衞が方へ落札の、此方は後手と諦めて、お早さんなら差し櫛の、價を貸してやらうと思つて。

はや　そんならお前が、わたしへ價を

三　サ、金の代りはちぎれた書き物。

はや　櫛に巻いたる賣上げと、引合せたら

ト與兵衞が持つたるちぎれと、野手の三が持つたるちぎれを合せ、思ひ入れあつて

「一札の事、一つ金二百兩なり、右は胡蝶の香合質物に預かり置き候ふところ實正なり、尤も十日限りに請け戻させ候對談に御座候ふ、月日」……ヤ、、、こりやコレ尋ねる

與兵　宛名は駕籠の甚兵衞どのへ、質屋善六。
はや　手蹟も同筆。
與兵　さては昨夜の大川橋、胡散な奴は
三　わしでごんすよ。ちぎれが揃つて安堵でごんせう。
しづ　その書き物は、いつぞや千住で
與兵　覺えがござるか。
しづ　アイ、主が難儀の
甚兵　コリヤ、役にも立たぬ口出しするな。
與兵　さてこそ手がかり。
三　コレ、なんと反古でも破れでも、繼ぎ合すれば二百兩、その香合の道行きの、解る書き物、お早さん、野手がこなたへ心ざし、これでその櫛買つて置きねえ。
はや　この書き物で濟む事ならば
與兵　賣つて進ぜう、その差し櫛。
ト書き物を取る。
はや　キツと渡して求めませう。
三　それで其方が納まらば、其うち櫛は預からう。
トちよいと櫛を取つて懷へ入れる。
はや　アノ、こなさんが
三　この櫛わしが預かれば、無理に搦んだ緣組みの、その緣類になるべいと、搦み込んだるわしが仲人。
甚兵　駕籠屋は小舅。
與兵　蕎麥屋は花聟。
はや　わたしは花嫁。
しづ　女髮結ひの待ち女郎。
甚兵　仲むつまじく四ツ辻の
與兵　三々九度も石ごきで
はや　割れた茶碗を繼ぎ合す
しづ　酌はわたしと
三　この野手が
ト銚子を持つて立ちかゝる。お賤、割れた茶碗の缺け二つ丸盆へ載せて、お早が前へ持つて行き
しづ　サ、お前が飲んで
トお早取上げ
はや　憚りながら
ト差出す。野手の三、酒をつぐ。この時、正面の壁へ二階より傳はる死骸の血汐、本蘇枋にて、タラ〳〵と流れ落ちて、壁は一面に赤くなる。與兵衞キツと目を附け、誂らへの凄き合ひ方になり
與兵　二階の樣子は知らねども、壁へ滴るこの生血。

はや　エ、何か仔細の。

ト立ちかゝる二人を甚兵衛引退け、押入れの開きなしやんと引かへし、壁を隠す。この時押入れの内に與五郎の吹替へ、顔を隠し居る。

甚兵　こりや祝言の色直し。

三　ヤ、正しく與五郎。

ト押入れへかゝる。

しづ　エ。

トつか／＼と寄つて押入れの戸を元へ立てる。また壁へ血流れる。

與兵　又も血汐の

ト寄るを、甚兵衛有り合ふ六枚屏風を、サラ／＼と立て、壁を隠す。人相書見える。

甚兵　爰で二人が床入りの

しづ　屏風に貼りし觸れ状は

甚兵　これぞ南方十次兵衛。

はや　エ。

ト與兵衛も思ひ入れ。

與兵　人相記す觸れ書の

三　高頬に一つの黒子あり。

しづ　アノ、禿さんの高頬に慥か。

トこれにてお早思ひ入れあつて、茶碗の缺けを與兵衛が黒子へ打ちつける。血汐流れて黒子消える。

與兵　早速な女房、詮議は二階の。

ト行かうとする。甚兵衛、隔てる。

三　小屋根を傳うて。

ト引窓の綱へかゝるを、お早、引退け、立廻つて綱を引く。戸は、ガラ／＼とたつ。この時、綱に搦みし財布と書置ほぐれかゝり出る。皆々これを知らず

與兵　コリヤ女房、なぜ窓さした。

はや　サ、これは。

與兵　なんで俄に引窓を

はや　サ、雨もぼろつく秋の空、定めがたなき男の心根。

甚兵　そこで姉は引窓の

三　さしてこの場を暗闇に

しづ　くるめて事を納めても

與兵　時は日高の西日さす、あの引窓の引綱に、まとひ付いたる金財布、血の附く書き物、女の手蹟、定かならねど、アレ／＼、アレ、親次部右衛門とある文言。さてはお照が

皆々　ヤアヽ

ト目を附ける。お早驚ろき、綱を引く。又ガラ〳〵と戸は明き、財布と書き物、戸の間へ隱るゝ。

はや　心附かざる引綱に、しがらむ緣のお照さん。

與兵　もしや二階にアノお照。

はや　アヽモシ、まだ照る日影を、うか〳〵と。

與兵　麁相な女房。

こ　高頬の疵は

與兵　壁の生血と

甚兵　合せて五分々々。

しづ　晝の枕は氣を替へて

與兵　二階でなりと。

甚兵　イヽヤ、夫婦は矢ッ張り爰で。

こ　あの押入れと

しづ　引窓の

こ　明けて云はれぬ

しづ　二階の障子。

甚兵　障子二つは小塚ッ原。

與兵　かゝりし首と。

甚兵　來かゝる旅人。

はや　月は一つに……影二つ。夫は二人。

甚兵　よく似た面體、

與兵　思へばその時、

ト　お早、思ひ入れ。

はや　アヽモシ、

ト立廻り。

甚兵　開きませう。

ト唄になり、めい〳〵こなしあつて、甚兵衞、お賤が手を引き、野手の三、二階と引窓押入れ三方へ目を附け、奥へ入る。あと合ひ方、與兵衞思ひ入れあつて、緣立ての内より一腰を出し、これを帶して、ツカ〳〵と奥へ行かうとする。

はや　コレ、待つた。

與兵　エヽ、放せ。

ト立廻りあつて兩人キッとなり

はや　氣色を變へて與兵衞さん、殊に用意のその一腰、すりやこなさんは腹からの

與兵　町人ならぬ身が素性、家名は即ち、

ト屏風に貼りし人相書をめくり、お早に見せる。

はや　人相書を家名とは、さこはお前は

與兵　コレ、鹿島參りの乘合ひに、夜船の内の楫枕、苫を敷寢のわざくれに

はや　そんならその夜の云ひ約束、お顏知らねど御家名を聞いたばかりの鴻野の御家中、南方十次兵衞さまといふお方は、寶紛失それゆゑに御切腹

與兵　殊に死骸は野晒しに、淺草野邊に身の科を

はや　曝してあるが悲しさに、夜半に紛れて恐ろしい、盜みする場へござんした

與兵　即ち與兵衞、實名は、首になつたる十次兵衞。

はや　ヤ、、、すりや船中にて夫婦の約束、その後大事を打明かし、三年連れ添ひその跡は、尼になされて下さんせと、云ひ約束のお方も矢ツ張り。

與兵　サ、月は一つの日蔭者、船の約束、茶碗の結び、その節斯うとは思へども、首になつたる十次兵衞、その首盜むも南方氏、みす／＼貞女と知りながら、包むも大事を抱へしこの身、恨んでくれるな、コレお早。

はや　二度まで結びし女夫のきづな、切つても切れぬ重縁に、儚く切れし。して又首級は。

與兵　それこそ弟南方與兵衞は、面體似たるを幸ひに、兄に代つて生害なし、我れは與兵衞と變名して、油斷を見すます寶の詮議。正しくこの家の甚兵衞が、丈左衞門より預かりある、證據は即ちこの質札。殊にあれなる引窓に、隱し置いたる金といひ、正しく不通の姉お照、認め置いたるあの書き物、殊に滴る血汐といひ、詮議はこの家の

ト行かうとする。立廻つてお早キッと留めて

はや　お顏を覺えぬお前の科、寶を失ひ閉門と、聞くと其まゝ樣々と、金拵らへて寶の在所、手掛り求むる其うちに、死なしやんしたと聞いたもの、悲しうなうてなんとせう。貯へ僅かの金ながら、與五郎さんの手詰めと見て用立てましたも、有つて益なき五十兩。それに引替へ兄さんの、慾に目がくれ、いとほしげに、ようマア、やみやみ。

與兵　サ、その人殺しの詮議して

ト行かうとする。

はや　ア、モシ、惡人ながらも血筋の兄さん、どうぞ一旦。

與兵　イヤ、蕎麥賣りの與兵衞なら、見遁がしてくれん事あらんが、寶の行くへ知れたる上は、我れは南方十次兵衞、助け置いては、刀の手前、武士道立たぬワ。

トよき時分より駕籠舁き三人、門口に窺ひ居て

又　與兵衞といふは十次兵衞、倉岡さまへ。

ト行かうとするを、與兵衞やらじと立廻り。後より田中の辰、入谷の金組みつく。その間に土手の又、向うへ走り入る。與兵衞、田中の辰を門口にて切り倒し、お早立廻つて、入谷の金を草井戸へ突き込む。兩人ホッと思ひ入れあつて

與兵　身が實名を知つたる下郎め、跡追ひかけて

はや　早うござんせ。

與兵　合點ぢや。

トごん／＼にて向うへ走り入る。お早殘る。よき時分より生垣の外より小屋根を傳ひ、野手の三窺ひ寄り、引窓へ手を差込み、財布を引出す。

はや　あの二階には正しく死骸、兄へ難儀のかゝらぬうちに

ト上がらうとする。野手の三、財布と書置を持ち、二階の樣子を見て

三　さてこそお照があの死骸、證據の櫛で人殺しの、訴人の上に、匿まふ與五郎。

はや　ヤ、お前は先刻の

三　直ぐに訴人に

トよき所より飛び下り、行かうとするをお早キッと留めて

はや　コリヤ、こなさんは兄さんの、訴人の上に、その金まで

三　オ、持つて行くのだ。コレ、お早、兄の命が助けたくば、この三さんの女房になれ。

はや　イヱ、わたしはこなさんも、いま見る前で女夫の杯

三　彼奴も慥か十次兵衞、殘らず嗅いだ野手の三、これから段々順ぐりに、仕事にかゝつて金にする。それでもわりやア靡かぬか。

はや　なんのこなたに返事しよう。殊に書き物添へたるその金。

ト手をかける。立廻りあつて

三　金が欲しくば。

トお早を引きつける。立廻り見得になり、これより鳴り物になり、財布を棚に立廻りよろしく、野手の三、お早を引敷く。この時甚兵衞、後へツカ／＼と出で、吳蓙の下より出刃を出し、野手の三を切り倒す。お賤走り出でこれを留める。お早も支へるを、二人を突き

いけ、野手の主を、ずた〳〵に切り殺し、疊を蹴上げ
死骸を打込む。兩人縋つて

しづ　コレ、こちの人、早まつてこなさんは

はや　惡者ながらも人を殺めて。

甚兵　サ、どうで此方は行がけの、駄賃いらずに二百兩、
惡念きざしてあのお照……その云ひ譯は
ト出刃を腹へ突き立てる。兩人縋つて

しづ　ヤア、甚兵衛どの、こなさんは、

はや　取逆上せてか、コレ、兄さん。

甚兵　イヽヤ逆上せぬ、氣も狂はぬ。不便や花のお照どの
殺したる上からは、幾人切つても殺しても、命は定まる
おれ一人、惡の報いは刃の錆に、毒食はゞ皿。
ト引廻す。お早お賤縋つて

しづ　惡人ながらもこの深手、お早さん

はや　お賤さん、心からとは云ひながら

兩人　エヽ、淺ましい。
ト泣き落す。向う、バタ〳〵にて、與兵衛駈け戻り、
後より有右衛門、彦助、身構へして出で來り、窺ひ窺
ひ附けて來り門口に居る。與兵衛、内の方を見て

與兵　ヤヽヽ、妹が敵の甚兵衛は

はや　我れと我が手にこの生害。只この上のお願ひは

しづ　娘心のお照さま、御持參ありしこの金にて、吾妻
さんの身請けを首尾よう。

與兵　イヽヤ、吾妻は兄與次兵衛、身請けはすれど情なや
お上の疑ひかゝりしゆゑ、山崎屋の家は封印、親に難儀
をかけまじと、又は義理ある弟與五郎、彼れに代つて與
次兵衛が、繩目の上に牢舍なし。

早賤　ヤヽヽ、すりや與次兵衛さんは牢舍とや。

甚兵　それも大方長吉を、殺せし科の身に代る、弟思ひの
與次兵衛どの。せめてこれなる二百兩、寶の質請け、あ
なたのお手から。

與兵　妹が一念とゞまるこの金。
ト二百兩を取上げる。

しづ　與五郎さんへ死顔なりと。
ト押入れを明けようとする。

有右　寶の盜賊

彦助　十次兵衛。
トかゝるを與兵衛、立廻りあつて

與兵　この間に與五郎。

早賤　心得ました、

兩人　ト押入れを明ける。内より與五郎、ツカ／＼と出る。
與五郎さま、何かの様子を。
ト與五郎、二人を見て
與五　ヤ、、、、其方衆二人は藤屋の吾妻か、戀しい吾妻か。オ、／＼、二人ぢや／＼。
トきよろ／＼する。
はや　コレイナア、なんで其よなあどない事。すりや、お内の様子、兄御の實義を聞かしやんして
しづ　氣が取逆上つて其やうな。コレ、心を慥かに與五郎さん。
與兵　さては心が亂れたか。
與五　オ、、亂れ心ぢや秋草の、尾花が招く。今そこへ。
ト行かうとする。皆々取りつく。
有彦　十次兵衛、うぬを。
トかけりになり、與五郎、扇を開き、狂ひ／＼行かうとする。與兵衛、二人を相手に立廻りあり、與五郎この中へ交り、突きのけ／＼花道へ行き、振り返つて
與五　さばえ。
トかけりにて向うへ走り入る。
しづ　あの與五郎さんは

有彦　所をうぬを。
トかゝるを與兵衛引きつけ、二人を當てる。甚兵衛、目を開き
甚兵　女房、妹、必ずはえるな。
ト引廻す。
はや　最早知死期の
しづ　甚兵衛どの。
ト縋る。
與兵　妹が敵は現在小舅。
甚兵　身をずた／＼に。
ト與兵衛方へ這ひ寄り、出刃を拔かうとする。與兵衛この手を捕へ
與兵　お早が事を案じずとも、
甚兵　お頼み申す。
ト出刃を拔き、思ひ入れ。
早賤　南無阿彌陀佛。
彦有　うぬを。
トかゝる。與兵衛キッと留める。この間に甚兵衛バッタリ落入る。木の頭、お早、お賤縋つて泣き落す。與兵衛二人を引敷き、甚兵衛と與五郎が跡をキッと見や

り

與兵　ハテ、是非もなき

ト雙方見やつて思ひ入れよろしく、

ひやうし幕

先づ今日はこれぎり。これより大切淨瑠璃幕、近日御覽に入れまする。左やう。

ドコドン〳〵〳〵。

大詰

吾妻の森の場

倉岡閑居の場

淨瑠璃　千種の花色世盛　常磐津連中

役名――大和團子、月見の三五郎。三五郎女房、お石。山崎屋與五郎。藝者、藤屋吾妻。三原有右衞門。入間彥助。李法印、嚢坊。嫩巫女、小松。南方十次兵衞。倉岡丈左衞門。

本舞臺、三間の間、向う淺黃幕。一面に柾木の垣、下の方に普賢菩薩と赤く記せし石の傍示杭、爰に有右衞門、彥助、着流し、尻からげ、大小にて、有右衞門。彥助を引とめてゐる。寺鐘にて、幕明く。

ト直ぐに木魚の音。兩人立廻つて

有右　待たつしやい。すりや彥助にはアノ、いよ〳〵。

彥助　ハテ、先刻よりも申す通り、紛失の香爐を、十次兵衞が手より差上げて、返上したゆゑ、倉岡どのゝこれまでの、惡事もどうやら露顯の樣子。さすれば我れ〳〵いつまでも、敵役で居つたなら、しまひの程とも存ずるゆゑ、これから心を改めて、次部右衞門どの十次兵衞へ、詫び致して勤める料簡。貴殿も身共と御一緒に。

有右　イヤ、この三原有右衞門は、神文までも取交した丈左衞門と、どこまでも同腹中と悟道を定め、初手から荷擔の今になり、何しに心を變じ申さう。貴殿も武士の意地を立て、兎も角も倉岡どのと

彥助　イヤ〳〵、その武士氣質は昔の事。今の世界を御存じない、有右どのなら、達ては勸めぬ。拙者一人、身の納まりを。

ト振り切つて行かうとする。有右衞門、又これを支へて

有右　待ちやれ。さう聞いては此まゝに、お身をやつては、有る事無い事云ひあげられ、一時も身のたゝずみの、ならぬ我れ〳〵。この場に於て武士の共喰ひ。入間彦助、覺悟おしやれ。
彦助　そりや身共より、貴殿覺悟を。
有右　イヤ〳〵、御身先づ覺悟おしやれ。
彦助　ハテサテ、辭儀には及び申さぬ。先づ〳〵其許。
有右　イヤ〳〵、御身、先づ
ト互ひに爭ひ、顏見合せ
彦助　然らば
有右　互ひに
兩人　覺悟いたさう。
ト思ひ入れ。此とき木魚の音けはしく、下座より四人の百姓、てんでに鋤鍬を持ち、走り出で、兩人を取卷き
四人　動かつしやるな。
有彦　こりや百姓ども、如何いたす。
百一　百姓どもゝすさまじい。十次兵衛さまから密かに仰せ附けられて
百二　三原有右衛門、入間彦助、もしこのあたりへ見えたなら
百三　引ツ縛つて連れて來いと、いま庄屋どのから云ひつけられ
百四　その戻り足、見附けた二人。サア、覺悟して
四人　繩かゝらつしやい。
彦助　アヽ、コレ〳〵、早まるな〳〵。身共は最早十次兵衛方。惡人はその有右衛門一人。
有右　ヤア、卑怯な彦助、百姓ぐるめ、お身も、とも〳〵。
彦助　ソレ、皆ぬかるな。
四人　遁がしはしないぞ。
ト禪のツトメになり、皆々鋤鍬を持つて立ちかゝる。有右衛門、其まゝ彦助へ拔いてかゝるを、彦助、身をかはす。四人、有右衛門へ打つてかゝる。この間に彦助は向うへ遁がれて走り入る。有右衛門四人を相手にして、よろしくありて、ト、四人は向うへ逃げて入る。有右衛門、跡を追はうとして、思ひ入れあつて刀を納め、「ソレ」と下座へ逸散に入る。矢張り禪のツトメにて、この道具ぶん廻す。
本舞臺、三間の間、向う草土手、爰に常磐津連中居

並び、舞臺は一面に萩薄の土手板、花道へかけて見事に飾りつけ、日覆より染め葉の紅葉の吊り枝、下座の口、奥深に吾妻權現の幟を大分建てならべ、この道具納まる。

ト頭取出て、淨瑠璃の名題役人觸れありて「其ため口上左やう」とありて、前彈きにかゝる。

〽栴檀の、實を結ぶてふ暮れの秋、月の友だちいたづらと、わやく盛りが後や先、見るを見眞似の錫杖に、鈴も振りよき神いさめ。

ト大太鼓をおろし、宮神樂になりて、向うより小松、びらり帽子、千早木綿襷、巫女の形にて、鈿女の面を後へ掛け、鈴と扇を持ち出で來り、花道にとまる。

〽まだ所譯さへ白絹や、千早振る〳〵袖振る巫女の、梓の弓も張り強き、お江戸生れの目の張りも、鈴振る手もと可愛らし、やがて色師と三つ扇。

ト摺り鉦入りの浮いた合ひ方になり、後より簑坊、きめ頭巾、篠懸、法印の形にて、錫杖と扇を持ち、出で來り

〽それと三ッ大こゝらで大山、大聖不動はこちらがお旦那、朝からお神酒でのたまくさわぐだ、ばあさんぢいさん、晩にや庚申茶飯で甲子、福德延命家内は三方荒神のお前を見れば松之助。

〽こちはみの助さん、親は無いかとゆふだすき、かけてぞ願ふ御贔屓の、惠みに育つ二葉巫女、みばえ法印うち連れて、中よき同士來りける。

ト よろしくありて舞臺へ來り

簑坊　カウ〳〵、松さん、淨瑠璃の初めから、おいら達ばかりこんなに出ちやア、あなた方に叱られやアしまいかなう。

小松　サア、それでわたしも怖うてならぬが、簑さん、どうぞ仕樣はないかいなア。

みの　待ちたまへよ。

ト手を組んで思案の思ひ入れ。

斯うせいわな。もし皆さんに叱られたら、お父さんと太夫さんに、詫び事をしてもらはうぢやアないか。

小松　ほんに、それがよいわいな。

トこの時、向う揚げ幕にて、「きちがひよほうさいよ」と大勢にて囃す。簑坊、小松、向うを見て

みの　アレ〳〵、氣狂ひだ〳〵。爰へ來たらば弄つてやらう。

小松　こりや面白からうわいなア。
みの　そんなら爰で、ドレ、松助と洒落ようか。
〽萩のうは風荻の露、菊にも野路の亂れ咲き。
トかけりになり、向うより與五郎、緋毛の垂れ、紫の病ひ鉢卷、着流し、片肌脱ぎかけ、しどけなき形にて、萩の枝を擔ぎ、扇を持ち、狂亂にて出で來り、花道にて
〽亂れ初めにし初めより、吾妻詰け出せ山崎と、浮名に立ちし戀中も、任せぬ事の數々に、この身ひとつの物狂ひ、狂ふ心は我れのみか、蝶も千種とむつれあひ、ひらり／＼ひらりひら／＼／＼／＼
トこの文句にて與五郎狂ふうち、バタ／＼にて向うより吾妻、對の形、着流し、抱へ帶にて走り出で來り
〽そこよこゝよとその人の、行くへを尋ね、やら／＼とそれと見るより走りつき、變る姿の淺ましと、云はで涙の露時雨、わしぢや吾妻ぢや與五郎さん、氣を鎭めて下さんせ、これなア申し、蟲さへも、番ひ離れぬ揚羽の蝶、我れ／＼とても二人連れ、未來までもの仲々を、仇にはせじと取りつけば、いや思ふ人はあれ／＼／＼、吾妻の森と現なく、駈け行く袂控ゆる袖、しどけなりふりともどもに、人の見る目も憂やつらや。
トよろしくあつて、舞臺へ來る。鑊坊小松見て
兩人　ソリヤ／＼……狂人よ、ほうさいよ／＼。
ト手を叩いて囃す。吾妻、與五郎を圍つて
あづ　アヽ、コレ／＼、見ればマア、可愛らしい巫女さんに、法印さん、其やうに氣の狂うた者を弄らずと、どうぞ正氣になるやうに、お前方の御祈禱で……併し、頑是のない子供衆に、こんな事云うたとて。
みの　カウ／＼、姐さん、なんぼ形は小さくつても、山椒は小粒で辛いと云ふによ、
小松　それ／＼、なんぼわたしらが子供でも、その御祈禱はよう習うて、覺えて居るわいなア。
あづ　なんぢやえ。アノお前方お二人が。
みの　頼むといふなら今爰で
小松　神すずしめを。
あづ　そんならどうぞ頼むわいなア。
〽おつと合點と云ふまゝに。
〽さんげ／＼の法印さまに、神おろし奇妙頂來と、錫杖を振り立てまいかいな、コレナ、錫杖を振らしやんせんかいな、エヽ、辛氣な人さんぢや、面白や。

へやんれ面白や庭火たく、天の鈿女の流れとて、お釜の前のお德女郎。あつちの鍋ではちよこ／＼、こつちの鍋ではちよこ／＼、誰れに見しよとて紅鐵漿つけて、品やるふりも親讓り、おちやつぴいではないかいな。

へ月夜烏をなア、夜明けと思ひ、てんてつてんと沖の石かはく間もなき水仕業、飯も炊いたり、しらじもごろごろと、ほんに勤めの遣る瀨なや。

へませた世帶も習はうより、七つか八つかむつまじと、見えても流石頑是なし、忽ち何か爭ひの、中へ狂人分け入つて。

へこれ／＼これはどういふ摑着か、譯は知らねど指つきり、仲よしこよし、ホツホ法螺の貝、めでたく一つ打つて置け、しやん／＼、庄屋狩人、狐の嫁入り、臺傘立て傘伊達道具、振りやれお振りやれ日でり雨。

へその雨よりもしつぽりと、濡れて戀路のおどもりを、抱いて眺めてねんね／＼ころろんころ／＼よ、いとしねんねに何やろぞ、でん／＼太鼓にふり鼓、鈴やつぽ／＼手に持ち添へて、愛し育てゝ樂しみと、思ひし事もいたづらに、泡となしたる腹立ちと、萩の笞をちやう／＼ちやう。

へ打たれて悔り巫女法印、おいらにやゆかぬ狂人どの、笑へ／＼と振り捨てゝ、もと來し道へ逃げてゆく。

トこの文句のうち、吾妻、始終與五郎を介抱しながらよろしく振りありて、トゞ、簑坊小松「わいわい」と囃しながら、向うへ逃げて入る。引續いて淨瑠璃。

へ吾妻は支へ引きとゞめ、情なや誰れあらう、山崎與五郎さまとては、人におくれぬ亂れ髮、吾妻が顏も見忘れてか、現なやと制すれど。

へ風に尾花の誘はれて、ちり／＼ぱつと散る風情、詮方なくぞ見えにける。

ト狂ふ與五郎を、やう／＼引とめ介抱する。直ぐに淨瑠璃。

へありふれし世のすぎはひを又こゝに。

ト祇園囃子になり、向うより月見三五郎、やつし、片襷にて、手拭を鉢卷にして、蝶花形と丁子車の紋附きたる團扇を持ち、女房おいし、同じく對の形にて、誂らへの、やまと團子の荷を、さし荷ひ擔ぎ出で來り、花道にとまる。

へ今度仕出しぢやなつけんけれども、雪か花かの上白米を、癡話と手管で晒してひいて、情でこねてしつぽりと

色で丸めて二人して、よなべ仕事に搗いては投げし、名物を召しませ召しませ家士達に、買はうなら今ぢや〳〵今を盛りの花道を、荷ふ女夫の大和團子え。

トよろしくありて舞臺へ來り、荷を下ろし

三五　サア〳〵、買はつしやい、買はつしやい。

いし　お土產に召しませ、搗き賣りの

兩人　大和團子の評判々々。

トこれを聞き與五郎見て

與五　ヤア、吉原の似が爰へ來た。サア〳〵、大和團子が所望〳〵々々。

あづ　アレ、せうどもない。其やうな。

三五　ア、モシ、おかみさん、旦那が所望と仰しやるに、お前が兎やかう仰しやるは、エヽ、さては左がきゝますな。

いし　モシ〳〵、私しどものいし〳〵は、どんな上戸のお方さまでも、酒の肴になされますぞえ。

三五　先づお目通りで夫婦が搗き賣り。

いし　古からうとも、ナア申し。

ト此うち三五郎、荷の中より臼と杵を出す。

三五　ソレ〳〵、噂ア、こゝらで

兩人　しつかとせい。

〽今の世の中、仲人いらぬ、しつちくはつちくつぎ煙管、ヤレモサウヤ、ヤレ〳〵サテナ、刻み莨がヤレ仲人する。しやうねめ〳〵。

〽ウヤヤレ〳〵サテヤレサテナ、落ちよ〳〵と落しておいて、壁に蔦の葉のきごころ。

〽イヤ〳〵團子にかこつけて、亭主をのろく性惡め、コレ何もかも知つてゐる、この頃隣りの居候ふと、味な目つきで愛想に、煮花の茶から袖口の、ほころびかゝる色事と、へヘ、見れば逢ひはござんすまい。

〽コレ、そりやお前なんぢやいな、其方を戀にわしが身は、彈く三味線の絲よりも、細くやつれてなんよえ。臼ひく唄が取持つて、引木の手に手しめられし、惡性男に惚れたのが、わたしが不請女房に、なりふりさへもいとひなう、ほんに男猫も抱いて見ぬ、まじな心を知りながら、どうしてそんなとまくしかけ、云はれてそれは團子屋の、やきもち喧嘩と見ゆるうち。

〽また狂亂の心附き、立ちあがるより。

〽鎭まる此方、吾妻は其まゝ抱きとめ。

あづ　コレ、申し與五郎さん、心を附けて下さんせ。アレ、

餘所のお方はあのやうに、お內儀さんを思うてぢやに、お前はわたしが露ほども、可愛うはないかいなア。

ト與五郎、吾妻を見て

與五　ムウ、さうして其方は。

あづ　吾妻ぢやわいなア〳〵。

與五　成る程、其方は藤屋の吾妻、爰も矢ッ張り吾妻……の森、其方は藝子、こなたは名所、どちらもどちらも……オ、吾妻ぢや〳〵。

〽吾妻といふ名はその昔、たけき尊のおかもじさん、お船遊山にすいとなる、そのすいさまの慕はしく、戀を信濃の碓氷にて、わが妻やいのとのたまふより、吾妻とこそは名けたり、我れも尊にあらねども、我がつま戀し吾妻はと、そゞろ涙にいとゞ猶。

あづ　それ程までに。

〽わたしをば、思うて下んすお心は、嬉しいながら憎らしい、お前の癖で逢ふ度に、藝子々々で內證は、三味線枕に客さんと、ねからないこと無理な事、云うてじらして、口舌して、女子を泣かす程でマア、氣ちがひとは野暮らしい、正氣になつてと取すがり、涙ぞ戀の誠なれ。

ト此うち三五郎、おいし思ひ入れあつて

三五　道理こそ先刻から、をかしい素振りと思つたが、へエ、そんならあなたは、おきちかえ。

いし　さうして與五郎さまと仰しやるからは、もしやアノ山崎屋の。

あづ　アイ、その與五郎さんぢやわいなア。

三五　それなれば先刻から、致しやうもあらうもの。私しは兄御の與次兵衛さまに、御恩になつた、月見の三五郎といふ者。これは卽ち女房おいし。

いし　承はれば十次兵衛さまとやら、香合がお手に入つて、お屋敷へ御歸參遊ばし、それゆゑ殿樣の御婚禮も近近。そのおめでたに與次兵衛さまも御赦免なされ

三五　山崎屋の家は與五郎さまで、新たにお立て下さる由。それゆゑ諸所を手分けして、與五郎さまのお行くへを。

ト此うち吾妻、イソ〳〵として

あづ　そりやマアほんの事かいなア……モシ〳〵、與五郎さん、アレ、今のをお前、聞いてかいなア。

與五　なんぢや聞いたか。聞いたかとは、時鳥か……但しは辛子か、意見の事か。

ト吾妻思ひ入れ。

あづ　何を云うてもあのやうに。

三五　サア／＼、ようござります。どんな事を仰しやらうと、オイ／＼と御意次第。

いし　それ／＼、お氣に逆らはぬやうにさへなれば、自然と狂氣は直るとやら。

三五　マア／＼、云ふなりさんぼうがようござります。

ト此せりふのうち

與五　アレ／＼／＼、あそこへ行くのは、隨徳寺の角蓮坊め。さては彼奴も、エヽエ、色の浮世ぢやなア。

〽坊さんが／＼、醫者の眞似して小脇差し、それえ／＼、それ／＼羽織着て、伽羅で樒の香を隱し、世の中はこはやの酒に揉まれて粹となり、粹が身をくふ蛸坊主、お足の不足はなせでんす、乙姫さんへの心中に、てもそれは不躾せんばんな。

與五　ハヽヽヽ、蛸といへば、コレ／＼、田町が二の替りの俄の趣向、どうぢや、聞きたい。サア、皆も話して聞かしやれ／＼。

ト三人顏見合せ思ひ入れ。

三五　ハヽア、さては先生、吉原氣取りと見えるな。

いし　あのやうに仰しやるもの、なんなと話さずばなるまいぞえ。

あづ　それ／＼、どうなりと間を合せて、あの狂氣の鎭まるやうに。

三五　サア、お前は町の藝者ゆゑ、俄は知つて居なさらうが、こちらは俄を見に行く隙さへ。

あづ　さうではあらうが、わたしも話さうほどに、マア、お前方よいやうに。

三五　嬶アや、酒や牡丹餅が出たら用心しやれ。こりやアおきつに、化かされたも知れないぞえ。

いし　ナンノイナ。マア、なんなりと好い加減に。

與五　サア／＼、俄の話しはどうぢや、早う聞きたい／＼。

三五　よいワ、てんぽの皮とやらかさうか。

いし　それがよいわいな。

〽先づ吉原の全盛遊び、牽頭末社もうちむれて、女藝者は我れ一と、綾羅をまとひ錦繡の、飾りをなして趣向なす、あるが中にも取りわけて、椋鳥踊りの拍子とり。

〽しげさ／＼と戀にしやる、しげさ／＼の御勸化、山里越えても參りたや／＼、しげさ／＼の御勸化、山里越えても參りたや。

〽高い山から谷見れば、おまん、おまん、おまんは可哀や染分け襷で布晒す／＼、おまん、おまんは可哀や染分け襷で布

晒す。
ヘ佐渡で咲く花、いやさのさつさ、新潟で開くえ、とかく新潟は、いやさのさつさ色所え、さつてもおもしろ雁つばめ。
ト直ぐに後の唄のかゝりになり、浮かぬ吾妻を兩人して無理に踊らせる。吾妻、是非なく振りになる。
ヘ忍ぶ夜はそちら向かんせお月さん、色の世界ぢやに。
ヘ辛氣らし。
ヘ逢うた夜は、撞いておくれな明けの鐘、色の世界ぢやにな、辛氣らし、エヽ辛氣らし。
與五　面白い〳〵。今の俄を見るにつけ、後の月見は藤屋の二階で、底意くまなき夜と共に、飲み明かした大騒ぎソレ、その時の總踊り。サア〳〵、音頭々々。
ヘ音頭々々に不狂人、狂はかされてひと踊り、これも迷惑かしのえ。
トこれより四人揃り鉦入りの手踊りになる。
ヘ色の千種のなんなか〳〵に、萩の下露濡りよとて萩の浮氣な〳〵うは風に、割れ木瓜のいたづらな、桔梗と知らぬおとこへし、葛の恨みを苅萱に、ほんにこぼるゝ藍の花、可愛らしさの女郎花。

いし　こりやどうしても直らぬわいなア。
三五　それ〳〵、思ひ出した事がある。コレ〳〵、爰に法性寺の聖人より戴いた、妙見樣の祕符のお守り。利生は速か。與五郎さまに。
ト懐より錦の守り袋を出す。
いし　ほんに、それではお氣も直らうかいな。
あづ　サア〳〵、ちやつとお守を。
三五　オツと承知……こんなざいせぜこう良藥病郎消滅不老不死南無柳島妙見大士。
ト守を與五郎へ戴かせる。ゴンと時の鐘、薄ドロ〳〵にて、與五郎、ツト起き上がり、本性になりし思ひ入れ。
あづ　モシ、心を慥かに持たしやんせ。
三人　與五郎さま〳〵。
ト與五郎あたり見廻し、吾妻を見て
與五　ヤ、吾妻ぢやないか。
三人　心が附きましたかえ。
與五　さうして其方はいつの間に。
あづ　サア、お前に別れしその後に、兄御樣のお情で、わたしは身儘になつたれど、山崎屋はお咎めゆゑ、其方は

どこへも出されぬと、矢ッ張り藤屋に居るうちに、お前が狂氣の噂を聞くと、あるにもあられず、やう〳〵と、めぐり逢うてもしどないお身。

與五　ムウ、そんなら田中に忍ぶうち、甚兵衞始めお照が身の上、兄者人の難儀の樣子、其方の事も苦になつて、ハッと思ふとそれから夢。さうして、あのお二人は。

三五　私しどもはお兄御樣の、大抵御恩になつた者。

いし　マア〳〵、お心が附いて此やうな。

あづ　モウ〳〵〳〵、わたしが嬉しさ、お二人さん、推量して下さんせ。

三五　イヤモウ、その筈。お氣の附いた上からは、何もかもめでたいづくし。詳しい事は道々お話し。マア〳〵、早う私し方まで……併しそのお姿では……コレ〳〵嬶アおれはちよつと小梅へ行つて、駕籠を雇つて來る間、お主は此お二人に。

いし　アイ〳〵、しつかりとお附き申して居る程に、お前はちつとも。

三五　オヽサ、直さま。

あづ　そんなら早う。

三五　ドレ、行つて參りませうか。

〽心も直ぐな土手つゞき、小梅の方へと。

トこれにて三五郎、向うへ急いで入ると、直ぐにバタバタになり、下座より有右衞門、走り出で來り、向うを見送つてゐる吾妻に行き當り、互ひに驚ろき、顏を見て

有右　ヤ、わりやア吾妻だな。

あづ　さういふお前は。

與五　有右衞門。

有右　與五郎、うぬも爰にうせたな。十次兵衞が歸參より身に火の附いて來た我れ〳〵。倉岡どのもこれから勸めて、高飛びをする有右衞門。吾妻に丁度逢つたも幸ひ、丈左衞門どのへ連れて行く。その上、權九郎が指の身代り、本人なれば與五郎、われを引ッ立てゝゆく。二人ともキリ〳〵うせろ。

ト吾妻與五郎を引立てようとする。おいし、これを支へて二人を圍ひ

いし　イヤ、わたしが預かるお二人さん、滅多にさうはならぬわいな。

有右　小癪な女め。ならぬと吐かせば

いし　どうさんすえ。

有右　身共が斯うして。

トおいしを掻きのけ、兩人へかゝる。おいし、有右衛門が帶を捉へて引き戻す。吾妻與五郎、有りあふ臼を二人して引摺り、隔てにする。此うち淨瑠璃。

へしや面倒なと立ちかゝるを、有りあふ臼にてさそくの隔て、振りきり又も向うづら、眉間を杵の撞木づき、打たれてどつさり尻もちつき。

へめでたく／＼の若松さまよ、枝も榮えて葉も茂る、おめでたや、千代の子おめでたや。

ト三人にて有右衛門とをかしみの立廻りよろしくありて、トゞ、落ちゝろ襷にて、立廻りのうちに罠を拵らへ、有右衛門を打倒す。有右衛門、はずみに倒れると淨瑠璃、おいし身を枷に押へる。與五郎吾妻、臼をころがし、有右衛門が背中へ押しを置く。有右衛門もがく。

兩人　この間に、とも／＼。

いし　サア、お出でなされませ。

へ千秋萬歲萬々歲と、手を打ちつれてぞ。

ト與五郎先に、吾妻が手を引き、向うへ入る。おいし有右衛門を押へつけたる見得。

三重にてこの道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、正面、九尺の屋體、大和葺き、誂らへ打拔き障子三枚、左右建仁寺垣、石燈籠、植ごみ寒竹の藪、誂らへの門口、四ツ目垣、秋草手水鉢、すべて鴻野家下屋敷、倉岡丈左衛門閑居の庭先爰に丈左衛門。着流し、一本差し、庭下駄を履きて手燭を持ち、屋體に腰かけ、藪に目を附け、竹の下に雀、大ぶん群がり居る見得。時の捨て鐘、雀の聲にて道具とまる。

ト直ぐに誂らへの合ひ方、四方にて拍子木の音を限りなく亂調に打つ。丈左衛門、思ひ入れありて

丈左　ハテ、いぶかしき、庭前に、夜陰に群がる小鳥の啼く音は心得ぬ……野に伏勢あるときは、飛鴈つらを亂すの譬へ。殊さら四方に打ち立つる殺伐の音聲、時を告げ行く柝にあらず。爰は鴻野の下館、丈左衛門が閑居といひ、この身の云ひ譯立たずして、身共を召捕る手配りなるか。ハテ、心ならざる今宵の振舞ひ。ハテ、何とやら。

トあたりへ心を附け、小鳥に目を附け、小雀飛び去る。矢張り時の鐘、向うより彥助、以前の形にて、スタス

彥助　タと出で來り、門口より窺ひ
丈左衞門どの、彥助でござる。密かに小門を。
トほと〳〵と訪づるゝ。

丈左　入間氏、夜更けてござるは心得ぬ。
トつか〳〵と行き、門を明ける。彥助、内へ入り、外へ思ひ入れあつて

彥助　丈左衞門どの、最早この所に住居は無用。サ、とくとく爰を。

丈左　すりや。某が企みのあらまし。

彥助　十次兵衞めが言上なし、殊に胡蝶の香合を、彼奴が手より差上げて、貴殿や我れらが身の上遁がれず、有右衞門めも裏切りなし、明朝未明に上屋敷より、お召しと云ひ立て、何氣なう、貴殿を呼び寄せ、詰め腹切らせん企てござれば、當所の住居も只今限り。身共も逐電仕る。サ、貴殿も早々お立退きなされい。サヽ、お立退きお立退き。
トせり立てる。丈左衞門思ひ入れあつて

丈左　すりや、隱し置いたる胡蝶の香合、十次兵衞が手に渡り、彼奴は立身。丈左衞門云ひ譯なく、命にかゝはる時節到來。ハテ、是非もなき。

彥助　サ、それゆゑ爰を。

丈左　暫らくこの身を隱すには、故鄕でござれば本國河内へ。

彥助　遠路と申し、本海道は人目ござらん。

丈左　晝は忍びて夜每の旅、それも間道山越えに。

彥助　片時も早く。

丈左　承知いたした。貴殿も早く。

彥助　心得ました。
ト捨て鐘、合ひ方にて彥助、向うへかゝる。丈左衞門は門口をさし、障子の内より亂れ箱を取り出し、内より數通の書き物を取り出し、見る事。彥助、花道にて向うへ礫を合ひ圖する。揚げ幕より中間、弓張りを灯し、跡より丹下、次郎、黑具、捕り手の形、大小にて窺ひ出で來り、兩方へ行きあひ

兩人　彥助どの。

彥助　御兩所。

丹平　して、丈左衞門が落ちゆく先は。

彥助　彼れが本國、正しく河内へ。

次郎　身を隱さんとの彼れが白狀よな。

彥助　御兩所には、コレ。

兩人　ト二人に囁く。
心得た。庵の左右を。
ト思ひ入れ。中間、提灯を消す。兩人、門口より内を窺ひ、竹藪へ忍ぶと、彦助、中間に囁き、ソロ〳〵と門口へ來る。此うち丈左衞門、密書をよく〳〵改め見て
丈左　身共へ一味の家中の諸武士、取り置く神文、內意の密書、殘し置いては、可哀や彼れらが。
ト思ひ入れあり、書き物を、だん〳〵と手燭の火にて燒き棄てる。この時、兩人門を窺ふ。捨て鐘、合ひ方向うより捕り手頭、鉢卷、陣笠、襷野袴大小、重ね草鞋にて、十手を構へ、後より黑具の捕り手大勢、草鞋にて、十手を構へ、ヒソ〳〵と窺ひ、出で來り、彦助、捕り手頭に囁き、門口に手配りして窺ふ。
家名を記せし數通の書き物、燒き失なへば後の憂ひも。
ト思ひ入れ。この時彦助、門を訪れ
彦助　丈左衞門どの〳〵。
ト丈左衞門、思ひ入れあり
丈左　彦助どのか。
彦助　お明けなされい〳〵。御安堵でござる。吉事でござる〳〵。
トこれにて丈左衞門、門口をソツと明け
丈左　又お來やつたか。
彦助　御安堵なされい。おめでたう存ずる〳〵。
中間　丈左衞門さま、御安堵なさるゝめでたきお知らせ。宙を飛んで參りました。
丈左　彦助どの、下部を召連れ、丈左衞門が吉事とは。
彦助　お喜びなされい。貴公のお身に恙はござらぬ。
丈左　ヤ、、、、そりや、どう致して〳〵。
中間　御安堵なされませ。十次兵衞めが持參の寶は、眞赤な似せ物。
丈左　ヤ、なんと申す。アノ寶が。
彦助　サ、、寶は似せ物。上を僞はるお咎めにて、又ぞろや十次兵衞、御前の表は不首尾の樣子。下部が只今物語り。
丈左　アノ十次兵衞めが。
彦助　サ、この上ともに其許に氣遣ひござらぬ。最早御安堵。
中間　只今これへ、殿より赦免のお使者の入來。
彦助　氣遣ひ召さるな、丈左衞門どの。

丈左　さうお云やるが、實說でござるか。

彥助　何しに僞はりを申さうや。身共も誠に安堵いたした。

中間　お喜びなされませ〳〵。

ト捨ぜりふにて兩人左右より近づき、油斷を窺ひ

兩人　捕つた。

ト兩人胸づくしを取る。丈左衞門心得、脇差を取らうとする。彥助、手早く取つて門の方へ投げやる。丈左衞門「ハツ」と驚ろき、二人を投げのけ、ツカ〳〵と行かうとする。外より捕手「捕つた」と駈け込む。丈左衞門へかゝる。この時、奧より中間、或ひは着流しの若黨二三人、ツカ〳〵と出で

皆々　何者ぢや。

ト見て

ヤ、、、、。

ト驚ろき逃げて入る。三人立廻りにて、丈左衞門、屋體の內に掛けたる刀を手早く取り、組みつく三人を見事に切る。門口に窺ふ捕り手頭、一々下知する思ひ入れ。捕り手、だん〳〵とかゝり、見事に切られる。此うち物凄き鳴り物、奧より丹下、次郎走り出で、丈左衞門へかゝり、立廻りよろしく、丈左衞門、兩人を切つて捨て、手水鉢の柄杓を取り、水を汲み、一口飲んで思ひ入れあり、悠々と門口へ出ようとする。外に窺ふ捕り手頭、身拵らへして「捕つた」とかゝるを、丈左衞門、拔打ちに袈裟に切り倒し、血刀を提げ向うへかかる。此うち始終捨て鐘、早拍子木、物凄き合ひ方。揚げ幕より十次兵衞、鎖鉢卷、大小、四天の形、十手捕り繩を持ち、ツカ〳〵と出て、丈左衞門を支へ、本舞臺まで押し戾し立廻つてキツと留める。丈左衞門見て

丈左　ヤ、、、、。其方は南方十次兵衞、すりや濠野家へ歸參なし

十次　汝を召捕る役目を乞ひ請け、二番手遲しと控へしに組子を惱めて逃げゆくとも、最早叶はぬ天の網。身が越度たるお家の重寶、尋ね出して差上げたれば、以前に變らぬ十次兵衞、弟與兵衞が切腹も、みな其方がなすところ。弟の敵丈左衞門、腕を廻すか、但し又、この場で踏みつけ繩かけうか。サ、サ、、、サアなんと。

丈左　小癪な南方十次兵衞、丈左衞門が死者狂ひ、切つて切つて切り拔ける。道明けて通すまじきや。

十次　お家に仇する國賊め、腕廻せ。

文左　刀の切れ味、覺悟なせ。

十次　小癪な……捕つた。

ト草鞋を打ちつける。丈左衛門、切つて落す。十次兵衛、十手にてかゝる。立廻りよろしく、これより誂らへの鳴り物にて、兩人花やかなる捕り物のタテよろしくあつて、「ドツコイ」と、とまる。後へ捕り手大勢、弓張り、十手にて、バラ〳〵と取卷き

捕手　動くな。

兩人　どつこい。
　　先づ今日はこれぎり。
　　めでたく
　　とゝんが〳〵

打出し

當穐八幡祭（終り）

聞いて鬼門の角屋敷瓦町とや油屋の内が卽ち中幕にて序幕はしかも柳島妙見さんへお百度の早がはりより大切のさて庵崎の淨るりまで古い趣向を新板に書き綴りたる評判〳〵

お染久松色讀販

岩井半四郎七役相勤申候



初演の繪番附

お染久松色讀販

序幕

柳島妙見の場
橋本座敷の場
小梅莨店の場

役名――油屋娘、お染。同丁稚、久松。奥女中、竹川、喜兵衛女房、土手のお六。油屋番頭、善六。同丁稚、久太。同手代、九介。鈴木彌忠太。刀屋勘吉。中間、權平。廻しの源太。百姓、寺島の彌五兵衞。箱廻し、源六。藝者、小糸。油屋太郎七。油屋多三郎。仲居、お卷。同、お熊。竹川召使ひお勝。同下郎、三平。髮結ひ、中の郷の龜。丁稚三太。油屋下女、お園。非人、市。百姓、五百崎の久作。松本屋佐四郎。鬼門の喜兵衞。

本舞臺、向う淺黄幕、上手に石の大鳥居、眞中に松の大木、これに注連繩を張り、下手に水茶屋、眞中に額堂の書割り、日覆より前へ差出でたる松の吊り枝、すべて柳島妙見堂の模樣、三味線入り大拍子にて幕明く。

ト仕出し大勢百度參りなして居る。鈴木彌忠太、田舍侍ひの拵らへ。小糸、藝者の形。おまき、おくま、仲居の形にて、矢張り百度參りなして居る。向うより多三郎、花道よき所にて小糸に行き逢ふ。小糸、懷より文を出し、ソツと多三郎に渡し、右左へ別れる。この時源六、箱廻しの形。三藏、茶船の船頭の形にて彌忠太に付いて、同じく百度參りして居る。此うち、お園下女の形にて、お染に日傘をさしかけて出る。捨ぜりふ云ひながら上手へ入る。ト直ぐに早替りで、二役久松にて、甲斐絹の帛紗包みを持ち、上手より出て、お染にはぐれたる體にて、後先を見ながら向うへ入る。また向うより、三役奥女中竹川にて日傘をさし、後よりお勝召使ひにて、これもお百度を打つて居る心にて兩人ともに上手へ入る。トお染に替り、お園付いて向うへ入る。直ぐに久松に替り出て舞臺上手へ入る。ト竹川にて、お勝付いて、上手より出て

かつ　申し、旦那樣、これに茶屋がござりまする。暫らく
御休息遊ばされませ。

竹川　さうしませうわいの。

ト水茶屋へ入る。ト向うよりお染に替り出て、捨ぜりふ云ひながら上手へ入る。始終外の百度參りこの間々とぎれぬやうに、お染に行き違ふやうにあるべし。此うち善六、手代の形、跡より久太、丁稚にて、紙に包みたる强飯を喰ひながら出る。善六、叱り／＼出て直ぐに上手へ入る。この仕出しのうちに彌五兵衞、百度參りをして居る。ト向うより久作、田舍者の形、嫁菜賣りにて荷を擔ぎ出て、直ぐに舞臺へ來る。此うち百度止む。彌五兵衞、床几にかゝる。久作も腰掛け

久作　オイ、姐さん、茶を一つ下さい。

彌五　オイ、妾へも一つ。そして煙草の火ぢや。

ト久作、彌五兵衞を見て

久作　イヤ、お前は寺島の彌五兵衞どのぢやござらぬか。

彌四　オ、、わがみは久作ぢやないか。コレ、おれが此やうにお百度を打つて居るも、こなたの弟、久松から起つた事ぢやわいの。

久作　久松からとは、久松がどうぞしましたかな。

彌五　イヤ、なんともせぬが、こなたも知つて居る、あの權四郎が娘のお光が、久松にうツ惚れて、生きるわの死ぬるわのと、命生害にもかゝる事ゆゑ、當座遁がれに云ひ號けぢやと云うて置いたが、コレ、聞かしやれ、その久松が勤めて居る、油屋の娘と譯があるといふ事をお光が聞いて、それから、ブラ／＼と戀煩らひ。思へば思へば不便の事ぢやが、其方に逢うたは幸ひぢや。その油屋の親方に斷わり云うて、暇を取つて下されぬか。さうせぬと、忽ちお光は氣が觸れますぢやに依つて、どうぞ暇を取つて下されい。久作どの、賴むわいの／＼。

久作　成る程、その事なら儘にもなりませぬ。マア、暇の願ひ致して見ませう。

彌五　そんならこなたを賴みます。ヤレ／＼、嬉しや／＼。これといふも妙見樣のお庇、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。そんなら久作、賴みましたぞや。

久作　そんならモウ歸らしやりますか。

彌五　オ、、早うしまはつしやれ。

久作　夜さり話しにござりませ。

ト唄になり、彌五兵衞向うへ入る。久作跡を見送り

あの人も減相な。なんぼ弟とは云ひながら

トあたりを見て、
武家の御代取り御子息を、どうしてマア、百姓づれのアノ娘と
ト此せりふのうち、竹川にお勝、三平付いて水茶屋より出て
竹川　其方は五百崎の久作ぢやないか。
久作　ヤ、あなたは竹川さまでござりますか。先づはお前様にも御機嫌の好いお顔を拜しまして、何よりかおめでたう存じます。
竹川　其方も無事で、めでたい／＼……久作に密々に話しもあれば、二人の者は神主に逢うて、願うたお札を
かつ　戴いて参りませう。久作どの、後ほど逢ひませう。
トお勝に三平付いて上手へ入る。
竹川　久作、其方はわしが親達に、勤めて居やつた乳母が悴、其方も知つて居やる通り、父様がお預かりの牛王義光の刀、紛失ゆゑに情ない
久作　千葉の御家中多い其うちに、誰れあらう石津久之進さまともあらうお方が、刀紛失ゆゑに御切腹。あなた樣には奥勤め、御次男の久松さまは、乳母の悴の私しが引取りまして、勿體ない、しつけぬ業の御奉公、根が水際の立つ若旦那、娘子供が目をかけて、袖褄引くに困り果て、一寸遁がれの云ひ號け。
竹川　その在所の光とやら、疾に噂も聞いたれど、様子を聞けば久松が、勤めて居やる油屋に、獨り娘のある様子。今も今とて參詣の、道行く人が弟の噂。十六七な振り袖の、供して居やるを見かけたが、そんなら彼れが油屋の
久作　成る程、左樣な事もござりませう。世間一統評判のこしやく娘のある内へ、同じこしやくな若旦那、差置きまするも正眞の、井戸端の茶碗とやら、危ないものとは思ひますれど、根がお刀を詮議の爲の御奉公。よもや、うか／＼左様な事も
竹川　サア、わしもさう思ふゆゑ、今日お百度を上げるのも、且はあの子の身の災難、又は刀の恙なう、手に入れる爲の大願も、それが苦勞になるわいの。其方に逢うて姉が傳言。
久作　お目にかゝらば私しも、お話し申すでござりませう。さうしてあなたはお屋敷へ
竹川　イヤ、まだ用事もあれば、何かはアノ巴屋と申す方にて。
久作　お目にかゝつたその上に、御詮議なさるゝお刀の

竹川 手懸りあらば、早速姉に知らするやう、其方をよきに頼んだぞや。

ト此せりふのうち、お勝三平出て來て

かつ 旦那様、お札を戴いて参じました……見請けますれば、御家中の鈴木彌忠太さま、遊里の女中をお連れなされ、只今これへお出でござりまする。

三平 遊山がてらの物参り、御用もあらば下郎めが。

竹川 イヤ、荒立てゝは何かの妨げ、諸事は巴屋の座敷にて

久作 左様ならば竹川さま。

竹川 久作、其うち。

ト唄になり、竹川お勝三平、捨ぜりふにて入る。久作跡に残り

久作 竹川さまの今のお詞。すりや娘御の供をしてアノ爰へ。

ト流行り唄になり、上手より鈴木彌忠太、藝子小糸が手を取り、仲居おまき、おくま、源六、三藏、皆々捨ぜりふにて出て來て

彌忠 暫らく爰へ休んで参らう。イヤモウ、今日の参詣はこれなる糸の手を引いて歩きたい望みぢやに、なぜ糸は身共が手を引く事は嫌ひぢや。否ぢや／＼と申すが、ありやどうした譯ぢや。

いと それぢやと云うて、晝中に其やうな事を。

彌忠 なんのならぬ事があらうぞ。今にも後金の二百兩を親方に渡さば、女房ぢやないかいやい。

くま 申し／＼旦那、今時藝者の手を引いて歩くと、人が野暮ぢやと申しまする。

彌忠 なんと申す。手を引いて歩くを野暮と申すか。

まき 左様でござりまする。手を引かずに歩くを粹と申しまする。

彌忠 すりや、手を引かぬが粹ならば、手を引かずに連れ立つて参らうか。

まき どうなとなされませいなア。

彌忠 サア／＼、これから土手で、摘草をして樂しまうではないか。

くま それがようござりませうわいな。

三藏 申し／＼、摘草よりは、爰に嫁菜賣りが居ります。これをみんな惣じまひにしておやりなされませ。

源六 オヽ、それがよからう。コレ／＼、嫁菜屋、みんな買ふが、いくらだ。

久作　イエ／＼、みんな賣つてしまつて、嫁菜の苞が一つ殘つて居りまする。
源六　たつた一つか。よいワ。買ひかゝつたものだ。いくらだ／＼。
久作　ナニお前、たつた一把ばかり、只でもようござります。
源六　イヤ／＼、商人の物を只取つたと云つては濟まない。錢の五十も遣らうか。
　ト腰提げを探り見て
ホイ、これはしたり、いま門前で皆乞食に遣つてしまつた。よし／＼、いま巴屋から錢を持たして取りに寄越すから、暫らく待つて居たがよい。
久作　ナニ、持つてござつてもようござりまする。そんならこの荷を爰に預けて置きますから、お前好い時分に取りにござりませ。姐さん、暫らくこの荷をお賴み申します。ドリヤ、行て來うか。
　ト唄になり、久作、上手へ入る。ト油屋多三郎下手より出かけ、小糸と顏見合せる。
小糸　ヤアお前は、
　ト云はうとする。多三郎、茶店へ隱れる。

彌忠　お前とは、誰れぞ來たか。
小糸　サア、それはな。
まき　イエ／＼、いま糸さんがお前と云はしやんしたは……オヽ、それ／＼、くちなはでござんすわいな。
　ト竹の先に火繩の括り付けたを、彌忠太の足許へ抛る。
彌忠　ナニ、くちなはぢや、身共大嫌ひぢや、
源六　モシ／＼、くちなはぢやない。こりや火繩でござります。
彌忠　何を馬鹿な。
皆々　ハヽヽヽ。
　ト捨ぜりふ云うて居るうち、下座より巴屋新八出て
新八　これは／＼旦那、糸さまをお連れなされて妙見參りでござりまするか。お樂しみでござりまする。
彌忠　オヽ、巴屋の新八、忙がしいか／＼。
新八　忙がしい段ぢやござりませぬ。旦那、ちとお出でなされませぬか。
彌忠　オヽ、只今參るところだ。サア糸、行かうか。
小糸　イエ／＼、わたしや好い次手、吾妻さまへ詣つて來るわいな。
彌忠　吾妻の宮へ詣るなら身共も詣らう。

小糸　イエ〳〵、女子ばかりで詣るのが、わたしが願でござんす。

源六　これはしたり、糸さま、どうしたものでござります。旦那と一緒にお出でなされませ……モシ、旦那、わたしは少と用事もござりますから、後から參ります。

彌忠　然らばさうしやれ。サア、糸、行かうか。

ト手を取る。

小糸　其やうに手を取つてぢやと、わしやモウ行かぬぞえ。

彌忠　然らばお手を取らずと、お供いたしませうか。

新八　左樣なら旦那樣

彌忠　糸も來やれ。

小糸　又しつこい。マア先へ。

彌忠　オツと閉口。然らばお先へ。

ト流行り唄になり皆々入る。ト茶屋より多三郎出て、最前の文を懷より出して見ながら

多三　そんなら糸を身請けする侍ひとやらは、あの彌忠太。どうぞ善六に逢ひたいものぢやが。

トこんな事云うて居る。トばた〳〵にて久太、三太、丁稚の形にて竹の皮の強飯を爭ひながら出る。

三太　ヤイ久太、その強飯をおれに寄越せ。

久太　誰れがおのれに遣るものか。

三太　人の強飯を引ッ奪つて太い奴だ。寄越せ〳〵。

ト兩人捨ぜりふにて爭ふ。トド掴み合ふ。多三郎中へ入り

多三　コレ〳〵、われは久太ぢやないか。

トこれにて三太、多三郎を見て

三太　お前はこの頃わしが內へ來てござる、油屋の若旦那。久太と喧嘩した事は、內の旦那へ沙汰無しに頼みます。

多三　オヽ、云はぬ程に、早う去んだがよいぞや。

三太　ヤイ久太め、覺えて居やアがれ。

ト橋がゝりへ入る。久太見送り

久太　間拔けやい〳〵。

多三　コリヤ〳〵久太、どうしたものぢや。よい加減にせぬかい

久太　若旦那、さうしてお前は、この頃どこへ行つて居なさつた。阿母樣が案じて居なさるぞえ。

多三　イヤ、おれは當時松本屋の內に居候ぶぢや。さうして、わがみは誰れと來やつた。

久太　ハイ、わしは番頭の善六さんと、伊勢八の弔ひに來たら、あの三太めが、わしが強飯をくれろと云ひやす。

太い奴サ。

多三　オヽ、そんなら其方に頼まう。

ト懐より折紙と小糸より來た狀を出し

アノ、これを善六に見せて、わしが云うて居るこの間頼んだ事、この譯ゆゑ急に頼むと云うて、渡してたも。

ト渡す。

久太　そんならこれを渡して、この間頼んだ事を頼むと云へばよいのかえ。

多三　さうぢや／＼。わがみは賢い者ぢや。そんならアノ巴屋に待つて居る。早う頼んだぞや。ドリヤ行かうか。

ト流行り唄になり、多三郎上手へ入る。久太殘り

久太　なんの事ぢや。折角爰で樂まうと思うたに、いろいろの事を云ひ付け居る。

ト捨ぜりふ云ふて居るうち、大拍子になり、上手より善六に源六出て

善六　源六か、好い所で逢うた。

源六　わしもお前に逢ひたうごんした。

ト此うち久太見付けて

久太　オヽ、番頭さん、最前からお前を大きに。今から尋ねるところだ。

善六　何を阿房め。

久太　なんの、それを叱る事があつて。

善六　さうして尋ねると云ふは、そりやなんの用で。

久太　なんだか多三郎さまが、お前にこれを渡して、頼んで置いた事を頼むとさへ云へば解ると。なんと、よく覺えて居やうがの。

善六　そんならこれを

久太　慥かに渡したぞえ。アア、これから強飯ぢや。

ト床几の上に寢腹這ひ、遠見しながら強飯を食つて居る。

源六　善六さん、そりや何でござります。

善六　これは牛王義光、刀の折り紙ぢや。小糸が身請けの金に詰り、これで工面してくれろと、わしへの頼みぢや

源六　そんならそれで、金の工面してやる心かえ。

善六　なんの因果にそんな世話をするものか。あの野良息子の多三郎を、何それ彼それ科を拵らへて、油屋を抛り出して、娘のお染をおれが女房にするワ。そこであの淸兵衛を、若隱居の貞昌どのと、譯があると世間へ披露する。是非に破談にならねばならぬ。ソレ、跡式はおれが物。その時は源六、お主を引取つて番頭ぢや。えらいか

えらいか。

源六　奇妙々々、先づ祝ひに、一杯呑まうぢやござりませぬか。

トこの云ひ合せを久太、頬杖ついて聞いて居て、この時手を叩き

久太　好い事聞いた〳〵。番頭さんと、どこやらの人と、好い事聞いた〳〵。

ト手を叩き踊り歩く。善六源六慌てゝ押留め

善六　コリヤ〳〵、久太よ〳〵、われは賢い者ぢや。いま云うた事をば、誰れにも云うてくれるな。その代り、おれが好い事云うて聞かす。

久太　番頭さん、好い事とは、そりやどのやうな事ぢや。いま聞いた事は誰れにも云はぬから、好い事を云うて聞かしなさい〳〵。

善六　サア、その好い事は

久太　なんぢや〳〵。

善六　オヽ、さうぢや〳〵。われに惚れて居る女がある。

久太　エヽ、おれに惚れて居る女とは、そりや誰れぢやえ。

善六　サア、その女は

久太　誰れだえ。

善六　サア、その女は……オヽ、さうぢや。アノ内の若隠居様が、お主にえらう惚れてござる。

久太　なんぢや。そんならアノ隠居様が

ト思ひ入れあつて

番頭さん、嘘ばつかり。

トはにかむ思ひ入れ。

源六　若隠居が惚れて居るとは、エヽ、あやかり者め。

ト脊中を叩く。

久太　エヽ、措きなんし。

源六　エヽ、果報者め。

久太　イヤ〳〵、こりやアおれを、嬲るのだ〳〵。なんの阿母様が、おれに惚れるもので。

善六　ハテ、疑ひ深い奴。コリヤ〳〵、嘘ぢやないぞよ。この間隠居様がおれを呼んで、コリヤ善六、おれはアノ久太に首だけ惚れてどうもならぬゆゑ、其方が世話して添はしてたも。と云うて江戸で添ふ事はどうもならぬ、幸ひ彼れが在所は葛西の柴又村、先づ久太を在所へ駈落ちさせ、その後からおれもついて行く。ソレ、在所で二人が揃ひの浴衣で、鋤鍬持つて、チン〳〵〳〵、暮らしたいのが願ひぢやと云はしやつた。

久太　そんなら何かえ、おれが在所へ行つて居ると、後から隠居様が髪を生して……イヤ／＼、こりや嘘ぢや嘘ぢや。

善六　コリヤ／＼、ハテサテ疑ひ深い奴ぢや。嘘でない證據はコレ、其方に遣つてくれと云うて、隠居が金を壹歩。

ト紙入れより金を一歩出して

これをわれに路銀に遣つて、駈落ちさしてくれいと云うて下さつた。早くこれを持つて駈落ちせい。

ト金を渡す。

久太　よし／＼。そんなら今からこの金持つて駈落ちぢや。そして、この金で世帯を持つのだな。イヤイヤ、世帯よりは、おれは鰒を喰ひたいから、思ひ入れ鰒を喰ふ。イヤイヤ、世帯も持ちたし鰒も喰ひたし、鰒にしようか、世帯にせうか。鰒か世帯か世帯か鰒か。オヽ、どうでも鰒ぢや。世帯は元服してから何時でも持たれる。なんでもこれだけ鰒を喰はう。

ト行きかける。

善六　コリヤ／＼、鰒はよいが、最前強飯を喰つたぢやないか。鰒と強飯は食ひ合せぢやわい。

久太　なんのお前、鰒に餅は悪いが、強飯は大事あるまい。

善六　成る程、われは賢い者ぢや。コリヤ、必らず江戸へ戻るなよ。

久太　承知々々。

ト花道へ行く。雪駄を脱いで腰に挾み

番頭さん。

善六　なんぢや。

久太　駈落ち。

ト云ひながら逸散に向うへ駈けて入る。

善六　大べら坊め。

源六　さうして、久太を駈落ちさせる心は。

善六　これも魂膽有馬山、多三郎が渡した折紙を、久太めが持つて駈落ちしたとなるワ。そこで此奴を金にするワ。多三郎は早速内を叩き出される。嫌とも跡はおれが物。

源六　天晴れ、流石は大所の番頭様。

善六　智恵者と見えるか。

源六　イヤモ、孔明々々。

善六　イヤ、それ程にもあるまい。

源六　ハヽヽヽ。時におれは多三郎を、段々深味へ引入れる工風が第一。

善六　そんなら首尾よう。

源六　ドリヤ、行て來ようか。

ト唄になり、橋がゝりへ入る。

善六　これもよし〳〵。時に、これを持つて居るも危ないもの。

トあたりを見る。久作が置いて入つたる嫁菜の荷を見付け

オヽ、爰に好い物がある。この嫁菜の藁苞、これへ入れて土産の顏で持つて戻るワ。ところで內でおれが取るワ。よし〳〵。

ト捨ぜりふ云ひながら苞の中へ折紙を隱す。此うち廻しの源太出て

源太　モシ、番頭さん……コレ、番頭さん。

ト背中を叩き微醉のこなし。善六、悄りして、苞を荷の中へ入れ、飛び退き

善六　エヽ、悄りしたわい……オヽ、廻しの源太か。さうして、どこへ行つたのだ。

源太　御免なさいやし。わつちやア開帳へ參りやして、矢大臣で五ツの字グイときめ、あんまり好い心持ちなのでフラ〳〵と參りました。

善六　オヽ、それはよかつたが、時に、いつやら賴んだ事はどうだ。

源太　そりやア合點でござります。中の鄉の髮結ひの龜を賴んで置きましたからは、如才はござりませぬが、跡でこれはよいかね。

善六　そりや胸にあるわえ。そんなら明日、淸兵衞が來て居る時分に賴む。必らず間違へまいぞや。

源太　そんならようござりますが、これに間違ひはないかね。

善六　氣遣ひするな。善六だわえ。

源太　それさへよければ、祝ひに又五合。

善六　まだ呑むか。

源太　あて呑みぢや。

ト流行り唄になり、上手へ入る。善六、捨ぜりふにて床几へ腰を掛けると、向うより油屋太郎七、旅商人の形。九介、手代の形にて、風呂敷包みを脊負ひ出て來て、直ぐに舞臺へ來る。

太郎　オヽ、其方は善六ぢやないか。

善六　オヽ、伯父御太郎七さま、九介も今戻つたか。

九介　番頭さん、聞きなさいまし。松戸の市は大當りで、馬に付けて行つた物も皆賣つてしまつて、殘つたのを、

これはかり脊負つて歸りました。

善六　オヽ、それは好かつた。大儀々々。

九介　マア、お休みなさいまし。

太郎　オヽ、さうさう〳〵。

ト三人腰掛ける。

太郎　時に善六、わがみに云はうと思うて居たが、いつぞや刀屋の勘吉が方から、質に取つた牛王義光の刀、ありや餘りあやの拔けぬ物ぢや程に、月が切れたら、早く流してしまや。

善六　ハイ〳〵、畏まりました。

太郎　さうして、折紙はしまうてあるかの。

善六　サア、その折紙は多三郎さまが

太郎　ヤ。

善六　イヤ、貞昌さまが簞笥へしつかりと、おしまひなされてござりました。

九介　モシ〳〵、伯父御樣、もう晝でもござりませう。どこぞで支度をなされませぬか。

太郎　オヽ、それがよからう〳〵。

九介　橋本で田樂を燒かせませうか。

太郎　田樂もよからう。善六もおぢやらぬか。

善六　成る程、私しも參りませう。

ト嫁菜の苞を提げて、捨ぜりふ云ひながら行かうとする。この時久作出て、荷の中に苞が無いゆゑ、そこらを見廻して、善六が持つて居るのを見付けて、默つて取らうとする。善六、恟りして

善六　コリヤ〳〵、人の持つて居る物を、斷わりなしにどうするのだ。

久作　ハイ、この嫁菜は私しのでござります。

トこれにて善六心付き

善六　そんならこの嫁菜は貴樣のか。ハヽヽヽ、ハヽヽ、へヽヽヽ。こりやおれが惡かつた。斯うせう。この嫁菜おれが買はう。

久作　イエ、この嫁菜は人樣に賣つて置きましたから、お氣の毒ながら賣られましない。

ト持つて行かうとする。善六しつかり持つて放さず

善六　ハテ、人に賣つて置いても賣り物買ひ物だ。人が二十四文ならおれは五十。人が五十ならおれは百に買ひさへすればよいではないか。

久作　イエ〳〵、それでは義理が濟みませぬ。矢ツ張り返して下さりませ。

善六　それでも是非買はねばならぬ。

久作　どうぞ御免なされませ。

　ト藁苞を引合つて居る所へ、下手より中間權平出て

權平　善六々々、お旦那が急の用事があるから早く來さつしやれ〳〵。

善六　イヤ〳〵、今ちつと用事があつて

權平　イエ〳〵、此方は彼の牛王義光の刀の事に就いて。

太郎　なんぢや、義光ぢや。

善六　サア、その義光ゆゑに、この嫁菜を

權平　ハテ、それに嫁菜がいるものか。早く來やれ〳〵。

　ト踠くを無理に引立て行く。

善六　コレ〳〵、九介々々、なんでもその嫁菜を、買つて置いてくれ〳〵。

　ト踠き〳〵引摺られて入る。

九介　なんだか狂人の沙汰だ。

太郎　九介、善六は、なんぞつきはせぬかの。

九介　さればサ。

久作　ア、コレ、今の旦那はどこへござつた知らぬ。

九介　コレ〳〵嫁菜屋、今のはおれが内の番頭さんだが、その嫁菜を買つてくれろと、くれ〳〵の頼みだから、わしに賣つて下さい。

久作　有り難うござりまするが、これは外の旦那へ賣つて置きまして、又あなたへ上げましては、先樣へ義理が濟みませぬ。

九介　義理が濟むも濟まないも、高が嫁菜ぢやアないか。なんでも錢づくサ。そんな事を云はずに賣るがよい。

久作　ハイ〳〵、また明日好いのを摘んで來て上げますから、これはマアお遣りなされて下さりませ。

九介　さうでもあらうが、明日嫁菜を爰まで買ひに來られるものか……斯うするがよい。この嫁菜をおれに賣つてそこらにいくらも生えて居るのを取つて、外へ遣るがよいではないか。どうも聞き分けの惡い男だ。

久作　イエ〳〵、それではわしの心が濟みませぬ。

九介　成る程、強情な男だ。この嫁菜が唐からでも來やアしまいし、土手縁にいくらも生えてゐるものを。成る程田舍者といふものは解らないものだ。

　ト此せりふの内久作ムツとして

久作　モシ〳〵、この嫁菜は外へ賣つたから、賣られないと云ふに、イヤこの嫁菜が唐からでも來はしまいの、田舍者は解らないのと、賣られないから賣られないと云ふ

に、餘り其やうに云はつしやりますな。

九介　なんだ〳〵、大分ムッとするな。コレ。解らないから解らない田舍者だと云つたがどうした。この猿唐人め

久作　猿唐人とはわしが事かえ。

九介　うぬが事だ。惡く洒落やアがると撲り挫くぞ。

久作　撲られるものなら撲つて見さつしやれ。

九介　撲らないでどうするものか。

ト九介久作摑み合ひ、久作、亂れ髮になる。仕出し大勢出て、ワヤ〳〵云ふ。太郎七分ける。この中へ三藏醉ひたる體にて出て

三藏　九介、相手は此奴か。

ト穿いて居る下駄を脫いで久作が額を打ち割る。久作の額に疵付く。此うち向うより松本屋佐四郎、羽織着付け、ぱつち、一本差しにて出て來て、この體を見て中へ入り、分けて

佐七　待て〳〵。見りやア油屋の太郎七さまぢやアござりませぬか。

太郎　オヽ、佐四郎さま。九介と商人が喧嘩ぢや。止めて下さりませ。

佐四　九介、一體こりやアどうしたのだ。

九介　イエサ、あの野郎めが、この嫁菜を買はうと云ふを賣らないからの事でござります。

佐四　賣らないなら買はないがいゝぢやアないか。

三藏　エヽ、撲き殺してしまへ。

ト下駄を振り上げる。

佐四　なんだ、市川屋の三ぢやアないか。われもまた喧嘩の彌次馬だな。なんだ、下駄を振り上げやアがつて、肌でも入れやアがれ。

三藏　アイ。

トしよげる。

佐四　見りやアお前は田舍の人だの。

久伯　ハイ、田舍の者でござります。僅かの事でこのいさかひ。どうぞよろしうお賴み申します。

佐四　見りやア、お前頭に疵が付いた。オヽ、さうして半纏も破れた。

ト此うち仕出し捨ぜりふにて久作を見て笑ふ。

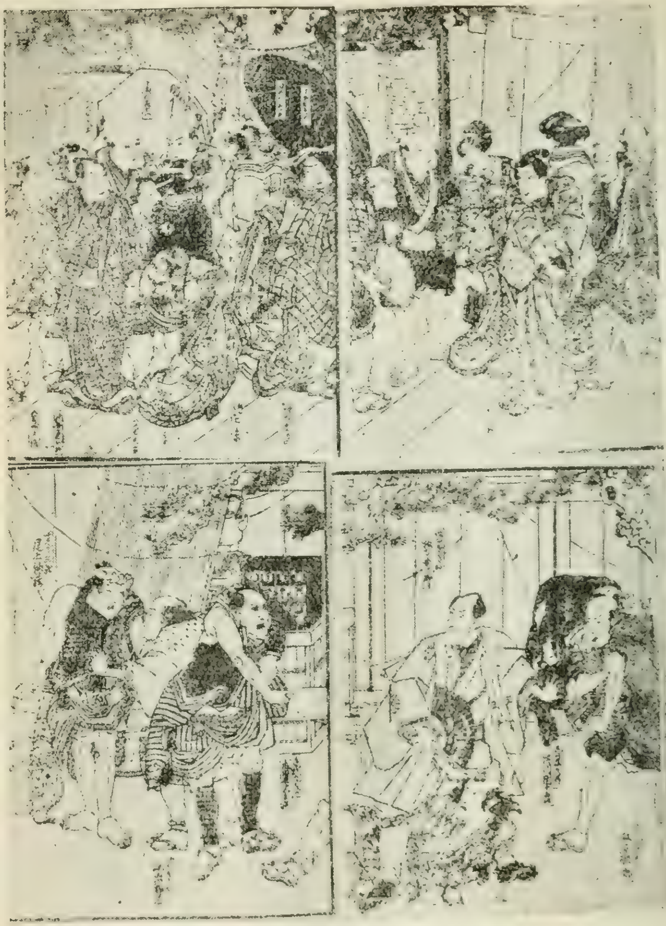
三藏　エヽ、此奴等、見る物ぢやアない。通りやアがらないか。

皆々　そりや怒つた。

ト逃げて入る。

三藏　此奴らア。
　ト同じく追うて入る。
佐四　御覧じませ。あの通りだ。
太郎　若い者といふものは、困つたものでござります。
　ト佐四郎、思ひ入れあつて
佐四　伯父御様、ちよつと。
　ト太郎七を上手へ招き
お前、なんと思ひなさるか知らぬが、見ればあの通り疵も付く。半纏も破れたからは、此まゝに歸されもせまいが、なんぞござりませぬか。
太郎　ハイ、わしも松戸へ商ひに參りました歸りがけゆゑ古着が殘つて居りまする。なんぞ見てやりませうか。
佐四　さうしなされば、わしも物を云ふからは只も置かれまい。膏藥代にわしも壹歩やりませう。
太郎　それではどうも。矢張りそれも私しが
佐四　ハテ、こりやアわしに出させて下さりませ。
九介　モシ〳〵、佐四郎さま、それではどうもお氣の毒でござります。
佐四　なんだ、お氣の毒だ。べら坊め、たうとう壹歩損をさせやアがる。

　ト太郎七、此うち風呂敷より誂らへの袷を出して佐四郎に渡す。
佐四　モシ〳〵、田舎の人え。サテハヤ氣の毒だが、お前も思はぬ災難で、額にも疵が付き、半纏も破れたが、餘りコレ侮りがましいが、半纏の破れた代りこの古着。そこでこの疵は、この金で萬能膏でも付けなさるがよい。ほんのこれが、わしが挨拶したといふ印。これを取つておとなしく濟まして下さりませぬか。
久作　モシ〳〵、そりやアなんでござります。こんな汚い半纏が破れたといつて、その袷や、又これはかりの疵に大枚壹歩の金を貰ひましては、私しの心が濟みませぬ。これは矢張りお前様の方へ、お納めなされて下さりませ
佐四　成る程、お前は田舎の人で正直だから、さうでもあらうが、これはわしが志しだから、平に取つて下され。
久作　イエ〳〵、どのやうに云はつしやりましても、これを取ります事は否でござります。
佐四　そんなら何かえ。わしが挨拶が氣に入らないのか。それでそんなに云ひなさるのか。
久作　なんのお前、そんな事ではっ
佐四　イヤ〳〵、さうだらう〳〵。折角口をきいたが、こ



根本所載の場面

の挨拶は退きませう。

太郎　モシ／＼それでは

佐四　それでもあの人が、わしが挨拶を聞入れませぬから、是非がござりませぬ。

ト此うち九介思ひ入れあつて

九介　モシ／＼、もうようござります。これ程に云つて聞分けの無い奴なら、どうするものか。乘り掛つた船だ。あの野郎を撲き殺して、わつちが下手人に出りやアようござります。退いておくんないやし。撲ッ殺してしまふワ。サア、下手人はおれだ／＼。

ト九介、久作に立ちかゝる。これにて久作顫へて

久作　ア、、申し／＼、ようござります／＼。貰ひましよ貰ひましよ。

佐四　そんなら貰つて下さるか。

久作　貰ふまいと云へば殺さうと仰しやるし、お氣の毒ながらお貰ひ申して置きませう。

佐四　そりやア忝ない。そんならそれで納まつたと云ふものだ。併し、物は極りだ。一つ〆めてもらはうか。

太九　それがようござります／＼。

久作　モシ、〆めるとは、どう致しまする。

佐四　〆めるとは手を打つ事だ。

皆々　よい／＼。きまつてシャン。

ト手を打つ。久作、不拍子に手を打つ。

佐四　先づ／＼これで極つた。ヤレ／＼、よく料簡して下すつた。

久作　イヤモウ、大きにお世話樣でござりました。左樣ならばもう歸りませう。

佐四　なにか、もう歸るのか。それもよからう。コレ、江戸へござつたら、住吉町の松本屋と尋ねてござるがよい時分時には遠慮なしに、飯でも喰つて歸らつしやるがよい。

久作　ハイ／＼、有り難うござります。

ト捨ぜりふにて荷をしまひ、花道へ行きかける。

九介　コレ／＼、若いの。今のはほんの間違ひだから、堪忍さつしやれ。

久作　ナニお前、お互ひでござりやすワ、お前。

ト唄になり、久作向うへ入る。

九介　佐四郎さま、大きにお世話樣でござりました……時に太郎七さま、晝食に致しませうか。

太郎　オ、、さうせう。次手に橋本で、舟を云ひつけてた

も。

九介　畏まりました。そんなら私しはお先へ參ります。

太郎　さうぢや〳〵。

九介　佐四郎さま、お話しなされませ。

　ト唄になり、九介上手へ入る。

太郎　佐四郎さま、何かといかいお世話樣でござります。なんぞといふと皆お前樣の御苦勞、有り難うござります

佐四　イヤモウ、そりや互ひの事。併し氣の毒なは多三郎この四五日はわしが內に居ますが、これもほどきを付けて、深川の藝者も、わしが親分になつて、事ゆゑなく內へ戻してやりたし、又お染ばうも山家屋へ、早く片付けてしまひたいものぢやて。

太郎　イヤモウ、染といひ、多三郎まで、いかいお世話。山家屋へ嫁入つて行けばお染が仕合せ。

佐四　サア、それが仕合せかなんだか、わしもひよんな仲人しかゝつて、今では聟の淸兵衞へ、云ひ譯たらだら。

太郎　そりや又何ゆゑ、淸兵衞どのへ。

佐四　サア、その氣の毒なは……高くは云はれない。ちよつとお出でなされませ。

　ト兩人舞臺前へ出て、下に居て

知つての通り、貞昌どのは堅い氣質、世間知らずのあのお染、仲人仕掛けたこの佐四郎、昨夜わざ〳〵淸兵衞どのが、わしを呼んで、云ひ約束したあのお染、內の子飼と斯う〳〵と。

　ト此うちお染、お園付いて出かけて居る。太郎七思ひ入れあつて

太郎　ムウ、內の子飼とあるからは、もしや久松

そめ　アノ、久松がどうぞしてかえ。

太郎　オヽ、其方はお染、貞昌どのも參詣か。

その　イエ〳〵、今日は妙見樣へ、お百度にわたしが付きまして

太郎　アノ、女子ばかりで

その　イエ〳〵、內の丁稚どの

そめ　あの久松を供に連れ

佐四　サア、その久松が今も噂を

そめ　久松がなんで噂を。

佐四　イヤ、久しき松の今も噂を……コレ、お染ばう、この老松へお百度か。

そめ　アイ、この久松の若綠。

佐四　風にも靡く柳島、一木の松も若葉して

そめ　振りよき松は
太郎　子飼の久松。
佐四　松には苦勞を
そめ　エ。
佐四　嘘ではあるまい。
ト吞中を叩く。三味線入りの大拍子になり、この道具廻る。
本舞臺、眞中に九尺の屋體、大和葺き數奇屋がかり左右障子、正面伊豫簾かけてある。下手障子屋體、この間廊下があり、上手切り戸口、上下ともに山吹の花盛り。爰に彌忠太、小糸、おくま、おまき、酒盛りして居る。流行り唄にて道具納まる。
彌忠　なんと糸、この山吹の盛りは、見事な事ではないか
小糸　知らぬわいな。
まき　モシ、糸さん、旦那があのやうに云うて居やしやんす。ちつとは氣を浮き／＼持たしやんせいな。
くま　ほんに、それ／＼、餘りそれでは愛想がござんせぬわいな。
小糸　イエ／＼、それでも花を見たらもござんせぬものを

ト此うち權平、勘吉。善六を引ツ張り出る。善六、橋がかりへ思ひ入れ。
勘權　善六を連れて參りました
彌忠　大儀々々。コレ／＼善六、何をウカ／＼致して居る
善六　イエ、最前の嫁菜賣り
彌忠　なんと。
善六　多三郎が折紙を
小糸　ナニ多三郎さんとはえ。
ト善六、無性に橋がかりを苦勞する思ひ入れ。此うち下の障子屋體より、多三郎顏を出し、小糸を招く。
小糸　ほんに美しい山吹、見て參ぜう。皆樣も一緒に。
まき　モシ、わたしも參りますぞえ。
くま　彌忠太さま、後にえ。
ト皆々下座へ入る。
彌忠　コレサ善六、何を其やうに、ウカ／＼致し居る。して、義光の刀は。
勘吉　イヤ、その義光の刀の儀は、莨屋喜兵衞に頼まれ、これなる善六どのへ百兩の質に入れ、その金は喜兵衞に渡し、即ちこれが受取でござります。
彌忠　成る程／＼。こりや喜兵衞めが受取。こりやアあの

百兩を横取り致したな。イヤナニ勘吉、大儀ながら身が家來と同道にて、喜兵衛をこれへ連れて來やれ。

勘吉　畏まりました。

ト勘吉權平兩人入る。

彌忠　コレ〱善六、最前より身共にばかりしやべらして刀は如何いたした。

善六　サア、その刀ゆゑにアノ嫁菜賣りめが

トついと奥へ入る。

彌忠　あの善六めは、どうでも狐でもついたと見えるわい

ト内にて

かつ　サア〱、お出でなされませ。

トこれにて彌忠太、片脇へ寄つて居る。ト久松にお勝付いて出て

かつ　マア〱、よい所でお目にかゝりました。

久松　さうして、竹川さまには。

かつ　今日は柳島へ御代參にお出でなされ、お前樣をお見受けなされ、尋ねて參れと仰しやるゆゑ、只今參りまする所でござりまする。

久松　左樣なら、行ても大事ござりませぬか。

かつ　サア〱、ちやつとお出でなされませ。

ト正面の屋體横の障子を明けて入る。

お履物はわたしが

ト取らうとするを久松、取つて土を拂ひ

久松　イエ、これが平常でござります。

ト唄になり、兩人入り障子さす。彌忠太こなしあつて

彌忠　そんならあの前髮めに、あの屋敷の女が取持ちで、こりや出逢ひを致すと見える。

ト捨ぜりふのうち、バタ〱にて下の障子屋體よりお染逃げて出る。跡より善六追へ出て、後より

善六　申し〱お染さま。お前は〱、胴慾な人ぢやぞえ胴慾な人ぢやぞえ、常々わしが目顏で知らせて居るに、知らぬ顏は胴慾でござります。

そめ　でも、知らぬわいな。

善六　なんの嘘ばつかり。わしが云ふ事は知らいで、たゞ久松の云ふ事は知つて居なさるえ。

そめ　ナニ、久松がどうしやつたや。

善六　どうもせぬがお前、あの久松に、何をお頼みなされましたな。申し〱、ほんに〱お前ゆゑにこの善六、如何やうになつてもいとやせぬ。どんな山家の奥でも、二人一緒に暮らすなら、飯も炊かうし、水も汲み。

ト善六捨ぜりふのうち、お染は拔けて屋體の內へ逃げて入る。此うち彌忠太、始終氣の惡きこなし、フナフナして、段々前へ出るを、善六お染と思ひ樣々の事を云うて彌忠太に抱きつき、兩人始めて顏を見合せ

彌忠　善六か。

善六　彌忠太さま。

彌忠　ようえらい目にあはしたな。

　トをかしみいろ／＼あり

善六　さうして今の娘は、どこへ參りました。

彌忠　オ、、今の娘は卽ちこの內へ入つた。

善六　すりやこの內へ。

　ト入らうとするを

彌忠　コリヤ、待て／＼。その障子の內には、まだ外に氣の惡い事がある。

善六　氣の惡いとは、ド、どんな話しでござります。

彌忠　その話しは、十六七の前髮と、綺麗な屋敷の女と、この內へ入つたが、あれはなんでも、てつきり出逢ひと見えるわえ。

善六　モシ／＼、その前髮誠に心がかりでござります。その前髮の年恰好、どのやうな顏ぢや。イヤ、どのやうな面でござります。

彌忠　顏立は瓜實顏で、目許が涼やか、口元の尋常さで、色が白うて鼻筋が通つて、譬へて云はゞ半四郞、大和屋に生寫しぢや。

善六　エ、、そんならアノ半四郞に。イヤ杜若に似ては大騷ぎぢや。モシ、その前髮の着物は堅縞で、帶は小倉ではござりませぬか。

彌忠　如何にも着物は堅縞。帶は小倉。

善六　そんなら、いよ／＼久松め。口惜しいわい／＼。

彌忠　尤もだ／＼。

善六　もう料簡が

　ト行きかゝる。彌忠太留める。內より知らせ次第に屋體の橫より踏ん込み

お染、久松、出やアがれ。

　ト內にて竹川

竹川　慮外な町人、なぜ座敷へ踏み込みやつた。

　ト簾一面に上がる。竹川、善六が手を捻ぢ上げ居る。

彌忠　ヤア、こなたは屋敷の奧勤め、竹川どのか。

竹川　彌忠太さまにも天滿宮へ、よう御參詣

　ト善六を下へ見事に返して

遊ばしたな。

彌忠　身も當社へ參詣は主命でござる。

竹川　それは近頃御苦勞千萬。私しとても今日は、柳島への御代參。歸宅の間暫らくも、借り切り置きし此座の、女子ばかりのこの一間へ、なんで其方、斷わりなしに、慮外者め。

善六　慮外か未熟か存じませぬが、私しが踏み込みましたは、不義間男の詮議がござりまして。

竹川　待て町人、變つた事をそちや申すが、なぜ又わしがこの座敷へ、左樣な淫らな、不義がましい。

善六　イヤ、仰しやりますな。いま爰へは入りましたは、わたしが主人の娘、即ち主ある身を以て、內の丁稚と乳繰り合つて居りまする。ア、こりや何か、お屋敷の取持ちで、間男の仲人なされますか。

彌忠　こりや善六の申すが皆尤も。何か樣子は知らねども若い男を引入れて酒の相手。それでも屋敷の奧勤め、御代參の役目でござるか。

竹川　これは又改まつたお詞、これではどう掛け構ひない町人の肩持ち顏な今のお詞。殊更只今見請けますれば、派手な女中をお連れなされ、色めいたる物詣り。これも矢ッ張り主命でござりますか。

彌忠　サアそれは。

竹川　誠に主命默し難なう見えまする。

彌忠　イヤ、誠に主命默し難なうござる。

善六　イヤ、お屋敷樣の詰め開きは跡での事。わしが主人の娘、キリ〳〵爰へ出さつしやりませ。

竹川　イヤ、そりやならぬ。

善六　とは又なぜな。

竹川　女ながらも武家勤め、借り切り置きしこの一間は、即ち武士の城郭同然、町人風情に踏み込まれ、此まゝに差措いては屋敷への聞えもあり、殊に御家中彌忠太さもお聞きの上は、猶以て捨て置かれぬ。大儀ながら、わしと一緒に。

善六　イヤ、さうきめつけられては

トうぢ〳〵する。バタ〳〵にて源六、多三郎小糸兩人を引立て出て來り

源六　うしやアがれ〳〵。

小糸　こりや多三郎さまを

多三　どうするのぢやぞいの。

源六　どうするとは、爰にござる彌忠太さまが、身請けを

なさるゝ糸さまを、なんでコリヤ横ばん切つた……申し
申し彌忠太さま、お前樣の揚詰めのアノ糸さまを
ト此せりふのうち、始終惡い〳〵と云ふこなし。源六終始心附かず
モシ〳〵、旦那、その身振りはなんでござります。さてはお前は、癲癇でも發りましたか。
彌忠　成る程、身共は癲癇々々。ナ、それ、そこらへかつてん、かんてん、てんかん〳〵〳〵。ナ、身共は癲癇ぢやぞ。
トいろ〳〵呑みこませるこなし。
源六　なんの事ぢや。とんと解らぬわえ。
ト此うち多三郎、善六の側へ行く。
多三　コレ〳〵善六、最前久太に持たせてやつたあの折紙それを金にして糸が身請けを
善六　モシ〳〵、久太に折紙とは、なんでござります。
源六　それ〳〵、向うは折紙で身請けすると云ひます。それぢやに依つて
トあせる。彌忠太困り、源六を押へて
彌忠　コリヤ〳〵源六、われが其やうに云うてくれるは嬉しいが、ちと差合ひがあるゆゑ
ト懐より紙入れを出し、中の金を遣り
コレ〳〵、これを遣る程に、こりや南鐐丸と申して、こりやコレ奇妙な藥ぢや。これを口へ入れて、融けるまでなんにも云ふな〳〵。
源六　これは〳〵、平常此やうにお金を貰ひますにつきましても、アノ多三郎めを
トまた行かうとする。彌忠太留めて
彌忠　コリヤ〳〵、情ない奴ぢや、南鐐で利かずば
トまだ金を出し
この度は、萬金丹々々〳〵。
ト遣る。
源六　ハイ〳〵、有り難うござります。これ程御恩になる旦那の、身請けなさるゝ糸さまを。それぢやに依つて
トまた來るを、彌忠太、源六を花道の方へ押して行く。
彌忠　コリヤ〳〵、それできかずば貳歩金丹。
トまた金を遣る。
源六　サア〳〵、それぢやに依つて、猶々捨てゝは
彌忠　ハテサテ
源六　それでも身請けの
彌忠　エヘン〳〵。

源六　現在多三郎が横盤

彌忠　エヘン〱〱。

ト押へながら向うへ入る。

善六　なんの事ぢや。源六が物を云はうとすると、エヘン
エヘン。とんと解らぬ。それは格別。お染久松、渡して
下さりませ。

多三　そんなら座敷に妹の

小糸　お染さまが

善六　お染さまばかりぢやない、丁稚の久松。

多三　ナニ久松をお座敷様が

竹川　その久松は、今にては、縁は切つても實の弟。

多善　エ。

竹川　如何に世に落ちる町人の、例へ子飼となればとて、主
人の娘と不義がましい

ト思ひ入れあつて

町家の人の聞く手前、必らずともにお心に、おかけなさ
れて下さりますな。

多三　左やう仰しやるあなたこそ、すりや召使ひの久松が

小糸　實のあなたが姉御様。

善六　例へ以前は侍ひでも、今は町人、丁稚の久松、折檻
するは番頭の役、引摺り出して

ト善六立ちかゝるを

竹川　重ね〱の

ト扇にて頭を打つ。

慮外者め。

トきつと云ふ。簾下りる。善六、撞となる。多三郎小
糸こなしよろしく、道具廻る。

本舞臺、九尺の二重舞臺、上下に落間、欄間に草履
草鞋など吊してあり、古き板塀、門の入り口、傍ら
に杭あり、下手葭簀を張り、早桶を一つ据ゑ、白張
りの提灯を差してあり、二重の上に鬼門の喜兵衞、
手拭を米屋冠りにして、切り臺を直し、煙草を切つ
て居る。側にお六、煙草の葉卷きをして居る。早桶
の前には非人の市、番をして居る見得にて道具とま
る。四ツ竹の合ひ方。

ト上下より仕出し大勢出て草鞋を買ひ、煙草を買ひな
どして入る。仕出し、早桶の札を見て

仕一　なんだ、年の頃十六七の丁稚體の者としてある。

仕二　なんでも尋ねて居るであらう。

龜　ト捨ぜりふにて見て居る。ト上手より髮結ひの龜、臺
箱を提げて出て來り
市や、倒れ者は男か女か。
市　アイ、十六七な前髮だが、腹が痛い〳〵と云つて居た
が、ツイ死にやした。なんでも食傷と見えます。
龜　可哀さうだの。
ト二重に向ひ
どうでござります。やりませうか。
喜兵　髮は今日はもう遲い。明日早う來てくれ。
龜　アイ〳〵……モシ〳〵姐御、わたしが仕事單衣物が油
染みたが、どうぞ振り出しておくんなさいな。
ろく　急がずば、夜なべ仕事にでもして置かう。
龜　さうして、厚袍の肩も切替へてもらひたい。
ろく　なんだ切替へろ。日濟しぢやアあんめいし。
龜　違えねえ。ドレ、行つて取つて來よう。
市　ア、、退屈した……モシ旦那、ちよつと一杯ひツかけ
て來るうち、ちつとの間、死人をお賴み申します。
喜兵　なんだ、おれに死人の番をさせるのか。
ろく　あやまるの。
市　直でござります。ハ、、、。

龜市　ドリヤ、行つて來ようか。
ト四ツ竹になり、上下へ入る。
喜兵　嬶ア、もう何時であらう。
ろく　されば、もう追ツつけ暮れるであらうよ。
喜兵　忌々しい。今夜もまた夜なべといふ番だ。併し、人
といふものは、どこでどんな暮らしをするか知れぬもの
だ。この本所のはづれへ來て、夫婦差向ひで、刻み煙草
を賣らうとは、うろたへた神樣も知らない事だ。
ろく　サア、わつちも千葉の奧勤め、竹川さまにお部屋を
勤めて、末々はどこへでも片付けてやらうと、仰しやつ
たを待たないで、彌忠太さまの中間のお前と、あのゝも
のゝと、遂には屋敷を駈落ちして、樣々な目にも遭つた
の。
喜兵　まだしも旦那方の請けの好いのが仕合せ、詰まらぬ
時は又御無心と出かけるワ。併し、おらが主人の彌忠太
どんは、酢でも酒しほでも行かねえ人だ。
ろく　なんの、人の事より各自の身狀が、ろくでもない癖
に。さうして、この頃は剛氣に否むの。
ト壺を伏せる眞似をして
えて吉もやるさうだ。よしねえよ。彼奴にかゝつちやア

おしめえだ。さうして、この頃は彌忠太さまから、度々人が來るが、また何か借りたの。

喜兵　なんのそりやア、この中旦那と深川へ行つた時の、その割り前を出せと云ふのだ。押しの強え、誰れが遣るものか。

ろく　イヤ／＼、さうぢやアあるまい。なんでも餘ッぽどの物を借りたと見えて、強い催促だ。なんでも義理の惡い物と見えるぜ。

喜兵　なんの、借りてもいゝワ。先は主なり、おらア家來だ。借りてもいゝワ。それよりやア、竹川さまからてめえの所へ度々人が來るが、てめえもなんぞ借りたか。

ろく　ヘン、よしてもくんねえ。なんのそんな義理の惡い事をするものか。竹川さまからお人の來るのは、わつちに頼みてえ事があるから來いと仰しやるけれども、何を云つてもこの形だ。晝日中は洗湯へも行かれねえ。嬶アの南瓜とはわつちがこッたらうよの。

ト此うち喜兵衞、仕事をやめ

喜兵　アヽ、よくおしやべりなさるおかみ様だ……時に、日の暮れねえうち、洗湯へ行つて來よう。

ろく　湯へ行くなら、上ッ張りは脱いで行きねえ。

喜兵　ほんに、斯ういふ間の惡い時は、板の間でも拵かれては詰まらねえ。

ト半纏を脱いで

嬶ア、五合取つて來ようか。

ろく　肴が何にも無えよ。

喜兵　承知だ。錢をくれろ。

トお六、錢百五六十と油さしを出して

ろく　次手に油が無かつた。

喜兵　よく人を使やアがる。

ろく　早く歸んねえよ。

喜兵　何處へ行くものだ。

ト四ツ竹節になり、油さしを持ち、向うへ行きかけるところへ、向うより權平勘吉出て來て

權平　お前は喜兵衞どのぢやねえか。

勘吉　好い所で逢つた。

喜兵　誰れかと思やア、刀屋の勘吉どんに、鈴木の仲間權平どのか。相も變らず又催促か。ありやア根が盜み物だ。おれに質に置いてくれろと云つたから、貴樣と一緒に油屋へ百兩の質にやつて、その金はおれが遣つてしまつたありやア返さねえから。それともむづかしく云やア、盜

み物の尻割りだ。歸つてさう云はつせえ。馬鹿な人だ。

勘權　それぢやアこなた、濟むめえが。

ト袖を引留めるを拂ひ退け

喜兵　エヽ、知るものかえ。

ト四ツ竹にて向うへ入る。兩人、跡を見送り

勘權　イヤ、呆れたものだ。

ト向うを見送り

コレ、コレ、喜兵衞どん〳〵。

ト云ひながら向うへ入る。と引違へて向うよりお勝、三平付いて出で來り

三平　彼處がお六さまの所でござります。

かつ　お前は平常來てぢやに依つて、先へ行て案内して下さんせ。

三平　ハイ〳〵。

ト舞臺へ來る。此うちお六そこら片付け、みご箒で掃いて居る。

三平　お六さま、お宿でござりますか。

ろく　オヽ、お前は三平どの、よくお出でだね。

かつ　お六さま、お久しうござります。

ろく　オヽ、お前はお勝さまかえ。ヤレ〳〵お珍らしい。サア〳〵、マア爰へお掛け。ヤレ〳〵よくマア

トそこらを拂ふ。お勝、腰を掛ける。三平、表に立つて居る。

この通り狹い内で

ト火鉢にかゝつて居る土瓶の茶をついで兩人に出し

サア〳〵、お溫いが一つお上がり。

かつ　イエモウ、お構ひなされますな。

ろく　さうして、今日はお宿下がりかえ。

かつ　イエ〳〵、今日は旦那樣には、柳島への御代參。

三平　お歸りは舟とござりまして、大川橋から直ぐにお屋敷へ。

かつ　私しが此方へ參りましたは、お六さまへ頼みたい事がある、委細はこのお文箱にと申す事でござります。

ト文箱を出す。

ろく　そんなら旦那樣からこのお文。

ト取つて

なんにもお愛想が無いねえ。マア、煙草でもおあがり。煙草はお手前物だ。

ト煙草の抽斗を出す。兩人捨ぜりふ。此うちお六、文箱より文を出し、戴いて讀む。

成る程、此お文の様子……畏まりました。其うち私しがお屋敷へ上がりまして、詳しくお話し申し上げませうと憚りながら仰しやつて下さりませ。

かつ　畏まりました。御用は何か存じませぬが、お前様がお出でとあれば、その通り申しまするでござりませう。

ろく　よろしうお頼み申しまするぞえ。

かつ　左様なれば、もうお暇申しませう。

ろく　もうお歸りか。マアよいではないかえ。

三平　イヤ、また遲なりましては危なうござります。

ろく　さうかえ。それはお早々だねえ。

かつ　左様なれば、其うちお目にかゝりませう。

ト行きかけるを

ろく　ア、モシ〳〵、

ト呼び返し

どなたへもよろしくえ。

ト唄になり、お勝三平捨ぜりふ云ひながら向うへ入る、お六後見送り、こなしあつて

そんなら弟御の久松さまも、今では町家へ御奉公。それに付き、尋ねる刀の在所は知れたれど、百兩の金が無ければ手に入らぬ。その金貸し手はあるまいか、世話してくれいと旦那のお頼み。あなた方さへ出來ぬ金、まして夫婦がその日暮らし、どうしてマア大枚の

ト此内を繰り返し向うを見る。四ツ竹節になり、向うより喜兵衛、油さしを持ち、徳利と竹の皮を提げて出て

喜兵　嬶ア、油の値が上つた。

ろく　大分早い湯だの。

喜兵　イヤ、いま湯屋で、若い奴等が喧嘩をして居たから小面倒だから入らずに來た。

ろく　そりやアよかつた。こんな時、板の間でも稼がれちやア、それこそ大變だ。

喜兵　酒は買つて來た。

ろく　肴はなんだ。

喜兵　あそこの内に何があるものか。

ト竹の皮を廣げ

いつも變らず田螺の木の芽サ。

ろく　久しいものだの。

ト火鉢へ徳利を突ッ込んで、燗をして居る。四ツ竹節になり、上手より久作、以前の形、荷を擔ぎ出て

久作　アイ、廿四を五匁おくんなさい……なんだ、酒が始まりますな。肴はなんだな。

喜兵　肴は田螺の木の芽あへサ。
久作　田螺よりは、嫁菜のしまひがあるが、どうだね。
喜兵　ナニ嫁菜か。嫁菜も世話だが、見せな。
久作　たつたこれだけだ。
ト喜兵衛取つてちよつと見て
喜兵　こりやアいけねえ。こんな赤ツ葉は、向うの土手にいくらも生えて居るワ。
久作　その代り値が廉い。
喜兵　只でも否だ。
久作　ア、、御緣が無いね。
ト苞をしまふと、上手より龜、浴衣を抱へ出て來て
龜　姐さん、先刻頼んだのはこれだ。御面倒ながら、着られるやうに直しておくんなさいまし。
ろく　オイ／＼、明日の晩取りに來ねえ。
ト久作、龜を見て
久作　モシ／＼、髪結ひさん、髪ばかりだが、ちよつと一つやつておくんなさりませぬか。
龜　もう日暮れだが、髪ばかりならちよつくら結つて上げやせう。親方、ちつと爰を貸しておくんなさい。
喜兵　オイ／＼。

久作　それは有り難い。暫らくお借り申します。
龜　さうは云ふものゝ坐る處がない。
ト見廻して、早桶の上に掛けてある筵を取つて來て敷いて
サア、この上へ來なさい。
久作　モシ／＼、そりやアノ行倒れの上に、かゝつてあつた筵ではないかな。
龜　なんでもいゝ、日が暮れるわな。
久作　それでもどうか氣味が惡い。
龜　エ、、よくいろ／＼な事を云ふ人だ。早く來なさい。
ト無理に坐らせ、髪を解かすとて、よく／＼見て
お前、田舍の人だの。そして見りやア、頭に疵が付いてオ、、さうして半纏も破れてあるし、こりやお前、どうしたのだ。
久作　こりやアお前、今日柳島で、江戸の人といさかひをして、打たれましたのサ。
龜　そりやア又どういふ譯で。
ト髪を解きながら云ふ。
久作　その譯といふは他愛もない事サ。わしが持つて居る嫁菜を買はうと云はつしやるから、嫁菜は外へ賣つてあ

るから、貰られないと云ひましたら、それが曲事だと云つてお前、此やうに打たれました。

龜　ハア、滅法界な奴があるものだ。さうして、打たれたり半纏も破られたりして、只濟まして歸つたのかえ。

久作　イエサ、そこが世に人鬼は無いもので、挨拶に入つた人が金壹歩と、打たれた所の旦那が袷を出してわしにくれた。それを貰つては濟まないからお前、段々辭退したらば、わしを打つた男が、なんだ貰はにやア叩き殺すと

ト仕方する。龜、根揃ひの出來ぬ思ひ入れ。

龜　コレサ、靜かにしないか。髮が結はれない。

ト引据ゑる。

久作　叩き殺すと云ふに依つて、據なく貰つて來ました。

ト此うち喜兵衞お六、酒を呑みながら聞いて居る。

龜　そんなら半纏の破れた代り袷を貰つて、頭の膏藥代に壹歩か。そりやアよかつた。その金で思ひ入れ、膏藥を買つて付けるがよい。

久作　何を云はつしやるやら。壹歩が膏藥貼つたらば、面中が膏藥だらけになりますワ。ハ、、、。いま聞けば表のおかみ様は、針仕事をなさるさうだが、さうかな。

ろく　よい物は出來ないが、木綿物ならしやすよ。

久作　そんなら、わしが貰つた袷を、わしが身に合ふやうに、縫ひ直しておくんなさいまし。

ろく　急ぎでなくば置いてお出で。

龜　ソレ、髮も出來た。

久作　忝なうござります。

ト端錢を出し

髮結ひさん、これで負けておくんなさい。

龜　なんだ、錢が十七八文はかない。

久作　田舍者だ、負けて置いておくんなさい。

龜　イヤ、飛んだ目に遭はせるぜ。

久作　時に、わしが貰つて來た袷を見せませう。

ト荷の中より袷を出して

これだ／＼。

ト龜取つて

龜　オ、、ドレ／＼。こりやア好い縞だ。そして、まだ符牒が付いて居るワ。

トよく／＼見て

ハ、ア、こりやア淺草の瓦町、油屋の流れ物だ。

久作　淺草の油屋とは、アノ瓦町の油屋太郎兵衞さまの事

かな。

龜　さうサ〳〵、油太の流れ物だ。

久作　瓦町の油屋ならば、若旦那の奉公先、さうとは知らず氣の毒な。

龜　ほんに、瓦町といへば、善六どのに頼まれた事、明日は是非とも仕掛けて行つて……モシ、親方、鬢盥を明日の朝まで置いておくんなさいまし。

喜兵　そこらに置かッし。

久作　わしもその袷、早くお頼み申します。次手にこの破れた半纏も、つくろつておくんなさい。

ろく　二三日うちに取りにお出で。

龜　出かけに來ます。

ト兩人左右へ入る。四ッ竹節、喜兵衛お六思ひ入れあつて

ろく　この半纏の破れたも

喜兵　額に疵のあの男。

ろく　打ち叩かれたその代り

喜兵　貰つて來たるあの袷。

ろく　これを證據に强請つたなら

喜兵　催促受ける百兩の

ろく　金のあがきも

ト兩人顔見合せ

喜兵　灯を付けや。

ト、ゴンと時の鐘響き、合ひ方になり、お六奥へ入る。喜兵衛こなしあつて、鬢盥抽斗より剃刀を出し、合せる事あつて、下へ下りて冠つたる手拭を取り、肩に掛け剃刀を口に啣へ、尻をからげてキッと見得。これより棺桶を轉げだし、中より久太が死骸を引出し、前髪を剃り落し、合せ砥にて額へ疵を付けるところへ、お六、灯を付け出て

ろく　オヽ、用心の惡い。頼まれ物の袷。ドレ、仕事にかからうか。

喜兵　イヽヤ、そりやアいるからさうして置け。

トお六これにて死骸を見付け

ろく　そりやお前、死んだ人ぢやアねえか。

喜兵　やかましいわえ。

ト押へる。この時非人市、上手より出かけ、窺ひ居て

市　死人をどうする。

ト出るを突き廻して早桶の蓋にてポンと當てる。其まま早桶へ入れ

喜兵　嬶ア。
ろく　喜兵衛さん。
喜兵　氣を付けろ。
ト縄さばきをする。お六、行燈を吹き消す。途端、木の頭。喜兵衛、桶を縄にてからげる。お六あたりを窺ふこなし。よろしく拍子
幕

二幕目

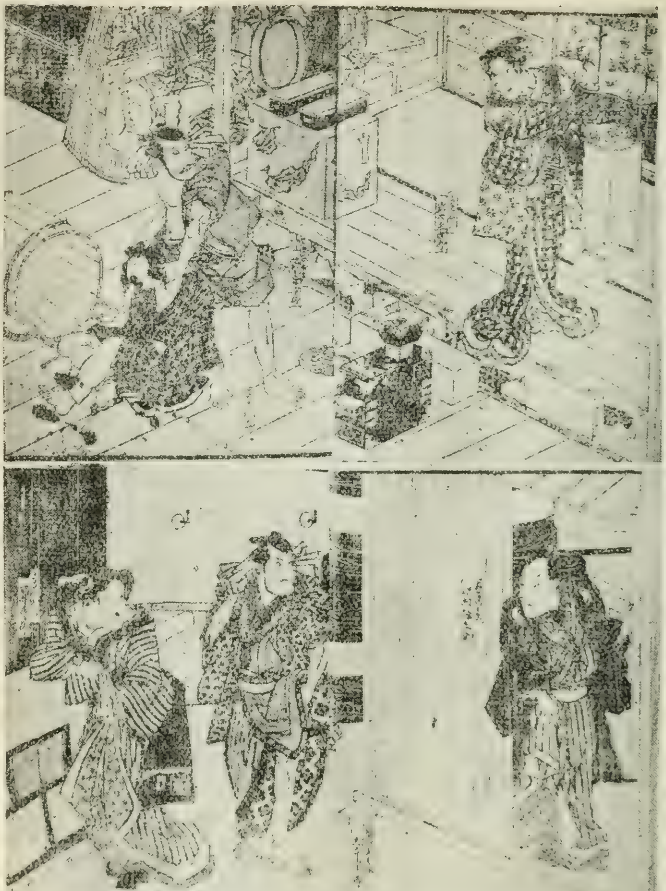
瓦町油屋の場
同奥座敷の場
同裏手の場

役名＝＝油屋娘、お染。同丁稚、久松。喜兵衛女房、土手のお六。お染母、貞昌。山家屋清兵衛。油屋太郎七。同番頭、善六。同手代、九介。同丁稚、久太。同下女、お園。鈴木彌忠太。百姓、五百崎の久作。鬼門の喜兵衛。

本舞臺、三間の間、常の二重、上の方落間、正面暖簾口、帳箱、状差、質札を夥しく結び下げ、押入れ帳箪笥など書割りよろしく、下の方落間に油樽澤山並べ、この後より藏の鉢巻、丸に油といふ字の印を見せ、よき所門口、本庇をかけ、山形に油といふ暖簾一面に掛け、蹴込みは鐵物打つたる上がり框、鐵網の蹴込みにして、二重上手は障子屋體、すべて淺草瓦町油屋の店。爰に二重上手に太郎七、帳場格子の内に臺帳を控へ、勘定をして居る。舞臺に善六、前垂れがけにて帳を控へて居る。九介、質を絡げたりして居る體。角兵衛獅子の鳴り物にて幕明く。

善六　その次。
太郎　三千百七十壹番喜助九八棧留縞袷元金壹歩と四百文。
善六　アイ。
ト合判する。
太郎　七千四百六十五番傳兵衛久七元金貳分蚊帳と單衣物三品の口。
善六　アイ。
ト判を捺すと、仕出し出て
仕一　オイ、油を一合。
九介　アイ／＼。

トつぐ。
仕二　荏の油二十四文が下さい。
九介　アイ〳〵、ソレ、先の一合。
仕一　ソレ、三拾四文。
ト置いて入る。
九介　ハイ、荏の油。
仕一　オツトショ
ト持つて入る。
善六　コリヤ〳〵、九介、大儀ながら、お主は油會所まで行て來てくれ。
九介　畏まりました。そんなら行て參りませう。
ト合ひ方になり、橋がかりへ入る。
善六　伯父御樣、ちと代りませう。
太郎　最前からホツとした。ちと休まうか。
善六　茶でも入れさせませう。
ト唄になり、向うより山家屋清兵衛に丁稚付いて、出て來り
清兵　わがみは大儀ながら、一遍歸つて、後方迎ひに來てたも。
丁稚　畏まりました。
ト引返して入る。清兵衛、門口へ來て
清兵　イヤ、山家屋清兵衛でござります。
ト入る。
善六　これは〳〵、聟樣にはようこそ。マア〳〵あれへ。
清兵　御免なされ。
ト二重へ通る。
太郎　ヤレ〳〵、清兵衛さま、ようこそ〳〵。マア〳〵、お變りもなうて、おめでたうござります。
清兵　ハイ〳〵……これは番頭どの、精が出ます。ナニ伯父御樣、この間は勝れぬので、暫らく御無沙汰いたしましたが、貞昌さまにも、變りなうお暮らしなされまするか。
太郎　有り難うござりまする。隨分息災で居りまする。
清兵　店の事は番頭どの、貴樣のいかいお世話でござるの。
善六　これは聟樣の痛み入りました御挨拶、女儀ばかりのこの內、後見なさるゝ伯父樣は別宅なり、內を預かるは私し一人、それにアノ多三郎さまも深川通ひで
太郎　コレ〳〵善六、清兵衛さまの手前、云うても云はいでもの事を。
ト思ひ入れ。



松本所藏の場面

善六　イヤモウ、一向益體でござります。
太郎　コリヤ〳〵、清兵衛さまのお出での樣子を、貞昌どのへお知らせ申せ。あのお染も、御挨拶に連れておぢや。
若者　ハイ〳〵、畏まりました。
　ト若い者奥へ入る。三人捨ぜりふのうち、合ひ方にて、奥よりお染、猫を抱いて、お園付いて出て
その　清兵衛さまのお出で。ソレ、御挨拶をなされませ。
そめ　清兵衛さま、ようお出でなされました。
清兵　これは〳〵お染どの、いかう顏の色が惡いが、風邪でも引きはさつしやらぬか。但し持病か。
善六　イエ〳〵、お染さまは御持病でもござりませぬ。この頃は、いかうさかりが付きまして……イエサ、あの猫めに、あの女猫がぐう〳〵〳〵〳〵と鼻を鳴らせば、內の子飼の男猫めが、ぐう〳〵と云うて、藏の二階や物干で、間がな隙がなさかります。あの猫めが。ハ、、、、、。
　トお染に當て〻云ふ。皆々思ひ入れ。
清兵　イヤ、こりや番頭の云やる通り。併し鼠の爲には、あの猫が居ぬと、第一用心が惡い。番頭の善六は、申さばこの家の白鼠ぢやて。
善六　左やう〳〵。この番頭の善六は、お家一番の白鼠でござります。
清兵　イヤモウ、その鼠にも油斷がならぬ。昔と違ひこの頃は、いかう白鼠が殖えて、家內の內を暴れ歩き、藏の網戸や金箱の錠などを、齒ぶしにかけて嚙り居る。よもや飼ひ置く白鼠ではあるまい。こりや只の鼠であらうと油斷させ、惡さをするが白鼠。後には主人へ損をかけ、引負ひ取込み駈落ちして、身のたゝずみのならぬ時は、命も遂に枡落し、極樂落しも天の網、主あるお染に大膽な……イヤサ、厭味銀山食はぬ用心。白鼠ほど油斷がならぬて。
善六　成る程、聟樣の鼠の講釋。お染さま、なんと面白い事ではござりませぬか……ほんに、お前樣の御病氣の樣子、清兵衛さまに、見てもらひなされませ。
その　ほんに、聟樣に、ちよつと見てもらひなされませ。
そめ　それでも清兵衛さまが、お醫者樣でもあるまいし。
清兵　イヤ〳〵、そりや大事ない。この清兵衛は藥問屋、醫心もあれば。ドレ〳〵、脈を見て進ぜう。
太郎　それ〳〵。見てもらひ申したがよい。
　トお染否がるを、お園無理に此方を向かす。お染、是非なく手を出す。清兵衛脈を見る。

善六　ヨウ〳〵、聟様に脈を見てもらうて、嬉しさうな顔わいの。エヽ、アタ腹の立つ。

ト こなし。清兵衛こなしあつて

清兵　右の陰脈小弱にして、寒熱無き時は慥かに姙娠。

ト お染悔りして手を取る。皆々清兵衛へこなし。

ア、イヤ、伯父御様、なんにも變つた事はござりませぬ。貞昌どのにもお話しなされ。決してお案じなされるやうな事ではない。ほんの時候の中り、さしたる儀ではござらぬ。

ト お染を見て

只朝夕の忌み物差合ひ。云はゞ婦人の大役ゆゑ

ト 思ひ入れ。

そめ　ゆるりとお話しなされませ。

ト 唄になり、ツイと奥へ入る。お園も奥へ入る。直ぐにこの唄にて向うより、髪結ひ龜、廻しの源太、序幕の役、三味線を擔ぎ出て來て

龜　コレ〳〵源太、てまへとおれと行くはいゝが、跡でれこさはいゝか。

源太　それは油屋の番頭の、善六が承知して居るから、氣遣ひないわえ。

龜　それさへよけりやよいが。

源太　マア、行きやな〳〵。

ト 兩人本舞臺へ來て、思ひ入れあつて内を覗き

奇妙だ〳〵。今が清兵衛の來て居るところだ。

龜　やらかせ〳〵。

ト 源太が前彈きにかゝる。

〽おゝん次第の天王なり、これはこの度評判の、娘丁稚の色事を、詳しくこれを尋ぬるに。

ト 此うち善六、思ひ入れあつて

善六　コリヤ〳〵、商人の店先で、門が塞がる。通れ〳〵。

ト 龜こなしあつて

龜　それでもお前が來いと云つて

善六　ハテサ、サア、ズッと通れ〳〵。

ト 目交ぜ。兩人呑みこみ

龜　成る程、通れと云ふなら、ズッと通らうかい。

源太　さうだ〳〵。物貰ひを通れと云ふからは、通れ〳〵。

龜源　御免なさい〳〵。

ト 内へ入る。

善六　コリヤ〳〵、此奴等はなんだ。物貰ひが内へ入るとは、コリヤ、外を通れと云ふ事だワ。

ト突出すやうにして引入れる。

龜　なんの事だ／＼。通れと云ふから通つたのだ。

源太　なんぞお好みかな。

龜　知れた事だ。通れとあればお好みだ。一番やらかしやせう。

源太　始めろ／＼。

龜　調子はいゝか。

源太　合點だ。

ト合す。

龜　これはこの度の新文句、お染久松浮名の白絞り、四ツ竹節の始まり／＼。

ト四ツ竹節になり、始終太郎七、清兵衛へ氣の毒なる思ひ入れ。清兵衛知らぬ顔してこなし。善六思ひ入れ。

〽妾に東の町の名も、瓦町とや油屋の、獨り娘にお染とて、年は二八の細眉に、内の子飼の久松と、忍び／＼の寢油に、親たちや夢にも白絞り、絞り兼ねたる振りの袖、梅花の薫り玉の緒も、やがて消え行く有明の、どう辛抱をして見ても、どうでしまひは心中物、御きねんと謹み敬つて申す。

ト讀みしまふ。太郎七こなしあつて

太郎　これはしたり善六、清兵衛さまも聞いてござるに、あの樣な物貰ひ。早う去なしてしまやいの。

清兵　イエ／＼、申し伯父御樣、大事ござりませぬ。折も折とて、この清兵衛が來合せたこの店先、これ聞けがしの祭文は、定めしこれは私しへ、馳走がてら呼ばれた人か。ナウ、番頭どの。まだあの後を聞きませうか。

龜　ヘイ／＼、またこの後が、面白うござります。

太郎　コレ善六、早う去なしてしまはぬかい。

源太　お好みならもちつと。

善六　イヤ、もうよい。

龜　それでも後を。

善六　ハテサテ、もうよいと云はゞ、行け／＼。

ト爭ふ兩人を門へ突出し

ドレ、手の内と巾着の、錢は一錢二世の緣。

ト淨瑠璃を語りながら錢を一文やる。

龜　なんだこりやア。

善六　ハテ、何も彼も胸にある。行けと云うたら、歸れ歸れ。

ト龜、ぼやき／＼花道へ來る。

源太　龜公、番頭がいくら寄越した。

龜　いくらのかくらのと、二人にあの位しやべらして

源太　いくらだ。

龜　たつた一文。

源太　なんだ、二人の中へたつた一文。そんなら二つに割ると一人前が、きなか宛にはお當らないな。

龜　解つた。こりやアてめえやおいらを、江戸ッ子だと思はねえのだ。

源太　そりや又なぜ。

龜　ハア、きなか者だと云ふのよ。

源太　おきやアがれ。

ト唄になり、兩人向うへ入る。九介出て

九介　只今歸りました。申し番頭さん、會所から云ふには、お前が來てくれぬと解り憎い事があると云うて居りました。

善六　ナニおれに來いとか。清兵衞さま、御覽じませ。なんぞと云ふと番頭々々と、明暮れ隙はございませぬ。左樣ならば行て參りませう。清兵衞さま、緩りとお話しなされませ。

ト唄になり、羽織を引ッかけ出て、橋がゝりへ入る。

奥よりお園出て

その　清兵衞さまへ口上申しまする　少とお話しがございますれば、居間へお通りなされて下さりませとの事でございます。

清兵　左樣なら奥へ參つて、お話し申しませう。

太郎　左樣なされませ。

清兵　そんなら伯父御樣。

太郎　清兵衞さま、

清兵　サ、御案内頼みます。

ト唄になり、清兵衞お園奥へ入る。この唄にて向うよりお六、風呂敷包みを提げて出て、直ぐに門口へ來て

ろく　瓦町で質商賣をなされまする油屋さんは、こなた樣でございますか。

九介　ハイ、油屋は此方でございますが、お前はどなたでございます。

ろく　ハイ、私しは少と用事がございまして

ト思ひ入れ。

九介　ハア、、なにかな、質でも置きにお出でなされましたか。また出しにでもお出でなされましたか。

ろく　イエ、左樣な者ではございませぬ。少と見ておもらひ申したい品がございまして、參りました者でござりま

す。

九介　ヘイ、左樣でござりますか。

太郎　エヽ、何を麁相を云ふぞい。

九介　これは大きに不躾を申しました。マア〳〵、お通りなされませ。

　ト お六よき所へ居る。

ろく　左樣なれば、御免なされて下さりませ。

九介　さうして見せる物とは、どのやうな物でござります。

　ト お六、風呂敷より袷を出し

ろく　この品は、あなたのお店から、出ました品でござりまするか。ちよつと御覽じて下さりませ。

　ト 九介ちよつと見て心得ぬこなし。

九介　モシ〳〵伯父御樣、こりやア昨日柳島で、田舍の者に遣つた袷ぢやござりませぬか。

太郎　ほんに、こりやア昨日の嫁菜賣りに遣つた。これを持つてお出でなされたお前は。

ろく　これはマアあなたには、初めてお目にかゝります。私しは葛西領に居りまする者でござりますが、お話し申せば長い事、何を隱しませう、私しには正直な弟が一人ござりまする。この頃は江戸へ煎茶を僅か荷うて出商ひ夜前歸つて申しますには、今日柳島でツイ〳〵した事が云ひがゝり、僅かながらも顏に疵、古半纒も此やうに、引裂かれたはほんの災難、先のお方もよく〳〵に、氣の毒に思し召してか、この袷と金子を百疋、膏藥代ぢやと仰しやるゆゑ、事無う濟まして歸つたと申しますれど、姉のわたしが存じますには、イヤ〳〵さうではない、ひよつとした出來心で、人樣の物横道に、身貧なゆゑにツイふつと、盜む所を見付けられ、もし打擲に遭うた事かといろ〳〵と尋ねますれど、コレ姉樣、どうしてマアそんな事をと申しますれど、有やうはこれが苦勞になつて、夜の目もろく〳〵臥りませぬ程の事。御存じならば御遠慮なう、仰しやつて下さりませ。

太郎　エヽ、その事でござりますか。それはお前の弟御の云はれる通り、少つとも違ひはござりませぬ。成る程昨日柳島で、爰に居るこの九介、田舍の若い人に、ツイした事が云ひがゝりになつて、何か通りの人と一ツになりぶつと云ふも仰山なが、小つとばかり叩きましたゆゑ、その袷と金子を進ぜましたは、私しでござります。

ろく　左樣でござりましたか。さうとは存じませず、まだ御挨拶も致しませぬ。その節はいかいお世話樣でござり

ます。
太郎　イエ〳〵なんの。それと云ふも、この九介が短氣ゆゑ。
九介　時のはずみと云ひながら、云ひ募つたが喧嘩の始まり。それで思はずツイ疵を
ろく　付けなされたはほんの災難。そんなら少しは打ち叩きも
九介　サア、打つぢやアないが分けるとて、肩の破れた半纒も
ろく　その代りぢやと弟へ、遣はされたるこの袷、何やら符牒が付いて居りまするが、これはお內の御印形でござりまするか。
太郎　成る程、これでござります。
　ト判箱より仕切判を出し
これ〳〵、即ちこの判でござります。
　トお六取つて見て
ろく　左樣なら念の爲、ちよつとお見せなされて下さりませ。
　ト引合せ、符牒と較べて見て
左樣ならば、いよ〳〵この判は、お店のに違ひはござりませぬか。
太郎　なんの違ひがござりませう。さて〳〵お前の弟御は、若いが正直な人でござる。
ろく　その正直と申しまするも、常から多病なあの弟、打ち打擲に逢うたもの。
　トきつと云ふ。兩人思ひ入れ。お六、氣を替へ、こなしあつて
お禮に連れて參りやしたから、ちよつくら逢つてやつておくんなさいまし。
太郎　エヽ。
　ト思ひ入れ。お六、門口に倚りかゝり、向うを見
ろく　オイ、此方の內だよ。
　ト招く。向うより喜兵衞、褞袍の上へ木綿羽織、素足の尻をからげ、頰冠りをして、跡より四つ手駕籠を吊らせ、出て來て
喜兵　嬶ア、爰の內に違えねえか。
ろく　符牒の判と、この印形が一つだと、向うに居なさる番頭さんか、旦那か知らねえが云ひなさるから、まんざら違えもあんめえわな。
喜兵　コレ、駕籠の衆、大儀ながら、その駕籠を舁き込ん

でくんねえ。

駕舁　合點だ〳〵。

ト內へ舁き込む。此うち太郎七九介恟りし、呆れて居る。

太郎　コレ〳〵、滅相な、人の內へ

九介　駕籠を舁ぎ込むといふが

喜兵　やかましい。ぶちまけろ。

ト駕籠を横にする。中より久太の死骸出る。

太九　ヤア〳〵〳〵。

ト恟り。駕籠の者、外へ出る。

喜兵　御苦勞々々々々、また後に迎ひに來てくんな。

駕舁　ハイ〳〵、駕籠は置いて參ります。

ト兩人入る。

喜兵　御免なさい。

ト門口を入り頰冠りを取る。

ア、好い內だ。

ト雪駄の土を拂つて居る、太郎七、九介顫へて居る。

嬶ア、茶を一杯貰つてくれ。

ト雪駄を側へ置き、わり膝にて坐る。

ろく　モシ、お前、御苦勞でも茶を一つお振舞ひ。モシ、次手に煙草の火も無えよ。

ト兩人矢張り顫へて居る。

なんだな、この手合ひは。きよろツか〳〵せずと、茶を一つくんなと云ふ事よ。火は無えのかな。

ト煙管を抛り出し

エ、火の用心の好い內だの。

九介　ハイ、お茶莨盆。

ト顫へながら莨盆を直す。太郎七、思ひ入れあつて

太郎　モシ、弟御を連れて來たと云はつしやりますが、こりや死んで居る人ぢやござらぬか。

ろく　アイ、死んで居りやす、死んだのサ。あんまり死にたくもあんめえが、お前方が寄つてかゝつて、撲き殺しなすつたのだ。人間一人ぶち殺して、アノこれかえ。イヤサ、人を一人殺して置いて、古袷たつた一枚、金ならたつた壹歩と、爰のお店ぢやアどなたが、相場を極めなすつたか知らねえが、そのお方に逢ひやせう、お目にかかりてえね。サア、爰へ出なさい、逢はうわな。エ、イケ厚かましい手合ひぢやアねえかの。

喜兵　コレ、靜かに云へ。爰の內は質屋だから、口說きが利かねえで、なんの彼のと云ふやうで外聞が惡い。靜か

にしろえ。
ろく　それだつて、わつちが大事の弟を殺されたから、口惜しくつて〳〵、いつそ腹が立つてならねえわな。
喜兵　いゝわえ。てめえの爲にも弟なら、おれが爲にも弟だ。敵はおれが取つてやらア。
ト煙管をしまひ
モシ、爰の町内にも五人組があるだらう。家主は何處だえ。逢ひたいものだ。呼んでおくんなせえまし。但しはおれが方から行くか。どうするのだ。
太郎　ハイ〳〵、この町内にも、家主もお宿老もござりますれど、先づ家内の者にも相談に及び、いづれあなたへ御返事に、及びまするでござりませう。
喜兵　なんだ相談だ。こいつはちつと解り兼ねる。嬶ア、ちよつくら行つて來るから、何處へも行かずに待つて居ろ。
ろく　何處へ行くものかな。
喜兵　ドリヤ、行つて來ようか。
ト出かける。奥より清兵衞出かけて
清兵　ア、イヤ〳〵、ちよつとお待ちなされませ。
喜兵　わしが事かえ。

清兵　何か樣子は解りませぬが、町役人へ斷わる程の事あらば、事の樣子を聞いた上、でんどへ出すとも出さぬとも、そりやお前方の料簡次第。裏店小店の借り者、輕い身分の者でもなく、店を預かる油屋太郎兵衞、今は後家持ち女主。相手にならぬか知らねども、斯う云ふわしも遁がれぬ親類、何か樣子をとつくりと、わしに聞かして下さりませ。
喜兵　成る程、お前はちつと譯が解りさうだ。嬶ア、此方へ來や。
トお六と入り替り
その譯といふのは、こりやアわつちらに聞きなさらねえでも、あの手合ひに聞きなさりやア解る事だ。高で斯うだ。昨日柳島で菜賣りの野郎を、打ち殺したのが喧嘩の始まりサ。
清兵　すりや昨日柳島で
太郎　イヤ、その譯は斯うでござります。昨日柳島で、爰に居る九介が、其お方と、此細の事の云ひ上がり、何か通りの者が一緒になつて、その菜賣りどのを打つたと云へば仰山なが、一つ二つも打ち合ふ所へ、佐四郎どのが來合せて、膏藥代と金壹歩、また半纏の破れた代り、あ

の袷を遣りました。その時には隨分達者な若い人が

喜兵　モシ〳〵、そこがあの野郎が間抜けだから、打たれた時に死にもせず、內へ歸つて苦しいと云つたが、この世のお暇乞ひサ。

清兵　成る程、承つて驚ろき入りましたが、申さば一旦事を濟まし、その跡での事なれば、こりやア病死いたされたも同然。それを今更兎や斯う云はつしやるは、どうやら強請りがましう聞えて

ろく　モシ〳〵なんだえ、強請りがましいえ。エヽ、よしてもおくれ。なんぼしがねえ暮らしでも、小強請り騙りをするやうな、そんなわつちらぢやアねえよ。これでもお前吉原の、土手に住つたその時にやア、小見世の客を引手茶屋、土手のお六と云はれちやア、素見手合ひに達引いたが、今ぢやアそれも不仕合せ、小梅代地に九尺見世、亭主は江戸へ手間仕事、嬶アは內で洗濯や、嬶ア煙草と評判の、云はゞ眞面目な商人だ。そんな嫌味のあるのぢやアねえよ。喜兵衛さん、こりやア、出る所へ出にやア解らねえぜ。

喜兵　默つて居ろ……モシ、そんならどうでも、解らねえと云ひなさるのかえ。

清兵　さればサ、打たれて死んだ事やら、又は病死した事やら、その節には醫者どのにも

喜兵　アイ、かけやしたね。そりやアモウ、嬶アが大事の弟だものを、先づ本道外科鍼醫、しかも御殿醫だ。おらが內はひつくり返すやうだ。見せても〳〵お斷わりだ。

清兵　それは氣の毒、さりながら、わしも商賣は藥屋、醫心もあれば、念の爲死人の脈を

喜兵　よしなせえ。冷え固まつて居るものを、見たつてどうなるもんだ。

清兵　サア、そこが野夫にも功の者。心ゆかしに、ちよつと見せて下され。

喜兵　そんならどうなりと勝手にするがいゝ。

清兵　ドリヤ、脈を見ませうか。

ト清兵衛こなしあつて、死骸の側へ坐り脈を取る。此うち太郎七、帳箱より金の包みを持つて出て

太郎　段々のお腹立ち、重々御尤もでござります。今更どのやうに致しても、あの弟御の蘇生さつしやる事はあるまい。又この上でんどへ出して下さりますと、この油屋の身代にも係はります事でござります。誠にこれは侮りがましうござりまするが、この金、とサア云へば仰山な

が、これで石碑など買うて、弔ひでもして進ぜて下さりませ。

ト出すをお六見て

ろく　なんだ。金かえ。

喜兵　默つて居ろえ……さうしてこりやア、いくらでござります。

ト喜兵衞、思ひ入れあつて

太郎　ハイ、十五兩ござります。

喜兵　モシ、十五兩位な目腐り金で、人の命が買はれますかえ。

太郎　成る程。

ト太郎モヂ／＼しながら、また帳箱より金を出して來て

左樣ならば都合、三十兩で

ト喜兵衞、思ひ入れあつて

喜兵　待ちなさい、百兩の元にして、利が四月でカウツ…………イヤ／＼、こんな事ではナア嬶ア。

ろく　さうサ、わつちが方にもザツと百兩いるよ。

喜兵　モシ旦那、とても三十や四十の端金で、人の命が買はれますかえ。また買はれるなればわつちやア買ひ手だ

ほんの事だが仕込んで置いて金儲け、命の問屋の店開き始めてこんな商賣を、聞いて鬼門の喜兵衞といふ、しら几帳面な商人だ。此奴はあんまり解りさうもない。こいつは一番恐れながらと、喰はさにやならねえわえ。

ト下座より善六戻つて來て

善六　只今歸りました。

ト入る。

太郎　コレ／＼善六、わがみの知つて居やる嫁菜賣りが、死んだと云うてあの衆が

ト善六　悧りして

善六　なんぢや、嫁菜が死んだ。嫁菜が死んでは大變／＼それでは肝心の折紙が道なし。ヤア／＼。

ト慌てる。九介、始終顫へて居る。

九介　番頭さん、お前ゆゑに喧嘩をしたが、此奴が死んだら、わしは下手人に出にやアならぬわいの。

ト慌てる。此うち清兵衞、脈を見て居る。

清兵　ア、イヤ／＼。善六どの、其やうに慌てまい。今の樣子では、ろく／＼死切つたとも云はれぬ。わしが祕法の大寶丹、屆かぬまでも用ひて見よう。

ト印籠より藥を出して久太が口へ押込み

斯うやつて、灸がよい〳〵。
善六　お頼み申します〳〵。此奴が死ぬると肝心の、藁苞の行くへも……灸を据ゑませう。九介手傳へ。
九介　合點だ〳〵。此奴が死ぬと、わしやア下手人だ。
喜兵　コレ〳〵、死んだ者に灸を据ゑたつて、なんになるものだ。疵を付けずとよしにしなせえ。
ろく　喜兵衞さん、打ッちやつて置きなさい。灸を据ゑて生返らねえ時は物が云へるわな。
ト太郎七清兵衞善六九介、捨ぜりふにて、久太が腹へ大きな袋艾を据ゑる。善六、扇にて煽いで居る。在郷唄になり、向うより久作、藁苞に椿と桃の花の咲きしを挿し、持つて出て來て、門口にて
久作　御免なさいまし〳〵。
ト太郎七これを聞いて
太郎　九介、油買ひが來た。
九介　油買ひなら明日來さつしやい。
ト矢張り灸を据ゑて居る。
太郎　ヤイ〳〵、何も商賣ぢや。賣つて上げい。
九介　滅相な。油どころか。
ト門口へ出て久作を見て、恟りして

ヤア〳〵〳〵、お前は昨日の菜賣りではないか。
久作　ハイ〳〵、左樣でござります。
九介　違ひなし〳〵、其方を向いて見たり。
ト久作に後向かす。九介躍り上がり
違ひない〳〵、正銘々々。貴樣が達者で居てくれゝば……ヤレ〳〵、好く來たな。
ト内へ入り
モシ〳〵、來やした〳〵〳〵。
ト無理に引ッ張る。
善六　エヽ、やかましい、何が來たのだ。
ト矢張り煽いで居る。
九介　イエサ、昨日柳島で打ち殺した嫁菜賣りが、また一人來ました。
ト無理に引ッ張つて表へ連れて出る。喜兵衞お六思ひ入れあつて、片脇へ寄つて煙草をのんで居る。善六、久作を見て
善六　ヤア、こなたは昨日の嫁菜賣り、ヤア〳〵、そんなら達者で……よく來てくれたな。ソレ〳〵、九介、お茶を上げい〳〵。
九介　ハイ〳〵〳〵。

ト茶を出しながら
ハイ、お茶をおあがりなされませ。
ト久作、呆れたこなし。門口にて茶を取り思ひ入れ。
善六内へ入り
善六　ヤレ／＼、嫁菜が生きてさへ居れば、藁苞の行くへそれになんぢやと、この牛の骨か馬の骨を、嫁菜賣りぢやのなんのと
トこの時、久太の顔をよく見て
待て／＼。此奴が面は、どうやら見たやうな面ぢやが。
太郎　さう云やれば、おれも見たやうな。
九介　わたしも覺えのあるやうな顔ぢやが。
清兵　家内の衆が見たとあれば、わしもどうやら覺えの死人。
ト考へて居る。此うち久作、内へ入り
久作　さてハヤ昨日は段々と、お世話樣になりました。
ト云ふうち太郎七、久作を見て
太郎　オ、こなたは昨日の嫁菜賣りどの、よう來て下さつたの。
久作　ハイ／＼、昨日は油屋の伯父御樣とも存じませず、段々のお世話樣　お貰ひ申しました袷も、裄丈を直しに遣はしまして、出來ましたなら引ッ張つて、お禮に參りませうと存じましたが、爰のお内といふ事を、袷に付けた符牒から知りまして、昨日お貰ひ申しました壹歩、松本屋の旦那へお返しなされて下さりませ。知らぬ事とて私しは、子飼ひの丁稚久松が、請け判を致しました、五百崎の久作でござりまする。
ト此せりふのうち、お六思ひ入れあつて
ろく　子飼ひの丁稚久松とは、そんなら爰が若旦那の
ト久作、お六を見て
久作　お前は昨日袷を頼んだ、おかみさんだの。
トお六、術なきこなし。
ろく　ア、コレ／＼。
久作　それでも
ろく　エ、／＼……通らねえ煙管だの。
ト灰吹をバタ／＼と叩く。久作、袷を見て
久作　ヤア／＼、こりや昨日おれが貰つた袷だが
トまた死骸を見て
ヤア／＼／＼、おいらが破れた半纏を、寢て居る人が着て居るワ。
清兵　ア、コレ／＼、麁相云ふまい。爰に寢て居るは田

舍者、昨日これなる九介が、柳島で喧嘩して、太郎七さまがこの袷と、また膏藥代の金壹歩、貰うて歸つて可哀や往生。人といふ者は何時死なうも知れぬ。用心さつしやれ。

ト久作、いよ〳〵思ひ入れあつて

久作　最前からの樣子は、皆私しが身に覺えがござりまするが、もしや死んだ菜賣りといふは、わたしぢやないかよく見て下さりませ。

ト怖々云ふ。

清兵　氣遣ひ召さるな。息引取らぬ死人の脈、その上に家傳の藥用ひたれば

善六　それ〳〵、生返れば此奴が仕合せ。例へ死んでも正眞の、嫁菜賣りが來たからは、あの藁苞の行くへも知れて……よう來て下さつた。それにつけても此やうな奴を嫁菜賣りだの弟ぢやのと、夫婦の奴等、太い奴だ。キリ〳〵連れて行きやアがれ。

ト死骸を蹴る。久太ウンと唸る。皆々愕りする。

皆々　ヤア、死人が唸るワ。

ト引起す。久太心附き、目を明く。

ヤア、目を明いた。

ト久太、キヨロ〳〵見廻して

久太　ヤア、番頭さん。

善六　ヤア、わりや久太ぢやないか。

久太　番頭さん、エヽ、怨めしい〳〵。

ト頭を撫でて思ひ入れ。

善六　コリヤ久太よ。われは昨日駈落ちしたに、どこをどうして戻つたぞ。

久太　どこをどうとは番頭さん、お前はなア〳〵。昨日お前が駈落ちせいと、金を壹歩下んしたその金で、小梅の酒屋で時ならぬ、鰒を思ひ入れ食うた上、葬ひ先の強飯が、よも餅米であらうとは、知らぬ凡夫の淺ましさ。鰒と餅米戰うて、遂に久太は御落命。それから後は知らねども、撫でて見れば、前髪を、誰が仕業やら剃り落して野郎頭を見やんしたら、兄と頼んだ番頭さん、定めし愛想が盡きやうかと、それが悲しい〳〵わいの。

ト泣く。

善六　エヽ、おきやアがれ。

太郎　そんならわれが駈落ちは、心から出た事ではないか、

久太　サイノ、昨日若旦那の云ひつけで、あの折紙を

善六　コリヤ〳〵久太よ。何にも云ふな。委細は番頭、胸

にあるぞ〳〵。
久太　それでもお前、食傷をした時は、胸にある物を殘らず吐いてしまふと、さつぱりすると云ふから、胸に覺えて居るだけは吐いてしまひやす。
善六　エヽ、忌々しい奴ぢや。今の思ひをするならば、先刻の時殺してしまへばよかつたに、生中灸を据ゑたゆゑ
九介　彼方は仕合せ、此方は後悔。
久太　いかいお世話にあづかりました。
太郎　そんならわれが虚落ちは、心から出た事ではなく、殊に今云うた折紙とは、もしや簞笥のあの内の
喜兵　その折紙は牛王義光、三百枚の折り紙か。
太郎　ハテ、こなさん詳しうそれを
喜兵　知つて居るのサ。知つて居るからあの野郎を、玉に使つたこの仕事、しくじつたら、ナア嬶ア。
ろく　ソレ見ねえ。どうでしまひは、こんな事だらうと思つたよ。
太郎　この事を詮議すれば、家内の縺れぢや。われには暇を遣るほどに、九介、請け人へ引渡し、引取りを取つて來てたも。
九介　ハイ〳〵、畏まりました。
久太　そんならおれは暇が出るのかえ。なんの事だ。同じ丁稚でも、あの久松は仕合せ者、おかゝ樣には可愛がられ、その上アノお染さまと
久作　アヽ、コレ〳〵、その久松のおれは請け人、滅多な事を云ふと、子供とは云はしませぬぞ。
久太　そんならお前は久松の請け人か。なにもそんなに叱る事は無い。
九介　サア〳〵、歩め〳〵。
　ト兩人門口へ出て
どうで暇の出た所に、愚圖々々して居る事はないワ。
久太　さうぢや〳〵。なんのおれぢやとて、內の無い者おやなし……とは云ふもの丶
九介　ハテ、くど〳〵と。斯う來やれサ。
久太　ハクサメ。
　ト唄になり、兩人向うへ入る。喜兵衞、思ひ入れ。
喜兵　嬶ア、しくじつた所にまごついて、暗い所へ行かうより、無駄にして歸らうか。
ろく　大方こんな事だと思つた。夫婦が夫婦で詰まらねえ狂歌を詠んでも引ツ込まれめえ。
　ト此うち喜兵衞、最前の三十兩の金を取つて立ち上が

ろ。
太郎　コレ〳〵、その金は
ト手を出す。
喜兵　なんだ、この金をどうした……この金はおれが借りて惡いか。
太郎　ムウ。
トつかへる。
喜兵　借りちやア惡いのか……野郎め、どきやアがれ。
ト久作を踏み倒し、門口へ出る。
久作　そんならモウお前方はお歸りか。もちつとの事で、わしの來やうが遲かつたら、お前方二人の仕事にならうもの。惡い所へこのわしが、來たばつかりに大枚の
ろく　金のあがきも
ト駕籠を見て
オヤ、まだ駕籠があるよ。
喜兵　置いて行くのも盗人に追ひ錢だ。嬶ア、片棒擔げ。
ろく　なんだ、おれが片棒擔ぐのか。あやまるの。
ト喜兵衞、先棒を擔ぎ花道まで行く。
喜兵　折角うまく〳〵やつたのに、人の仕事を邪魔家屋の淸兵衞とやら、この禮は重ねてキツと。

淸兵　云ひ分あらば何時でも尋ねてござれ。夫婦が夫婦でハヽヽヽ。
喜兵　コレ〳〵、笑やアがるな。併し岡目から見たならば飛んだ間拔けな戻り駕籠。
ろく　ととオかかアが辻駕籠を、擔いで入る引込みは、今まであんまり無い形だ……併し、知らぬ事とは云ひながら、竹川さまの弟御が、奉公先の店とも知らず
喜兵　どうしたと。
ろく　サ、行きねえな。
喜兵　飛んだ判じ物だ。
ト唄になり、向うへ入る。
太郎　これは〳〵淸兵衞さま、お世話樣でござりました。併し、いま久太めが云ひ居つた、多三郎が折紙とは、もしや簞笥の內の。ア、これにつけても使ひにやつた久松、もう歸りさうなものぢやが。
淸兵　ほんに、先刻にからお店に見えぬあの久松。
善六　イエ〳〵、使ひに行くと大抵では戻りませぬ。コレ、貴樣、久松の請け人なら、少つと云ひつけさつしやれ。それは格別、こなたにはちと折入つて賴みたいと云ふは昨日の嫁菜苞を

久作　嫁菜とはな。
善六　サア、よめ／＼、嫁入りなさるゝお染さま。
久作　お染さまが、何とぞなされましたかな。
善六　なんともせぬがアノ久松と……イヤ、斯樣の事は船中にて申さぬ事にて候ふ。
ト謠にて云うて紛らす。と向うより若い者、手紙を持つて出て來て
若者　お頼み申します。私しは松本屋作四郎から參りました。卽ちこの手紙を渡し、同道いたせと申しつけました。
太郎　それは／＼御苦勞に存じまする。暫らくお待ち下され。
ト口の内にて讀み
この文言では、多三郎が事について、急に逢ひたいとの事。久太が最前の詞といひ、ア、コレ、久松に逢うてから行きたいものぢやが。
ト頭になり、向うより久松、文箱を持つて出て來り
久松　只今歸りました。
太郎　オヽ、待ち兼ねた。さうしてお屋敷は、まだ退けずにあつたか。
久松　左樣でござりまする。先樣にもお取込みにて、暫らく待ちましたゆゑ、大きに遅くなりました……これはこれは淸兵衞さま、ようお出でなされました……お前は兄の久作どの、なんと思うて。
久作　久松さま……イヤ久松、お使ひかは知らぬが、なぜ早う歸らぬのぢや。最前から番頭樣が、戻りが遅いと云うてござつた。なぜ早う歸らぬぞいの。
久松　それでも先樣で、暫らく待てと仰しやるゆゑ。
久作　ハテサテ、云ひ譯する手間で、なぜ早く歸らぬ。
淸兵　アヽ、コレ／＼、其やうに云はいでも大事ない。コレ久松、どうしたものぢや。云はゞ兄なり判がかり、請け判の云はるゝ事、例へ叱られても大事ない。武家方但し町家でも、内の主の口眞似するが番頭の役、この上ともに、兄には云ひ譯するとても、必らず番頭の善六には云ひ譯しやんな。
太郎　左樣とも／＼、コリヤ／＼久松、淸兵衞さまの仰しやる事、必らずともに、よう聞いたがよいぞや
久松　これは／＼有り難い御意見。この上ともに、嗜みまするでござりませう。
淸兵　流石は久松、ハテ、聞分けのよいものぢやな。
善六　左樣でござります。聞分けのよい侍でござります。

表は子供のやうに見せかけて、大きな事を仕出し、後には旦那に損をかけ、清兵衛さまのお顏まで、立たぬやうにさらすでござりませう。

清兵　コレ〳〵善六、お染の聟の清兵衛は、この油屋の主同然。丁稚子供に親方の顏、汚されるやうな事があつてよいものか。ツカ〳〵と番頭の、いらざる事を云やんないの。

善六　これは〳〵聟樣の、お氣に障りましたらば、番頭あやまり入ります。

太郎　コレ〳〵久松、この文箱を貞昌どのへ渡して、お屋敷からの返事と云うて持つて行きや。

久松　ハイ〳〵、畏まりました。

太郎　ドレ〳〵。わしもこれから行て來ませう。

清兵　私しもゝうお暇申しまするところなれど、松本屋から急の使ひ、殊に今仰しやつた折紙とやら

久作　その入譯は鄕在の、この久作は存じませぬが、昨日思はず荷の内へ、手紙を添へた書き物は、もしやお店の代物かと、それでわざ〳〵今日爰へ。手紙の名宛も善六どのへ、多三郎より名宛ゆゑ

善六　それこそ慥かに折紙に、付いて來たその手紙、そんならいよ〳〵折紙は……ハ、、、コレ、久作どの、こなたには少と折入つて

久作　ハ、、、この手紙から番頭樣、俄にこはか御機嫌は、わしが土産のこの藁苞、庭に咲いたをむくつけに

久松　久作どのが手折つて見えた、藪の椿に庭の桃。

久作　サア、藪の椿も千代八千代、清兵衛さまへ嫁入りの、その花嫁を大膽な……イヤ、花と嫁菜をわざわざと、阿母樣へ。

久松　畏まりました。

太郎　わしは今から

清兵　太郎七さま。

太郎　行て參りませう。

若者　サア、ござりませ。

ト唄になり、太郎七は下座へ、清兵衛に久松付いて奧へ入る、久作、藁苞を見せびらかす。善六付いて廻るをツイと奧へ入る。

善六　なんの事だ。昨日は一日あの嫁菜で苦勞をして、今日は嬉しや持つて來たと思うたら、あの久作が久松の請け人なれば、定めて阿母樣へ渡し居るか。エ、、忌々しい。此奴は一思案せねばならぬわえ。

ト凄き合ひ方になり、時の鐘鳴る。向うより喜兵衞、以前の形にて、思案しい〳〵出て來る。後より彌忠太、着流し大小にて付けて出て窺うて居る。

喜兵　忌々しい。折角野郎を玉に使ひ、義光を取るか、大金くれるか、二つ一つと思つたに、虻も取らず蜂も取らず。併し、あの番頭の善六めは、根性は役に立たねえが悪い事には拔目の無い奴。彼奴を抱込んで、よし〳〵。

ト舞臺へ來ようとする。彌忠太、突き廻し

彌忠　おのれ、喜兵衞の大盜人め。

喜兵　なんだ、おれを盜人たア誰れだ。

彌忠　誰れでもない、彌忠太ぢやワ。

喜兵　オ、、旦那か。

ト逃げようとするを花道へ捻ぢつけ

彌忠　茲な大騙り。微かなれど元身共の家來、不和なる仲の竹川が、召使ひの六と不義いたしたゆゑ、既に手討に致すところなれど、悪い事には念の入つたおのれ、助けて置けばなんぞの役に立つと、助けて遣はしたは大恩だぞよ。その後石津久之進が預かりの、牛王義光の刀を云ひつけて盜み取らせ、質入れ致せと申したれば、その刀を百兩の質に入れ、その金子を横取り致したな。度々人を遣はせば無法の挨拶。サア、その百兩の金はどう致した。只今渡せ、なんとぢや。

トきつと云ふ。喜兵衞面目なきこなし。

喜兵　旦那、段々あやまり入りました。成る程、その金は私しが遣つてしまひました。併し、そのまげる中から、良い時も悪い時も、五兩や十兩宛と、質屋に積んで置きましたれば、もう僅かでございます。どうぞとてもの事に、斯うなされて下さりませ。お前樣の腰の物を、暫らくお貸しなされて下さりませ。

彌忠　なんぢや、身共の大小を貸せ。おのれ、義光を返さぬのみか、まだ身が腰の物まで取らうとは、うぬ、憎い奴。

喜兵　イエ〳〵、左樣ではござりませぬ。そのお刀と義光の刀と、入れ替へと申すにやりますと、義光の刀が出て參りまする。暫らくの間お貸しなされて下さりませ。

彌忠　ムウ、それ程に申す事、よもや間違ひもあるまい。よいワ、貸して遣はすから、僞はりならぬぞ。身が付いて參る。

喜兵　サア〳〵、お出でなされませ。

ト彌忠太が刀を腰に差し、舞臺へ來て門口を覗き

喜兵　御覽じませ。油屋は大きな住居でござります。
彌忠　成る程／＼。
喜兵　丁度好い間で、善六一人何か考へて居ります。
彌忠　ドレ／＼、成る程／＼。
ト覗くところを喜兵衛、彌忠太を切り下げる。彌忠太、聲を立てるところを、口に手を當て抉る。この音にて善六、戸の隙間より覗いて見て、惘り顫へて居る。喜兵衛、彌忠太を前の井戸へ打込み、刀を納め、左の方へ差して、門口を明け、善六と顏見合せ
喜兵　番頭さん。
善六　エ、、、、、。
ト顫うて
こなたは先刻の
喜兵　騙りの喜兵衛だ。
善六　その又喜兵衛が、なんの用で。
喜兵　請けに來やした。
善六　そりや何を。
喜兵　刀屋の勘吉から、質に入れた牛王義光を。
善六　アノ百兩の利足を添へて。
喜兵　イ、ヤ、金は無い。入れ替へだ。ソレ。

ト尻を向けて刀を見せる。善六取つて
善六　あの百兩の代物を、これで貸せとは餘ツぽど太い。その太い性根を見込んで、この善六が力と頼み、何かの相談。
喜兵　お前さへその氣なら、そんならこれから兄弟同然。
善六　互ひに内外打明けて、頼む手見せは娘のお染。
喜兵　引ツ攫つてくれろと云ふのか。
善六　如何にも左樣ぢや。
喜兵　頼みとあれば合點だが、おれもこなたに。
ト囁く。
善六　すりや義光を盗み出し、外でコツソリ大金に。
喜兵　首尾よく行けば二つ割り。それに付けても添へてある
善六　その折紙は多三郎、首尾よく取りは取つたれど、嫁菜の苞で行き方知れず。
喜兵　例へ折り紙は無くつても、正眞正銘義光の
善六　在所は卽ち奧藏に
喜兵　その案内は
善六　番頭受込み。
喜兵　盗んで爰を

善六　次手に娘のあのお染
喜兵　埋めるしおくの
善六　路用は義光。
喜兵　祝ひに一つ
善六　打つて置け。
二人　ヨイ〳〵〳〵ヨイ。
喜兵　シイ。
ト善六口を塞ぎ、喜兵衛あたりを見る見得。時の鐘にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、中足の二重舞臺、眞中中仕切り障子を立て、上には床の間、違ひ棚の書割り、下は柱際より一尺四五寸の小壁、暖簾口尤も狹くして、柱の見限りにて緞子張り障子二枚立てあり、この障子の内二尺ほど奥へ入れて、箪笥の書割り、尤も抽斗抜ける事あり。屋體は大和葺本庇本緣側付き、上手に奥藏の戸前口、石段、戸前に錠卸ろしあり、尤も人出入り、藏と二重の間丸き柴垣、中に何なりとも冬木をこんもりとさして植込みの體。ズツと下に切り戸口、すべて油屋奥座敷庭先の模様、爰に六枚屏風立て廻してあり、頭にて道具納まる。

ト暖簾口よりお園、行燈を提げ出て、あたりを窺ひ、屏風を明ける。内に誂らへの床を敷き、この上にお染、寢衣の形にて坐つて居る。

その　申し〳〵、お染さま、今宵奥へお寢間を致しましたは、あのお方に
そめ　そんなら首尾して、今宵久松に
その　わたしが逢はせます。暫らくお待ちなされませ。
そめ　なんにも云はぬ、その大明神様。
その　滅相な。わたしに罰が當ります。
そめ　どうやら恥かしいわいの。
その　なんの恥かしい事がござりませうぞ。暫らく待つてお出でなされませ。
ト屏風を引廻し、緣側へ出る。ト切り戸口より久松、庭下駄を穿き出て
久松　お園どの、わしに用とは、誰れが呼んでござるぞいの。
その　彼のお人が。
久松　滅相な。今宵はついにない、在所の兄貴久作どのといひ、山家屋の旦那も來て居り、それより怖い番頭どの

こんな事を見られたら、大抵の事ではあるまい。怖やの怖やの。

その　これは初心らしい。先刻にから待つてぢやわいな。

久松　それでもどうやら。

その　ハテマア、行かしやんせいな。

ト屛風の内へ入れる。

靜かにおしげりなされませ。

ト奥にて

貞昌　お染や／＼。

ト久松、屛風より顏を出し

久松　ありや阿母樣の聲。

その　大事ない。わしが好いやうに云うて置く程に、默つて隱れて居やしやんせ。

久松　それぢやと云うて。

その　ハテ、よいわいな。

ト久松引込むと奥にて

貞昌　お染／＼。

ト暖簾口より母貞昌、着付け羽織にて頭巾を冠り出る。お園、慌てゝ行燈を吹き消す。貞昌、手燭にてあたりを見て

これはしたり、その、なぜに灯を消しやつたぞいの。

その　ハイ、この灯の消えましたは……オヽ、それ／＼、鼠がたんと油つぎ、行燈が鼠について、そこらだらけが鼠だらけ、怖い油でござりまする。

貞昌　何を云やるぞいの。さうしてお染はどうしやつたやまだ起きて居やるかいの。

その　ハイ、お染さまはアノソレ、お積が發りまして、私しが只今まで、押へて居りましたわいな。

貞昌　なんぢや、お染は積が痛い。それなれば早うさう云やればよい事を、そりや大抵の事ぢやない。コレ、其方大儀ながらお醫者樣まで行て、御苦勞ながら只今お見舞ひ下さるやう、ちよつと呼びましておぢや。

その　そんならお醫者樣へ。

貞昌　わがみも一日さぞ疲れたでもあらうに、人使ひの惡いやうにも思やらうが、外の事とは違ひ、病の事は捨てては置かれぬ。早う行てたも。

その　イエ／＼、このお使ひには行かれませぬ。

貞昌　そりや又なぜに行かれぬのぢや。

その　わたしが參りましたら、また跡で、お積を押へる者がござりませぬ。

貞昌　そりや大事ない。其方の代りに、わがし積を押へてやるほどに、早う行て、なんなら一緒に連れ立つて來てたも。

その　それでもわたしは

貞昌　ハテ、行きやと云ふに。

トきつと云ふ。お園、うぢ／＼して納戸へ入る。此うちに喜兵衛、切り戸口より窺ひ出て藏の内へ入る。貞昌、屏風を明ける。内に吹替へのお染、搔巻にもたれて居る。

お染や、どうぢや、痛みはちつと快いか。これはしたり目が覺めて居やるか。アヽ、矢ツ張りさうして居や。なんの母に遠慮があらう。どうでもまだ冷える加減があらう。今お醫者樣へも人を上げたゆゑ、やがてお出でに間もあるまい。其うちあれに代つて、わしが撫つてやりませう。どこぢや、爰か／＼。

そめ　イエ／＼申し母樣、わたしやアノ積は

貞昌　納まりましたか……コレ、お染や、いつぞやわしが、云はう／＼と思うて居たが、今夜は爰で其方とわしが差向ひ、外に他人も聞く人も、よもや爰には居やるまい。結納濟んで主あるお染、子供でからが男帶した者とてはなんの遠慮でどう居やらう。殊に其方の心では、嫁入りするが濟まぬ樣子。それも尤も、無理ではない。ならう事なら其方の好いた男を持たせ、喜び顔を見たいけれど、何を云うても、過ぎ逝かれし夫の遺言、斯うばかり云うては合點がゆくまい。いま其方に見せる物がある。これを見て疑ひ晴らしてたも。マア／＼、冷えぬやうに。

ト屏風を立て手燭を持つて暖簾口へ入る。吹替への貞昌、緞子張り障子の内へ出て、裏向きにて、簞笥の抽斗を明けて書き物を探り出して居る。此うち屏風の内より、吹替への久松出て、横の障子を明けて垣根の内へ入る。久松、垣の内より半身出して、二重の方を見て、ホッと息をして又隱れる。ト吹替への母親、簞笥より暖簾の蔭にて替り出て來て

ありました／＼。染や／＼。

ト屏風を明けて

こりや其方も知つて居やる通り父樣のお手、これを今其方に見せて、改めて母の頼み……何をマア其やうに、ソワ／＼せずと、大事の事ぢや、わしが云ふ事落ちついてとつくりと聞いてたも。其方も知つて居やる通り、わしやこの家へ後妻、兒は元より其方も同じ先妻の胤、わし

とは生さぬ仲ゆゑ、太郎兵衛どのとわしとは、年も餘ツぽど違うてあれば、近所の人が打寄つて、跡目を入れるは内の爲、その相談がよからうと云うてなれど、成人した二人の子供へ、氣も知らぬ繼親持たずが見得でもなし後家を立つるも、また生若いわしゆゑに、年頃したあの多三郎と……得てそんた事云ひたがる、世間の口には戸が立てられぬ。去年の秋、此やうに髮をおろしたは、世を樂に早う其方を嫁入らして、初孫の顔見やうぞと、それ樂しみに暮らすうち、持病の癪と締めて居やる、こりや五月の岩田帶。

ト吹替へのお染ハツと顔を隱す。

サ、なんぼうわしに隱しやつても、娘の其方の事ぢやもの、知らいでなんとせうぞいの。そりやモウ、互ひに思ひ思うた仲ぢやもの、添はしてやりたいが、こゝが今云ふ浮世の義理、隔てた仲のわしぢやゆゑ、邪慳な者とも思やらうが、家を立てねば先祖へ立たず、清兵衛どのへ娘をと、その遺言も破られず、中に立つ身のわしが悲しさ……と云うて人に騙されて、怖い藥やなんぞ服んでたもるなや。其方も、そこらに聞いて居る人も

トこのせりふのうち、切り戸口より久作、網戸口より清兵衛出かけ聞いて居る。吹替への久松、垣根の内より出て、ソツと藏の内へ入る。久作も貞昌もちよつとこれを見る事あつて

よう聞分けてたもや。めでたう身二つになつたその上、わしが頼みぢや、山家屋へ行てたも。コレお染、なる事ならばこの母に、なんの如才があらうぞいの。

清兵　その嫁入りの御苦勞も

貞昌　お前は聟どの。

久作　清兵衛さま。

貞昌　久作どの……そんなら樣子を

清兵　承はつて今では氣の毒……イヤサ、氣合ひの悪いお染どの、病氣のうちは山家屋の、根岸の寮へ引取つて、出養生も早五月……イヤサ、但し十月がその間、婚禮沙汰が延びたとて、これを否とも岩田帶、とは云へ世間の取沙汰に

久作　お氣に違うて久松に、例へお暇下されても、さらさら恨みと存じませぬ。その證據は、

ト緣先にある藏の錠を持つて行つて戸前へ卸ろし

サア、斯うして置けば、これでお家の御用心。

貞昌　嬉しやこれで互ひの安堵。

久作　もし久松に今にても、お暇が出たならばと、書いて参つたこの引取り。

ト折紙を出す。

貞昌　こりやコレ折紙。

清兵　わしも幸ひ持ち合した、誠に奇妙なこの藥。

ト守を出す。貞昌取つて見て、

貞昌　何から何まで……ヤ、、、こりやコレ子安の

清兵　サア、安々めでたう身二つに

久作　ヤモ、流石は大家の旦那樣、嶽の弟も

貞昌　娘の薬も、

清兵　久作どの。

久作　旦那樣。

清兵　もうお暇申しませう。

貞昌　もうお歸りなされますか。

清兵　ア、、それにつけても今に迎ひが。

久作　お歸りならば私しが、どうで道までお供いたして。

清兵　そんならお頼み申さうか……イヤ、貞昌さま。

貞昌　清兵衛さま。

ト久作、小箱の提灯を持つ。清兵衛・屏風の内へ思ひ入れ。貞昌、屏風を引廻す。チヨン、と木の頭

ようござりました。

トきざみよろしく拍子

幕の外、清兵衛久作向うへ入る。ツナギ、道具返し、幕

本舞臺、上手へ寄せて、九尺の土藏造、觀音開き、此處まで、これより下の方一面の黒板塀、見越しの松の木、竹の忍び返し、眞中取れる仕掛け、こゝ内に三間の高足付きの二階を見せ、本庇に風鈴を釣つてあり、一面に障子をしてあり、松の木の見越し、下に飾なる用水入れ。松より降りる仕掛けあり、すべて油屋二階座敷の模様よろしく、時の鐘にて幕明く。

ト向うより四つ手駕籠一挺駕舁出る。上手より中間權平、酒に醉ひたる體にて出て來て、よろけながら駕籠にて行き當る。

駕舁　ハイ／＼、頼みます／＼。

ト行かうとする棒鼻を押へ

權平　ヤイ／＼、待ちやアがれ。

駕舁　なんだ、どうするのだ／＼。

權平　どうするとは、うぬ、人に棒鼻を當てゝ置いて、頼みますとは何を頼むのだ。

駕舁　夜道の事だ。料簡して下さい／＼。

權平　料簡ならない。駕籠を下ろせ／＼。

ト引据ゑる。

駕甲　コレ／＼、奴さん、行き當つたから料簡しなさいと云ふのだ。

駕乙　第一其方は空身、此方は荷を擔いで居る者だ。

二人　行き當つたのは五分々々のせりふだ。

權平　此奴が／＼、太い奴だ。コリヤ、鈴木彌忠太さまの御家來權平さまだ。人を見損なやアがつたか。うぬらより駕籠の客が相手だ。爰へ出ろ／＼。

駕舁　駕籠は女中だ。よい加減に料簡さつしやれ。

ト此うち駕籠より頭巾を冠りし女、逃げて上手へ入る。三人これを知らず

權平　エヽ、面倒な、引摺り出すワ。

駕舁　さう云やアうぬを

トちよつと摑み合ひ、兩人、息杖にて打つてかゝる。權平、板塀の忍び返しを外して挨き合ひ、立廻りながら下座へ追ひ込む。ト誂らへの獨吟になり、唄一くさりあつて切れる。眞中の障子を開く。お染、硯箱を引寄せ居る。合ひ方になり

そめ　いま久作の云やるを聞けば、久松の暇を取り、明日は早々五百崎の在所へ行きやれば、云ひ號けのお光さまとやらが、定めて仲好う添やるであらう。さうなる時は我が願ひも叶ふまい。淵川へも身を投げて、死ぬる覺悟とは云ひながら、勿體ない、義理ある仲を母樣の、事を分けてあのお詞、立つる時には嫁入らにやならず、殊にお腹の嬰兒までも、共に生きては居られぬこの身。コレ久松、わしや先へ行く程に、必らずあの世は添うてたもや。人目を忍び、やう／＼書いたこの書置、ちよつとなりとも久松に……イヤ／＼、斯う云ふうちも、人目にかかれば恥の恥。人の見ぬうち、さうぢや／＼。

ト書置を持つて入り、下手の障子を明け、吹替へのお染、風鈴へ書置を結び付ける。久松、藏の窓より半身を出し

久松　それにお出でなされまするは、お染さまではござりませぬか。

そめ　其方は久松、逢ひたかつた。逢ひたかつたわいな。

ト久松、窓より入る。吹替へ跡へ裏向きにて出る。吹

替へのお染、此方へ入る。お染、上より二枚目の障子を明けて、尤もこの前にお高祖頭巾を被る事あり。

逢ひたかつた〳〵わいの。

久松　オヽ、道理でござります。逢ひたいは私しとても同じ思ひ。

そめ　なんの、其方は殿御の事ぢやゆゑ、心強うも思やらうけれど、女子の果敢ない心では、死ぬるが高と覺悟して、やう〳〵書いたこの書置、いま取つて來る程に見てたもや。

ト入る。藏より久松出る。下手へ吹替へのお染、裏向にて風鈴の書置を解いて居る。

久松　申しお染さま、義理ある仲の阿母樣の、段々のあの御意見、所詮添はれぬ二人が惡縁、矢ツ張りあなたは山家屋へ、お出でなされて下さりませ。

ト此うち吹替へのお染、文を取つて足音なして此方へ來る。久松の吹替へと代つてお染にて上手へ出て

そめ　そりや胴慾な久松、其方を除けてなんのマア、例へ嫁入りするにもせよ、世間の人の口の端に、あのお染は可哀さうに、久松を捨てゝ外へ嫁入りするとは、大身代の山家屋で、榮耀がしたさぢやと、皆慾ぢやと、世間の人に指さされ、笑はれうより一日も、早う死にたいわしが願ひ。マア、この書置。

ト暗き思ひ入れ、探りながら出す。吹替への久松も探りながら取る。

エヽ、折惡いこの暗がり。死ぬる今際に其方の顏、見る事さへも叶はぬか。コレ久松。

久松　お染さま。

そめ　思へば果敢ない

久松　モシ、もうお目にはかゝりませぬ。

ト藏の戸を閉てる。

そめ　ハア、。

ト泣き落し、思ひ入れあつて、ソロ〳〵と見越しの松の枝より、用水桶を傳ひ降りて來る。これと一緒に藏の腰巻を、内よりボチ〳〵と毀し、この穴より喜兵衛、以前の形にて、義光の刀にて切り明け出て、刀を納め腰に差す。此うちお染、下へ降りて向うへ行かうとする。喜兵衛、透かし見て

喜兵　ヤア、わりやアお染だな。占めた〳〵。義光を巻上げた上、われを摑まへて善六に渡す。來やアがれ。

そめ　イヤ、わしやそんな者ぢやないわいの。



嘉永三年正月河原崎座所演



阪東彦三郎の喜兵衛　岩井粂三郎のお染

喜兵　やかましいわえ。幸ひのこの駕籠へ。

ト無理に駕籠へ入れて、外より繩で絡げる。と藏の破れより久松出て、窺うて又入る。下座より以前の駕籠舁き二人出て來て

駕甲　コレ〳〵、駕籠は爰にあつた。

駕乙　お待遠でござりませう、サア。行かう〳〵。

喜兵　コレ〳〵、この駕籠は借りたい〳〵。

駕舁　なんだ借りた。途方もない。お客を乘せて居るワ。

喜兵　べら坊め。こりやアお染だ。

駕舁　エ、、やかましいわえ。

ト擔ぎ上げて行かうとする。喜兵衞、支へる。兩人、砂を摑んでめつたに打ちつける。喜兵衞、目に砂の入りし思ひ入れ。ウロ〳〵するうち、兩人は向うへ走り入る。

喜兵　ヤイ〳〵。そりやアお染だわえ。オ、イ〳〵。

ト云ひながら向うへ行かうとする。藏の破れより久松出て、喜兵衞を後より抱きとめる。喜兵衞、振り解いて見得。

久松　ヤア、お六に連れる喜兵衞とやら、藏を毀つて此やうに、見れば覺えのこの一腰、すりや質入れの義光を

喜兵　わりや久松、悪い奴に見付かつたわえ。そこ放しやアがれ。

久松　義光渡せ。

ト喜兵衞、何を。と息杖にて打つてかゝる。立廻り見得よく止めて

云はゞ女房の緣につれ、主の弟の久松を、ようも打擲いたしたな。

喜兵　ぶつてもいゝワ。撲いても大事ねえワ。

ト散々に打つて

コリヤ、この刀を詮議する石津が倅、竹川が弟の久松だな。コリヤヤイ、この義光は根が盗み物、さる人に頼まれて、この油屋へ百兩の質に入れ、その金も宙で攫つた引負ひも、天道あつてか、がゝら負けてしまつた。そこで思ひ附いて、この藏の矢尻を切り、持ち出す所を見付かつちやア、寢覺めが悪いと思ふから、われを爰で撲き殺し、後腹病めないおれが目論見。待てよ、併しわりやアおれが殺さいでも、どうで死なにやアならねえ。なぜと云へ。主あるお染と不義をすりやア、云はずと知れた間男だ。なんと死なにやアなるめえが。可哀やお染は先馬だ。うぬも後から馬で行く、駒も驛路の鈴ケ森、三尺

高く安房上總、向うに受けて磔刑だワ。

久松　その義光の刀ゆゑ、家の斷絕、親の切腹、この油屋に質物に、入つてあれど荒立てて、詮議を願はば親方の難儀にならうと思ふうち、盜みに入つた橫道者。おのれに義光盜まさうか。今こそ町人、以前は侍ひ、石津が次男のこの久松、サア、義光を渡すまいか。

トこれより捨ぜりふ、兩人花々しきタテあつて、喜兵衞轉げるはずみ、最前の忍び返しの竹、横腹へ立つ。これより苦しみながら立廻り。久松、喜兵衞を一かせ切る。喜兵衞苦しみ

喜兵　人殺し。

トこれにて、久松、喜兵衞の口を押へながら抉る。喜兵衞、立ち身にて抉られ、苦しみながら久松が髻を摑む。久松、刀にて切り拂ひ振り上げる。喜兵衞ギクリと苦しむ。久松悔りして撞となる。チヨンと木の頭。久松、刀を拭ふ。嘉兵衞、落入る。兩人よろしく、拍子

幕

大切

隅田川道行の場

淨瑠璃「心中翌の噂」常磐津連中

役名——油屋娘、お染。同丁稚、久松。久松云ひ號け、お光。賤の女、鶴士手のお作。猿廻し、佐次兵衞。山家屋清兵衞。駕籠舁き、庄六、同、ご

本舞臺、下手へ寄せて、淨瑠璃臺。上の方黑幕、稻村、松の並木、日覆より松の吊り枝、淨瑠璃臺に常磐津連中居並び、禪のツトメにて幕明く。

ト同じく禪のツトメにて向うより、若い衆大勢、油屋、山家屋と記したる提灯をともし、鉦太鼓にて出る。後より清兵衞、尻をからげ、一本差しにて出て來り

皆々　久松やアい。

清兵　お染やアい、久松やアい。

皆々　迷子の〳〵お染さまやアい。

ト舞臺へ來て

清兵　なんと皆の衆、此やうに尋ねても知れぬといふは、どうしたものであらう。これから向島の方を尋ねようか

皆々　それがようござります〳〵。

ト行きかゝる。ト觸れ書落ちてある。

モシ〱、何か爰に落ちて居ります。

清兵　なんぢや、書いた物ぢや。なんぞ辻占になるものか

ト拾つて

なんぢや「心中翌の噂」淨瑠璃太夫

トこれより太夫連名を讀んで

こりやコレ、狂言の役割りぢや。ア丶、もし此やうな事にならねばよいが。

ト禪のツトメになり、皆々ワヤ〱云うて入る。直ぐに前彈きにかゝる。

へいとしいと、可愛いといふ二人連れ、相合傘の手と〱手、いつも嬉しき風呂敷に、包む人目も今日は又、離れて獨り久松が。

トばた〱にて久松、着流し、おしよぼからげ、一本差し頰冠りにて、一人出てキツとなる。

へ疵持つ足の片葉さへ、そよぐもしや追手かと、胸にあたりの一腰を、流石にいとふ頰冠り、ひる朧夜の今の身は。

久松　餘儀なき事に喜兵衞めを手にかけ、義光のこの刀持つて、立退く道々も、心ばかりはお染さま、慥か駕籠にと思ふゆゑ、見え隱れにお供したが、小梅の方へ廻つたか。その行く道を知りたいものぢやが。

ト向うを見て

向うへ慥か四つ手駕籠、爰へ忍んで、さうぢや。

へあたり見廻し稻村の、蔭に暫しも身を忍ぶ。

トこなしあつて稻村の蔭へ入る。

へこんな仕事にあたらう端か、昨夜行燈へ丁字が出來て內の嬶めが鼠なき、しよんがいな、オツと肩しよと杖の間に。

トこの淨瑠璃のうち、庄六、又、揃ひの浴衣、脚絆にて、四つ手駕籠を擔ぎ出て、振りよろしく

兩人　モシエ。

へ旦那の御器量を、譽めて酒手を常の癖、今夜召したる娘御樣の、戀の重荷のよい御器量で、定めしとうにばつちりと、草鞋の紐でもしめてやれ、仇口いふに付けてさへ、別れし人の氣にかゝり。

ト花道よき所にて駕籠の垂れを上げる。內にお染乘つて居る。

そめ　そんなら其方衆、アノ久松に

兩人　わしらが逢はしてあげやんすよ。



嘉永三年三月河原崎座上演
岩井粂三郎の久松

そめ　早う逢ひたい、逢はしてや。

へせかるゝ心やる瀬なう、見返る雁の女夫連れ、ア、羨やまし、此方も馴染のえてきちに、オ、合點と五百崎の立場をさして急ぎ行く。

トこの淨るりのうち、よき所にて垂れを下ろし舞臺へ來る。と稲村の蔭より久松出て

久松　待て。籠の内なはお染さま、此方へ渡せ。

庄六　面倒なこの前髪め。このお染は善六どのに頼まれて

又　おいら二人が連れて逃げるのだ。

久松　さう聞けば猶ならぬ。此方へ渡せ。

兩人　疊んでしまへ。

ト禪のツトメになり、ちよつと立廻りあつて三人見得チョンと淺黄幕を切つて落す。内の道具出來次第ふり落す。

本舞臺、中遠見、三圍土手の景色よろしく、所々に山吹の盛り、日覆、松の吊り枝を引上げ、一面に櫻の吊り枝見事にとまる。

へ憂き事に我が五百崎を狂ひ出で、菜種にひとり蝶々の夢ともわかず道樂に、露のたびなるかこち草、男ゆゑにや狂ふらん。

ト、カケリになり、向うよりお光、病ひ鉢卷、振り袖脱ぎかけ、笹に閨の扇を附け、狂氣の體にて走り出て來て、花道にとまる。

へ結ひてし、かひや嵐のいたづらに、中を櫻のうたてやつらや、行くへいづくと白波の、お光が心亂れ髮、ちらちら更にわく方も、なくは雲雀か藪鶯の、やぼとやらぢやと笑ふは花の、八重に思ひて一重に開く、こちの心は汲みもせで、わきへ交した仇名草、盛りも待たで散るならば、共に連れてはくれもせで、エ、憎いほどなほ川の面、水に仲よき浮寝鳥へあれ都鳥々々、なれも戀路のあるやら君の、比翼かはして何ぢややら、面白さうに粹な浮世に、隅田川ぢやと辛氣らし、焦れ慕うてちろり、かん〳〵鷗が、なぶりくさるも道理千萬、尤も至極ぢやないかいな、こちの思ひは猶更に。

みつ　聞えぬわいな、久松さま。

へ派手な噂を聞いてから、癪といふものつい覺え、在所生れのわたしでも、云ひ號けすりや女房ぢやもの、悋氣の仕やうは知りながら、云はで月日をくよ〳〵と、待つに時雨のお染さま、連れてとも〳〵駈落ちと、聞いて身

もよもあら憎や、我が夫返せ憂き人を、そこか爰かと追ひ風の、姿しどなく伏し沈む、〽谷の清水は夜の間に増して猶やさし。
ト合ひ方鳴り物入りにて、佐次兵衛出て來て
〽めぐりくるくる曲輪ぢやないか、こちの大事の太夫でござる、これさ子供衆わるさをせまい、きやつは手とりで、お情知りで、赤い所へごんばう燒いておつ付けろ、浮きに浮かれて來りけり。
ト舞臺へ來て、お光を見て
佐次　なんだ、美しいものが寢て居るワ、コレサ〳〵、氣を付けなさい〳〵。
ト　お光あたりを見て
みつ　なんぢや、わしに氣を付けい。なんぢや、男を持てとかえ。オヽ。
〽床の鼠があいたし小皿につまづいて、ぐわら〳〵ぴつしやりなんぞいの。
佐次　ハヽヽヽ。なんだ、此奴は狂人だな。よし〳〵、そんなら兎角逆らはぬやうに、氣を慰めて遣りませう。
ト　猿を連れて出て
〽瓦町とや油屋の、一人娘にお染とて。

お染と云うたら立つたりな。
〽年は二八の細眉に、内の子飼ひの久松と、
サア、これからが口舌の段。
〽あれ又あんな無理わいな、昔思へば逢はぬがましぢやましかましらの恥かしや、それよりこの身の物狂ひ、戀しき人を都鳥、ありやなしやと現なく、とむるを拂ひ振り切つて、あこども浪の川岸を、狂ひ狂うて走り行く。
ト佐次兵衛とめるを振り切り、右の櫻の枝を投げつけて一散に下座へ入る。
佐次　ハア、、さてはあれが評判の久松どのゝ、云ひ號けのお光とやら。昨日二人で、駈落ちと聞いての色狂人そんなら、お光はあの沙汰を。
〽聞いて鬼門の角取れし、前髪樣の云ひ號け、色の命に帆を掛けて、二人はどこへ走り船、さつさおせ〳〵沖遠えた、二人が中に取殘され、俊寛もどきの上越して、ひとり菜種に狂ふ蝶。
ト振りよろしく
よし〳〵、誰れぞ來るのを待ちかけて、ちえもながらや猿とおれ。ドレ、夜櫻を出掛けようか。
〽若いが花の夜櫻や、しばし眺むる折からに、月を友な

る氣散じは、調子違ひの田舎ぶし。
ト合ひ方になり、鶴土手のお作、掻巻にて、抱き子を背負ひ、褄をからげ、手拭ひを冠り、手に茶の袋と、持ち遊びの風車、獅子など結ひつけて、出て來る。
へ瓜や茄子にやくねかきもなろが、むすめ豆にや垣やならぬえ、初ものしめよとて夜遣人がうせたなら、なんとしよかと、しよんがいな、江戸の戻りと見えにけり。
ト舞臺へ來る。
佐次　オヽ、誰れかと思へば、鶴土手のお作どんぢやないか。
さく　オヽ、お前は猿廻しの佐次兵衞さん、きつい精の出しやうぢやな。
佐次　イヤ、おれは今とんだ所へ來て、狂人の守りをして居たのサ。
さく　ナニ狂人。さうしてその人は、女か男かえ。
佐次　女とも／＼、十六七な可愛らしい女、しかも色狂人ぢや。
さく　それは氣の毒な事でござんす。今年は色の出來がよいやらして、此方の村でも聞かしやんせ。
へ庄家のおぢやうが新田村の、杢藏男にうつ惚れて、いつかみゝずと釘の折れ、取りかはしても首尾すべい、しがくがなさに手はずして、巳待ちの夜さをかこつけに、おぢやらしやつて産神の、榎の木蔭でせうねぢやえ／＼
へ我れらもそさまに三圍の、その始めから首つたけ、牛の御前ののろくなり、口説かばどうやらつい埒が、秋葉と思ひ見知らした、小倉半紙の文の數、やつても何のお通じも、ないぎそこらでちよこ／＼と、念ごろ／＼ねんねんころねんと、古い小唄で抱きつけばへこれなアこつちは此やうな、栗虫見るよな子まである、男をのけてそれさまに、おゝ泣くなよい子ぢや、こんな物をやろな、お獅子ぱく／＼廻る／＼風車、眠むかおせなでねんねこせい／＼、へそのねんねこが故郷の、御ていがこれまで年々に、踏みひろげたる上田へ、われらもちよつといれ作に、種ものおろして見たいのか。
さく　コレ、悪冗談な、措かしやんせいな。
佐次　コレ／＼、何もそんなに、ピン／＼と拗ねる事はない。猿廻しはして居るが、これでも死ね殺せといふ色があるわい。
さく　なんぢや、お前に色があるえ。こりやをかしい。その色様を當てゝ見せうかえ。



根本所[illegible]の舞臺面

佐次　オ、、當てゝ見たり〳〵。

さく　カウト、お前の色ならオ、さうよ。大方江戸の吉田町、夜の高尾といふまぐれ。

へちから〳〵と足曳の、山下駄さげてちよつぴりの、茶碗の酒のさめがはし、もんし〳〵と呼子鳥へゲェイ君はド、どうした、やつめはとつかひの、身にはしみつたれ中間ぼう、うそうそと月の明りにそれと見て。

へチ、ちくるゐカ、かんとんびめ、今夜もどいつが口開けをと、ぐつとせき込み行きかける。竹みつ取つて。

カウ、待ちねえな。

へ折助さんにナ請け出され、明日から草鞋の毛はむしるそれを心の樂しみに、辛い勤めの辛抱も、わたしばかりが生眞面目で、主は女房にせうびんな、世帯持つてと云うたのを、忘れてかいな、オヤ〳〵〳〵、どう云ふなう、馬鹿らしい、男の爲なら共稼ぎ、三十振り袖四十島田へ草のえ枕も主ゆゑならば、北風吹くともなんとしよがえ雨にも露にもまきやせまいへ石のお地藏と思うてもするがえ。

しつかい身體は金氷、冷たい寒いもなんの事たえ。

へ三十振り袖四十島田、その氣で〳〵その氣の金ぴら大權現、あすの緣日樂しみに、手ぐらまぐらに在所から、一村さして急ぎ行く。

ト お作、子を抱いて下座へ走り入る。

佐次　オイ〳〵、お作〳〵。オイ〳〵、なんだ、おればかり置いて行つたな。忌々しい。おれも浮かれて、やらかせやらかせ。

へ夜櫻や隅田川原へ棹さして、舟の中には何とおよるぞ苫を敷き寢の梶まくら、晩の泊りは御油赤坂か、吉田通れば二階から招く、しかも鹿の子の振り袖が、奴島田に丈長かけて、先のが品やるふりこめさ、色めく飾りのなげ道具、更けぬうちにとゆふまぐれ、土手を彼方へ急ぎ行く。

ト 捨ぜりふにて下座へ入る。土手の道具引いて取る。後の黑幕切つて落す。ト遠見に土手を見せ、秋葉白髭梅若邊の遠見、打抜き稲村大小二つ誂らへあり、爰にお染、お高祖頭巾にて、吹替への久松、頰冠りして相合傘にて立ち身。この形にて押し出す。

へせめてもの思ひも今は春雨に。

そめ　コレ久松。

へ忍び〳〵の寢油に、帶さへ解かぬなか〳〵に、未來へ



初演の錦繪　五世岩井半四郎のお作

行たらしつぽりと、ねて叱り人のない折も、あの云ひ號けのお光さんが、ござんせうともこの染と、添うて袂の白絞り、それが心の花の露。

トこの節落ちにて、傘の内にてお染久松に變り、吹替へのお染、小さき稻村の内より出て、吹替への久松は大きなる稻村へ入る。

〽思へばとても大恩の、お主の娘と不義の科、一緒に死ぬる惡縁と、思ひお染も好いた同士、いく久松となる所へ。

ト一腰へ手を掛ける。所へ、バタ〳〵にて清兵衛、若い者大勢出て、バラ〳〵と取卷き

清兵　待つた〳〵。死ぬるに及ばぬ。お光は本妻、お染は妾、折り紙が手に入れば、千葉の家へ差上げ、久松は跡參、元の侍ひ。めでたい〳〵。

久松　エヽ、有り難い。

頭取　先づ今日はこれぎり。

打出し

お染久松色讀販（終り）

上林の葛城と、三浦屋
の小紫が、井筒に由縁
の大門口、不破と名護
屋が鞘當の意氣地競

浮世柄比翼稻妻

寛濶出立　十一幕



初演の繪番附

浮世柄比翼稲妻

序　幕

東海道境木の場
鎌倉初瀬寺の場
助太夫屋敷の場

役名――名古屋山三元春。不破伴左衛門重勝。腰元、岩橋。名古屋下部、八内。本庄助太夫。浮世又平。本庄助八。奥女中、椚。長谷部雲六。片桐十助。六角左京之進。石塚玄蕃。佐々木桂之助。佐々木額五郎。住職、轟坊。所化、願哲。足輕、笹野才藏。中間、さゝら三平。夜廻り、彥左衛門。白井權八。

本舞臺。正面黑幕、眞中に、武藏相模國境の榜示杭。幕の内より不破伴左衛門、雲に稲妻の紋附いたる衣裳、大小、浪人の拵らへ、深編笠にて、名古屋山左衛門の死骸へ止めを刺して居る見得。見世物師、浮世又平、中間の形。本庄助八、さんぴん侍ひにて、兩人、竹槍を持つて、白井兵左衛門の死骸へ立ちかかり居る。すべて東海道、境木村の體。時の鐘、禪のツトメにて幕明く。

又平　伴左衛門さま。

ト三人こなしあつて

又平　助八さまは侍ひだけあつて、お手際格別なものでござります。

ト伴左衛門、「コレ」と思ひ入れ。

助八　イヤ〳〵、又平も昔取つた杵柄とやら、中々味をやりました。

又平　白井權八が親の兵左衛門、山三が親の山左衛門、佐々木の家に仕官なれども

助八　彼奴らがあつては、伴左衛門どのゝ大望の妨げゆゑこの所に待伏せして、兩人が預かるところの、神妙劍は親仁めが

ト兵左衛門の死骸の懐より、一卷を出す。此うち、伴左衛門、山左衛門が死骸にある刀を取る。助八見て

山左衛門が帶せしは、名古屋の家に二振り揃ふ來國俊。

又平　早く喰はゞ皿の譬へ。伴左衞門さまは、ちつとも早
う
助八　骨折り代に身共は一卷。
ト又平の持つたる一卷を引ッ攫ひ、一散に向うへ入る
伴左衞門、跡追ッかけてといふ思ひ入れ。又平呑みこ
み
又平　心得ました。
ト時の鐘になり、向うへ入る。伴左衞門、件の刀を持
ち、上の方へ入る。知らせにつき、正面の黒幕切つて
落す。
本舞臺、正面一面の朱塗りの大山門。上の方、一面
の櫻にて見切り、山門の正面に四つ目の紋附いたる
紫の幕を張り、所々に櫻の立ち樹。すべて鎌倉初
瀨寺の體。この道具誂らへの鳴り物にて、納まる。
ト大拍子入りたる出の鳴り物になり、佐々木桂之助、
若殿の拵らへ、長谷部雲六、片桐十助、麻上下の侍ひ
桂之助の刀を持ち、櫻、奧中女の拵らへ、早枝、楓、
紅葉、腰元の拵らへ、各自筒に生けたる花を持ち、石
塚玄蕃、上下、衣裳、大小、後より笹野才藏、足輕に
て、竹刀の附きたる繪馬を持つて出て來る。山門の中
より轟坊、緋の衣、住職。所化願哲、附いて出迎ふ
皆々よろしくこなし。
轟坊　これは〳〵若殿樣には、先君の御追福として、當寺
への御參詣。
願哲　路次を警固の何れも樣、遠路の御入來
兩人　御苦勞に存じまする。
桂之　住職には出迎ひ大儀。大家の式は先例に任せ、この
度の大赦、寂光淨土も及びなき、經讀み鳥の羽風に連
れ
雲六　虛空に花の法の庭、樂の詞もさながらに
十助　迦陵頻迦の諸天人、下界にありと疑はれ
しが　かをりゆかしき一焚きの、銘は伏屋ものぞかるゝ、
花の詠めも彌生の空。
早枝　今日のお供の嬉しさに、春とはいへど曉の、覺めて
粧ふ朝日紅。
かへ　鏡に向ひ嗜なみは、夜も白々と別れ霜。
もみ　殿御欲しさのわたしらには、別れといふは氣にかゝ
る。
玄蕃　イカサマ。外珍らしい女中達、寄るも觸るも男の噂。

縁結びやら三世相。互ひの合ひ性見るならば、身共は黒木の味好い生れ。
才蔵　それは都の八瀬大原、下郎は東の訛りぶし。ぶッこつねえ、色氣もねえ。御殿の女中はお庭の標し
轟坊　花の下なる設けの席へ。
桂之　皆も一緒に。
皆々　先づ、入らせられませう。
ト鳴り物になり、この人數、皆々舞臺へ來り、よろしく住ふ。
轟坊　憚りながら、柵どのへ何ひまする。大殿樣御逝去の後は、佐々木の御家督は、如何相成りしや。
しが　これは/\、御深切なるお尋ね。先殿定綱公御逝去の後、全く今に御跡目の、御評議もござりませぬ。
才蔵　ハテナ、佐々木のお家には、御惣領たる額五郎さまこれにござる桂之助さま、お二方ありながら、何ゆゑ御家督定まりませぬ。
玄蕃　其方どもは下樣、お上の樣子は知らぬ筈。家に二人主ある時は騷動の元、折角納まる佐々木のお家、世繼は差詰め額五郎さま。伴左衛門どのは後見の役。桂之助さまは、御次男の事ゆゑ、お附き人の山三もろとも、お座敷の片隅へ、すッ込んでござるが相應。
しが　憚りながら玄蕃さま、御料簡が相違いたしませう。
玄蕃　そりや又なぜに。
しが　ハテ、額五郎さまは御惣領なれどお妾腹。これにござる桂之助さまは、御次男なれども御本腹、外にお世繼なくばイザ知らず、かゝる御本腹ありながら、妾腹たる額五郎さま、お世繼とある時は、御後室のお嘆きは如何ばかり。さすればお家の騷動の基。おてまへ樣には、お家の亂れを、お願ひなさるゝか。
玄蕃　サア、それは。
しが　お役柄にも似合ひませぬ。ちとお嗜みなされませ。
玄蕃　ウム。
ト思ひ入れ。
雲六　柵どのゝお詞ではござれども
十助　佐々木のお家督定めには、無くて叶はぬ神妙劔。
雲六　例へ桂之助さまのお世繼ぎにも致せ
兩人　その一卷がござりますか。
玄蕃　神妙劔は白井兵左衛門、名古屋山左衛門預かりなりしが、お國許より下向の道にて、何者の爲にか殺害されその一卷を奪ひ取られたではござりませぬか。それでも

あなたの御代になりませうか。

しが　サア、それは。

玄蕃　なんの女の小差出た

敵役　すッ込んでお居やれ。

桂之　方々の心配さる事ながら、正統たる某なれど、次男に生れし事なれば、佐々木の家督思ひも寄らず、惣領たる額五郎どの、家を立つるはこれ順道。

才藏　お心弱いそのお詞。御本腹たるあなた様、御代に出ですば秘書の一巻

雲六　その預かりの兵左衛門、闇討ちにあひ剩さへ

十助　一巻取られし科に依つて

皆々　白井の家も遂に斷絶。

願哲　その御子息たる權八さま、此お寺へ日毎の參詣。

早枝　それにつけても名古屋山左衛門さま、同じその場でお果てなされしゆゑ

かへ　その御子息の山三さま、この程までは御遠慮あるべき筈なれど

もみ　桂之助さまのお附き人ゆゑ、假に御出仕御免との事。

しが　それと申すも當寺に於て、佐々木の系圖に御祈念あるが、古へよりの御吉例。その預かり主は名古屋山三どの。

才藏　イヤナニ、玄蕃さま。それに就いて、最前名古屋さまより伴左衛門さまへ何か急用の御状、拙者めに相屆けよとの仰せでござれど、未だ伴左衛門さま出仕なければ憚りながら御同役のあなた様より、お屆けなされては下さるまいか。

玄蕃　如何にも。伴左衛門どの出仕の上、身共が手渡し致さう。

才藏　有り難うござります。

ト手紙を玄蕃へ渡す。

轟坊　御前様へ申し上げます。最早祈念の時刻でござれば

しが　御拜禮あつて、然るべう存じまする。

玄蕃　其うちには、御兄君にも御參詣。

桂之　然らば直さま

轟坊　君の御座所へ

桂之　方々、案内。

皆々　先づ、入らせられませう。

ト唄になり、皆々山門の内へ入る。この時、櫻の木へ、鶯二羽囀り居る。三味線入りの鳴り物になり、花道より名古屋山三、上下、衣裳、大小にて、三方に願書

を持ち、出て來る。東の歩みより白井權八、振り袖の衣裳、袴、大小、花手桶を持ち、出て來り、兩人、舞臺の鶯に目を附け、思ひ入れ。篳篥の入りし鳴り物になり

山三　時は今、彌生の空。春告げ鳥の花に來て、その聲、雛に親鳥が

權八　教へ草なる春鶯囀、鳥類だにもあの如く、親の手塩に育つ身が

山三　我れには父母無き身無し鳥、早くも消えし蜻蛉の

權八　燃ゆる思ひは戀の意地、結ばれ解けぬ絲遊の

山三　かゝりもつるゝ、花の枝に

權八　春は來にけり、鶯の

山三　巣を離れても

權八　餌食の父母を

山三　慕へる思ひに

權八　人たる我れが

山三　結ぼふる胸も

權八　今や解けなん。

山三　ハテ、風情ある

兩人　眺めぢやなア。

ト思ひ入れあつて、二人とも舞臺へ來り、兩人顔見合せ

權八　ヤア、あなたは名古屋山三さま。

山三　これは權八。この程は打絶え、對面も致さぬが、益益御無事で、重疊々々。

權八　あなた樣にも御機嫌にて、喜ばしう存じまする。

山三　イヤナニ權八。親御兵左衛門どの、この程不慮の横死、殿より預かる神妙劍の紛失、その越度ゆゑおてまへまで、浪人の身の上なれど、先君の御恩を思ひ、御廟へ忍びの參詣よな。

權八　左やうでござります。私し親どもと申し、あなたの親御山左衛門さま、場所も變らず、果敢ない御最期。互ひに親の敵を討ちたく、私しは若輩の上、父母に離れ、かゝる鳥なき孤兒同然。フト致した事でこなたとは兄弟の義を結び、兄よ弟と申すれば、親どもの本意を達し、力となつて下さりませ。

山三　成る程、其方と兄弟の、契約は致したなれども、そりや私しの事、敵討は武士の表、隨分力となつてやりたい。が、して、その敵の手掛りは。

權八　サア、その手掛りは

山三　何者か相知れぬか。

權八　左樣でござります。

山三　ソレ、見やいなう。身共とてもその通り、親どもを討たれ、無念は同じ亡父の仇なれども、まだ知れぬ敵に身を粉に碎き、うか／＼尋ぬるは、なんと野暮な事ではないか。それよりは侍ひやめて、浮世を樂に、色と酒とに、樂しむ心は無いか。どうぢや／＼。

權八　左やうござれば、あなたには、敵を尋ぬる、思し召しはござらぬとナ。

山三　さればア。併しながら我れらの方には、敵の手掛り少しはござるて。

權八　して、その手掛りは。

山三　親山左衞門討たれし砌り、帶せし刀は來國俊、その時紛失いたしたれば、それを所持する者が親共の敵。雌雄と名けし二振りの刀、名古屋の家に傳はるゆゑ、身共が刀と燒刃鐵色、寸分違はぬ希代の業物。

權八　さほどの手掛りあるからは、私しの爲にも親の敵、あなたも共々

山三　二人一緒に尋ねたいが、爰に一つの難儀があるて。

權八　そりや何事でござります。

山三　何を隱さう。この節我れら眩暈の病ひ、今にも敵に出合ひなば、刀の光りを、見ると忽ち發る病ひ。それゆゑ當分、敵討は止めにした。

權八　そんならあなたは眩暈の

山三　病は身のほうけと、御奉公も勤まりかぬるゆゑ、伴左衞門まで暇の願ひ出し置きたれば、武士止めて町人暮らし。

權八　左やうなれば、いよ／＼あなたは親の敵を

山三　討たぬ證據は腰元の岩橋、此奴商人の女房には、見所ある奴、口說き落して身共が女房。

權八　そりや、今まで約せし兄弟の

山三　義理は猶更、武士道まで

權八　捨てゝ望むは腰元の

山三　岩木ならねば岩橋が

權八　色香に迷ふ御所存か。

山三　知れた事／＼。

權八　今まで賴もしき心底ゆゑ、兄弟の義を結びしに、思ひがけなきその邪曲。どうぞ心を取直し、武士道立つて親御の仇討。

山三　ハテ、長う云やんな。聞く耳持たぬ。それよりは當

寺の小座敷で、兄弟分のおてまへを、精進酒のさいつ押へつ。久し振りにて、どうぢや／＼。

權八　色と酒とに心を奪はれ、親御の事はどこへやら

山三　捨てゝ見せるも、手管の一つ。

權八　ヤア。

山三　ハテ、野暮を云はずに、サア、來やれ。

ト唄になり、權八が手を取り、奥へ入る。山門の内より玄蕃、願哲、窺ひながら出て來り、兩人顏見合せ

願哲　玄蕃さま

玄蕃　コレ。

ト思ひ入れ。合ひ方にて、兩人こなしあつて

願哲　兼ねてのお頼み今日の時。どさくさ紛れに、やりかけませうか。

玄蕃　イカサマ。山三が預かるところの系圖の一卷、今日祈念滿願なれば、所持いたして歸るは必定。屋敷へ行つてはむづかしい。あはよく寺に居るうちに

願哲　折を見合せ、ひん盗んで上げませう。

玄蕃　併し、系圖の箱は山三が封印、これはどうも。

玄蕃　ハテ、坊主の事は何にも存じませぬが、小盗みの事ならば、やつたものではござりませぬ。

玄蕃　頼もしい。その小盗みは、系圖の一卷捲上ぐれば、それを越度に山三めは梵天國へ。詰め跡目は顯五郎さま伴左衛門どのを初め我れ／＼が、家の政事を執り行ふならば、御坊もその形では置かぬ。喜べ／＼。

願哲　私しもその時は、大小ぼッ込み、立派な侍ひ。

玄蕃　ソレ、當座の手附け。

ト包み金を渡す。

願哲　こりやコレ、ずッしり

玄蕃　かねての約束。

願哲　忝ない。

玄蕃　必らずぬかるな。

願哲　ハツ。

ト奥へ入る。玄蕃殘り

玄蕃　伴左衛門どのと、事を計るは今この時。それにつけても山三が方より、伴左衛門どのへ送りし書面。火急とあるは心許ない。密かに開封して。さうおや／＼。

ト件の書状を出し、上封を取り、袂へ入れ、狀を見ようとする。この時、向う揚げ幕にて

三平　ア、コレ娘、危ないぞや。

トこの聲にて玄蕃、狀を懷中なし、奥へ入る。三味線

入り、大拍子になり、向うより岩橋、奥女中の拵らへにて、筒に入れたる花を持ち、草臥れたる思ひ入れ。後より八内、繻子奴の形にて、茶瓶を擔ぎ、三平、老けたる中間にて、日傘と傘を籠に入れ、これを擔ぎ、出で來り

岩橋　モシ〳〵、八内どの、初瀬のお寺へは、まだ餘程あるかいなア。

八内　岩橋どのとした事が、何を云はつしやる。爰が即ち初瀬寺でござります。

三平　こなたの足が遲いゆゑ、わしまでお供に遲れた。サア、歩きませう〳〵。

岩橋　それぢやというて、草履の鼻緒が足に觸つて、一足も歩かれぬわいなア。

八内　そりや大方鼻緒擦れ。あれへ行つたら私しが、よいやうにして上げませう。

岩橋　そんならあの御門前で

兩人　辛抱して、歩いたり〳〵。

ト三人舞臺に來り、岩橋床几にかゝり

岩橋　久し振りでの歩行路ゆゑ、思ひがけない鼻緒擦れ。こりやどうしたらよからうぞいなア。

三平　最前から、直してやりたうても途中の事。娘、痛む所は、どこぢや〳〵。

ト寄らうとする。岩橋見て

岩橋　勿體ない、父樣、どうしてお前に。

八内　ヤア、親仁どのゝ事を、父樣といふからは、そんなら岩橋どのは

三平　ハイ、わしが娘でござります。

八内　こなたの娘にしては、これがほんの、鳶が鷹を生んだとやら。

三平　これは不躾な事を。

八内　それぢやというて餘りの違ひ。

三平　そりやその筈、この岩橋は元來捨子の

岩橋　アモシ、父さん、人も問はぬに其やうな事を

三平　オッと、合點〳〵。

ト口を押へる。この時、才藏出て來り

才藏　荷物の親仁は、何を致して居るか知らぬ。

ト三平を見て

コレ〳〵、三平、女中衆が日傘をお待ち兼ね。早く來やれ〳〵。

三平　オッと、合點〳〵。

ト日傘を四五本持つて、傘三本残し、才蔵連れ立ち、
奥へ入る。

岩橋　ほんに、わたしとした事が、お供に遅れ、御前の御機嫌。
ト行かうとして、足の痛むこなし。
アイタヽヽ。こりやどうしたらよからうぞいの。

八内　草履の事なりや奴が商賣、よいやうにして上げませう程に、その代り、この短册を見て下さりまし。
ト懐中より短册を出して渡す。

岩橋　アモシ、こりやなんでござります。

八内　サア、その短册は、さるお方より頼まれました。どうぞお前の心に叶うたらば、返歌をしては下さるまいか。
ト岩橋悔り、よく〳〵見て

岩橋　ヤヽ、この短册は男の手跡。情を籠めし一首の歌。して此お方は。

八内　サア、その主は、コレ。
ト囁く。

岩橋　ヤヽ、そんならアノ山三さまが

八内　アコレ。なんにも云はずに返歌を一首。其うち我れらは草履の穿鑿。
ト草履を取り、鼻緒を直す。岩橋嬉しき思ひ入れにて紅筆にて裏へ返歌を認め居る。好き時分、奥より玄蕃出で来り、岩橋を見て

玄蕃　ヤア、いつの間にやら岩橋どの。
トこれにて岩橋、短册を隠し

岩橋　これは〳〵玄蕃さま、今日のお役目、御苦労に存じまする。

玄蕃　可愛らしいその口許にて、お優しい其お詞。身共もどうやら……イヤナニ、岩橋どの、さる仁に頼まれてござるが、この短册へ、返歌をしては下さるまいか。
ト短册を出す。岩橋見て

岩橋　この短册にも一首の歌。して、此お方は。

玄蕃　お名は云はれぬ。雲に稲妻。

岩橋　そんならこれが

玄蕃　どうぞ色よい御返事を

岩橋　不束な私しへ、お送り下さりましたこの短册、早速に御返歌は致したけれど、折悪う、アイタヽヽ。
ト足の痛き思ひ入れ。玄蕃、草履を取らんとするを、
八内、玄蕃を退け

八内　オッと待つたり。さうはなるまい。
玄蕃　ヤイ〳〵、下郎め、なんでならぬのだ。
八内　ハテ、知れた事。今あなた、なんと仰しやりました。武士たる者が、むさくるしい物持つものではないと仰しやりましたではござりませぬか。私しは下郎の事、あなた様にはお歴々のお侍ひ様。それになんでこの草履。
玄蕃　サ、それは……それ〳〵、この女中が供先で、難儀と見たゆゑ。
八内　あなた様にはお歴々。矢張り草履はこの下郎。
玄蕃　イヤ、身共が……その代り、今の返事を
ト寄るを、八内突き退け
八内　イヤ、私しへ。
玄蕃　イヤ、身共へ。
ト兩人、短册を差附ける。
岩橋　それ程に思うて下さんすは、女の果報と嬉しけれど、どちらへ御返事いたしても、いづれ一人に恨みを受け、戀の遺恨は災ひの種。それを思へば、御返事は
兩人　ならぬといふのか。
岩橋　これはつかりは
玄蕃　ならぬところを

八内
ト内々で短册を差しつける。
岩橋　アタしつこい。存じませぬわいなア。
ト兩人の短册を舞臺へ打ちつけ、片足の草履を脫ぎ捨て、唄になり、奥へ入る。跡にて兩人思はず抱き合ひ、顏見合せ
八内　ヤア、玄蕃さまか。
玄蕃　おきやアがれ。
八内　あの女めは逃げたさうな。
ト捨ぜりふ、いろ〳〵あつて、互ひに取違へ、短册を取つて
八内　岩橋どの、わしが頼みを、聞いて下さい〳〵。
玄蕃　イヤ〳〵。身共が頼みを
ト兩人爭ひ〳〵山門の内へ入る。夜神樂になり、下の藪疊より、願哲、封印附きし系圖の箱を携へ來て
願哲　祈禱所に飾りある佐々木家の系圖、引ッ浚つて來たが、早く手渡ししたいものだが。
ト奥の方へ礫を打つ。玄蕃出て來り
玄蕃　願哲、首尾は、どうぢや〳〵。
願哲　上首尾でござります。お頼みの系圖とやら、イザ、

お受取り下さりませう。

ト出す。玄蕃取つて

玄蕃　出かした〳〵。併し、山三が、封印附け置きたれば切り解いては事の破れ。ハテ、どうがな。

願哲　それは私しに仕樣がござります。小柄をお貸しなされませ。

ト玄蕃の小柄を取り。箱の底を切り離し、系圖を出し玄蕃に渡す。

玄蕃　奇妙々々。流石は願哲。出かした〳〵。

願哲　慥かにお渡し申しました。

玄蕃　一巻は受取つたが、跡の始末は

願哲　空殻は元の神前へ、私しが

玄蕃　そんなら萬事を

願哲　畏まりました。……イヤ、此まゝでは箱が輕い。なんぞ中へ重みに。

トあたりを見廻し、岩橋が脱ぎ捨てし草履を箱の中へ入れる。

斯うして置けば、誰れも氣の附く事ではござりませぬ。

玄蕃　ちつとも早く

願哲　心得ました。

ト箱を持つて元の所へ入る。玄蕃あとに殘る。この時風の音にて、日覆より鷹一羽舞ひ下がり、櫻の枝へ摑みつく。玄蕃キツと見て

玄蕃　ヤ、いづこよりかは、この外れ鷹。

ト思ひ入れ。早舞ひになり、向うより佐々木額五郎、摑み立ての前髪、若殿の拵らへ、鷹野の形にて鞭を持ち、鷹を追つて出る。後より近臣、二人、半弓を持ち六角左京、上下、衣裳、大小にて、附き添ひ出て來り直ぐ本舞臺へ來り、鷹を見上げ、皆々思ひ入れ。

臣一　不斷剛氣のお鷹なれども、お拳外れてあの枝へ

臣二　緒を搦めて、アレ〳〵〳〵。

玄蕃　恐れながら、額五郎さまへ申し上げます。只今名古屋山三出仕いたしますれば、彼れは日頃弓馬の自慢、彼れを呼び出し。弓を以て、緒を射切らせては如何でござりませう。

額五　それこそ幸ひ。山三めをこれへ呼び寄せい、

玄蕃　もし射損じなば、赤恥かゝせ

左京　何は兎もあれ、若殿の御入來。舊臣たる山三元春。

トこの時、奥より

山三　お召しなくとも、それへ參つて、お目通り致しませ

う。

ト合ひ方になり、奥より山三出で來る。

左京　これは〳〵、名古屋氏。

皆々　今日の御出仕、御苦勞に存じまする。

ト山三、額五郎を見て

山三　ヤヽ、若殿には父君の、御廟參と思ひの外、見るもいぶせき御遊獵、老臣方もお側にあつて、何ゆゑお諫めなされぬぞ。

左京　及ばずながら六角左京、御後室の御意を受け、お跡を慕ひお諫め申せど、お用ひ無きは、常の御氣質。

額五　ヤア、役にも立たぬその諫言、大小立派な武士なればば

玄蕃　山三どの、貴殿には御祕藏のお鷹が、外れたに氣が附かぬか。

額五　かゝる高木に摑みし事なれば

臣一　猿猴たりとも梢を傳ふに自由ならず。

左京　此まゝ置かば鷹の落命。さある時にはお家の恥辱。

臣二　日頃自慢の元春どの

皆々　射術の程が、見たい〳〵。

山三　こは思ひも寄らぬ御仰せ。この程拙者は眩暈の病あり、劍は元より、射術などとは思ひも依らず。

玄蕃　見下げ果てたるその一言。

臣一　片時も早く、あのお拳。

額五　オヽ、射切る射術を、早く〳〵。

玄蕃　差詰め執權六角どの

臣二　急いで弓術。

左京　然らば拙者が、及ばぬまでも。

ト半弓を取ると、トヒョになり、鷹は日覆へ飛び行く

玄蕃　ヤヽ、御祕藏のあの一物、雲井遥かに飛び去りしか

臣一　跡追ッかけて、あの鷹を。

ト立ちかゝる。この時、揚げ幕にて

伴左　アイヤ、お拳はこれにて止め、伴左衞門重勝、それへ持參いたすでござらう。

ト誂らへの鳴り物になり、向うより不破伴左衞門、上下、衣裳、大小、鉢かつら、袱紗の上へ件の鷹を据ゑ出で來る。

左京　不破伴左衞門重勝どの

皆々　只今出仕召されたか。

伴左　凡そ人、生れてより一生を經るに、五蘊六氣離れずと。これを以て窺ふ事、軍法の第一とす。ましてや領主

の御嫡子、この所に御座ある事、天文にて察せしゆゑ、お出迎ひと存ぜし折柄、翼を伸し行く君の御祕藏。鷹は好く人の氣に應ずる奇物、心を以て拳へ返し、君へ捧げ奉る。恐れながら御賢慮の程、よしなに願ひ奉る。

額五　家の面目、他家への聞え。伴左衞門近う。

皆々　君のお召し、急いで御前へ。

伴左　然らば御免下さりませう。

ト本舞臺へ來り、鷹を近臣二へ渡し、好き所へ住ふ。

山三　これは〳〵、重勝どのには、今日の御參詣、御苦勞に存じまする。

玄蕃　それにつきまして、名古屋山三より、おてまへに屆けてくれよと遣はしましたるこの書面。イザ、お受取り下さりませう。

ト以前の狀を出し、見せる。山三思ひ入れあつて

山三　重勝どの、何卒御披見の上、よしなに御推擧、願ひ奉りまする。

伴左　何か樣子は存ぜねど、とくと一覽の上。拙者が方へ參りしこの狀、こりや、封印が切れてござるぞ。

玄蕃　その儀は最前、おてまへの御出仕遲刻ゆゑ、火急の事もあらんかと、相役の拙者ゆゑ、開封いたしてござるが、何は兎もあれ、披見召されい。

ト伴左衞門件の狀を開き

伴左　ナニ〳〵……「私し事お家の厚恩有り難く存じ居り候ふところ、この程眩暈の病に冒され、武家の奉公成り難く、これに依つて貴殿方より、お上へ言上の上、長のお暇下し置かれ候ふやう、御推擧の程願ひ上げ候ふ。不破伴左衞門どのへ、名古屋山三。」

臣一　すりや、山三どのには眩暈の

臣二　病とやらにて、暇の願ひか。

左京　これにて思ひ當りしは、父の最期の嘆きもなく、淫酒に耽り身の放埒。草葉の蔭の山左衞門、最期の後まで武名の恥辱。

伴左　今まで祿を賜はりし、殿のお眼識違ひしと、世の嘲りは主人へ不忠。さすれば山三は祿盜人。

山三　控へ召されい、重勝どの。拙者の病は假かの事。今まで盡せし忠義は云はず。何ゆゑ山三は祿盜人。

伴左　そりや申さずとも、おてまへも、承知でござらう。武士は、帶刀いたす役ではござらぬか。治國にも亂を忘れぬ魂ひ、すは叛逆の者あらば、劍を揮つて敵を防ぐが臣の役ではござらぬか。それになんぞや、眩暈の病とあ

れば腰拔け同然。祿盜人と申したが、この伴左衞門が誤まりか。

山三　サア、それは。

伴左　但し、無念に思はるゝなら、この場に於て、眞劍の立合ひなすか。

山三　サア、それは。

皆々　祿盜人か。

山三　サア、それは。

皆々　サア／＼／＼。

伴左　返答いたせ、山三元春。ドヽどうだ。

トきつと云ふ。この時、權八後より、ツカ／＼と出て

權八　憚りながら、伴左衞門さま、暫らくお待ち下さりませう。

伴左　誰れかと思へば、白井權八。待てと申すその仔細は

權八　お止め申しましたは、山三がお詫び、致さうと存じまして。

伴左　そりや何ゆゑに。

權八　ハテ、元春儀は眩暈の病、それを捕へて立合へとは勝つ事御存じにてのお望みか。どうやら卑怯のやうに存じまする。

玄蕃　ヤイ／＼、默り居らう。我れ／＼を捕へ、卑怯者とは、慮外な奴めが。殊に、殿の御不興を受けながら、お召しも無きうち、なんで、これへ出仕いたした。

權八　サア、その儀は。

額五　身の程知らぬ大たわけめ。さほど身分を顧みるなら山三の名代、其方、立合へ。

權八　どう致しまして、私し風情が

玄蕃　ハテ、其やうに卑下さつしやるな。

伴左　この場に於て武術の立合ひ。其方が打勝ちなば、山三が科を免してくれう。

權八　すりや、私しめがこの場に於て

伴左　まぐれ當りに勝つたなら、詫びの一埒、免してやらう。

權八　有り難う存じまする。

伴左　其方の相手には、石塚玄蕃。彼れと立合ひ遣はされい。

玄蕃　權八が相手に、アノ拙者が。

伴左　若輩の事なれど、蟲押への灸代り、打つて／＼、打ちのめし召されい。

玄蕃　心得ました。

左京　御近習、竹刀。
臣二　ハア。
ト繪馬に打ちたる竹刀をよき所へ直す。
伴左　兩人、支度。
權八　ハア。
ト白囃子になり、兩人、竹刀の側へ來て、式禮あつてヤツと立ち上がり、よろしくあつて、トゞ玄蕃を打ち据ゑる。伴左衛門、後より玄蕃が落せし竹刀にてかゝる。權八よろしく立廻りあつて、兩人キツととまる。誂らへの鳴り物になり、トゞ竹刀にて伴左衛門を當てる。權八直ぐに打つてかゝるを、山三ツカツカと寄つて、權八を制し、下に置く。伴左衛門、心附き、刀を拔いて、山三の目先へ突き附ける。これにて山三、扇を額へ當て、タヂ〳〵となる。皆々、この體を見て
皆々　名古屋山三が、この體は。
伴左　御覽の如く眩暈の、病といへど、何とやら。
ト白刃を納める。
額五　心得難き彼れが胸中。
玄蕃　もしや作病構へし上
左京　當家退去は、祿の不足か。
山三　イヤ、全く以て。
伴左　さなくば、病は
玄蕃　療治を加へ、勤仕いたすか。
伴左　離散いたすか。
額五　善惡ともに、仔細もあらば
玄蕃　權八もろとも
權山　然らば御前へ
額五　方々、案内。
皆々　先づ、入らせられませう。
ト唄になり、額五郎先に、皆々附き添ひ、入る。伴左衛門、玄蕃殘り
玄蕃　伴左衛門どの、
伴左　コレ。
ト音樂になり、兩人思ひ入れ。
石塚玄蕃、忰の一儀、如何いたした。
玄蕃　仰せの如く、兼ねて一味の所化願哲、まんまと首尾よく系圖の一卷。イザ、お受取り下さりませう。
ト出す。この時、侍ひ一人窺ひより
侍ひ　その一卷。
ト玄蕃が持ちし一卷を引ツ浚ひ、行きにかゝる。この

時揚げ幕にて

助太　エイ。

ト手裏劔飛び來て、侍ひの胸へ立つ。侍ひ苦しみ、撞となる。兩人見て

兩人　これは。

助太　お騷ぎあるな重勝どの。本庄助太夫、それへ參つて面談いたさう。

ト跳らへの鳴り物になり、本庄助太夫、上下、衣裳、大小にて出て來る。此うち、玄蕃、伴の一卷を伴左衞門へ渡す。

伴左　助太夫どの、只今出仕召されたか。

助太　あれにて樣子を見請けますれば、折角手に入る系圖の一卷、持つて逃げ出す曲者ゆゑ、見るに忍びず拙者が手の內。

玄蕃　天晴れなお手際。

助太　何は格別、申し談ずる樣子もあれば

伴左　先づ〳〵。

ト舞臺へ來る。

助太　然らば御免下さりませう。

玄蕃　助太夫どの。お喜び下されい。山三が預かるところ系圖、手に入りましてござります。

助太　天晴れお手柄。一卷さへござれば、妾腹の額五郎どのを世に出しなば、我れ〳〵が大望成就。

伴左　支へ立てする白井兵左衞門を初め、名古屋山左衞門人知れず失ひ、悴山三は退去の願ひ。

助太　併し、白井兵左衞門に二人の悴。兄の彌市は無賴ゆゑ、出國いたす筈なれども、弟權八は忠義を思ふ小積者

伴左　その心配は無用〳〵。おてまへと權八は、叔父甥の事なれば、手段を以て身方に引入れ、異議に及ばず、コレ。

ト囁く。

助太　承知いたしした。

伴左　あらまし手筈調へども、助太夫どのゝ御子息助市どの、神妙劔の一卷を奪ひ、その座より行くへ知れず。

助太　ハテ、その儀はお氣遣ひ召さるな。勘當なれども、親子の儀なれば、情を以て誘き寄せ、その一卷は此方へ。

伴左　それにつけても、我が願ひ、どうぞ首尾よく、此方へ。

助太　伴左衞門どの、おてまへの願ひと申すは。

伴左　仔細を申すも恥かしながら、某かねて腰元岩橋に

殊の外なる執心。玄蕃どの、お身に頼んだ短冊の返事は如何いたした。

玄蕃　サア、お聞き下されい、今日送りし短冊、また、山三が家來八內も、同じく艶書の短冊、女は一人、口說き手は二人、何れへ返歌もなりがたしと、其まゝに突き戻され、面目次第もござりませぬ。

ト短冊を出す。伴左衞門取つて

伴左　ヤ、こりや某が短冊ならず。模樣は雨に濡れ燕……裏に紅筆にて一首の返歌。……「君ならば幾枝も手折れ櫻花、野山の嵐いとふ身なれば」……すりや、この一首は、山三へ返歌であつたよなア。……ムウ。

玄蕃　それといふのも、あの八內めが、交ぜッ返したゆゑの事。

助太　その八內は鹿藏と申して、身が家來なりしが、我れ我れが企ても氣取つた樣子、それゆゑ暇を遣はしてござるが、山三が方に仕へ居れは、迂濶に心は許され申さぬ

伴左　山三もしれ者。最前の鬪ひといひ

玄蕃　常に變りし詞の端々

助太　油斷ならざる彼れら主從。

伴左　遺恨重なる山三元春。おのれ其まゝ

ト短冊を見て、思ひ入れ。

兩人　ヤア。

ト伴左衞門、氣を變へ

伴左　助太夫どの、後刻お目にかゝりませう。

ト唄になり、伴左衞門先に玄蕃奥へ入る。助太夫殘りこなし。

助太　今を盛りの不破名古屋。ハテ、立派な武士ぢやなア

トばた／＼にて、權八、願哲を引立て、後に才藏附き添ひ出る。

願哲　御免なされませ／＼。

助太　ヤア、權八。如何いたした。

權八　若輩者と侮つて、我れをさみする法外者め。

才藏　その坊主は、系圖に心をかける樣子。必らず油斷なされまするな。

權八　さてこそ汝は

願哲　こいつは堪らぬ、

ト振り切り、一散に向うへ入る。

兩人　あの曲者を、ちつとも早く

才藏　心得ました。

ト寺鐘の送り、才藏あと追ッかけ、入る。

権八　ハテ、油断ならざる彼れが振舞ひ。
助太　高の知れたる下司坊主、矢張り其まゝ、其まゝ。
権八　これは〳〵叔父者人には、未だこれにおいでゝござりまするか。
助太　只今聞けば、其方が御前にての立合ひ、諸家中の噂。某は元より、草葉の蔭の父御も、さぞ喜ぶであらう。
権八　有り難い其お詞。親兄弟も無き身の上、この上ながら叔父者人。
助太　なにサ、頼む頼まぬとは、こりや他人の事、其方とは叔父甥の仲なれば、何に依らず、身共が云ふ事、背きはせまいな。
権八　これは〳〵、改まつたる其お詞。親亡き後は叔父が親、何しに違背ござりませう。
助太　それ聞いて先づは安堵。然らば何事に依らず、身共が詞を背かぬといふ、誓紙が見たい。
権八　ヤ、なんと仰しやる。
助太　親亡き後は叔父が親、違背いたさぬ金打いたせ。
権八　何が存じませぬが、金打と申しては
助太　成らぬと申すか。
権八　イヤ、全く

助太　然らば早く。
権八　ハツ。
ト金打する。合ひ方になる。助太夫見て
助太　天晴れ金打。慥かに見届けた。
権八　して、あなたの御所存は。
助太　荷擔いたせ。
権八　ナニ、荷擔とは。
助太　何も其やうに驚ろく事はない。大殿御逝去の後は、佐々木の家督未だ定まらず。然るに家中二つに分れ、御本腹たる桂之助どのを家督になさば、我れ〳〵が心に任せず。それゆゑに今宵、茶の湯に事寄せ毒殺なし、妾腹たる額五郎どのを世に出だし、家の政事を執り行ひ、あはよくば額五郎どのもおッ殺し、佐々木の家を押領なさば、其方とても立身出世。なんと、荷擔いたす所存は無いか。
権八　すりや、あなたには家國を
助太　イヽサ、身共に荷擔いたしなば、事に依つたら神妙剣も
権八　ナニ、神妙剣とは。
助太　イヤサ、眞實荷擔いたしなば、其方が心に叶へてく

れう。
權八　すりや、アノ神妙劍も
助太　得心か。
權八　武士の金打。違背はござりませぬ。
助太　それで身共も安堵いたした。實にや唐土にては、義を結びし花の桃園。
權八　それは兄弟
助太　これは叔父甥
權八　義に隔てなき
助太　武士の一言。
權八　叔父者人。
助太　權八。ドリヤ、歸宅いたさうか。
ト唄になり、助太夫向うへ入る。權八殘つて、思ひ入れあつて
權八　思ひがけなき叔父者人のお詞。血筋の緣に搦まれて是非なく荷擔は致したれど、此まゝにては山三どのに義理立たず。……それは格別、今宵のうちに、お命危ふき桂之助さま。いつそこの事申し上げうか。……。イヤ〳〵他言せまじき武士の金打。と云うて申し上げねば御主人へ不忠。口外すれば不孝の罪。忠孝二つの路に迷ひし、權八が身の一生懸命。ハテ、心にかゝる事ぢやなア。
ト思案の思ひ入れ。合ひ方になり、奧より山三出で來り
山三　これは權八。いつの間にやら。見れば何か思案の體どうしやつた〳〵。
權八　サア、私しも親どもの事思ひ出し、それゆゑ思はず心の愁傷。
山三　イヤモウ、孝心のおてまへなれば、さこそ〳〵。さりながら、保元の亂れに、勅命とは申しながら、親子の心二つに分れ、親を討つたる源の義朝。武士の義理は、捨てがたいものではないか。
權八　ヤ、なんと仰しやります。
山三　忠義ゆゑには現在の
權八　親を討つたる、源の義朝。
ト思ひ入れ。
ト泣き落す。
ハテ、武士の身の上は、つれないものでござります。
山三　おてまへは、なぜ其やうに
ト權八心附き
權八　サア、親を討つたる義朝は、私しの心には、不孝の

やうに存じまするが、忠孝二つの其うちで、何方が重う
ござります。
山三　これは又むづかしい事を申す。忠孝二つは人情の常。
何れの道も重けれど、武士は猶更、忠こそ大切。
権八　ムウ。承知いたした。
ト行きにかゝる。山三とめて
山三　血相變へて、コリヤどこへ。
権八　忠の一字が重うござれば。
山三　義心に依つて
権八　これより直ぐに。
ト花道へかゝり、思ひ入れ。
おさらば。
ト時の鐘の送りにて、権八向うへ走り入る。山三あと
見送り
山三　仔細も云はずに、あの形相。ハテ、心がゝりな。
よび　殿の御歸館。
ト呼ぶ。音樂になり、山門の内より額五郎先に、桂之
助、伴左衞門、櫻、早枝、楓、紅葉、岩橋、玄蕃、左
京、雲六、十助、その他附き添ひ出る。玄蕃、三方に
系圖の箱を載せ、舞臺の眞中へ直し

玄蕃　名古屋山三どの。預かりの佐々木家の系圖。御世代
りには一七日の祈禱いたす御吉例。即ち今日滿願なれば
これへ持參いたしました。
桂之　封印はその係りたる名古屋山三。
額五　検分いたすは伴左衞門。とくと改め、館へ持參。
伴左　ハッ、畏まりました。
ト箱の蓋を明けて見て、ギヨツと思ひ入れ。また蓋を
して
山三どの。系圖の一巻、おてまへの預かりゆゑ、御内見
下されい。
山三　畏まりました。
ト何心なく、箱の蓋を明ける。中より最前の草履出る。
悧り思ひ入れ。
ヤヽ、お家の系圖と思ひの外、中には片足のこの草履。
皆々　ヤヽ、なんと。
玄蕃　その草履は見覺えある、岩橋どのゝ草履の片足。
岩橋　ヤヽ、最前思はず脱ぎ捨てしに、どうした事でこの
箱へ。
山三　封印切れざるこの器。ハテナア。
左京　系圖の一巻無き時は

皆々　お家に係はる一大事。

額五　伴左衞門、詮議いたせ。

伴左　ハッ。……腰元岩橋。山三どの。ちよつと御意得ませう。

山岩　ハッ。

ト思ひ入れ。

伴左　山三。岩橋。罪に服して繩にかゝれ。

山岩　何ゆゑあつて我れ〳〵を

位左　知るまいと思ふか。先君御逝去の後、御家督未だ定まらず、某お附きたる額五郎さま、御惣領たるに依つて、お世繼となる時は、おのれが儘にならざるゆゑ、それを妨げんと系圖の一卷押隱し、おてまへが附き人たる、桂之助さまを世に出だし、國家の政事心の儘に執り行ふ、汝等二人が計らひであらうがな。

山三　ハ、、、、。其方が心に引き比べ、跡方もなきその一言。

岩橋　女のわたしと心を合せ、事を計ると仰しやるのか、

山三　例へ野心があるにもせよ。女如きを便りにせんや。たわけた事を。……但し、これには證據ばしあつてか。

伴左　證據無き事申さうか。

岩山　して、その證據は。

伴左　この短册、覺えがあるか。

ト以前の短册を見せる。兩人恟り。

山岩　ヤ、、その短册は。

伴左　雨に燕のこの模樣、送りし戀歌のその一首。……「憂しとても、更に思ひは返されぬ、戀はうらなきものにぞありける」……こりやコレ正に山三が手跡。

山岩　サ、それは。

伴左　裏に返歌は紅筆にて、……「君ならば、幾枝も手折れ櫻花、野山の嵐いとふ身なれば」……この返歌は岩橋。其方が手跡であらう。

岩橋　サ、それは。

伴左　二人が心を一緒にして、系圖を盜み、その跡へ、重みに入れたこの草履。まつた二人は不義の大罪。

山岩　サ、それは。

伴左　云ひ譯あるか。

山岩　サア

伴左　サア

三人　サア〳〵〳〵。

伴左　云ひ譯無くば、この場に於て。

ト件の草履を以て、山三に打つてかゝる。この時、後に八内窺ひ出て、伴左衛門の持ちし草履を引取り、伴左衛門をしたゝかに打つ。伴左衛門その手を取り、兩人キツと思ひ入れ。音樂になる。

伴左　待て下郎。何ゆゑあつてこの打擲。

八内　打つたがどうした。イヤサ、叩いたがどうした。事に依つたら命も取るワ。

伴左　何がなんと。

八内　最前より聞いて居れば、岩橋どのとお旦那が、心を合せ、系圖とやら、盜み隱したと云はつしやるが、おのれが科をおのれが現はさうと、草履をこの箱へ入れて置くたわけがあらうか。殊に又、コレ、見やれ。

ト鼻緒に卷きし反故を取つて

鼻緒に卷いたるこの反故は、お旦那からおてまへへ參つた御狀、不破伴左衛門どのへ名古屋山三。其方で讀むは其方の反故、さすれば系圖の盜賊は、問ふに及ばぬ伴左衛門。キリ〳〵一卷、出さつしやい。

伴左　ヤア、どうしてそれが

玄蕃　そんなら最前の

八内　覺えがあるか。

伴左　サア、それは。

八内　なんと、好い極め所であらうがな。

伴左　イヽヤ、系圖の一埒は差措き、二人は不義の科人だワ。

八内　イヽヤ、お二人は不義者ではござらぬ。

伴左　なんと。

八内　この不義義は外にある。おてまへ、この品覺えがござるか。

ト最前の短册を出す。伴左衛門見て

伴左　ヤア、この短册は

八内　むら立つ雲に稻妻は、それと云はねど重勝さま、岩橋どのへ送りし戀歌。なんと違ひはござるまいが。

伴左　サ、それは。

八内　云ひ譯ござるか。ナ、なんと。

伴左　慮外な下郎め。

ト八内へ切りかける。兩人立廻つて、キツと留まる。

桂之　方々、控へい。

伴左　でも。

桂之　ハテ、成敗は追つての事。

しが　爰は靈場、法の庭。生けるを放す法會の日に、血を

あやなすは御廟へ恐れ。殊に御前の御意でござる。
伴左　ハテ、命冥加な。
八内　行き屆いたる御仁政。この上も無きこの御上意。
山三　有り難う存じまする。
伴左　して、この上の御賢慮は。
額五　今日の法事を幸ひに、助命とあらば六角左京、其方よきに計らへ。
左京　畏まりました。……腰元岩橋。不破、名古屋の兩人。
三人　ハッ。
左京　其方ども二ケ條の申し譯立ち難く、既に御法の通り行ふべきところ、格別の思し召しを以て、助命申し附け長のお暇下さる間、有り難くお受け致せ。
伴左　ヤ、、岩橋山三は兎も角も、何ゆゑ拙者に長のお暇。
左京　何かはその身に覺えあらん。そこらあたりに一味合體。やゝともすれば、お家を窺ふ……イヤサ、お家御法度は不義密通。艶書の短册露顯の上は、三人共に科は同罪。
伴左　すりや、いよ／＼拙者めも……ハア　思ひがけない。
岩橋　これといふのも、皆私しがいたづらから、この身の科はいとはねど

八内　何卒主人山三が身の上、今一應お上のお慈悲で
山三　斯くなる事は知らねども、この程某多病の願ひ
岩橋　御病氣ゆゑのお暇ならば、また御歸參も叶ひませうが、不義ゆゑ今のお身の上。只悲しいはわたしゆゑに
ト　この時、下の方へ三平出で
三平　最前より何かの樣子承りましたが、折角御奉公に差上げました娘が、長のお暇となりましたか。
岩橋　義理ある父樣ゆゑ、わたしや大事と思うたれど、斯うなつたら是非がない。堪忍して下さんせ。
三平　お主が出世を待つて居たに、ひよんな事してくれたなア。鳶が子は鷹にならずぢやなア。
玄蕃　今更未練なその吠え面。
雲六　暇が出たれば二人の帶刀。
左京　何處へ退去いたすとも、腰が明いては見苦しい。二腰は身共が寸志、御法でござれば肩衣を
十助　心得ました。
ト　兩人の肩衣を取る。
腰元　お二人樣の、この體は。
岩橋　昨日に變る此お姿。
八内　例へ浪人なされても、下郎はあなたと御一緒に。

山三　尤もなる願ひなれど、今日一日は殿の御供、役目終らば勝手次第。
八内　左様ござらば、お供いたして
伴左　浪人するも自業自得。人を呪はゞ穴とやら。これから互ひに天竺浪人。
左京　やがて歸參は、お家の系圖、紛失なしたる神妙劍、持參の方が御家督定め。
伴左　すりや、拙者が尋ね出だしなば
額五　世繼ぎはさしづめ額五郎。
岩橋　元春さまのお手に入りなば
桂之　弟ながらも家督は某。
八内　疎かならぬお家の納まり。
山三　身を粉に碎き、寶の詮議を
桂額　キッと申し渡したぞよ。
山伴　委細承知仕つてござります。
ト　この時、雷薄く鳴る。
轟坊　恐れながら御兩君へ申し上げます。雷氣催ふしましてござりますれば、御歸館あつて然るべう存じます。
額五　最早黄昏。
桂之　住職には大儀。

山伴　左様ござらば、御機嫌よろしう。
玄蕃　殿のお立ち。
皆々　ハッ。
ト　時の鐘。行列三重になり、皆々附き添ひ、向うへ入る。八内少し引下がり、山三と額見合せて思ひ入れあつて入る。あと三人殘る。
岩橋　殿様のお暇の出た私し、爰に長居は御廟へ恐れ。
山三　岩橋どのには早くこの場を
岩橋　何かの事は、後に緩りと。
ト　行きかゝる。
伴左　岩橋、待たつしやい。
岩橋　御用でござりまするか。
伴左　イヤ、用ではないが
岩橋　そんなら私しは
伴左　エヽ、未練な奴だが、こなたにちつと、恨みを云はねばならぬ。
山三　重勝どのとした事が、女子供かなんぞのやうに
岩橋　お恨みなさるは、そりや何事。
伴左　その身に覺えはござらうが、送りしばかりで返事もなく、その短册の一埒で、斯く成り果てし伴左衞門。俗

に申せばうまらぬ身の上。斯くなるからは破れかぶれ、是非とも色よい返事をば

岩橋　御尤もではござりますれど、御奉公の内なれば、不義はお家の堅い御法度、

伴左　そんならなんで掟を破り、山三へ返歌の短冊は。

岩橋　サア、それは。

山三　掟破りし科により、お暇出たれば互ひに五分々々。

伴左　おてまへの身の上は、眩暈の病ゆゑ、暇の出たは折に幸ひ。

山三　その眩暈も誠は僞はり。

伴左　ヤ、そんなら貴殿は作病か。

山三　父山左衛門横死の後、暇を願ひ身輕になり、何卒父の敵討……サ、堅き邸の奉公より、流れ次第に浮世の樂しみ。

岩橋　暮らす心はお二人さん。

伴左　同じ罪たる天竺浪人。

山三　主持たぬ身の氣散じは

岩橋　法度を破る氣遣ひなければ

山三　刀にかけて

伴左　身共が女房。

山三　イヤ拙者が。

伴左　イヤ某が。

兩人　なにを。

ト思ひ入れ。岩橋中へ入り

岩橋　モシ、待つて下さんせ。互ひに挑む刀の意氣地、直さま斯うと云はれぬは、この身は一人、男は二人、

山三　何れが何れと分け難ければ

岩橋　心の定まる其お方に、八千代をかけて、ナ、わたしの夫。

ト山三に呑み込ます。

山三　成る程、この場の論を鎭めんと、尤もなるその一言。

伴左　その古への津の國の

山三　女夫ヶ池に准らへて

兩人　ハテ、何をがな。

ト思ひ入れ。誂らへの合ひ方になり、兩人櫻の枝を切り、岩橋が前へ持ち來り

山三　二人が心底

伴左　まツこの通り。

山三　何れを手活けの

伴左　花と詠めん。

岩橋　同じ櫻の枝ながら、わたしが望みはこの櫻。
ト山三の枝を取り、花筒へ挿す。伴左衞門思ひ入れあつて
伴左　そんなら身共が
岩橋　花に嵐は、まッこの通り。
ト伴左衞門の花を打ちつける。伴左衞門拔きかける。山三この中へ入り、伴の枝を取り、伴左衞門の目先へ突きつけ
山三　落花再び枝に歸らず。思ひ諦らめ重勝どの、とくとくこの場を、退散召されい。
伴左　うぬ。
ト寄らうとする。山三よろしく留める。
岩橋　水際清く、キッとして、切れ口直ぐにこの櫻。
伴左　ヤ。
岩橋　それに引替へ、お前の枝は、斜に切れしは心のひがみ。どうしてわたしが活けられませう。
ト伴左衞門の櫻を捨てる。
伴左　見るに目の毒、觸るに煩惱。嫌がられる程一しほ執心。
山三　イヽヤ、今日より手活けの花と
伴左　詠める心か。
山岩　今宵はしつぽり。
ト兩人思ひ入れ。伴左衞門見て
伴左　ハテ、羨やましい。
ト思ひ入れ。薄き雷になる。三人空を見て
岩橋　アレ、春雨が
ト有り合ふ傘を取つて、眞中に開く。
兩人　我れらも爰に。
ト兩方より傘を取り、差出すと、名古屋の紋になる。
岩橋　この春雨は結ぶの縁。わたしがさした傘と、合はして丁度三本傘。
伴左　そんなら、どうでも。
ト正面の黑幕落すと、稻妻の仕掛け、雷落ちる。岩橋「アレ」と山三に取りつく。これにて傘の兩人隱ろる伴左衞門見て無念のこなし。傘振り上げ、思ひ入れあつて、傘を投げる。木の頭。双方よろしく、キザミ、ひやうし
時の鐘、雨車のツナギ、直ぐに引返す。

幕

本舞臺、三間の間、九尺の亭座鋪。前側へ障子立て切り、上下は柴垣、石燈籠。いつもの所に枝折り戸。すべて助太夫住家の體。雨車、時の鐘。雷の音にて幕明く。

ト下座より中間一人、赤合羽、笠を着て、箱提灯、蛇の目の傘を持つて、出で來り

中間　なんだか剛氣に降つて來たわえ。この雷の鳴るのに、御新造樣はどこへござつた。お迎ひに行かずばなるまい。

ト捨ぜりふにて向うへ入る。合ひ方になり、向うより八内、木綿やつし、赤合羽、中間の形、箱提灯にて、出て來り

八内　昨日に變る旦那の身の上。それにつけてもおいらまで、もツそう飯の喰上がり。まだも頼みは助太夫さま、お上へ願ひ、旦那のお詫び。さうだ〳〵。

ト門口へ來る。この時、障子の内にて

權八　すりや、どうあつても。

助太　小積な事を。

權八　ハテ、是非に及ばぬ。

ト物音して、障子へ血煙りかゝる。八内驚ろき

八内　何やら險しきあの物音。

ト思ひ入れ。物凄き合ひ方になり、障子の中より白井權八、振り袖の着流し、白刃を提げて出る。八内、提灯を袖に隱し、窺ひ寄つて目先へ突き出す。權八、提灯を打ち落す。兩人キツと見得。鳴り物變り、立廻りよろしくあつて、兩人キツと見得。時の鐘にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、一面の黒塀、見越しの松、裏手のかゝり。右鳴り物にてこの道具とまる。

ト向うより、バタ〳〵になり、願哲、才藏、以前の形にて、立廻りながら、出で來り

願哲　こりやア野郎め。どうするのだ。

才藏　どうといつたら最前の、系圖の箱を此方へ渡せ。

願哲　系圖とやら黒鯛とやら、そんな物は知らねえわえ。

才藏　知らぬといつて、其まゝに置かうか。

願哲　何を小積な。

ト雷の音になり、兩人摑み合ひながら、下座へ入る。向うより彥左衞門、赤合羽、中間笠にて、箱提灯、六尺棒を持ち、安下駄を穿き、出で來り

彥左　火の廻り、火の廻り。……桑原々々。氣味の惡い晩だわえ。雨が降つても、雷でもこの夜廻り、孫子の代まで此やうな、下司奉公はさせるものではねえわえ。……火の廻り〳〵。

ト舞臺へ來る。揚げ幕より以前の中間、消えたる提灯を持ち出で來り

中間　オヽ、火の廻りの衆。待つて下さい〳〵。

彥左　なんだ〳〵。

中間　提灯の火を消した。火を貸さッし。

彥左　サア、つけさつしやい。

ト中間火を借りながら

中間　なんと恐ろしい雷ではねえか。

彥左　それサ。初瀨寺の方が剛氣に光る。

ト此うち、雷烈しく鳴る。

中間　そりやこそ鳴るワ。桑原々々。

ト件の傘を、花道よき所へ捨てゝ走り入る。

彥左　アヽ、桑原々々。

ト氣味惡きこなし。この時、バッタリ音して、誂らへの鳴り物になり、黑塀を切り破り、權八、以前の形にて、白刃を持ち出る。彥左衞門、おづ〳〵棒にて打つてかゝる。權八キッと見て、刀の血を拭けといふこなし。彥左衞門、ブル〳〵しながら、手拭にて拭く。權八、彥左衞門が穿いて居る下駄を寄越せといふ思ひ入れ。彥左衞門、下駄を脫いで渡す。權八、彥左衞門に提灯を持つて、先へ行けといふ仕方する。彥左衞門提灯持ち、先に立つて行く。花道へかゝる。

權八　正しく所持と思ひの外、ハテナア。

ト思ひ入れ。これにて又雨車になる。權八、中間が置いて行きし傘を見つけ、彥左衞門に取れといふこなし。彥左衞門おづ〳〵取つて渡す。權八取つて開く。木の頭。傘をかたげ、空を見上げる、キザミよろしく、拍子

幕

幕の外、誂らへの鳴り物になり、彥左衞門に提灯を持たせ、入る。あとシャギリ。

二幕目　大師河原の場

役名――雪駄直し、彌市。三浦屋小紫。三浦屋女

房、お高。新造、花山。幇間、左吉。判人、善六。錦繪屋、喜助。飴屋、清八。見世物師、又平。又平娘、お園。家主、杢郎兵衞。鳶の長吉。長兵衞一子、長松。本庄助八。飛脚、とゞ平。

本舞臺、一面の淺黄幕。正面、九尺の障子屋體、軒口に市村座講中の團子提灯を吊し、御料理と書きし行燈懸けあり。上の方、葭簀の見世物小屋、蛇遣ひの看板。木戸口に浮世又平、白髮親仁にて、云ひ立てゝ居る。下座の方に、雪駄直し、古手拭にて顔を包み、菅笠をかむり、雪駄を直し居る。この側に、仕出しの若い者、雪駄を直させて居る體。屋體の前に、清八、飴賣りの荷を置き、口上云つて居る。開帳の建て札。すべて大師河原、平間寺開帳の模様よろしく双盤の音、辻打にて幕明く。

ト仕出し大勢行き違ひ、飴を賣る事あつて、見世物小屋へ入る。

清八　十で六文々々。

又平　ア、見しやれな／＼。これは丹波の國大江山の、狩人の一人娘。嫁入り盛りを數多の蛇に見込まれて、あの如く、誠に親の因果が子に報ふと、生れもつかぬ不具者。見るも法樂、見らるゝも後生。僅か八文でお話しになりまするワ。錢は戻りぢや／＼。

清八　これはお江戸に名代の三本飴。香ばしうて齒に附かず。お子様方の腹藥。十で六文。廉いの根元ぢや／＼。

ト此うち、仕出し、見世物小屋より出で來り

仕出　なんと好い娘だが、蛇遣ひには惜しい事ぢやなア。

同　あれで又、顔に痣が無けりやア、品川の大見世の女郎にもあるまい。

同　ほんに、あゝして置くは惜しいものだ。

ト捨ぜりふにて入る。

清八　カウ、又さん。今朝から立て込んで、まだほぞを附けなんだ。この間にちよつとかまして來るから、氣を附けてくんなせえ。

又平　オイ、承知だ。

清八　ドリヤ、ちよつと搔込んで來ようか。

ト下座へ入る。

若者　オイ、錢はそこへ置くよ。

又平　ドリヤ、一服のまうか。

ト矢張り辻打ちにて、雪駄直しに錢を遣り、下座へ入

ろ。雪駄直し、そこら片付け、其まゝに置き、下座へ入る。向うより本庄助八、小揚げの形にて、肴籠を荷ひ、本舞臺へ來て、正面屋體へ向ひ

助八　オイ、料理番さん。芝河岸から來やしたよ。

勘吉　オイ〳〵。

ト勘吉、料理人、前垂れ掛けにて出る。

こりやア小揚げの衆、御苦勞。

助八　アイ、送り狀。

ト勘吉へ送り狀渡す。

勘吉　よし〳〵。受取りました。茶でも飲んで行きなせえ。

助八　ハイ、有り難うござります。

ト勘吉、肴籠を持ち、奥へ入る。助八、畚を棒に卷き居る。この時、又平、助八を見て

又平　ヤア、お前は本庄の若旦那、助八さまぢやアございませんか。

トこれにて、助八愕り

助八　ヤ。さう云ふは不破伴左衞門の下郎、又平ではないか。

又平　左やうでござります。

助八　そしてお前は、いま何をして居るのだ。

又平　お聞きなされませ。お前樣も御存じの通り、伴左衞門さまのお賴みで、お前と二人して、名古屋山左衞門、白井兵左衞門、この二人をおッ殺し、山左衞門が差して居た蔭の太刀とやらを、伴左衞門さまに渡したゆゑ、定めし褒美と思ひの外、伴左衞門さまは浪人の身の上、虻も取らず、蜂も取らず、なんと好い見世物師とはなりました。

助八　人に骨を折らせ、寶は手前へ引上げる、伴左衞門の惡顏。それゆゑ、神妙劍はその場より引ッ渫つて、金と引替へでなけりやア、渡さぬつもりで、コレ爰に、

ト出し、見せる。白蛇出る。

又平　ヤア、白蛇がお前の體へ。

助八　この神妙劍を守護なす白蛇。この一卷を出す度に、誠にこれには恐れるて。

ト懐中する。ドロ〳〵止む。白蛇消ゆる。

又平　ハテ、奇妙な事もあるものだ。

ト辻打ちになり、向うよりとゞ平、飛脚の形にて、狀箱を首に掛け、出て來り、障子屋體に向ひ

とゞ　アヽ、息が切れた。コリヤ、茶を一つくれ〳〵。

ト挨拶せぬゆゑ

ヤイ、玆な内には、人は居らぬか。茶をくれ〳〵。

又平　ア、、モシ、そこは水茶屋ではござりませぬ。料理屋でござります。

とゞ　ア、、そんなら料理屋では、茶ばかりは賣らぬか。ハテ、不自由な。

又平　左やうサ。

とゞ　ア、、コレ、息が切れたゆゑ、なんぞ……幸ひ〳〵爰に飴が。これで咽喉を濕ほして。コリヤ、飴屋々々。

又平　ハイ、飴屋は今、飯を食ひに參りましたが、いくら上げませう。

とゞ　茶の代りに、二文くれろ。

又平　たつた二文か。ハイ。

ト取つて遣る。とゞ平食つて居る。

助八　モシ、お前は急ぎのお飛脚さうなが、どれからどれへござります。

とゞ　身共は因州佐々木家の飛脚だが、因州の侍ひ白井權八といふ者、同家中本庄助太夫といふ者を討つて立退きしゆゑ、江戸屋敷へ知らせの早飛脚だて。

助八　エ、、そんならおれが親仁の助太夫どのが、甥の權八に殺されたか。ムウ。

ト思ひ入れ。

とゞ　ア、、左やうならば、お前様が、本庄氏の御子息でござりましたか。さぞ御無念にござりませう。幸ひ敵討には身をやつすものでござれば、その形にて直ぐに御出立なされませ。

ト此うち又平、飴屋の賣溜めを盗む事。

助八　なにサ、親は親だが勘當の、この助八。今は赤の他人も同然。

又平　左やうサ。古風な事をしやうより、好きな事をして暮らすが當世だての。

助八　それはさうと、急ぎのお飛脚が、なぜ六郷を渡らずに、この廻り道はさつしやれた。

とゞ　さればサ。權八が事を知らすかた〳〵、お屋敷への爲替金三百兩、あの物騒な鈴ヶ森を、無難に通りたいと、厄除け大師様へお願ひ申さうと存じて。

助八　ムウ、そんならお前、金を持つてお出でなされますかえ。

とゞ　オ、サ、しかも小判で三百兩。コレ爰に。

ト出して見せる。又平思ひ入れあつて

又平　隨分大事になされませ。

とゞ　ドリヤ、お詣りして來ようか。

ト下座へ入る。

又平　ハテ、羨ましい大枚の金。

助八　ヤ。

又平　イヤサ、大師樣へこの間に、お詣り申さうか。

トとゞ平の跡を追ひ入る。助八殘り、こなし。

助八　ハテ、とんだ話を聞くものだ、あの從弟の權八が、おれが親仁を殺したとは。……併し、この孝行な助八を勘當する程な親仁め、人手にかゝるも尤もだ。あんな親仁の敵討をしようより、この神妙劍を賣り拂ひ、この身の榮華。

ト懷中より一卷を出すと、ドロ〳〵にて白蛇出る。

エ、、鬱陶しい。また出やアがつた。これぢやア滅多に持つては居られねえ。どこぞ暫らく隱し所が……オ、、あるワ〳〵。幸ひこの雪駄直しの籠へ。

ト件の籠の中へ入れる。白蛇消ゆる。ドロ〳〵止む。

コリヤ、人が見たらば蛇ぢやない、蛇になれよ。

ト辻打ちになり、下座へ入る。直ぐに向うより三浦屋女房お高、引込み新造花山、餘所行きの形、幇間左吉附き添ひ出る。後より願哲、破れ衣の乞食坊主、建立の幟を持ち出る。

願哲　南無大師遍照金剛々々〳〵々々〳〵々々〳〵。厄除け大師樣へ納め奉る金燈籠の建立。お心持ち次第。お施主にお附きなされませう。

左吉　エ、。附くな〳〵。

願哲　ハイ〳〵。自力に及びませぬ。御他力をもちまして。

左吉　エ、、附くなと云ふに。

トこれにて、皆々本舞臺へ來て

花山　モシ、左吉さん。あの花魁は、六郷の渡し場から、後ばつかり見て居なさんすが、ありやどうなさんしたのであらうな。

左吉　大方、乘合ひのお若衆、好い男であつたが

たか　大方、それに。

左吉　それにしても、粋を賣る商賣で居ながら、イヤモ、花魁といふものは初心なもの、あんまり歩きなさるが埒が明かぬゆゑ、駕籠に乘せて先へ寄越したが、どの茶屋へ下ろしたやら。

トこの時駕籠舁き二人、下座より出て

駕甲　お女中樣は、爰の内へ入りました。

駕乙　只今御酒下されまして、有り難うございます。

花山　モシ。
ト金の包みを遣る。
商人　ヘイ〳〵、有り難うござります。又お歸りにお頼み申します。
ト入る。
願哲　ハイ〳〵、結構なお詣り様。どうぞお志しを。
たか　コレ、左吉さん、遣らしやんせ。
左吉　ハイ。……ソレ、遣るワ。
ト錢を出しやる。
願哲　今日のお志し、南無大師遍照金剛々々〳〵々々〳〵々々〳〵々々。……ドリヤ、一杯引ッかけに來ようか。
ト捨ぜりふにて上へ入る。
たか　それはさうと、長松や長吉どんは、どうさんしたな。
左吉　あの子達は、何か後で買つて居やした。
ト流行り唄になり、茶屋廻り鷲の長吉、鳶の者、餘所行きの拵らへにて、繪草紙屋喜助の首筋引立てゝ出る。後より長松、長兵衛の忰の拵らへ、渡邊と七綾の錦繪を持ち出て來る。判人善六、附いて出る。
喜助　御料簡なされませ〳〵。
長吉　イヽヤ、ならねえ〳〵。
長松　引摺つて行け〳〵。
善六　コレサ、大概に料簡してやらッし。
長吉　イヽエサ、幡随長兵衛が子分、鷲の長吉だ。うぬらにちよつくり返されちやア、親分へ云ひ譯がねえ。うしやアがれ〳〵。
善六　コレサ、不承してやるがいゝ。
喜助　どうぞ御料簡なされませ。
長松　イヽヤ、ならねえ。うしやアがれ〳〵。
ト皆々本舞臺へ來る。
たか　これはしたり、長吉どの。どうしたもんでござんす。
花山　もう堪忍してやらしやんせ。
長吉　なにサ、聞きなせえ。この商人めが、一枚繪草紙を賣りやアがるゆゑ、新繪はねえかと云つたら、ありますと云やアがつて、コレ、見なせえ。
ト長松繪をひろげ
長松　この通り、去年の顔見世の、七綾と渡邊の繪を出しやアがる。こりや古いと云つたら、子供にはなんでも同じ事だと云やアがつたから
長吉　そこでこの子が腹を立てゝ、なんぼ子供でも、新らしいのと古いのは知つて居ると云つたら、この野郎が吐

かしやアがるには、餓鬼の癖に洒落た事を、そんなむづかしい縮はねえなど〻、ちよつくり返されては、折角連れて來たこの長吉が云ひ譯がねえから、爰まで引摺つて來たのサ。

善六　コレサ、さうではあらうが、それにやア詞の間違ひといふものがあるものだわな。

長松　おいらは嫌だ〳〵。うぬが腦天ぶち割つて

ト雪駄にて打つてかゝる。善六止める。此うち、下座より杢郎兵衞、麻上下にて、開帳場の世話人の拵らへにて出て來る。

長吉　なにサ、善六さん、打ッちやつて置きなせえ。

善六　それだといつて

長松　うぬ、野郎め。

ト善六を振り拂ひ、また行く。

杢郎　コレサ、長松坊。どうしたのだ〳〵。

ト留める。

長松　イヤ、大家のお爺、免しなせえ〳〵。

杢郎　イ、ヤサ、待ちなせえ〳〵。

長吉　コレサ、大家さん。あの子の十分にさせなせえ。江戸の生えぬき幡隨長兵衞さんの夜食の固まり、川崎近在の子を取扱ふやうにしやアがつて、あんまり目先の見えねえ野郎だ。

杢郎　コレサ、長吉。こんたまでが其やうに力んでは、事が納まらねえ。おれが惡いやうにやアしねえよ。

善六　それ〳〵、大家さんに任せるがいゝ。

花山　ほんにさうでござんす、此やうな事が、長兵衞さんの耳へ入つたら、ナア、おかみさん。

たか　大概にして料簡してやりなさいな。

長吉　成る程、お前方が、いろ〳〵に云ひなさるを、强情に云ふは大人氣ねえ。長松さん、不承しなせえ。

長松　そんなら、もう堪忍してやらうか。引けにはなるまい。ナア、兄イ。

長吉　なにサ、そりやア、皆様が先刻からアがれ。病犬をけしかけてやるワ。

長松　野郎め。堪忍してやる代り、おいらの方へ來て見やアがれ。病犬をけしかけてやるワ。

左吉　いま小さくつても解りのいゝ、どうでも逹師の息子株。ほんに實もある花川戸、江戸市村と隱れなき、イヨ、音羽屋の若旦那ア。

長吉　おきやアがれ。何を云ふのだ。

花山　モシ、繪草紙屋さん。きつう商ひの邪魔でござんし

たであらう。早うござんせ。
喜助　ハイ、有り難うございます。どなたも大きにお世話でございました。シタが、とんだ氣の強い餓鬼どもだ。
長松　どうしたと。
喜助　イヤサ、とんだ目に遭ひました。
ト下座へツイとる。
長吉　とんだ好い慰みをした。
善六　長公、お前方は慰みでよからうが、素的においらに口をきかせやアがるぜ。
左吉　長松さん、そこに繪が落ちて居ますよ。
長松　ナニ、そんな繪は內にいくらもあるから、いらねえ。
ト よき所へ置く。
杢郎　それはさうと、三浦屋のおかみさん、よう御參詣なされました。
たか　アイ、有り難い御開帳ゆゑ、やう〳〵の思ひで、詣らうと話したら、內の抱への小紫が、わたしも願掛けがあると賴むゆゑ、外の人に附けて詣らさうより
花山　おかみさんがお附きなすつての御參詣。花魁は駕籠に乘せて、先へ來てござんす。
たか　して、杢郎兵衞さんには
杢郎　大師樣の講頭で、お開帳中取持ちに參つて居ります。御參詣なら私しが、御內陣へお連れ申しませう。
たか　ハイ、よろしうお賴み申します。
杢郎　長松坊も、おかみさんと一緒にか。
長松　イヽエ、父さんの迎ひに來やした。
杢郎　ムウ。して、長兵衞どんは、どこへ行かれた。
長吉　親方は四五日あとに、江の島の太々に行きやしたが、大方今日らは歸りであらうと、外の子分の手合ひと一緒に行つたところ、三浦屋のおかみさんと花魁がござつたゆゑ、川崎から一緒に、お開帳詣りサ。
杢郎　それは奇特な事だ。
長松　兄イ、もうお開帳へ行かうぢやアねえか。
長吉　さうしやせう。
ト立ち上がる。
花山　モシ、長松さん、とても事ぢや、花魁と一緒に行かしやんせいな。
長松　そんなら、姐さんと一緒に行かう。
左吉　時に、腹も八ツ下がり、ちよつぴり妾で、一酒八つ山としてはどうでございます。
善六　成る程、こいつは奇妙。この善六がグッと承知だね。

左吉　お前に承知されちやア大變だ。なんにしろ、ちつとも早く。
たか　成る程、左吉どのの云ふ通り、殊に小紫も、きつう待遠でござんせう。杢郎兵衞さんも御一緒に。
杢郎　有り難うございます。モシ、善六さん。お前には少し話しがあるから、ちよつと殘つてくんなせえ。おかみさん、後から參じませう。
たか　そんなら、お早う。
花山　サア、長松さん。長吉さん。
長吉　おかみさん、お先へ。
左吉　お客だよ。
たか　大きな聲だよ。
ト流行り唄になり、皆々正面の障子屋體へ入る。杢郎兵衞、善六殘る。下座バタ〳〵になり
とゞ　うしやアがれ〳〵。
大勢　泥坊々々。
ト辻打になり、とゞ平、又平を捕へ、後より番人一人平の字の附いたる法被を着て、六尺棒を持ち、後より彥六、麻上下を着たる世話人、清八、喜助、以前の商人にて、附き出る。屋體より勘吉も出る。

一同　どうしたのだ〳〵。
とゞ　イヤサ、聞かつしやい。此奴が、おれが持つて居る僞替金の三百兩、取逃げ致さうとしたゆゑ、引ッ捕へて、金はたうとう取返したが、この親仁を川崎の、代官所へ引摺つて行くのぢや。
善六　ハテ、とんだ太い奴もあるものだ。併し、金に別條が無くつてめでたい。
清八　一體この親仁は手癖が惡くつて、常から賽錢泥坊をしたり、今までは大目に見て居たが、今日は好い次手だ。ぐる〳〵卷きにして
勘吉　川崎の代官所へ差出すがいゝ。
一同　さうするがいゝ〳〵。
ト大勢、又平に立ちかゝる。この時、見世物小屋よりお國、木綿やつし、振り袖衣裳、顏に痣のある蛇遣ひの娘にて、走り出て來り
くに　マア〳〵、待つて下さんせ。
ト皆々が前へ出て、押し退け、又平を圍ふ。
彥六　コレサ〳〵、女の知つた事ぢやアねえ。
一同　退いた〳〵。
くに　イエ〳〵、退きませぬ〳〵。モシ、わたしが義理あ

る父さんでござります。あなた方に打擲かれるを娘の身として、どう見て居られませう。悪い事は私しが、幾重にもあやまりませう。御料簡なされて下さりませ。お慈悲でござります〳〵。

とゞ　コレサ、お娘。慈悲も料簡も術によつたもんだわな。この親仁は、おれが持つて居る爲替金の三百兩を盗まうとしたのだ。

彦六　そればかりぢやアねえ。氣を附けて見て居れば、開帳場へ來て、足の裏へ飯を附けて、賽錢を盗みます。

勘吉　そして、わし等の隣に居るから、ツイ忙がしい時は、店を番してもらへば、茶漬け茶碗やら、火箸の失せたも、大方この親仁だらう。

清八　ヤ、それで思ひ出した。

　ト飴の荷を改め見て

おいらが賣溜めも無くなつたから、われが盗んだな〳〵。

喜助　この間も川崎の茶屋で休んで居たれば、おれが小附けの風呂敷包みを、引ツ浚つたのもこの親仁だ。

彦六　それ〳〵。わしも開帳場で、この親仁に雪駄を盗まれました。

善六　年に不足も無くつて、丈の知れねえ太い親仁だ。おらが仲間の源七が所へ、女を勾引して來たも、大方この親仁だらう。こんな奴は打ッちやつて置くと、大勢の難儀になります。

一同　ちつとも早く代官所へ。

　ト皆々かゝるを、お國、又平に逃げろと教へる。これにて又平、下座へ逃げて入る。

一同　うぬ、泥坊を逃がしはしないぞ。

くに　ア、モシ、お待ちなされて下さりませ。

　ト一同を留める。

一同　そんなら、うぬも同類だな。

くに　サア、皆さんのお腹立ち、御尤もでござりますゆゑ、なんとお詫び致しやうもござりませぬ。此まゝ父さんをお代官所へやりまして、ひよんな別れになりましたら、娘のわたしが、ほんに身も世もあられませうか。モシ、その代り、あなた方のお盗られなされた品を、私しが辨まへませう程に、どうぞこの場は、お免しなされて下さりませ。

清八　なんだ。あの蛇遣ひの女が、皆の金を出さうといふのか。

一同　こいつは大笑ひだ。ハヽヽヽヽヽ。

杢郎　コレサ〳〵、そんなに笑ふ事は無いわな。見たところが孝行らしいこの娘。萬更當の無い事云ひもせまい。皆も默つて居るから……コレ、娘、皆の金を出すとあるが、金高を集めたら餘程の事。その心當りがあるかよ。

くに　ハイ、ござります。暫らくお待ち下さりませ。

　ト合ひ方になり、善六の側へ寄り

只今も承りますれば、吉原の傾城屋へ、お世話なさるお方さうにござりまするが、折入つてあなたへ、お願ひがござります。

善六　成る程、わしやア吉原の判人善六といふ者だが、おれへ願ひとは。

くに　初めてお目にかゝりましたあなた樣へ、お願ひと申しまするその譯は、どうぞ奉公人をお抱へなされて下さりませ。

善六　そりやハヤ、江戸近在を股に掛け、と斯う云へば、どうやら一文字屋のせりふのやうだが、奉公人の取引きは、商賣づくの事だから、世話もしませうが、何しろその玉を見ないうちは、値も附けられぬ。して、その奉公人は。

くに　ハイ、私しでござります。

一同　イヤア。

　ト一同恟り。

善六　呆れて物が云はれねえ。累以來の話しだ。ハヽア、まだ羽生村の淨瑠璃を聽かねえな。この女は、路考おしやアそんな音が出る。

一同　ハヽヽヽヽ。

くに　そりや生れ附いたろ不具ゆゑ。ハア。

　ト泣き落す。

善六　この女もあの親仁の娘といふからは、これを機にしてこの出入りを、ちやアふうにする氣だな。

彥六　親子相揩りだ。いつその見せしめ

一同　ぶんのめせ〳〵。

　ト皆々有り合ふ物にて打ちにかゝる。善六、莨盆にて打つてかゝる。杢郎兵衛支へて

杢郎　コレサ〳〵、孝行な娘を、マア〳〵

一同　イヤ、構ひなさんな〳〵。

　ト杢郎兵衛支へる。皆々お國をくらはす。善六、此はずみに莨盆外れて、障子の屋體へ投げ込む。この時、長松、長吉出で來り、お國を圍ふ。

一同　子供は危ない。どけ〳〵。

長吉　イヽヤ、どきやすめえ。大道中の眞中で、ぶッつはッつのその中へ、飛込むからにやア向う見ず。おれが斷うしたこの女中、指でもさして見やアがれ。それこそ忽ち一摑み、鷲の長吉といふ前髪だ。
長松　ちつと古いが、山椒は小粒だネ。
長吉　誰れだと思ふえ。風ッぴきだ。
勘吉　イヤハヤ、素敵な管を巻き出したな。コレ、兄イ達、この女を庇ひ立てすると、相摺りになるぞよ。
長吉　イヤ、その相摺りより、うぬらには、此方から云ひ分があるワ。
一同　アノ、こちとらに云ひ分とは。
ト障子の中より、小紫
小紫　その云ひ分は、わたしでござんす。
ト合ひ方になり、小紫、傾城、餘所行きの形にて、莨盆を持ちて、顔へ疵の附きし思ひ入れにて出る。後よりお高、花山、左吉附き添ひ出る。
善六　誰れかと思へば、三浦屋のおかみさんに花魁。
一同　こちとらに云ひ分とは。
小紫　この座鋪は借り切りの、廓で云へばわたしが部屋。例へ二階廻しや遣り手衆でも、自由にさせぬ小紫。それになんでお前方、女子の嗜なむ化粧場へ、この莨盆を打込んで、なぜ此やうに疵を附けさんした。アイタヽヽ。
杢郎　その莨盆を振り廻したは、判人の善六どのだ。
善六　コレサ、とんだ事を云ふものだ。どうしておれが知るものか。
一同　おいらぢやア無いぞ／＼。
ト立騒ぐ。
長吉　やかましい、耄碌ども。默りやアがれ。
小紫　モシ、おかみさん。ひよんな事の災難で、生れもつかぬ疵を受け、とてもこの顔では仲の町は張られませぬ。お内に居ても益ないこの身。どうぞお情に、わたしが年季を下さんせ。
たか　成る程、其方の云ふ通り、顔を賣る商賣で、仲之町へ出られねば、朋輩の手前、面目なからう。如何にも暇は遣りもせうが、先づ判人の善六どのに渡つてから。……イヤナニ、善六どの、ちよつと爰へ來て下さんせ。
善六　アノ、わしにかえ。
ト前へ出る。
たか　外でもござんせぬが、いま小紫が云うた事、聞かしやんしたでござんせう。なんと尤もではござんせぬか。

サ、姑が相談でござんす。元あの奉公人は、お前の判で寄越さんしたあの小紫。お前が手で疵を附け、後の難儀を引出して置かしやんしたので、わたしが損をするも、あんまり阿房らしいではござんせぬか。殊にあの奉公人は、廓で一二を爭ふ上林の葛城か、三浦屋の小紫かと、その大事な太夫が疵を附けられて、人に面が合はされぬといふを、なんぼ親方の威光でも、それでも勤めせいとは云ひ憎い。ナア、善六どの、こりやどうしたらよからうぞいなア。

トこの時、善六術なき思ひ入れ。

杢郎　イカサマ、こりやおかみさんの云ふのが尤もだ。なんぼ抱へた奉公人でも、取扱ひがし憎いのサ。こりや花魁の面晴れに、お代官へ突き出して、善六どのを入牢させるがようござります。

たか　成る程、こりやいゝ思ひ附き。そんなら出羽長、大儀ながら。

左吉　ハイ〳〵、幸ひ大家様も爰になら、直ぐに御訴訟申しませう。

杢郎　左吉どの、サア、ござい。

ト立ち上がる。

善六　ア、滅相な。この事を屆けられて堪るものか。

左吉　そんなら花魁の納得するやう、思案があるのか。

善六　ありますとも〳〵。マア、待つて下さい〳〵。

ト喜助清八を連れて行き

コレサ、お前方も頼もしくねえ手合ひだぜ。人の困るを見て、面白さうに笑つて居る事はねえぢやアねえか。元この起りは、こんた衆が、親仁を窘めたから出來た事だ。

喜助　それだといつて、なんの其方の込めやう知るものか。

善六　知らぬとは云はさねえ。斯うした事は皆な一つだ。

喜助　この人は判人をする程もねえ。解らぬ人だぜ。

勘吉　それよりは、女を代官所へ。

ト皆々お國を引立てる。長吉、杢郎兵衛支へる。この時、小紫、花山に囁き、花山の懐より小判を出し、皆皆の顔へ打ちつける。

一同　アイタ、、、。

トよく見て

ヤア、こりや小判。

花山　花魁から

小紫　この一埒の金、取つて置きなんし。

一同　エ、、忝ない。

喜助　そんならこれから勘定立つて、その高だけに分けて取らう。
小紫　それでお前方、その衆達に云ひ分はござんすまい。
清八　これせえ取れば、ナニ云ひ分が
長吉　其方に無くとも、此方にあるワ。
一同　そりや又なぜ。
長吉　うぬらが騒いだばつかりに、花魁の顔へ疵附けた上からは
長松　この判人から
ト長松、有り合ふ飴屋の天秤棒にて打つてかゝる。長吉、清六の六尺棒にて皆々を叩き散らす。これにて一同、下座へ入る。長松、長吉追つて入る。小紫、お高、花山、左吉、杢郎兵衛、お國残る。
くに　承りますれば、吉原のお傾城様とやら。親子の者が只今の難儀お救ひ下され、私しどもの爲には命の親とも、譬へがたない御恩の程。なんとお禮を申さうやら。
たか　なんの、その禮に及ぶ事かいな。女子は相互ひ。ほんにお前は孝行なお方ぢやなア。どこも怪我はなかつたかえ。
くに　イエ〳〵、打ち叩かれても僅かな事。只お氣の毒なは小紫さま。わたしが事から事起り、思はずお顔へ。痛みは致しませぬか。
小紫　イエ〳〵、この疵は嘘でござんす。お前の難儀と見たゆゑに、おかみさんと云ひ合せ、喧嘩を此方へ買ひ取つて、お恥かしうござんす。
くに　ほんに、どこからどこまで、お氣の附いたお傾城様。
たか　わたしが奉公人ながら、氏も素性もキッとした、たか〳〵勤めする身の上ではなけれども、これも浮世の七轉び。
小紫　元は佐々木の御家中にて、本庄助太夫が娘の八重梅、云ふに云はれぬ譯あつて、今では憂き川竹の小紫。今のお前の難儀をば、この身につまされ、お氣の毒に存じまする。
くに　アヽ、お羨ましいあなたの御身。同じ女子と生れたから、氏あるお武家のお娘御、例へ落ちぶれなされても松の位の太夫職。氏無いこの身は蛇遣ひ。これ程までも違ふものかいなア。
左吉　コレサ、お娘、其やうに、くよ〳〵思はぬものだ。
たか　聞けば、あの親御とは、生さぬ仲と聞きましたが、その繼親を大切に、孝行盡すその志しが、何よりの氏

素性。

杢郎　その孝行がお上へ聞えたら、やがて御褒美が出るだらう。これ程の娘を見捨てゝは、町役人の法が濟まぬ。こんな因果者にして置かうより、これから直ぐにおれが長家へ來るがいゝ。及ばずながら世話をして、どこぞへ奉公にでも出してやらう。

くに　それは何よりお有り難うござります。誠に親一人、子一人、便りの無い者でござります。父樣に話したら、喜ぶでござりませう。

杢郎　イヤ〳〵、親仁どんは構はぬて。こなたはおれが世話をしませう。

小紫　ア、コレ、とてもの事に親仁さんも

杢郎　折角花魁のお頼み、迷惑ながら、ア、まゝよ。

ト思ひ入れ。この時、下座より

長吉　太い奴だ。江戸ッ子の生え拔きは斯うしたものだワ。

ト辻打になり、長吉、長松、以前の形にて出て來る。

たか　お前方も大概にしなさんせ。もし怪我でもあつたら長兵衞さんへ云ひ譯がござんせぬわいなア。

長吉　なアに、彼奴らにけじめを食ふやうな事では、仲の町を金棒引いては歩かれませぬ。殊に親分の名を聞くとピリ〳〵しやすよ。

ト此うちお國、最前の錦繪に見惚れて居る思ひ入れ。小紫、物思ひのこなし。

くに　繪空事とはいひながら、此やうな殿御があつたら

小紫　それに引きかへ現在に、見染めた先刻のお若衆さん

くに　どうぞお側に宮仕へを

小紫　この身の年を入れ增しても

くに　せめて女子の一心に

小紫　間夫狂ひと云はれうがまゝ。

くに　一目なりとも

小紫　どうぞ、ま一度

二人　逢ひたいわいなア。

ト小紫は向うへ、お國は繪を抱きしめ、心々の思ひ入れ。左吉はお國、花山は小紫の側へ來り

花山　花魁。

左吉　姐え。

二人　モシ。

ト脊中を叩く。恟りして

くに　アイタヽヽ。

ト心附く思ひ入れ。

たか　太夫、其方は先刻の渡し場の
小紫　イエ。なんのマア、さうではなけれど、あの娘さんの心根を思ひやつて
　ト脇へ散らす。
くに　モシ、此やうな男がござりますかえ。
長吉　無くつてサ。そりやア顔見世に葺屋町でした
花山　役者の錦繪でござんす。
くに　アノ、これがえ、
　ト見惚れ居る。
左吉　こりやアお娘は、おつりき揉み療治だわえ。
長松　娘さん、その繪はおれが捨てたのだ。欲しくば持つて行きなせえ。
くに　それはお有り難うござります。お貰ひ申しまする。
　ト懐中する。
杢郎　それはさうと、この杢郎兵衛も、折角世話を仕掛けた娘、今から直ぐに同道しませう。ござれ。
くに　ハイ〳〵、有り難うござります。何から何まで、……嬉し涙が溢れますわいな。
　ト泣き落す。
杢郎　これはどうしたもの。其やうな事を云うて、この家主もどうか貰ひ涙が……そんな事は儘にして、サア、おれと一緒に。
　トお國を介抱し、花道へ行き
　ほんに思へば、孝行な娘。
たか　隨分ともに親御を大事に
小紫　道を氣を附けて行かしやんせえ。
くに　ハイ。……おさらばでござりまする。
　ト唄になり、杢郎兵衛附いて向うへ入る。
小紫　ほんに、可憐らしい娘御でござんしたなア。
たか　併し、ひよんな事で
花山　肝心の大師樣へ遲うなりました。
たか　早う參詣しませうわいなア。
　ト皆々行きにかゝる。小紫、下駄の鼻緒を切る。
小紫　アモシ、わたしの下駄が
　ト長吉見て
長吉　エヽ、危ないの。幸ひ爰に雪駄直し。……エヽ、どこへ行きやアがつた。ちよつと探して來ませう。其うちもう一つあがつてお出でなせえ。
たか　成る程、さうしませう。長吉どの、頼みます。
長吉　ドリヤ、探して來ようか。

ト皆々奥へ入る。長吉下座へ入る。直ぐにバタ〳〵になり、助八、下座より駈け出る。願哲追ひ出る。

願哲　ドッコイ、逃がしはしない。コレサ、助公、惡い洒落れた。おれも初瀬寺の願哲と云はれては、隨分惡企みの一つもしたものだ。こんな樂のお先に遣はれるやうな萬更人柄のいゝ坊主でもねえワ。鎌倉を追ひ拂はれ、居所に困り、どうか斯うかと思案の矢先へ、こんたが來て斯ういふ筋だと話すから、あの薄鈍ッこい飛脚をば、冗談話しに騙しかけ、づぶ六酒を喰はして、その間に盜んだ三百兩を、こんたがそれを丸呑みとは、あんまり腎張り慾張り者だ。骨を折つたおれが方から安目を打つた。山分けにしよう。サア、早く出さッし。

助八　成る程、てめえの云ふのは皆尤もだが、おれも三百兩なけりやアならねえ事があるから、斯うしよう。まづ三百兩を山分けにして、百五十兩宛取つた積りにしろ。ナ、ムウと云ひねえ。その百五十兩は、當分おれが借りたのだ。

願哲　おかつしやい。人を好い加減に冷かすがいゝわな。こんたがさういふ料簡なら、おれも亦みんな取らにやアならねえワ。

助八　ハテ、そんなに云はずと貸さッし。

願哲　イヤ、ならぬ。

助八　イケ情の剛い乞食坊主め。

願哲　何吐かす、野郎め。

ト辻打になり、兩人立廻りあつて、トゞ願哲を當てる。助八、件のうちがへをもち、花道の中程まで行き後戻りして再び好き所へ小隱れする。願哲心附き

願哲　おのれ、助八め、跡ぼッかけて。

ト辻打になり、一散に走り入る。助八出て、後見送つて

助八　大べら坊め。……併し、おれが持つて居ては、危ない仕事だ。幸ひ先刻の一物を隱したこの籠へ。

ト雪駄直しの籠の中へ三百兩入れる。

斯うして置けば、氣の附く氣遣ひはねえ。……此奴はいッその事、籠ぐるみ引ッ擔いで

トこの時奥にて

長吉　サア〳〵、早く來さつし。

ト辻打になり、長吉先に、雪駄直し出て來る。助八これを知らず、件の籠を取上げるを、雪駄直し見て、だしぬけに助八を打つ。助八倒れる。長吉見て

ナニ、泥坊だ。

ト有り合ふ天秤棒にてしたゝかに打つ。助八堪りかね一卷と金を殘したまゝ、逃げて入る。長吉あと見送り

こんな茶の道具を盗むとは、とんだ奴もあつたものだ。

ト以前の下駄を出し

カウ、ちよつとこの鼻緒を直して下つし。

ト出す。雪駄直し、籠の蓋を取り、道具を出さうとする。ドロ／＼になり、白蛇出る。兩人惘り。長吉天秤棒にて追ひ拂ふ。雪駄直しは、中にある一卷と金に心附かず、道具を出し、蓋をする。ドロ／＼止んで、白蛇消える。始終辻打。向うより若い者、傳法の拵らへにて出て來り

若者　モシ／＼、長吉さん。追ツつけ幡随の親方が、新別屋まで歸つて來ると、知らせがあつたから、早く歸りなせえ。

長吉　そりやア斯うしちやア居られねえわえ。……オイオイ、長松さん／＼。

長松　なんだ／＼。

ト奥より出て

長吉　お父さんが歸ると知らせがあつたから、サア、行きやせう。

長松　そんなら兄イ、早く行かう。

長吉　オイ、直し屋さん、出來たらこの茶屋に居る女中に遣つてくんな。

若者　モシ、空合ひが悪い。早く行きなせえ。

長吉　なにサ、案じる事はねえ。こりやア日和癖だ。

ト流行り唄になり、長吉先に三人向うへ入る。下座より、とゞ平、生酔ひの思ひ入れにて出て來り

とゞ　あの和尚めが捻ち上戸で、たうとうおれを盛り潰した。それはいゝが大事のお飛脚、遲くなつたわえ。

ト云ひながら、花道の際まで來り、爪づき

南無三、草鞋の紐が切れた。幸ひの直し。コリヤ、これを直してくれろ。

ト出す。雪駄直し思ひ入れ。

なんだ、これを直してからだ。……べら坊め、それまで待つて居られるものか。此方は急ぎのお飛脚だ。てめえは頼まぬ。おれが直すワ。

ト合ひ方になり、自分手に直し居る。この時、正面の障子を明け、小紫、少し酒に醉うたるこなし。長煙管にて莨のみながら、四方を見晴らし居る。雪駄直し思

ひ入れ。とゞ平こなしあつて
なんといふ。おれが事を何飛脚だと尋ねるのか。……おれ様は、鎌倉佐々木家のお飛脚にて、今度本庄助太夫といふ侍ひを、同家中白井權八といふ者が殺して立退いたから、江戸屋敷へ觸れ狀を持つて行くのだ。
ト小紫、直し、兩人思ひ入れ。とゞ平、草鞋を直して穿く事あつて
いらざる話しに時が切れた。コリヤ、斯うしては居られぬわえ。
ト辻打ちになり、一散に向うへ入る。小紫キッと思ひ入れ。
小紫　顏は知らねど實の父さん。
彌市　別れてからが十四年、父の形見はどうぞして
小紫　おのれ權八、やがて本望。
ト向うを見込み、キッと云ふ。これにて雪駄直し振り返り、持つたる下駄を小紫が前へ直す。これより誂らへの合ひ方、小紫向うを見詰めながら、これへ足を踏みかける。雪駄直し、下手より小紫の顏に見惚れ、ヂッと思ひ入れ。小紫これを知らず、ヂリ／＼と前へ出る。雪駄直し、顏に見惚れながら、小紫に附いて廻る。

小紫　云はゞ武士の胤たるこの身。
彌市　瘦せはらしたる今の身も、年に一度は此やうな
小紫　男を持たば助太刀して
彌市　本望遂げたら死んでもよし
小紫　やはか恨みを
彌市　見染めし戀路を
ト抱きつく。小紫恟りして、持つたる煙管にて、ポンと打つ。これにて笠脫げて、初めて白井彌市の顏見える。チョンと木の頭。小紫は「エ、」と持つたる煙管を折る。彌市は笠を取つて、隱れる思ひ入れ。双方よろしく、拍子
禪のツトメのツナギ。引返し。

幕

二幕目　返し　鈴ヶ森の場

役名──白井權八。幡隨長兵衞。飛脚、とゞ平。本庄助八。僧、願哲。雲助、政。同、辰。同、六。同、市。同、又八。同、どぶ六。

本舞臺、三間の間、後ろ一面の黒幕。爰に藪疊、上手に大いなる題目の石。下手に六十六部の供養塔。この脇に榎の大樹、所々に杉の立ち木、日覆ひ吊り枝大いに茂り、舞臺先に浪板。爰に政、辰、雲助の拵へにて、五合徳利を焚火にてあぶり、筒茶碗にて酒を飲み居る。すべて鈴ヶ森夜の景色。時の鐘、浪の音にて幕明く。

政　成る程、夜は短かくなつたな。いま暮れたと思つたに、もう東海寺の五ツださうよ。

辰　あんまり仕事がねえに依つて、差しで組んで、すつかり取られた。あんまり智慧がねえぜ。

政　今に好い鳥を引いて來るであらう。

辰　それもさうだ。エヽ、もう一つかッ喰はさう。

ト兩人酒を飲み居る。バタ〳〵にて、助八、前幕の形にて走り出る。この後を願哲追ッ駈け出て直ぐに舞臺へ來り

願哲　サア、どうしやアがつた。山分けを寄越しやアがれ。

助八　コレサ、さう云はれては一言もねえが、これには譯が

願哲　譯も絲瓜もいらねえ。キリ〳〵金を出しやアがれ。

助八　それでも爰には無えものを。

願哲　無えといつて濟むものか。

ト兩人また摑み合ふ。政、辰、中へ入り

二人　願哲ぢやアねえか。どうしたのだ〳〵。

願哲　サア、聞いてくれ。この男はまだ仲間に入らせねえ素人だが、鎌倉に居るうち、心安くしたところ、今日大師河原でフッと逢つて、この男の頼みゆゑ、大枚三百兩の大仕事、首尾よくやつて渡したところ、割り前も寄越さずに隨徳寺。サア、てめえ達に丸呑みにされては、おいらが商賣がならねえワ。キリ〳〵その金渡しやアがれ。

助八　成る程、さう云はれては面目ないが、おれが云ふ事聞いて、疑ひ晴らして下さい。

願哲　ナニ、云ふ事があるものか。

辰　ハテ、譯を聞いた後で、どうともなる事だワ。

政　靜かに譯を聞くがいゝ。

助八　今あの和尚が云ふ通り、惡心きざして摑み合ひ、たうとう此方へ引ッたくり、隱し所に困つたゆゑ、側にあつたる雪駄直しの、籠の中へその三百兩と、外に大事な品を隱した。所へ雪駄直しが出て來て、おれを泥坊と云

つて喰はした。イヤ、素的に喰はしやアがつたゆゑ、金の事はどこへやら、命から〴〵逃げて來た。所を願哲坊に捕まつて、この仕儀だが、その金どころぢやアねえ。おらが身にも代へぬ大事な品を、ちやアふうにするとは、よく〳〵不運な身の上だなア。

願哲　イヽヤ、その云ひ譯は、どうも呑み込めねえわえ。

政　コレサ、その男も悄氣返つて居るからは、まんざら嘘でもあるめえ。

助八　なにサ、斯うなつてから嘘が出るものか。

願哲　して見りやア無駄骨だな。忌々しい。

辰　そんな間抜けぢやアいかねえワ。おいらが仲間へ入つて、よく見習ふがいゝわえ。

助八　そんならこれから、どうぞ願ひます。

政　新參振舞ひには、八幡前の田樂は恐れるぜ。

助八　なにサ、濱川の角にしやす。

皆々　そいつは飲めるわえ。

ト波の音になり、向うより前幕のとゞ平出で來り、六、市、雲助の拵らへにて、附き出で、花道にて

六　モシ〳〵、僅かな駄賃だ。この物騒な鈴ケ森、お獨り歩きしようより、安くして乘つて行きなせえ。

とゞ　エヽ、しつこい。飛脚が駕籠に乘るやうで、道中がなるものか。

市　成る程、お前は足がひよろ長く、早からう。ほんの酒手で乘つて下んせ。

とゞ　イヤ〳〵、どのやうに勸めても、乘らぬ〳〵。

二人　ハテ、乘らつせえよ。

ト本舞臺へ來る。六、先へ廻り、好い鳥だといふ思ひ入れにて、皆々へ呑み込ます。

六　先刻から十四五丁、口の酢くなる程云つても聽かねえの。

市　どうせ乘せかゝつた籠の鳥、乘せにやアならねえ。

とゞ　ヤア、しつこい雲助めら。達てと云へば、手は見せぬぞ。

政　エヽ、てめえ達も氣が長え。

辰　ぶんのめせ〳〵。

皆々　合點だ〳〵。

トとゞ平慄へながら

とゞ　さては噂の鈴ケ森。身拵らへして、

ト懷中の胴卷を直す心にて、

六　ヤア〳〵、大變だ〳〵。三百兩の爲替金を落した〳〵。

皆々　ナニ、三百兩。
　トこの時、願哲、焚火にて、とゞ平を見て
願哲　いま話しの金は此奴の金よ。
　トとゞ平、願哲を見て
とゞ　うぬは先刻、身共に酒を飲ませた坊主だな。そんな
　らその時
　ト願哲にかゝるを、皆々引据ゑ
助八　金は奪つても、また物されたから
願哲　せめての腹癒せに、身ぐるみふん剝げ。
皆々　合點だ〳〵。
　トとゞ平を引剝ぐ。
とゞ　これは又情ない。
　ト云ひながら、眞裸になり
　泥坊々々。
　ト逃げて下座へ入る。皆々顏見合せて
皆々　大笑ひだ。
　ト政、衣裳を掻き集め
政　引ツくるめても二朱一本よ。
六　まだこんな状箱がある。
　ト落ちてあるを取上げる。

市　なんぞ中にあるだらう。明けて見ろ〳〵。
六　合點だ〳〵。
　ト箱より手紙を出し
　こんな手紙だぜ。
辰　なんぞ仕事になるめえものでもねえ。讀んで見ろ讀
　んで見ろ。
六　無理な事を云つたものだ。これがどうして讀めるも
　のかな。
政　ほんにさうだつけ。差詰め和尚、讀まつしやい。
願哲　ドレ〳〵。……「江戸お屋敷お役人中樣、鎌倉屋敷役
　人中。」……ナニ〳〵「飛札を以て申し入れ候ふ、當三月
　廿日の夜、本庄助太夫の甥、因州の浪士白井權八と申す
　者、叔父助太夫を討つて立退き申し候ふ間、この段お屆
　け申し上げ候ふ、尤も權八江戸表へ出府と存じ候ふ間、
　この段御吟味專一と存じ奉り候ふ。以上、月日。」
助八　そりやア、おれの親仁を、權八が討つたと知らせの
　手紙だ。
市　アヽ、そんなら貴樣は敵討だの。
助八　マアそんなものだが、あの權八といふ奴、顏に似合
　ぬ太い若衆だ。

六　アヽ、そんなら、どぶ六や又が乘せて來て、土橋の駿河屋に立つて居た
辰　丸に井の字の紋を附けて居た若衆がさうだわえ。
助八　オヽ、その丸に井の字が權八だ。そんなら爰へ來るか。こりや斯うしては居られぬわえ。
ト騷ぐ。
六　コレサ〳〵。何を其やうに騷ぐのだ。貴樣の爲には現在の親の敵ぢやアねえか。
政　出合つた所が鈴ケ森。おいらが助太刀すりやア、敵討には好い場所だぜ。
助八　滅相な事を云つたものだ。どうしておれが權八に敵ふものかな。
市　お前も元は侍ひぢやアねえか。
助八　成ろ程、親の敵も討ちたいが。それよりは先刻の雪駄直しを探して、三百兩と大切な一卷を取返し、こんた衆にも分けてやるワ。その代りに親の敵は、皆寄つて討つて下つし。
皆々　そんならどうでも
助八　斯うしては居られねえ。
ト一散に下座へ入る。

政　併し、權八は手利きと云へど、たつた一人。
願哲　此方は多勢。ナニ構ふ事があるものか。
辰　定めて路銀もずつしりだらう、……コレ。
ト皆々と囁き合ふ。
市　そんなら爰に突ッ俯して頑張るのか。
辰　ソリヤ、これで。
ト菰を五六枚投げ出す。皆々着て
皆々　ドリヤ、果報を待たうか。
ト別れ〳〵に菰を冠り寢る。政と辰だけ焚火にあたり居る。時の鐘、波の音になり、向うより又八、どぶ六、雲助にて、小田原提灯を附けし四つ手駕籠を擔ぎ、此うちに權八、着流し、大小好みの形にて、駕籠に乘り出て來り、舞臺好き所へ駕籠を下ろす。
又八　モシ、約束の所まで參りました。
どぶ　なんと、早く來たぢやアござりませぬか。
ト權八駕籠より出て、あたりを見廻し
權八　然らば爰が觀音前と申す所か。
どぶ　左やうサ。爰が觀音前よ。
權八　ヤレ〳〵、大儀であつた。眞に夜中といひ、勝手知れざるこの道筋。併し、あたりは濱邊だな。

又八　なんでも爰が約束の所だわな。
どぶ　どうぞ早く駄賃を、お貰ひ申したうござります。
権八　成る程。極めの駄賃は、六郷とやらより観音前まで五百文の所なれど、夜中といひ、これにて一つ飲みやれ。
ト南鐐を一つ出す。取つて
どぶ　こりやアたつた二朱かえ。
権八　ハテ、五百文のところなれども、心を附けて
どぶ　たつた二朱か。おきやアがれ。二朱や三朱貰ふとて、夜中にあくせく駕籠を舁くものかえ。
ト権八へ打ちつける。
権八　して、どれ程貰はうと申すのぢや。
又八　おいらが駕籠へ乗れば、持つて居る物は有りつたけ。
権八　ムウ。さては案内知らぬ一人旅と侮つて、うぬらは盗人ぢやな。
二人　知れた事だワ。その褞袍から
トこの時、政、辰、出て来て留める。
政辰　コリヤ、待て〳〵。
ト留めるを構はず、権八に打つてかゝる。政、辰、二人を追ひ拂ひ、隠す事。政、こなしあつて
政　ヤレ〳〵、承りますれば、無法な事を申す者。さぞお腹が立ちませう。
辰　これがほんに、かつたいの棒打ちとやら。マア、御料簡なされませ。
権八　これは〳〵、忝なう存じます。さりながら、餘りの慮外。
政　サ、御尤もでござります。先づ〳〵御料簡なされませ。彼奴らは私しが、また仕様がござります。して、あなたは、どれへお通りなされます。
権八　其許は、所のお人さうなが、これより江戸表までは如何程ござるな。
辰　アイ、江戸へは、もう二三里もありませう。マア、ゆるりと莨でものんでござりませ。
権八　イヤ〳〵、拙者は莨は所望でござらぬ。これはいかい世話であつた。
ト行きかゝるを、立ち塞がり
政　コレサ旅人。人に道を尋ねて、禮もせずに通るのか。その上、莨をのめといへば、所望でない。莨が祭りに出やアしめえし。
辰　こりやアなんだな。こちとらを雲助だと思つて、この火で莨をのむは穢ねえと云ふのか。否でも應でものま



嘉永三年三月河原崎座上演



七代目市川海老蔵の長兵衛　岩井粂三郎の権八

せにやならねえ。
權八　これは又無理を申す男ではないか。こなた衆が雲助やら、ナニ身が知るものか。貴は實々嫌ひゆゑ、所望でないと申したが、なんと致した。無法を申すと手は見せぬぞ。
トきつと云ふ。
政　これは〱、お若衆のお氣短い。今のやうに申したは、ありや嘘でござります。成る程、流石お武家ほどあつて、この鈴ケ森を只お一人、びくともなされぬは、誠に驚き入りました。
權八　ナニ。すりや爰は觀音前ではなく、噂のある鈴ケ森とやらか。
辰　左やうサ。御覽じませ、あの通り供養塔や、題目の石がござりますわな。
政　お前さんの仰しやる觀音前までは、十丁からござりますが、また今のやうな奴等が居りまして、益なきお腹を立てさせましたらお氣の毒。私しどもが觀音前まで送つてあげます。コレサ、てめえもお送り申せ。
辰　それ〱。往來のお客方にお怪我でもあつちやア、雲助の商賣があがるワ。一緒にお送り申します。

權八　すりや、觀音前まで送つてくりやるか。
二人　左樣でござります。
權八　然らばこの提灯を借り受けて
ト駕籠の提灯を取り
オヽ、大儀ながら、案内頼む。
政　ハイ〱。お提灯は私しが持ちませう。
ト提灯を取る振りにて權八の大小を取りにかゝる。權八驚ろき、政を捕へて
權八　コリヤ、何を致すのぢや。
ト辰、權八の紋を見て
辰　ソリヤこそ丸に非の字だぞ。
ト皆々菰を脫ぎ捨て、バラ〱と取卷く。
權八　ナニ、丸に非の字と申すからは、こりや、何者にか賴まれたな。
政　オヽ、賴まれた。ぶッちめろ。
皆々　合點だ。
ト禪のツトメになり、皆々有りあふ物にて、打つてかかる。立廻りあつて、鳴り物變り、しぬきのタテよろしく、此うち、辰、手を負ひ、逃げる所に困り、榎へ這ひ附く。よき時分、雲助二人、垂れを下ろしたる四

つ手駕籠に、ヽヽヽ品川宿と書きし小田原提灯を下げ、向うより出で來り、直ぐ舞臺へ來て、この體を見て、吻りして

雲助　ヤア、抜いたワく。

ト駕籠を好き所へ置き、下座へ逃げて入る。此うち、權八止めを刺す。後より政かゝるを、見事に切り倒す。捨て鐘、合ひ方變つて、駕籠の垂れを揚げ、幡隨長兵衞、半合羽、一本差し、脚絆がけ、駕籠の内より様子を窺ふ。市、下手へ逃げ行くを追ひかけ切る。この時權八、長兵衞を見附け、直ぐに切つてかゝる。長兵衞駕籠の中より、その手を押へ

長兵　お若いの。往來の旅人をなんとさつしやる。

トこれにて權八、よくく見て

權八　心急きゆゑ思はぬ粗忽。旅人とあらば、サヽ、少しも早う。

長兵　左様ならば、間違ひでござりますか。

權八　如何にも左様。

トこれにて長兵衞、刀の手を離す。權八こなし。長兵衞もこなしあつて、駕籠より出る。

長兵　見ますれば、お怪我もねえやうだが、どこも痛みは致しませぬか。

權八　御深切なる其お詞、忝なう存じまする。さりながら、音に聞えし鈴ヶ森、町人體の其許が、たつた一人で

長兵　左やうサ。鎌倉方のお屋敷へ、多く出入りはわしが商賣、それをかこつけ有やうは、遊山半分江の島の、太太かけて思はぬ隙入り。どうで泊りは品川と、川端からの戻り駕籠、通りかゝつた鈴ヶ森、若いお方のお手の内あまり見事と感心いたし、思はず見惚れて居りました。

ト顏見合せ、思ひ入れ。

權八　拳もぬるき生兵法、お恥かしうござります。

長兵　不躾ながら見ますれば、まだ角前髪おの侍ひ様、お一人旅でござりまずるか。

權八　御覽の通り某は、勝手存ぜぬ東路へ、中國筋よりはるばると、暮れに及びし磯端にて、一人旅と侮つて、無法の狼藉。彼奴らは正しく追ひ落し、命を取るも殺生とは存じたなれど、止む事を得ず不敵者、刀の穢れと存ずれど、往來の人の爲にもと、據ろなく斯くの仕合せ。雉子も鳴かずは討たれまいものを、益ない殺生いたしてござる。

長兵　ハテ、大丈夫なお若衆様。切られた奴等は五六人、

あなた様には只お一人。若年のお手際には驚き入ります。いま中國と仰しやつたが、御生國ば何れにて、何御用あつて江戸表へは。

權八　サ、別して用事もござらねど、繼しき母の讒により心に思はぬ不孝の汚名。故郷は即ち因州生れ、父の勘氣に力無く、お江戸は繁華と承り、武家奉公でも致さうかと、仕官の望み習はぬ旅行。見ますれば其許は、江戸のお方と見受け申す。御懇切のお尋ね、しるべ便りもござらぬ拙者、お詞に甘へお頼み申す。

ト手を突き、こなしある。

長兵　成る程、御身分の一通り、承つて御尤もに存じます。併し、宿無しどもとは申しながら、四人五人のこの死骸。往來端に犬の餌食。

ト死骸を一々片附ける。

この御手練を見る上は、猶更以てお世話いたし、あなたの難儀となる事なら、どこがどこまで云ひ拔けて進ぜませうが、して、何れの御家中、又は御直のお方なるか、決して口外は致しませぬ。その御家名は。

權八　サア、お世話下さる其許へ、實名隱すに及ばねど、人の家名を聞く時は、我が名を名乘る本文でござれば。

長兵　成る程、これは不調法。かゝる大事を眼前に、見聞き致した町人の、その名は何の某と、云ふ身の上でもござりませぬが、只今申した江戸生れ、身は住み馴れし隅田川、流れ渡りの氣散じは、江戸で噂の花川戸、幡隨の長兵衞と申します。

權八　エヽ、アノ其許が、中國筋まで聞えたる、江戸に名高き長兵衞どのか。

長兵　イ、エサ、その名高い長兵衞ではござりませぬ。わしやア三代目の俤ばかりサ。祖父や親仁の長兵衞なら、面白いせりふ廻しも云ひませうが、親に似ぬ子の無口生眞面目、洒落れといつちやアこれ程もねえ只の俠氣らし。今度の役廻りが、何れも樣の御贔屓で、ほんの當座の間に合せ、銀と見せたる七度燒き。附け句で覺えた藪鶯、阿波座烏の啼く聲は、西か東か知らねども、水道の水の有り難さ。野郎はちつと小せえが、産神樣で膽が大きい。弱い者をば引立てゝ、強い奴なら向う面。ほんの事だが韋駄天が革羽織で、鬼鹿毛に乘つて來ても、びくともするのぢやアござえませぬ。及ばずながら達衆の端くれ。枯れたる枝にも花川戸、金龍山は軒ならび、吉原雀、都鳥、隅田の流れを向うに構へて、東男の端くれと、噂

に乘つた私しは、ごろつき上がりの、けちな野郎でござります。

權八　音に聞えし達引とやら、俠氣な長兵衞どのと聞くからは、願ひある身の某が、頼んで暫し便りには、石拔よりや確かな隱れ家。拙者は即ち因州の浪人、白井權八と申す者。鎌倉表にて、義に依つて人を殺め、命はさらさら惜しまねど、尋ねにやならぬ寶の詮議。首尾よく取り得るそれまでは、死ぬにも死なれぬ拙者が命。この身の願ひ叶ふまで、只管頼む長兵衞どの。

長兵　ようござります。お氣遣ひなされますするな。さう承つたら金輪際、お世話しぬくは持前の、江戸で育つた男一疋。いつでも訪ねてごぜえまし、蔭膳据ゑて待つて居ります。

權八　御深切の其お詞、萬事よろしく

長兵　頼まれました、權八どの。左やうなれば、これより直ぐに御同道。

權八　何から何まで、お禮は詞に

長兵　なにサ、そこが江戸ッ子。恩には着せませぬ。

ト提灯を持ち、上手へ行きかゝる。この時、以前の手紙觸るゆゑ、取上げて

なんだ、手紙が落ちてある。モシ、ちよつとこの灯を

ト提灯を權八に持たせ、手紙を披げ

ナニ〳〵「飛札を以て申し上げ候ふ。當三月廿日の夜、本庄助太夫の甥、因州の浪士白井權八と申す者、叔父助太夫を討つて立退き申し候ふ間、この段御屆け申し上げ候ふ、尤も權八事、江戸表へ出府と存じ候ふ間御地にて御吟味專一に存じ奉り候ふ、以上。月日。」

權八　すりや、江戸屋敷まで、……ホイ。

ト思ひ入れ。

長兵　モシ、お案じなされますするな。

ト提灯の火にて件の手紙を燒き捨てる。權八思ひ入れ。辰、後より窺ふ。長兵衞こなしあつて

これでなんにも白井氏。

權八　武士も及ばぬ

ト思ひ入れ。文の火影にて、前の流れへ辰の顏映る。權八キッと見て、手早く手裏劍を打つ。これにて、辰飛び下り

辰　うぬ、權八。

トかゝる。立廻り、權八、一太刀浴せる。

長兵　其奴も正しく

権八　彼奴らが同類。

ト長兵衛、提灯を差出し、辰が疵口を見て

長兵　天晴れお手際。

権八　長兵衛どの。

長兵　ゆるりと江戸で

ト切り下げる。辰、見事に返る。長兵衛、肩へ合羽を掛ける。チョンと木の頭。

二人　逢ひませう。

ト権八、白刃を拭ふ。長兵衛こなし、双方よろしく、拍子

幕

三幕目　名古屋浪宅の場

役名――名古屋山三。上林の葛城。下女、お國。因果物師、又平。遣り手、お爪。家主、李郎兵衛。呉服屋、勘六。小間物屋、六兵衛。縮緬屋、彦右衛門。禿、みどり。

本舞臺、三間の間、天井に誂らへある二重舞臺の世話場。揚げ幕際に三尺の路地の木戸あり、上の方女郎の文で張つたる障子。下手の方、竈、臺所道具飾り、門口の外、路地あり。本疊敷き、すべて淺草鳥越裏借家。爰に山三、搔卷を着て、絹蒲團の上に、手箱引寄せ、葛城よりの文を見て居る。禿みどり、大和風呂に急須をかけ、茶を拵らへ居る。門口に李郎兵衛、家主にて立ちかゝつて居る。表には勘六、彦右衛門、六兵衛、借金乞ひにて、わや／＼云うて居る。内には、掛取り四人、思ひ／＼の着附けにて歸りかゝり居る。てんつゝにて幕明く。

勘彦　大家さん、入れて下さい／＼。

李郎　掛取りならば、待つたり／＼。

トてんつゝ、彈き流しにて、四人、門口へ出かゝり

掛取　腹がへりました。飯でも喰つて、また出掛けて來ませう。

一同　さうしませう／＼。

ト門口へ出かける。

李郎　どうだ、お前方は解つたか。

掛取　イエ／＼、今日も斷わり。

杢郎　そんなら歸るのか。

皆々　また、晩に來ませう。

杢郎　さうしなさい。先のは替り〳〵。後入りは、續いて續いて。

ト てんつゝにて掛取り四人、捨ぜりふにて、向うへ入る。門口に殘つた三人。

勘六　サア〳〵、入れ替りませう。

彦右　ヤレ〳〵、恐ろしく待ちました。

ト 内へ入る。

杢郎　掛取りならば、待ち札〳〵。御油斷では詰まります。待ち札〳〵。

勘六　モシ〳〵、山三さま。吳服屋の勘六でござる。葛城さまへ拵らへてやらしつた裲襠の夜具の代は、どうして下さります。三月前もお斷わり。三十兩の吳服代、いま勘定さつしやれ〳〵。

六兵　サア〳〵、其方がよくば、小間物屋の六兵衞、上林の花魁へ賣つた鼈甲の櫛、笄、殘つた代金二十八兩三分二朱、幾度催促いたしても、葛城さんが斑甲のやうな淚をこぼしてお斷わり。その斷わりも大概がよいといふもの。今日はお客のお前から勘定なさい。また斷わりならあかん鼈甲。代金貰はう代金貰はう。

彦右　モシ〳〵旦那、縫箔屋の松屋彦右衞門。度々催促いたしても、今日は拂はぬその代り、酒を飮めと仰しやるゆゑ、好きな酒に縫ひ代を、ツイうか〳〵と二年越し。葛城さんの裲襠の手間代、たつた今、勘定さつしやれ勘定さつしやれ。

三人　拂ひを貰はう〳〵。

ト 皆々わめくを、山三、これに構はず、文を讀み居る。

みど　オヤ、この衆は、靜かにさつしやいな。馬鹿らしいよウ。

三人　ナニ、馬鹿らしい。成る程、掛取りは馬鹿らしく見えるであらう。

杢郎　コレ〳〵、そんならお前方は花魁の櫛、笄、夜具や衣裳の掛取りか。

三人　左やう〳〵。

杢郎　そんなら家主も云はねばならぬわえ。……コレ、山三さま。イヤ、山三どの。お前は〳〵。今も一組ばかり來た米屋や酒屋はお定まり。この三人の掛取りは、吳服小間物縫箔屋の代金とは、廓へ使ふ榮耀な借金。それほど贅澤をするならば、なぜ店賃を勘定しない、是非とも

今日は家賃の溜り、いま貰はう〳〵。

ト此うち山三、文を読みしまうて

山三　これは家主を始め町家の者ども、毎日々々、よう訪れてくりやるぞ。身共の歸參いたした節は、引上げ使ふ程に、左やう心得てよからうぞ。

勘六　イヤア。とんだ大風を極める。こなたに誰れが使はれるものか。

彦右　そんな無駄を云はずに、縫ひ箔の手間代を

六兵　鼈甲の代を、拂うて貰はう〳〵。

山三　これはしたり。誰れも拂ふまいとは云はぬワ。コリヤ、その拂ひ方の賄ひは、身が召使ひの下女の國、あの者が歸つたら、大方挨拶を致すであらう。それまで待つて、承つて戻るがよからう。

三人　エヽ、そんならあの下女が、爰の内の番頭か。

李郎　これはしたり。町人ではない、武士の浪人者。

三人　成る程、武士の事なら女の家老か。

山三　勿論々々。

三人　イヤハヤ。呆れたものだ。

トてんつゝになり、向うよりお國、前垂れかけ、安下駄を穿き、下女の拵らへ、干大根、蒸鰈、一升德利を提げ出で來り、足早に門口へ入り

くに　ハイ、旦那様。只今歸りました。

皆々　ソリヤ歸つたぞ。

トお國恟りして

くに　エヽ、恟り致しました。……ア、お前方は、アノ掛乞ひの

六兵　いつもの三人。今日は是非とも取らねば歸らぬ。

彦右　貴様が歸れば、お拂ひが出るとの事。

勘六　サア〳〵、勘定してもらはう〳〵。

みど　お國どん、歸らしつたか。

くに　オヽ、こりや葛城さまの禿衆。お前、どうして。

山三　コリヤ〳〵。あの禿が來て居るは、この山三がこの程の風邪ゆゑ、久しく廓へ行かぬと云うて、今宵葛城が見舞ひがてら、押しかけて來るといふ事を、禿に知らせて寄越したのを、幸ひ小間遣ひが無いゆゑ、今まであの者を使うて居たわいの。

くに　それはマア、よい吉左右を承ります。シタガ、此やうな穢い所へ、あの花魁がお出でなさるゝも、どうやらお氣の毒なやうで

李郎　なんぢや〳〵。店賃も寄越さず穢い所とは、無作法

千萬。積くば家賃を、拂はぬか〳〵。
六兵　左やう〳〵。拂ひもせいでこの内へ、花魁を連れて來るとは、あまり人を踏み附けにしやるの。
彦右　女郎を引込む當りがなるなら、おいらが掛けをも拂つてもらはう。
勘六　サア〳〵、勘定を
三人　貰はう〳〵。
　トわめく。お國とめて
くに　アヽ、モシ〳〵。左様にお聞きなされましては、皆間違ひでござります。有やうは、葛城さまが身上がりになつて、忍んで旦那に、逢ひにお出でなされますのでござります。なんの榮耀にどうしてマア、其やうな事がなりませうぞいなア。
杢郎　イヤ〳〵、忍んで來やうが、隠れて來やうが、吉原の花魁が、餘所へ來る程なら、そりや大物入りだワ。
三人　それが出來れば、拂ひを貰はう〳〵。
くに　イエ〳〵、全く左様ではござりませぬ。
山三　コリヤ〳〵、其やうに卑下いたす事は無い。身共はなんぢや、武士ではないか。女でこそあれ、其方は身が召仕ひの腰元なり、當時にては侍ひ分も同じ事。二役を相勤めるぞ。あの者どもは、家主を始め、皆出入りの町人ではないか。其やうに丁寧に申さずとも、權威で申せ。聞き入れなくば、キッと曲事に、申し附けい〳〵。
くに　ハイ〳〵。左様なれば、隨分大風に云ひ譯申すでござります。……コリヤ、家主を始め掛乞ひども、皆下に居らぬか。
皆々　ナニ、下に居らぬか。……イヤ、呆れた飯炊きおや。
くに　サ、わたしは……イヤ、おれは飯炊きに違ひないが……旦那のお指圖。其方どもの勘定は、もう四五日も待て居らう。待たぬとキッと食事に……イヤ、曲事に申しつくるぞ。
　ト雨車になる。
杢郎　ナニ、家主に曲事を申しつけるか。
三人　掛乞ひも同罪に行ふのか。こりや面白い。動きはせぬ〳〵。
　ト雨車頻りに鳴る。
くに　左やう〳〵。キッと曲事ぢや〳〵
皆々　サア〳〵、そこら中が、洩るワ〳〵。
くに　旦那様も、さぞお濡れなさるでござりませう。
　トあたりを見て、名古屋の傘を取つて

幸ひ借りて參りました番傘がござります。これをお召しなされませ。

ト山三、番傘を取つて開き、名前を見て

山三　ア、、これは身共が家の貸し傘か。

くに　イエ〳〵、この間出刃を買つて參りました節、借りて參りました。

山三　ムウ。左やうか。……コリヤ、みどりよ、其方もこの中へ入つて居れ。

みど　アイ〳〵、

ト傘の中へ入る。お國、前垂れをかむり

くに　こりや、どうでも本降りになりませう。

勘六　ナニ、本降りになる。そんならおれ達にも傘を貸さツし。

彦右　斯う濡れては、大變々々。

くに　イエ〳〵、もう傘はござりませぬ。なんなりと冠つておいでなされませ。

勘六　ナニ、傘は無い。……なんぞ冠りたいな。

ト内を見廻す。

六兵　オイ〳〵、火消し壺がある。これを冠らう。

ト冠る。

勘六　この飯櫃でも冠らう。

ト蓋を取り

中に白い物があるな。

くに　アモシ、そりや團子の粉でござります。

勘六　なんでも頓着は無いワ。

ト冠る。

三人　ソリヤ、降つて來た。まだ爰らがよからう。

ト三人冠つた儘、竈の前に居る。

杢郎　イヤア、皆相應に冠る物が出來たが、この家主は何を冠らうな。

山三　コリヤ〳〵、家主、其方、なんと心得て居るぞ。

杢郎　どうしました。

山三　コリヤ、此やうに家内の雨漏りが、家主が目にはからぬか。なぜ此やうに損ねた家を貸し附け、家賃を催促は致すのだ。この雨漏りを留めねば、家主とて容赦は無いぞ。

ト杢郎兵衛慄へ

杢郎　ア、、御尤もでござります〳〵。借家は餘程損ねましたが、此やうに漏らうとは、毛頭心附きませぬ。これはしたり。イヤ、また漏つて來た。

ト いろ〳〵思ひ入れ。

くに　わたしや、お飯も仕掛けにやならぬが、旦那樣、マア、どうぞして。

山三　コリヤ〳〵。いつまで傘をさして居られうぞ。漏りを留めぬか〳〵。

杢郎　ハイ〳〵、只今留めます〳〵。

ト そこらを尋ね、大盥を見附け

あるぞ〳〵。コレ〳〵、旦那の上へ、この盥を吊さう。手傳つて下さい。繩は無いか〳〵。

くに　心得ました。爰にござります。

ト 竈の下より繩を出し、大盥を結へ、杢郎兵衛、お國、山三の上へよろしく吊上げ

杢郎　サア〳〵、これでどのやうな雨でも、請合ひでござります。

山三　成る程、これでは傘を持つ世話も無い。ア、、いかう肩が張つて參つた。

ト 盥の下へ入り、横になり

コリヤ〳〵、其方は爰へ來て、足を撫つてくれ〳〵。

みど　アイ〳〵。

ト 山三が足を撫る。

くに　私しは小降りなうちに、お飯を焚きませう。モシモシ、お前樣方、雨やみのうち、お歸りなされませか。

ト 水加減を見て、焚きつける。

勘六　イヤ〳〵、槍が降らうが、勘定のないうちは、動かぬ〳〵。

六兵　左やう〳〵。掛けを取らぬうちは、居催促でござる

彦右　一寸も爰の内は、動かぬ〳〵。

ト 云ふうち、頻りに雨車、大降りの體。三人堪りかねて

六兵　サア〳〵、漏つて來た〳〵。誠に虎狼より漏るが怖いとはこの事だ。

彦右　これは大もり〳〵、飛んだ茶漬だ。何分居催促も出來まい。

勘六　雨やみまで出直して來よう。

六兵　さうしませう〳〵。

ト 各自冠りし物を取る。火消し壺を冠りし六兵衛の顏黑くなる。小桶を冠りし勘六の顏白くなる。干葉の鍋冠りし彦右衛門の顏萠黄色になる。三人の顏、三色になる。杢郎兵衛見て

杢郎　イヤア、三人の顏が、三色〳〵。

勘六　そんならおれは白くなつたか。面は變つて、雨には濡れ

彦右　こゝらで狂歌は、斷うであらうか。

杢郎　なんと〳〵。

彦右　おれ青く、お前は白い面なるに

六兵　何とてわしは黒くなるらん。

杢郎　掛取り喜べ、歸りは素的に濡れるわやい。

三人　何を云はつしやる。……ソリヤ又、降り出すぞ。

ト絲立、蓆なぞを被り、雪駄を下げ、腕捲りして、一散に駈け入る。お國、釜の下を焚きながら

くに　コレ、禿さん。旦那も御寢になつておやさうな。お前もちつと奥へなと行て、わしが借りて來た草双紙、それなと見て、花魁のござんすを待ちなさんせ。

みど　そりやア嬉しうおすが、また漏りはしんせんかえ。

くに　イヤ〳〵、雨はすつかり上がつたわいなア。

みど　そんなら行つて、見ようかいな。

ト合ひ方になり、障子の中へ入る。杢郎兵衛思ひ入れあつて

杢郎　さて、山三どのは寢入るし、禿は奥へ行くし、コレお國、この間わしが、わが身へ附けた文の返事を

ト手を取り、いろ〳〵と思ひ入れ。

くに　アモシ、惡い事なされまするな。わたしや、左樣な事は。

杢郎　ナニ、惡いものか、隨分好いものだ。コレ、爰でおれに

トしなだれる。お國門口へ逃げる。杢郎兵衛追ひ廻す。爰へ下座より、若い者一人、走り出て、杢郎兵衛を捕へ

若者　モシ〳〵、杢郎兵衛さま、人別がござります。今お出でなされませ。

杢郎　イヤ、そこどころではない。ちつと此方に人別が

若者　ハテ、組合ひの衆が待つて居ります。

ト杢郎兵衛を無理に引摺り、下座へ入る。この時、暮れ六ツの鐘鳴る。お國思ひ入れあつて

くに　あの家主樣がござんすと、逢ふ度々に、うるさうてうるさうて。……こりやモウ日暮れ。ドリヤ、灯をつけて

ト合ひ方になり、火打ち箱にて短檠の灯をつけて、山三が枕許へ持ち行き、思はず寢顔に見惚れ、懐より前幕に貰ひし錦繪を出し、山三の顔と引合せ、見る事あ

つて
いつぞや拾うたこの錦繪、此やうな殿御もあらうかと、
思うて居るに、旦那のお顔がこれ程までに。
ト錦繪を山三の顔と引合せ、思ひ入れ。この時、山三
寢返りするゆゑ、お國ちやつと懷中なし、素知らぬ顔
にて
ほんに、買つて來たこの酒、手の附けぬうち、お神酒に
上げて
ト荒神棚を見て
これはしたり。また徳利を鼠が落したさうな。徳利の出
るまで、この銚子でなりと
ト誂らへの銚子を取つて、徳利の酒を少しつぎ、火打
にて銚子へ切火打ちかけ
お神酒徳利の出ますまで、御免なされて下さりませ。こ
れで上げまする。
ト荒神棚へ上げる。この時、向うバタ／＼、人音して
大勢　泥坊々々。
ト聲して、向うより又平、懷へ男帯を入れ、駈けて
來て、一散に内へ逃げて入り、キョロ／＼する。お國
恟りせしが、よく／＼見る

くに　ヤ、お前は父さんぢやないかえ。
又平　娘、ちつとのうち、隱してくれ／＼。
トうろ／＼する。向うより長八、湯屋の番頭の拵らへ
仙八、流しの三助にて、その外、仕出し大勢出て來り
皆々　向うの内へ入つた／＼。
長八　なんでも取返さねば云ひ譯がねえ。
仙八　番頭さん、逃がしなさるな。
ト此せりふ云ひながら、門口より又平を見附け
皆々　ソリヤ、爰に居るワ。泥坊々々。
ト皆々寄つて、又平を捕へ、門口へ引出す。お國驚ろ
き、支へる。
又平　コレサ、どうするのだ／＼。
長八　どうするものだ。來やアがれ／＼。
ト引ッ張る。
くに　アヽ、コレイナア。お前方は、老人を捕へて、どう
しなさんすぞいなア。
長八　コレサ、姐さん、構ひなさんな。わしはこの新道の
瀧の湯の番頭だが、この親仁が度々來て、板の間を働ら
くが、今日も無くなつた物があるから、追ッかけて來た
のだ。退かつしやい／＼。

仙八　連れて行つて、油煙を塗りやせう〳〵。
皆々　泥坊々々。
　ト立ちかゝる。お國留める。
くに　これはしたり。どうしてマア其やうな事を。
又平　おらア何も盜つた覺えは、ないぞ〳〵。
長八　コレ、人の目からは、女湯ばかり見て居るやうに見えても、どこの棚へは、どの人が脫いだといふ事は百も承知だ。ハテ、われが盜つたに違ひはねえ。出せ〳〵。出しやアがれ。
くに　モシ〳〵、番頭さん。して、この人が何を盜りましたえ。
長八　その代物は、博多の男帶。懷を探せ〳〵。
又平　わしは何も盜んだ覺えはねえが、それとも疑はしくば、懷でも探せば知れる。ソレ、見ろ〳〵。
皆々　改めるがいゝ〳〵。
　ト立ちかゝり改める。何も無きゆゑ
又平　ソレ見たか。懷には何も無いワ。
長八　懷には無いが、背中を探せ〳〵。
皆々　後へ隱したな〳〵。
　ト皆々立ちかゝつて吟味せんとするはずみ、背中の方より件の帶落ちる。
仙八　ソリヤこそな。
長八　サアどうだ。太い奴だ。コレ、よく積つて見ろ。定りより二文つゝ込まれ、四文が糠で白水を流させ、その錢も拂はず、板の間まで稼がれては、其方は好いが此方は渡世が出來ぬワ。なんぼおれの面が輕石のやうでも、さう踏み附けにされてなるものか。大泥坊め。
皆々　ぶちのめせ〳〵。
　ト立ちかゝるを、お國とめる。
くに　アヽ、モシ〳〵。惡いながらも老人でござります。どうぞ御料簡なされておやりなされませ。ハイ〳〵、私しがお詫び申しますわいなア。
　ト取縋り、詫びる。皆々思ひ入れあつて
長八　エヽ、見せしめの爲に連れて歸つて、縛つて置かうと思つたに、この女中が挨拶だから、料簡するワ。重ねて來るな。
　ト件の帶を取る。
皆々　エヽ、太い奴だ。
　ト合ひ方になり、皆々捨ぜりふにて入る。
又平　大べら坊め。帶一筋で縛られて堪るものか。間拔け

めらが。打たれるなら打つて見ろ。縮らねえか。

ト行かうとする。お國縋つて

くに　ア、コレ、何をマア、みんなお前が悪うござんす。今度ばかりか毎度の事、盜み心のあるお前。どういふ事か年寄る程、お前は悪い心が増し、もう、どうぞその心を直して下さりませ。モシ、拜みます／＼。

又平　コレ／＼、娘。おれの心を直したくば、親に不自由の無いやうに、われが方から金銀を盜つてさへくれゝばツイ癒る病ひだが、何をいつても一文無し。それだから旦那へ願つて、金でも借りてくれまいか。

くに　どうしてマア旦那樣は、御浪人の便りなし。殊に廓に馴染んだお方のある御身。物入りこそあれ、貯へとては

又平　一文無しの素浪人。そんな主人に奉公するわれが悪い。それといふのも爰の山三に、日頃からわれが惚れて居るから

くに　ア、申し、どうしてわたしが

又平　イヽヤ、わりや、惚れて居る／＼。

ト大聲にて云ふ。これにて山三眼を覺まし、思ひ入れあつて

山三　ア、誰れぞ居ぬか／＼。

くに　ハイ／＼。御用でござりまするか。

山三　茶を一つくれ／＼。

ト起き上がり、あたりを見て

ア、もう暮れたか。……そこに居るは、國が親の又平ぢやな。

又平　ハイ／＼、左樣でござります。大きに御無沙汰を仕りました。御機嫌ようて、おめでたう存じまする。

山三　隨分機嫌は好いが、只吉原へ行く事が心に任せぬゆゑ、これぱつかりは機嫌が悪いぢや。コリヤ、國よ。

くに　ハイ、御用でござりまするか。

山三　今宵、太夫が身上がりをして來るとある。おれも太夫の歸りに、連れ立つて行かねばならぬ。身の廻りの支度は好いか。

ト國、當惑の思ひ入れ。

くに　ハイ／＼。隨分よろしうござります。あの濡れ燕のお小袖は、外へ預けて置きました。

山三　そりやまアどこへ、なぜに預けた。

くに　イエモウ、雨は降りますし、用心は悪うござりますし、お小袖の分は、いつもの編笠茶屋へ預けて置きまし

た。あれにてお着替へなされませ。

山三　オヽ、よし／＼あれが許にも着替へて行かう程に必らず間違はぬやうに致せ。

くに　イエ／＼、間違ひまする事ぢやござりませぬ。……父様々々。

ト又平を連れ、門口へ來る。

又平　娘、なんぞ用か／＼。

くに　イヽエイナア、旦那があのやうに仰しやれど、このお暮らしで、どうしてお召し物がお内にあるものぞ。有やうは皆質屋へ。

ト又平に囁く。

これ程無ければ

又平　成る程、その入れ替へは、爰の内ではむづかしい。マア何しろ、家内の道具を掻き集めて來るがいゝ。

くに　さうしやんせう。お前も手傳うて下さんせ。

又平　合點だ／＼。

ト二人し（、奥より小道具を、山三に見えぬやうに運び、風呂敷に包む。

山三　身共は太夫が見えぬうちに、心の丈を文に書き、彼奴に見せてくれやうか。

ト硯箱を引寄せ、文を書き居る。お國、件の風呂敷包みを脊負ひ、片手に屏風を下げ、質の通ひを持ち、山三に見附けられぬやうに、兩人いろ／＼思ひ入れあつて

くに　左様なれば私しは、太夫様のお出での前方、お小袖の事に行つて參りませう。

山三　オヽ、大儀ながら行て來てたも。併し、跡に誰れも

又平　ヘイ／＼、私しが居ります。

山三　オヽ、又平、居てくれるか。

又平　左様でござります。

くに　ドリヤ、一走り。

ト立戻り

コレ、父さん、飯が仕掛けてあるぞえ。

又平　オツと合點。

くに　ドリヤ、行つて來うか。

ト唄になり、お國、風呂敷包みを擔ぎ、向うへ入る。

又平　飯が仕掛けてあるといふが、燃えて居るか知らぬ。

ト竈のあたりを見て

南無三、飯の下は消えて居る。もつと薪をくべて

ト竈の下を見て

これは大變、薪が一本も無いワ。……モシ、旦那様、お飯を炊きまするに、薪が一本もござりませぬ。どう致しませう。

山三　アヽ、面倒な。何なりと焚けさうな物を見附けて、焚いて置きやいなう。ナニ、別しても無い事を。

ト構はず、文を書いて居る。又平思ひ入れ。

又平　それにしても、薪が無くつては飯が出來まい。アヽ、なんぞ焚き物を

トあたりを見廻し、こなし。

あるぞ〳〵。根太板を剝がして、あいつを焚いて。それそれ。

ト疊を取り退け、根太板を引出し、好き程に折る。この音を聞き、杢郎兵衛、路地より出で來り

杢郎　なんだ、あの音は。アヽ、又、山三どのゝ内で根太を剝がすのか。アヽ、惡い店子に困り果てる。引渡さうにも店請けは無し。とんだ者に店を貸した。

ト内を覗き

さてこそ剝がすぞ。……コレ〳〵、根太は御免だ。もう好い加減に剝がさぬか。

ト戸を開ける。

又平　剝がせば惡いか。

杢郎　惡くなうてか。地主へ立たぬワ。

又平　アヽ、お前は家主だの、

杢郎　さうよ。店賃は寄越さず、おまけに根太板を剝されては、家主がどこで立つものか。

又平　それでも、飯を炊きかけて薪がござらぬ。

杢郎　アヽ、薪の代りか。イヤ、呆れたものだ。

又平　モシ、大屋さん、ちつとのうち大目に見なせえ。

杢郎　そんなら今夜は大目に見るが、明日からは小目に見るぞ。

又平　明日の事はおらア構はぬ。

杢郎　ハテ、宿六に云ひつけさつしやい。……殊に、この節は物騷だ。路地を締め切りにしよう。

ト合ひ方になり、五ツの拍子木鳴る。又平、板を折り釜の下へ焚く。杢郎兵衛錠を出し

締ります〳〵。

ト花道へ錠を振りながら、捨ぜりふにて行き、路地の口へ錠を卸し、歸り來る。よき程に、勘吉、若い者の拵らへにて、揚げ幕の路地を叩き

勘吉　お頼み申します〳〵。

杢郎　エヽいま締めたに、誰れだよ。どこへござるのだ。

ト捨ぜりふにて、又歸り來る。

勘吉　お長屋の山三さままで參ります。

杢郎　いま締めた。早くござればよいに。

ト鍵を出し、路地を開ける。これにて勘吉引返し入る。杢郎兵衞、小言を云ひながら、路地を明ける。

直ぐに歸るのかえ。

トこの時若い者一人、ズツと大提灯を提げ入る。杢郎兵衞悔りする。これより摺り鉦入り、出の唄になり、上林の葛城太夫（實は岩橋）跡より禿一人附き出る。若い者、長柄を差しかけ出る。後より勘吉、新造、藝者、若い者、三味線箱を持ち、幫間左吉、後より若い者、二人、臺の物を持ち、この人數、路地の中へ通る。杢郎兵衞、肝を潰し居る。葛城、門口にしやんと立つて

葛城　逢ひたさに、今宵くるわの夜櫻を、後に見なして雁がねの、聲もろともに來て見れば、爰が思はく主さんの

左吉　深間のお客の慥か別莊。

新造　根岸、三の輪に事がはり

藝者　ひねつた寮の一構へ

勘吉　五大力なら大和町

左吉　鳥越町の裏借家。モシ、葛城さん。

杢郎　そんならこなたが評判の、上林屋のお傾城。

皆々　葛城さんぢやわいなア。

杢郎　イヤア、道理こそ〳〵。併し廓に程近き、この鳥越の裏店の、三尺路地を道中とは、こりや年代記に載るであらうよ。

左吉　無駄を云はずと大屋さん、山三さんのお宅へ案内。

杢郎　わしが店子の山三どの、今宵は内にぢや。

葛城　そんなら逢うて、何かの話しを

皆々　太夫さん。

葛城　子供、來や。

禿　アイ〳〵。

ト淸搔になり、皆々内へ入る。奧よりみどり出て

みど　太夫さん、ござんしたかえ。

ト山三これを聞き

山三　ヤア、太夫。來やつたか〳〵。

葛城　山三さま。この程は、すつきり廓へ

皆々　お見限りでござりまするなア。

山三　ようマア皆も來てくれた。マア〳〵、爰へ來や〳〵。

ト盥の下へ葛城を連れ行く。皆々見て

若者　モシ／＼、旦那、このマア吊つた物は、なんでござりまするえ。

山三　この盥か。こりや今まで雨が漏つたによつて、防ぎの爲に吊して置いたのぢや。

皆々　エヽ、そんなにお内が漏りますかえ。

山三　漏るとも／＼。今まで内よりか、外がましであつた。コレ／＼、てまへ達も、そこらはぬかゝう程に、氣を附けて坐りやれ。

勘吉　イヤア、それほど爰のお内は、道が惡うございまするかえ。

又平　モシ旦那、お客があつても、幸ひ爰に酒はござりますれど、肝腎のお肴がござりませぬ。

ト一升徳利を出して見せる。

左吉　その心配は御無用々々々。肴は即ち花魁のお持たせ。若い衆、爰へ持ち込まつせい／＼。

若者　心得ました。

ト件の臺の物を吊り込み、好き所へ直す。杢郎兵衛見て

杢郎　こいつは飲めるワ／＼。山三どの、店を追はうと思つたが、斯ういふ樣子を見ては、わしが店に幾久しく、松杉をお植ゑなされて下さりませ。

山三　ハテ、家主めが、受け居つたな／＼。……して、葛城は、どうしてマア、今宵廓を。

葛城　サイナア。旦那樣に願うて、これまで例しの無い趣向。僅かの間を斷わり云うて、大門から早駕籠で、この入り口でわたしが支度、仲の町と違うて手狹ゆゑ、大きに難儀を

新造　さうでござんす。太夫さんの頭の道具が、兩側へ觸るやら

藝者　外八文字の振出し歩み、下水の板から危なう見え

勘吉　さしかけてくる長柄さへ、物干へ觸るやら

又平　併し、そこが花魁の、稽古の爲には肝腎々々。

山三　ナニ、太夫の稽古とは。

又平　どうでお前と女夫におなりなさるのは定の物。さすれば屋敷でお暮らしなさるか、また此やうに裏借家か。夫婦住居のその時は、水も汲んだり飯も炊き、薪も割らねばなりませぬ。

杢郎　互ひに手鍋を提げ合うても、夫婦暮らしは女の情。併しお飯の炊きやう、知らずばなるまい。モシ花魁。

山三　成る程、又平の云やる通り、葛城、其方も習うて置きや。
葛城　そんなら、お二人さん、どうぞ教へて下さんせ。
又平　ハイ〳〵、承知々々。大屋さん、店子の事だから、お前教へて。
杢郎　教へます〳〵。併し、口教へでは覺え憎いから、輕業の口上で教へて上げませう。お前方、鳴り物を頼みます。
皆々　心得ました。三味線胡弓、持つて來さつし。
ト箱の中より三味線、胡弓、その外、鳴り物を出し
又平　サア〳〵、始めさつせい〳〵。
ト輕業の鳴り物になり、皆々手んでに鳴り物にかゝる。杢郎兵衛、竹柄杓を葛城に持たせ
杢郎　さて〳〵〳〵、さて花魁。お飯炊くなら、始めちよろ〳〵、中くわつくわ。赤子泣くとも蓋取るな。これがお飯の炊きやうぢや。
ト此うち鳴り物、片脇より干大根と爼板を持ち出し來て
さて〳〵、お汁するなら、味噌をよい程摺り置きて沸え立つ程に此方では、若芽大根干葉豆腐、汁の實刻みは干大根。この庖丁を斯う持つて、ちよつきりちよいと斯う切つて、殘つた所は、はり〳〵と。……さて〳〵さて、もう飯が
皆々　出來たか〳〵。匂ふワ〳〵。
杢郎　匂ふか〳〵。もしやまんまが、片煮え〳〵。
ト釜の前へ行き
水の加減か〳〵。
トよく見て
東西。
ト鳴り物打上げる。こなしあつて
仕方を持ちまして、まんまと首尾よく
皆々　どうだ、出來たか。
杢郎　とつと焦げたり。
皆々　おきやアがれ。
ト杢郎兵衛、思はず下家へ踏み込み、驚ろき
杢郎　アイタ、、、。誰れか縁の下で、おれの足を引ッ張るやうだ。
皆々　ナニ、誰れが縁の下に居るものか。……ソリヤ、引上げろ。
ト皆々杢郎兵衛を引上げる。縁の下より犬一疋出て來

る。

ソリヤ、病犬だ〳〵。

ト皆々騒ぐ。杢郎兵衛、路地の中へ逃げて入る。此うち新造、祝儀の包み金を各自へ渡す。

新造　旦那、花魁から。

皆々　エヽ、有り難うござります。

又平　時に、折角お出でたが、花魁は暇どつてもいゝのかの。

左吉　そこは我れらが呑みこんで、上林の内證は勿論、會所へちよつと屆けて來ませう。

新造　わたしも一緒に、暇どる樣子を

藝者　會所へわたしも參りませう。

皆々　左樣たらば山三さま、跡でしつぽり

山三　また惡口を

皆々　ハテ、おしげりなされませ。

ト唄、時の鐘になり、又平奧へ、皆々殘らず向うへ入る。山三、葛城殘り、合ひ方。

葛城　山三さん。して、お前の親御の敵の手がゝり、その節失せしお家の系圖の

山三　今以て行くへ知れず。殊には親人の差し料、無銘なれども國俊の、劍を奪ひ立退く曲者。今一振りは、山三が方に所持する刀。陰陽二つの劍にて、寸尺揃ふ二振りの、白刃は何方の鞘へなと、しつくり合ふがこれ名作。

葛城　わたしもいつぞや鎌倉にて、この身の越度にお暇のその節お前も御浪人、貢ぎの爲と身を沈め、いま吉原で葛城と、辛い苦界のその中で、わたしへ心を掛けて居る、伴左衛門もこの程は、白柄組の頭分、その名も寺西閑心さん。

山三　廓に來るといふ事は、ほのかに聞いたそれゆゑに、其方に逢ひたう思うた譯は、心憎き伴左衛門、正しく系圖も親人を、討つて劍を奪ひしも、彼奴が仕業と思へども、手がゝり無ければ、これとても

葛城　そりや氣遣ひなさんすな。夜每に通ふ伴左衛門、わたしがサッとその詮議。……さはさりながら、兼ねてお前も御存じの、素性賤しきわたしは捨て子。

ト頭に挿したる割り笄の片しを取つて

後藤祐乘が蘆間の鷺。包んでありし書附けに、四十二の二つ子ゆゑ、捨てるとばかり、親御の家名實名も、今にそれぞと知れぬ身の、便りに思ふ山三さま。

山三　その元春も今の身は、尾羽打枯れし浪人の、我れに

劣らぬ兄弟の、契約なせし白井權八、彼れも失ふ神妙劍。詮議の爲に正しく廓へ。

葛城　さう云はしやんすりや、この間から、三浦屋へ通はんす、扇蝶さんといふお方。似寄りと思ふに違ひなう、そんならあなたが、慥かに白井

ト云はうとする。

山三　アコレ、必らずその名を沙汰せぬやうに。……ア、思へば思ひ廻す程、今の山三が朝夕の、煙も細き浪々を貢いでくりやる志し。コレ、手を下げて禮を云ふぞや。

葛城　これはしたり、譯も無い。他人がましい。現在女房に

山三　サ、その女房に、勸めをさする

ト思ひ入れ。

葛城　エヽ、まだかいなア。

ト山三に寄り添ふ。唄になり、向うよりお爪、遣り手にて先に立ち、以前の人數、殘らず、大提灯を持ちし若い者も出で來り

つめ　モシ〳〵、葛城さん。どうしたものでござんすぞ。あれ程わたしが云ひ含め、知らぬ顏なる今夜の樣子。此やうにマア大業に、餘所も廓と同然に。お前方も附いて居ながら。サア花魁、お歸りなんし〳〵。

ト此の時、又平出かゝり居る。

葛城　成る程、わたしが長居したのが惡うござんす。もう直ぐに歸りんす。モシ、山三さん。お前も一緒にござんせぬかえ。

山三　行くは行かうが、使ひにやつた、下女の國の歸らぬうちは。

又平　アノ、娘も、もう歸りさうなものぢやが。

つめ　ヤア、こなたは又平どの。こなたに逢うて、ちつと話しが。

山三　アヽ、又平は昔馴染みといふやうな事か。

つめ　こりや見通しぢやわいな。

新造　モシ、太夫さん、夜の更けぬうち、少しも早う

藝者　お歸りなさんせいなア。

葛城　そんなら、必らず。

皆々　お早うお出でなされませ。

つめ　コレ、若い衆や、わたしや殘つた用事もあれば、ちつとも早う太夫さんを

皆々　送り申して、太夫さん

葛城　山三さま。……さばえ。



昭和四年四月帝國劇場上演

澤村宗十郎の山三　　尾上梅幸のお國と葛城

ト唄になり、この人數皆々向うへ入る。三人殘り

又平　コレ〳〵、遣り手衆、わしに用とは。

つめ　コレイナア、又平さま、お前も不粋な。どうして爰へ。

山三　ア、、聞えた〳〵。又平は今獨身ゆゑ、遣り手の其方と茶飲み友達とかいふやうな事か。さうかさうか。

つめ　アモシ、どうして左樣な事を。

山三　サア〳〵、遠慮はない。しつぽり話して行け〳〵。

又平　これは迷惑な其お詞。

山三　違ひはあるまい。

つめ　オ、、恥かしい。

又平　氣が狂つたさうな。

ト唄になり、お爪、又平の手を引き奥へ入る。この唄を借り、向うより以前のお國、風呂敷を抱へ出て來り、直ぐに内へ入り

くに　ハイ、只今戻りました。

山三　オ、、國か。いま歸つたか。今まで廓の者も、葛城も居たわいの。ア、、其方は逢はいで。

くに　イエ〳〵、只今あそこで、ちよつとお目にかゝりました。

山三　それは滿足。わしも後から行かねばならぬ。小袖はどうぢや。

くに　ハイ、よろしうございます。預けました先樣より、受取りまするに手間が取れました。それゆゑ遲なはりましたが、いつもの通りお召し物は、編笠茶屋まで屆けて參りました。

山三　それは滿足。コリヤ國よ、髮は結ひ直すには及ぶまいが、ちよつと爰へ來て、撫でつけてくれ〳〵。

くに　ハイ、畏まりました。お髮は昨日お結ひなされましたから、見苦しくはござりませぬが、ちよつと撫でつけませう。

山三　サ、早うしてたも。

くに　ハイ〳〵、畏まりました。

ト誂らへの合ひ方になり、お國、鏡臺を山三の前へ直し、髮を撫でつける。この時、例の錦繪出かゝり居る。山三、鏡に映るお國の顔を、つく〴〵見て思ひ入れ。唄切れる。

山三　我が心、鏡にうつる物ならば、さこそは影の

くに　エ。

山三　後は何とか。

ト　お國思ひ入れ。

くに　この下の句は、みにくかるらん。……とか申しまするな、

山三　ヤ。

くに　醜き下女のわたしの顔が、あなたの鏡へ映りまするも、勿體なうござりまする。……ハイ、もうよろしうござりまする。

ト行かうとする。この時、例の錦絵落ちる。山三ちよつと取るを

ア、モシ。

ト寄るをお國の手を取り

山三　コレ、國、其方は慥かに

くに　モシ、旦那樣、こりやどうなされまする。

ト顫ふ。

山三　どうもせぬが、この山三は、わが身に惚れた。

くに　エ。

山三　サ、疾から其方に心があるが、コレ、今宵はわしが願ひ、叶へてはくれまいか。

くに　此やうな見苦しい私しに。

山三　眞實、心から其方には

くに　モシ、旦那樣、そりや御胴慾でござりますわいなア。

ト泣き伏す。合ひ方變り、お國思ひ入れ。

只今も廓から、逢ひにお出での葛城さま、姿風俗何一つ揃はぬものもない女子を、お持ちなされたあなた樣、それに水仕の私しが、十人並にも勝れた不器量。それを捕へて惚れたとは、不具なわたしをお嬲りなさるゝお詞は有り難けれど旦那樣、そりや胴慾ぢや。お情なうござりますわいなア。

ト山三、氣の毒なる思ひ入れ。

山三　わが身に其やうに云はれては、この山三、面目次第も無い。……堪忍しや〳〵。物堅い其方の心を知つて居ながら、ツイ今のやうな戯言云うたのは、其方の手前恥かしい。今のは嘘ぢや程に、必らず氣にさへてたもるなや。

くに　其やうに仰しやつて下さりますれば、却つて罰が當ります。

山三　なんの其方に罰が當るものか。罰が當ればこの山三。其方のやうな貞女な者に、戯言云うたはおれが誤まり。一人の男を守つて居るとは、ハテ羨ましい。

ト　お國これを聞き咎め

くに　そんならなんぞ私しに、不義がましい事でも。
山三　アノ、白々しい。隱しやいなう。其方が朝夕、肌身離さぬその錦繪。まだその上に、慥かに腕に
くに　エ。
　ト恥かしきこなし。
山三　それほど眞實惚れて居る、男があるゆゑ、それでわしに。……ハテ、その男はどこの誰れぢや。云うて聞かしや。……この山三とて野暮ではないわいの。
　トいろ〱云ふ。お國恥かしき思ひ入れ。
くに　其やうな有り難いお詞を下さりますれど、どうしてあなたに打ちつけに。
山三　云はれぬ程に心底づく。隱す程猶聞きたい。ちよつと其方の腕の
　トお國が腕を取るな
くに　アモシ、お免しなされませ。
山三　イヤ〱、なんでも見にやならぬ。
　ト嫌がるお國が腕を、無理に引捲り、見て思ひ入れ。
山三　なんぢや。……旦那様命、……ハテ、變つた腕の刺青ぢやなア。
くに　この旦那様とは、外にござりますかえ。
山三　ヤ。
くに　勿體ない事ながら
山三　そんなら其方は
くに　疾からあなたに
山三　ヤ。
くに　ハイ。
　ト顏を隱す。
山三　ハテ、可愛い奴ぢやなア。……その眞實な志し、仇には思はぬ。今宵は互ひに。
くに　勿體ない事ながら、これで死んでも私しは
　ト思ひ入れ。
山三　奧の小部屋で。……コレ、先づ屛風を
くに　ハイ。屛風は先程、餘所へ
山三　餘所へ貸したか。ハテ、屛風代りに
　ト件の傘を取上げ
幸ひ爰に有り合す、開く屛風のその代り、開く傘、家の紋、これなと立てゝ
　ト傘を開く。
くに　モシ、有り難うござります。
　ト寄り添ふ。

山三　傘の文字は照降町の……降らねばよいが。

ト唄になり、上手の一間の内へ入る。おとゝ合ひ方、時の鐘にて、又平、お爪出て來り

又平　そんなら貴樣は、おれが古主の、伴左衞門さまが乳人といふのか。

つめ　アイナウ、わたしが手汐に育てたあの和子、惚れてござる葛城太夫、どうぞ叶へて上げようと、上林屋へ遣り手奉公。所へ妾の山三めが、逢う馴染んだあの葛城。生けて置いては戀路の邪魔。伴左衞門さまのお指圖で、山三を毒で押ッ殺す、その毒藥も持つて來ました。貴樣は山三へこの毒藥、服ます工夫を頼むぞや。

ト毒藥包みを渡す。

又平　ア、、そんなら山三をこの毒でか。……よし／＼。そこらは拔からぬ又平。伴左衞門さまに荷擔して、境木の松原で、山三が親の山左衞門、權八が親の兵左衞門、二人を殺して神妙劍、系圖の一卷盜んだが、この又平も僅かな褒美。今では屋敷へ出入りも叶はず。この毒藥でコロリと殺つたら、こなたの世話で

つめ　伴左衞門さまには、わたしが好いやうに、取持ちをする程に、必らず共に油斷なう。併し娘のお國には、この事を

又平　そりやア合點だ。山三が僞にも、この又平は親の敵の片割れ、なんぼ間抜けな山三でも、彼奴があつては寢覺めが惡い。毒で殺すは物怪の幸ひ。して、その毒を彼奴に飲ますその工風は

つめ　飲ます仕樣は酒の中。……ほんに幸ひ酒徳利、これへ仕込んで。……お前は奥へ氣を附けて

又平　合點だ／＼。

ト奥の方を窺ひ居る。其うちお爪、徳利の口へ毒を入れる事あつて

つめ　毒が廻れば泡立つ筈ぢや。

ト酒の樣子を慥かめんと、棚の銚子を取つて來て、これへ移し入れ、よく／＼見て

成る程、泡立つて來たワ。

ト蓋をする。この時、棚へ鼠出て片口を落す。惘りして手早く銚子を元の所へ直す。又平此方向いて

又平　今の音はなんだ。

つめ　鼠が棚の物を落して。

又平　毒はどうした。

つめ　この徳利の中へ。これを山三へ。合點か。

ト徳利を渡す。

又平　呑み込んだ。首尾よくやつて、追ツ附け飲まさう。

つめ　必ずともに、又平どの。

又平　おれが詫び事。伴左衛門さままで。

つめ　氣遣ひさんすな。ドリヤ、この事を。

ト唄になり、お爪向うへ入る。又平殘つて

又平　ア、、婆アめが頼みの毒藥。これでゆかずは、寢込みをぐツさり。

トあたりを見廻し、出刃庖丁を取つて手拭に卷き

彼奴を殺す前方に、金目の品を

ト件の障子の中を窺ひ、片手にて障子の間より、お國の帶を引出す。これにてお國恥かしき思ひ入れにて、出て來て、帶を尋ねるこなし。又平これを知らず

トお國と顔合せ

こりや、女帶、もしや娘が

ヤ、われは。

くに　父樣か。

又平　コリヤ。

ト合ひ方變る。お國思ひ入れ。

くに　先刻も表へ多勢が、打てよ叩けと、あのマア噂が人さんに、聞かされた事かいなア。今も座敷を窺ふお前、わたしが帶とも氣が附かず、盗む心でござんせうがな。

又平　靜かに云はないか。親の讒訴、なんであらはに。

くに　それでもお前、あんまりでござんす。

又平　決して他人に沙汰するな。おれも有やうこの頃は、打續いての不仕合せ。工面が惡さに出來心。併し錢金乏しいうちは、盗み心は

くに　そこをどうぞ辛抱して、惡い心をやめて下さんせ。その代りには娘のわたし、身に叶うた程貢ぎます程に、どうぞ盗み心は、この上ともに、必らず止めて下さんせ。コレ、拜みますわいなア。

又平　娘のわれが頼み事、惡根性をやめてやらう。併し、貢いだとて、高の知れた水仕奉公。賣らうといつて野拵ぎの外、向かない代物。と云うて、それ程までに親への頼み。いゝワ。外に又われに頼む仕事がある。いゝワ。惡根性は、止めてやらう〳〵。

くに　エ、、嬉しうござんす。その代りに、わたしが身はどのやうな辛い目にあうても、いとひはござんせぬ。そんならキッと、やめて下さんせえ。

又平　ナニ、嘘を云ふものか。われにはこの上頼みがある

から、心は直す。必らず疑ふな。ほんに止めるワ。
くに　有り難うござりまする。それ程までに云うてなら、
わたしが疑ひ晴らす爲、お前に誓紙を
　トあたりを見廻し、神棚の銚子を取つて來り
父さん、いよ〳〵心が直るといふ、神へ誓ひしその誓紙
この神酒飲んで下さりませ。
　ト茶碗を添へて出す。
又平　ナニ、神酒を飲め。……この德利の酒か。
くに　イエ〳〵先刻神樣へ、銚子のまゝ上げた酒。
又平　德利の酒とは違ふのか。
　ト思ひ入れあつて、件の酒を德利のまゝ取り來り
それなら飲まう。親が娘に嘘吐かぬ、誓ひの爲にこの酒
を
くに　お前が上がつて、わたしが後で
又平　親子互ひに心の固め。サア〳〵、娘、一つ注げ。
くに　ハイ〳〵。嬉しうござりまする。
　ト酌をする。又平飲んで
又平　サ、おれは飲んだ。てめえも親が云ふ事を、背かぬ
といふ誓紙のこの神酒。飲んで見せろ。
くに　アイ〳〵、飲みまする。直ぐにわたしがこの神酒を
　ト茶碗へ一つ注ぎ、干す。これを又平見て
又平　この上ともに同腹中。親が娘に頼むといふは
　トあたりを見廻し、小聲にて
この酒、山三に飲ませてくれろ。
　ト件の德利を出す。
くに　アイ、仰しやらいでもこの酒は、旦那が寢酒に
又平　飲むと其まゝ斷末魔。苦しむ時に驚ろくな。必らず
おれが指圖だと、その時云ふな。
くに　エヽ。……この酒飲むと、苦しむ譯は
又平　こりや毒酒ぢや。
くに　エヽ。
又平　われが意見で根性を、直す代りにこの酒を、飲ませ
て殺せばこの身の出世。キリ〳〵山三にこの酒を
くに　エヽ。すりや旦那樣に、なんの恨みがござんすぞ。
又平　恨みはないが去年の事、さるお方に頼まれて、山三
が親の山左衛門、おれが手傳ひおッ殺し、云はゞ此方は
敵の片割れ、山三が知つたら只は置くまい。そこで彼奴
が知らぬうち、殺してしまへば寢覺めがいゝ。キリ〳〵
毒を飲ませてくれろ。
くに　エヽ、情ない父さん。現在のお主に、どうして毒が

又平　彼奴がわれに主なれば、おれも主人に頼まれた。誓ひの神酒を飲んだからは、それでも頼みを背くのか。
くに　サア、それは。
又平　誓ひは嘘か。
くに　サア、それは。
又平　サア
くに　サア
兩人　サア／＼／＼。
又平　キリ／＼、毒を山三めに
　ト云ひさま血を吐き苦しむにぞ、お國驚ろき
くに　ヤ、父樣、お前は
　ト驅け寄らうとして、これも苦しみ、血を吐く。
又平　ヤ、、、。總身俄にこの苦しみ。發熱頻りに五體の痺れ、もしや酒が間違うて
くに　二人が毒を
　ト又平、銚子の蓋を開き見て
又平　さてこそ泡立つこの酒を、現在親に飲ませたな。……もうこの上は、うぬ、山三めを
　ト立ちかゝる。お國止めて
くに　その心ゆゑ親も子も、毒に苦痛。どうぞあなたに刃向ふ事は
又平　イ、ヤ刃向ふ。毒を飲んでもこの親仁、出世せぬうち滅多に死にやせぬ。邪魔すりや、うぬも
　ト立ちかゝる。
くに　お主へ手向ひ見ては居ぬ。父樣ながらも
　ト縋り寄つて出刃を奪ひ取り、突いてかゝる。又平捕へて
又平　うぬ、親殺しめ。
くに　イ、エ、お前が主殺し。
　トよろめき／＼、又平の出刃を奪ひ、突いてかゝる。兩人次第に毒の廻るこなし。ト、又平。お國の出刃を取らうとして、出刃の柄拔けて思はず脾腹へあたり、タヂ／＼として、床の拔けし穴へ落ちる。お國よろめくはずみ、短檠の火消える。此うち、始終忍びの合ひ方。この時、山三、小袖を着替へ、上の障子より出で來り
山三　オ、、灯が消えた。國は居ぬか／＼。
くに　ハイ／＼。これに居ります。
　ト苦しき體。
山三　ア、、醉醒めか咽喉が渇く。水を一つくれ／＼。

くに　ハイ〳〵、

ト探りながら、手種の水を茶碗へ汲み、山三へ取りつきながら差出す。山三思ひ入れあつて

山三　ア、、其方にどうか致したか。持病か〳〵。

くに　ハイ〳〵。

ト此うち山三、水を一口飲み

山三　ア、もう飲めぬ。サア、捨てい。

ト茶碗を渡す。お國顫へながら、一口飲み

くに　これが末期の

トぐつと飲む。

山三　ア、又、積ぢやなア。

くに　ハイ〳〵。

山三　コレ、今から上林屋へ行く程に、また留守を頼むぞや。

くに　ハイ〳〵。お召し物は、いつもの茶屋へ

山三　オ、、着替へに行かうぞ。草履を見てくれ。

くに　ハイ〳〵。……お穿き物。

ト門口へ直す。

山三　直してあるか。灯をともせばよいに。

ト草履を穿き、門口へ出て、心づき

コリヤ。編笠をくれい。

くに　ハイ。

トまた探つて、笠を取り、門口の柱に取りつきお笠は爰に。

ト差出す手を取つて、兩人思ひ入れあつて

山三　ついした事の戯れに、思はず今宵は新枕。貞實其方を、宿に殘して

くに　お氣のむすぼれ、移るは廓の

山三　あの葛城は一夜妻。内に殘すは宿の妻。今より女房と

くに　エ、、有り難うござりまする。……どうぞ末々

山三　オ、、未來永々

ト手負ひと察し、思ひ入れ。

くに　エ。

ト嬉しげに手を合す。山三、門の戸をさす。途端、一時に木の頭。お國手を合せしまゝ、ガックリとなる。

山三　よう留守いたせ。

ト涙を隱し、思ひ入れよろしく、キザミ、拍子

幕

引附けると、淸搔になる。兩棧敷へ、仲の町の茶屋茶

屋の暖簾を引出し、吊り枝折り返しにて出る。

幕の內、淸搔のツナギ、引返し。

大詰　吉原夜櫻の場

役名━━不破伴左衞門。名古屋山三。長兵衞女房、お近。茶屋廻り、鷲の長吉。

本舞臺、三間の間、吉原仲の町夜櫻の景色。茶屋の門口望みあり。靑簾、軒暖簾、櫻の吊り枝。よき所に大樹、四つ目垣に枝垂れ櫻盛りの體。天水桶、たそや行燈。緣先には紋附き大提灯あり、賑やかに幕明く。

ト矢張り淸搔にて、長吉、茶屋廻りの形にて、臺提灯、金棒を引き、揚げ幕より本舞臺へ來り、東の揚げ幕へ入る。本釣り鐘鳴る。櫻チラ〱散る。河東めいたる唄淨瑠璃になり、揚げ幕より伴左衞門、深編笠、大小、雲に稻妻の羽織、衣裳、東より山三、深編笠、大小、雨に燕の羽織、衣裳にて出で來り、よき所へ兩人とまり、互ひに姿を見る事あつて、思ひ入れ。

伴左　遠からん者は音羽屋に聞け、近くば寄つて目にも三升の寬濶出立は、いま流行の白柄組、通ひ廓の大門を、入れば忽ち極樂淨土。

山三　歌舞の菩薩の君達が、妙なる御聲音樂は、誠に天女天下り、花降りかゝる仲の町、色に色あるその中へ、ごろつき組か雷の

伴左　これを知らずや稻妻の、始まり見たり不破の關、せきにせかれて目關笠。ふられて歸るか、雨に鳥。

山三　濡れる心の傘に、塒貸さうよ濡れ燕、濡れにぞ濡し彼の君と

伴左　くらべ牡丹の風俗は

山三　下谷上野の山かづら。

伴左　西に富士ケ根

山三　北には筑波

伴左　思ひ比べん

兩人　伊達小袖。

ト唄になり、兩人行き違ひて、互ひに思ひ入れ。行き違ひに兩人鞘當てる。唄切れる。伴左衞門、山三が鞘をキツと捕へる。鳴り物變つて、兩人思ひ入れ。

山三　刀の鐺摺へし御方、なんと召さるゝ。

伴左　これやこなたへ御免なれ。身はこの里へ通ひつめ、當世たゞら大盡と、人に知られて闇の夜も、吉原ばかり月夜かな。殊に夜櫻まばゆくも、咲き揃うたる仲の町、この往還を除けずして、なんで身共がこの鞘へ、武士の鞘當、挨拶さつしやい。

山三　そりや此方より申す事、大道廣き廓の内。我が物顔の六法は、よしや男の丹前姿、模様は雲に稻妻の、もしや噂の其許こそ

伴左　いま吉原に隠れなき、白柄組の寺西閑心、その名も高き富士筑波、心に違へば闇雲に、抜けば忽ちこれ稻妻、

山三　その模様とは事變り、雨の降る夜も雪の夜も、通ひ廓の上林、夜の契りも絶えずして、明くるわびしき葛城と、しつぽり濡るゝ濡れ燕。無法無體の行き違ひ、除けて通すも戀の道。

伴左　そこを素直に通さぬが、白柄組の達師の意地づく。

山三　白柄組の隨市川、閑心どのとはお云やれど、慥かに不破の伴左衛門。包むとすれど物腰恰好。

伴左　その聲音こそ覺えある、昔男の光る君、併し刃金は生鈍き、名古屋山三と見たは僻目か。

山三　面を包むは關笠、取つて貴殿の御面相。

伴左　こなたの面も覺ゆる爲、マアその笠を。

ト手をかける。

山三　貴公の笠も。

ト手をかけ、兩人立廻つて、冠りし笠を兩手にて取り合ひ、顔を見て恟り、キツとなる。

伴左　思ふに違はぬ名古屋元春。

山三　さいふは不破の伴左衛門。

伴左　絶えて久しき面會に

山三　場所も多きに東なる

伴左　花の中なる花の頃

山三　こし折れ櫻、吉原に

伴左　よしや男の名古屋氏

山三　今の家名は寺西氏

伴左　折よく爰で

兩人　逢ひましたなア。

山三　その行き違ひの鞘當が、緣となつたるこの場の出合ひ。して其許には、なんぞ用ばしでござつてか。

伴左　名古屋に用は別儀で無し。口數云はさず其許の、馴染んで通ふ葛城を、身が相方に貰ひたい。



七世市川團十郎の初演の錦繪



伴左衛門　三世尾上菊五郎の山三

山三　その儀でござらば相成らぬ。一旦約せしあの女、例へ刃金がなまればとて

伴左　イヽヤなまらぬ某が、刀にかけても葛城は、申し請けます貰ひます。左やう心得速かに。

山三　貰ひかけられ侍ひの、然らば貴公へ進上と、申したけれど、そりや成らぬ。

伴左　然らば斯様申しても、承引なくは是非がない。その時こそは看板の、雲に稲妻、劍の光り。

ト刀へ手をかくる。山三ちよつと留めて

山三　貴公の劍の稲妻の、その前方に山三めが、身に降りかゝる濡れ燕、花の吹雪の仲の町。

伴左　色ある中にこの出合ひ。是非とも身共が

ト抜きかけるを留め

山三　決してならぬ。

伴左　ならぬとあれば眞劍の

山三　相手になつて

ト兩方抜きつれ、立廻つて、キツとなる。誂らへの鳴り物、清搔入り、兩人切り結ぶ。立廻りよきキツカケに、向うより長兵衛女房お近、派手なる姿、衣裳、ぶら提灯を持ち來り、この體を見て、この中へ入り、兩方を留める事。兩人これに構はず切り結ぶゆゑ、有り合ふ大提灯を取つて、双方の白刃を押へ、キツと見得。

伴左　いらぬ女の支へ立て。

山三　怪我せぬうちに、退いた〳〵。

ちか　イヽエ、退かれぬお二人さん。眞劍づくのこの出合ひ、わたしも常の女子なら、オヽ怖なんぞと色めかし、見て見ぬ振りが女の情、それが成らぬが持前の、水道の水で育つたお庇。亭主は誰れぢや江戸ッ子の、先祖由緒も隠れなき、花のお江戸の花川戸、無理こじつけの長兵衛が、その女房の山の神、鬼の女房にきのつかぬ、生れながらもわたしが持ち前、劍の山の摘み草を、とめる女房に命づく。身は野晒しのしやれかうべ、あなめ〳〵に生えかゝる、その餅草に人知れず、雛の馳走に成田屋さん、今お一人は音羽屋さん。去年の顔見世深川で、仲直りして間も無いに、此いさくさはお二人さん、水道の水にさつぱりと、流してわたしに下さんせ。それも縁ある岩井の水、わたしが貰うたお互ひに、淸く流して、下さんせ。

伴左　すりや、其方は噂ある

山三　幡隨長兵衛が女房の

ちか　お轉婆者のわたしが願ひ。お怪我のないうち、この
白刃
山三　引けとあるなら山三めは
伴左　引く心なら、身共も共に
ちか　わたしを立てゝ
山三　爰を預けて
伴左　白刃は此まゝ。
山三　イザ
伴左　イザ
兩人　イザ〳〵〳〵。
　ト引く事あつて
伴左　拔いた刀を其まゝに、血を見ず納める仕樣があるか。
ちか　こりや尤もな其お詞。この場の遺恨聞かずとも、葛城さんの買ひ論から、事起つたるお二人樣。粹と通とが行き合へど、洗うて見ればこの里へ、通はぬ人が通ぞかし。わたしが亭主もこの程は、世話するお方に濃紫、逢はす手前も樣々な、狂言書くも戀の種。誰が始めけん買ひ論は、箱根手前に野暮だけと、化け物は無い世の譬へ。それを互ひに云ひ募り、兎や角云ふは大きな野暮。粹と通とは其まゝに、別れた上にて心ある、女郎衆を口說いて色客に、なるのが矢ッ張り勝つたるうち。お二人樣もその通り。心を定めてこの道理、それ辨まへて見やしやんせ。
伴左　イカサマ、云へばその通り。立つの立たぬは當座の利口。その通人を見習つて
山三　野暮は禁物、何事も、水に流るゝ吉原の、櫻と共に遺恨は落花、散る花の
伴左　なれども揃つたこの白刃。武士が血を見ず納めるは刀の手前侍ひの
ちか　掟が立たずは納める仕樣。中へ入つたわたしが働らき。お二人樣の白刃と白刃。こりや兩方へ引分けて
　ト山三の白刃を伴左衛門方へ廻し、伴左衛門が白刃を山三方へ廻し、兩方へ取違へ、兩人思ひ入れあつて
山三　山三が白刃を伴左衛門へ
伴左　身が白刃をば山三が方へ
ちか　取違へてもお二人の、御所持の鞘は矢ッ張り其まゝ。中心の魂ひ取替へるは、云はばこの場の杯代り。丸う納めるわたしが仲人。
伴左　イヽヤ、身共は浪人の、魂ひながらこの白刃、山三が方へは。

ト盗みし刀ゆゑ、迷惑のこなし。
ちか　それでは矢ッ張りお心が、解けぬ様子のあなたのお詞。是非とも中心を
伴左　サア、そればかりは
山三　得心なくば白刃の納まり、血を見る心か。
ちか　それぢやに依つてわたしが預かり、亭主に代つて女房が計らひ。関心さん、是非とも預けて下さんせ。
ト伴左衛門思ひ入れあつて
伴左　女ながらも長兵衛が、女房の詞、反故にもなるまい。然らばこの場で、この白刃を
山三　得心あらば、山三が白刃も
伴左　互ひに魂ひ取替へて
ちか　御遺恨残らぬ杯代り
伴左　そんなら鞘は
山三　両方互ひに
ちか　御所持の鞘へ。
トお近、鞘を取替へ、差出す。両人思ひ入れあつて、納める。この時鞘の變りし白刃、しつくり合ふゆゑ、両人取つて思ひ入れあり。
伴左　納まり難き山三が白刃
山三　伴左衛門が中心も其まゝ
伴左　寸尺少しも違ひなう
山三　しつくり合ふは
ちか　丸う納まるお互ひの
山三　丸に井筒の角なきやう
ちか　お頼みなくとも亭主も承知。
山三　かねて噂も
伴左　ヤ。
ト思ひ入れ。
山三　杯代りの両家の魂ひ、替りし鞘へしつくりと、陰陽揃ふ二振りの、その一腰は親人を、討つて立退く曲者か……さすればもしや、敵の手がかり。
ト伴左衛門立ちかゝるを、お近留めて
ちか　サ、刀に掛けて、物事丸う
山三　両は解けても心のうちは
伴左　解けぬは矢ッ張り葛城が
ちか　戀の遺恨の色事も
山三　胸の炎か陽炎の
伴左　その稲妻の不破名古屋。
ちか　互ひに不破の關越えて



初演の錦繪　　五世岩井半四郎のお近

山三　中を結ぶの名古屋帶、結び目かたき
伴三　ヤ。
ちか　サ、かたき掟は大門の
山三　關は許さじ肌ゆるされぬ
伴左　何かといかい
山三　お世話の一禮。
ちか　ナニ、これしきに。……お二人樣。
兩人　追つて、ゆるりと。
ト立ちかゝる。木の頭と共に本釣り鐘、櫻散りかゝる。お近會釋あつて
ちか　有り難うござりまする。
トこれをキザミ、二人笠をかぶる。本釣り鐘、早めた清掻にて、拍子幕引附けると、二番目の呼び、打込みになる。

幕

二番目序幕

石濱八百善別莊の場
汐入堤非人小屋の場

役名―庵崎蘭蝶 實ハ白井彌市。紫扇蝶 實ハ白井權八。三浦屋小紫。三浦屋女房、お高。八百善女房、お吉。本庄助八。幇間、左吉。料理人、與吉。若い者、源助。藝者、お富。非人、段八。同、熊。同、べか助。同、おだん。同、おねぶ。同、どん。下女、お瀧。

本舞臺、三間の間、中足の二重、本緣附き綺麗なる伊豫簾を掛け、上の方、九尺の亭屋體、明り障子、好みの額を掛け、その左側に四つ目垣、連翹の盛り。手水鉢。雪見燈籠。舞臺前、山吹の土手板、青草のあしらひ。下の方、建仁寺垣。例の處、風雅なる枝折り戸。すべて石濱八百善別莊の道具。爰に古鐵買ひ源兵衞、實は本庄助八、紺の脚絆、麻の財布を肩に掛け、秤と笊を持ち、古鐵屋の拵らへ。與吉、前垂れ、煮方の形。源助、三浦屋の若い者。幇間左吉。お吉、八百善の女房の形、お瀧下女にて、あたりを掃除して居る。大拍子、流行り唄にて幕明く。
助八　おかみさん、今日は何もござりませぬか。
たき　與吉さん、慥か蠟燭の流れがあるぢやござんせぬか。

與吉　オヽ、古鐵屋さん、お前の來るのを待つて居た。

ト後より紙袋に入れし蠟燭の流れを出し

まだそんなに溜らねえが、これを持つて行きなせえ。

助八　ハイ、有り難うございます。常住只お貰ひ申して、お氣の毒でございます。その代り、わたしが脇で掘出して來た刺身出刃がございます。これをお前に差上げませう。

與吉　そいつは有り難い。おれも今では煮方をして居るが、これでも何處かへ行けば板へ直るに、道具をポツ／＼拵らへにやアならねえ。有り難い／＼。

ト刺身庖丁を手拭へ包み、腰に挿す。

源助　カウ、蠟燭の流れや紙屑を、只遣るのは惜しい物だ。おらア三浦屋に不寢番をして居る時分は、これが給金だから。

助八　源公。三浦屋の三助さん。なぜ此方へ來て居なさる。

源助　花魁と一緒に來やした。

きち　小紫さんが病氣に就いて、出養生にも三浦屋の別莊は、氣が晴れいで悪いゆゑ、此方の寮へ二三日來て居なさんす。今日は又何やら小紫さんが、志しの日ぢやというて、藝者衆を呼んで、振舞ひぢやわいなア。

助八　見ますれば、お料理は魚類の様子。ひねつた御法事でございますね。

左吉　八百善の精進料理は、皆様がよく御存じだから、今晩はひねつて、魚づくしで振舞ふのサ。

源助　江の島に逗留して居るやうなもので、斯う魚で責めつけられては、眞に苦しい譯だね。

左與　違えねえ。ハヽヽヽヽヽ。

ト流行り唄になり、奥よりお高、三浦屋の女房の拵へ、藝者お富と禿、後より判人善六出て來り

たか　お吉さん。お前の所のお庇で、あの子の病氣も餘程見直して來ました。

きち　オヽ、おかみさん、今日は又何やらお志しの御法事。内の者へお志し、有り難うございます。花魁のお氣の晴れるやう、御遠慮なしに、お遊びなさるがようござります。

たか　イヤモウ、内より却つて心易う、我まゝ云ふも養生の爲。わたしまで氣が晴れましたわいなア。

善六　わしも花魁の御法事に呼ばれ、魚類の御馳走で腹が一ぱい。次手ながら申しまする。庵崎の蘭蝶さまが身請けの相談、其お話しを致しませうと存じて參りました。

とみ　その蘭蝶さんは、花魁が嫌うてお出でなさんすゆゑその話をし出したら、また病氣にさはらうぞえ。
たか　それ〳〵。兎角勤めの意氣張りで、お客を振るが吉原の癖。抱へた身では意見せにやならぬところなれど、そこが傾城の張りで、いま吉原で一二を爭ふ、上林の葛城か、三浦屋の小紫かと世間の評判。
善六　左樣でござります。その葛城さんは、山三さんとやらに大惚氣。それを寺西とやらいふお客が、引ッ張り合うて居るとの事。
とみ　丁度花魁と扇蝶さんのやうなもの。
たき　さしづめ蘭蝶さんが、寺西さんでござんす。
たか　サア、それ程派手を爭ふ全盛の小紫に、一日でも寢られては、先づ立入つた事ながら
左吉　左樣でござります。私しどもまで勘定が違ひます。
與吉　なんでも花魁の氣に逆らふ事は、云はぬがようござります。
善六　それでもお前、商賣づくの事、是非得心させにやアなりますまい。
たか　サア、それも餘程好い折を見て、機嫌の好い時、話し出す事もあらうわいの。

善六　左樣ではござりませうが、今日その蘭蝶さまが、爰へお出でなさる筈でござります。
源助　それでは又大變、花魁が癪であらう。
きち　その癪の起らぬやう、蘭蝶さまのお出でなされぬその先に、今朝花魁に頼まれた……お瀧、彼の物を。
たき　ハイ〳〵。これでござりますか。
ト懷より文を出す。
きち　今日鳥越まで來てお出でなさる筈。この文を……コレ、ゆかりどん。
ト禿を呼んで囁く。
ゆか　そんならこれを、扇蝶さまに
きち　早う連れ申して來な。
ゆか　アイイイ。
ト駒下駄を穿き、禿向うへ入る。
たか　ほんに、こりや好い思ひ附き。扇蝶さんが來なさんしては、あの子の機嫌も直るであらう。
左吉　今日は扇蝶さんと蘭蝶さんと、二人のお客。わしらは、ます〳〵開運だね。
源助　金儲けのひるとなりやした。
助八　そんならお客は扇蝶蘭蝶、お船はギッチラコ、はど

うでござります

左吉　南無三。洒落れの先陣をやられた。

とみ　コレ、源助どん、花魁が書いた卷、山谷の毘沙門樣へ納めて來てくれと云はしつた。ちよつと持つて行つておくれ。

源助　これは近頃お情ない。この金儲けを見捨てゝ、どうも。

與吉　ハテ、慾張つた男だ。そんなら斯うしなせえ。あの古鐵屋さんに頼んでやんなせえ。

源助　これは、丁度幸ひ。先生、頼む／＼。

助八　そんなら山谷の毘沙門樣へ、上げればようござりますか。モシ、規模がありやせうね。

源助　云はずと知れた事サ。

與吉　これは覺束ない。

たき　モシ、花魁の御法事だから、一つ飲んで行きなさんせ。

きち　ほんに、よう氣が附いた。臺所へ行きなさんせ。

助八　左樣なら、御馳走になりやせう。

善六　わしは蘭蝶さまのお出でまで待つて居ませう。

たか　マア／＼、話しは御無用ぢやぞえ。

きち　おかみさん、お湯でもお召しなさいまし。

たか　ほんに、さうしませう。

とみ　わたしも一緒に。

きち　サア、どなたも

與吉　マア、お出でなされまし。

ト流行り唄になり、この人數下座へ入る。直ぐ本釣り鐘になり

〽鷄が啼く吾妻の水に濃紫、花の影汲む流れの身にも、かたい心で石濱の、鷗を問ひに角田川。

ト此うち正面の簾をずり／＼卷き上げる。内に小紫、錦の袷蒲團に寄りかゝり、派手なる切繼ぎの肌着、平括けの締め帶、黑塗の座敷着、さゝげの島田、紫縮緬の鉢卷したる拵らへ。馬盥に杜若を生けて居る見得。思ひ入れあつて

小紫　いつしかと、法の臺にあらねども、手向けに生けし杜若、この世を去りし父さんの、しかもその日の廻り來て、猶忘られぬ果敢ない御最期、忘れぬ中に戀しいは、名は由縁ある紫さん。色も變らぬ言の葉を、勤めのうちの樂しみと、嬉しい中にも或ひは又、逢はねば辛き物思ひ、何かにつけて世の中の、苦界に果は無いわいなア。



安政二年二月河原崎座上演



坂東竹三郎の權八　　市川團之助の小紫

へ君を待乳の山々嬉し、文の橋場に紅附けて、これが由縁と思はせぶりに。

トこの文句にて向うより權八、大小、着流しにて、文を見ながら出る。禿ゆかり、權八の袖を引き來り、花道にて

權八　「手に摘んで、いつしかも見ん紫の、根に通ひける野邊の水草。」紫式部が歌の心、身に當りたるこの通ひ路長兵衛どのゝ思惑も、餘所に見なして吉原の、晦日も月はあるものを、戀の闇路に迷ふこそ、身は煩惱の、犬ぢやなア。

ゆか　紫さん、早うござんせいなア。

權八　ハテ、忙しない。行くといふに。

へ假名で用事の一筆に、つい乘せられて渡し船、棹の雫や濡れて來ぬらん。

トこれにて權八、禿に引かれ、舞臺へ來る。

ゆか　花魁、扇蝶さんがござんしたわいなア。

ト小紫思ひ入れあつて、二重より下りて來り

小紫　紫さん、ようござんしたなア。お前を待つて居たわいなア

權八　これは花魁、美しい杜若の投げ入れ、御風雅な事なア。

小紫　なんぢやぞいなア。お前に見せるは、恥かしいわいなア。

權八　イヤ／＼、流石は全盛の花魁、根〆めの臘梅、心の立てやう、お手際の程、感心々々。心は立てゝも傾城の心は冷たき水の力。今に枯れやうも知れぬわいなう。

小紫　こりやお前、味な所からひぞりなさんす。わたしの心は眞直ぐに、立てゝも立たぬ流れの葉。客衆はどんな大盡の、その冠り葉の襟に附く、小紫ぢやござんせぬ。

權八　なんぼ其やうに、活けの手際でくろめても、仇附きな花配り。身の薄端なわしらには、その猪口に乘せられて、釣り花活けにあはぬうち、思ひ切ッ立てずんど切り。オゝ、怖い事／＼。

小紫　エゝ、その口合ひ置きなさんせ。いつぞはお前に、聞かうと思ふ事がござんす。

權八　なんなりとお尋ねなされ。

小紫　お前の附けて居なさんす、丸に井筒の紋所。そりやお前の定紋でござんすかえ。

權八　何を問ふかと思うたら、藪から棒に、なんでこれを。

小紫　サア、ちつとわたしも、心がかゝりな紋どころゆゑ。

トこれにて權八、ギツクリと思ひ入れあつて

權八　イヤ、こりやわしが紋どころぢや無い。身貧なわしが

小紫　餘所から貰はしやんしたといふやうな事。そんならどこぞの色さんに

權八　マア、そんなものよ。

小紫　わたしがちつと廓に居ぬうち、よい幸ひに、お前は外の立派な花魁と、お樂しみでござんせうがな。

權八　イヤモ、樂しみの段では無い。わしが貞實隱れたといふ

小紫　花魁がござんすか。ソレ、見やしやんせ。油斷も隙もならぬこつちやないわいな。そりやマア、どこの女郎衆でござんす。

權八　どこであらうか。其方、當てゝ見や。

小紫　待ちなさんせ。仲の町で仇附いたものは、山本の勝山さんか。

權八　イヽヤ、違うた

小紫　そんなら、仙臺屋の陸奥さんか。

權八　それでもない。わしが隱れたは京町の

小紫　アノ、京町の

權八　三浦屋の太夫職。

小紫　そんなら内は三浦屋で

權八　二とは下らぬ

小紫　花魁は

權八　小紫。

小紫　そんならその小紫づらは……わたしぢやわいな。

權八　其方に貞實

小紫　アノ、お前が

權八　のろい奴。

小紫　きつウい嘘の。

權八　大誓文。

小紫　これが定なら、わたしもお前に、たんと用があるわいな。

權八　して、その用は。

小紫　サア、その用は……この用ぢやわいなア。

トすつと寄り添ふ。

權八　ハテ、結構な御用ぢやなア。

小紫　エヽ、憎らしい。

權八　可愛らしい。

小紫　なんぢやぞいなア。

ト　ひつたり抱きつく。この時、奥より與吉、源助、左吉出て

左吉　不義者見附けた。

三人　そこ動くな。

ト　權八、小紫、ほぐれて思ひ入れ。

左吉　二人とも、金時さまの御前へ引ッ立てる。

ト　かゝる。奥よりお吉出て來て、左吉を引きのける。左吉一人にて中返りする。

きち　紫さん、ようお出でなされました。花魁がお待ち兼ねでござりました。

小紫　お吉どの、あの人は。

きち　左吉さんでござります。

與吉　オイ、左吉さん、どうした／＼。

ト　左吉起き上がり

左吉　アイタヽヽ。花魁と紫さんが、あんまり氣の惡い事をしたゆゑ、役者の氣にてやらかした。所へお吉さんが出たゆゑ、見事に中返りをしようと思つて、腰の骨をしたゝかくらはした。

與吉　左吉さんには打つて附けの役だ。

左吉　これは御挨拶。

きち　役者氣取りはよいが、金時さまとは又あんまり。

左吉　これはあやまり。

權八　思ひ附きとは知らずして

小紫　ほんに恟りしたわいなア。

權八　サヽ、酒にせい／＼。

小紫　お吉さん、モシ。

ト　お吉に囁く。お吉頷き

きち　お瀧や／＼。

ト　奥よりお瀧、銚子、肴を持ち出る。お吉、お瀧に囁く。お瀧頷き、奥へ入る。

左吉　サア、わたしが始めまする。

源助　飲む事といふと、直ぐに乘出すの。

與吉　モシ、お富さんも來るぢやござりませぬか。

きち　いま呼びにやつたよ。

ト　奥よりお富、お瀧出で來り

とみ　紫さん、ようお出でなされました。

たき　ハイ、おかみさん。

ト　紙包みの金を渡す。

きち　サア、めい／＼に渡しませう。旦那と花魁だよ。

ト　めい／＼に祝儀を遣る。

皆々　有り難うござりまする。
左吉　サア、大きに浮山町。これからが酒だ。飲めや唄へや、わい〳〵のわい。
ト流行り唄になり、向うより四ツ手駕籠一挺、段八、好みの形にて附き添ひ、出て來り、直ぐに舞臺へ來て
段八　お旦那、石濱の別莊へ參りましてござります。
ト駕籠の垂れを上げる。内より蘭蝶、實は白井彌市、羽織、大小、眼病の拵らへにて出る。駕籠舁き引返して、花道へ入る。
彌市　案内いたせ。
段八　畏まりました。……頼まう〳〵。
きち　ハイ〳〵、どなたでござります。
ト門口へ來り、彌市を見て
ヤ、お前さんは
彌市　小紫を身請けの客。即ち庵崎蘭蝶でござる。
權八　ヤ。
ト思ひ入れ。皆々折惡いといふこなし。權八ヅイと立つて、奧へ行かうとする。小紫留めて
小紫　ハテ、大事ござんせぬ。爰にヂッとして居やしやんせ。

彌市　ハア、小紫もこれに居るな。
小紫　蘭蝶さん、又ござんしたかえ。
彌市　御身に戀慕の庵崎が、切なる戀も陸奧の、その錦木にあらねども、又ぞろ爰へ
トお吉、小紫の顏を見る。小紫、通してもよいといふ仕方する。
きち　マア、此方へお通りなされませ。
彌市　然らば許しやれ。
ト彌市、目の見ゆる振りにて、ズッと通り、硯蓋の上へ坐らうとする。
きち　ア、モシ〳〵、そこには硯蓋がござります。
彌市　承知々々。
ト探りながら、片脇へ坐る。
左吉　時に旦那、花魁とさう並んでお出でなさる所は、誠にお雛樣のやうでござります。
ト權八に云ふ心。彌市、我が事と心得
彌市　小紫が身が側に居るを、好く似合うたと申すのか。愛い奴〳〵。
ト紙入れより金を出して
コレ、褒美の肴。

ト蹴る。

左吉 これは飛んだ間違ひで、思はぬ開運。有り難うござります。

段八 旦那、あなたの側には小紫は居りませぬ。美しい若衆の側に。

彌市 なんと申す。

ト思ひ入れあつて

イヤ、それも存じて居る。その若衆も、大方粋間であらう。コリヤ、其方の名は何と申す。

權八 身共が家名は

ト云はうとする。

小紫 ア、モシ、蘭蝶さん、この若衆さんは、アノ、按摩さんでござんす。

ト權八思ひ入れ。小紫、權八の膝にもたれ

モシ、按摩さん、肩先の所を、もそつと強う揉んで下さんせえ。

ト云ひながら、抱きつく。

段八 アレ〳〵、あの若衆が小紫を

彌市 ハヽア、さては小紫が病氣との事。コレ、按摩どの隨分念を入れて、揉んでやつて下され。

權八 イヤモウ、念を入れる段ではござりませぬ。力一ぱい、斯うして

小紫 嬉しうござんす。もそつとしつかり。

權八 斯うか〳〵。

トこなし。段八これを見て

段八 アレ〳〵、按摩を揉むのか、角力を取るのか。エヽ。

彌市 それ程に身を入れて、揉まねばきかぬ。身共も後で、揉んでもらひたいものぢや。

權八 お客の座敷に無遠慮な按摩取り。わしはこれから奥へ行て、殘りの療治は……小紫……ではない、モシ、花魁、

小紫 そんなら先へ

權八 ドリヤ、あちらで待ちませうか。

ト奥へ入る。

皆々 あの按摩さんの代りに、わたしどもが揉んで上げませう。

彌市 イヤ〳〵、按摩よりは此方、酒に致さう。小紫も一つ過しやれ。

小紫 イエ、わたしや酒より、按摩さんの方が好きぢやわいな。

彌市　ハテ、きつい按摩に惚れやうぢやなア。

きち　花魁は、あの按摩さんでなければ、夜が明けぬわいなア。

とみ　側から見ても羨ましい程、まるで色事のやうでござります。

彌市　ハテ、それは羨ましい。身共も按摩になりたいものぢや。

たき　按摩はいつそ、盲の方がようござります。

彌市　ヤ。

トぎよつとする。

きち　サア、一つお上がりませ。

ト杯を出す。彌市見えぬゆゑ、ウツトリとして居る。

とみ　モシ、わたしがお酌を

トこれを聞き、彌市、杯を探り取つて受け、一つ飲み

彌市　サ、小紫、飲みやれ。

ト誰れも居らぬ所へ献す。小紫笑ひながら、彌市の上の方へ廻る。

きち　花魁は其処に居てぢやわいなテ。

ト彌市嬉しき思ひ入れ。段八ムッとして

段八　わいら、最前から、おらが旦那を馬鹿にひろぐな。この上は、この奴めが料簡しない。

ト立ちかゝるを、皆々止めて

左吉　ハテ、奴さん。野暮を云はずと奥へ行て

與吉　氣の詰らぬ酒でも飲みなせえ。

段八　でも、あんまり。

トまた立ちかゝるを、三人とめて

三人　ハテ、あゆびなせえ。

ト無理に段八を連れて、奥へ入る。

小紫　ドレ、わたしも奥へ。

ト行かうとする。彌市探り寄つて、小紫が裾を捕へ

彌市　小紫、待ちやれ。傾城は情を商ふものなるに、さりとては情ない。この蘭蝶が云ふ事を、うるさからうが一通り

小紫　イエ、聞きたうござんせぬ。情も義理も辨まへぬ、我まゝな小紫、お前、愛想が盡きやうがな。

彌市　イヤ、盡きぬ。御身が嫌へば嫌ふ程、おりや可愛うて〳〵、どうもかうも堪えられぬ。勤めのうちなら間夫とやらに、立てる義理もあらうなれど、根曳き致して宿の妻、身儘にならばその身も歡樂、苦界は同じ島原の太夫の中に咲く櫻、我れは廓の業種さへ、どうだ、小紫、

返事が聞きたい。

小紫　鴨川へ、放して見たい都鳥。儘ならぬものでござんす。

彌市　すりや、どうあつても不承知か。

小紫　身請けと聞けば死ぬるが高。死んだ體をどうなりと。

ト振り切つて行かうとする。また彌市裾を捕へ

彌市　そりやつれないぞや、小紫。

トきつと云ふ。變つて合ひ方、蛙の聲になり

何を隠さう蘭蝶は、其方を戀にこの程より、兩眼ともに内障の病ひ。

小紫　エ、そんならお前は

彌市　戀に目無しの庵崎が、思ひ染めたは先月の、廿日の夜半の大門口、客を送りのその風情、見るに煩惱さりながら、亥中の月の朧にも、其方の顔があり〳〵と、見ゆると思ふ戀煩らひ。傳手を求めて、やう〳〵と、玉の臺に入りながら、枕も一ついたづらに、夜を明かしたは幾度か。思へば武士のあるまじき、心は千々に結ぼれて、盲目となつたるこの蘭蝶。アレ、庭に啼き立つ蛙の聲。ゝ、ゝ、みずにかはずにこの思ひ、あるまいものを小紫、不便と思はゞ一夜さの、情を賣つてたもいなう。

ト小紫、思ひ入れあつて

小紫　嬉しうござんす。其お心を聞くからは、義理にも惚れねばならぬところ、お前の心に從はぬその譯は

彌市　それも疾より存じてある。紫の扇蝶とやら、其方に深い譯ある事。

小紫　サア、それ知つてなら猶の事、わたしが事はふッつりと

彌市　思ひ切らるゝ程ならば、盲目とまでは、ならぬわやい。

小紫　それでも、わたしや

彌市　達て嫌だとあるならば、色も戀も打捨てゝ、縛つてなりとも抱いて寢る。是非とも返事を

小紫　ぢやというて。

ト逃げうとする。彌市、無理に小紫を捕へ、抱かうとする。この時、薄ドロ〳〵になり、差し金附きの蛇出て、彌市にまとふ。

アレ、蛇が

ト恟りして飛び退く。彌市ちやつと懐を押へ

彌市　又もや一物。

小紫　オ、怖。

ト行かうとする。彌市捕へるを、振り切り

知らぬわいなア。

ト唄になり、小紫奥へ入る。彌市思ひ入れあつて、此うち、助八後へ出かゝり、樣子を窺つて居る。

彌市　斯程に云へど、心強き小紫。可愛さ餘つて憎さが百倍。もうこの上は……何を云うてもこの眼病。とはいへ此まゝ

トきつとなり、奥へ行かうとする。有り合ふ莨盆に爪づき、神妙劍を落す。ドロ／＼になり、また小蛇出る

彌市懷を探り見て、一卷落したゆゑ、あたりを探る。此うち、助八ソツと出て、右の一卷を取る。彌市、探りながら助八の裾を捕へ

おのれ、曲者。

助八　モシ／＼、曲者ではござりませぬ。あなたのお落しなされましたは、この品でござりませう。

ト最前の夏書の卷と摺り替へ、彌市に渡す。彌市これを取り

彌市　如何にも、大切なこの品。して其方は。

助八　この家の下男でござります。庭を掃除のこの所に、落ちてござりましたゆゑ、ツイ取上げましたのでござります。

彌市　それは大儀。

ト一卷を懷中する。

助八　左樣なれば、しつかりとお渡し申しました。

ト助八ニツコリと思ひ入れあつて、向うへ入る。

彌市　いつぞや不思議に手に入りし神妙劍。こりやコレ、正しく白井兵左衞門が預かりの品。果敢なき最期と聞くからは、この出所より詮議したなら、敵の行くへ、云はば血筋に

ト云ひさす。この時、上手より權八窺ひ出て、ツカツカと彌市が側へ寄り、懷中へ手をかける。彌市、その手を拂ひ退け

彌市　身が懷中へ手を入れし、其方は何者だ。

權八　サ、身共は

彌市　さういふ聲は最前の

權八　按摩取りと申すは僞はり。貴殿の心をかけられし小紫が深間、紫の扇蝶と申す、尺八指南の、かすかな世渡り。

彌市　すりや、小紫の間夫とやら。

權八　如何にも左樣。

ト彌市、物云はずに行かうとする。

權八　アイヤ暫らく。御立腹は御尤も。お腹立ちの其許へ、申し兼ねたる拙者が願ひ、聞き屆けては下さるまいか。

ト合ひ方。

彌市　そりや、何を。

權八　外の事でもござらぬが、ちよつと見かけた貴殿の懷中。

ト彌市の懷中へ手をかける。彌市その手を拂ひ、右の一卷を出して

彌市　この一品が欲しいと云ふのか。望みとあらば、賣りませう。

權八　ヤ。すりや、その品を。

彌市　劍術祕法の神妙劍。武士たるものゝ懇望いたすこの一品、さぞ欲しからう。異議なく貴殿へ、お讓り申さう。……と申したらよからうが、罷りならぬ。外の人なら兎も角も、小紫が深間とある、扇蝶なれば猶以て、罷りならぬ。否でござる。よし又賣らうと申したところが、價が高い。尺八指南の世渡りで、虚無僧の手の内を、貰ひ溜めた端下錢では買はれぬ品。無駄話しを致さうより、こりやマア、よしに致さう。

權八　貴殿が所持の品ゆゑに、所望いたせば價の金。それ程の覺悟は

彌市　覺悟とあらば賣りませう。即ち價は五百兩、耳を揃へて今渡しやれ。

權八　すりや、その價は五百兩。

彌市　金があるか。

權八　サ、それは。

彌市　あるまい。そりやこそな。口は立派に申せども、金の無いのは首の無いにも劣つた事、價の金が無いゆゑに身が懷へ手を入れて、盜む心か。コリヤ、ヤイ、晝の鳶も四十八鷹、女郎の部屋の啄め鳥。客の比翼で枕探し盜みのいろは、果は啄木鳥、留り木に、首の留るを見るやうな。ハヽヽヽ。

ト權八思ひ入れあつて、刀をスラリと拔く。左の手に持ち、彌市の目先へ突出し

權八　浪人しても嗜なみの、價の金は鍛へし刃金。小紫が意趣を根葉に持ち、身共へ過言の虚崎蘭蝶。器の小さいお身達には、武士の所存はえゝ知るまい。女童の遺恨はさておき、申しかゝりしその一品。樣子に依らば互ひの身の上。返答おしやれ、虚崎蘭蝶。

　トきつと云ふ。彌市思ひ入れあつて

彌市　流石は扇蝶。大丈夫の魂ひ見屆けた。返答いたす

……マヽ、納めさつしやい〳〵。

　ト探り見て白刄に觸るゆゑ

イヤサ、納めさつしやい

　トきつと云ふ。權八思ひ入れあつて、悠々と刀を納め

權八　然らば右の一品を

彌市　交易いたさう。

權八　なんと。

彌市　恥かしい事ながら、ぞつこん惚れた小紫、武士の意氣地も糸瓜の皮、身を捨てゝ口說いても、おてまへといふ間夫があるゆゑ、身が心には隨はぬ。云ひ交した小紫を、身共に身請けさして下さらば、この一品は其許へ、たゞ進上申さう。

權八　よく〳〵思ひ詰めたその一言。馬鹿らしい事ながら此方とても末始終、云ひ交したる小紫、差當つたる貴殿の望み、身共が望みも叶へて欲しさ。小紫さへ其許へ、異議無く渡したその時は

彌市　二言と云はず、この一品、今にも貴殿へお渡し申す。

權八　併し樣子の變らぬうち

彌市　後とも云はず

權八　いま爰で

　トこの時奧にて

善六　サア〳〵、花魁、お出でなさいまし。

　ト合ひ方になり、奧より善六、嫌がる小紫の手を引き、お高、お吉、段八附いて出で來り

申し、花魁、なんぼお前、我まゝを云うても、お前の出世になる事だ。是非得心して、扇蝶さまの方へ行きなさえ。

小紫　どうあつても、わたしや否でござんす。

善六　おかみさん。これおやア濟みませぬ。こりや困つたものでござります。どうしたらようござりませう。

たか　どうといふたら、辛い苦界の其うちにも、せめて來はこの人にと、思ふ樂しみは有うもの。それに、あの子の氣の濟まぬ所へ、なんぼ欲得でも、どうも勸め憎い。ナア、お吉どん。

きち　左樣でござります。そしてマア、云ふに云はれぬこの場には、扇蝶さんも居てなれど、側へどなたがどのやうに云はうとも、花魁の氣質では、嫌と云ふのも、こりや尤もでござんす。

善六　コレサ、お前方か其やうな事を云つちやアなりませぬ。猶々それでは花魁が

小紫　イエ、誰れが何と云はうとも、わたしや、主より外の男は嫌ぢやわいなア。

ト権八の側へ來て、思ひ入れ。

権八　イヤ、小紫。由なき我れゆゑ其方の身の、出世の邪魔と思ふゆゑ、わしはフッツリ諦らめた。思ひ直して、蘭蝶どのゝ方へ、行きやらずはなるまい。

小紫　エヽ……そりや、なぜでござんす。

権八　サア、其方の心を云うて見やうなれば

ト最前の小紫が活けし馬盥の杜若を持ち來り

この馬盥の杜若。

小紫　エ。

ト合ひ方になり

権八　今さら云ふも愚かなれど、去年初めて燈籠の、灯影にちよつと見るよりも、初手は一度か二度の月、長兵衛どのゝ情にて、深うなつたる二人が仲、其方の名にも由縁ある、濃き紫の杜若、水を注されて退去りも、云はゞ其方は馬盥の、その廓屋に遊びの女、いつしか餘所に手活けぞと、恥辱にならぬ其うちに、身共の方より紫の色も變りしこの活け花。

ト馬盥を打返し

覆水、盆に返らぬ心。

小紫　そんならお前は、アノわたしに

権八　愛想が盡きた。

小紫　そりやマアほんまに。

権八　フッツリ思ひ切つてたも。

彌市　コレ、あれを聞いたか小紫。なんぼお主が惚れて居ても、男の心と秋の空。氣拙い男に心中立てゝ居やうより、この蘭蝶が女房になれば、活計歡樂。

段八　左樣でござります。ひつてんな浪人者に、心中立てるは今流行らぬ。名を取らうより得の世の中。

善六　お前がウンとさへ云へば、側の者まで皆仕合せ。扇蝶さんにくツついて居ちやア、お前がむしり取られるばかり。とつくり思案をして見なせえ。

小紫　イエ／＼、思案も何もいらぬわいなア。例へしがないお方でも、惚れたに高下はござんせぬ。云ふに云はれぬわたしが身の上。大事な願ひあればこそ、見かけて惚れた扇蝶さん。まだその事も明さぬうち、主に愛想を盡かさるゝ、わたしや覺えはござんせぬ。そりや胴慾でござ

んすわいなア。
權八　心の底まで明かさぬうち、切れてしまへば念も殘らぬ。
小紫　イエ、切れる事は否でござんす。
彌市　切れるが否なら、身請けは止めて、この一品
　ト懷よりチラリと出して見せる。權八思ひ入れあつて
權八　イヽヤ、愛想の盡きたる女、どのやうに慕ふとも、未練はござらぬ蘭蝶どの、其許の御勝手次第。
小紫　イエ、わたしやお前に嫌はれても、一旦嫌と云ひ通す、お方の所へどうしてマア。此まゝお前に別るゝならいつそわたしが命を捨てゝ
彌市　死ぬほど嫌なら勸めはせぬ。その代りにはこの一品。
　ト見せびらかす。
權八　サア、それゆゑにこそ小紫、飽かぬ別れもこの一枚。紫は朱を奪ふの譬へもあり。
　ト小紫に目で知らせ
得心なさば、某も
たか　心有り氣な扇蝶さんの詞の端。
きち　貞女を捨てし讀本の、常磐の心で、ソシ花魁。
たか　嫌でも得心せずばなるまいがの。

小紫　そんならわたしが得心して、身請けさるれば、主の爲に。
善六　主の爲よりお前の爲、人に義理があるものかな。
段八　貧乏神をやめにして、大盡の奥様に、なる方がよからうぜ。
權八　この身を貶するその詞、勝つ方守るが、こりや當世、
彌市　望みの品が欲しいゆゑ、押附け業の愛想づかし。氣揉いながら小紫さへ、得心いたした上ならば、身請けの代は三百兩。
　ト二幕目の金を出す。
善六　お金さへ速かなれば、例へ花魁がどのやうに申しましても、得心してあなたの方へ、先づ、この金は
　ト取りさうにする。
たか　コレ、待ちやれ。あの子も得心せぬ上に、抱へたわしにさへ挨拶せぬうち、その金取つてどうせうと思やる。
善六　でもお前、大枚の三百兩、時節柄ゆゑ、ちつとも早く
たか　ハテ、差出る人ではあるぞいなう。
　ト小紫の側へ寄り
其方の心には濟むまいけれど、差かゝつたるこの場の納

まり、わが身はマア、どうせうと思ひやるぞ。
小紫　我まゝ氣儘の小紫、叱るところを深切に、有り難いおかみさんのお詞、思ふ男に引別れ、嫌なお人に請け出されるも、これが苦界でござんせう。
たか　そんならわが身は、得心か。
小紫　推量して下さんせ。
きち　花魁、出來ました。それでこそ、この場の納まり。
善六　相談極まれば善は急げ。證文巻いて蘭蝶さまへ。
たか　廓の名殘、朋輩へ、暇乞ひやら何やかや。一先づ廓へ
きち　蘭蝶さまも共々に、今宵は一先づ、
小紫　イエ／＼。生中時が延びたなら、未練が殘つて……とても行くなら今宵のうちに
彌市　それ／＼。寸善尺魔の無いうちに、爰から直ぐに、
善六　花魁連れて御一緒に
段八　汐入村の夜の景色、二挺並んで相合ひ駕籠。
彌市　日頃の本望、今この時。
善六　エヽ、おめでたうござります。
權八　身請けが濟めば約束の
彌市　この一品は、直さま御身へ。

ト渡す。
權八　この品ゆゑに小紫
小紫　思ひがけない今宵の身請け。覺悟極めて行く心。少しは可愛と
權八　コリヤ。何事もこの胸に
彌市　明かして云はれぬ血筋の縁。
權八　ヤ。
彌市　サ、縁なればこそ
權八　義理に迫つて
小紫　思ふに別れ
彌市　思はぬ身共へ
小紫　添ふも縁づく。
權八　戀の敵か。
彌市　金が取持つ今宵の身請け。ア、移り變るは
ト兩人思ひ入れ。
權八　色ぢやなア。
ト唄になり、權八ヂツと思ひ入れ。彌市こなし。お高お吉、段八、善六、附き添ひ、皆々奧へ入る。權八殘り
エヽ、忝ない／＼。日頃尋ねし神妙劍、思ひがけなく手



安政二年二月河原崎座上演　　嵐璃寛の彌市

に入りしも、小紫があつたゆゑ。飽かぬ別れも得心して行つてたもつた、忝ない。何は兎もあれ、この一品。

ト右の一品を開き見て、恟りして

ヤ、、。こりや神妙劍と思ひの外、眞赤な似せ物。……ムウ。さては小紫を引上げうばつかりに、この扇蝶を深い所へ、やつたのぢやなア。最前よりの憂き恥も、神妙劍が欲しいばつかり。もうこの上は、あの蘭蝶。歸りの道代汐入堤、土手に待ち受け、先へ廻つて、この欝憤

ト白刃を拔き、キツと思ひ入れあつて、上の方の水鉢にて、これを濯ぎ、草履にて白刃を拭き

おのれ蘭蝶。

ト右の草履を打捨てる。これを木の頭。權八無念の思ひ入れ。キザミにてよろしく拍子　　幕

禪のツトメにてツナギ。知らせにつき、鳴り物變り幕の外へ本庄助八、以前の形にて出る。後より非人べか六、同、熊、附き添ひ、出て來り

熊　モシ旦那。して私しどもへ

二人　頼みといふは。

助八　外の事でも無いが、三浦屋の傾城小紫を身請けの客この汐入を通る筈。その客の蘭蝶といふ者、おれがちつと恨みがある者。それゆゑわいらを頼む程に、その蘭蝶を殺らしてくれろ。

熊　モシ、その小紫を身請けの客は、わたしどもが知つて居る、元は因州とやらの浪人との事。

助八　さてこそおれが推量の通り。して、わいらは、どうして身許を知つて居る。

熊　その蘭蝶といふのは、モシ。

ト助八に囁く。

助八　ムウ。そんならわいらの

べか　例へ頭であらうとも、金との相談。ナア、熊。

熊　それ〳〵。とつくり素性を糺した上

助八　首尾よくやつたら、金はわいらが望み次第。

二人　隨分承知いたしやした。

助八　必らずぬかるな。

二人　そんなら先へ行きませう。

ト兩人は幕の内へ入る。助八殘り、以前の一卷を出し

助八　先刻夏書の卷き物と、摺り替へたこの一卷、こりやア慥かに神妙劍。あの若衆めが跡で見て、蘭蝶を憤り、

同志討ちさせれば二人もろとも、何れか一人は親の敵、權八に違ひない。手も濡らさずに敵討。この助八が出世の小口。それで行かずば賴んだ非人、これで二人を押しかたづけ、小紫はおれが引ッ浚つて、又も金。こいつはうまいわえ。

ト獨り喜び、幕の引附けへ入る。これにて、知らせ直る。

本舞臺、三間の間、高足の土手。後ろ黑幕。正面藪疊。上の方、少し寄せて蒲鉾小屋。土手の下、上の方に、松の立ち木、その脇、庚申塚、松の吊り枝。すべて汐入堤の道具。日覆より月出て居る。土手の上に、おだん、おねぶ、女乞食、以前の熊、べか六及びどん、同じく非人にて、皆々焚火して居る。總泉寺の双盤にて、幕明く。

だん　おねぶさん、今夜の用意は出來て居るかえ。

ねぶ　頭の婚禮ゆゑ、酒も取つて來やした。

ト股倉より貧乏徳利を出す。

べか　エヽ、穢ねえ。てめえの股倉から出した酒が飲まれるものか。

熊　酒に干鰯の匂ひが移るワ。

どん　その上、德利の口から虱が落ちるせ。

ねぶ　お前方が、野暮な事を云つたものだ。虱が交れば、霰酒のやうでいゝわな。

だん　丁度いゝわえ。股倉へ入れて置いたから、好い加減に燗が出來て居たらう。

熊　それはさうと、頭はもう戻りさうなものだ。

べか　大方、花嫁御と一緒に連れて來るだらう。アレ〳〵、向うへ駕籠が二挺見えるぞ。

ト向うより四つ手駕籠二挺、段八これに附き添ひ、出て來り、土手の上へ下ろし

段八　オヽ、大儀々々。駕籠は二挺ともおれが屆ける。どこぞで一杯飲んで來さつし。

ト金を出してやる。

駕舁　ハイ〳〵。有り難うございます。左樣なら駕籠をお賴み申します。

ト駕籠舁き四人、引返して向うへ入る。

皆々　段八、いま歸つたか。

段八　花嫁御を連れて來た。みんな來て、近附きになりや。

皆々　サア〳〵、花嫁御さん。爰へ出なせえ〳〵。

ト口々に云ふ。駕籠の中より小紫出て、皆々を見て驚ろき、ブル／＼慄うて居る。

だん　コレ、花嫁御さん、何もそんなに怖がる事は無い。お前は身請けした蘭蝶さんと云うたのは、わしらが仲間の頭分でござります。

れぶ　わたしらが小屋へ請け出されてござつた嫁御さん、これからは同じ仲間。聞き及んだ吉原の花魁、美しい顔だなう。

皆々　成る程、頭が惚れたも尤も。美しいものだ。

小紫　蘭蝶さんの別莊へ、行くと思うた駕籠の内。見れば賤しいこなさん達。して、蘭蝶さんは。

段八　その蘭蝶は、疾に歸つてござる。

小紫　そりや何處へ。

段八　あの小屋の中へ。

小紫　エ、。

ト驚ろく。小屋の中より彌市、非人の姿にて出て來り

彌市　皆の者。今夜の用意は。

熊　祝言の酒肴は、疾に用意をして置きました。

だん　肴は鯛の頭に鰯のぬた。今日のは自腹で、お剰りぢやござりませぬぞ。

彌市　それはよくした。皆も喜んでくれ。日頃戀しい床しいと、思ひ思つた小紫、身請け致して今夜の祝言。

段八　乞食の小屋へ花魁が、鋲打ちならぬ四つ手駕籠。

熊　白無垢引きかへ酒の菰べか　三國一の花嫁樣

皆々　エ、、おめでたうござりまする。

段八　時に、嫁御もおいらの仲間へ入るからは、衣裳を着替へさせずばなるまい。ナウ、皆の者。

れぶ　それもわたしらが拵らへて置いた今夜の晴れ着。

ト小屋の中より穢き襤褸を出し

サア／＼、これを着替へなさんせ。

小紫　エ、モウ、穢らしい。斯ういふ事とは露知らず、扇蝶さまのお爲ぞと、嫌な身請けも得心して、見れば賤しい非人の仲間。こりやどうしたらよからうぞいなア。

段八　今更泣いても悔んでも、もう叶はぬ。思ひ直して、頭の女房にならつしやい。

小紫　エ、、穢らはしい。わたしは爰を

ト逃げようとする。皆々小紫を捕へ、無理に襤褸に着替へさする。彌市探り寄つて小紫が手を取り

彌市　もう逃げようとて逃がしはせぬ、……皆の者、仲人

は骨の程　茲等は粋を通してナ。ハテ、気の利かぬ奴等
ではあるぞい。

段八　成る程、これからおれらは跡の拵らへ、仲人役を一
緒にして

だんめでたく一つ唄ひやせう。……高砂や、この裏店の
御新造さん、有るの無いのと仰しやるやうな御仁體ぢや
ござりませぬ。背中にも一人居りやすわな。お選んなせ
え〱。

ねぶ　めでたい奥さん、御新造さん

皆々　しつぽり跡でおしげりなさんせ。

段八　おいらはめでたく

皆々　開きませう。

トわや〱云うて下座へ入る。あと一つ鉦、合ひ方に
なり

彌市　サア、これからは、誰れに遠慮も差向ひ。心を盡し
て今といふ今、日頃の本望。此やうな嬉しい事は無いわ
いの。

小紫　思ひがけないお前の身の上。なんの因果で、わたし
が夫に

彌市　サア、腑が潰れよう。腹が立たう。思ひ廻せば去年
の春、こなたは十九の厄年に、大師河原へ詣りし下向、
遊山半分旅駕籠より、歩行もならぬ駒下駄の、鼻緒の切
れしが縁の端、その時直した鼻緒直し。フッと見染めた
わしよりも、見染められたがこなたの因果。様子を聞け
ば吉原の、小紫といふ傾城。金さへあれば身を任す、一
夜遊びの浮れ女と、思うてこの身を押し隠し、逢へども
れない小紫。比翼にあらぬ三つ蒲團、その後朝に引替へ
て、壁は蓆に戸は菰垂れ　犬の吠えるを寝耳に聞き、果
敢ない夜半の草枕。寝られぬ儘に忘られぬ、乞食非人が
切ない戀。推量して下されいなう。

小紫　ほんに思へばわたし程、因果な者はござんせぬ。思
ひは同じ川崎の、渡し場で見た扇蝶さん、人を思へば思
はれし、その日も知らぬ因果な縁。大師様も聞えませぬ。
いつそわたしを、殺して下さんせいなア。

彌市　非人のわしに思はれて、世間へ立たぬ小紫、死なう
と思ふはこりや尤も。さりながら、わしも腹からの乞食
でもない。それゆゑ身請けの三百兩、乞食の身にて大枚
の、金の出所何もかも、斯うなるからは云うて聞かさう。
もと某は因州の浪人、白井權八といふ者。

小紫　エヽ……それならお前が

彌市　仔細あつて、本庄助太夫といふ侍ひを討つて立退き、浪々の其うちに、非人とまでは成り下がり、御身を請け出すその爲に、或ひは夜盜辻切りも、戀の盜みにやうやうと、調達したる三百兩。念願屆いて今宵の身請け。人を害せし報いにて、皆目見えぬ内障の病。斯程心を盡す某、あまり憎うはあるまいがの。

ト此うち、上の庚申塚の後へ、助八、熊、べか六、どん、出て窺ふ。助八、三人に囁き、思ひ入れあつて入る。小紫、いろ／＼こなしあつて

小紫　そんなら日頃尋ぬる……ほんにマア、聞けば聞く程眞實なお前……その心にほだされて

彌市　ヤ、なんといふ。

小紫　サア、勤めのうちこそ意氣張りで、嫌と思うた蘭蝶さん、わたしゆゑ命もいとはず、切取りしてもわたしが身を、請け出して下さんす程の心意氣、なんぼ義理を知らぬわたしぢやとて、嬉しうなうて、なんとせうぞいなア。

彌市　すりや、この程よりの心盡しの數々を、嬉しと思うて

小紫　わたしやお前の女房に、なる氣になつたわいなア。

彌市　そりや本心か、小紫。エヽ、忝ない／＼。ト喜ばして置いて、逃げるのではないか。

小紫　なんのマア。お前が行けと云はしやんしても、滅多に側を離れる事ぢやござんせぬ。

ト きつと云ふ。

彌市　その心ならおれも落ちつく。乞食になつても、昔の嗜なみ。

ト以前差して出たりし大小を出し

男の魂ひ一對の、離れぬ大小引分けて、其方へ渡すが、一生離れぬといふ、誓紙の代り。

ト右の脇差の方を小紫へ渡す。

小紫　そんならこれを起證代りに

彌市　互ひの心、解け合ふからは

小紫　今日から非人の、わたしや女房。

彌市　濁酒ざけのつかみどり

小紫　嫌うたお客に色直し

彌市　雪駄直しが

小紫　緣の端やら

彌市　三々くどかず

小紫　直ぐに床入り。

彌市　菰改めて
小紫　エ。
　ト彌市刀を杖に突き
彌市　待つて居るぞや。
　ト木魚の入りし合ひ方になり、彌市思ひ入れあつて、小屋の内へ入る。小紫残りこなしあつて
小紫　思ひがけない非人の身の上。うか／＼名乗りし白井權八、天の教への敵討、未來にござんす父樣の、導き給ふ今宵の幸ひ。誓紙代りと渡したるこの白刃。これにて討てと、神々樣のお引合せ。色に事寄せ近寄つて、今宵は過さず、おのれ權八。
　ト脇差を抜き、思ひ入れあつて、白刃をキッと見る。
　この時、チョンと月隠れる。
折よき月の雲隠れ。この間に一太刀。
　トそろ／＼土手へ上がり、小屋の側へ來り
親の敵の白井權八。恨みの刃金。思ひ知りや。
　ト小屋の上より白刃を突込む。内にて彌市アッと苦しみ、手負ひの思ひ入れ。抜刀にて出で、キッと見得。
彌市　なに恨みあつて某を騙し討ち。
小紫　其方が討つて立退きし、本庄助太夫が腹變りの娘、幼少の名は八重梅。父さんの敵。サア、立ち上がつて勝負しや。
彌市　女と思ひ侮つて、飼ひ犬に手を喰はれしか。この上は返り討だ。覺悟しろ。
小紫　迚もかよはき女なれども、一心凝つて、せめて一太刀。
彌市　何を小癪な。
　ト立廻りのうち、彌市小紫をあしらひ、討たれようとする仕組み。この時、下座より助八、熊、べか六、どん、出で來り、暗がりにて彌市にかゝる。彌市あちこちと立廻りのうち、助八、小紫を彌市と心得、一太刀切り附くる。小紫ワッと苦しみ
小紫　女一人に多勢の、荷擔人頼む卑怯な權八。
　トこれを聞き
彌市　ナニ、荷擔人とは。
助八　權八、覺悟。
彌市　さてこそおのれら。
　ト彌市三人を相手に立廻り、小紫は助八と立廻り、深手を負うて倒れる。下座より段八、出て、助八を支へる。彌市三人を相手に、キッと見得。

彌市　何奴なれば、この妨げ。
助八　本庄助太夫が伜同苗助八、親の敵の白井權八。
段八　ナニ、お旦那を權八とは、
助八　物數云はず、皆の者。
皆々　合點だ。
ト　ごつちやの立廻り、段八、助八、立廻りしながら、向うへ入る。彌市、三人を相手に、盲目の立廻りあつて、皆々を切り倒す。好き時分に、後の藪を押し分け、權八出で來り、三人よろしき見得にて月出る。三人顔見合せ
小紫　ヤア、お前は扇蝶さん。
權八　小紫、手を負ひしか。
小紫　蘭蝶といひしは、この所の非人にて、素性を聞けばわたしが爲には、父さんの敵、白井權八。
權八　ナニ、權八とは。
ト　彌市思ひ入れ。
彌市　絶えて久しき弟權八。堅固で居つたな。
權八　ハテ、心得ぬその詞。我が名を名乘り、又ぞろや、弟といふは、なんの仔細か。
彌市　以前は本國因州にて、顔も知らずに別れし兄、即ち白井彌市ぢやわやい。
二人　ヤヽ、なんと。
彌市　誠や、人間の榮華は、あざなへる繩の如しと、我れは即ち白井の惣領なれど、生れついて身性の惡く、侍ひの家筋を、繼ぐべき事の叶はざる、人相なりとト者の教へ。その頃、汝はまだ稚き當歳なれど、まして二男の其方ゆゑ、何とぞ家の相續させんと思へども、順を守る父の氣質、惣領の某ゆゑ、我れを家督と父の指圖。それゆゑ我れは家出なせしも、其方に家督を繼がせたさ。然るに某出國せし、その後にて父の横死、汝は父の弟たる、即ち伯父の助太夫、預かり置きしと聞きつるが、元より邪智の助太夫、義に依つて其方が、討ち果して立退きしと、それも後にて樣子を聞き、まツたこれなる小紫が素性は、矢張り本庄の娘八重梅。この彌市にも汝にも、全く因みの從妹同士。それとは知らず小紫、權八こそは敵ぞと、思ひ詰めたる女の孝心。計らず去年大師の道にて、その事詳しく聞いたるゆゑ、名乘り合ひなば我が從妹、討たれし親は即ち叔父。さすれば身共が助太刀にて、討たせにやならぬが、討つべき敵は實の弟、伯父の邪ま是非なくも、義理で討つたに違ひはあるまい。

それを敵と討たせる時は、女も共に非道の沙汰、我れは元より世の中に、望み無き身の彌市郎、小紫が願ふを幸ひ、我れは汝權八の、その名を借りて敵ぞと、名乘つて討たれん志し。また小紫に戀慕と見せしも、汝に迷ふ小紫、不便ながらも敵同志、どうで添はれぬ因果な緣、それゆゑ仲を引裂かんと、心に思はぬ無理口說き、我れ權八と名乘るを聞き、いづこに隱れ忍びしや、八重梅が兄本庄助八、共に敵と切り込む刀、支ふるはずみ盲目ゆゑ、思はず女に手を負はせしか。思ひ廻せばその以前、卜者が云ひしに違はず、内障になりし彌市郎、せめて弟が罪科を引受け、名乘つて相果て其方を、世に立てたきが我が願ひ。如何なれば因みの三人、戀と仇とに鎬を削る、因果な緣であつたなア。

ト これを聞き、權八思ひ入れあつて

權八　初めて聞いたる御身の素性、また小紫が身の上も、明かして見れば敵同士。如何にも某、父兵左衞門横死の後、伯父の助太夫に引取られ、果敢なく月日を送るうち助太夫が實の倅、助八ことは惡黨にて、その頃行くへ知れずといひ、外戚腹に出生せし、娘八重梅ありと聞けど、これまた行くへ知れざるゆゑ、某を養子にせんと、恩に着せたる叔父の詞、止む事を得ず親子の緣、結びし砌り助太夫、不破伴左衞門と心を合せ、佐々木の家國を奪はん企み、某にも身方せよと、初めて明かす養父の惡事。親子の緣は結びしかど、目前の存亡見捨てがたく、忠義の爲に我が手にて、助太夫どのを是非なくも、討つて立退きしも、その頃失ふ神妙劍、尋ぬる爲に、我が本名包みしゆゑに、我れを敵と知らずして、力と頼まん小紫、緣は繫がる養父の娘、取りも直さず身が妹、[illegible]これも因果の道理。

小紫　そんなら今まで戀ひ慕ひ、二世の夫と語らひし、お前が尋ぬる親の敵、權八さんでござんしたか、今また敵と名乘りしは、お前の兄さん彌市さまの、顏も知らず、元より尋ぬる權八さん、因みありとは露知らず、一途に憎しと思うた敵が、云ひ交したる夫とは、こりやマアどうせう、どうせうぞいなア。

權八　さるにても心得ざるは、さほど我れへ御厚志の、其お心で何ゆゑに、神妙劍の似せ物を、我れに與へし御所存は。

彌市　ナニ、すりや、最前渡したる、あの一卷が似せ物とな。

權八　如何にも。

彌市　ムウ。さては叔父が邪曲を、受け継ぎし本庄助八、手段を以て摺替へしか。あの一巻も小紫を、身請けの金も先つ頃、大師の道にて計らずも、手に入りたりしゆゑにこそ、汝に逢うて渡さんと、思ひの外に似せ物とは。

權八　ムウ。これにて思ひ當りしは、最前の古鐵屋、夏書の巻を持ちし様子。彼れが仕業か、何にもせよ、似せ物渡して小紫を、騙りしかと一途の怒り。兄とも知らず藪蔭より、邪慳の刃に貫きしも、養父といひ兄といひ、現在語らふ女もやみ〳〵、我が手にかけしは皆天罰。せめてはこの身の云ひ譯に、この場に於て

ト腹切らうとする。彌市留めて

彌市　ヤレ、早まるな、弟權八。汝を殺す程ならば、斯くまで心を盡しはせぬ。父兵左衞門が闇討ちも、今更思へば助太夫、伴左衞門と語らひて、名古屋山三が實父たる、山左衞門と兵左衞門、忠心無二ゆゑ企みの邪魔と、彼れらが仕業に相違はあるまい。それとは知らず助太夫を、汝が討ちしもこれ天命。殘る敵は伴左衞門、まッた失ふ神妙劍、詮議仕出すは其方が役。

權八　でも、これまでに多くの人を、害せしこの身、罪は遁がれぬ。

彌市　サア、罪科も今爰で、我れこそ白井權八と、名乘つて討たれしこの彌市、まッた小紫もこの場にて、死ぬは心中と云ひ觸らし、さすればこの世に亡き權八。汝は矢張り扇蝶にて、めでたく寶詮議仕出だし、その後にては一月寺、我れ〳〵親子、小紫が、菩提を頼む、弟權八。

小紫　敵同志のわたしゆゑ、とてもこの世で添はれぬ上、この深手では、所詮長らへ居られぬこの身。

彌市　我れ〳〵二人に構はずと、見咎められぬ其うちに、ちつとも早く

權八　然らば暫し惜しからぬ、命長へお勸めに任せ、寶詮議のその後では、やがて後から、未來で一禮。

彌市　絶えて久しき弟の、顏さへ見られぬこの眼病、思へば薄きこの世の縁。

小紫　この世の縁は敵同志でも、未來はどうぞ權八さん。

彌市　恨みのきづな切つたれば、あの世は必らず

權八　一つ蓮と今までに

小紫　苦界の中に嬉しい逢ふ瀬

彌市　今は果敢なきこの二人。これぞ權八小紫

小紫　戀に果たせし心中と

彌市　覺悟極めた
兩人　この血汐。
トこの時ゴーンと明の鐘、藪より雀、大分舞ふ。
權八　最早曉。
彌市　鳥も塒を
小紫　我れはこの世を後朝に
權八　立てし浮風も吉原の
彌市　すゞめ徒なる
三人　比翼塚。
トこの時、熊起き上がり
熊　權八、うぬを。
トかゝる、權八、抜討ちに切り下げ
權八　思へば夢の
ト彌市、小紫、ガツクリと思ひ入れ。木の頭。
世の中おやなア。
ト愁ひの思ひ入れ。これをキザミにて、よろしく、拍子
幕

二番目中幕

上林二階の場

役名――不破伴左衛門。名古屋山三。上林の葛城。遣り手、お爪。新造、浦里。同、初風。若い者、喜八。茶屋息子、清六。茶屋女房、お常。禿、みどり。唐犬權兵衛。野晒五助。石塔嶋八。湯灌場傳吉。早桶半助。

本舞臺、三間の間、長持を置きたる上林の二階、廊下飾り附け。上の方、障子屋體。花道よき所に、梯子の上がり口を見せ、妓臺に遣り手お爪、禿みどりを引附け、煙草を振り上げ居るを、浦里新造にて、取縋り居る。若い者喜八、茶屋の息子清六、取押へて居る。吉原騒ぎにて、幕明く。

喜八　お爪どん、子供の事だ。さうしなくつてもいゝぢやアないか。
浦里　花魁へ知れては悪い。堪忍してやらしやんせいなア。
皆々　禿子供を、大概にさしやんせいなア。

つめ　イエ〳〵、禿の事ぢやから、折檻するは遣り手の役。新造衆の口出しは御免。この餓鬼は平口で行くのぢやない。構はんすな〳〵。うぬ、小刀針で

ト立ちかゝる。みどり逃げて、浦里に取りつき

浦里　ア、モシ、堪忍して下さんせいなア。

つめ　ナニ、堪忍して。この間から、店を引かせた葛城さんと、山三さんの文の取り遣りするゆゑ、キッとわたしが折檻するのぢや。退かんせ〳〵。

清六　エ、、そんなら花魁は

浦里　疾から店を引いてぢやわいなア。

喜八　それだに依つて、この子を折檻するも尤も。

つめ　縛り上げて云はせにやらぬ。

ト清掻になり、立ちかゝる。皆々留める。みどり逃げて、花道の階子より下家へ入る。お爪追ッかけ下りる。この時、お常、茶屋女房にて、提灯を持ち上つて來る。後より、伴左衛門、羽織、衣裳、大小、お爪が手を捕へ、みどりた後に圍を、お爪掻き退け、下家へかゝる。下より伴左衛門、上つて來る。後より、半助、五助、傳吉、勘八、對の形、男達、白柄の一本差しにて、上つて來る。勘吉、若い者にて、小腰を屈め、附いて上がり、皆々本舞臺へ來る。伴左衛門、お爪の手先をキッと締め上げる。

つめ　アイタ、、。あなたは寺西閑心さま。なんでわたしを

つれ　お客のお出でのその先へ、なんぼ禿の折檻ぢやとてアタ無作法な遣り手さん。

五助　お頭始めおいらまで、今この里に隠れない、白柄組の親方は、向う見ずなる寺西の、閑心さまのお側には、いつも離れぬ四天王、その名も野晒五助といふ

半助　雲に稲妻一對に、揃ひも揃ふ破落戸は、さし擔ひやら早桶半助。

傳吉　寺の一字で思ひつく、その名も子分の湯灌場傳吉。

勘八　達引出入りを商賣に、臍を固めし石塔勘八。

傳吉　今夜は葛城太夫を

四人　ナウ、お頭。

伴左　逢うて今宵は思ひをと、樂しむ心の大一座。神を誘うて通ふ神、その葛城が今更に、見世を引いたと云はれちやア、白柄組の面が立たぬ。コリヤ遣り手、その挨拶を、キリ〳〵致せ。

トお爪の手を突き放す。

つめ　ア、モシ／＼。見世を引かせた葛城さんは、山三さまのそりや面當。お前様なら出さいでかいなア

四人　お頭、聞かつしやりましたか。

伴左　こりやさう有りさうなものだ。

ト この時勘吉、揉み手して

勘吉　モシ／＼、あなた方のお腰の物は私しへ。ハイ／＼、これは廓の大法でござります。

半助　やかましいわえ、べら坊め。この吉原へ、やう／＼と、今夜初めて上がりはしねえワ。

五助　廓の法も定まりも、知らねえ客だと思ふのか。

勘八　知つても頭はこの里の、掟を守らぬ氣性だワ。

傳吉　當時吾妻に隠れなき、白柄組の頭分、閑心さまを見損なつたか。蛆蟲め。

四人　大間抜け。

勘吉　イエ／＼、存じて居りますが、お腰の物は掟でござりますゆゑ。

四人　どうしたと。

ト 立ちかゝる。

作左　コレサ、其やうにがさつに云ふな。この吉原は云ふに及ばず、色里廓は二階まで、刃物帯した者は揚げぬ。その掟を知りながら、閑心ばかりはどこまでも、嗜む魂ひ、こりや離されぬ。

勘吉　それでは外のお客様まで、

ト もじ／＼する。

つれ　ハテ、さうであらうが、兎やかうあつては後が縺れ。遣り手衆さへ承知なら、マア其まゝに機嫌の好い時。

つめ　さうでござんす　あなたばかりは、外のお客に事かはり

四人　くねりかゝると、素では遣らぬぞ。

ト 此あたり、葛城、扱帯の姿にて、貫銭下げ、花魁さ添ひ、出かゝり、窺ふ。

作左　さうだ／＼。長い刀は侍ひの魂ひ。餘人は格別この閑心は、そりやならぬワ。それとも預かりたくば、心の腐つた素浪人の、山三が所持の

葛城　清い心の魂ひは、この葛城が預かりませう。

作左　ヤ、其方は葛城。いつの間に

四人　御來臨だの。

葛城　伴左衛門さん。……今の昔へ名は閑心さん。今お前が云はじやんす、心の腐つた浪人は、山三ぢやと云はしやんすが、主さんばかりかお前まで、主持たぬ身は互ひ

に浪人。
伴左　その浪人のこの身でも、戀なればこそ此やうに、其方へ通ふを、少しは不便と思ふなら
葛城　逢うてあげたいものなれど、それでは深う云ひ交した、わたしの男へ。
伴左　その男とは山三が事か。この程仲の町の眞中で、山三に逢うて鞘當のその砌り、ぶッ放さうと思うたを、幡隨長兵衞が女房の、利發な裁きに、遺恨殘らぬしるしにと、鞘は其まゝ、中心を取替へ、差しては居れど白刃は山三。
葛城　その白刃なりや主の魂ひ。わたしが爰で預かつては、どうでござんせうぞいなア。
伴左　それぢやア山三が魂ひも、伴左衞門が魂ひも、みんな其方へ取上げ婆アか。山三に逢はねば、いづれ刀は取替へ憎い。……コレ葛城、これ程通ふに、どうでもそもじは逢はぬ氣か。
葛城　浪人者でも山三さん、一旦盟うた事もあり、如何に流れのわたしぢやとて、それではどうも女子の道が
伴左　立たぬとあれば身請けしよう。コリヤ、遣り手、葛城は身共が身請けぢや。して、身の代は。
つめ　ハイ〳〵。親方さんと相談の上、主の身の代、お聞き申して參りませう。
葛城　この身を任さぬその時は、身請けをしても、アノわたしを
伴左　身請けなしたら奥樣だぞ。
葛城　嫌でござんす。例へ身請けをさんしても、好かぬお前と一日も、どうして一つに居られませう。嫌でござんす。この葛城は山三さんといふ、可愛いゝ男のある女郎無駄な身請けをしようより、止めておくれ。よさしやんせ。身請けの沙汰は兎も角も、わたしやお前と、相性が惡いわいなア。
　ト　これにて、伴左衞門思ひ入れあつて
伴左　その挨拶では、可愛さ餘つて憎さが百倍。色も戀も覺め果てた。コレサ、若い者ども、これから、もう自棄だ。名代取つての惡洒落れだ。ヤイ遣り手、内の女郎を、一萬人でも總揚げだ。殘らず座敷へ連れて來い。
傳吉　それ〳〵、五丁町の藝者は皆總揚げだぞ。
五助　蟲ツ子でも、外へ遣つては合點しないぞ。
勘八　これから今夜暴れ客。その氣で勤めろ。
半助　サア頭、座敷を變へて

四人　飲み直しませう。

伴左　酒にしようか。それとも心が變つたら、コレ、葛城、必らず返事をしてくれろ。

葛城　思案して見ようわいな。

ト思ひ入れ。伴左衛門ムツとして

伴左　エヽ、勝手にしろ。

皆々　サア〳〵、ござりませ。

ト騒ぎ唄になり、伴左衛門先に皆々附いて奥へ入る。葛城殘る。この唄を借り、山三、頭巾を冠り、易者の形にて、初風、新造にて附き添ひ、あたりへ心遣ひのこなしにて、出で來り

初風　花魁、お連れ申したぞえ。

葛城　來なさんしたかえ。

山三　葛城。……ヤレ、嬉しや、やう〳〵隠れて來たわいの。これといふのも初風が働らき。忝ない〳〵。

初風　なんのマア、禮どころぢやござんせぬ。あの意地悪の遣り手が見たら、大抵の事ではござんすまい。殊に白柄組の大勢も、來て居なさんすわいなア。

山三　アヽ、そんならアノ伴左衛門も來て居るか。コレ葛城、聞けば其方もおれゆゑに、見世を引いて居ると聞いたゆゑ、どうぞ逢はうと思ひ、枕を砕いた占屋算、當卦本卦で格子へ立ち、あの初風が働らきで、首尾よう二階へ。こんな嬉しい事はないぞや。

葛城　さう云ひなさんすりや、ほんまの占屋算と見えるわいなア。

山三　人相を見てもらひたくば、この天眼鏡で見てやりませうか。

ト天眼鏡を出す。

葛城　そりや、ほんまの眼鏡でござんすかえ。

山三　天眼鏡と云うたは茶焙じぢや。遅まきながら、こりや其方へ、今のお禮にお年玉ぢや。

初風　何を云はんすぞいなア。

葛城　今の今まで伴左衛門づらが、わたしを捕へて身請けするの、なんのかのと、鬱ぐ事ばかり云うてぢやわいなア。

山三　また、身請けせうと云ふのか。それにしてもこの間、花川戸の内儀が挨拶で、伴左衛門とこの山三、取持へて差して居る刀、無銘なれども過ぎ行かれし、慥かに親の差し料に

葛城　そんなら、もしや、敵の手がゝり。

山三　アコレ。

　トあたりを見て初風へこなし。

初風　さういふうちにも意地悪の、遣り手の目褄にかゝらぬやうに、お前の部屋へコッソリと床を敷いて置くぞえ。

葛城　必らず首尾を、頼むぞえ。

初風　承知ぢやわいな。……山三さん、これにえ。

　ト清掻にて奥へ入る。此あたり障子を細目に明け、伴左衛門窺ふ。

葛城　今のお前の話しの通り、最前兩腰を帶して二階へ、伴左衛門が我まゝ云うて預けぬは、もしやお前に見られてはと、その疑ひぢやあるまいかえ。

山三　成る程、そこも知れぬわいの。何しろ彼方の白刃が、山三の鞘へしつくりと、納まつたが不審の一つ。もしや今にも逢うたなら、お家の系圖の一巻を、隠し持つまいものでもない。必らず詮議を

葛城　心得やんした。騙しすかして系圖の詮議を。何かの話しは、わたしが部屋で、灯を消して床の内、必らず忍んで居やしやんせ。

山三　合點々々。わが身は病氣の床の内、灯を消して待つて居やう。必らず待たせてくれまいぞや。

葛城　マアちつとの間、辛抱して下さんせいなア。

　トこれを聞き伴左衛門、障子を閉す。初風走り出で

初風　モシ／＼、花魁、座敷の首尾はようござんす。内證で旦那さんが、身請けの相談があるに依つて、葛城を呼んで來いと云はしやんす。其うち主を忍ばせう。

葛城　ほんに、それでは、どこぞへ隠れて居やしやんせ。主を忍ばす

　ト思ひ入れあつて

アレ／＼、あの長持はどうであらうぞいなア。

初風　ほんに、あの中がようござんせう。

葛城　ドレ、わたしも手傳うて。

　ト行かうとする。頭の割り笄落ちる。山三取つて

山三　コレ／＼、太夫、笄が落ちたぞや。

　トよく／＼見て

常から話の捨て子の時に、添へてあつたる

葛城　アモシ、他聞の聞え。

山三　オッと、あやまつた。

　ト渡す。葛城長持を明け

葛城　サア、少しの間この中に、お前は隠れて居やしやんせ。

山三　合點ぢや。これといふも、心の外の色戀ゆゑ、武士が長持の住居とは、なんの事はねえ、湯のない大坂風呂へ入つたやうな。
ト入る。
葛城　ほんに、お前もわたしゆゑ。
山三　ヤ。
葛城　苦勞しなさんすわいなア。
ト長持の蓋をする。浦里出で來り
浦里　モシノ＼、花魁、内證でお呼びなさんすわいなア。サア、お出でなんしよ。
葛城　エヽ、忙しない。いま行くわいなア。
ト清搔になり、この三人奥へ入る。障子の内より伴左衛門、お爪忍び出で、兩人近寄り、小聲になり
つめ　若旦那様。
伴左　コリヤ。
ト合ひ方變る。
つめ　すりや、其方が生さぬ仲の、娘と申すは
山三が家來の八内め。さすれば滅多に娘にも
伴左　所持の系圖の一卷を尋ねる奴等。それゆゑ參る先々まで、肌身離さず
ト懐中より、一卷出して、ちよつと見せる。
つめ　アノ、そんなら、これが
伴左　コレ。
ト囁く。お爪思ひ入れあつて、あたりの錠を取つて、長持へピンと卸ろす。伴左衛門見て
籠の鳥だワ。
ト長持の方へ系圖を見せびらかし、笑ふ。これにて騒ぎ唄になり、この道具廻る。
本舞臺、一面、葛城の部屋。上の方に屛風立てゝ、おり。誂らへの行燈を灯し、道具とまる。
ト清搔になり、階子の口より鶉權兵衛、町人の形にて、清六、提灯を持つて、上がつて來る。奥よりお常出で來り、舞臺にて行き合ひ
權兵　てめえ、お常ぢやアねえか。
つね　これはしたり、今お前樣を呼びに參るのでござります。
權兵　さうであらう。屋敷の衆がおれを、狩場の奉行のお役人の權門で、據なく今夜來たが、長兵衛は來ないか。
清六　アノ、花川戸の親方でござりますか。あなたは慥か

三浦屋へ、お出でなされたやうでござります。

權兵　ア、、そんなら大方小紫が、心中の事で來て居るのであらう。是非長兵衞に逢はねばならぬ。そんなら三浦屋へ行つて逢つて行かう。

つれ　それぢやといふて、お屋敷のお客様が、お尋ねなされてゞござります。

權兵　そんなら逢つて行かう。コレ、てめえはナ、三浦屋へ行つて、長兵衞が來て居るか、もし來て居るなら知らせてくれろ。

清六　畏まりました。

權兵　ドリヤ、逢つて來ようか。

ト清掻にてお常、權兵衞奥へ入る。清六引返して、階子より上がる。奥より伴左衞門出で來り、あたりを窺ひ、屏風を明け、中を行燈にて、よく〳〵見て

伴左　葛城が病氣の床、山三を引込む前方に、今の話しで先駈けして、爰でこつそり。

ト思ひ入れ。この時、猫一疋出て、伴左衞門にじやれかゝる。伴左衞門恟りして

エ、、何をしやアがる。

ト蹴飛す拍子に、一卷落す。ちやつと取つて

寢るにもうつかり離されぬ。

ト灯を吹き消し、床へ入る。時の鐘、合ひ方になり、奥より葛城出で來り、探り〳〵床へ入る。小聲にて

葛城　山三さん、來なんしたかえ。

ト云ふ。伴左衞門領き、思ひ入れある。葛城、山三と心得寄り添ふ。伴左衞門夢中になりしが、フツと心附き、懐中の系圖を蒲團の下へ隱す。矢張りこの猫狂ひ居る。葛城思ひ入れあつて

伴左衞門に見られぬうち……モシ。

トこなし。屏風引廻す。唄になり、奥より權兵衞出で來り

權兵　イヤア、こいつは暗い〳〵。イヤ、素的に暗いワ。コレ、灯をつけねえか。……あの茶屋の息子めは、長兵衞が來てなら、知らせさうなものだが。

ト探り〳〵、階子の方へ行きかける。屏風の蔭より伴左衞門が隱せし系圖を咬へ出し、轉がし、じやれる。權兵衞、足に觸るゆゑ飛び退き

エ、、なんだ。猫が鼠を取つたな。シイ〳〵。

ト追ふゆゑ、猫は逃げて入る。權兵衞捨ぜりふにて、落ちてある一卷を踏み附け、恟りし

エヽ、鼠が。氣味の悪い。

ト足にて探り取つて、捻り見て

ヤ、こいつは卷き物だ。ハテ、おつりきな物だ。

ト探り見る。清搔になり、階子の口より、提灯を下げ、三浦屋の若い者喜助先に立ち、後より清六附き添ひ、捨ぜりふにて出で來り、權兵衞を見て

喜助　これは權兵衞さま。只今清さんへのお言傳でございましたが、花川戸の親方も、只今お出でなされました。

權兵　アノ、長兵衞が來たといふのか。

喜助　左樣でござります。……モシ、旦那え。お聞きでもござりませうが、小紫さんが沙入の土手で、非人と二人切られたが、白井權八の仕業ぢやと、昨夜からその詮議でござりまする。

權兵　その權八は長兵衞が、平常世話する紫の扇蝶、慥かにあれが

二人　エ。

權兵　ドリヤ、行つて逢はう。

ト清搔になり、この三人階子の下へ入る。奥より半助、手燭を持ち、窺ひ出て、屏風に向ひ

半助　頭、首尾よくお前の念願叶つて

ト屏風を取る。伴左衞門、葛城、蒲團の上に居る。葛城、伴左衞門を見て、驚ろき

葛城　ヤ、そんならお前は。

伴左　山三が吹替へ、伴左衞門だワ。

葛城　エヽ。

伴左　すツぱり行つた。

半助　おめでたうござりました。

伴左　コレ葛城、今からわれとは眞の色事。知らぬながら斯うなるからは、あんまり憎うはあるまいかな。

ト葛城、口惜しき思ひ入れ。

葛城　そんなら、この暗がりを幸ひに、主と思はせ、わたしをば、落さう爲の拵らへ事か。さうとは知らず恥かしい。こりやどうせう、どうせうぞいなア、

トこの時、奥よりお爪、山三を引立て、傳吉、五助、勘八、ガヤ／＼云うて出で來り

つめ　モシ／＼、伴左衞門さま、いつの間にやら山三さん、廊下に置いた長持の、中に隱れてござんしたは、盗みいする氣でござんせう

山三　なんの盗みに來るものぞ、樣子があつて忍んだ長持。

傳吉　默りやアがれ。なんの樣子で

勘八　長持へ隱れるものか。
伴助　てつきり此奴は浪人の、食ふべき物が無いゆゑに、枕探しにうせたのか。
つめ　女郎の部屋々々うろついて、櫛笄を目がけるのか。
半助　モシ、お頭。
四人　油斷さつしやりますなえ。
伴左　そんなら山三は二階へ忍び、枕探しか。こりや、さうありさうなもの、浪人の身の活計に困り、盗みをするとは名古屋氏、味な商賣さつしやるの。
ト山三、床の樣子を見て
山三　ヤ、床の上には伴左衞門と、一人は葛城ではないか。そんなら身共に忍べと云うて、このマア體裁は、二人打解け
ト腹の立つ思ひ入れ。葛城、顔外け
葛城　山三さん。面目ない。恥かしい／＼わいなア。
山三　なんぢや面目ない。コリヤヤイ、最前の詞に相違の體裁、あの長持へ忍べよと、云うたは眞と、隱れて居ても沙汰も無う
つめ　なんの沙汰があるものか。長持へ隱したは、葛城さんの思ひつき。入つた跡へ錠を卸ろし、跡でしつぽり伴左衞門さま、床の入れ替へ魂膽まで、みな花魁の狂言ぢやわいなア。
葛城　なんの／＼。どうしてわたしが其やうな
山三　それでもわが身は、この床へ、なんで二人で其やうな。
葛城　サア、これには段々
山三　イヤ／＼、わりやこの山三を、騙した／＼。ようマアわしを
ト立ちかゝるを、四人押へて
半助　何をびくしやく刎ね廻る。
五助　おらが頭の思ひ者、葛城どのに指でもさすと
傳吉　只は置かぬぞ。コレ山三。今宵は頭と花魁の
勘八　うまくきまつた新枕、今から色客。
四人　色だ／＼。
ト山三無念の思ひ入れにて
山三　この場の樣子何もかも、承知いたして默つて居るに、譯があらうと此方に、料簡附けては見たなれども、餘りといへばコレ葛城、さうした義理ぢやあるまいが。
トきつと云ふ。葛城いろ／＼思ひ入れあつて
葛城　サア、尤もでござんす。道理でござんす。わたしぢ

やとて、どうしてマア、勤めはすれど人さんに、肌を穢さぬ心ぢやもの。まして譯ある伴左衛門さん。
伴左　コレサ葛城、なんぼ嘘を賣るのが商賣でも、白々しいその詞。肌を穢さぬ其方が、なんで身共と一緒に寢た。寢たばかりかは可愛いゝと、勤め離れた一言が、有り難くつて結構で、伽羅で造つた佛も同然、現になつた伴左衛門。お主とても嬉しげに
葛城　イエ、そりや嘘でござんす。なんのお前に
伴左　嘘とは云はさぬ。屏風の中で
葛城　サ、それも主と思うたゆゑ、恥かしい。……エ、モ、濟まぬわいな〳〵。
山三　濟むまい〳〵。斯かる手管に身共を僞はり、ようマアわしを
ト立ちかゝり、思ひ入れあつて
昨日今日まで眞實盡し、貢いでくれた心根を、貞女なものと思うたに、打つて變りしこの體裁、これが浮世の下世話の通り、七人の子はなすとも、女に心ゆるすなと、譬へは丁度
ト思ひ入れ。
茲であらうか。
トちつとなる。
つめ　コレ〳〵、山三さん。見世を引かせた花魁を、そんならこなさん、盗みにござんしたか。コレ、さうかいな。葛城さんを盗みに、お前、來たのぢや〳〵。
ト詰め寄る。山三傍向き居る。
葛城　ア、コレ、どうして主に其やうな心が
つめ　其やうな心がなくば、何しに又、二階へ忍んでござんした。なんであの長持へ隱れて居たのぢや。
山三　サ、長持に忍んで居たは
トつかへる。
傳吉　そいつも大方、勝手を知つた二階ゆゑ、枕探しにうせたのであらう。
勘八　道理でおれの煙管が見えぬワ。
半助　おれが胴亂も此奴が盗つたな。
五助　枕許の紙入れが見えぬも、山三が仕業であらうか。
四人　モシ、頭、油斷なされますな〳〵。
ト口々に云ふ、伴左衛門こなし。
伴左　わいらが云ふので氣が附いた。蒲團の下へ大切な
ト件の系圖を探す。見えぬに恟りして
さてこそ、無いワ〳〵。少しの間蒲團の下へ、入れて置

いたを
　ト云ひながら、山三の顔をヂロ〱見て
ハ、ア、これも矢ッ張り。……イヤナニ、山三、モシ、ちよつとそれへ。
山三　アノ、身共にな。
伴左　如何にも。
　ト合ひ方になり、山三前へ出て
山三　身共に用とは伴左衛門、なんの用事で。
伴左　用は云はずと知れてある。大概に出してしまはつしやれ。
山三　なんと。
伴左　おてまへといひ身共といひ、同じ浪人なれども、身共は運好く、白柄組の頭分、何不足無けれども、おてまへは尾羽打枯らし、貧窮に迫つての盗み心か。そりや悪い。以前のよしみ、伴左衛門、武士の情に口外は致さぬ程に、床の下へ入れ置いたる、その一品を出さつしやい。
山三　思ひもつかぬ盗人の悪名。身にとつて覚えござらぬが、達て身共を疑るなら……して、失うたその品は。
伴左　オヽ、身共が大切に所持いたして居る

　ト云はうとして
サ、その品をあらはに云へば、猶以て御身の恥辱になるゆゑ、黙つてヅッと出さつしやい。
山三　品は云はぬ、盗みし品を出せ、とは、どうも心得ぬ。
伴左　サア、それは云はずと覚えがあらう。
山三　イヤ、ござらぬ。その一品、あらはに云へぬは其方にも、何か一物、伴左衛門、隠し持つたと思ふゆゑ、それと詮議のその為に、葛城頼んで忍んだ二階。それが却つてこの身の難儀。これも誰が業。性根の腐つた女めゆゑ。
　ト葛城を恨めしげに見る。
葛城　サ、それゆゑわたしも心を尽す、その甲斐も無う今宵の體裁。拵へ事に、やみ〱と
　ト云ふを、伴左衛門打消し
伴左　拵へ事とは山三めが、二階へ忍ぶ枕探し。詞の甘い其うちに、盗んだ品を爰へ出せ。情を以て某が、穏便に云へば附け上がる。まだその上に、せかれた二階、伴左衛門が揚詰めの、葛城までも盗みにうせた。
　トお爪、山三の側へ寄り
つめ　コレ、山三さん、お前は〱、浪人者の分際で、全

盛な葛城さん、買はうといふのが厚かましい。茶屋の諸拂ひ、揚げ代の、溜つたゆゑに二階へは、揚げぬ筈を押し強う、忍んでござんすその上に、お客の物を盗んだり、身請けの相談極まつたる、葛城さんの邪魔になる。とツとゝ去んでもらひませう。丈の知れない野太いこなさん。

ト山三をくらはす。山三キツとなつて

山三　こりやおのれまで、通ひし客の身共に手向ひ。誤まりあるなら辛抱せうが、身請け沙汰との今の詞。そんならいよ〳〵葛城を

つめ　身請けの沙汰は伴左衛門さま、葛城さんも承知の上。

葛城　ア、コレ、なんのわたしが。

つめ　イヤ承知ぢや。承知でござんせうがの。

ト葛城、いろ〳〵思ひ入れあつて

葛城　アイ。成る程、承知ぢやわいなア。

皆々　ヤア〳〵。

つめ　そりやこそ、葛城さんの口から承知ぢやわいの。

山三　コリヤ、葛城。そりや本心で申したのか。

葛城　アイ。

山三　なんと。

ト合ひ方になり、葛城ズンと立つて、締めて居る袱紗帯を解き

葛城　わたしが心はこの通り、勤めの内は餘の人に、解かぬ心の判じ物。勤めに馴れた心から、空解けのしたこの帯に、蔭と日向が出來たゆゑ、解ける心になつたのも、浮氣た土地から尤もな、事を思うて下さんせ。間夫と客との手管にて、二道かけるおやなけれども、義理と情の纐纈合せた物はいつか一度、離れにやならぬも世の成行き、結び目堅き名古屋帯、切れてこれから雲の帯、締め替へる氣でござんすわいなア。

山三　すりや、今までの眞實な、心もいつか

葛城　仇に解けたる帯紐も、據ならうお前の顔の、文のやとはしまひ口、とう〳〵で暮らしたいわいな。

ト帯を締め立ち上がる。この時、山三刀の鐺にて、しつかと留め、キツと見得。胡弓入りの合ひ方になり

山三　エヽ、おのれはなア。廓にあつては君傾城、一夜流れの浮かれ女に、誠ありとは思はねど、女郎の舌頭取るに足らねども、それとこれとは譯が違ふ。屋敷勤めの以前より、馴染重ねた其方が身は、戀路なれども武士の意地。おのれに心掛けしより、家を忘れ身を忘れ、嘲り譏りもナニいとはんと、千辛萬苦も我が誤まり。さはさりな

から今までに、身貧なわれを立たさうと、心に思はぬ簪や、派手な衣裳が面目ないと、云うた詞を忘れはせまい。腸までが傾城に、成り下がつたか、コレ葛城。名古屋山三は面皮を缺いた。夜叉め魔王め、エヽおのれはなア。

葛城　サア、尤もでござんす。……それも苦界に沈んだこの身、樂しみならでは、勤まらぬわいなア。

山三　よう其やうな

ト立ちかゝるを、伴左衞門隔てゝ、キツと思ひ入れ。

伴左　痩浪人の身を以て、斯ゝる遊里に刃物三昧。誰れを切らうと思ふのだ。さしづめ戀の遺恨にて、身共を切るか葛城を、手にかけようと思ふのか。云はうやう無い大だわけ。

ト扇にて散々にくらはせる。山三かい潜つて、その手を留め

山三　こりや山三を、滿座の中で

伴左　打つてもいゝ。盗人夜盗の名古屋山三。そんなけちな根性で、われが願ひの叶ふものか。

山三　ナニ、この山三が願ひとは。

伴左　其方が親の山左衞門、武士のあるまい闇討ちに、その敵さへ何者とも、知れぬばかりか預かりの、佐々木の系圖失ふも、山三がその身にかゝつた事。その系圖さへ今以て、詮議も仕出さず剰さへ、親の敵を討たうといふ所存の無いは大腰抜け。劍術自慢の山左衞門、相手の一人も仕留める事か、手もなうやみ／＼くたばつた。親が親なら忰まで、揃ひも揃ひし智慧無しめ。それゆゑ身共が情の教訓、骨身にしツかと、こたへたか。

トまた散々に打ち据ゑ、キツと見得。山三無念の思ひ入れあつて

山三　身共へ意見の扇の笞。差當つたる山三こそ、汝の爲には今までは、戀の敵と爭ひしに、今宵は汝が吉日にて本望遂げたこの場の仕儀。打つといふのが羨ましい。如何なれば元春は、身の誤まりゆゑ、盗人とも夜盗とも、身が事なら云ひ譏るも苦しからねど、その父の名まで云はすとは、如何にも山三は人非人。斯く成り行くも皆天罰。理の當然のこの教訓、打つとも擲つとも伴左衞門、手出しは致さぬ。勝手におしやれ。

葛城　その憂き恥も誰がさす業。云ふに云はれぬ

伴左　云へば猶更山三が一分、立たぬ今宵のこの體裁。武士の魂ひ腐つた山三、仲の町にて取替へた、身共がたばさむその刀、穢れになるは元々へ、ほぐれた心も今爰で

又ぞろ元の遺恨の上塗り。この葛城と床入りの、様子を見ては山三も武士、立つまい／＼。

山三　もう斯うなつたら魂ひも、取替へさすとも何の益、サア、伴左衛門、こなたの心は戻す程に、身共が心も

伴左　承知した。

ト刀を出し、思ひ入れあつて

コリヤ、遣り手、仔細あつてこの刀を抜き放す。必らずともに驚ろくな。別條無いぞ。

つめ　ハイ／＼。

トあたりへこたし。

山三　コリヤ遣り手、山三とてもその心、うろたへ騒ぐな。

トお爪、山三へ目を附ける。伴左衛門、山三、思ひ入れあつて

伴左　然らば取替へ、差したる刀

山三　こなたの白刃も

ト両人刀を出し、抜いて、両方を取替へ

二人　これで互ひに

トしやんと差す。又シックリ納まる。山三思ひ入れあつて

山三　刃金の鍛へ、差し手變れど、鞘へしつくり。さすれば推量なした通り、慥かに父の

伴左　互ひに魂ひ元々へ、戻りし上は、次手にあの品、返してくりやれ。

山三　そりや何を。

伴左　いま云ふ通りその品は、云はねど其方に覺えがあらう。併し身共も外手より、不思議に手に入りし、お家の系圖のその一卷。

山三　さてこそ系圖を所持するからは

伴左　その所持せしも歸參の願ひ。

山三　ヤ、なんと。

伴左　山三を差措き某が、詮議仕出だし歸參の手蔓。

山三　それを横合ひ伴左衛門、詮議したとは合點がゆかぬ。さほどの事をこれまでに、知らず顏なる今宵の仕儀。人の皮着た畜生め。

伴左　貧乏神を叩き出せ。

皆々　キリ／＼爰を、出やアがれ。

ト山三を花道へ突き飛ばす。山三やう／＼起き上がり、思ひ入れあつて

山三　この身に願ひあればこそ、ヂッと辛抱して居たも、最早許さぬ武士の意地。最前よりの詞の端。正しく彼れ

が。……限りあらば、吹かねど花は散るものを、心せはしき春の山風。……最期を急ぐ、彼れら兩人。

葛城　覺悟ながらも、せめて一言。

伴左　云はぬが花の牛を馬

山三　乘り替へられたこの恨み〳〵

伴左　今宵はしつぽり、

葛城　この身を捨てゝ、

山三　今にぞ思ひ

伴左　ヤ。

山三　覺えて居らう。

ト氣を替へ、唄になり、山三下座へ入る。

つめ　モシ花魁、思ひ直して山三めを、ゲッと長棹、出來ましたわいなア。

五助　これから後がしつぽりと、口舌たつぷり云ひ草も

傳吉　今までの事は堪忍しておくんなんしと

伴左　首玉へ嚙りつかれちやア堪らねえ。

牛助　その時は親玉の、大きな目玉が三日月の、はらんべになつたやうな、眼になつてあらうなア。

伴左　無駄を云はずと、早く行け。

つめ　アイ〳〵、行きます〳〵、行くは行くが、……跡で

伴左　エヽ、煽てるなえ。

四人　アイ、おめでたうござります。

ト皆々ワヤ〳〵云うて下座へ入る。葛城思ひ入れあつて

葛城　山三さん。堪忍して下さんせ。お前への云ひ譯は。さうぢや。

トすらりと拔いて死なうとする。伴左衞門あわてゝ留める。この時、葛城の頭の笄落ちる。伴左衞門、葛城が拔く手を留めながら、件の笄を見る。葛城は伴左衞門が刀に差してある笄をよく見て

葛城　似寄りも似寄りし笄の、模樣は同じ蘆間の鷺。

伴左　後藤祐乘が蘆間の鷺。これを所持する傾城葛城。もしや揃ひし一對の、その片割れか。何とも以て。

葛城　合せて見たるその上で、語り合うたら

ト兩方より、笄差出し、伴左衞門合せて見て

伴左　ヤヽ、一對揃うた。模樣もしつくり。

葛城　割り笄の合うたる上は

伴左　親道犬が四十二の、二つ子なりとて笄の、片しを添へて都なる、五條あたりの橋詰めに

葛城　捨てゝありしと後の親、常に話しのこの割符。

伴左　明暮れ父の物語り。もしや添へたる書き物は

葛城　その幼名は岩橋と、書いてはあれど親の名の

伴左　書かぬも道理、捨て子ゆゑ。そんなら其方は

葛城　譯は知らねど、譯あるお方か。

伴左　血筋も血筋。現在の

葛城　エ。……してマア、お前は

伴左　われが兄だワ。

葛城　エヽ。そんならわたしや

伴左　實の妹。

葛城　すりや、お前とは

伴左　親身の兄妹。

ト兩人呆れて顔見合せ、葛城燭臺の灯を消し、兩方へ飛び退き

葛城　コレ、兄さん、わたしや畜生になつたわいなア。

伴左　知らぬ事とて思ひがけない。畜生は、てまへばかりか、おれも矢ッ張り。アヽ、面目ない。

葛城　サ、それゆゑ消したこの灯。名乘つて逢うては、どうしてマア、お前に顔が合されませう。こりやマア、どうしたらよからうぞいなア。

伴左　どうといつたらお主が身を、屋敷勤めの砌りより、知らずに居たゆゑ惚れた其方。山三が爲にこの廓へ、勤めをすると聞いたゆゑ、女房にしようと身請けの相談。

葛城　お前の心に從へば、山三さんへ義理立たず。不義の女も同じ事。殊に互ひに兄弟と、素性知れたる上からは何方にしても死ぬより外は、仕様もやうも無い體裁。これを思へば先刻にも、山三さんが腹立つて、お前とわたしを畜生と、云はしやんした一言が、いま身に當るこの前表。因果な縁でござんすなア。

伴左　今更それを云つたとて、初手から妹と知つたなら、何しにお主を口説くものだ。とても兄弟畜生に、なつたるからは世間へ顔も。われが死ぬならおれも死ぬ。これが眞の兄弟心中。併し非人と心中した、小紫よりちつとは增しか。覺悟極めて、この場で直ぐに。

葛城　そんならお前も前非を悔いて、死ぬる心にならしやんしたか。それがまだしも世間へ云ひ譯。處を變へてわたしも覺悟。マアお前から、モシ兄さん、どうぞ死んで下さんせ、

伴左　死ぬとも〳〵。武士たる者が畜生になり、片時も生きては居られぬ。物の見事に、この場にて

葛城　そんなら、ほんまに、もう爰で。

伴左 今が最期だ。南無阿彌陀佛。

ト脇差へ手をかけ、死なうとして

待てよ。小さい時から顔も知らず、生れた儘で別れた妹。名乘り合つたは、たつた今。われとおれとが兄妹とは、外に知り手は一人もなし。そんなら死ぬるに及ばない。こりや止めよう、止しにしよう。

葛城 そりやお前、卑怯でござんせう。

伴左 卑怯未練も誰れ一人、見た者なけりやア義理も無し大事の命を輕々しく、こりや滅多にやア死なれねえ。それより大事な床の下へ、入れて置いたるその品を、山三めが知らぬと云ふが定ならば、これも尋ねにやならぬ品。

葛城 してマアお前が主さんを、疑はしやんすその品は、いよ〳〵お家の

伴左 それが佐々木の家督の系圖。今では山三が緣もないこの伴左衛門が妹の其方、この身の大事を

トあたりを見廻し、思ひ入れ。

葛城 その系圖こそ山三さんの實の親、山左衛門さまが預かりの一卷、また白井の親御が神妙劍、鎌倉武將へ持參の道筋

伴左 庭は戸塚の松原にて、荷擔人引き連れ待ち合せ、切つて捨て、身が手に入れし神妙劍。荷擔なしたるその一人、心變りか本庄助八、直ぐに奪うてその場を逐電。その後鎌倉初瀨寺にて、其方も存じの通り、山三が難儀となつたる系圖、身が盜ませて所持なしたるソ。

葛城 すりや、その系圖もお前の業。殊に名古屋の親御さまで

伴左 討つて捨てたりや伴左衛門、山三が爲には身共は敵サ。

葛城 云ひ交したる山三さま、主の親御は舅も同然、緣あるうちにわたしも共々、覘ひし敵は現在兄さん。

伴左 山三が尋ぬる系圖の一卷、爰の二階で失せたるゆゑそれを尋ぬるそれまでは、山三がおれを覘へばとて、成るたけ隱れて居ねばならぬ。それ程大切なおれが命。滅多に死なれぬ。どうして〳〵。

葛城 わたしはどうで長らへぬ命。わたしが死ねば畜生の惡名とても知れぬ道理。

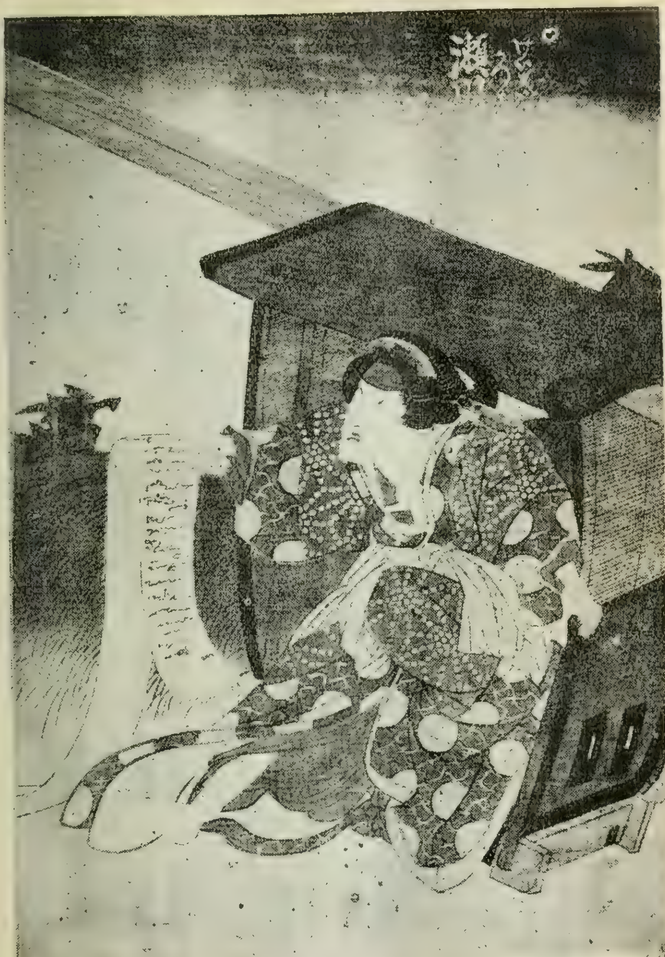
伴左 これまで直さぬおれが根性。われは死ぬとも勝手にしろ。併し今まで可愛いと思つた葛城。名乘つて見れば、矢ツ張り妹、緣はある。おれが明かした今の大事。夫山三へ義理を立てゝ、他言いたさば兄が身を、訴人をする

も同然だぞ。
葛城　サ、それゆゑ、わたしは身を捨てゝ
伴左　死んでしまふか。ヤレ可哀や。
葛城　エヽ、お前は邪慳な
ト胸倉を取るを、伴左衛門振り切り
伴左　妹ながらも遺恨ある。山三に惚れた女ゆゑ、酷く云ふは云ふものゝ、今から思へばその以前、惚れて通つたこの廓、夜は來れど深窓の、晝をば何と烏羽玉の
葛城　闇で契りし悪縁は
伴左　名乗つて三輪の神ならで、その葛城にうか〳〵と
葛城　迷ひの雲に稲妻を
伴左　悟らぬ先きの尊さよ。今となつちやア
葛城　エ。
ト伴左衛門、頭へ手を上げる。チヨンと木の頭。
伴左　ア、よせばよかつた。
ト投げ首する。葛城泣き落す。これをキザミにて、よろしく拍子　幕
禪のツトメにて引返し。

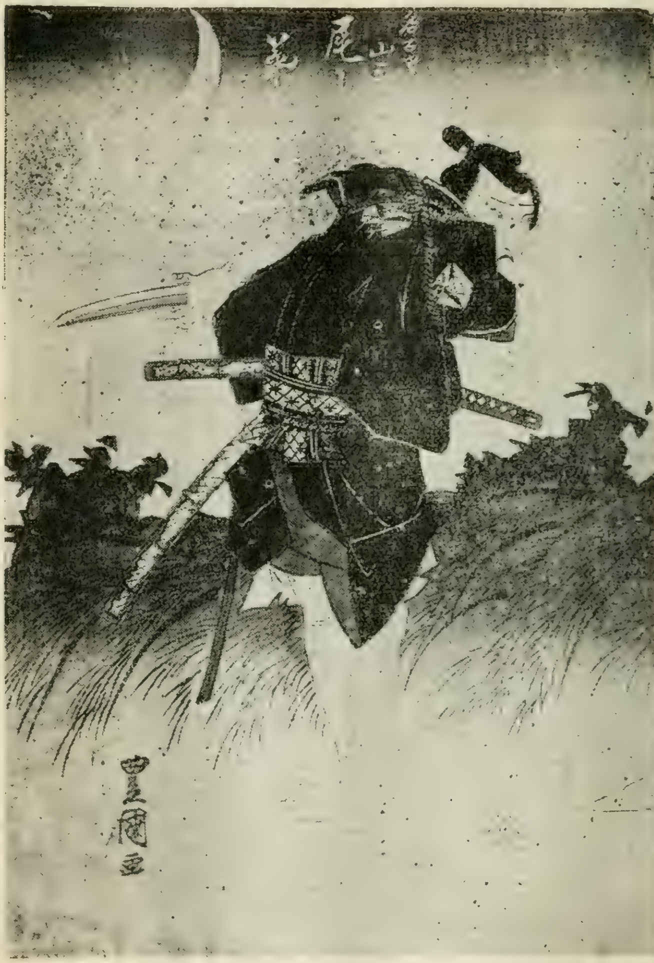
二番目　大切　吉原田圃の場

役名　名古屋山三。傾城、葛城。幡随長兵衛。野晒悟助。不破伴八。湯灌場傳吉。早桶半助。

本舞臺、正面、忍び返し付き、誂らへの板羽目。鯱れ橋掛けあり。向う一面、櫺子障子の二階、閉め切り、好き所に榊、見越しにて、すべて吉原田圃の體。爰に蛇の目の傘、後ろへかたげ、二階を見詰めて居る男あり、時の鐘、雨の音、蛙の聲、禪のツトメにて幕明く。
ト本釣り鐘になり、件の男、正面を向くと、山三にて高からげ、大小、身拵らへの體にて、思ひ入れあり。
山三　思ふに違ひ葛城が、伴左衛門に心變りの上からは、正しく山三が願ひの一々、物語りしに疑ひなし。さある時には親の敵、尋ぬるお家の系圖まで、手に入るは覺束ない。昨日今日まで貞女ぞと、思ふ女が心變り。それに引替へ下女の國、毒の横死も某を、助けん爲に命を捨て



初演の錦繪　五世瀬川菊之丞の葛城



三世尾上菊五郎の山三

トほろりとして

もうこの上は、あの葛城、伴左衞門が身請けにて、根岸の寮へ通り筋、爰に待ち受け討つて捨て、正しく所持するお家の系圖、殊には親の仇敵、伴左衞門め、おのれ、其まゝ、置くべきか。

トきつとなる。この時、揚げ幕にて、四つ手駕籠の掛け聲するゆゑ、向うを見詰め

あの駕籠こそは伴左衞門、爰に待ち受け。さうぢや。

ト思ひ入れあつて、顏を隱す。矢張り時の鐘、禪のツトメ。向うより中間一人、雲に稻妻の留守居提灯を持ち、駕籠舁き四つ手駕籠を早目に擔うて、出で來り

中間　道が濘るぞ。氣を附けさつしい。

駕舁　合點でござります。棒組、ぬかるな。

同　呑み込んだ〳〵。併し雨がやんでよいぞや。

ト思ひ入れあつて、行かうとするを、向うへ廻り、駕籠の棒を捕へる。中間悔りして、提灯を上げ

中間　山三だな。

ト聲かけるを、提灯を切り落す。これにて、ワツと云うて驚き、中間、駕籠舁き、逃げて入る。この物音に駕籠の中より半助、黑き頭巾を冠り、飛んで出で、逃ぐるを山三引ツ捕へ引附ける。半助、ワナ〳〵慄ふ

山三襟髮を摑み、顏を見て

山三　こりや人違ひ。……併し子方の此奴も同類。

半助　ア、モシ、お助けなされて。

ト慄ふを引附け

山三　コリヤ、命は助ける。伴左衞門は〳〵。

半助　アイ〳〵。爰へ、駕籠で來ます〳〵。

山三　相違ないか〳〵。

半助　いま參ります〳〵。

ト慄ふ。

山三　助ける。失せろ。

ト突き飛ばす。逃げんとして

半助　伴左衞門さま、山三が居ます〳〵。

ト逃げながら呼ぶゆゑ、見事に切り倒し、キツとなる。これより向うの二階明るくなり、伊勢音頭のやうなる唄になり、山三思ひ入れあつて、半助が死骸の懷を尋ね、もしや系圖を預り居るやと思ひ入れ。向うより五助、傳吉、頰冠りして、何心なく話しながら、下駄がけ、傘を一本持ち、出で來り

五助　明日の晩は、てめえ來るか。

傳吉　エヽ、この男も持てると思つて、憎い奴だ。

五助　措きやアがれ。鈍く見られちやア、山三と引ッ張るな。

ト嘯云うて行くを、山三聞いて、二人の足を切り附ける。これにて二人「ワッ」と云うて

二人　ヤ、山三だな。

ト跛引き〳〵逃げるを、傳吉を引ッ捕へ、五助が目先に白刃を突出す。五助、手を合せて慄うて居る。

山三　コリヤ、伴左衛門は、この道をうせるか〳〵。

二人　ハイ〳〵〳〵。後からでござります〳〵。

トこれにて手を放し、向うを見て居るうちに、二人は跛引き〳〵

二人　人殺し〳〵。

ト聲立てるゆゑ、ちよつと立廻つて二人を切り倒し、懐中を探り見て、系圖無きゆゑ、死骸を蹴飛ばし、また向うに人聲するゆゑ、花道まで行き、キッと見届けし思ひ入れあつて、舞臺へ来る。揚げ幕より中間一人目立たぬ留守居の提灯持ち、駕籠の者二人、長褌の駕籠の者にて、勘八、駕籠に附き添ひ、捨ぜりふにて出で来り

三人　親方、根岸へ行つたら酒であらうね。

勘八　勿論サ。急いでもらはう。

三人　濘りやすぜ。

ト行き過ぐるを、山三、提灯を切り落す。「ワッ」と云うて中間逃げる。

皆々　盗人め〳〵。

ト息杖を持つて、打つてかゝる。山三是非なく駕籠舁きを相手に立廻りしながら、駕籠の中へばかり立寄る思ひ入れあつて、立ちどまり、駕籠の内を突く。勘八後より組み附くを、切り拂ふ立廻り手早くあつて、四人とも見事に切られる。駕籠の中より葛城、黒の男頭巾を冠り、稲妻の羽織にて、書き物を持つてよろぼひ出るを、山三引留める。葛城、胸づくしへ取附く。山三摑みし手を切り落す。腕、胸を摑みしまゝ残る。葛城の首を打ち落し、切つたる髪の髷を引下げ、空に透かし見て、いろ〳〵しても暗きゆゑに、顔の見えぬ事

山三　伴左衛門と思へども、面もしつかと

ト有り合ふ袖を引きちぎり、これに首を包み、腰に附けて

系圖の行くへ知れざる上は、宅へ歸つて

ト腹切らうといふ思ひ入れにて、東の歩みへかゝる。時の鐘、凄き合ひ方、蛙の聲、爰にて風の音する。山三、歩みを廻り、花道へかゝりし時分に、舞臺の道具、鷹揚に廻り

以前の山三の世話場になる。

件の門口、風の音、一つ鉦聞える。揚げ幕の上より怪しき光り物、ふはり／＼と舞臺の方へ來る。山三フツと目を附け

山三　螢の如きあの光り、……その色青く、心火とやらんか。

トこの時、件の光り物、門口の上を引取り、内へ入りし體にて、舞臺へ落ちて消えると、佛壇にて花活け倒れ、物音して煙硝火パツと立つ、尤も其うちドロ／＼一つ、凄き合ひ方、風の音聞える。山三、惣身ゾツとして寒氣立ちし思ひ入れあつて、舞臺へ來り、門口をしやくり、戸を明け、内へ入る。暗き思ひ入れ。あたりを尋ね、火打ち箱を探り、火を打つて行燈を灯し、炬燵櫓の上へ葛城の首を載せる。本首出る。山三見て

ヤ、、、、伴左衛門と思ひの外、こりや葛城が首。すりや人違ひで討ち洩らせしか。エヽ、口惜しい。さるにも、彼奴も恨みの

ト思ひ入れ。この時、切り首の髷より書置出かゝり居るを見附け、直ぐに取上げ開き見て

「書置の事。」……ヤ、、、、。

ト行燈にかざしキツと見て

「御さげすみも顧みず、書き殘しまゐらせ候。我が身事先もじ御前様と契約いたし候ふ事を、伴左衛門承り候ふてや、灯を消し、床に忍び居られ候ふを、御前様と取違へ、仇なる人に戯れ候ふ事恥かしき體裁、悔ゆるとも甲斐なく直ぐに消え果て申すべき我が身なれども、心を糺し、親御の敵を聞く手段にて、心に思はぬ最前の愛想づかし、お腹立ちにて、我が身事御前様の手にかゝり、相果て申すべき身の願ひ、それゆゑ伴左衛門の身許分り、笄の證據にて、常々私しがお話し申し上げ候ふ通り私しは捨子にて、名乘り合せば伴左衛門事、我が身の爲には實の兄、假初めならぬ床の内、この世からなる畜生に、猶更申し譯立ち難く、その上親御様の敵も伴左衛門にて、さりながら系圖の一卷は、床の内にて失ひ候ふに違ひ御座無く候ふ。私し命あるうちは、兄の訴人も同じ事、相果

て候ふ後は血筋の我が身を親御様の敵と思し召し候うて伴左衛門の命お助け下され候ふやう、偏へに／＼願ひ上げ〻〻〻。二世と語らふ御前様、今際の際には腹立たせ、冥土の障りはこれ一つに御座候ふ。我が身一つに降りかかる涙の雨のをやみなき心を、不便と思し召し、何事も御堪忍下されかし。申し上げたき數々は濱の眞砂に候へども、思ひに掻きくれ別ちなく、惜しき筆をとめ〻〻、とし、我が夫へ、葛城より」……ヤ、、、、。さては二人は兄妹にて、思はぬ枕を交せし葛城。その云ひ譯に覺悟極めしこの書置。さうとは知らず、一途に思うて

ト首を抱へて思ひ入れあつて

さるにても系圖の行くへ。伴左衛門が、よもや知らぬといふ事はあるまい。在所を尋ねて

ト行かうとして首の方へ思ひ入れ。

せめて我が手で阿伽の水。只一遍の

ト凄き合ひ方、風の音、一つ鉦。あたりの茶碗へ水を汲んで、首へ手向け、樒の葉無きゆゑ、心附き、佛壇へ行き、花活けを持ちて來り、この花活けの中に燕一羽とまり居るに、眼を附け

思ひがけない佛間の中、樒に塒のあの燕。

ト不審のこなし。

もしや死んだる葛城の、魂ひ佛間へ。

ト思ひ入れあつて

南無阿彌陀佛々々々々々。

ト件の燕を持ち、門口へ來りて

「亡き魂よ、主は誰れかは知らねども、結び合せよ、下がへの褄。」……もしや妻の一念の、暇乞ひにと濡れ燕。性を返して未來は夫婦。南無阿彌陀佛。

ト件の燕を放つ。仕掛けにて日覆へ引上げる。よき所にて、この燕二つに割れる。中より仕掛けの人魂出る。寢鳥、ドロ／＼になる。山三これを見て、手を合せ、目を閉ぢ、思ひ入れあつて

疑ひも無き葛城が靈魂なるか。不便の最期もこの身の誤まり。併し長らへ居るとても、敵の妹、添ふ事ならず。未來は必らず一つ蓮。南無幽靈、出離頓生菩提。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト大ドロ／＼になり、件の人魂引いて取る。ドロ／＼止む。山三氣を替へ、思ひ入れあつて

身の愁傷に取紛れ、一大事を怠つたり。この上はなに猶豫。伴左衛門が在所を探し、系圖の一卷取返し、親人の

敵討ぞ。……ソレ。
ト身拵らへして、行きにかゝる。この時、向うより長兵衛、系圖の一卷を持ち、出で來り、直ぐに入る。山三これに關はず、出にかゝる。長兵衛ちよつと留め
長兵　お喜びなされませ、山三さま。
山三　こなたは長兵衛。喜びとは。
長兵　お前樣が艱難辛苦の、元はといへば、お家の系圖、不思議な事で手に入りました。
ト一卷を山三に渡す。
山三　ヤ、、こりやコレ、紛ふ方なきお家の系圖。チエ、、忝ない。
長兵　それはかりぢやアござりませぬ。わしが世話する權八どの、今日思はずも上野にて、本庄助八に出會ひしゆゑ、只一太刀に討つて捨て、懷中見れば神妙劍、やすやす御手に入つたれば、寶出づれば用無き命と、我が家へ歸り一部始終を物語り、この二品をお前へ渡し、殿へ忠勤二人前、頼むとばかり、立派な最期。
ト神妙劍を渡す。
山三　すりや權八には腹切つたか。ホイ。……何から何まで長兵衛どの、最早二品手に入る上は、親の敵の伴左衛門。
長兵　隱れ所は根岸の寮。
山三　やがて本望。
長兵　めでたい〳〵。……先づ今日はこれぎり。
めでたく　打出し
當狂言幕數多きに附き、これまで興行仕り候ふ所、此あと、長兵衛内の場相殘り候ふ間、一幕奉入御覽候。

第二番目大切

長兵衛内の場
今戸人形屋の場
山谷堀祭禮の場

役名――白井權八。幡隨長兵衛。下部、八内。八内女房、お梅。長兵衛女房、お近。唐犬權兵衛。一子轅の次兵衛。遣り手、お爪。ぜげん、善六。一子長松。一子、岩松。出ッ尻清兵衛。極樂十三。本庄助八。子分、三太郎。講中、太郎兵衛。同、八左衛門。同、嘉兵衛。名古屋山三。不破伴左衛門。

本舞臺、三間の間、世話場の平舞臺。上の方、佛壇、爰に前幕の小紫が小袖を置き、香花手向けてあり。眞中、暖簾口。下の方、鼠壁。大柱、吊り物にて水口を見せ、上手を見切り、二枚障子。よき所に門口これに誂らへの櫺子を附け、反故張りにて所々破れてあり。この外に、大路地の入り口。爰に近在手紙、便町飛脚八内と書いたる表札あり。すべて花川戸幡隨長兵衛住居の模樣よろしく、幕の内より佛壇の前にお爪、太郎兵衛、八左衛門、嘉兵衛、いづれも講中の形、三太郎、居候ふの形にて、百萬遍の音頭を取つて居る。側に極樂十三居る。清兵衛、前髮丁稚の形にて、凧の骨を卷き居る。長松、附け紐の形にて、暫の凧の繪を擴げて居る。てんつゝにて幕明く。

皆々　南無阿彌陀佛々々々々々々、

清兵　コレ／＼、坊さん、お前そんなにすると、大事な凧が皺になつて、「暫」が腹が立つぜい／＼

長松　馬鹿を云へ。おれが最厦の成田屋は、どうか強いなア。

ト頭を振つて、餘念なく見て居る、

十三　エヽ、なんだ、内の親玉に似て居ると思つて、豪勢に嬉しがる。

長松　知れた事サ。おれが附いて居て、國貞に描いてもらつたのよ。

三太　ほんに、おれが親方と「暫」とは、何方が強からう。

コレ・坊さん、とてもの事に、この「暫」に、繪の猿を遣るといゝなう。

十三　無駄を云ふな。また注文が出て困るわやい。ドレ、その骨がよくば、お主は講中へお茶でも上げろ。爰は邪魔だ、奧へ行つて貼り上げやう。

清兵　さうしなさい。おかみさんが居ねえで、内の始末が亂騷ぎだ。

長松　オヽ、母さんは、いつ戻らしやるな、

十三　それが嫌さに「暫」で御機嫌取るのだ。サア、來なさい。

ト合ひ方になり、十三よろしく大凧の繪と骨の竹を持ち、長松の手を引き、暖簾口へ入る。此うち、六字つめになる。

皆々　平等一切發菩提心……往生安樂。

ト鉦を打ち納める。

三太　ヤレ〳〵、皆さん、御苦勞でござりやした。サアサア、お茶を上がりませ〳〵。
　ト盆の上に茶碗を並べ、持つて來る。
つめ　構はつしやるな〳〵。ほんに、どなたも御苦勞に、よう精出して下さりました。
太郎　イヤ、わしらよりは清兵衞どの、大きに大儀でござります。
つめ　それサ、ネエ、出ッ尻さん。お前、見掛けに似合はぬ、しをらしい。その癖見なさい、好い譯サ。ねえ、皆さん。
清兵　なにサ、そんなに褒めなさんな。百萬遍は不間でも毎日地内の念佛講で、双盤ぢやア餘程賣れた顏サ。
太郎　さうでござらう。イヤ、奇特なものだ。
八左　イヤ、奇特といへば、爰の長兵衞どの、なんの由縁か知らないが、この間、汐入堤で切られて死んだ、三浦屋の小紫
嘉兵　側に一人の非人體の男の死骸。それでどうやら、心中のやうに聞きました。
八左　その小紫の問ひ弔ひ、ほんに、阿母、お前その時分三浦屋に居たの。
つめ　アイサ、お聞きなされませ。緣づくとやらは味なもので、死なれたわしが連合ひの所へ、二度添ひの女房が連れ子にして來た小紫、今のお傳は先妻の腹に出來た。その時分には、どこかの御家中、緣づいて、今の岩吉は、その亭主の子サ。わしは丁度三度目の女房で、今のお傳も小紫も、生さぬ仲のわしが娘。非業な死で可哀さうでも他人のやうには思ひませぬ。わしも、例へ遣り手こそしたれ鬼ぢやアなし、可哀さうな事を致しました。
　トほろりと泣く。
清兵　カウ〳〵、お爪婆さん。そんなら何か、こなさんも、元は乳母奉公でもして
つめ　アイサ。わしも不破の
　ト云はうとして
清兵　なんの昔を云ふ事もないが、さるお屋敷のお乳の人。道理でおれが名のやうだ。
つめ　なぜでござんす。
清兵　出ッ尻だものを。
皆々　何を云はつしやる。
　ト鳴り物になり、向うより助八出て來り、内を覗いてお爪を手招ぎし、門口へ呼び出して

助八　これだ。

ト手紙を出す。お爪取つて

つめ「お爪どのへ額五郎。」……そんなら若殿様か。

ト開き見て

そんなら、源さん。

助八　お爪。……氣を附けさッし。

ト助八向うへ、お爪は元の座へ戻る。懐より手紙を落す。合ひ方、時の鐘、本釣り鐘になり、花道より長兵衞、浴衣に細帶、日和下駄、着物を抱へ、湯戻りの形。後より捕り手二人附いて來て、花道にて立廻りあつて

捕一　幡隨長兵衞。

二人　腕廻せ。

ト十手を振上げる。長兵衞思ひ入れあつて小腰を屈め

長兵　これは存じも依りませぬ。私しに何科あつて

捕一　云ふな長兵衞。汝が匿まひ置いたる紫扇蝶

捕二　彼奴こそ誠は白井權八。繩打つて渡さばその通り。

捕一　異議に及ばゞ、

二人　腕廻せ。

トまた立ちかゝる。長兵衞よろしく留め

長兵　先づ／＼お待ち下さりませう。……成る程、一二度出合ひました紫扇蝶。白井權八とやらは存じませぬ。由緣かゝりもない長兵衞、匿まつた覺えはござりませぬ。町人なれども私しも、人に知られた幡隨長兵衞、子分子方もござりますれば、手筋もそれと分り次第、繩打つてお渡し申しませう。

捕一　すりや、其方の働らきにて

長兵　花川戸の長兵衞。毛頭虚言は申しませぬ。

捕二　神妙なる返答。

捕一　捕へ次第に、その時キッと。

長兵　畏まつてござります。

二人　然らば、イザ。

ト捕り手二人引返して、花道へ入る。矢張り合ひ方長兵衞これを見送り、思案しながら、本舞臺へ來て、門口へ入る。

三太　エヽ、親方、笊を持つて迎ひに行かうと思つた。とんだ長い湯でござりまする。

長兵　何を吐かす。うぬぢやアあるまいし、そりやさうと皆様、大きに御苦勞でござりました。コレ、茶でも入れて、云ひつけたお菓子でも上げたかよ。

太郎　イヤ／＼、何も構ひなさるな。深切づくの念佛講中。

御馳走よりは、ナウ、何れも。

八左　左やうサ。氣の毒なのは、爰の内のお内儀。定めて譯もあらうなれど

嘉兵　幸ひ百萬遍のめでた次手、講中寄つて、どうぞコレ、詫び言の口をきいて見たい。

長兵　アヽ、モシ／＼。お近めが事なら、思し召しは有り難いが、もう仰しやつて下さりますな。

清兵　お爪婆さん、聞かつしやい。あの通りだから、おいらが云ふと、叱られてばかり居るわな。

つめ　さうであらうが長兵衛さん、講中のお方があのやうに、皆さん寄つてのお詫び言。

長兵　コレサ、往生づくめにこなさんまで。萬更目の明かないおれぢやアあるまいし、料簡のなるもならぬも、みんな胸にある事だ。彼奴が日頃の一部始終、皆様にも話したいが、マア、ちよつと云やア小まめな方よ。亭主の裾から襤褸の出るは、女房の恥とやら。うぬの勝手な針仕事が好きで、その癖朝寝が大嫌ひ、夜のうちから起きて、掃いたり拭いたり。それだから見なせえ、おれが所の銅壺は、御門徒宗のお持佛堂を見るやうに光らア。無駄錢を遣はず、他人様におれそれがよくつて、ちつと遊山にでも出ろといへば、その錢で長松が袷の一つも拵らへるがいヽなんぞと、しみッたれが、わしの氣に入らない。……コレサ、お婆どん、講中の衆へ免じてと云ひたいけれど……マア、當分のところは

太郎　さうだが、おいらは、折角口をきいて、左樣ならようござりますと、歸られもしまい。急に思案も附くまいての。

嘉兵　さうサ。マア、今日は歸つて、機嫌の好い時。

三人　それ／＼。

長兵　お婆どん、そこいらをいヽやうに頼みますぞ。

ト奥の方を向き

十三や／＼。

ト呼ぶ。奥より十三出で來り

十三　アイ／＼。なんでござります。

長兵　サ、何は無くとも、講中の衆へ上げてくりやア。

十三　アイ、なんだかわからねえ精進料理だ。何を云ふにも、これの無い

ト小指を出し

ほんに埒口はねえわな。

つめ　なにサ、お心安い仲だものを。サア、どなたもお出

でなせえ。

皆々　これはいかに御馳走でござります。

ト合ひ方になり、講中にお爪附いて奥へ入る。十三あとを見送り

十三　あのねえ、小母さん。いゝやうにして上げてくんなせえ。……イヤ、上げてと云へば「暫」のこの凧の、糸目を附けねえで、あの子が腹を立てゝ居やう。

長兵　イヽヤ、十三にはおれが頼みがある。糸目位は三太丁度お主にいゝ仕事だ。泣かせぬやうに遊ばせてくりやれ。

三太　オツとそこらが山の宿、差詰め相手はこの三太。

ト凧の絲巻を持ち、奥へ入る。あと合ひ方。

十三　親方、わつちへ頼みとはえ。……聞えた。彼の事かえ。

ト二階へ思ひ入れ。

長兵　さればサ。先刻も湯からの歸りがけ、二階へ隠して置く事も、どうか嗅がれた様子だ。それだに依つて、アノ、當分、主を一月寺へ遣らうと思つて。

十三　さうでごんす。人出入りの多い爰の内。マア、彼處へさへ預けて置けば、まさかの時にやア

長兵　日が暮れたなら駕籠に乗せ、目立たぬやうに中田圃から、てめえも附いて……だが、待ちやれよ。あの形ぢやア、どうも先へやつちやア。

トあたりを見廻し、佛壇の下の小袖を取つて来て

幸ひ女のこの小袖。

ト十三へ渡す。十三受取り

十三　これぢやア誰れも氣が附かない。

長兵　コレ。

ト二階へ思ひ入れして囁く。

十三　呑み込みやした。わつちもとつくり

長兵　頼んだぞよ。

十三　合點でござります。

ト合ひ方、時の鐘になり、十三よろしく、今の小袖を持ち、二階へ上がる。

長兵　可哀さうに、科もない女房に暇をやり。世間の人目を忍び、世話せにアならぬも男の意氣張り。生中人に知られた長兵衞。うるさい世話の、浮世ぢやなア。

ト莨盆引寄せ、思ひ入れ。唄になり、向うより蟲の次兵衞、木綿やつし、羽織の形、鐵漿壷を下げ、後よりお近、世話女房の形にて、風呂敷包みを抱へ、出で来

り
次郎　コレ、日頃にも似合はぬ。何も案じる事はない。早く歩ばないか。
ちか　お前また、機嫌の悪い所へ行つて、つけ〳〵と云はしやんすな。わたしや外に待つて居る程に、お前マア、先へ入つて
次兵　合點だ〳〵。
ト門口へ來り
長兵衞、内にか。
トずつと入る。長兵衞茛をのんで居る。
オヽ、内に居るワ〳〵。この頃から、いつ來ても〳〵、ついに内に居た事が無いゆゑ、今日も留守なら待つて居る氣で來た。よく内に居たな。
長兵　わしだつて用がありやア、留守な事もなくつてサ。ようござりましたな。
次兵　來ないでわサ。噂を聞けば、どうか金の要る事がある樣子だから、娘のお近も鐵漿を持つて來た。銅壺の前へ直して置きやれ。
長兵　去つた女房の鐵漿を、なぜ銅壺の前へ直すのだ。
次兵　知れた事だ。お近はおれがかゝり娘、家藏持つた所から、貰ひに來たれど遣らずに居たが、其うち、こなたにくツつき、こなたも人に知られた顔。諸道具揃へて寄越した上、ソレ其やうな、子まで出來た夫婦仲ぢやないか。それに委細に後からと、今日が日まで此おれも、馬道ぢやア知られた親の次兵衞。娘に何か仕落ちがあるか。間男でもしたか。大酒喰うたか。但し又、小盗みでもしたといふのか。譯があらう。サア、それを聞かう〳〵。
長兵　ハテ、こなさんも、馴れ馴染んだ女房去るに、よくよくな事がなくつて、どうするものだ。疵も附けずに歸したは、こりやこなさんへ達引だ。大概そこらは推量して、引取つて行かつしやい。譯を云つたら血で血を洗ふ恥かき道具でごんせうぞえ。
ト此うち、お近聞いて居て、ズツと入る。
ヤイ、うぬは去られた内へ、何しに來た。
ちか　何しに來たえ。モシ、先刻から門口に聞いて居れば、血で血を洗ふ恥かき道具ぢやと云はしやんしたが、なんで譯を云へば、血で血を洗ふ恥かき道具でござんすえ。サア、それを云はしやんせいな〳〵。
長兵　ハテ、云はねえのが此方の情だわえ。
ちか　イエ〳〵、お前は云はぬが情でも、此方は聞かにや

ならぬわいなア。

次兵 さうだ〳〵。それでこそ、おれが娘だ。コレ。長兵衛、サア、その譯云つて聞かしやれ。譯が聞きたい、譯が聞きたい。

長兵 サア、その譯は。

ちか どうでござんす。

長兵 サア、なんでも置かれない譯だ。出て行け〳〵。

ちか イエ〳〵、聞かぬうちは、出やせぬわいな〳〵。

次兵 オヽ、聞かないうちは、出るな〳〵。

長兵 出ないといつて、去られた内へ、誰れが許してうしやアがつた。

ちか その去つた譯、聞かうと思つて。

長兵 譯を聞かうも凄まじい。出やアがれ〳〵。

ト外へ出さうとする。この立廻り、皆々よろしく、てんつゝになり、向うより杢郎兵衛、家主の形にて出て來り、捨ぜりふにて直ぐに舞臺へ來り、この中へ入り、間違つて、踏のめされる。

杢郎 コレサ〳〵。どうする〳〵。

トこれにて、杢郎兵衛を見て

長兵 こりやア大家様かえ、御免なされませ〳〵。

杢郎 御免なさいぢやアないわな。……大家を踏むは、家賃を踏むも同じ事だ。

ちか ほんに、大家様、好い所へお出でなされました。恥を申さねば理が知れぬとやら、わたしは爰の内を出されましてござりまする。なんの越度やら、わたしは爰の内を出されましたが、越度が知れぬゆゑ、それを聞きに參りまして

次兵 お前、譯さへ立ちますれば、引取らないでどうするものでござります。しなも無くつて出されたと云はれちやア、この次兵衛が立ちませぬ。

杢郎 こりやア、イカサマ、譯は知らぬが、別れるならばこれが疵だと、得心づくがよささうなもの。コレ、長兵衛どの、何もわしに遠慮はないから、お近どのゝ悪い事を云つて去るがようござります。

ちか 大家様の仰しやる通り、それぢやに依つて置かれぬといふ事なら、詫びの仕様もござります。それも云はずに親元へ

長兵 モシ大家様、好い所へお出でなされました。斯ういふ事には、他人が一人交らないど、理窟が解りませぬ。マア、好く聞きなさい。第一、女の癖に朝起きたワ。そ

の上に綺麗好きで、他人様に愛想が好くつて、無駄錢とては怪我な事。

杢郎　成る程、こりや尤もぢやわいの。

長兵　まだその上に、子を可愛がつて、遊ぶ事が大嫌ひ。髪結ひに髪は結はせず、縫ひ針業は持つて來なさい。酒は飲まず。長屋歩きをした事なし。どこの國にかこの通り、人出入りの多いわしが内で、ついぞ間男をした事がない。この通りの女房だものを、去つたも無理ぢやアござりますまい。

杢郎　イヤモ、聞けば聞く程、長兵衞どのが皆尤も。これぢやア次兵衞どのゝ、二言と云はずに、引取らずばなるまい。

次兵　成る程、娘が惡い。……ハテサ、お主が惡い事になつて居ろサ。そんなら、こなたの云ひ條を立つて、お近を連れて行かうから、諸道具は云ふに及ばず、夏冬の物品數揃へて爰へ出しやれ。鐵漿壺と風呂敷包みばかりぢやア受取るまい。

長兵　サア、そりやア

次兵　それもこなたと縁を切つて、他人になつて、ちつと詮議が……サア、去り狀書きやれな。

ト長兵衞思ひ入れ。

長兵　そんなら、お近を離縁すりやア

次兵　諸道具揃へたその上にて、また金にする手段があるよ。

長兵　それぢやア滅多に去られねえ。

次兵　去り狀書くか。

長兵　サア

三人　サア〳〵。

次兵　長兵衞、返事は、どゝどうだ。

長兵　ようごんす。女房を裸にしたと云はれちやア外聞が惡い。塵ッ葉一本殘らず附けて、去る去らないは後方までに。

次兵　そんなら返事の分るまで、マア、矢ッ張り聟舅。……こりやア大家樣、お世話でござりました。

杢郎　なにサ、お前、わしもひよんな所へ來合せて、懸り合ひにならうと案じましたが、どうか丸く納まりさうだ。そんならもう歸りませう。お內儀も、これから心を改めて、小遣ひなども湯水のやうに、バッ〳〵と遣はつしやい。着物なぞも長くして、あの女房は引摺りだと云はれるやうにせにや、あの御亭主の氣に入りませぬぞ。

ちか　イエモウ、わたしもこれから内に居りますなら、随分心を改めて、何一つ云はれぬやうに致しませう。
杢郎　コレ／＼、随分と仲悪くして、はした喧嘩もさつしやれ。コレサ、必らずしませうぞえ。……そんならわしは歸りませう。ほんに、これでなけりやア納まらねえ。……それ／＼、何か忘れたやうな。
長兵　モシ／＼、大家様、お觸れの事かえ。
杢郎　ハテ、ようごぜえす。
ト唄になり、杢郎兵衛思ひ入れあつて向うへ入る。
次兵　ドレ、おいらも後まで、二階へ行つて
ト行かうとする。長兵衛留めて
長兵　イヽヤ、二階は取散らかつて、足も踏み込まれねえ。奥へ行つて野郎どもと、酒でも飲んでござらつせえ。
次兵　そんならさうしよう。コレ、お近、去り状取るとも取らねえとも
ちか　後方までは、お前マア
次兵　ドレ、四五杯喰らうか。
ト唄になり、次兵衛奥へ入る。直ぐ奥より三太郎、長松を抱へ、出て來て
三太　モシ／＼、親方、長松さんが奥に寢て居なさつたから、連れて來やした。
ちか　ほんに長松か。久し振りで寢顔を見た。……風邪でもひかすであらう。とんと男といふものは、邪慳なものでござんすなア。
ト長松が側へ行き、いろ／＼思ひ入れ。三太郎は直ぐに奥へ入る。此うち、長兵衛トお近と顔見合せる。
ちか　モシ、待ちなさんせ。なんぼやぜいな。其やうに怖い顔ばつかりして、ちつとはわたしが心にもなつて下さんせ。いつぞや旅から歸らしやんすと、どう云ふ事か譯も云はずに、男づくで世話せにやならぬ人がある。てめえが居ては遠慮ゆゑ、迎ひをやるまで、親元へ行つてくれろと云はしやんした。それから梨も礫も無し、父さんは知つての氣質。どうした事ぢやと毎日々々。聞かれて困るはわたし一人。悪い事でもしたやうに、世間の手前も氣の毒ゆゑ、今日連れ立つて來たのもナ……長松の顔も見たし、そして人さんが、いろ／＼な事を云うには聞かす。わたしもしやくるのぢやとは思うて居れども、ひよつと此まゝ去られたら、マア、どうしようと思ふわいなア。
長兵　成る程、女といふものは解らねえものだ。大概おれ

が氣も知つて居さうなものぢやアねえか。もうちつとのうちだから辛抱して、マア今日は、親仁を連れて早く歸れ。

ちか　サア、さう云はしやんすりや、よいやうなものぢやが……モシ、マア、お前はきつう苦勞でもあるかして、痩せなさんしたぞえ。何をマア其やうに。苦勞があらば、わたしにも、ちつとは話して下さんせ。

長兵　やかましいわえ。よくべら〳〵と口をたゝきやアがるワ、苦勞はおれが好きですらア。早く出て行きやアがれ。

ちか　アイ、參ります。出て行くわいなア。

長兵　キリ〳〵出てうしやアがれ。

ちか　出て行きは行きますが、願ひがあるわいな。

長兵　なんだ、願ひとは。

ちか　わたしが願ひといふは……久し振りでござんすなア。

ト此うちお近、長松をソッと下へ寢かし、長兵衛の側へ寄る。

長兵　久し振りだと云つて、今まで出て行けといつたものが、どうしてそんな事が……そして、親仁も奥に待つて居らア。

ちか　あの父さんは寢上戸ぢやわいなア。それぢやに依つて、今夜は泊つて、明日は早く歸つても、大事ないぢやござんせぬか。

長兵　サア、さう云へばそんなものぢや。

ちか　久し振りで歸つて見れば、どこもかも埃だらけ。ほんに女子の無い内といふものは、洗濯物も溜つて居やうし。ドレ、マア、爰らを一遍

ト箒にてそこらを掃き、梯子の方へ來て

大方、二階も埃だらけであらう。

ト行かうとするを、長兵衛見附け

長兵　コレエ。去られた内へ來て、二階を掃く者があるものかえ。

ちか　それでも埃が

長兵　そりやこそお見舞ひ申すワ。

ト裾を捲る。

ちか　ア、コレ、惡い事をしなさんすな。

ト長兵衛に寄り添ふ。

長兵　堪忍しろ。ほんに女房といふ奴はいゝ奴だ。どうでも店屋物よりも生蕎麥がいゝ。この又、襟足にやア打ち

殺されるわえ。
ちか　面妖な。男といふものは、そんな事云うて。女子ほど割りの悪いものはないわなア。
長兵　ハテ、誰れに遠慮はねえ。
ちか　アレマア、滅相な。
ト長松目を覺まし
長松　ホウヤラホウヤラ〱。
トこれにて
長兵　コレ
ト長松を引抱へ
此方へ來い。
ト唄になり、長松を抱へて、ツイと奥へ入る。お近思ひ入れあつて
ちか　エ、……ほんに今の子供は
ト思ひ入れ。この時、三太郎奥より窺ひ出て
三太　今のを見ちやア
トお近に抱きつかうとするを、お近拂ひ退けて
ちか　エ、、誰れかと思へば
トまた三太郎の頭をピツシヤリ
酒を飲んだの。

ト思ひ入れ。三太郎頭を抱へたまゝ、屋體囃子になりこの見得よろしく、この道具廻る。
本舞臺、正面、上下まいら戸附き。誂らへの押入れ、戸棚。下の間、反故貼りの二枚障子。上の方、離れ家にて、隱居の間と見える、一間の障子屋體。すべて花川戸裏店の模様よろしく、爰にも近在手紙便飛脚八内と書いたる看板、粗末なる門口あり。二重舞臺に、お傳、前垂れ、襷、世話女房の形にて大火鉢へ繪の具をかけ、今戸細工の人形を巻き藥に刺し、彩色して居る。この側に岩松、附け紐の木綿やつしにて、獨樂を持ち、遊んで居る。時の鐘、合ひ方にて、道具とまる。
岩松　母樣、この人形、わしに下されや。
ト取りにかゝる。
でん　ア、コレ、何をしやる。こりや、コレ、餘所の伯父樣から、お誂らへの大切の人形、早う仕立てゝ上げにやならぬ。ほんに、追ッつけ父さんが、お土産を持つて歸らしやんすであらう。待つて居や〱。
岩松　アイ。そんなら父樣が、追ッつけ戻つてや。

でん　オイナウ。もう追ツつけであらう程に、茶も沸かして置かにやならぬ。サア／＼、奥へ行つて、遊んでおぢや／＼。

岩松　アイ／＼。母樣、後になんぞ下されや。

ト合ひ方になり、岩松奥へ入る。この合ひ方にて、花道より唐犬權兵衞、ばつち、尻端折り、羽織を肩へかけ、後より善六、判人にて附き出て來て

善六　權兵衞さん。お前マサ、妙な所の穴を知つて。モシ、何かえ、亭主持ちぢやアござりやせぬか。

權兵　なんでもいゝわな。おれ次第に。掘出し物だ。マア來やれ。

ト云ひ／＼、本舞臺へ來て、門口を入る。

權兵　お内儀、内にか。オヽ、仕事だの。大層に精が出るの。

でん　オヽ、權兵衞さん。大方今日あたりは樣子も知れようと、心待ち。……ほんにあなた、ようお出でなされました。

ト煙草盆を持つて來る。善六、お傳をヂロ／＼見て

善六　權兵衞さん／＼。これなら剛氣な代物だ。

權兵　コレサ、まだ挨拶をしないで、ツカ／＼と……マア下に居やれ。

善六　ほんに、さうだの。

ト下に坐り

モシ、お初にお目にかゝりやした。なにか權兵衞さんのお話しで

權兵　コレサ。先走つた男だ。待つて居やれ。……コレ、お傳さん。合點がゆくまいが、高が斯うだ。ソレ、この中お前がわしに頼んだ、佐々木の系圖の一卷、是非に欲しいと云つたばかりにて、在所は知れても金次第。不躾な事だが姿の身代、逆さに振つても、五十兩とは手重からう。

でん　サア、取戻さるゝ事なれば、例へわたしが身を賣つても

權兵　サア、そこだ。この男はソレ、吉原の判人、三浦屋へ大概下話しをして、金を直ぐに持つて來たは、手短かに埒を明けよう爲サ。善六、これからお主が挨拶にしやれ。

善六　オツとよし。成る程、その理窟を云はにや解らぬ。なんだ。いよ／＼それなら其やうに、わしが方はマア得心サ。

でん　ハイ〳〵。それはマア御深切に、有り難うござります。
善六　サア、さうだが、モシ、金を渡すにやア、親判も要るし、第一マア、御亭主があつちやア
でん　ハイ。サア、それもこの間、權兵衛さんへ申した通り、
權兵　さうサ〳〵。當人のお前が是非とさへ思やア、筋道の立つた金の譯、御亭主にやア去り狀取るがいゝ。
善六　さうサ。それが解りやア何時でも、飛びついて相談したいのサ。
權兵　アレ、あの通りだ。代物は金と引替へに、今でも直ぐに持ち主を連れて來て、こなさんの手へ渡すわな。
でん　イエモウ、わたしはどうなりましても、取戻さねばならぬ系圖の卷き物。それにつけても八内どのは、商賣用で在方へ、急な使ひに參られまして、ハイ、もう今日は是非とも、追ッつけ戻るでござりませう。それまでどうぞ今暫らく。
善六　出來る事なら少つとやそつと、待つても埒の明くのが勝手。
權兵　そんなら斯うしよう。おれもどうで爰の表、長兵衛に逢はにやアならぬ用もある。いつそ後まで爰の內で
善六　御亭主の歸りを待ちやせう。
でん　ハイ、それはモウ、日も段々長くなり、晝寢も勝手ナウ、權兵衛さま。
權兵　ほんに、枕でも借りなせえ。
ト矢張り合ひ方にて、權兵衛、善六附いて、下の障子の中へ入る。お傳ひとり、あたりを見廻し
でん　嬉しや主が戻つてたら、喜ばしやんす系圖の在所。
ト云はうとして
ほんに、さうぢや。
ト思ひ入れよろしく、合ひ方になり、お傳、二重舞臺の押入れの側へ寄り、下戸棚を少し明け、土瓶の茶を汲み、押入れの中へ入れ
モシ、御窮屈にござりませう。思はぬ不時の御災難にて人を害めしお身の上、鷄の目鷹の目上林の、噂の鎭まるそれまでと、お隱し申すは申すものゝ、折惡い夫の旅稼ぎ。併し、申し、お喜びなされませ。尋ぬる佐々木のお家の系圖、在所を慥かに。金さへあれば、追ッつけ夫の戻り次第、心易く手に入りまする。……ハイ〳〵。イエモウ、其やうにお禮仰しやるは、冥加ない。先の連れ合

ひ文平どの、今際の際にもくれ〴〵と、名古屋のお家の深い御恩、忘れぬやうにと遺言を、守る甲斐なく岩松が年端もゆかぬそれゆゑに、今の夫の八内どの、頼もしい氣立てを幸ひに、二度の夫とお家へ奉公。それもいつしか御流浪の、共に辛苦は家來の役、思ひ廻せば佐々木のお家。ア、世の中でござりますなア。

トほろりと涙を隠す。上の方の障子屋體を明け、お爪ウソ〳〵あたりを見廻し、連尺附きの誂らへの葛籠をソツと明け

つめ　コレ、モシ、和子。寢てござるか。伴左衛門さま。……サ、なんぢやわいなア。この家の内には、お前を敵と附け覘ふ、名古屋山三が由縁の奴等。氣遣ひでならぬ矢先へ、最前額五郎さまよりの手紙。内證でお屋敷へ、あなたをお供いたせとある巧い手筈。サア、これからこの葛籠の儘で、引ッ背負つて、わたしが直ぐにお供する。ちつとのうちの辛抱ぢや。窮屈にはあらうが、ソレ、蓋を締めるぞや。

ト葛籠の荷拵らへする。矢張り合ひ方、時の鐘にて、花道より八内、股引、草鞋、旅戻りの形にて、一本差し、菅笠を持ち、思案しながら、出で來り

八内　千住の道で噂に聞けば、汐入の土手の人殺し、女は女房が行きあひ姉妹、おれが爲には元のお主の、本庄の娘の八重梅さま。側の非人の死骸とやら。これも慥かに白井の惣領彌市どの。切り手は噂の權八どの。古主の敵でありながら、今の御主人山三さまと、契約ありし假にも弟御。思案する程、こりやどうでも、科を此方へ引請けて

ト云はうとして、あたり見廻し

エヽ、埒もない。内でも思案のなる事だ。

ト氣を變へ、ツイと本舞臺へ來る。此うち、お爪、葛籠の荷拵らへして脊負ひあげ、お傳は押入れへ物云ふ模樣。八内窺ひ見て、外より門口を明け、ツッと入る。この物音に、お傳押入れをシヤンと締める。お爪も悴り、三人顔見合せ

でん　オヽ、戻らしやんしたか。

八内　いま戻つたが、なんだ。ウロ〳〵。

でん　イ、エイナア。岩松が待ちかねてなア。コレ、父様が戻つてぢや。ちやツとおぢや〳〵。

岩松　父様、待つて居ました。

ト奥より走り出て來て

なんぞお土產を下されや。

ト 八内へ取りつき、甘える。お爪、葛籠を脊負ひ、出て行かうとして、ウロ〳〵する。

八内　オヽ、土產も遣らうが、阿母、お前、葛籠を脊負つて、どこへござる。

つめ　ヤ。……サア、わしはアノ

ト つかへる。

八内　なんだかソワ〳〵。……お傳、なんぞおれが留守に變つた事でもか。

でん　イエ〳〵、別に變つた事も、ナア、母さん

つめ　どうぢやか。わしは離れ座敷の隱居家に居るから、知らぬわいの。

岩松　コレ、父樣、變つた事はお前の留守に、どこかの知らぬ小父樣と、母樣がナ。

でん　エヽ、頑是もない。何を見て。譯もない事云はぬものぢや。

岩松　イヽヤ、それでも小父樣と

でん　アヽ、これはしたり。ほんに子供といふものは、惡い聞き手のあるをも知らず

ト お爪へ氣をかれるこなし。八内心得ぬ思ひ入れ。お爪これを聞いて

つめ　それ聞いてか、聟どの。わしがこの家を出て行くも有やうは娘のお傳、どうやら怪しいこの頃の素振り。もしもの事があつた時、わしがこなたへ云ひ譯なさ。それでこの母親は、出て行きますわいの。

八内　それなれば、なんぞ女房に、不足恨みがあつて

つめ　それ〳〵。その譯は、コレ〳〵、孫、今われが云うた事、父の留守へ誰れが來て、なんと云うた。

岩松　アイ。母樣と二人話して、涙こぼして

八内　なんぢや、涙こぼして。

でん　コレ〳〵、岩松。何をマア譯も無い事、ツカ〳〵と

八内　イヤ、子供は何より正直。して、その來たは何者ぢや。イヤサ、お傳、來た人は誰れぢや。

でん　サア、その人はナ

つめ　どうして〳〵。そんな事では白狀せぬ。恐ろしい心の女ぢやわいの。

ト 葛籠を下ろし、莨を呑んで居る。

八内　お傳。その男は云はれぬか。

でん　サア、それはナ。

八内　男の留守に男と二人、涙こぼして

でん　それにはナ
八内　云ひ譯あるか。
でん　サア
八内　サア
二人　サア〳〵〳〵。
八内　ムウ。これぱつかりは云はれまい。
ト ちつと思ひ入れ。時の鐘、風の音になり、向うより長松、三太郎を連れ、凧を持ち、出て來て
長松　エ、、馬鹿め。折角揚んだものを、てまへがたぐつたから惡い。
三太　いゝわな〳〵。今度は岩さんを誘つて、ふるふんべいをかけるわな。サア〳〵、來なさい。
ト 絲を捲きながら、門口へ來て
岩さん、内かえ。凧を揚げるワ。お出で〳〵。
ト これにて、お傳幸ひと
でん　それ〳〵、お友達が迎ひにぢや。ちやツと行きや行きや。
ト 岩松が手を取り、表へ突き出す。
三太　サア〳〵、「暫」を揚げらア。早く來なさい〳〵。
ト 長松、三太郎、岩松向うへ入る。八内思ひ入れあつて
八内　女房、去つた。
でん　エ、。
八内　イヤサ、驚ろく事はない。譯を糺せば男の意地、去つた女房に念は無い。キリ〳〵この家を、出てうせう。
でん　エ、、モシ、コレイナア。道理ぢやけれど、これには譯の
八内　ヤア、くど〳〵と、なに云ひ譯。
でん　それぢやけれども、その人はナ。
ト 云はうとして、思ひ入れあつて
サア、云ひたうても、云はれぬわたしが因果。成る程、暇を取りませう。去られませう程に、せめては岩松は、矢ツ張りお前の子に
八内　ナニ、穢らはしい。心の腐つたうぬが腹に、宿した餓鬼は誰れが悴。うぬが連れ子だ。連れてうせう。
でん　それぢやと云うて、わたしが身を
八内　何が、どうしたと。
でん　サア、身一つは兎もかくも。可哀さうに頑是もない、あの子は矢ツ張り。コレ、モシイナア、ついにこれまで何一つ、腹立たしい事もない、曇らぬわたしが日頃の心、

知らぬかいなア。そりやお前、胴慾でござんすわいなア。

ト泣き落す。お爪ヂロ／＼見て

つめ　鼻毛の伸びた御亭主に、お主が心なに知れやう。親と名の附くおれにさへ、知れぬは日頃の我まゝ氣儘。その罰で、見ろ。内證でうまい事して居る化けの皮、旅稼ぎの留守に引摺り込んだ、男は誰れだ。それを吐かせ。

でん　エヽ、お前まで其やうに、有りもせぬ事拵き附けていとゞ疑ひ受けし身を

つめ　まだ／＼、罰とは思はぬなア。疑ひ受けるもうぬが心。悲しくば、隱した男を云へ。

でん　それぢやというて。

つめ　エヽ、面倒な。親にまで恥をかゝせるお轉婆め。吐かさぬがいゝか。これがいゝか。うぬがやうな奴は、カウカウ／＼

ト煙管でお傳をしたゝか打ちのめし

いつその事に、ぶち殺して

ト立ちかゝるを、八内よろしく突き廻し、直ぐにお傳が襟髮取つてヂツと引寄せ

八内　エヽ、うぬはなア。御主人方のお爲にこそ、男は苦勞するわやい。これをば餘所に、うぬら親子、先の夫の文平が、受けたる恩のお主も館に、身の榮えより隱し男を最前戻つて押入れの、しかもあらまし見て置いた。それを明かせば、おれが恥、親や夫に生き恥を、よくかゝせたな、人畜め。斯う成るからは男めも、爰へ引出し尋常に。男の意地だ。覺悟しろ。

でん　サア／＼、道理ぢや。お前の腹の立つのは道理ぢや。わたしが心は、神かけて、大事な／＼お人ゆゑ、お前に隱したお方はナ。

八内　ヤ。

ト思ひ入れ。

でん　わたしは此まゝ殺されても、その名はどうも云はれぬわいなア。

ト泣く。

八内　それ程までに、エヽ、うぬは母と一緒になつて、出てうせう。

ト突き放す。此うち、お爪、火鉢の火箸を取つて、ソツと燒き

つめ　エヽ、恐ろしや。それが嫌さに出て行く母。畜生の娘は持たない。親子の縁を、切つたしるし。

トだしぬけにお傳の額へ火箸の燒き鐵を當てる。お傳

「ツツ」と悶絶する。八内悄り、寄らうとして思ひ入れ。お爪せゝら笑ひ

女房にのろい御亭主さん。未練に縁は切り得まい。重ねて徒らひろがぬやうに、面へ極印、親の慈悲。親子でなけりやア出て行く母。お聟さん、大きにお世話になりやした。

ト太々しく葛籠を脊負ひ、門口へ出て

ほんに譬へに違ひなう、子は三界の、首枷よナウ。

ト唄になり、お爪よろしく、ぼやき／＼、花道へ入る。直ぐに奥より權兵衞、善六出で來りて

善六 ヤレ／＼、ぐつすりと一寢入り。御亭主はお歸りか。

權兵 ヤア。コレ、お内儀。どうしたのだ。

ト引起す。お傳悄り、あたりを見廻し

でん エヽ、モシ、お前は權兵衞さん。望みの通りわたしはナ、主に暇を貰うたわいなア。

權兵 オヽ、そんなら首尾よく去り狀を

善六 貰つたか／＼。

トお傳の顏を見て

ヤア／＼。お前、どうしたのだ。その顏ぢやア、どうも五十兩

權兵 ほんに不粹だ。なんの事だ。これぢやア系圖も佐々木の若殿、額五郎さまに賣る方が

善六 右から左を近道だ。

ト行かうとするを、お傳悄りして留め

でん エヽ、モシ、そんならわたしの身の代

權兵 金にやアならない。放さつしやい。

八内 コリヤヤイ、お傳、なぜお主は身を賣るのだ。

でん 佐々木のお家の、系圖が欲しさ。

八内 ヤア。……して、望みの系圖は、その持ち主は。

權兵 おれが持つて居る。

八内 すりや、その品を

權兵 賣つてはやらうが、肝心の金があるまい。

八内 それでも、ちよつと

ト寄るを、權兵衞突きのけ、善六附いて門口へ出て

權兵 これから直ぐに長兵衞に

善六 サア、行きやせう。

ト權兵衞、善六向うへツイと入る。八内思ひ入れ。お傳向うを見て

でん 酷い邪慳な親の身で、この疵ゆゑに願ひの品、手に入れ自慢に山三さまへ、云うた詞も、面目ない。

ト ちつと泣く。

八内 ヤア、ナニ、名古屋の御主人とは。

でん 敵に縁ある母さんゆゑ、云ふに云はれぬ疑ひ受けし隱し男は山三さま。

八内 さすれば猶更捨て置かれぬ。今の系圖の一卷を

ト身拵らへして行かうとする。向うよりバタ／＼にて笹ノ才藏、股引、大小、足輕、飛脚の形にて走り出て來り

才藏 八内どの、どこへ。六角左京之進さまよりお家の密事、火急のお使ひ。

八内 ムウ。時も時、御密事とは。

才藏 紛失の二品、お家の系圖は、いよ／＼在所知れざる時は、桂之助さまには御切腹、お家の跡目は額五郎さま相續あらば一國の歎き。この儀急いで物語れと、左京之進さまより密かのお使ひ。

八内 御念のお使ひ、それゆゑに、心を碎く我れ／＼夫婦。

才藏 然らば詮議の手掛りあつて

でん それに就いても折角と、在所知れたるお家の系圖。

八内 ハテサテ、金子調達せば、今にも手に入る望みの品。

才藏 さすればそれを、六角さまへ

八内 お案じなきやう、少しも早く

才藏 承知いたした。これより直ぐに

八内 急いでござれ。

才藏 必らず吉左右、お頼み申す。

ト時の鐘になり、才藏よろしく引返し入る。

八内 アヽコレ、最前斯うと知るならば、權兵衞とやらを引留めて

でん さうおやれども五十兩の、金が無ければ渡さぬ系圖。

八内 それゆゑ此方も氣後れして、手に入る寶やみ／＼と

でん 心盡しも母さんの

ト我が額へ思ひ入れして

よくも邪慳に

八内 云うて返らぬ身の歎き

でん お家の大事

八内 今更に

でん 仕様もやうも

八内 ハテ、なんとしたもので

二人 あらうなア。

ト途方に暮れし思ひ入れにて、兩人ヂツと思案する。

入相の本釣り鐘になり、花道より十三、額に疵の附いたる岩松を脊負ひ、走り出て來り

十三　もしえ。岩さんを送つて參じました。

八内　僅かでも無い大枚の、五十兩を早速に

ト思案に餘つたる思ひ入れ。お傳、岩松を見て

でん　岩松ぢやないか。エ、マア頭をどうしやつた〳〵。

ト抱き取ると、十三氣の毒のこなしにて

十三　イエ、わたしの内の息子どん、大きに麁忽いたして凧の糸の引ツかゝつたを、何か子供の頑是なさ、無理無體に引ツ張る勢ひに、瓦が落ちて此お子の、額へお怪我させまして、折悪う長兵衛は留守なり、わつちが早速お詫びに參りました。

でん　怪我とあるなら、なんのマア、頑是のないは同じ事。

十三　イエモウ、大きな不調法、申し譯の無い事いたしました。

ト云ひ〳〵、門口へ出て

長兵衛もお詫びに參じませうが、どうぞよろしく。ほんにほんに、お氣の毒な事をしました。

ト合ひ方にて、十三、モヂ〳〵氣の毒なるこなしにて引返して直ぐに向うへ入る。

岩松　母さん、爰が痛い。

でん　オヽ、道理ぢや。怪我とはいへど滅相な。これ見なさんせ。

ト介抱する。八内思案のうち、フツと見て

八内　ヤ、岩松がなんとした。

でん　なんとしたぢやない。モシ、最前誘うて行つた表の子がナ

八内　エヽ、コレ、半金の手當があらば、あの權兵衛に無心云うて

ト矢張り思案して居る。

でん　それもさうぢやが、コレ、なんぞ岩松に藥は無いかなア。

八内　ナニ、藥とは。

でん　エヽ、モシ。今も云うた表の長松が、凧の糸がかゝつて、瓦落してな。

八内　ヤア〳〵、そんなら長兵衛の悴が

でん　此やうに、マア、危ない。怪我とはいひながらア

八内　アノ、隣の悴長松が……ムウ。

ト思ひ入れあつて

ドレ。

ト岩松を引寄せ、脇差の鍔にて岩松が頭を打ち破る。ウンと直ぐに落入る。お傳惻り

でん　エヽ、モシ。

ト呆れる。八内向うをキッと見る。思ひ入れよろしく時の鐘にて、道具廻る。

本舞臺、元の長兵衛の世話場。眞中に長兵衛莨盆を扣へ、この左右に、權兵衛と本庄助八、序幕の形にて、詰め寄り居る。矢張り時の鐘、合ひ方にて道具とまる。

權兵　コレ、長兵衛、貴様もおれも狩場の人足。請合ひ金の五十兩、子分子方へ渡さにやならねえ。す、よしと聞いて歸つたらよからうが、おれも唐犬權兵衛だ。さうさうは待てないよ。

長兵　ハテ、渡すまいと云やアしねえ。もう四五日待たせて置きやれ。

助八　その四五日も久しいものよ。望み手の多い系圖の一卷、五十兩の金はいつ下さる。

長兵　やかましい。花川戸の長兵衛が、買はうと云つたら手附けも同然。外へやつちやア頼まれた、先のお方へ憚が立たない。たわ言吐くな。

助八　成る程、さうあらう。町人の持つて役にも立たない神妙劍の一卷、佐々木の系圖。

權兵　して、貴様が頼まれた、その先の人は、どこの人だ。

長兵　ヤ。

權兵　イヤサ、この頃噂の汐入堤の人殺し。その上見りやア最前も、裏からこッそり四つ手駕籠。びらしやらしたのを見て置いた。子分子方の金までも、引摺り込んでの榮耀狂ひ。

助八　但しはこなたの頼まれた、先の人は日蔭者か。

長兵　なんと吐かす。

助八　なんと吐かすも氣が強い。一卷は疾に渡して置く。横取りされたその金を、その人に逢つて受取るのサ。

長兵　イヤサ、そりやア

權兵　佐々木の系圖の一卷も、持つては居るが金次第。それとも欲しくば金を出せ。

長兵　サア、その金は

助八　頼まれた人に逢はせぬか。

長兵　サア、そりやア

權兵　金を渡すか。

長兵　サア、
權兵　サア〳〵。……長兵衞、返事は、どゞ、どうだえ。
ト兩方より詰め寄る。長兵衞思ひ入れあつて
長兵　成る程、大切な代物を買ひ取りながら、金を遣らぬは此方の誤まり。併し、お主達にも、ちつと聞きたい事がある。
二人　聞きたい事とは。
長兵　イヤサ、外でもない。その金にすると吐かす佐々木の系圖、神妙劒の一卷。お主達は何處から持つて來た。
二人　ヤア。
長兵　ヤアとは、うぬら、大切な佐々木のお家で紛失した二品、何處から出た。
二人　サア、その出所は。
長兵　金にしようとはイケ太い。但しはうぬらが盜人か。
二人　サア、そりやア
三人　サア〳〵〳〵。
長兵　なんと、返答はあるまいが。……うぬらのやうながらくたが、いくらうせていぢめたとて、この長兵衞が腰押しは、恐れ多いが八百八町のあなた方。なんと皆樣、それに違ひはござりますまい。誰れだと思ふ、ア、、つがもねえ。
權兵　この權兵衞はつがもある。子分子方へ渡す金。
助八　四の五の吐かしやアいつもの事、代官所へ、うぬを引摺つて
二人　受取る所へ引いて行く。立ちやアがれ。
ト兩人立ちかゝるを見事に投げ、權兵衞が懷の一卷引ツたくり、薪にてしたゝか打ち据ゑる。兩人這々起き上がつて
權兵　ヤイ〳〵。うぬは子分子方の金を渡さず
助八　二品の寳も捲き上げて、それで男か。
二人　盜人め。
長兵　そのいけ口を
ト立ちかゝる。この以前より次兵衞、路地より出て來り、門口に窺ひ、この時、走り寄つて長兵衞を留め、助八立ちかゝるを次兵衞よろしく突き退け、五十兩双方へ金を投げて遣る。權兵衞、助八、これを拾ひあげ
二人　ヤア、こりや封金五十兩。
次兵　子分子方の五十兩。二品の寳の代金。それで云ひ分あるまいがな。

二人　これでさつぱり仲好しサ。

ト金を集める。長兵衛思ひ入れあつて

長兵　思ひがけない。……併し大枚百兩は

次兵　その金主に、禮を云やれ。

ト此うち路地より四ツ手駕籠にお近乘り、善六附いて出て來る。長兵衛これを見て

長兵　ヤア、わりや女房。

ちか　こちの人、長松を頼みますぞえ。

長兵　そんから、お主は身を賣つて

善六　捨てる神ありや助ける神。權兵衛さん、先刻の間違ひより、上へ行く玉でござりやす。

次兵　去られたお近は、この親が、叱つて渡した手切れの金。女房は賣らぬ幡隨長兵衛。それで男が立たうがな。

長兵　何にも云はぬ。眞實親身。お近、達者で勤めてくりやれ。

ちか　その一言がわたしは百倍

次兵　嬉しい悲しい

長兵　親は泣き寄り

次兵　他人となれば

ちか　心殘らぬ。

長兵　苦界のうちも

ちか　健で暮らして、下さんせ。

トちつと泣く。

次兵　エヽ、未練な。……駕籠をやつて下つし。

ト唄になり、四つ手の垂れを下ろし、善六、次兵衛附いてよろしく向うへ入る。權兵衛、助八、モヂ／＼して

助八　サア、モシ、權兵衛さん。氣の毒らしいまん直し、歸つて酒でも飲みやせう。

權兵　それもさうだが……思へば、長兵衛

ト立ちかゝる。双方へ蹴飛ばし

長兵　イケ業ざらしめ。耄碌めら。一昨日うせろ。ハヽハハヽ

ト笑ふ。唄になり、長兵衛よろしく一卷持ち、暖簾口へ入る。兩人顔見合せ

權兵　エヽ、儘にならぬか

二人　浮世ぢやなア。

ト奥より清兵衛出て

淸兵　權兵衛、待ちやれ。子分子方へ分ける金、おれも人足の仲間だよ。誰れだと思ふ、ア、築地の兄さんだワ。

なんぼ居候ふでも、コレ、花川戸ぢやア顔の幡随長兵衛……ぢやアない、その子分の出ツ尻清兵衛。恐ろしいか。

ト鉢巻を締め、力む。

権兵　仰山な奴等だ。欲しけりやア金も遣らうが、それよりは一緒に來て、酒でも飲みやれ。

清兵　へ、、、、。飲食で騙すな〳〵。さうはいかねえ。待ちやアがれ。

ト権兵衛が胸倉を取る。助八笑ひながら

助八　イヤ、若い人。酒が嫌なら鰻にしよう。

清兵　おらア寅の年で斷ち物だ。

助八　そんなら、汁粉か。

清兵　あやまるの。

権兵　蕎麥ぢやアどうた。

清兵　それも嫌ひサ。

助八　八里半ぢやア

清兵　猶嫌ひ。

二人　そんなら、勝手にしやアがれ。

ト突然に清兵衛を踏み倒し、曲撥になり、権兵衛、助八笑ひながら、一散に向うへ逃げて入る。清兵衛、やうやう起き上がつて

清兵　ヤイ、コレ、食ひ逃げめら。待ちやアがれ〳〵。

ト追つかけ、門口へ出ようとする。路地の内より、八内、一本差し、岩松が死骸を引ッ抱へ、門口へ來る。清兵衛愕りして後へ寄る。八内、其まゝ内へ入り

八内　御亭主に逢ひたい。長兵衛どのは在宿か。

清兵　アイ〳〵、在宿で他行いたしやした。

八内　ヤア、くど〳〵と。火急な用事で、八内これへ參つた。通達しやれ〳〵。

清兵　アイサ、仲立ちもしやすがね。お前さん、なんぞ御用なら、十三さん。

トもち〳〵いふ。暖簾口より十三出て

十三　出ツ尻か。なんだ。……ア、八内さま、ようお出でなされました。

八内　イヤサ、好いも悪いも、お身達に用事は無い。長兵衛どのを爰へ呼びやれ。

十三　ハイ〳〵。なんだか血相變へて

清兵　コレ、極樂、親方を呼ばうかなう。

トこは〴〵云ふ。

十三　エ、やかましいわえ。其方へ退いて居ろ。

清兵　オイ〳〵。そんならそこを鹽梅よく

ト此方へ來る。十三、八内に向ひ

十三　モシ、八内さま、最前ちよつとお内儀樣へはお詫び致しましたが、大きにハヤ不調法。お氣の毒な儀を

八内　イヤサ、不調法で相濟まうか。これお見やれ。

ト子役の死骸を前へ出す。

十三　ヤア、こりや……そんなら御子息樣は

ト悄りする。八内キッとなつて

八内　見たか。仔細は斯くの通り。姿の息子の長松とやら、遊びにほだされ凧の糸の、搦み落ちたる屋根瓦。倅が頭を打割られ、深疵ゆゑが元となり、死したる悴喜松が、敵をこれへ、下手人取りに參つたのだ。

十三　ハイ〳〵。左樣に仰しやるは御尤も。さほどの疵とも存じませず、不調法のお詫び、最前も

八内　詞の詫びで相濟まうや。裏店に住居の浪人と、見侮つて幡隨長兵衞、聞きしに違ひ卑怯な奴。身は輕けれど侍ひの、扶持を喰つたこの八内。詫びで濟まさぬ。下手人出しやれし。

十三　イヤモウ、重々御尤も……なれども、ほんの頑是なし。申さば怪我でござります。

清兵　さうサ。子供の事だ。お前、料簡しなさい〳〵。

ト八内の側へ來て、宥める。

八内　エヽ、馬鹿盡すなし。

ト殴り倒す。清兵衞猿返りして、眞面目になり、十三が顏を見る。十三思ひ入れあつて

十三　モシ、八内さん。イヤサ、八内どの。怪我過失は回の習ひ、瓦が落ちて死んだ子なら、誰れを敵と恨みもない。下手人呼はり見つともない。但しは金でも欲しいのか。

八内　何を馬鹿な。

十三　コレサ、そんなに極める事はねえ。威しでいかねえわしらが内。さうでもねえなら歸りなせえ。

八内　イヤ、御亭主長兵衞どのに、お目にかゝらにや金輪奈落

十三　さう云ひなさりやア不躾ながら、手を取つて引ッ立てやすにえ。

ト八内默つて居る。

モシ、此方も詞の甘いうち、悪い事は云はねえ。マアマア、歸りなせえ〳〵。

ト無理に引ッ立てる。八内立廻る。この時、奥より長兵衞、ツカ〳〵と出て、十三を支へ

長兵　これはしたり。どうしたものだ。

十三　親分、構はつしやるな〳〵。

長兵　好いよサ。おれに任せて置いて

　ト鎮める。これにて十三控へる。長兵衞、八内に向ひ

これは、あなたが八内さんでござりますか。同じ店には居りますが、商賣用でお互ひに、まだしみ〴〵とお近附きにもなりませぬ。長兵衞に何か御用とやら、ようお出でなされました。……コレ、騒がずと茶でも入れろえ。氣の利かねえ奴等だ。

八内　アイヤ、馳走は受けますまい。お云やる通り、まだしみ〴〵……すりやお手前が、當所で男と噂ある、幡隨長兵衞どのとな。……立派な男だ。拙者は八内と申してお長屋の隅に貧乏世帶を踏まえて居るが、小身なれど以前は武士。その武士の悴が斯くの通り。委細は定めて知つてゞあらう。爰の息子の手惡戯、小兒の業とて捨て置かれぬ、相手は男一疋の、長兵衞どのゝ御子息ゆゑ、猶更濟まぬ。サア、町人ながら性根を据ゑ、身が武士を立ててておくりやれ。

長兵　ようござります。あなたが仰しやらいでも、極樂が戻つて委細の話し。大方今にあなたから、お沙汰があらう。品に依つたら私しが、御挨拶に上がりませうと、思案とり〴〵では居りますが、お侍ひのお顔を、どうしてどうして、お立て申すと申す事は

八内　イヤサ、なつてもならいでも、悴が藥代、弔ひ料……サア、町人ならば申さうが、身貧に暮らせど拙者も武士。面を立てる、返答おしやれ。

長兵　ハイ。左樣にまで仰しやるを、お氣には叶ひますまいが、この長兵衞が御返答。

　トあたりを見て

ヤイ、その爼板を爰へ出せ。

　ト合ひ方になり、清兵衞、大爼板をよき所へ直す。此うち長兵衞奥へ入り、直ぐに長松を抱いて來り、この爼板の上へ載せ

さうして居ろ。サア、八内どの。長兵衞が悴の長松、御子息の敵。こなたのお顏を立てる爲、その爼板でお手料理。煮るとも燒くとも刺身でも、旅と遂つて江戸前の、この長兵衞が生の魚。こなたの差した一腰で、親が見る前、細作り。あらの出ぬうち、キリ〳〵と、摑み料理にやらつしやい。

十三　親分、そりや又

長兵　默つて居ろえ。二つ取るなら弔ひ金、なんぞの多足の心當て。こなさんの顔の立てやうが、間違つたのか知らねえが、幡随長兵衛、未練らしく下手人を、金ぢやア扱はねえ。サア／＼、どうだ、八内どの。キリ／＼料理に、かゝらつしやい。

ト八内ギックリ思ひ入れ。

八内　悴を元手に……イヤサ、元より聞き及んだ流石の男氣。長兵衛どの、爰は義理にも此まゝに、納得しようと思はうが、惡推量の金々と、さみせらるゝがむやくしい、馳走に任せて悴が敵、摑み料理にかゝるぞよ。

長兵　念には及ばぬ。餓鬼めが命。サア、存分に。……コレ、長松、われも幡随長兵衛が子だ。一度死んで二度は死なゝい。百まで生きる者もあり、生れて直ぐに死ぬもあり。われは七つでくたばるも、皆それまでの約束だ。その俎板の上で死ね。吠え面かはくと見つともねえ。どうで死ぬなら、笑つて死ね。

長松　アイ、笑つて死にます。コレ、小父様。鯉や鰻は刎ねるけれど、おりや強いから、刎ねずに死にます。

十三　アレ、あんな氣性な息子、どうして瑕はつけさせねえ。切るなら八内、おれを切れ。

ト寄らうとするを長兵衛留め

長兵　コレサ、十三。お主は此方へ。ハテマア、退きやれ。

ト十三を引退け

サア、八内どの、庖丁さつしやれ。

八内　ドレ、そんなら望みの庖丁。

ト俎板の傍へ寄り

世上の譬へに子を捨つる、藪は萬劫の長兵衛どの、煮え湯を我が子に浴せても、惜しいは金づく命づく。切ない時は、子を出せだの。

トせゝら笑ふ。長兵衛これを聞いて長松を引退け、十三へ渡し、身拵らへして俎板の上へドッカと座す。

十三　親方、何をするのだ。

長兵　イヽヤ、長松連れて奥へ行け。

十三　それでも

ト云ふを長兵衛叱るゆゑ、無理に入る。

長兵　數の子が嫌なら鳴戸鯛。骨のあるのだ。スッパリとこなたの望みの古主の敵。

八内　ヤ。

長兵　名古屋譜代の御家來とは、疾から見込んだこなたの忠義。佐々木の系圖も、コレ爰に、幡随が懐にありやア

鯉の餌袋料理して、盗られるものなら、取つてござい。熱湯を小身に浴せもせず、卑怯未練でねえ長兵衛。男の魂ひ見違えたか。敵を名乗るに二つはねえ。古主の敵、御子息の、恨みを共に長兵衛が、くたばり所は花川戸。花の江戸前、鰻裂き。サア、やらつしやい。

ト　きつとなる。この以前よりお傳、路地より出て、門口に窺ふ。八内思ひ入れあつて

八内　下手人望むも、お家の系圖。

長兵　欲しくばすつぱり長兵衛が、息あるうちは、遣る事ならぬ。

ト　お傳これを聞き、ツカ〳〵と内へ入り

でん　我が子の敵、長兵衛其方を

ト　長兵衛を目がけ行かうとする。八内、下の方へ突き廻し

八内　男同士の達引に、いらざる女め、扣へて居ろ。

長兵　サア、これからは一本立ち。御夫婦揃つて長兵衛を、思ふ存分、佐々木の系圖。

八内　是非に及ばぬ。お家の爲。

ト　長兵衛へ立ち寄る。上の方の障子の内にて

権八　ヤレ、早まるまい。敵はこれに

ト　よろしく合ひ方になり、上の障子をサラリと明ける。白井権八、着流しの形、一腰提げて出る。

八内　さてこそ白井

二人　権八どの。

ト　思ひ入れ。権八眞中へ来て

権八　兄弟嵩にせめけども、外侮りを防ぐといへり。汐入の堤に思はずも、討つて捨てしが現在兄の彌市郎どの。小紫をも心になく、非道の刃に討つたる悪縁。八内が爲には古主の敵、内儀のお傳は妹の仇。二人が敵の、権八なるワ。

長兵　その罪科を引受けんと、女房悴を見捨てしも、元より覚悟のこの長兵衛

権八　名乗つて出でたる上からは、イザ、権八を立寄つて

八内　討つ討たるゝも侍ひの

でん　義理に搦まる敵討。

八内　兄弟討つたる人非人。刀の穢れ。オヽ、幸ひ。

ト　蘇明きの凧の青竹を取つて、一腰にて二本一緒に切り拂ひ、一本をお傳へ渡し、八内ともに、見得よく権八に詰め寄せ

ならば手柄に返り討。

でん　敵は遁がさぬ

八内　白井權八。

長兵　是非に及ばぬ双方へ、助太刀とも云はれぬ長兵衞。

佐々木の重寶、この二品。

ト懷中より神妙劍の卷き物と系圖を出す。

權八　慥かに預ける上からは

八内　斯う成る上はお家の不易。さは知らずして不便や悴。

お主の爲に果敢なき最後。古主の敵、權八どの。

權八　イザ、首取られよ、八内夫婦。

三人　イザ／＼／＼。

トよろしく鳴り物になり、ちよつと立廻りのうち、向うより、助八先に捕り手大勢出て來り、思ひ入れあつて、捕り手は路地へ入る。助八、門に窺ひ、好き程に

助八　ヤア／＼、正しく佐々木の重寶。

ト長兵衞の方へ行くを、權八引戻して助八を當てる。この時、以前の手紙を落す。兩方より突き出す竹槍を兩手に摑み

權八　めぐる因果は車の輪。今はこの世を

ト竹槍が我が手に腹へ突き立てる。

長兵　ヤ、、そんなら、兼ねて覺悟の權八どの。

八内　お助け申さんその爲に、刃にあらぬこの竹槍。

でん　返り討の覺悟も水の泡。

權八　イヤ／＼、二品手に入る上は、佐々木の重寶其まゝに、因みの契約なし置きたる、山三どのへ渡し、田圃石原八丁堀、多くの人を害めし科人。傾城葛城を殺せしも權八が身に引受けてのこの刑罪。

長兵　佐々木の系圖も山三さまの

八内　お手に入るれば、お家は萬代。

ト助八起上がつて

助八　親の敵の權八を、召捕る知らせの合圖の礫。

ト火入れを取つて門口へ打ちつける。軒へ當つて火散亂する。これをキツカケに、向うに早拍子木打ち立てる。路地より今の捕り手大勢、弓張・提灯、十手を持ち出て窺ふ。

權八　最早捕り手の

長兵　早取卷きしか。

トきつとなる。この時、助八の手紙をお傳取上げ

でん　密事を記せし怪しい手紙。

八内　ドレ……ヤ、、名古屋の親御・山左衞門さまを

でん　討ち取つたるも作左衞門。

長兵　落ち行く手段を知らせの密書。

權八　文體慥かに佐々木の惣領

八内　額五郎さまより。

でん　繼しき姑は

長兵　伴左衞門へ由縁の女。

權八　嬉しやこの山、山三どのへ。我れは冥士へ

長兵　南無阿彌陀佛。

ト三人思ひ入れ。

助八　敵の權八。

ト又かゝるな、權八片手投げに助八を取つて投げ、直ぐに引敷く。此うち、外より門口を明け

捕手　權八、捕つた。

ト走りかゝる。八内、門口をシャンと締める。お傳思ひ入れ。權八ガックリ落ち入る。長兵衞、珠數を振り上げ、介錯の見得。皆々よろしく、拍子

幕

直ぐに引返し。

本舞臺、三間の間、後へ黒幕。上下栗丸太の垣、眞中に大入と記したる酒樽の積み物。これに獅子をかいたる長提灯。兩棧敷の柱に地口行燈、殘らず灯を點し、爰に伴左衞門、上の方に立ち身、この側に以前の葛籠打捨てあり。山三、伴左衞門の腰を捕へ、下の方に、八内、お爪を引ッ捕へ、手古舞多勢、揃ひの半纏にて、獅子を持ち、後ろに並び、三社祭の花やかなる鳴り物にて幕明く。

山三　如何に伴左衞門。さいつ頃、某が父山左衞門、まッた權八が親、白井兵左衞門を手にかけ、お家の系圖二つには、神妙劔の一卷まで、助太夫と心を合せ、奪ひ取つて佐々木の家國、押領なさん汝が企み。一時に露顯の上からは

八内　長兵衞どのゝ志しにて、二品ともに手に入れば、お主の敵伴左衞門。

山三　また某にも因みある、權八が爲にも親の敵。イザ、尋常に

二人　勝負々々。

伴左　覺えなきそのたわ言。戀の意趣ある某ゆゑ、無き名を附ける山三こそ、廓で多くの人殺し。世を憚からぬ日蔭者。命知らずの大べら坊め。

つめ　葛城さんを手にかけた山三どの。遣り手のわたしが

訴人をして

ト振り切つて行かうとするを、八内引ツ捕へ

八内　どつこい。うぬは女房の親なれば、免して置けば、悪に與なす老ぼれめ。

山三　彼れが所へ額五郎どの、密事の書翰この文體。一々知れたる親の敵。

つめ　ヤ、その手紙が、どうして其方に。

山三　斯かる證據のある上は、覺えないとは云はれまい。また廓での人殺しも、現在女房の葛城まで、不便の最期を遂げたるも、これ皆汝のさせし業。恨み重なる伴左衛門、イザ、尋常に覺悟せよ。

伴左　すりや、その密書にも何もかも。エ、、口惜しい。斯くなる上は何をか包まん。如何にも某、佐々木の家國奪はんと、忠義立てする山左衛門、まツた白井兵左衛門二人ともにぶツ放したは、斯くいふ不破の伴左衛門だワ。

山八　さてこそなア。

伴左　この上は返り討だ。覺悟しろ。

つめ　和子の加勢は手古舞ひの、皆さん共々。

皆々　合點だ。

山三　小積な荷擔人。

伴左　者ども、ソリヤ。

ト屋體囃子になり、手古舞ひの人數、八内へかゝる。立廻りながら、八内皆々を下座へ追ひ込む。伴左衛門、山三、お爪残り、鳴り物變つて、様々タテあり。ト、、山三、お爪を切り倒し、伴左衛門の脇腹へ刀を突き立て、捩り

山三　親の敵。思ひ知つたか。

ト矢張り祭の鳴り物にて、キツと見得。チョン／＼にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、一面の吊り枠、、、、、、三社権現御まつりと書きし大提灯。前側見事に飾り附け、向う打抜き、山谷堀船宿の遠見。爰に八内、大童になり、手古舞ひ多勢を相手に、よろしき見得にて、道具納まる。

手古　一文奴め。

一同　動きやアがるな。

八内　小積な奴輩。撫で切りだぞ。

一　撫で切り蕎麥切り唐辛子。その馬道の鬼鹿毛胴六。

二　不破の頭に頼まれて、うぬを竹割り竹門の、油揚の

ねえ豆腐の豆助。

三　寄つてメめます釜入りの、田町にござるお先者、法印ならぬ法螺貝傳八。

四　喧嘩は豆打ち石打ちに、摑む砂利場のかうじや五郎太。

五　祭りに三日山谷掘、相手を砂地の庄九郎。

六　命を鳥越橋場村、眞崎かけて稻荷の快介。奴め覺悟を

皆々　ひろぎやアがれ。

八内　ハヽ、吐かしたり、ほざいたり。三社祭りの獅子頭。打てや囃せやその首が、飛んで驚ろく最期の時節、いま行く程に今戸なる、土でこねたるがらくためら。うぬらが五體は粉微塵、碎けて元の土になれ。

皆々　面倒な。疊んでしまへ。

トこれより屋臺囃子により、皆々花々しきタテ様々あつて、ドツコイととめる。この時、バタ〳〵になり、向うより山三、伴左衛門の切り首を持ち、上の方より長兵衛出て來り

山三　親の敵の伴左衛門、首尾よく討つて、まツこの通り。

長兵　覘ふ敵を討取れば、益なき彼奴等は殺すに及ばぬ。

權八どのは多くの人、害めし罪科身を悔いて、自殺も本庄助太夫の、敵を討たれし義心の最期。

山三　すりや、權八は相果てしか。

八内　長兵衛どのの情にて、家の系圖と今一種、神妙劍まで手に入る上は

山三　これより本地へ歸參して、佐々木の跡目は桂之助さま。

長兵　わしは葛城小紫、彌市權八兄弟の、跡を弔ふ一月寺。助八どのも前非を悔い、出家となりし上からは

山三　心にかゝる雲も無く

八内　めでたく歸參の山三さま。

長兵　二品所持してお國元へ。

ト二品を山三へ渡す。

山三　エヽ、忝ない〳〵。

八内　めでたい〳〵。

皆々　やらぬワ。

ト取卷く。

長兵　先づ今日はこれぎり

浮世柄比翼稻妻（終り）

めでたく打出し

盟三五大切

新狂言　三幕　榮

第二番目は是迄の忠臣藏の操へ筆をくはへし怪談の世界の後日五大力高麗屋で見た源五兵衛是を頼むと御贔屓の御望故に取敢ず實と情の仲町に粂三に似たる粂もとの仇な藝者は妲妃の小萬がいつまで草のいつまでも年季を入て五年限其親元は大和町色の亭主はいさみ肌本町丸の脇艪漕船宿出した笹野屋があれ程祟お岩さへ得心づくに立去り化物の出たお長屋へ幽靈あてに引越女房くちがかくれば引眉毛四ツ谷潮來湖の新文句次三味線の裏革へ有ふれし起請誓詞



天保十一年五月再演の絵番附

盟三五大切

序幕

佃沖新地鼻の場
深川大和町の場
二軒茶屋の場
五人切りの場

役名——薩摩源五兵衛 實ハ 不破數右衛門重種。若黨、六七八右衛門。富森助右衛門。判人、長八 實ハ ごろつき又平。十二軒内びん虎藏。賤ヶ谷伴右衛門 實ハ ごろつき勘九郎。廻し男、むぐりの幸八。道具屋、はしたの甚介。同、やらずの彌十。船頭、笹野屋三五郎 實ハ 德右衛門忰、千太郎。ごろつきお先の伊之助。藝者、妲妃の小萬 實ハ 神谷の召仕ひお六。藝者、菊野。粂本娘分、お弓。

一番目の切れ、浪幕を引附けると、トメの柝につき舞臺前と花道へ、浪板をせり出す。佃になり、下の方より小舟、これに伴右衛門、帷子、着流しの侍ひにて、舟に乗り居る。伊之助、船頭にて、艪を押して來り、舞臺前よき所にて、洲へ乗りかけし思ひ入れにて

伊之　エヽ、忌々しい。まだ汐がある筈だが、べら坊に早くそゝつた。

ト艪を引上げ、水棹を取つて突き戻す思ひ入れ。

伴右　コレ〳〵、どう致したのぢや〳〵。早くやらぬか早くやらぬか。

伊之　お前さんより彼のお子さんが、待ち焦れて居なさるだらうと思つて、急ぎやア廻ると、また戀ほど洲のある所はねえ。極子の澤庵大根で、すだらけと來て居らア。

伴右　時に、斯うぢや。明朝は殿の御用で、未明に戻られねばならぬが、それを申すと、また小萬がふさいだり、癪を發したり致すゆゑ、今夜は目を覺まさせぬやうにして歸るつもりぢや。その折に又この間のやうに、てまへが居らぬと困り果てるて。

伊之　あの晩はね、お前さんにお貰ひ申したので、ツイ味な氣になりやして、嬶アに當りのある女があつて、行き

やしたところがね、汐留の友達が、二三人來て居やして、ざらに食つた上で、少し間違えを拵えやした。その跡始末をして居るうち、からりと夜が明けやして、粂本へ行くと、お前さんはお歸りなすつた跡サ。輕子めらにやア冷かされるし、エヽモウ、どの位ゐ泡をくつたか知れやせん。

伴右　泡をくつても大事ないが、酒は御免だ。

伊之　モシ、伴さんえ、文が來て居やすぜ。火繩箱の下にござります。

伴右　ナニ、文が來て居るか。

ト探り取つて、透かし見て

エヽ、コレ、生憎闇で少しも解らぬわえ。梅の蕾みと小萬が文は、開く間を待ちかねる。

伊之　旦那、うまく仰しやるぜ。併し、色の文と今のお話しは、見ねえうちが山だね。

伴右　ヤア、早くやれ〳〵。

伊之　アイ〳〵。

ト艪を押し、向うを透かし見て

そりやアどうするのだえ。來るのか……ナニ入るのだ。表舵だよ〳〵。

ト押し切つて上の方へ入る。矢張り佃にて、向うより又小舟一艘、これに小萬、深川藝者。三五郎、船頭、浴衣なり、三尺帶にて、漕ぎ出て、花道にて

小萬　オヤ、三さん、おツかない雲が出たが、降つたらどうせうの。

三五　なアに、上げ汐の鼻までは氣遣ひない。併し、素的に暗くなつた。モシ、小萬さん。

トあたりを見て

イヤ、コレ、お六、今夜の客は店者だな。少つとは解つたか。

小萬　せうがな癖に、いつまでも引留めて、困らせ切つたわな。

三五　なんだかべら坊に待たせたぜ。

小萬　カウ、わたしやアお前にきく事があるよ。

三五　マア待ちや。もう少つと沖へ行つて話しや。

ト佃にて、舞臺へ漕ぎ來り、よき所にて思ひ入れ。

サア、云ふ事があるなら遠慮なく云や。もう、おれとだぼ沙魚より外に聞く者はねえ。

ト火繩箱より叺莨入れを出し、吸ひつける。よき時分より、長繩の浮き樽、上の方より流れ來る。三五郎、

これな取つて
ア、、此奴は妙だ、
トこれなたぐろ。小萬見て
小萬　なんだな。そんな悪い事をせずと、云ふ事を聞きなよ。
トかすめ、佃
三五　云ふ事とは何を
小萬　何をぢやアねえわな。お前、いつまで藝者をさせて置くのだな。
三五　いつまでさせて置くでもねえが、てめえも又、内に山の神で、茶釜ばかり荷厄介にして居るよりは氣がきいて居るぜ。
小萬　お前もいゝ氣な事を云ふ。それだから、しみ／＼腹が立つ。
ト此うち件の繩を曳き見て
三五　オヤ、沙魚か……はぜ愚痴を云ふやつサ……カウ、一服つけてくれ。
ト小萬へ煙管を抛り出す。
小萬　ナニわたしが愚痴を云ふものかな。お前こそあんまり解らねえよ。
三五　なぜ／＼
ト誂らへの合ひ方。此うち小萬、三五郎の煙管を通しながら
小萬　なぜと云ふがあるものかな。お前、わたしを沈める時分、なんと云つた。父さんの古主様とやらが、金のいる事があるから、一二年稼いでくれろと云つたぢやアねえか。
トかなぐり見て
三五　エ、、また沙魚か……はぜ、それからどうした。
小萬　冗談も大概だよ。わたしだつて、お前の父さんにする事だから、何も恩にかけるぢやアねえが、お前の連れて來た、あの浪人者の源五兵衛さんからも、どの位取つてやつたか知れねえ。がその金をお前、どうしたものだ。又その金が屆いたなら、父さんだといつてサ、一度は逢つてくれても、よかりさうなものだわな。
三五　ソレ、それが愚痴といふものだ。十年以前に勘當されたこのおれに、よく／＼の事だから金の無心。てめえを沈めたその金で、それを機に出入りはするものゝなんと云つても大枚百兩、忠義の爲にと昔氣質で、坊主にまでなつて、四谷のお岩稲荷の建立をして歩くとよ。又

てめえに逢はせる事も知つて居るがな、さうして見た時にやア、女房貢つた金だと思つたしにやア、親仁が立つめえぢやアねえか。マア、先の事が片附いた上で、逢ひたくば逢やアな。

小萬　さう云やアそんなものよ。どうぞ、もう少つとも上げたいけれども

二五　コレ、てめえ、本所の方から、足を近く來る侍ひがあるぢやアねえか。

小萬　慥かありやア、高野とやらいふ屋敷の、金役とやらだとよ。吝な癖に、おれが旦那は、今ぢやア飛ぶ鳥も落ちると、なんだか解らねえ味噌ばかり。

三五　さうであらう。あの侍ひの面からして、殺生石に似て居らア。玉藻の前より、この物前になつて、尻尾を出さねえやうに引ッかけて置きやな。

小萬　そりやアわたしも其つもりだが、あれで出し穢ねえといつちやアねえよ。

三五　さうして、源の字も今のうち、思ひ入れ取りやアな。

小萬　なんぼ人が善いといつたつても、さう〱も云へねえわな。さうして今ぢやア、どつともしねえやうだよ。

三五　てめえ、それが悪い。どうで取りかゝつたものだから、根こん際取りやアな。蛇の生殺しで、却つて罪だ。

　ト此あたりにて、繩を捨て、手を洗ひ、手拭を縁床の上にて絞る事よろしく

もう長い事はねえワ。

小萬　さうお前の云ふやうにも仕憎いわな。

　ト三五郎思ひ入れあつて

三五　コレ、てめえ、この頃ぢやア浪人者を庇ふな。それぢやア今では、嫌でもなく呼んで居るのか。さうだらう。なんだかおれもをかしいと思つたよ。

　トこれにて小萬ムッとして

小萬　何がわたしがをかしいえ。

三五　何がをかしいか、われが胸に聞いて見やな。

小萬　サア、何がをかしいのだ。それを云やアな〱。

　ト三五郎の袖を捕へる。

三五　エヽ、云つたがどうした……と云ふは話しよ。おれがをかしな氣になつたといふ事よ。

　ト引寄せてこなし。

小萬　なんだな。人に腹を立たせて置いて、氣休めも大概だよ。さうして、女房をとらめえて、珍らしさうに

三五　てめえは珍らしくなつても、おらア珍らしいワ。

ト縋り寄る。

小萬　エヽ、なんなだ。

三五　なぜ〳〵。惡いのか、惡かアよすワ。

小萬　惡かアねえが。

三五　誰れぞ來ると……惡いと云ふのか。

ト小萬、三五郎に寄り添ふ。この時、チョンと月出る。これをキッカケに黒幕を切つて落す。うしろ佃沖、新地の鼻を見せたる遠見、夜の模樣よろしく、上の方に屋根船一艘、内に源五兵衛、着流し、羽織にて、簾を上げ、煙管を持ち、空を眺めて居る。本釣り鐘、かすめたる合ひ方。

源五　「何一つさはるものなし海の月」……併し戀には心も闇。

トこの聲を聞いて、兩人悄りして

兩人　エ。

ト飛びのく。源五兵衛、小萬を見て

源五　ヤヽ、其方は小萬か。

三五　旦那かえ。

源五　オヽ、三五郎。

小萬　オヽ、源さん。

源五　慥か二人は

兩人　エ。

トぎつくり思ひ入れ。

源五　迎ひに來たのか。

三五　知らぬ事とて

小萬　大事の話しを

源五　ヤ。

三五　イヤサ、大事の月を

源五　今まで雲が

小萬　隱せし事も

源五　今宵はしつぽり

三五　濡れた水棹の

小萬　心のたけを

源五　そんなら一緒に

ト小萬、三五郎へ思ひ入れして

小萬　アヽ、嬉しいねえ。

ト、ツイと立つゆゑ、舟は搖れて、三五郎、尻居に撞と座す。源五兵衛、煙管で舟べりを叩く。これを木の頭。

三五　エヽ、畜生め。

ト水棹を拔く。小萬、帶を締める。これを佃にてキザミ、よろしく拍子引附けると、あと浪の音にてツナギ、引返す。

幕

本舞臺、三間の間、上の方三尺の地袋戸棚、刀掛けに、紫の袷袱紗かけ、花活け、正面暖簾口、下の方一間の床の間、掛け物、香爐臺、向う茶壁、いつもの門口、外は黑塀、忍び返し、すべてこの道具綺麗に仕立て、爰に八右衞門、ぼつとせいが栗、切繼ぎ布子、一腰差し、彌十、甚介の古道具屋、鍋釜莨盆、七輪鑵子なぞ持ち出さうとするを留めて居る。深川大和町、源五兵衞浪宅の體、大拍子にて幕明く。

八右　コレ〳〵、こなた衆は理不盡に、人の内の道具を、こりやアマア、どうするのぢや〳〵。

甚介　わしらは寺町の道具屋だが、昨日旦那の源五兵衞さまがござつて、内の鍋釜諸道具を、賣りたいと云はつしやるゆゑに

彌十　そこで昨日、仲間の甚介と連れ立つて來て、家財かざい殘らず踏んだところが、三兩二分八百、前金に渡したゆゑ、今日取離して持つて行くのサ。

ト道具を持ち出さうとするを、八右衞門とめて

八右　コレサ〳〵、滅相な。どうして〳〵さうは成り申さぬぞ。

甚介　ハテ、それでも旦那の源五兵衞さまと、對談が濟んで居りますよ。

八右　假へ旦那が賣らうと云はれても、コレ、その釜を失うては、飯を炊く事がならない。人間が飯を喰はずに、マヂ〳〵して居られるものかいやい。

彌十　ハテ、聞き分けの惡い。それでも旦那から買ひ請けた道具でござるわな。エ、コレ、面倒な、構ふ事はない。マア、疊から持ち出さう。

甚介　オツと合點だ。

ト疊を上げようとするを引留めて

八右　これは情ない。その疊を上げられては、身共の寢所が無い。その疊は、ならぬぞ〳〵。

ト疊を押へつけて留める。

彌十　そんなら此方から上げようわえ。

八右　コレ、その疊は旦那の寢る所だ。

甚介　そんなら、この疊から

八右　イヤ、それもならぬぞ〱。

彌十　そんなら、これから

八右　イヤ、ならぬぞ〱。

ト あちこち疊を上げようとするを、八右衛門疊の上を踏みつけて歩き、兩人もちあつかふ思ひ入れ。大拍子になり、向うより源五兵衛着流し、大小、下駄がけ、手拭を持ち、錢湯歸りの體にて出て來り、この體を見て中へ入り

源五　コレ〱、其方達に何をマア、其やうに立騒ぐのぢや。

八右　モシ〱、旦那樣、あなたのお留守へ、とんだ理不盡な奴が舞ひ込みました。

源五　ナニ、理不盡な者が舞ひ込んだ。

彌十　イヤ、源五兵衛さま、よい所へ歸らしやりました。モシ、昨日お前樣から買ひ請けました道具を、取離して持つて行かうと致しますのを

甚介　御家來の強情者には、誠に困り切つて居る所でござります。

八右　旦那樣、そんならいよ〱、この家財かざいを

源五　如何にも、この町人に賣り渡した。

八右　エヽ、そりやアお前樣、本氣の沙汰でござりまするか。

源五　本氣も正氣もいらぬワ。身共の家財を身共が賣るに誰れが何と申すものか。……サア、早う持つて行きやれ。

彌十　それ見た事か。なんぼこなさんが、じや〱ばつても

甚介　鶴の一聲で、忽ち埒が明いたといふものだ。

八右　イヤハヤ、呆れたものぢや。

ト思ひ入れ。甚介、彌十、花道へ向ひ

甚八　オイ〱、若い衆、ちよつと來てもらはう〱。

ト大拍子にて、若い者三四人、天秤棒或ひは畚など持ち出て來り

皆々　サア〱、何から運びませう〱。

彌十　マア、疊から頼みませうかい。

ト八右衛門が坐つて居る疊をグッと上げる。

八右　ア、萬歳樂々々々。

ト恟りしてころげる。

甚介　萬歳樂には疊を上げ、とはどうだね。……旦那、御免なされませ。

ト源五兵衛の坐つてゐる疊も上げて持ち出す。

源五　身共は元より覺悟の前ぢや。サア〳〵、持つて行くがよい。とは云ふものゝ、ア、コレ、坐る所が

八右　コレ、せめて旦那の居所一疊は、料簡してくれまいか。

彌十　ナニ、料簡してくれろ。イヤ、とんだ茶釜だ。

ト茶釜を持ち出す。

甚介　藥罐と化けたか。

ト藥罐を持ち出す。

八右　エヽ、沒義道な奴等ぢや。如何に旦那が貰らうと云はれたと云うて、ちつとは目こぼしをして行き居らぬかやい。

彌十　目こぼしどころか、味噌こしまでも此方の物サ。

ト八右衞門の額を味噌こしを持つて撫でる。八右衞門腹を立て

八右　うぬ、何しをるのぢや。

甚介　鍋にお前は腹立て鑵子。

ト鍋と鑵子を八右衞門の目へ突きつける。

八右　エヽ、そんな機嫌ぢやないわえ。

ト突きとばす拍子に、甚介、鍋と鑵子を持つて彌十へこけかゝり、兩人の額、眞黑になる。此うち若い者、門口に荷拵らへして、兩人の額を見て

皆々　ハヽヽヽヽ、此奴はとんだ化け物だ。

兩人　ナニ、化け物だ。

皆々　お前方の顏がよ。

源五　コレ〳〵、其方達の顏で、身共も地口を一つ申さうか。

彌十　ア、。そりやア何とでござります。

源五　鍋釜の化け物とは、どうぢや〳〵。

甚介　ア、龜山の化け物といふ洒落でござりますか。ハヽヽヽヽ。

八右　モシ〳〵、旦那、あなたマア、思ひ附きどころでもござりますまい。鍋釜までも拂つてしまはしやつて、明日の朝から、なんで飯を炊くのでござりますな。

源五　ハテ、其やうな苦勞いたすな。あの小萬めが、どうかしてくれるであらうわえ。

八右　イヤ、呆れるわえ。夥しい涎れぢや。

ト思ひ入れ。此うち兩人、刀掛け、香爐臺、掛け物など殘らず持ち出し

彌十　これで取殘した物は無いな……左樣なら旦那、お暇申しまする。

甚介　これは、おやかましうござりました……サア、若い衆、頼みます。
ト皆々門口へ出る。
源五　コレ〳〵、まだ爰に擂鉢と五徳がある。持つて行きやれ。
彌十　ハイ〳〵、ほんに餘程の金目の物を取殘したの。擂鉢五徳（藤八五文）奇妙。
ト地口を云ふ。八右衛門腹を立て
八右　エヽ、人の心も知り居らないで
トそこにある擂粉木を取つて
コレ、この擂粉木も持つて歸つて、煮てなりと燒いてなりと食つてしまやれ。
ト門口へ抛り出す。
甚介　ハヽヽヽヽ、どこの國にか、擂粉木を食ふ者があるものかな。
彌十　ハテ、さう云やんな。六尺棒さへ呑む者があるわえ。
若者　モシ〳〵、その擂粉木を呑んではどうだね。
甚介　そいつは奇妙。サア〳〵、呑んだり〳〵。
彌十　只今この所にて、この擂粉木を呑んでお目にかけませう。ハア、左やう。

ト輕業の鳴り物になり、彌十、擂粉木を呑むこなし。この人數皆々向うへ入る。
源五　アヽ、これでサパ〳〵したわえ。併し、敷物が無うては、あまりむさくるしい。コレ、八右衛門、なんぞ敷物を持つて來い。
八右　なんの敷物でござりまする。莚一枚、箸片しござりませぬ。とんだ内もあるものぢや。
源五　コレ〳〵、無いでは濟まぬ。身共が居る所が無いわえ。ヤイ、おのれは主の詞を背くか。早う持つて參らぬか。
八右　これは又、よう無理を仰しやるわえ。
ト思ひ入れあつて、奥より絹布の五布蒲團を持つて來り
サ、この蒲團も損料屋の代物、マア、これを敷いてござらつしやりませ。
ト蒲團を抛り出す。源五兵衛こなしあつて
源五　エヽ、埃が立つわえ。
ト蒲團を敷き、その上へ寢腹這ひ
これでよい〳〵。この蒲團の上に、あの小萬めが居やう

ものならば〻榮華にも榮耀にも。實にこの上やあるべきや。

ト謠なうたひ、こなし。

イヤ、生野暮の八右衛門では、とんと面白うないて。

ト莨のみながら、手枕にて寢ころぶ。八右衛門こなしあつて

八右　モシ、お旦那、そりや本心でござりまするか。

源五　本心とは、そりや何が

八右　そんなら、どうでも……エヽ、情ない、お前様はなア。

ト思ひ入れ。合ひ方になり

初めの程は敵を計る、計略と思つて居ましたが、今はほんまの身持ち放埒。どこの國にか家財かざいまでも、賣女めに入上げさつしやるといふは、與も大坂も覺め果てました。小者の德右衛門は髮を下ろして、お岩稲荷の建立に事よせて、あなたが失うた御用金を償のひ、義士の連判に入れて、世上の人に忠義者と云はせたい。心は同じこの八右衛門、四十餘人の方々が、御本望をお遂げなされて、お果てなされた跡は、腹かッさばいてあの世のお供いたさうと、思ひ詰めて居るこの下郎や、德右衛門が心を御存じないか。この頃はあの仲町で、妲妃と評判する、小萬といふ藝者に打込み、僅かな貯へも遣ひ捨て諸道具までもこの始末。どう考へて見ても、本氣の沙汰とは思はれぬ。この様子を德右衛門が聞いたなら、呆れ果てゝ才覺の、金の蔓も切れやうと、押し默つて苦勞するのは私し一人、コレ、それでも武士か、侍ひでござるか。イヤサ、鹽冶家の御家中、不破數右衛門といふ、歴歴の果でござりまするか。サア、此やうに下郎の云ふのが腹が立つなら、あの小萬とやらを、思ひ切つて下されコレ、拜みます〳〵。

トよろしくこなし。此うち源五兵衛、欠伸しながら

源五　ヤレ〳〵、永談議、根ッから面白かつたわえ。

八右　なんと云はつしやります。

源五　ハヽヽヽヽ。心あつての身持ち放埒、朝夕召仕ふ其方までが、誠と思ふ程に致さねば、なかなか敵に油斷はさせられぬ。ハテ、いらざる苦勞はしやらぬがよい。

八右　すりや、敵の間者を防ぐ爲の、放埒と云はつしやりますか。

源五　大概知れたものぢやワ。

八右　ヤレ〳〵、嬉しや。それで私しも安堵いたしました

ト思ひ入れ。流行り唄になり、大拍子、向うより小萬前幕の拵らへ。幸八、廻し男の形。菊野、藝者の形。お弓、娘の形。虎藏、役者にて、足早に出る。花道にて

幸八　モシ〳〵、小萬さん、山の伊勢屋へお客を置いて、どこまで油を賣つて歩くのだね。

小萬　エヽ、お前も野暮な。わたしの行く先が知れぬかいな。

菊野　コレイナア。いつもの大和町であらうわいな。

ゆみ　お前、いつも小萬さんの行かしやんすを、知らしやんせぬか。

虎藏　成る程、小萬さんは大和屋によく似て居るによつて行く先は大和町。この虎藏ならば虎の門。

幸八　エヽ、お前もお株で、解らない事を云ふ。それよりおらア伴右衛門さまが、火のやうになつて居るであらうと思つて

小萬　ホヽヽヽ、なんだえ、番太郎が火の用心をするとえ。

幸八　モシ、洒落どころぢやアござりません。

菊野　幸八どん、一人で氣を揉んでおいで。

小萬　サア、菊野さん、源五兵衛さんの所へ行つて、思ひ入れ遊んで行かうわいな。

ト流行り唄にて、この人數本舞臺へ來り、小萬こなしあつて

どウれ〳〵。

虎藏　ハヽヽヽヽ。こいつア大笑ひだ。そりやア内で云ふ事だ。

ゆみ　モシ、菊野さん、教へてあげなさんせいな。

菊野　モシ、慥か、物もう、と云ふのぢやわいな。

小萬　ホヽヽ。さうかいな……物もう〳〵。

ト門口を叩く。この聲を聞き八右衛門、不思議さうに門口へ立つて來り、大聲にて

八右　どウれ。

ト云ひながら、沒義道に門口を明ける。皆々恟りして

小萬　エヽ、恟りしたわいなア。

八右　南無三、又うせた。

ト苦々しき顔して、門口をピッシャリ締める。源五兵衛、この樣子を聞きつけ

源五　コレ、八右、表へ参つたは、誰れぢや〳〵。

八右　サ、表へ参つたは、犬めでござります。

小萬　ナニ、わたしを犬ぢやとえ。エヽ、わたしや犬ぢやない、人間ぢやわいな〳〵。

源五　コレ〳〵、犬ではないと申すぞよ。

八右　成る程、犬ではござりませぬ。狐でござりまする。しかも人を化かす、憎い狐めでござりまする。

源五　狐なら內へ入れて、油揚でも食はしてやれよ。

八右　どうして〳〵、あの狐を門へ入れて、堪るものでござりませう。たつた今、棒で追ひ歸してしまひます。

小萬　モシ、源五兵衞さま、この人はわたしの事を、犬ぢやの狐ぢやのと。座敷を拔いて、折角來た者を、ぢらさずと明けて下さんせ。

ト門口を叩く。

源五　慥かありや、小萬の聲ぢやが。

ト源五兵衞立つて門口へ來るを

八右　イエ〳〵、ありや狐が女に化けたのでござりますぞえ。側へ寄らつしやりますな〳〵。

ト源五兵衞を上の方へ突きやる。此うち小萬、門口を明けて內へ入る。

小萬　人の事を、よう狐ぢやと云はしやんしたな。

八右　南無三、しまうた。

源五　そりやこそ、小萬が來た〳〵。

小萬　藤八どん、酒を持つて來ておくれ。

幸八　モシ〳〵、小萬さん、お前にさう御輿を据ゑられては、私しがしくじりやすわな。

虎藏　マア〳〵一旦、山の伊勢屋へ

小萬　否だよ。常から好かぬあのお客、顏を見てさへ癇癪にさはるもの。座敷を拔いて、源五兵衞さまの所へ來たからには、モウ〳〵あそこへは行かぬぞえ。お前方も野暮を云はずと、サア〳〵、爰はわたしが內ぢや。入んなさんせ〳〵。

ト蒲團の上に居る。

幸八　イヤ、これにも困るわえ。

源五　コレ、小萬、今も今とて、てまへの噂を申して居つたところぢや。サア〳〵、皆の者、內へ入り給へ〳〵。

ト皆々內へ入り、膽を潰し

虎藏　ヤア、こりや怪しからぬ。爰のお內では、疊が他行なされましたか。

幸八　ほんに、煤掃きには氣が早し

菊野　オヤいかな。こりやマア、どうしたのでござりますえ。

源五　オ、、こりやアなんぢやて……それ〳〵、今日普請を致すゆゑに、裏に疊屋は參つて居るし、大工は木場で木取りも致して居るが、コレ、八右、いつ頃建前になるであらうな。
八右　こいつは大笑ひだ。建前より、家主に店だてを
源五　エヘン〳〵。
ト思ひ入れある。
小萬　モシ、わたしやなんぢややら、仲町へ歸る事は、しみじみ嫌ぢやによつて、お前、どうぞして下さんせぬかえ。
トもたれかゝり、こなし。
源五　承知ぢや〳〵。仲町へ歸るが嫌なら、幾日でも、この家に逗留するがよい。
八右　この内に三日居たなら、藝者の干物が出來るであらう。
幸八　モシ、滑稽はのけて、あの伴じるしが、大抵の腹立ちではござりませぬ。
虎藏　モシ、幸八どのが、あのやうに氣を揉んで居るから一旦出直してはどうだね。
小萬　イエ〳〵、もう爰の内は動かないよ。

幸八　エ、、人ぢらしな。サア〳〵、小萬さん
ト小萬の手を持つて引ッ張る。
小萬　アイタ、、、、。
ト顏をしかめて思ひ入れ。
幸八　モシ、何が痛いのだえ。
ト小萬の左の腕を取る。この時まくれて、、、五大力と彫つてある事。
虎藏　モシ、小萬さん、その彫り物はえ。
小萬　聞かれて云ふも氣恥かしいが、外の男に肌觸れまいと、浮氣を封じた入れ黒子、誓ひに彫つた五大力。
菊野　そんなら心に、心中立つて
源五　そりや又、誰れに。
小萬　誰れにとは源五兵衞さま、見なさんせ、お前に立てし五大力。
源五　そんなら身共に……こりや嘘らしい。
小萬　エ、、憎いなう。
ト抓る。源五兵衞、皆々の手前、氣の毒なる思ひ入れ。
虎藏　こいつは、あやかり者だわえ。
幸八　モシ旦那、こりやア只では通されやせんぞえ。
小萬　それぢやに依つて、是非ともわたしや爰の内に

源五　いつまでも歸しはせぬぞ。

小萬　きつとだね。わたしや今日から爰の内で、女房ぢやわいな〳〵。

ト立騷ぎ、こなし。

幸虎　こいつは大事になつたわえ。

八右　氣が狂つたさうだ。

ト思ひ入れ。唄になり、向うより助右衛門、羽織、大小、深編笠にて出て來り、門口へ來て

助右　頼みませう〳〵。源五兵衛、在宿おしやるかな。富森助右衛門でござる。

ト編笠を脱ぎ、内へ入る。

源五　イヤ、これは伯父者人、ようこそ御入來。先づは御機嫌よろしう。

助右　一別以來、先づは堅固で……ハヽア、見れば疊も敷いてないが、ハテ、佗びた住居ぢやな。

源五　ハヽヽヽヽ……コレ、八右衛門、お茶莨盆を持たぬかえ。

八右　モシ、其やうな物も、最前あの道具屋が

源五　エヘン〳〵。コリヤ、早うお茶をあげぬかえ。

ト叱りつける。八右衛門、オロ〳〵する。小萬、こなしあつて

小萬　ほんに、こりや七輪も茶碗も

トうろ〳〵して、茶碗へ手桶の水を汲んで差出し

サア、お茶一つおあがりなさんせ。

ト助右衛門、不思議さうに見て、こなし。

助右　イヤ〳〵、構はつしやるな。

ト取上げ、グツと飲んで

これは冷たい。こりや、水をくれられたな。

小萬　モシ、年寄りの冷水。なんと、よいお心持ちでござんせうがな。

助右　ハヽヽヽ。なか〳〵氣の輕い女子ぢや。時に源五兵衛、先達てより段々の頼みゆゑ、身共も云はゞ伯父たる身の上。浪人ながらも千辛萬苦いたして、やう〳〵才覺いたし、百金持參なしたが、大分見馴れぬ衆が

ト思ひ入れ。小萬、百兩といふ事を聞き、思ひ入れ。源五兵衛、こなしあつて

源五　イヤ、この者どもは、この邊の者でござりまするが

トつかへる。小萬、こなしあつて

小萬　モシ〳〵、私しなら爰の内の

源五　アヽ、コレ〳〵……イヤモシ、伯父者人、この女中

は、なんでござる……それ〱、この深川は正五九月は彼の八幡宮より、巫女が參りまして、神樂を上げまするその巫女でござりまする。ナ……コレ、巫女ぢやぞ〱。

ト小萬に呑み込ませる。

小萬　成る程、わたしや巫女々々、巫女でござんす。巫女ぢや〱。

虎藏　モシ、巫女(猫)ぢや〱と仰しやりますがといふ唄が、昔流行りましたが

幸八　そりやアお前の若い時分の事。これは今出來立てのホヤ〱。

小萬　溫たかい巫女でござんす。

八右　コレ、巫女どの、此やうな所に長居は無用。神樂が濟んだら、一昨日ござらつしやい。

小萬　エヽ、又あのやうな事を……好かぬわいなア。

ト　つんと思ひ入れ。

源五　併しながら、歸るがよからう。コレ、巫女どの、また荒神拂ひに

菊野　ほんに、あまり長うなつては惡からうぞえ。

虎藏　エヽ、おのれが伴之功に逢ひたがつて

菊野　エヽ、また惡口かいなア。

ゆみ　ほんに、小萬さん、もうお歸りなさんせいなア。

源五　サア〱、巫女は歸つた〱。

小萬　エヽ、お前までが歸したがつて……覺えて居やしやんせ。

ト　つんとして門口へ出る。

虎藏　ハヽヽ、巫女さんが素的に、熱くなつた〱。

幸八　巫女が熱くなれば、お湯花の始まり〱。

虎藏　どこどん〱。

ト幸八、虎藏、囃し立て、流行り唄になり、小萬、菊野、この人數向うへ入る。助右衞門思ひ入れ。合ひ方。

助右　流石繁華の土地ほどあつて、荒神拂ひの巫女までが派手やかな事なア。ハヽヽ、……時に、數右衞門先達てより其許にも、義士の數に入りたき願ひとあつて身共を以て達ての頼みなれど、何を申すも其方と三左衞門、當番の夜に御用金の紛失。合ひ役三左衞門はその砌り切腹。其許は添へ役ゆゑ、その科輕く御勘當。彼の御用金の盜賊めが、慥かに二人にて、一人は左の腕に、三つ星と一文字を、入れ黑子なしたる奴との風說。これは兎もあれ其方には、紛失の御用金を償ひ、亡君の御勘當ありし上にて、義士の列に加はりたき所存でござるかな。

源五　是非とも仇討のお供いたしたき心願ゆゑ、紛失の御用金、三百兩のところ、過ぎし頃まで千辛萬苦いたし、二百兩は大星どのへ受納いたしたれど、殘りの百金は才覺に盡きましたるゆゑ、申さば同じ一味の伯父者人へ、お氣の毒ながら右の才覺を、お頼み申したのでござりまする。

八右　ヘイ／＼、何卒お旦那にも、義士の一味に加はりまするやうに、この下郎めも、共々お願ひ申しまする。私しも朝夕、そればかりを神佛へ

助右　ハテサテ、奇特な其方と申し、小者の徳右衛門とやらんまで實心に、甥の數右衛門を貢いでくりやるとの事。この助右衛門が身にとつても、大抵過分な事ではない。一つは其方達の忠義に免じて、甥の數右衛門が願ひ通り百兩調達いたして參つた。サア／＼、受取り召されい。

ト胴卷より包み金百兩出して、源五兵衛の前へ置く。

源五兵衛こなしあつて

源五　これは誠に伯父者人の御深切。この金子がある上は、拙者が願ひも……エヽ、忝ない／＼。コレ八右衛門、喜べ／＼。

八右　これが喜ばずに居られませうか。これと申すもあなたのお庇。エヽ、有り難うござりまする／＼。

助右　オヽ、喜ばしいか／＼……コリヤ、數右衛門、この金子には一兩々々に、ちきりの極印が打つてあるが、申すまでもないが、其方才覺いたした體にて、由良之助どのへ持參なし、その身の願ひを……イヤ、これは身共も、共々取持つてあらうて。

源五　とてもの事に、その儀も何分

八右　偏へにお願ひ申しまする。

助右　承知いたした。然らばこれより石町へ參り、大星どのに逢うた上、萬端掛合ひ致し、又々後ほど吉左右を

ト立ちかゝる。

源五　然らば、萬事よしなに大星どのへ

ト助右衛門、門口へ出て立ちどまり

助右　コリヤ、八右衛門々々々々。

八右　ヘイ／＼。

助右　異な事を申すやうぢやが、最前の巫女なぞは、あまり爰へ參らぬやうに

八右　エ。

助右　氣を附けてくりやれ。

トこなし。大拍子になり、助右衛門向うへ入る。源五

兵衛思ひ入れあつて

源五　成る程、伯父なればこそ、浪人の身として、大枚の
この百両。

八右　モシ、必らず仇に思し召しまするな。

源五　エヽ、忝ない〳〵。

ト思ひ入れあつて、金を胴巻へ入れて懐中する。佃節になり、向うより三五郎、足早に出て来り花道にて

三五　いま幸八と小萬が云ふには、あの源五兵衛の手へ、金が百両入つたと云つたが、こいつは聞き遁がしにはならない。是非ともブックリかけて

ト思ひ入れあつて、門口へ来り

御免なさいまし〳〵。モシ、源五兵衛さん、小萬さんが、是非とも逢はなければならぬと云つて、有り難いぢやアございませんか。コレ、紅筆で書いたこの手紙。これを見さしつて、何にしろ逢つてやらつしやりませ。

ト鼻紙へ書いた文を源五兵衛に渡す。源五兵衛、これを見て

源五　成る程、この文の様子では、遁がれぬ用事のある様子。こりや参つてやらずばなるまいが

三五　モシ、それをぶん流しになさると、取殺されやすぞえ。

八右　エヽ、来る奴も〳〵一つ穴の狐。今日はどうして、旦那は遣られぬ〳〵。

源五　如何にもさうぢや。伯父者人が今の深切。こりや八右衛門が意見について、今日は宿に居ようわえ。

八右　さうなされませ〳〵。それでこそお旦那大明神様だやわえ。

三五　エヽ、お前もマア、生若い形をして、戀を知らないな。モシ旦那、お前さんは、この人の野暮な意見に附いて、あれ程逢ひたがつてゐる小萬さんに、焦れ死をさせるのか。小萬さんが死ねば、二十歳頃からあの子の世話になつてゐるこの三五郎、お前方を敵と討ちやすぜ。ハヽヽ、ヽ、イヤ、冗談はのけて、なんだか知らないが、山の伊勢屋で、業腹を立てるやら、笄で前髪を掻きむしりながら、ボロ〳〵涙をこぼすやら、モシ、冗談は脇にして、可哀さうだ、行つておあげなさいやし。

ト煽てる思ひ入れ。源五兵衛こなし。

八右　モシ、旦那、眉毛を濡らして、爰が辛抱どころだ辛抱どころだ。

ト思ひ入れ。

三五　そんならようござりやす。これから歸つて小萬さんに、あの源五兵衛さんはお前をば、長棹にして、百年待つても無駄だから、こけ未練を起さずと、スツカリ思ひ切つて、おつりきな客に乘りかへなさいと、思ひ入れそくらをかつて、段切れにしてしまふが、ようござりやすかえ。

八右　それこそ此方の望むところぢや。コレ、一生恩に着るワ。さうして下され〳〵。

三五　さうしないでサ。モシ旦那、ようござりやすか。

ト源五兵衛こなし。

ドレ、そんならこれから、緣切りの一段にかゝらうか。

ト行きにかゝる。源五兵衛、いろ〳〵思ひ入れあつて

源五　ア、コレ〳〵、三五郎々々々、ハテサテ、われも氣の短かい。そんなら行かうかい。

八右　エ、情ない。それでは伯父御樣に私しめが

源五　何をおのれが……こま言云はずと、キツと留守いたせ。

八右　イエ〳〵、留守は出來ませぬ。私しも一緒に

源五　なぜ其方は、留守が出來ぬと申すのぢや。

八右　家主から店賃の立て催促で、居たゝまれるものではござりませぬぞえ。

源五　これはしたり、三五郎の聞く手前。コリヤ、家賃位に差支へる身共ではない。爰にも金子一包み、所持いたして居る。

ト三五郎に見せる。三五郎思ひ入れ。

三五　ハ、ア、小判で數も一包み。

八右　そりやソレ、たつた今、伯父御樣が

源五　エ、又しても默り居らう。家賃位にこの金子を、遣うてはならぬ。

ト思ひ入れあつて、脇差の片しの笄を取つて

こりや後藤が作の千疋猿、これを預け物に致した上、家主へ拂うて遣はせ。

ト八右衛門へ笄を渡す。

八右　そんなら旦那樣、どうあつても

源五　三五郎、一緒に參れ。

三五　サア〳〵、早くお出でなされませ〳〵。

トせり立てる。八右衛門思ひ入れ。佃節になり、源五兵衛に三五郎附いて向うへ入る。八右衛門殘りこなしあつて

八右　ヤレ〳〵、憎い野狐女、何を云ふにも旦那が、あの

小萬めに、餘ッぽど伸びてござるわえ。ア、、困つたものだ。ほんに困つたといへば、家主からの催促も

ト件の千疋の笄を見て

なんぼ後藤の細工でも、片しの笄。これで勘定濟めばよいが

トあたりを見て

外に預ける物は塵ッ葉一本……ハテサテ、困つたものぢやなア。

ト越後獅子の唄にて、思ひ入れよろしく、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、中足の二重、舞臺正面、一面の腰障子、いつもの所に誂らへの枝折り戸、その外建仁寺垣、すべて深川二軒茶屋伊勢屋の座敷の體。爰に伴右衛門、小萬を引きつけ、伊之助立ちかゝり、菊野、長八、お弓、中へ入り留めて居る。この見得流行り唄にて道具とまる。

伴右　イヤ／＼、料簡ならぬぞ／＼。

長八　マア／＼、お靜かになされませ／＼。

伴右　イヤ／＼、料簡ならぬ。おのれゆゑに金銀を、塵埃のやうに撒き散らす、この賤ヶ谷伴右衛門、なぜ心に隨はぬのぢや。

小萬　なぜというて、わたしや好かぬから

伴右　ナニ、好かぬからぢや。

菊野　ハテ、其やうに木折りで、藝者衆と色戀が。モシ、小萬さんも、よい加減に調子を合せて置くがようござんす。

小萬　イヱ／＼、わたしや好かぬ人とは、合せ袱紗がならぬわいな。

伊之　コレ／＼、われが其やうに云つても、この兄さんの高下で、伴右衛門さまへ遣らねばならぬぞ。否だと云やア

ト立ちかゝる。長八こなし。

長八　マア／＼、兄貴、待たつしやい。わしやア賣込みの判人で、今では賣れッ子の小萬さんでも、この子を引上げて、わしが判を入れて、金を借りたからには、なんぼ兄貴でも、手籠めにして瑕でも附けさせちやア、判人が迷惑するワ。

伊之　コレ、この金を償のつて、小萬が體を身儘にしやらうと、云ほつしやる伴右衛門さま、兄弟ともに浮かみ上

がる穿鑿だワ。その旦那を否だと云ふ妹の小萬

伴右　身共が武士は、立たぬぞ〳〵。これでは濟まぬ〳〵。

菊野　マア〳〵、わたしがどのやうにも、小萬さんに申しませう程に

ト杯を取上げ

あなた、マア、お一つお上がりなされませ。

伴右　酒よからう。もう自棄酒とやらぢや。サア、つげつげ。

菊野　ハテ、其やうな事仰しやらずと、モシ、お弓さん、お酌を

ゆみ　アイ〳〵。

トお弓、酌をする。流行り唄になり、向うより源五兵衞、三五郎出て來り、花道にて囁き、兩人拔き足にて門口へ來り、三五郎ちよつと門の戸を開け、伴右衞門と顏見合せ、こなしあつて又ソツと戸を締める。伴右衞門思ひ入れ。三五郎、源五兵衞、立聞きのこなし。

伴右　コレ〳〵、兄貴、一體小萬めが、身請けを嫌がるには譯があらう。コレ、判人の長八、存じて居るなら、その譯を申せ。

長八　譯と云ふのは、外でもござりませぬが、有りふれた通り小萬には、惡い蟲が附いて居りますよ。

伴右　ムウ。その蟲は武士か町人か、何と申す奴ぢや。

長八　慥か源五兵衞とかいふ、侍ひの浪人者に、この子が打込んで、身請けなさるといふ結構なお前樣へ、今のやうな、ふて勝手。

伊之　忌々しい貧乏神は、あの源五兵衞といふ侍ひでござりますて。

小萬　兄さん、例へ今源五兵衞さまが、しがない身の上になつたと云うて、元はといへばわたしから。それを見捨てゝ、なんぼ藝者の身の上でも

伊之　エヽ、その手は食ふものか。高が浪人の源五兵衞、てまへに引ツかゝらぬうちから、一文無しの素寒貧。コレ、何もかも、この兄が知つて居るわえ。

ト源五兵衞思ひ入れ。三五郎こなしあつて、源五兵衞を花道へ連れ行き

三五　モシ、旦那、ちよつと聞いたところが、あの位なものだ。わしやアもう胸ツくそが惡くて〳〵、腹が沸えかへるやうでござりやす。又一つには小萬さんの心意氣も可哀さうぢやアござりませんか。

源五　身共もあまり心持ちもようもないが……イヤ、此や

うな所に居ては悪い。身共はもう、歸らう歸らう
　ト行きにかゝるを、三五郎引留めて
三五　モシ〳〵、それではあんまり、達引が無いといふもの。ちつとは小萬さんの心も推量して。エヽコレ、おれに金があれば、あの侍ひの横ツ面へ叩きつけて、お前に小萬さんの手を引かせて、見せつけてやるが、たつた百兩でも、口惜しいわい〳〵。
伴右　コレ、小萬、その源五兵衛とやらいふ浪人者が、百人寄つたといつて、大枚百兩といふ金が出來るものか。又この伴右衛門は、たつた今懐中から百兩出して、この小萬を女房にする。兄貴も長八も、云ひ分はあるまいがな。
伊之　なんの云ひ分がござりませう。コレ、小萬、結構な旦那、又もや御意の變らぬうち
長八　あの貧乏神の、源五兵衛が事は思ひ切つて、是非とも伴右衛門さまの
伴右　女房になるか。
小萬　否でござんす。
伴右　ヤ。
小萬　コレ、見やしやんせ。
　ト左の腕を捲り、こなし。誂らへの合ひ方になる。
浮氣な商賣しながらも、外の男に肌觸れまいと、誓ひに彫つた五大力。例へわたしや殺されたとて、源五兵衛さんより外に、男は持たぬ心の錠前。金銀づくの合ひ鍵で明けられるなら明けて見やしやんせ。アイ、わたしや源五兵衛さんといふ、立派な侍ひの、女房でござんすぞえ。
伴右　そんならどうでも、この伴右衛門には
伊之　これといふのも、あの源五兵衛ゆゑ、思へば〳〵、忌々しい
皆々　扶持離されだなア。
菊野　モシ、其やうな事云はしやんすな。ひよつと源五兵衛さんが聞かしやんしたなら
ゆみ　大抵腹立てる事ぢやござんすまいぞえ。
伴右　聞いても大事ない〳〵。また腹が立つなれば、たつた今爰へ、百兩出して見ろ。
伊之　なんのつきに、百兩どころか
長八　小二朱判の一つも工面が出來るものか。源五兵衛の
三人　貧乏神めが。ハヽヽヽヽ。
　ト敵役、こなしあつて云ふ。門口の三五郎、ムッとこなしあつて

三五　エヽ、もう料簡が、ならねえ〳〵。旦那、入らつしやりませ。

ト無理に源五兵衛を連れ、内へ入る。

小萬　ヤ、源五兵衛さん、ようマア爰へ

皆々　そんなら、これが

菊野　それ見やしやんせ。わたしが云はぬ事かいな。こりやマア、大抵では濟むまいぞえ。

ゆみ　モシ、菊野さん

ト囁く。

菊野　ほんに爰に居ては……サア、來やしやんせ。

ト菊野、お弓、こなしあつてツイと奥へ入る。三五郎こなしあつて

三五　コレ、何奴も此奴も、源五兵衛さまがお出でだぞ。百兩位な金は、いつでも懐に持つてござるまいものでもないぞ。貧乏神か福の神か、仕上げを見て、たわ言を吐きやアがれ。誰れだと思ふ。この三五郎がお附き申したお客人だぞ。

源五　コレサ〳〵、三五郎、其やうに大風な事を申すな。成る程、身共は貧乏神の浪人者。いま門口にて聞けば、あのお侍ひか、この女を身請けとやら、決して身共に遠慮はござらぬ。女房になりとも、妾になりとも、勝手次第に

三五　モシ〳〵、旦那、そりやア何を仰しやりまする。それでは小萬さん始め、お附き申したこの三五郎は、どこで立ちます。

小萬　モシ、源五兵衛さん、どうぞよい思案は、ござんせぬかいなア。

伊之　モシ、源五兵衛さんとやら、これまで段々妹をお世話、私しは妹が庇で、暑くなく寒くなく暮らして居りましたを、モシ、有り難うござります。

トなじるこなし。

長八　なんの事たね。身請けの切端のこの所へ、ズッと入つて來たからは、百兩金を抛り出すのかと思へば、イヤ、こいつは大笑ひだ。

伴右　コレ長八、そりやア云はずとも知れてある事、この伴右衛門は高野の家來、金の事なら後へは引かぬ。以前は大家の扶持人か存せぬが、當時は浪人、編笠に高砂やアの口では、なアに身共に歯が立つものか。

三五　エヽ、口惜しいわえ〳〵。モシ〳〵、旦那、あれを聞いては

源五　ハテ、彼方は全盛なお侍ひ、此方はしれない浪人者、どうしてこの源五兵衛などが、歯が立つものか。

三五　エヽ、小自烈てえ。

源五　ハテ、捨てゝ置きやれ。

ト なだめる思ひ入れ。

三五　して、小萬さん、お前はこの場を、どうしようと

小萬　どうと云うたら、頼みに思ふ、源五兵衛さんはあの通り、わたしやモウ、覚悟を極めて

ト 源五兵衛が脇差へ手をかけ、死なんとする。

源五　コレ、小萬、そちや何をするのぢや。

小萬　何をするとは、エヽ、聞えぬわいな、源五兵衛さん。

ト こなし。

三五　成る程、こいつは死なずばなるまい。小萬さん、尤もだ／＼。

伊之　こいつは面白い。死ぬなら死ね。妹を見殺しにすりやア、源五兵衛どのとやら、この兄が存分お禮を申しやす。サア妹、死ね／＼。

伴右　コレ、それとも、この伴右衛門の心に随ひ

長八　玉の輿に乗る心か。

小萬　なんの穢らはしい、どうでわたしは

ト また手をかけるを、源五兵衛、脇差を取上げ、小萬を上の方へ突きやる。小萬、思ひ入れあつて、伴右衛門の脇差を取つて

源五兵衛さん、あの世でキッと……南無阿彌陀佛。

ト 死なうとする。源五兵衛思ひ入れあつて

源五　ア、コレ、待て。

小萬　エヽ。

ト 源五兵衛、いろ／＼あつて

源五　身請け致さう。

伴右　すりや、浪人どのが

皆々　百兩を

ト 源五兵衛、懐中より、以前の包み金を取出し

源五　サア、封金百兩、小萬が身の代、慥かに受取れ。

ト 前へ金を出す。

皆々　ヤア、正金百兩、こりやどうだ。

ト 長八、金を受取り

長八　成る程、人は見掛けに依らぬもの。この浪人どのが百兩を

三五　やかましいわえ、この長ツ面野郎め。コレエ、市

川丸の從の三五郎が、附いて來たお客だぞ。誰れだと思ふ

長八　エ、、面も長い。（つがもねえ）

三五　なんだ、この唐變木め。

　ト長八を擲り倒す。よき時分より、助右衞門、八右衞門、下座より出て、門口に窺ふ。源五兵衞思ひ入れあつて

源五　浪人しても身共も侍ひ。賤ケ谷伴右衞門どのとやらちつと御意得たい。

伴右　ヤ。

源五　イヤ、それは格別、コリヤ、二人の町人、その百兩で小萬が身の上に、云ひ分ないか。

伊之　なんの云ひ分ござりませう。例へどなたでも、金さへ出して下されば

長八　云ひ分はござりませぬ。

源五　其方に云ひ分がなうても

助右　此方に云ひ分あるわえ。

　トずつと內へ入る。皆々思ひ入れ。源五兵衞、恂りして

源五　ヤ、、あなたは伯父者人、どうして爰へ

助右　どうしてとは、うぬ、茲な人でなしめが。

　トきつと寄るを、八右衞門とめ

八右　アモシ、場所と申し、滿座の中、どうぞ御料簡を

助右　邪魔いたすな。

　ト隔てる八右衞門を突きのけ

おのれはなア。

　ト源五兵衞の胸づくしを取る。誂らへの合ひ方。こなしあつて

ヤイ、茲な人畜生めが。日頃おのれが忠義々々と吐かすを、年寄つたこの伯父は、誠と心得、夜の目も合はさぬ心配に、才覺いたして持參なし、最前渡したあの金子も誠の武士に致してやりたさ。その心も汲み分けず、その體裁、そりや何事。コレ、おのれが放埓の入用に、遣へと云うて渡したかやい。この儀を忠心第一の、御家老どのに沙汰あらば、我れ／＼までが不覺となり、どの面下げてオメ／＼と、人前へ罷り出られやうぞやい。エ、、ずた／＼に切り苛なんでも、飽きたらぬ奴。おのれ、この場に於て

　ト立ちかゝるを、八右衞門縋つて

八右　ア、、御尤もでござりまするが、遊里と申し且つは

又、主人の胸中、下郎がとくと、お聞き申したその上にて
助右　エヽ、何を此奴が胸中に
八右　場所柄でござりまするぞ……モシ
トこなしあつて引とめる。助右衛門、ギツと思ひ入れ
あつて
助右　成る程、思うて見れば、畜生のやうな奴を手にかけては、六十年來研ぎすました刀の穢れ。エヽ、甥と思ふも穢らはしい。未來永々、伯父でないぞ。
ト思ひ切つて行きにかゝるを、八右衛門とめて
八右　モシ、あなたの御縁が切れましては、主人の身の上
助右　エヽ、思へば／＼、馬鹿な奴めが。人外めが。
ト振り切つて、こなし。唄になり、助右衛門、足早に向うへ入る。八右衛門こなし。
八右　モシ、旦那様、それぢやによつて私しめが
源五　どうするものだ。例へあの伯父に勘當されたといつて、一旦小萬が入用に、遣つた百兩の金、覆水盆に返らぬ譬へだ。
八右　おやというて、お前様は
源五　やかましいわえ。こま言吐かさず、すッ込んで居れ。コレ、伴右衛門どのとやら、この源五兵衛が、ちよつと近附きになり申さう。
伴右　サ、身共もお近附きになりたいが、只今急に癇癪が
アイタヽヽヽヽ。
伊之　成る程、おいらも足許の明るいうち
ト三人立ち上がるを
源五　イヤ、待たつしやれ、お侍ひ
伴右　アイヤ、ちよつと手水に、コレ、案内いたせ。
ト伴右衛門、伊之助、コソ／＼逃げて奥へ入る。
源五　ハヽヽヽ、ハテ、張合ひの無いあの侍ひ。これは兎もあれ、もうこの上は、とても濡れたる袖とやら、小萬は身共が嫁妻に致す。これより直さま。小萬、來やれ。
ト手を取る。
小萬　そんならわたしや、お前の所へ、
トこなし、三五郎もこなしあつて
三五　モシ旦那、ちよつとお待ちなされませ。
源五　待てと云ふのは、そりやア何を
三五　外の事でもござりやせん。小萬さんの借金は、拂つてもらひ申しましたが、お氣の毒ながらこの子にやア、亭主がござります。その手を切らぬ其うちは

八右　ナニ、この女中に亭主があるとか。
源五　して、小萬が其方の男といふは、何者ぢや。
小萬　サア、それはナ
源五　コリヤ／＼、三五郎、小萬が男といふは何者ぢや。
　ト三五郎こなしあつて
三五　わしでごんす。
源八　ヤ。
　ト双方見合つて思ひ入れ。きつぱり合ひ方
三五　亭主といふは小膽ながら、この三五郎サ、有やうはこの小萬は、わしが女房。挊ぎ女へどうぞして、いゝ客をくツつけようと、魂膽した甲斐あつて、源五兵衛さま只今までは、剛氣にお世話をかけました。
源五　そんなら夫婦馴合ひにて、この源五兵衛を、深い所へやり居つたか。
三五　それといふのも、金が敵の娑婆世界サ。
八右　そんなら旦那を二人して。エヽ、成る程、世にはすたつた人も
三五　義理や浮世を考へて、一生抱き寢をする女房、多くの人のなぐさみ物に、挊がして居られるものか。とは云ふものゝ、實は氣の揉める穿索サ。

源五　すりや、いよ／＼小萬めも、亭主のおのれと同心にて
小萬　サア、腹立たしやんすは尤もぢやが、これには段々、云ふに云はれぬ
三五　エヽ、役にも立たない女の口出し。コレ、何事もこの胸に
小萬　それぢやと云うて。
三五　エヽ、やかましいわえ。
源五　小萬が色香に迷うたは、この身の不覺と云ひながら如何に匹夫の下素下郎でも、さほどまでにも人情捨てゝ、人の財を貪り取る、思へば憎くき人非人。この場に於て
　トきつと思ひ入れ。ズッと立つて刀を引下げ、立ちかかるを、八右衛門とめて
八右　モシ、大事を抱へし、あなたの身の上。
源五　あまりと申せば
八右　ハテ、ぢつと辛抱さつしやりませ。
　ト思ひ入れ。源五兵衛「ムゥ」と息込む。三五郎思ひ入れあつて
三五　騙された膽ッ腹で、そんならこなたは二人を切る氣か。サア、切るなら切らつしやい。だが、浪人ならば町

人も同然、一人切つても下手人ものだ。茶屋盛り場のすッぱ拔き、忽ち階子棒づくめ、殊に小萬は親方の、借金拔けばおれが女房、云はゞこなたは間男だ、おれを逆捻ぢに、切れるなら切らつしやい。

ト こなし。源五兵衞思ひ入れ。八右衞門、堪り兼ねて

八右　エヽ、畜生のやうなおのれらに、惡口されてもお旦那は、願ひある身の御辛抱、側で聞き居る八右衞門……もう料簡が

ト 立ちかゝるを、源五兵衞

源五　ハテ、捨て置け〳〵。

八右　でも

源五　コレ、なんにも云ふな。人ではないわえ。

ト よろしくこなし。唄になり、八右衞門を叱りつける是非なく控へる。源五兵衞、歸らんとこなしあつて、胸をさめ、向うへ入る。跡に小萬、堪り兼ね

小萬　モシ、如何にお主の爲ぢやと云うて、何にも科ない源五兵衞さんを、今も今とて伯父御樣の御勘氣、それもお前とわたしゆゑ。わしやアどうもこの胸が

三五　尤もだ〳〵。女の狹い心からは、さぞ氣の毒にも思はうが、何を云ふのもお主の爲、とは云ふものゝ源五兵衞どの。さぞや二人を憎からう。

ト 思ひ入れ。流行り唄になり、奧より伊之助出て來り

伊之　コレ、三五郎、どうやらぐるになつて、首尾よく百兩、サア、其方へ渡さう。

ト 件の金を三五郎に渡す。受取つて

三五　御大儀々々々。お主が小萬の兄も、巧いものであつたが、あの勘九郞が侍ひ客も、餘ッぽど味をやつたな。

伊之　禮はしつかりあるだらうな。

三五　そりやアこの三五郞が胸にあるワ。

伊之　有り難い。コレ、小萬さん、お前、強勢に鬱いで居るな。

小萬　わたしやあの源五兵衞さんへ、今更どうもなんの氣の弱い。併し、どこの女も同じ事、あの菊野のあまも、素的に氣の毒がる奴よ。

三五　コレ、何を云つても根が侍ひ、今の氣振りで歸つたからは、今夜は油斷はならねえわえ。

小萬　わたしや泊つて行かうかいな。

三五　イヤ、爰は泊れない。あの自身番横町の猛虎の内で

小萬　モシ、伊之助さん、お前もあの菊野さんを

伊之　連れて來いとか。そんなら今夜は、おいら二人が請ける役か。
三五　馬鹿を云へ。なんの珍らしくもない。
伊之　覺ましてあがれ。
ト小萬を三五郎の方へ突きやる。
小萬　エヽ、冗談な。
トそのまゝこけかゝり、三五郎を引寄せ、顏見合せるを木の頭
三五　エヽ、何をするのだ。
トこの仕組みよろしく、流行り唄にて、ひやうし　幕
引附けると佃のツナギにて引返し。
本舞臺、三間の間、正面一面の二重舞臺、茶壁、上の方九尺の二階、誂らへの炭櫃あり、蹴込み、建仁寺垣、下の方一間の泥壁、下地窓、好みあり、その下柴垣、植込みの體、すべてこの道具に誂らへあり、流行り唄、時の鐘にて幕明く。
ト二階には三五郎、小萬の彫り物を三五大切に直してゐる。舞臺には伊之助、菊野、とりやつて居るを、虎藏こし中へ入り、なだめて居る。長八、伴右衞門、オシキ／＼とけしかけて居る。
虎藏　コレサ／＼、お前方、なんぼ心安いおれが内だといつて、近所あたりへ外聞が惡いわな。マア、靜かにしなさい／＼。
菊野　それぢやというて、可哀さうに源五兵衞さんを
伊之　エヽ、小まつちやくれた事を云ふな。何をてめえがそんなに氣の毒がる事があるものか。
菊野　ぢやというて、小萬さんも、いつそモウ
小萬　モシ、わたしもあの事を思ひ出すと、一倍氣色が惡うなるわいな。
長八　なんの氣の弱い。そんな事で藝者の商賣がなるものか。おいらもその一件では、友達のよしみに判人の眞似をして、築地丸むきでやらかしたや。
伴右　それ／＼、おれも賤ヶ谷伴右衞門といふ、侍ひの眞似をしたが、爰の亭主に見せたかつたせ。
虎藏　一體お前は、あの染五郎に似て居るよ。
伴右　氣障な事を云はつしやる。あんな奴に似て、おたまりこぼしがあるものか。
小萬　コレイナア、其やうにせずとも、ツイ灸すゑて濟ま

すがよいわいな。
三五　イヤ／＼、所を、針を加へて三五大切。
伊之　ハヽア、そんならあの源五兵衛を、かきのめす狂言に、五大力と彫つたのか。
三五　疳癪にさはるから、三五大切とは、どうだ／＼。
皆々　イヨ／＼、三五大切さま／＼。
虎藏　モシ／＼、大切さまは、葛西の柴又ではねえか。
皆々　おきやアがれ。ハヽヽヽヽ。
ト こなし。向うより若い者一人、格正の提灯をともし走り出て來り
若者　モシ／＼、虎藏さんはお内かね。
虎藏　格正の若い衆か。
若者　モシ／＼、代地の旦那が、わしどもの内へござつてちよつと虎藏を呼んで來てくれろと云はつしやります。サア、早くお出でなされませ。
虎藏　アイ、代地の旦那なら行かずばなるまい。
伊之　コレ、また慾張りの筋だな。
虎藏　ハヽヽヽ、大きにそこらサ。
ト 羽織を引かけ、門口へ出かゝり
モシ、女房も今日は和泉町の、師匠の所へ行つたから、おとなしく留守を頼みますぜえ。
三五　アイ／＼、留守はわしが、しつかり預かつたよ。
虎藏　サア行かう。
ト 若い者附き、虎藏向うへ入る
小萬　モシ、いま彫つた所が、なんぢやゝら、ヒリ／＼してならぬわいな。
三五　エヽ、てめえの可愛がるおれのした事だもの、辛抱しろ。
小萬　オヤ、きつい事だね……寒いわな。
ト 寄り添ふ。兩人こなし。
長八　エヽ、畜生め。氣が揉めるワ。コレ、二階で二人はあの通りいちやつくし、伊之公は菊野といふ相手があるが、詰まらぬ者はおれ一人だ。
伴右　詰まらぬ者はおいら二人。
長八　コレ、よまぬ同士かゝぬ同士で、鶩でも追ひに行かうか。
伊之　併し、それでも源五兵衛の間抜けよりは、まだ氣がきいて居るな。
三五　コレ／＼、てまへ達が鶩を追ひに行くなら、附合ひだ、おれも一緒に行かう。

小萬　エヽ、人ぢらしな。

ト二階の障子をしめる。皆々思ひ入れ。

伊之　菊野、てまへ、何を其やうに騒ぐのだ。コレ、おれも二階の様子を見て、おつな心持ちになつて來た。此方へ來やな。

ト手を持つて引ツ張る。

菊野　モシ、それでも廻しの幸八どのが

伊之　彼奴には三五郎が、二分掴まして置いたから、苦勞にする事はない。カウ、二人ながら大目に頼むぜ。

ト菊野の手を引いて上の屏風の中へ入る。

長八　おきやアあれ。委皆おいらが身の上は、初午の狸といふものだ。

伴右　忌々しい。直ぐに爰へ寢てくれべい。

トあたりにある五布蒲團をかぶつて寢る。

長八　これサ、初心な者だぜ。おれも寢さして下ツし。

ト伴右衛門が着たる蒲團の中へもぐり込む。時の鐘、誂らへの合ひ方になり、眞中の下地窓を破り、源五兵衛、顔を出して窺ふ事あつて、そろ〳〵窓を破つて抜刀にて内へ入り、こなしあつて屏風を明け、伊之助菊野が寢てゐるを透かし見て、三五郎小萬と心得、疊みかけて切り下げ、ト、兩人が首を一度に打ち落す。この物音に二階を明け、三五郎小萬窺ふ。源五兵衛、行燈を取つて來るを見て、二階の兩人あわてる事。此うち源五兵衛、兩人の首を取直すと、兩人とも眞向きになる。此うち二階の三五郎、炭櫃を明け、その穴へ小萬を入れ、自分も入り、穴より手を出し、炭櫃を元の通りに直し置く。源五兵衛、首を見て、これではないといふこなしにて、上の二階へ上がり、探す事。この時二階の下の垣根を破り、中より三五郎小萬出て、逃げる心にて、寢て居る長八に爪づく。長八目を覺まし

長八　アイタヽヽヽ。誰れだ〳〵。

トこなし。この聲を聞き源五兵衛、二階より下りて來るゆゑ、三五郎小萬は、あわてゝ伊之助の蒲團をかぶつて倒れ居る。源五兵衛再び下りて尋ねるを、長八見付けて

ヤ、源五兵衛か。

ト起き上がるを、源五兵衛ポンと首打ち落す。この首屏風の縁へシヤンと乗り、暫らくあつてツル〳〵と落ちる仕掛け。伴右衛門、この物音に驚ろき

伴右　ヤア、人殺し〳〵。

ト聲立てるを源五兵衛、蒲團越しに無暗に突く。伴右衛門苦しみ、蒲團の中より這ひ出すと、糊紅になり、源五兵衛の脇差へ手をかけるを蹴飛ばす。これにて片しの笄、伴右衛門が手に殘り、倒れる。源五兵衛、行燈を下げ、三五郎小萬の上を踏み越え、奥へ入る。これにて兩人、慄へ〳〵やう〳〵に門口へ出る。矢張り捨て鐘、凄き合ひ方。この時向うより幸八出て來り

幸八　あの小萬さんと菊野さんの迎ひが、剛氣に遲くなつたわえ。

ト此やうな事を云ひながら舞臺へ來り、兩人と摺れちがふ。幸八は門口へ、三五郎小萬は花道へ行く。この時、源五兵衛出て來り、幸八、內の樣子を見て

ヤア。

ト源五兵衛を見て

人殺し。

ト云ふを、源五兵衛一太刀浴びせる。これにて幸八「ッソツ」と云ふ。この聲に花道の三五郎小萬、ベッタリと下に居る。伴右衛門起上がつて、むしやぶりつくを、源五兵衛踏みとばしてグッと突ッ込む。木の頭。幸八、大袈裟に體割れる仕掛け。源五兵衛向うをキッと窺ふ。早い三重もやうへ、ごん送り、この仕組みよろしく、　幕

ひやうし

ト幕の外、三五郎小萬手を取り合ひ、慄へ〳〵向うへ走り入る。跡シャギリ。

大詰　四谷鬼横町の場　愛染院門前の場

役名――薩摩源五兵衛實ハ不破數右衛門重種。家主、くり廻しの彌助。笹野屋三五郎。若黨、六七八右衛門。徳右衛門道心了心。高野家中、出石宅兵衛。里親婆ア、おくろ。男藝者、喜佐吉。夜番人、太郎七。日雇取り、鮫ヶ橋の市。願人、ますます坊主。鬼横町の辰。男藝者、喜之助。日雇取り、鐵。姐妃の小萬實ハ神谷召使ひお六。

本舞臺、向う大津壁、押入れ、戶棚。上の方、障子

屋體、下の方、火の番小屋、門口櫺子窓、書圖面の反故にて貼りつめ、めくりかゝり居り、よき所に揚げ板、門口の横に紙札に「勝手に付化け物引越申候、家主」と記し、すべて四谷鬼横町、神谷氏居、古びたる内の模様、鳴り物、てんつゝ、角兵衛獅子にて幕明く。

ト爰に八右衛門、勝手道具、炬燵櫓、上流し、六枚屏風、行燈、その外いろ〳〵の道具を、市、鐵、辰、いづれも合ひ長屋の者、やつし形にて、繩にてからげ、片附けて居る。門口に、ます〳〵坊主、つゞれを着て生酔ひの體にて立つて居る。

市　モシ〳〵、昨日越して來て、まだろく〳〵お名も存じませぬが、もうお越しなされまするか。

八右　左樣でござりまする。昨日引移りましたが、俄かに今日轉宅いたしまする。

鐵　それは急な事でござります。私しは昨日下された、引越し蕎麥のお禮さへ、まだ申しませぬて。

辰　お前も氣の短かい。昨日越して、直ぐに今日また越すとは、それでは樽代の損になりますぞえ。

八右　イエ〳〵、樽代の損ぐらゐは不請します。モウ〳〵モウこの店には居られませぬ。化け物が出ますワ。

三人　イヤア。

市　道理で大屋さんが門口へ、化物勝手につき引越したといふ札を貼らしつた。

ます　ナニ、化け物が出るえ。爰のお内へかえ。こいつは、ます〳〵、めでたい〳〵。化け物が出るとは、恐れ久松ます〳〵めでたい〳〵。

三人　やかましいワ。また酔つたな〳〵。通れ〳〵。

ます　イヤア、通れとは、ます〳〵めでたい。ドリヤ、通つて御馳走にならうか。イヤア、ます〳〵。

トよろしく内へ入る。

八右　ヤイ、酔どれ坊主め、なんで内へ通り居るのぢや。

ます　それでも、あの衆が、通れ〳〵と仰しやるから、ますます通つて

トよろ〳〵する。三人立ちかゝつて

三人　エヽ、通れとは、あつちの方へ通れと云ふのだ。勝手な方へ、通れ〳〵。

ト外へ連れ出す。ます〳〵坊主、よろ〳〵と倒れ、思ひ入れあつて

ます　コレ、この手合ひは、なぜ投げ出した。イヤ、ます

ます料簡がならぬ〳〵。

三人　エヽ、ます〳〵打ッ挫け〳〵。

ト立ちかゝる。八右衛門、捨ぜりふにてこれをとめる矢張りてんつゝ、角兵衛獅子にて、向うより彌助、家主の拵らへにて、お觸れ書の貼り板を提げて出て來り門口の樣子を見て、この中へ入り、ます〳〵坊主を引退け

彌助　これはしたり、長屋の手合ひ、何を騷がつしやるのだ。

市　モシ〳〵、大家さん、この坊主が又醉つて來てます

三人　ふざけますわな〳〵。

ます　ふざける〳〵、ふざけの蟲や赤蛙、ます〳〵〳〵

彌助　やかましいワ。洒落やアがるな。また醉つたな。掃溜へでも入つて寢やアがれ。

ます　イヤア、掃溜へ入つて犬と一座は、恐れ久松、ますます〳〵

ト紙屋の門口へ倒れて寢る。彌助、内へ入つて

彌助　これは御亭主、昨日は引越し蕎麥を忝なうござる。時に、片附きましたかな。

八右　モシ〳〵、片附いたどころではござりませぬ。大家樣、わしはモウ、引ッ越します〳〵。

辰　昨日越して今日越すゆゑ、長屋の者も附合ひでござるから、今とめて居る

三人　最中でござりまする。

彌助　コレ〳〵、昨日越した八右衛門どのとやら、お前マア、なんで俄かに引ッ越すのだえ。

八右　サア、わしも有やうは、樽代の二朱づゝとは高いもの。併し家賃が三百、こいつが廉いに依つて、大概な事なら辛抱する氣ぢやが、モウ〳〵、住はれませぬ〳〵。その譯といふは、モシ、大家樣、昨夜爰へ一人寢たら、八ッ時分の頃、寺町の鐘がゴンと鳴ると、その時あの糠味噌桶の際から、白い幽靈がヌッと出ました。

三人　ヤア。

八右　サア、其やうな幽靈の出る店には、片時も居られませぬワ。門口には「勝手につき化け物引越し申し候ふ」といふ札を貼つて置きながら、化け物と幽靈は違ふかは知らぬが、わしは何方も氣がござらぬ。そこでお長屋の衆に話して、越しまするのぢや〳〵。

ト諸道具を擔げながら、こなし。

彌助　そりやアモウ、錢は貴樣の物、家は大家の物、勝手

にするがよいか、一晩寢ても家賃は同じ事。三百取ります。その代り、樽代の二朱は取りきりでござるぞ。なんと、解つた家主でござらうが。
八右　イヤハヤ、怪しからぬ店へ引ッ越しました。誠に好い長屋でござります。
彌助　併し、その筈の事でござるて。近頃まで神谷仁右衛門さまが、この家を借りて居られました。その時分もお內儀の、お岩どの〻幽靈が出ました。一體仁右衛門さまは、わしが爲には古主ゆゑ、その緣によつて、暫らく住はれました。その跡へ又、師直さまへお出入りの大工も居ましたが、その時も幽靈が出たといふが、一體お岩の死靈と見えまする。
鐵　左やう／＼、その高野へお出入りの大工どのは、わしも心安くしたが、矢ッ張り直ぐに越して行きました。
辰　さうして見ると、死靈の祟りかな。
彌助　そりやアモウ、どなたが越して、半日住はうとも、店賃は殘らず取りますといふのが、わしが長屋のきまりでござる。貴樣も越すなら、一月分拂つて行かつしやい。
八右　そりや法外でござらう。コレ、樽代は返して下さりませ。
彌助　イエ／＼、返しませぬ。わしが店へ疵を附けては、地主の手前、大家が立ちませぬ。達て樽代を返せなら返しもせうが、その代り一年分拂つて立たつしやい。さもないと、貴樣の諸道具をとめるから、さう思はつしやい。
八右　イヤ、云へば云ふ程、手前勝手になる大家樣ぢや、一日住つて一年分出せとは、滅相な人ぢや。
彌助　なに家主が橫を云ふものか。女幽靈の出る店に、一晩でも泊つたら、大方幽靈を抱き寢をしたであらう。して見れば、店賃は表向きで、正は幽靈の手切れでござるぞ。さうして見りやア廉いものだ。
八右　なんぢや、幽靈の手切れぢや。コレ、わしがやうな者でも、幽靈を抱き寢がならうかいの。ナウ、お長屋の方。
三人　さうサ／＼、幽靈を買ふには、湯灌場を借りねばなりますまい。
彌助　否でも應でも手切れを取る。寄越さぬと、諸道具をとめるソ。
八右　イヤ／＼、とめるならとめて見さつしやい。
彌助　オヽ、大家がとめて見せるわえ。
ト双方せり合ふ。長屋の者は捨ぜりふにてとめる。矢

　張り角兵衛獅子の鳴り物にて、向うより太郎七、番太
　の形にて駈け來り、彌助を見て

太郎　モシ〳〵、彌助さん〳〵、爰にござりましたか。

彌助　オヽ、太郎七か。何ぞ用か〳〵。

太郎　モシ、好い口がかゝりました。いま寺門前で、夫婦者の若い人が、壓や諸道具を擔いで、爰らで好い店があらば借りたいと、探して歩くから、幸ひと幽靈の出るこの店を、化け物の出ぬ面で、好い店があるから、わしが借りてやりませうと云つたら、嬉しがつて今來ます。昨日越した人は今日又越すといふ話し。早う追ッ立て、後の相談して、樽代を取るがようござりますわな。

彌助　イヤア、そいつは好いお客が取れたな。さう聞いては……コレ〳〵、貴樣は早く、越して下さい〳〵。

八右　イヤ〳〵〳〵、後の借り手があると聞いて追ッ立てるのか。さうはさせぬワ。わしも又、幽靈の出る家の、越し料取つて越す。それ取らぬうちは、滅多にこの家を、越す事ぢやない〳〵。

　トじや〳〵坐る。

三人　イヤ、この人は氣が強うなつたわえ。

八右　なに越す事ぢやござらぬ。達てと云ふと、後から來る人に、この内に化け物が出るから、その含みで相談さつしやれと、わしが又告げ口するが、それでもよいか。

彌助　アヽ、コレ〳〵、それを云はれては物がない。そんなら斯うせう。この間取つた樽代の二朱を、半分返さう。それも越して人が來て、樽代を取つた上の話しだ。よしか。その積りで、越して下さい。越して下さい。

八右　アヽ、コレ、半分では濟まされぬが、家主どのゝ折角の頼みぢや。店子のわしも、半分の樽代を取つて越しませう。

彌助　イヤ、それでは相談が極まりました。

皆々　めでたい〳〵。〆めませう〳〵。

　ト八右衛門皆々手を打つ。ます〳〵坊主、目を覺まし

ます　ます〳〵めでたい〳〵。

太郎　エヽ、やかましいわえ……時に大家さん、引ッ越し手合ひを呼んで來ませうか。

彌助　さうしてくれろ。

八右　わしもこの諸道具を、そこらまで持ち出して置かうか。

太郎　さうしなさい。幸ひわしらが番屋へ、やつて置きなさい。

八右　さうしませうか。
三人　手傳つてやりませう。
ます　爰に居ては邪魔だな、ます〳〵。
ト番屋の脇へ入る。八右衛門、件の三人、道具を番屋へ運び込み
彌助　そんなら八右衛門、明日までも、番屋へごろ附いて居さつしやい。
太郎　ごろ附くなれば幸ひと、お岩稻荷様の太鼓がある。枕にしてごろ附きなさい。
八右　心得ました。當分番屋のごろ附きになりませう。
三人　わしらはこれから錢湯へ。
太郎　引ッ越し手合ひを呼んで來ようか。
八右　併し、この又番屋へ、化け物が出ねばよいが。
ト角兵衛獅子の鳴り物になり、八右衛門、番屋へ入る。太郎七、先に長屋の三人、捨ぜりふにて向うへ急ぎ入る。彌助殘つて
彌助　ほんに、人殺しのお觸れが廻つたに、引ッ越し騷ぎでサッパリ忘れた。併し、賣り物には花だ。ドリヤ、古家をこそくつて置かうか。
ト腰より鐵鎚を出し、家のまはりよき所を、無暗に叩きちらして居る。てんつゝになり、向うより太郎七、木綿夜具大風呂敷のまゝ擔ぎ、片手に笹野屋といふ火繩を提げ、三五郎、廣袖、やつし船宿の拵らへにて下駄を穿き、四斗樽へ、傘三味線棕梠箒、臺所道具を入れ、笹野屋と記せし船宿の看板行燈、その外入用の道具を、疊一疊の上へ載せ、細引にてからげ、船の艪を棒にして、おくろ、年增女の里親にて、赤子を肌に脊負ひ、先棒に擔ぎ、後棒は三五郎荷うて出る。後より小萬、手拭をかむり、一升德利と黑塗りの鰻屋の岡持を提げ、鏡臺と鏡を繩からげにして、これを引摺り草履下駄にて出て來り、花道にて
小萬　コレ、三五郎さん、なんだか素的に馬が通る所だの。そして、越して行く内はどこだえ。
太郎　アイ、向うの内でござります。
くろ　モシ、三五郎さんえ。わたしはお前の所へ、里扶持を取りに參つて、それは取らずに、斯う又使はれては、一分四百では合はねえものだね。
三五　コレ、里親のかみさん、婆アを云はねえものだ。こなさんを使つた代りには、里扶持の前借りをするが、いいかえ、解つたものであらう。

くろ　そいつは有り難いね……そしてお前、鬼横町へ越して何をしなさるえ。
三五　何をするものか、船宿を
くろ　オヤ、四谷で船宿かえ。
小萬　さう云つても、剛氣な馬だの。馬に附ける荷を、船に積んでいゝぢやアないかえ。
太郎　それだといつて、川はござりやせんよ。
小萬　氷川といふ川があるぢやアねえかえ。
三五　鮫ケ橋といふ素的な橋もあらう。それでも川は無いか。
太郎　川はござりやせぬ。
三五　洗垢離はどこでとる。
太郎　井戸端でサ。
三五　そいつは少と不自由だわえ。
　ト こんな事云ひながら、皆々内へ入る。
太郎　モシ〳〵、幸ひ大家さんも居られます。早く樽代をあげなさい。
三五　ア、、樽代は先へ遣るのか。そいつは大變だなア。
　ト もぢ〳〵する。
小萬　爰に小粒があるわな。
　ト 挾袋より一分出して渡す。
三五　よし〳〵、二朱釣りを取らう。
　ト 紙に捻り、思ひ入れ。
彌助　ア、、引ッ越しの衆はお前か。
三五　左樣でござります。お前さんが大家樣かえ。こりやアお初にお目にかゝりました。私しは笹野屋三五郎と申しまする、船宿でござりまする。不思議な御縁でお長屋へ來て、お世話になりまする。お賴み申しまする。
彌助　ハイ〳〵、わしは家主の彌助でござります。話しに來なさい。聞きなすつたであらうが、店賃は三百、樽代は二朱でござりまするが、承知かね。
三五　承りやした。よろしうござります……ハイ、爰に一分ござりやすから、これを樽代の中へ
　ト 出すを、彌助手早く取つてこなし。
彌助　ア、、一分下さるか。これは御丁寧な
　ト 懐へ入れる。
三五　ア、、モシ〳〵、みんなはあげませぬ。二朱分釣りを下さりませ。
彌助　さうか。そんなら釣りに、晩に持たせて寄越しませう。

三五　モシ〳〵、早いがようござります。小遣ひがござりやせぬ。なんなら錢で遣はされませ。
彌助　アイ〳〵。して、御夫婦ばかりかえ。
三五　左樣でござります。餓鬼が一人ござりますが、こりやアこのかみさんの所へ、里にやつて置きやす。
彌助　さうかえ。
三五　爰に居りやすが、わしが嬶アでござりやす。コレ、てまへ、爰へ出て、大家さんにお近附きにならつし、
小万　アイ。こりやアお初にお目にかゝりやした。私しは三五郎が女房でござりやす。この上お頼み申しやす。
彌助　アイ、お前がおかみさんかえ。わしが內へも心安く話しに來なさい。どうしても下町と違つて、井戶が深くつて、女中方には大儀だて。汲み惱くば、わしが內の野郎を呼んで使ひなさるがよい。イヤ又、車井戶は、釣りつけぬ衆には御苦勞サ。
ト話しのうち兩人顏を見合せて
小万　ヤ、お前は
彌助　わりやア妹のお六だな。
小万　兄さんかいなア。
トつか〳〵と逃げようとする。彌助、追ひ廻す。皆々、立騷ぐ、三五郎、中へ入り
三五　ア、そんなら大家のお前は
くろ　此かみさんの
彌助　オヽ、わしが妹のお六だ。おらアこいつが兄樣だよ。
三五　お前の妹のお六なら、大家のお前はその以前
彌助　土手平といつて、神谷どのにも奉公した、中間あがりだ。コレ、うぬは兄にも沙汰なしに、男を拵らへ、よく逃げたな。そんなら相手のその男は
三五　アイ、憚りながら笹野屋の三五郎、わしでござります。定めしお前には沙汰なしに、逃げ隱れしたこの女、兄の威光でこの末は、緣切り奉公に宿場へでも、賣りたさるのが當り前、さうしたればとて後の祭り、金にならうが、見つともない話しだ。けちな野郎のわたしゆゑ、不請ではござりやせうが、云はゞお前の妹聟、モシ、大家さん、轉び合つたが仕方がないと思し召し、わしにくれてしまひなさい。あの女は貰ひましたよ。
トずつけり云ふ。彌助思ひ入れあつて
彌助　ハテサテ、この男は、よく手短かに貰つたと云つた。おつな氣前だ。いゝ男だ……成る程、貴樣が云ふ通り、

どうで女は人に遣るのが當り前、轉び合つた事なれば、どうするものだ。貴樣に遣らうが、只は遣られぬよ、手切れを貰はう。

ト三五郎思ひ入れあつて

三五　なんでござりやすな、他人がましい。妹を貰へば、お前はわしが兄貴だわな。兄弟なれば、お前の物はわしが物、わしが物はおれが物、野暮を云はずと、この女をくれてしまひなさいな。

彌助　ハテ、よくしやべる男だ。コレお六、あの男はあゝ云ふに、てまへ、あの三五郎に、一生世話になる氣か。

小萬　アイ、そりやモウ、互ひに山で主と逃げたわたし、參りたくない者が、兄さんを捨てゝ、逃げ隱れも致しますまいわな。

彌助　そんなら行きたいな。

小萬　アイ。

トもじ〳〵する。

彌助　どうするものだ、三五郎どん、今から妹のお六は、貴樣に遣らう、貰つて下さい。

三五　そりやア忝なうござりやす。そんならいよ〳〵、女はわしが女房だ。コレ、兄貴、餓鬼もござりやすよ。

彌助　ア、もう産ませたか。

くろ　アイ、しかも男のお子。モシ〳〵、よく似て居たさるよ。

ト赤子を見せる。

太郎　イヤ、子持ちのやうには見えやせぬ。

三五　兄貴も得心で貰つたてまへ、極りの附くやう、一つ〆めよう。

ト皆々手を打つ事。

くろ　エヽ、おめでたうござります。

彌助　コレ、聟の三五郎どの、何を隱さう、この内は化け物が出るよ。

皆々　エヽ。

彌助　元この内は、おれが奉公した神谷仁右衛門さまも、ちつとの間わしが縁で、貸して進ぜたが、彼のお岩の幽靈が、出るといふ評判で、引ッ越しても〳〵直ぐに立つが、マア〳〵、辛抱して住つて見るがよい。

小萬　ア、モシ、其やうな化け物の出る内へ、引移つてもようござんすかえ。

三五　よくなくつて、そこは又「鎌わ奴」を始めたおれだワ。幽靈化物、面白い。コレ、深川に居ると、借錢手合

ひが降る程來て苦しめるが、それよりも化け物の方が、
餘ッぽど氣がきいて居るの。その化け物を退治たら、店
賃は消して遣らないよ。ハ、、、、、。併し・爰は大分
穢ない・埃だらけの內だの。
彌助　それだから化け物が出ますよ。
くろ　この子を寢かすやうな所があるかえ。
太郎　斯うしなさい。奥に四疊敷がある。あそこには疊が
敷いてあるの。
くろ　そんなら、そこへ寢させよう。
彌助　ほんに、長屋を廻るのだが、コレ太郎七、てまへ、
この觸れ書を廻してくれろ。
ト件の札を投げ出す。太郎七、取つて、こなし。
太郎　心得ました。長屋へ廻しやせう。
三五　コレ兄貴・なんのお觸れだえ。
彌助　ありやアこの間深川で・浪人が多くの人を切つたと
いふ、切つた奴を詮議の觸れ書サ。
小萬　そんなら此ほど深川で
三五　男女の差別なく
小萬　切つたる人は御浪人
三五　慥かに薩摩

彌助　その源五兵衞よ。
三五　ア、、それもおいらが
彌助　ヤ。
三五　ア、、怖い話しだ。
ト小萬・顏見合せ、思ひ入れ。
彌助　氣を附けやれ。
ト唄、時の鐘になり、おくろは上の屋體へ赤子をいぶ
りつけながら入り、太郎七は番屋へ、彌助は向うへ別
れて入る。あと兩人殘る。向うより了心同心、麻衣に
て、お岩稲荷建立と書いたる幟を持ち、木魚を打ち、
念佛申して出て來り、門口に立つて修行する。
三五　ア、、日は短かくなつたな。もう暮れるに間もある
まいに、日の暮れ方に修行者の、コレ、通らつしやい通
らつしやい。
ト門口へ行き、戸を締めんとして、了心を見て、こな
し。
ヤ、親仁樣ぢやアございませぬか。
了心　さう云ふ其方は、伜の千太郎ではないか。
三五　これはマア　・サ、、此方へお通りなされませ。
ト思ひ入れ、了心內へ入り、よろしくあつて

了心　イヤモウ、わしも髮を下ろして、此やうに道心したも、今度頼まれて、お岩稻荷のお宮の建立。それゆゑ毎日毎日修行に歩くも、さて／＼氣散じでよいわえ……コリヤ／＼、悴、早速云はうが、この間より、われに頼んだ金の事。然るに主人數右衞門さまは、俄かにお身持ち惰弱の取沙汰。これにも定めて樣子あらんと存じたなれど、わしは兼ね／＼願ひゆゑ、髮を下ろしてこのあたりへ引ッ越し、托鉢するも、何卒義士の人々へもお目にかかり、旦那の用金償なうて、數右衞門さまを、一味の數に入れたいゆゑ

三五　モシ／＼、親仁樣、先達てお頼みの用金百兩、出來ました／＼。それゆゑあなたの方へ參るところ、ちと此方にも俄かの用事が出來まして、それゆゑ存じがけない此あたりへ、今日引ッ越して參りました。

了心　オヽ／＼、尤もの事ぢや……イヤ、見れば若い女中のお居やるが、もしや悴の

三五　ハイ、よんどころなう、親の許さぬ轉び合ひ、卽ち私し千太郎めが、ハイ、宿の妻でござります。

了心　ア、左樣か、めでたい／＼。

小萬　これはマア、あなたが親仁樣でござりまするか。云はゞわたしは御子息の、三五郎さま……イヤ、その幼名は千太郎さま、主のわたしは女房でござりまする。この上ともに、ハイ／＼、可愛がつて下さりませ。

了心　この上ともに、孝行にしてもらひませう……ハヽヽ、ハヽ……。して、悴には、その金が調うたと申すのか

三五　左樣でござりまする。夫婦の者が樣々と、艱難苦勞のその百兩、やう／＼拵らへ

ト懷の胴卷より百兩包みを出して

工面いたして置きました。

了心　それは重疊、出かしやつた／＼。その働らきでは今日只今、其方が勘當赦したぞ。

三五　エヽ、有り難うござりまする。コレ／＼、小萬、今のを聞いたか、親仁樣がお喜びのあまり、勘當が赦りたぞ。

小萬　そりやアお前、さぞ嬉しうござんせう。親仁樣、ハイハイ、有り難うござりまする。

了心　オヽ、その筈／＼。悴が今度の働らき、旦那數右衞門さまへ申し上げ、殊に、わしも勘當赦しましたと、あなたへもお目見得いたさせねばならぬて。

三五　私しも左樣思ひまするが、これまでお目にかゝらぬ

お旦那數右衞門さま、爰ではどうぞ、お目見得をさせて下さりませ。

了心 それは承知ぢやが、何を云うても旦那樣にも、御用金の失ひ、今日までも大星さまへ御面談ならず、此あたりにも鹽冶浪人、義士の面々、町家に入込み徘徊なされど、殿より御勘氣の數右衞門さま、それゆゑ遠慮。わしも二三日以前より、愛染院横町にて、庵坊主の跡へ引ッ越し、數右衞門さまも夜前尋ねてお出でなされ、直ぐに行くへも

三五 エヽ、お泊りなされてござりましたか。

小萬 そんなら直ぐにお前と連れ立ち

了心 イヤ／＼、今朝早くあなたは、淀橋か中野あたりに尋ねる者があると仰しやつて、まだお歸りなされぬわいの。併し、この金は直ぐに持つて行つて、お渡し申さうわいの。

三五 左樣なされませ。旦那がお歸りなされたら、何分お目見得を賴みます。

了心 承知ぢやわいの。わればかりではない、嫁女も一緒に、引合さねばならぬわいの。

小萬 左樣なら、どうぞ私しもよいやうに、お引合せなされて下さりませ。

了心 オヽ／＼、呑み込んで居ます。この金をお渡し申したら、さぞやお喜びなされて、二人ながら目見得の時はお譽めのお詞があらうわい。マア／＼、少つとも早くお渡し申して、よい時分には千太郎、其方を迎ひに來るぞや。

三五 よろしくお賴み申します。

小萬 お靜かにお出でなされませ。

了心 さて／＼、ようマア金を揃へた事ぢやの。ハヽヽハヽ。

トごん、合ひ方にて、了心同心、件の百兩を懷中して、いそ／＼と向うへ入る。兩人殘りて跡を見送り

三五 ヤレ／＼、嬉しや／＼、十年この方おれが勘當、今日といふ今日、親仁どのゝお氣に叶うて、勘當お赦しあつたので、こんな嬉しい事はねえワ。

小萬 そりやマア、常からお前が苦勞にして居なさんしたその勘當の赦りたのも、あの深川で浪人の源五兵衞さんを騙し込んで、主の前から取つた金。それと知れたで恐ろしい、十二軒でのあの樣子。

トうか／＼云ふ。

三五　これサ、滅多な事を云はねえものだ。此方も懸り合ひになるワ。
小萬　さう云つてもお前、わたし等がこの山の手へ來て居る事を、あの源五兵衞さんが聞き附けて、ひよつと來なさつたら、お前はどうするえ。
三五　どうするものだ、その時は、ほんの事だが此方も自棄だワ。殊に依ると源五兵衞を、ふん縛つて突き出すワ。ハテ、お觸れの廻つた、あの浪人は人殺しだわえ。
小萬　さうしても、よいのかえ。
三五　よくなくつて、あの源五兵衞は人を殺したワ……イヤ、殺したといへば、この內は、お岩が幽靈の出る、神谷とやらいふ人が住つた內だといふが、なに化け物は怖くはない。てめえも、おれもコレ、勝手で來た內。ソレ、いま買つて來たこの酒をかツくらつて、夜ツぴて起きて居て、化け物が出たら、それこそふん縛つて、見世物へ出すの。なに怖いものか。
小萬　さうサ、わたしも化け物は怖くないが、源五兵衞さんが來やうかと、それが怖いねえ。
三五　エヽ、けちな事を云ふ女だ。てめえ、あの侍ひが怖いか。
小萬　怖いのサ。さうして、お前は
三五　おれも怖い。
小萬　それ見なさい。
三五　マア、何しろ、わざつと焚きつけよう。薪があるか。
小萬　なに買ひもせぬもの。
三五　そんなら、そこらの羽目板でもめくらう。
小萬　大屋さんへ斷わつてから
三五　馬鹿を云へ、家主はてまへの兒だワ。そこが兄弟他人の始まりだ。
小萬　今まで大工さんが居たれは、木片でもありませう。焚附け位はあらう。尋ねて焚きつけ、茶でも煮ようわな。
三五　ア、、暮れかゝつたが、行燈はあるか。
小萬　慥かに忘れて來たよ。あの見世の看板行燈はあるよ。
三五　ほんに、あいつで灯さう。
ト笹野屋といふ掛け行燈へ、莨盆より火を移して灯す事あつて、柱のよき所へ掛ける。木魚入り、凄き合ひ方、暮れ六ツの鐘鳴る。小萬、竈へ茶釜を掛ける。三五郎、上の方の板羽目を剝がし、へし折つて焚きつける。小萬、茶を入れし袱紗より茶を出し、ほうじにかかる。この鳴り物、凄き誂らへあり、向うより喜佐吉、

喜之助、男藝者にて、ぱつち、半合羽、堀の内詣りの拵らへ、襟に長房の珠數を掛け、枝柿、水飴、麥こがし類の土産物を割がけにして、兩人とも跡ずさりになり、慄へ／＼出てくる。源五兵衞、茶紬着流し、大小にて柄樽を提げ、片手に刀の柄へ手をかけ居る體。二人ながら、ワナ／＼して花道へとまり

喜佐　モシ／＼、源五兵衞さま、私しどもはお客に附きまして、堀の内の歸り。今晩新宿泊りと存じたところ。

喜之　あの三五郎夫婦の者は、一向に存じませぬ。ハイハイ、どうぞ御免なされて下さりませ。

源五　イヤ／＼、何も身を恐るゝ事はない。三五郎小萬が、此あたりへ轉宅いたしたと聞いたゆゑ、尋ね參つた出合ひ頭、深川で逢うたわいら、折よく參つたに依つて、二人の者が住家を存じ居らうと思ふからぢやが、いよ／＼存ぜぬか。

二人　決して存じませぬ。

源五　今、此あたりぢやと聞いたが

ト向うの掛け行燈を見て

「船宿筏野屋」…ア、、あそこぢや。コリヤ、わいらは……コレ

ト喜佐吉に囁き、柄樽を渡す。兩人、慄へ／＼呑み込み

喜佐　畏まりました／＼。

喜之　私しも參りませう。

ト慄へ／＼足早に門口へ行く。此うち舞臺は二人して夜食膳へ茶碗を一つ置き、土瓶引寄せ、取り膳の體。

三五　こりやア茶碗は、てめえばかりか。

小萬　お前のは道で落して毀れたよ。

三五　さうか。そんなら茶をかけて食ひ廻しにしよう。茶漬茶碗は廻しを取つたな。

小萬　エ、、無駄を云ひなさんな。

ト二人して夜食を食ひ廻して居る。門口には源五兵衞、兩人に入れと仕方する。兩人、ビク／＼するゆゑ、刀へ手を掛け嚇す。兩人「ワツ」と云うて内へ駈け込み、柄樽をドンと置いて

兩人　おめでたうござります。

ト兩人をよく／＼見て

三五　誰れだ、恟りさせた。

小萬　オヤ、喜佐吉さんに喜之助さんか。どうして知つて來なさつた。

喜佐　アイ〳〵。わざつと祝つて

ト　わな〳〵する。

三五　なんだ、この手合ひは、素的に慄ふの。瘧でも病むのか。これサ、おいらが爰へ引ッ越した事を、誰れに聞いて來たのだ。

兩人　サア、アノ〳〵

ト云ひ兼ねて思ひ入れ。門口より

源五　イヤ、身共が指圖ぢや。源五兵衞が申しつけた。許しやれ。

トずつと入る。兩人恟りして

三五　ヤ、お前樣は

小萬　源五兵衞さん

源五　夫婦の者、堅固の樣子。ア、めでたい〳〵。

ト双方思ひ入れ。合方變つて、兩人氣味惡きこなし。

三五　ハイ〳〵、ようお出でなされました。

源五　いつぞや深川で逢うたまゝ、轉宅いたして此あたりへと承つて、わざ〳〵これに尋ね參つた。殊更道にて、この者どもに行きあひ、同道して連れ參つた。この酒は心ばかりの身が持參、受けてくりやれ。ハテ、知れぬ筈。よい所へ轉宅いたしたな。

ト詞の中より兩人思ひ入れあつて

三五　こりやハヤ何かと先達ては、樣々な間違ひで、あなた樣にも

小萬　さぞマアお腹も立ちませうが、思ひも依らず引ッ越した。先々までお尋ね下され、ハイ、有り難うございます。

源五　その酒を、開いてくりやれ。

三五　殊に御持參なされたる、御酒を開けと下さつたも、咽喉を通るは熱湯同然。あのマア、この間十二軒での

ト云はうとして口を押へ

サ、何事も、ハイ、御免なされませ。

源五　これはしたり、身は武士ぢやワ。いつまで其やうに小萬が事を恨んで居やうぞ。コレ、源五兵衞は侍ひぢやわえ。

ト和らかに挨拶する。此うち、よき時分より以前の、ます〳〵坊主、醉ひの醒めたる體にて出かゝり、門口に錢をつるべて居たりしが、源五兵衞と聞き、よく〳〵窺ひ見て、訴人せんと一散に向うへ入る。

小萬　そんならアノ今までの事は、水に流してこの上ともに

源五　三五郎とは兄弟も同然に、この上とも折々は參らう程に、心安う致してくりやれ。
三五　それは有り難いお詞。この上ともに、ヘイ〳〵〳〵、お立寄りなされて下さりませ。
源五　コリヤ〳〵、深川の者ども。身が持參の酒を爰へ出して、開きやれ〳〵。
兩人　ハイ〳〵、畏まりました。
　ト怖々柄樽を出す。
三五　イエ〳〵、今晩は私しが方から、御酒は差上げませう。只今買つて置きました、コレ〳〵、この酒を
　ト怖々に德利と岡持を出し
左様なら、お一つ召しあがりませ。
喜佐　私しどもが、お酌仕りませう。
小萬　お肴もなうて、マア〳〵、これなと召しあがりまして
源五　これは却つて夫婦の者の、世話になり申す。思ひ出せば、いつぞや深川で初會の晩も、此やうに……ほんにわいらも、その節參つたな。
兩人　左様でござります。
源五　然らば斯様いたさう。あの晩の事を思ひ出して、コリヤ〳〵、其方ども、なんぞ面白い藝當が、見たいわい見たいわい。
喜佐　ハイ〳〵、左様ならお久しぶりで、旦那のお座敷で
喜之　時に三味線は有るまいね。
小萬　この樽の中にあつたよ。
　ト四斗樽の中より三味線を出す。喜之助取つて
喜之　喜佐公、聲色にさつせえ。
　ト慄へ〳〵云ふ。
喜佐　おれが遣ふワ。貴公は後を頼む。
喜之　オツと。よしこの〳〵。
　ト源五兵衞が顏を見ながら、ビク〳〵して
　雨の降る夜は
　ト慄へ聲にて彈く。喜佐吉、扇をかざし、幸四郎の長兵衞の聲色を遣ふ事よろしくあつて
源五　コリヤ〳〵、その役者は、誰れぢや〳〵。
喜佐　ハイ、高麗屋でござります。
源五　ハテ、二人ながら、何が怖うて慄へて居るな。ハ、ハ、、、。
　トあざ笑ふ。兩人、コソ〳〵と身拵らへして
兩人　ハイ、お暇申しまする。

ト草鞋も土産物も捨ておき、一散に向うへ走り入る。
源五兵衛見送り

源五　ハテサテ、うろたへた者どもぢや。

ト笑ひ居る。時の鐘になり、向うより、ます／＼坊主案内して、宅兵衛、半纏股引き、大小にて、捕り手四人を隨へ

宅兵　コリヤ／＼修行者、いよ／＼源五兵衛は、向うの内にか。

ます　左様でござります。

宅兵　しかと左様か。

ト内を覗き、悧りして引ッ返す。捕り手見つけて

捕手　モシ／＼、旦那様、お歸りなされまするか／＼。

宅兵　たわけ面め、なに歸るものか。併し手だれの源五兵衞、迂濶には召捕られぬ。其方ども、先へ入れ、先へ入れ。

捕手　でも、私しどもばかりでは

宅兵　卑怯な奴の。主の詞を背くか。イヤ、腑甲斐ない奴等ぢや。

ます　ハイ／＼、旦那様、源五兵衛に違ひなくば、御褒美を、ます／＼お願ひ申します。

宅兵　やかましい。酢どれ坊主め。誰れが頼んで訴人しをつた。いらざる事を訴へたばかりに、身が役目となつたワ。たわけ面め。

ます　左様ではござりませうが、お上から、ます／＼御詮議でござりますから、ます／＼訴への御褒美を、ますます坊主に

宅兵　まだ／＼吐かすか。褒美くれう。これへ參れ。手を出せ。

ます　へイ／＼。

宅兵　ソリヤ、落すな／＼。

ト内懐を探り、ツツと渡す。ます／＼坊主見て

ます　エ、、御褒美が一兩ならぬ、こりや一朱。イヤ恐れ久松、ます／＼／＼

宅兵　默り居らぬか。

ト叱りつける。ます坊主、口小言云ひ／＼、番屋の脇へ入る。宅兵衛内を見て、思ひ入れあつて

コリヤ／＼、三五郎、三五郎、三五郎。

ト呼ぶゆゑ、三五郎、門口へ出て

三五　へイ／＼、私しでござりますか。

宅兵　コレ、われが内へ來てゐる浪人はナ、ありやア人殺

しの源五兵衛ぢやが、身共らが手を下ろさず、其方、あの者へソッと纒かけて、身共に渡すと、コリヤ、魚心あれば水心、ソレ、身が戀の敵のあの小萬の事も、コレ、料簡いたして遣はすが、どうぢや／＼、この相談は。

三五　それは有り難うござります。併し、あなたはお役人樣ゆゑ、マア／＼あなたお先へ、上意と仰しやつて、お入りなされませ。

宅兵　これはしたり、それが申される位なら、其方は頼まぬが、何分其方、先へ召捕りに、參れ／＼。

三五　どう致しまして、お前のお役だ。先へお出でなされませ。

宅兵　イヤ／＼、其方から

ト兩人爭ふ內、源五兵衛聞いて

源五　コリヤ／＼、三五郎、何を門口にて物騷がしい、何事ぢや。

三五　いエ／＼、なんでもござりませぬ。

源五　でも、只今の樣子では

宅兵　イヤ／＼、少と內談がござつて、それにござる源五兵衛どのに

源五　御用の筋かな。然らば參つて承らうか。

ト合ひ方になり、下の方の宅兵衛が側へ來て

お侍ひ、御用の筋は。

宅兵　イヤ、別儀でもござらぬが、この間深川にての人殺し、その節の相手は、慥かに其許樣が

ト云はんとするを

源五　アイヤ、お役人、身は浪人仕つても武士でござる。女童の儀につきまして、何しに人を殺めませう。そりや人違ひでござらう。

宅兵　イヤ／＼、爭ひ召されても、眼前その節

源五　すりや、その時の樣子をとくと

宅兵　サ、おてまへ樣をキッと見ました、證人はアノ

ト三五郎へ思ひ入れ。

三五　ア、モシ／＼、そんな噂はわしどもは、知らぬ知らぬ。

源五　ア、そんならあの夜のあらましを

トさては三五郎が訴人せしといふ思ひ入れ。

三五　どうして／＼、わしどもは、誰れがどうやら

源五　さうであらう／＼。そでなき事を身共に云ひかけ、コレ、お侍ひ、その人殺しは、なんぞ慥かな

ト云はれて宅兵衛、キッとなり

宅兵　證據がござる。キッと殺したその證據、お目にかけませう。

トこの時、番屋の内より八右衞門出かゝり、窺ひ居る。宅兵衞、懐より割り笄を出し

この笄に覺えがござるか。

トこれにて源五兵衞、恟り思ひ入れあつて

源五　すりや、その品が

宅兵　こりや其許の御所持なる事、人も存じた割り笄、人殺しのその場所に、落ちてあつたる貴殿の災難。口利巧にはお云やつても、證據の笄出るからは、遁がれはあるまい。速かに繩にかゝつて、引かれさつしやい。

源五　すりや、笄を證據として

宅兵　遁がれはあるまい……ソレ、召捕れ。

捕手　ハッ　捕つた。

ト捕手かゝるを、源五兵衞ちよつと立廻つて投げかけ、キッとなる。

宅兵　こりや源五兵衞、手向ひか。

トこの時、門口にて

八右　イヤ、人殺しが違ひました。

源宅　ヤ、、なんと。

ト合ひ方にて、八右衞門、内へ入り、兩手を突き、こなしある。

源五　ヤ、其方は八右衞門。これへはどうして

八右　只今あれなるお役人樣、御持參の笄が、證據と相成りまするなら、その人殺しは違ひました。こりや別にござりまする。源五兵衞さまではござりませぬぞ。

源五　身共を庇ふ八右衞門

宅兵　して、人殺しは何者だ。

八右　私しでござりまする。

源五　ヤ。

ト三五郎、小萬も思ひ入れ。

八右　大切の旦那を騙し込み、阿房に仕立てた藝者の[illegible]、それに附き添ふ男もあつて、現在武士を惰弱者、放埓者にするのが口惜しさ。それに組みした惡者を、憎さのあまり切りましたが、只口惜しいは肝心の、そのマア夫婦を

ト兩人へ目をつけ、こなし。

家來が切つた人殺し、旦那へその科がかゝつては、八右衞門めが云ひ譯ござりませぬ。お役人樣、下郎めに繩かけて、お引きなされて下さりませ。

源五　すりや、其方がその科を

八右　證據は即ちこの品が、一對揃ふ割り笄。これが慥かな證據ではござりませぬか。

ト以前貰ひし割り笄を出す。

源五　流石は家來八右衞門、一合取つても武士の魂ひ、愛い奴ぢや、出かし居つた……それに引替へ、女を餌に

ト三五郎と小萬の方を見て、涙を隱し思ひ入れ。宅兵衞、笄を取つて

宅兵　斯樣な證據が出るからは、即ち彼れに

ト八右衞門に繩かけんと立ちかゝる。八右衞門思ひ入れあつて

八右　どうでこの身は繩目の恥、お掛けになるならその繩は、モシ、旦那樣、せめてはあなたが

源五　我れに掛けよと其方が、望みは叶へ得させんが、縛しめ渡す源五兵衞、心の中の

八右　そのお心がござるなら、下郎が命を捨てまして、死んだ跡ではお念佛、手向けの水を貰うても、そりや私しは受けませぬ。何卒義士の列に交つて

源五　ヤ。

ト思ひ入れ。

八右　サ、義に依つて死する小者の魂ひ。ましてや高祿なりしあなたは、忠義に身を捨て、殿の存念。恨みは高野

源五　コリヤ。

八右　サ、香花よりも誰れ〳〵と、その戒名に末の世までお加はり下さるものなれば、それで下郎が極樂往生。旦那の迷うた惡性女め、ふッつり忘れて下さりませ。

ト兩人の方を恨み、源五兵衞へ思ひ入れ。

小萬　今となつてはこの身の辛さ、それも明かせばお主のお爲。

三五　顏合はされぬこの體裁。これも矢ッ張り主親の、思へば恥と諦めて

ト兩人思ひ入れ。宅兵衞さし寄つて

宅兵　科人極まる上からは、お侍ひ、キリ〳〵繩を掛けさつしやい。

八右　サ、旦那樣、未練でござる。とく〳〵わしを

ト手を廻す。

源五　然らばこれにて……捕つた。

ト八右衞門に繩かける。

やがて身共もこの如く

八右　ア、モシ……鶴龜松竹、萬々歳の御壽命榮えて

源五　めでたう本望。
八右　それを願うて
　ト思ひ入れ。愁ひの仕組み。
宅兵　ソレ、引ッ立てい。
捕手　立ちませい。
八右　ハイ。おさらばでござりまする。
　ト時の鐘、三重になり、門口へ出る。捕り手、八右衛門に手拭をかむせて宅兵衛附き、向うへ入る。源五兵衛後を見送り、件の柄樽を二人が前へ差置く。
三五　こりや、源五兵衛さまには御持參なされし、この酒を又改めて
小萬　わたしら二人へ
源五　身が志し、受けてくりやれよ。
小萬　エ。
源五　下部が人を殺めしと、我れに替りし魂ひも、元の起りは其方達二人、恨みもあれど何事も、胸にこたゆる下部が意見、彼れが菩提に小萬が事、只今改め思ひ切る。殊には科なき者どもを、人違ひにて討つたる譯なりや、身があるうちは、さぞや二人も心遣ひ、それを察して源五兵衛、この上女が兄親とも、力に思やれ。身もその心色がましき事は、ふッつり思ひ切る程に、其方達二人は兄妹とも、思うてこの後力にせよ。必らず疑ひ晴らしてくれい。
三五　改まつたるそのお詞、あの節二人がお前様より、申し受けたる百兩も、云はゞ私し一人の僞。
小萬　切り苛なんでも飽き足らぬ、憎い奴とも思さんに、お情厚きそのお詞、それもあなたに代りたる、御家來衆の忠義ゆゑ、この上ともに私しらを
三五　お腹も立たうが町人風情、誠に犬とも四つ足とも、人ではないと思し召し、蟲同然な遊里の二人
源五　イカサマ、申せばその如く、二人が二人犬猫同然、誠に人では
　ト門口へ出る。三五郎、履物を直しながら
三五　エ。
　ト思ひ入れにて、源五兵衛、門口へ出る。
源五　イヤ、あるかも知れぬ。
　ト唄、時の鐘。源五兵衛、兩人へ心を殘し、件の徳利へ目を附け、向うへ入る。奥より以前のおくろ、赤子をいぶりつけながら出かゝり居る。三五郎、向うをよくよく見て、鹽笊を取つて門口へ出て、鹽花を蒔いて

三五 七里けつぱい／＼……南無金毘羅大權現南無金毘羅大權現。

トそこらを拜み廻り、ホッとしたる體。小萬、胸先を押へ居る。

ア、恐ろしや／＼。

小萬 そんならお前も有やうは

三五 あの侍ひが、今は來ようか／＼と、それはかりを案じたが、何事もなく歸つて、ア、めでたいめでたい。

小萬 わたしも重荷を下ろした思ひがするよ。

トこの時おくろ前へ出て

もし モシ／＼、わたしはなんだか存ぜぬが、不氣味なお侍ひだと思つても、爰へ出てお茶の一杯も飲みたいものを、辛抱して居りやした。このお子もよく寢なさつたなれど、わたしは

ト立つて、側にある土瓶の茶を、つぎかけ／＼グツと呑む思ひ入れ。

三五 さうであらう。此方も生きた氣はなかつた。マアマア、爰へ床を敷いて

ト風呂敷より木綿の夜具搔卷を出して敷き、屛風を立てる。

くろ モシ／＼、わたしやア今夜は泊つて參りやせう。

小萬 さうしなさんせ。その子もそこらへ寢かしなさいな。

くろ アイ／＼、この搔卷をお借り申して、ドリヤ、添へ乳して臥りませうか。

ト時の鐘、合ひ方になり、おくろ、屛風を立て、その中へ入り、子を抱いて寢る。二人は蒲團の上へ上がり件の酒を引寄せ

三五 イヤモウ、これでこそ寶の夫婦だ。あの侍ひも有やうは、ごてつきに來たのだが、何事なしに歸つたも、誠にめでたいぢやアねえか。祝ひに一杯飲まつし。

ト柄樽の酒を出す。

小萬 コレイナア、そりやア冷だわな。そのちろりのお燗酒だ。まだ覺めはしまい。それにしな／＼。

三五 さうしよう／＼。

ト柄樽を片寄せ、ちろりを引寄せ、茶碗につぎ、グツと引受け

サ、てめえへ獻さう。

小萬 ついでくんな。

ト三五郎酌をして、兩人酒を飲む。此うち捨て鐘。向うより太郎七、割り竹を持ち歸り來り、内を覗き、思

ひ入れあつて、番屋の戸を明け、內の太鼓を出し、思ひ入れあつて又戸を締める。此うち二人は酒を飲む事あつて

三五　ほんに、莨の火を生けて置かうか。炭があつたかの

小萬　慥かあの揚げ板の下にあつた。

三五　あるかの。越したやつが置いても行くまいが

ト上げ板を明け、中を探して

そりやこそな。炭は無えワ。

小萬　さうか。そんなら爰へ來て寢なさいな。

三五　さうもしようが……イヤ、又こんなめでてえ事はねえの。

小萬　誠に夢のやうだの。あのお侍ひさんに逢つたら、定めしとんだ事が出來やうと思つた源五兵衞さんは、思つたよりも產むが易し、お前の願ひが叶つて、勘當も赦りて、天下晴れてわたしも三五郎が女房。越した先の大家さんは、わたしが兄さん、店賃の云ひ譯する氣兼ねもなし、こんなマア氣樂な事はねえの。

三五　イヤ、實にいゝ長屋へ越して來たて。これから又當分、朝も晩も寢てばかり居るから、てめえもそのつもりにさつし。

小萬　オヤ、寢て暮らすのか。樂しみでいゝの。

三五　サア、此方へ來さつし。

小萬　今夜はなんだか寒いの。

三五　その筈よ。爰の內はお化けが出るよ。

小萬　オヽ、怖。

三五　と申しまするが今晩の茶番さ。

ト屏風を引廻す。寺鐘聞え、蟲の音、一つ鉦、凄き合ひ方になる。この時、門口の番屋にて太郎七、口笛を吹き、ドロ〳〵を打つ。この時番屋の蔭より、ますます坊主、寢ぼけたる體にて出て來り、腰のまはりを探り

ます　南無三、煙管を落した。そりやアいゝが、あの太鼓はなんだ。イケやかましい。併し煙管を落しては、ますます不自由だ。

トそこらを探る。この時內にて、件の揚げ板を刎ね返し、彌助、やつしの上へ經帷子を引つかけ、胡麻鹽を當て、額へは塵紙な目鼻を明けて貼り、ひよいと立ち、ソロ〳〵出てくる。門口のます〳〵坊主、煙管を尋ね、爰の內へ落しはせぬかと、ソツと內を明け、[illegible]りして

ヤア、幽靈だ〳〵。ます〳〵幽靈〳〵。

ト向うへ逃げて入る。彌助、幽靈の眞似をして

彌助　アラ恨めしや〳〵。ア、浮かまぬ〳〵。ア、恨めしい〳〵。

ト兩人が寢て居る枕元へ行つて無性に嚇す。兩人寢て居るゆゑ、側へ寄つて二人を搖り起す。これにて額を上げ、恟りせしが、三五郎キッとなつて

三五　此奴はなんだ。寢て居る所へ來やアがつて、なぜ起した。うぬアなんだ。

彌助　幽靈だ。

三五　ナニ、幽靈だ。コレ、嬶アや、あれ見や、幽靈が出た。起きて見さつし。

ト起す。小萬起きて、思ひ入れあつて

小萬　オヤ、あれが幽靈かえ。コレ、幽靈さん、もう少つと明るい方へ出て、よく形をお見せな。オヤ、變痴氣な物だの。

彌助　エ、、恨めしい。

三五　ナニ恨めしい。おきやアがれ。氣が狂つたさうだ。コレ、てめえ、なにか、お岩の幽靈か。コレ、その仁右衛門といふ人が、この内に住んで居たか知らぬが、疾に越して行つてな、おいらは代人だワ。それになんの借りがあつて來た。イヤサ、どういふ理窟で化けて來たのだよ。

彌助　恨めしい。

小萬　オヤ、恨めしいと云ふよ。

三五　ナニ恨めしい。これサ、てまへ、そりやア筋違ひだ。おいらは何も恨まれる覺えはないから、歸らつし。それとも否なら、いつまでもおらが内に居さつし。歸らうと云つても歸さねえの。夜が明けやうが、天道樣が出やうが、幽靈の晝夜仕舞ひ、居續けに置くよ。歸りかけに地獄へ附き馬を頼む。コレ、爰は四谷だから、駄賃馬の歸りは、いくらでもあるソ。サア、幽靈、挨拶をしろえ、挨拶をしろえ。

ト立たんとする。彌助、氣味惡く後へ下がつて

彌助　恨めしい。

ト小萬聞いて

小萬　オヤ、先刻から、恨めしい〳〵とばかり云つて、後の云ふ事を知らねえ幽靈だの。コレ、恨めしくば、當分わつちが内にお出でな。どうでモウ世間中に借りがあるから、もう今に借錢乞ひの市が立つよ。その時のぼく除けには、幽靈がいゝの。ハテ、お前、幽靈のごたつきは

飯を食はず、腰から下が無えから、履物の世話はなし、
幽霊にど重用な眷族ふはない。ちよこ〳〵来てくんな。
まだ用は無かつたが、……す、、ある〳〵。ちよつと貸を
買つて来ておくれ。
ト此うち彌助矢筈い

彌助　恨めしい〳〵。
ト云つて居る。外の太郎七、太鼓を叩きながら、口笛
ふつて、内を覗いて忍び入れ。
コレ〳〵、其やうに大風をきめるな。早く遁して行け。
店賃を拂つて遁して行かぬと、取殺すぞ。

三五　ナニ、取殺す。うぬ、おれを殺すた、幽霊も殺しに
は置かねえ。うぬ、化け物め、叩き生かしてやるべい。
ト立ちかゝつて彌助を引摑ける。彌助、三五郎なくに
はず。
らぬ、幽霊め、打ちやアがつたな〳〵。済まねえぞ〳〵。

彌助　幽霊に打たれたで、しめるな〳〵。しめる〳〵。

小萬　コレイナア、危ねえわな。幽霊さんも、不請しなさ
んせ〳〵。
ト三五郎、幽霊と摑み合ふ。小萬、まあこちと留める。
太郎七、門口にてこの體を覗き見て、うろたへ廻り、
向うへ行かんとして、人音するゆゑ、番屋へ入り戸を
締める。向うより、ます〳〵坊主の知らせにて、市、
ぶら提灯を提げ、鐡、辰、若い者二三人。弓張り、六
尺棒、割り木などを持ち、ロヤロヤと走り出て来り

皆々　幽霊は、どこに居る〳〵。

ます　爰の内だ〳〵。

皆々　幽霊を出さつしやい。幽霊を出せ〳〵。
ト立ち騒ぐ。

三五　幽霊は爰に居るわ。入用なら、連れて行つて下され
連れて行つて下され。
ト彌助を外へ突き出さうとする。彌助、三五郎に縋つ
て

彌助　アヽ、コレ〳〵、外へ出ると打ち生かされる。幽霊
一人、助けてくれ〳〵。

三五　否だ〳〵。うぬ、行かねえと、幽霊を縛つて、突き
出すぞ〳〵。

彌助　これさ〳〵、三五郎、おれだ〳〵。
ト額の塵紙を取つて、こなしあつて、

小萬　ヤア、お前は見さんかえ。

三五　彌助さんか。そんなら幽霊は、大家さんだの。

彌助　コレ〳〵、譯は斯うだ。
　ト三五郎に囁き、經帷子と胡麻鹽を取り、家主の形になり、門口へ出て、何くはぬ顔にて
　コレ〳〵、長屋の衆、何を騷がつしやる。
鐵　モシ〳〵、大屋さんえ、お前のお店へ幽靈が出たをます〳〵が知らせやしたから
三人　幽靈を、しめに來やした〳〵。
　ト此うち三五郎、經帷子を上へ引ッ張り、門口へ來り
三五　モシ〳〵、御近所のお方、そりやア間違ひでありやせう。わしが今夜お富士樣へ、焚上げをするから、見なさい、此やうに白い衣を着た。それを幽靈と間違へたのサ。
皆々　エヽ、さうか。こいつは擔がれた。
　ト此うち辰、門口の軒へ、ブラ提灯を引ッかけ
辰　そんなら、この喰ひ倒れに騙されたのか。エヽ、間抜け坊主め。
　トくらはす。
ます　なんだ、この人は。化け物が出たから出たと云つたに、擲る事があるものか。ます〳〵合點がゆかぬわえ。
皆々　何をこの喰ひ倒れめが。
　トます〳〵坊主を突き倒し、足蹴になし、皆々向うへ入る。ます〳〵坊主起き上がり、ます〳〵と云ひながら跡を追うて入る。この騷ぎに軒の提灯を忘れて入る
　三人殘つて
三五　アヽ、危ねえ事だ。コレ、兄貴、お前も又とんだ思ひ附きをして、なんでわしらを嚇しに來たのだ。
小萬　お前もいゝ加減に、馬鹿を盡しなさんせ。
彌助　イヤ、有やうは、妹聟でも親類でも、樽代を取つて、一晩限りに越させて、また後の樽代を取るが、家主の株だから、今のやうな眞似をしたに、夫婦ながら強情を云つて、化け物が怖くないとは、イヤ、三五郎とやらてめえも餘ッぽどな強惡だぜ。
三五　誰れが仕込んだ。
彌助　又へこんだ。
　ト思ひ入れ。この時、軒に吊せし提灯の灯にて、櫺子に貼つたる師直の館の繪圖面を見附けて
三五　あの櫺子に、おつりきな物が貼つてあるね。
小萬　どうやら普請の、ありや繪圖面を
彌助　昨日今日まで高野へ出入りの、大工が住んだこの古家。

三五　もしや屋敷の

ト思ひ入れ。彌助ズツと立つて、件の繪圖面をめくり取つて

彌助　イカサマ、こいつは座敷の

三五　工風を附けた繪圖面は……コレ、この床の間が即ち拔け道。緣側傳ひに行く時は

小萬　廊下の板敷、緣側は、皆揚げ板にて、下家へ通路の

彌助　疊を取れば床づくり

三五　天井板も物置の、二階へ拔ける建て方は

小萬　迂濶に歩めば、コレ／＼、爰にしつらふ落し穴。危ない工風を

三五　よくも魂膽。ハテいゝ物が

ト取らんとするを、彌助手早く懐中する。

彌助　大家の手には

三五　エ。

彌助　入つたわえ。

ト變つた合ひ方。思ひ入れ。三五郎、こなしあつて

三五　長屋の櫺子に貼つた反故、皆家主の物なれど、それぱつかりは大家さん、妹聟のわしに下さい。

彌助　なんにする。

三五　その要り譯は、わしが親仁の勤めた旦那に、塩冶の浪人、そのお方へ進ぜたら、萬一役に立たうかと、それゆゑわしが

彌助　して、その浪人の名は何と云ふ

三五　顔は知らねど、わしが主筋、家名は不破の數右衛門。

彌助　ア、あの人か。爰にてまへ、誰も知らぬといふが

なぜ又今まで

三五　身持ちの惡いわしゆゑに、昨日今日まで親仁の勘當

それゆゑ旦那のお前も

彌助　知らずばよしやれ。あの侍ひは大間拔け、塩冶の家來のお金番、うぬが大事のその金を、失うたお咎めにて、浪人したたわけ者、意氣地なしの數右衛門が、なんで敵と大名を

三五　イヤ、討つの。

彌助　そりや誰れが

三五　コレ、話しはこれぎり、あの大星といふ人が、音頭を取つて

彌助　ア、あの大星か……コレ、い、加減に聞くがよい。大星はその氣か知らぬが、この頃は隠居が出るはめでたいの。コレ、酒があるなら、一杯飲ましやれ、

三五　ホイ、猶かわりに、

彌助　そいつは有り難い。これかぁ

ト ちろりを取つて思ひ入れ。

コレ／＼、爰には無えぞえ。

三五　さうかえ。そんなら此方の柄樽の中に

ト 件の柄樽を出して

爰にあるよ。

彌助　アヽ、冷かくなんでもいゝ。幽靈で剛氣に草臥れた。

ト 茶碗へつぎ、グツと飲んで

アヽ、いゝ氣味だ。一つ飲みやれ。

ト 茶碗を出す。

三五　お前マア重ねて飲むがいゝ。

彌助　抑へるなら飲むの。ほんの事だが、いで飲まうといふ段になつては、そいつアもう、酒呑童子でも呑み潰す。

ト 又引ツかけるとて肌を脱ぐ。左の腕に三ツ星に一な彫つてある事。三五郎目を附け

三五　こりやア兄貴の腕には、酒呑童子も及ばざる、その彫り物は渡邊の、ア、綱もねえ三ツ星に、一つ文字は、古風な下縮サ。

彌助　若い時から腕の三ツ星

小萬　すりや兄さんの好物に

彌助　企みは大星、辰巳へは、稻星の出る當り年、ちつと流行りに遅れたが、おれが彫つたは三ツ星に

三五　一の文字はお旦那の、越度となつたお金の紛失。殿の用金盗みしその夜、二人連れ立ち盗人が、逃げる所を引ツ捕へ、袖引ちぎりし仕着の看板、しるしは神谷の紋なれど、武家の事ゆゑ詮議も等閑。その時見附けし腕の彫り物、三ツ星なりと親仁樣、お話しありしが違はぬ割り符、神谷の小者のこなたなら、主従寄つての夜盗の働らき。

彌助　さう其方から指されては、隱したとても天の網。成る程神谷に勤めた砌り、主從二人が云ひ合せ、鹽冶の役所へ忍び込み、金を盗んで駈け出す時、引ツ切られたる片袖から、見かぢつたる彫り物は、成る程おれだ、この彌助だ。併し、妹が縁につれ、今では小舅、お主は聟、それでもおれが名を出すか。

三五　どうして貴樣を。その代りには懐の、檀子の反故の繪圖面を

彌助　イヽヤ遣られぬこの繪圖は、高野の屋敷へ

三五　わしに下さい。

ト南人爭ふ。この時彌助、ヨロ〳〵して、思はず血を吐き、俄かに苦しき思ひ入れにて

彌助　ヤ、、思ひがけなきこの體裁、惡血吐きしその上に惣身痺れてこの苦痛。ア、、苦しや〳〵

トのたうち廻る。小萬駈けより

小萬　こりや兄さんの俄かの惱み、顏色變つて苦しましやんすは

三五　慥かに毒氣にあたりし樣子。もしや飲んだろ

彌助　わいらが馳走のこの酒が

ト德利を取つて打割る。中には白布の毒を仕込みし藥袋に、青蜥蜴入れてある。三人恟りする。彌助、キツとなし。

イヤア、さてこそ酒にはアノ毒を。そんならうぬらは

ト二人にむしりつき、引ツ捕へてこづき廻し

兄を毒害しをつたな。

ト捻ぢつけて兩人を苦しめる。

小萬　イエ〳〵わたしや存じませぬ、なんでお前を、妹のわたしが

ト云ひ譯する。三五郎思ひ入れあつて

三五　これで解つたコレ小萬。そんなら今來た源五兵衞、おいらが事を忘れ兼ね、毒を入れたるこの酒にて、殺す心で何氣なう、立歸つたるその酒を、二人は飲まいで間違つて、兄貴の難儀となつたのぢやな

小萬　エ、、そんなら毒を入れたのは、源五兵衞さんの

ト思ひ入れ。

彌助　誰れがしようと飲ませたうぬら、數右衞門が身寄りにて、高野の殿を恨むといふ、この譯屋敷へ申し上げ、うぬら一々

トよろぼひ〳〵外へ行きにかゝる。三五郎堪えかね

三五　それ云はれては旦那樣、越度の上塗り……小萬、堪忍しろ。宥してくれ。兄貴は爰で

ト有りあふ出刃を取つて彌助を切り下げる。

彌助　うぬ、人殺し。兄殺し〳〵。

トむしやぶりつく。三五郎切り下げる。小萬さゝへる三人ゴツチヤに立廻りよろしく、彌助を仕留め、死骸へ蒲團を掛け、件の繪圖面を取つて

三五　コレ〳〵小萬、兄を殺した三五郎、おれが爲にはおらア敵だ。必らずうろたへるな〳〵。コレ〳〵、この繪圖面をナ、おれが親仁に渡してナ、この譯を話してくれろ。小萬、さらばだ。頼むぞよ。

小萬　ト出刃を取つて死なうとする。小萬縋つて
尤もでござんす。お前ばかりを殺しはせぬ。わたしも殺して下さんせ〳〵。

三五　馬鹿を云へ〳〵。コレ〳〵、これを親仁に渡してくれろよ。おれは死ぬわえ〳〵。
ト兩人爭ひ居る。時の鐘、バタ〳〵になり、向うより了心、スタ〳〵と出て來り、ズツと入り、この體を見て

了心　ヤ、こりや何をする。夫婦喧嘩に刃物三昧。放さぬか〳〵。

三五　イエ〳〵、これには段々

小萬　モシ、親仁樣、留めて下さりませ〳〵。
ト了心、刃物をもぎ取り

了心　コレ悴、喜べ〳〵、お旦那數右衛門さまが、今方お出でなされたゆゑ、われが金を拵らへた事もお話し申し直ぐにてまへを連れに來たのぢや。コレ〳〵、嫁女、こなたは跡に留守してくりやれ。悴、おれと一緒に〳〵
ト何心なう連れんとする。

三五　サヽ、參ります〳〵。參りまするがモシ、親仁樣、よんどころなう私しは。モシ

了心　ト蒲團をソツと明け、彌助が死骸を見せる。
ヤア、こりや、切り殺したのか〳〵。
ト大きに驚ろく。

三五　モシ〳〵、靜かに云はつしやりませ。屏風の中に、里親が聞いて居ります。モシ〳〵、これは
ト件の繪圖面を出し
これこそ高野の館の繪圖面。何卒これを數右衛門さまへ

了心　出かした〳〵。そんならこれが、敵の館の

三五　それを取らうばつかりに、よんどころなう女房の兄を

了心　ヤ、嫁女が兄を

三五　シイ〳〵〳〵……モシ、譯と申すは
ト門口の方へ思ひ入れあつて、指先にて書いて見せる
了心呑みこみ、思ひ入れあつて、繪圖を懷中して

了心　尤もぢや〳〵。が何を云うても町人の身の人殺し。爰に居ては惡い。わしが内へ〳〵

三五　左樣なら御一緒に
ト行かうとする。

小萬　ア、モシ、ひよつと途中でどのやうな、お前に難儀が

三五　成る程、迂濶に歩かば、そこもあるわえ。
　ト思ひ入れ。
了心　大事ない〳〵。併しわが身を、なんぞへ隱して
　ト思ひ入れあつて四斗樽を見附け、これ幸ひと、三五郎に囁き、こなし、
三五　左樣なら、この中へ
了心　ちつとの間ぢや。併し人殺しの身を以て、道の程も心許ない。
　トあたりを見て、以前の出刃庖丁を取つて、また囁き
まさかの時の用心に……この中へ忍んで
　ト三五郎を件の四斗樽の中に入れ、右の出刃も入れて上へ、着て居る衣をかけて、天秤棒を通し……
サ、嫁女、一肩やりやれ〳〵。
　ト小萬擔がうとして、いろ〳〵思ひ入れ。
小萬　どうしてマア、持てぬわいなア。
了心　エヽ、埒の明かぬ
　ト氣を揉み居る。この時、外の番屋より太郎七、目を擦りながら出て
太郎　アヽ、もう四ツでもあらうか。
　ト云ふに心づき、小萬、門口へ出て

小萬　コレ、番太さん、ちよつとこの樽を、あなたの內まで
太郎　ナニ樽を……アヽ、佛かえ。
小萬　イエ〳〵、淺漬ぢやわいなア。
太郎　さうかえ、片棒行きやせう。
了心　お賴み申します〳〵。
　ト門口へ荷ひ出して
そんなら嫁女
小萬　御苦勞ながら
了心　よう留守しやれ。
　ト唄、時の鐘になり、太郎七先に、了心、後肩を入れて、よろめきながら向うへ荷ひ入る。あと合ひ方、捨て鐘。小萬、門口にかき金をかけ
小萬　マア〳〵あれでは、主の身の上に、別條もあるまいが、心がゝりは兄さん
　ト死骸の方へ思ひ入れ。この時屛風の中にて、赤子泣くゆゑ、こなしあつて
アヽ、子は三界の……南無阿彌陀佛々々々々々々。
　ト門口の締りなして、死骸の側へ組板を直し、茶碗へ水を汲んで來て、この上へ置き、庭に生えたる草の葉



大正十五年九月邦楽座所演　根岸いさ五郎



澤田の源五兵衛　　久松の小まん

源五　な取つて、手向けのこなし。この時、蟲の音、凄き合ひ方、時の鐘、向うより源五兵衞、思案の體にて立歸り來り、内を窺ひ

源五　小者の倅千太郎、未だ對面遂げされど、主人と存じて某が、越度の金子も拵らへしと、いま了心の物語り、その深切な若者に、逢うて一禮云はんとは、思うて居れど最前も、逢うた二人の憎くき奴等。

ト門口へ目を附け

殊に最前殘したる、毒の入つたるあの酒を、二人が飲んだか。もし其まゝにあるならば、行がけの駄賃、百人切つても同じ事。うぬ三五郎、夫婦の奴等、今こそ思ひ知らせてくれん。

トきつとなり、門口へ來る。小萬は兄の回向をしてゐる。この時源五兵衞、門口をしやくる。かき金とけたる體。小萬振りかへり

小萬　誰れさんぢや／＼。

源五　イヤ、身共ぢや、源五兵衞ぢや。

ト時の鐘。ズツと入る。小萬恟りして

小萬　エヽ。

ト慄うて居る。源五兵衞さしより、あたりを見て

源五　三五郎は、この屏風の中にか。

小萬　イエ、主は近所へ參りました。

源五　アヽ、他行か。して、屏風の中は

小萬　アイ。ありや里親どのが、あの子へ添へ乳を

源五　して、最前の酒は飲んだか。

小萬　ツイ……イエ、たべましたのは、わたしの兄さん

源五　その兄は、如何いたした。

小萬　爰に臥つて

ト慄うて、こなし。

源五　ナニ、臥つて居る。爰に

ト蒲團を捲り、よく／＼見て

息は絶えたな。して、二人は飲まぬか。

小萬　アイ。

源五　ハテ、喰はいで殘念な。屏風の中は、いよ／＼小兒か。

小萬　アイ／＼。

源五　どのやうな倅ぢや。見て參らう。

ト屏風の中へ入る。小萬、身繕ろひして、帶を引上げる思ひ入れ。この時、屏風の中にてバツタリ物音する。小萬、恟りする。程なく源五兵衞、赤兒を抱き、出て

來り、赤兒の小袖にて片手を拭くこと、思ひ入れあつて

誠に胤は爭はれぬ。三五郎に好う似て居るわえ。此やうな子のある身を以て、コレ小萬

ト小萬の手を取り、ヂツとなつて

この源五兵衛と、二世かけしとの五大力、あれも大方

小萬　アイ、あの彫り物は

源五　矢張り腕に

ト無理に腕を引出し、キツと見、

ヤ、、、三五大切。すりや五大力に書き添へて、一生拔けぬ女の腕、人目いとはず彫り物の、刃物を以て三五大切。斯くまで身共を僞はつたか。

トきつとなる。小萬思ひ入れあつて

小萬　三五郎さんに身を任せ、死ね死なうとの約束に、なんの命は塵あくた。主へ進せた藝者の氣前。わたした一生瘢物に、これ程までに

ト此せりふのうち、源五兵衛、小萬の顏をヂツと見詰めて居る事。小萬、氣味惡き思ひ入れにて

あのマアかみさんは、よう寢て居さんすの。

ト源五兵衛が手を振り切り、ツカ／＼と屛風を明ける。

中におくる、咽喉を一刀に突かれし體にて、死骸になり、壁に死骸立てかけある。[illegible]りして

ヤ、こりや何者か

ト此方へ來る。源五兵衛、門口をシヤンとさして思ひ入れ。凄き合ひ方。

源五　命を捨てゝ八右衛門、我れへの意見、實に不便には思へども、煩惱の晴れても晴れぬ武士の意地、女わらべに騙されて、斯樣々々と世の人口、生涯武士が惡名拔けぬわ。憎くき奴は三五郎、彼奴め諸ともに殺した上、どうで命は捨て物ぢや。ヤイ、小萬、われが命は身が貰ふぞ。よくもこれまで侍ひを、女の口の舌三寸、たわけ阿房にひろいだな。

ト小萬を引きつけ

トきつとこなし。

小萬　御尤もでござります。これには段々樣子のある事、わたしが連れ添ふ三五郎どの、あの人こそ

源五　三五郎が行くへを吐かせ

小萬　イエ／＼、行くへは毫頭存じませぬ。もう斯うなつてはわたしも覺悟。憎しと思はゞ、サア、切りなさんせ。僞はり云うたは皆誤まり。わたしを切つて三五郎どのを、

どうぞ助けて

源五　助けてやらう。女わらべの、おのれを助けて

ト突き放す。

小萬　エヽ、アノ、わたしを助けて

ト立ちあがるを、すかさず拔いて切り下げる。小萬苦しみ、しがみついて、いろ／＼にこなし。

そんなら、どうでも

源五　息あるうちに、三五郎めが行くへを云へ、

小萬　知らぬ／＼。よし知つたとて、なんのこなたに

トあたりの物を取つて源五兵衛に打ちつけるを、切り拂ふ。小萬のたうつて

コレ、三五郎さん、わたしや今死ぬわいなア。どうぞちよつと顔見せて

トあちこちするを、源五兵衛なぶり切りにする。小萬所々へ取りつく。手の跡、壁へ血にて附く。源五兵衛、小萬を引寄せ

源五　三五郎めが在所を吐かせ。しぶとい女め。身を僞はりし三五大切、その入れ黒子はこの腕か。

ト腕を貫く。小萬苦しみ

小萬　男ゆゑなら死ぬるは覺悟。せめては二人がその水子、それぱつかりは、どうぞ助けて

源五　可愛いか、不便なか。不便に思はば、おのれが手にかけ

ト小萬が手に刀を持ち添へて

斯樣に致せ。

ト抱子を貫く。抱子落入る。

小萬　エヽ、こなたはなう。なんにも知らぬその子まで。如何に憎しと思へばとて、現在水子をその如く、こなたは鬼ぢや、鬼ぢやぞいやい。

源五　如何にも鬼ぢや。身共を鬼には、おのれら二人が致したぞよ。人外めが。

ト切り下げ／＼する。小萬落入る。源五兵衛、首を打ち落し、小萬が帶の端を切つて、それに首を包む。この時、雨車、雨の音烈しく聞えるゆゑ、思ひ入れあつて、あたりの傘を取つて、有りあふ下駄を穿き、門口へ出て思ひ入れあり

實に定めなき、浮世ぢやなア。

ト時の鐘、凄き合ひ方、一つ鉦、蟲の音。これより當なうたひながら、花道へかゝり、傘をさし、向うのあゆみを逆り、この仕組みよろしく、此うち舞臺、靜か

にぶん頼ます。

本舞臺、庵室の體。正面二重の上に件の桶を置き、前に机を据ゑ、香華を手向け、新佛と見せたる體。左右竹藪、生垣、道心者の獨り住み、荒れ果てし體。源五兵衛あゆみを通り、門口へ來り、簀戸を明けて内へ入り、桶を見て、怪しむ思ひ入れ。

源五　身共が他行のその跡へ、いづれよりかは新佛と見えるが、道心めは悴の千太郎とやら、夫婦の者を、引合はさんと、呼びに參つたであらう。

ト件の机の上へ首の包みを置き、あたりより膳、茶碗、飯櫃、その外の物を持ち來り、行燈を掻き立て、飯を食ふ事。此うち好みの合ひ方、捨て鐘。件の包みを開く。中には小萬の首、出るを見て

ヤイ、小萬、此やうにわれと二人、食事をせんと思うたに、心柄こそ

ト飲みさしの茶を首へぶつかけ、楊枝使うて居る。禪のツトメにて、向うより了心、小提灯を提げ、源五兵衛を尋ねる心にて、スタ／＼と出て來り、内へ入る。源五兵衛ちやつと首を包む。

了心　ヤア、數右衛門さま。お前樣のお行くへを、お尋ね申して居りました。私しの悴めが、心盡せし百兩の、この御用金調達の、金子はお渡し申せども、まだその外に無くて叶はぬこの品ゆゑ、可哀や悴は人殺し

ト桶の方へ思ひ入れあつて

マア／＼、折角手に入るこの品を

ト渡す。源五兵衛開き見

源五　ヤ、こりやコレ敵師直が、居間の建て方記せし繪圖面。どうしてこれが

了心　勘當いたした悴めが、命を的に手に入るその品。あなたのお手より大星さまへ、差上げたなら、徒黨の人數、

源五　加はる願ひもこの身の不埒。所詮お供は叶ふまい最前渡せし百兩と、この繪圖面は大星どのへ、其方屆けて

ト金と繪圖面を了心に渡す。了心思ひ入れあつて

了心　先日までも金子のお頼み、調へ參ればこの如く、この品ともに私しへ、お返しあるは何とも以て

源五　それもこの身の思はぬ誤まり。跡の回向を頼むは其方へ只今これにて

ト腹切らうとする。了心うろたへ、縋りついて

了心　こりや旦那様、なんであなたは

源五　殿より不興の数右衛門、浪人のうち仮名して、源五兵衛とは名乗れども、小万と云へる女めと、今一人は三五郎、彼奴等二人が手段にかゝり、思はず多くの人殺し義士の列には思ひも依らず。憎くき女は仕留めしが、連れ添ふ男を討ち洩らしたが、思へば残念。

トこれにて了心思ひ入れあつて

了心　ヤ、今のお詞、割符を合す事もあり。して仕留めしと仰しやつた、小万と申す女はいづれで

源五　今宵女は身が手にかけ、首ぶち落して、即ちこれに

了心　ヤ、こりや嫁のお六ぢや〳〵……そんならあなたを偽はりし、三五郎と申すのは、慥かに忰の千太郎。嫁のお六も藝者となつて、今のその名は小万とやら。鬼横町の神谷の空家、しかも今日引ッ越し参つて

トこれにて源五兵衛、思ひ入れあつて

源五　ヤ、其方が申すに違はぬ割符、二人が隠れ家。もしやその金、富森どのより来りし金か。

ト件の金を取り、包みを解いて、よく〳〵改めて

ヤ、こりやコレ残らずちきりの極印。富森どのより参つた百両。小万が難儀のその砌り、夫婦の者に騙られし矢ッ張りその金手に入りしは、身を騙かりし三五郎、其方が勘当なしたる忰か。

了心　その幼名は千太郎。

源五　小万と云ひしも其方が嫁

了心　お六と申した女が首

源五　さすれば身共を偽はりし

了心　夫婦の者は、親仁が實の

源五　忰と嫁がなせる業。

了心　思ひ廻せば旦那様

源五　現在家来が

ト了心を引きつけ

よく〳〵恥辱を與へたな。

トきつとなる。了心思ひ入れあつて

了心　御尤もでござりまする。幼ないうちに勘当うけ、あなたのお顔を存ぜぬ忰め、不破数右衛門さまとあるならば、聞き覚えある御家名ながら、源五兵衛といふ仮名。存ぜぬゆゑに斯様の間違ひ。旦那様、お宥しなされて下さりませ。

源五　皆間違ひといひながら、早まらずんばこの小万、斯

く浅ましき

ト切り首を抱きかゝへ、思ひ入れあつて

堪えてくれよ、誤まつた。其方ばかりか水子まで、其方が見る前あの體裁。殊に連れ添ふ三五郎、身共へ忠義を却つて恨み、今更思へば恥かしい。如何なる過去の悪縁にて、實義の夫婦、幼な子まで、あの有様は何事ぞ。これ皆武士のあるまじき、女に迷ひしたわけゆゑ。その云ひ譯には、腹切るぞ。

ト死なうとする。了心縋つて

了心　イヤ／＼、あなたは殺さぬ／＼。旦那に代つて、この道心が

ト源五兵衛が差添へを取つて死なんとする。源五兵衛押へて

源五　イヽヤ身共が腹切つて

了心　イヤ私しが

ト兩方爭ひ合うて、互ひに留める思ひ入れ。この時、桶の中にて

三五　お待ち遊ばせ旦那様、親仁様、云ひ譯あり、必らずともに

ト苦痛の思ひ入れ。

源五　ヤヽ、これなる桶にて何者か

了心　小舅殺せし悴を隠して

源五　して、その悴は

三五　即ち爰に

トばら／＼と、桶の箍外れて、桶毀れる。中より三五郎、用意の出刃にて腹切りし體にて、よろめき出る。了心駈けよつて

了心　ヤヽ、悴は腹をあばきし様子

源五　悴といふは、身を騙かりし三五郎か

三五　親仁がお主の旦那様、知らぬ事とてあの體裁、申し譯には

ト出刃を引廻して思ひ入れ。源五兵衛もこなしあつて

源五　こりや斯うたうては叶ふまい。

トこれより仕入りの合ひ方。三五郎こなしあつて

三五　親の勘當詫びの種、女房を稼ぎに出しながら、客を騙して集める金、もう百兩で親仁の御主人、數右衛門さまの御爲と、お主のお爲にお主を騙はり、浪人暮しの源五兵衛さま、小萬に執心幸ひと、大事が語つて拵らへ事、それが間違ひ、あなた様に、多くの人を殺させた、元の起りも私しゆゑ、その云ひ譯に切つたる腹、くたばりさ

するをまたしもの、お命代りと思し召し、あなたの伯父御のその百両、御用に立てし敵討、お供に立つて實名も贖罪の殺人多さうな。不破數右衛門重種と、義士に加はる亡君の、存念晴らさせ、あなたにも、忠義の武士を末代まで、その名をあげて下さりませ。

源五　その志しあるなれば、死ぬに及ばぬものなるを、あつたら若者見殺しに

三五　イヤ／＼。死なねばならぬ仕儀。あなたの持參のあの毒酒、女房が兄のこの彌助が、毒とも知らず飲んだ上、繪圖面持つて訴へると、云ふゆゑ是非なく殺したからは、磔刑道具の三五郎、我が手で死ぬるはまだしも仕合せ。あなたの多くの人殺し、それもこの身に引受けて、旦那は長らへ敵討

了心　親子女房殺させし、元は旦那に敵討、出立なさる手がゝりと、悴が及ばぬ心勞を、少しは不便と思し召し

源五　我れも騙かる夫婦の者、憎しと思ふ念も晴れ、用金揃へて、この身の詫び言。

ト　この時左右より五人づゝ、前場の鐵、辰、市、外に七人、いづれも忍び頭巾、夜討の義士の拵へにて、各自弓張りを持ち、窺ひ寄つて

鐵　古主の鬱憤散ぜん爲、大工左官と樣を替へ

市　或ひは商人、日雇取り、皆この邊に徘徊なすも

辰　これ皆義士の棟梁たる、大星どのゝ指圖に依り、數右衛門どの迎ひの爲

鐵　鹽田、倉橋、前原はじめ、義士の殘らず參りし上は、大望即ち今日今宵。

市　門出を祝して

皆々　御用意あれ。

源五　然らばこれより同道いたして

了心　本望遂するめでたき門出。

三五　我れは此まゝ、あの世の門出、

源五　臨終稱念。

ト　三五郎引廻す。この時、太郎七窺ひ出て

太郎　この由注進

ト　駈け出すを、三五郎引戻して、持つたる白刃にて切り倒す。太郎七見事にかへる。直ぐに三五郎落入る。

源五　コレ

ト　愁ひの思ひ入れ。

了心　お立ち。

ト　義士の皆々提灯を差立て、キッとこなし。

源五　先づ今日にこれぎり

めでたく打出し

盟三五大切（終り）

解説

渥美清太郎

南北は怪談劇の創始者として聞えてゐる。また曾我狂言や顔見世狂言が巧かつた。舞踊劇もまんざらでない。併し、何と云つても、彼れが最も得意とし、實際に於て最も優秀なる作物は、世話狂言の中から見出される。市井の寫實、流行風俗の描寫、に特に興味を持ち、すぐれた技術を持つてゐた彼れは、自然内容に於てもこの方面が最も進んで行つたので、南北の眞價値は僅かに世話狂言に依つて定められるべきなのである。本巻には、彼れが作の世話物から六篇を選んで收録した。

心謎解色絲（こゝろのなぞとけたいろいと）

この狂言は、文化七年一月、市村座に上演された世話狂言で、新春だけに一番目は「春榮松曾我」といふ名題の曾我狂言で、二番目へこの狂言が、仕組まれたのである。そして「本町絲屋娘」の書替へ狂言である。

「心謎解色絲」は、元より書替へ狂言であるから、原作たる「糸櫻本町育」と筋に於て關係は無い。俠客の本町丸綱五郎を、侍ひの本庄綱五郎としたり、絲屋の娘小絲を、藝者の妻に直したり、二枚目の佐七を、お祭り左七といふ鳶の者に直したりしてゐる。このうちでも、鳶の者になつたお祭り左七が、俳優の技術から役名が喧傳されたので、本家の婿左七は人に忘れられ、「お祭り左七」といふ講談まで創作されるほど有名になつた。

この時のお祭り左七に就いては、面白い話が殘つてゐる。それは、尾上松助の左七も好評であつたが、澤村田之助の小絲も非常な出來と賞讃された。元來この二世澤村田之助は、内氣な俳優で、「朝顔日記」の朝顔なぞを最も得意とする人であつたから、どちらかといへば傳法な藝者なぞは柄にない役だつたのであるが、この時の小絲は滅法よかつた。そして、凝り性の田之助は、左七に殺されるとき、血綿では情がうつらぬといつて、淺黄縮緬の着附けを毎日蘇枋の血でよごし、興行中日々新らしい着附けに取替へて出たといふのである。血糊を毒々しく使ふことは、この時代の頽廢した江戸人へ媚びる刺戟的な風習ではあつたが、その爲に小袖を毎日着替へるといふ事は前例に無かつたので、非常な評判になつた。その又血糊によごれた小袖を、物好きな藝者達は買ひ求めて、座敷へ着て出るのを見得としたので、評判は一層高くなつたといふのである。

「心謎解色絲」は、南北と、二世櫻田治助との合作脚本である。南北は主としてお房綱五郎の件を書いた。一旦死ん

だお房が蘇生して、濡髮の白裝束のまゝ花道から出る趣向や、小石川の場でお房とお時を競らせる技巧なぞは、南北專賣の手法である。この蘇生の件は、後に二世瀨川如皐が小さん金五郎に借りて「閑結鶯立額」を作り、小石川の場はソックリ默阿彌が眞似て、「升鯉瀧白旗」の大詰に使つてゐる。この場は、沙翁の「ロメオとジュリエット」が入つて來たのであらうといふ說もある。

二幕目「絲屋の場」が廻つた會所で、番頭佐五兵衞と丁稚長吉が、鮭の首を中に階子段で立廻りをする件りがある。讀んだだけでは要領を得ないが、あれは前年の市村座顏見世狂言が「貞操花鳥羽戀塚」卽ち袈裟御前の筋であるから、幸四郎の盛遠と三津五郎の亙が、高雄山神護寺で石段のタテがある。これが非常な評判になつた所から、それをそつくり茶番で行つたのである。

初演の折の役割は左の通りであつた。

蔦の者、お祭り左七（尾上松助）半時九郎兵衞（五世松本幸四郎）本庄綱五郎（三世坂東三津五郎）九郎兵衞女房、お時　實ハ絲屋娘小絲。絲屋娘お房（五世岩井半四郎）安野屋十兵衞（助高屋高助）藝者、中根屋お絲（二世澤村田之助）若原屋左五郎（七世市川團十郎）蔦の者、風の神喜左衞門（尾上松緑）絲屋番頭、佐五兵衞（澤村四郎五郎）山住五平太（市川宗三郎）石塚團三兵衞（市川門三郎）宴主、[illegible]後家おりの（芳澤いろは）[illegible]女房、お藤（小佐川七藏）醫者、百川東林（松本小次郎）質屋手代、金六（市川粟藏）廻し男、傳助（澤村次郎三）十兵衞女房、おらい（三世市川團之助）信濃者、太助（嵐音平）赤城左京之助光若（坂東善助）乳人、竹川（岩井梅藏）鳥追ひ娘、お君（岩井松之助）香屋、[illegible]（花井才三郎）丁稚長吉（坂東鶴十郎）

勝相撲浮名花觸

これは文化七年三月市村座に上演された世話狂言で、卽ち前の「心謎解色絲」の次狂言である。一番目には「樓門五三桐」で、幸四郎の五右衞門に三津五郎は高景一役だつたので、二番目にこの新作を附けて、三津五郎半四郎を中心に、幸四郎をワキへ働らかしたのである。

この狂言の主人公は、無論白藤源太であるが、南北は寧ろ足駄の齒入れ權助に力を入れて書いてゐる。幸四郎得意の役で、これが評判になつて大入りをしたのである。以後、數回復演はされてゐるが、いつも權助の役者を中心にして上演したやうである。一體南北は、龜井戶に住んでゐた所爲か、本所邊を好んで作中へ使ふ。岩淵といふのは何處であるか知らないが、外の作にも度々出てくる。權助といふ名

も南北は好きだつたと見えて、いろ〳〵な狂言にいろ〳〵な役柄で利用してゐる。それだけ、この岩淵の齒入れ屋權助といふ人物は、南北が會心の役だつたのであらう。

初演の折の役割は左の通りであつた。

角力取、白藤源太（三世坂東三津五郎）藝者、お俊（五世岩井半四郎）足駄齒入れ、岩淵の權助。坂間傳兵衞（五世松本幸四郎）津川勝次郎（七世市川團十郎）津川主水（尾上松助）云ひ號け、お澤（小佐川七藏）姉、お富（山下萬作）潮田伴之進（澤村四郎五郎）權助女房、おとり（市川宗三郎）母、おかや（市川門三郎）若侍、左五平（市川粟藏）大のしの富八（花井才三郎）

當穐八幡祭

文化七年のこと、江戸の或る町で、夜商ひの風鈴蕎麥屋が、良家の娘を駕籠屋へ連れ込んで、金を奪つた上に慘殺したといふ、血なまぐさい事件が起つて、評判になつた。この狂言は、それを骨子にした際物式のお家世話狂言で、同じ文化七年の八月、市村座で通し狂言に上演された。南北がまだ勝俵藏時代、五十五歳の折の作である。

南北は、この三面記事を脚色するに際して、作者道の慣例に依り、書替への法を用ひた。世界を「双蝶々曲輪日記」にしたのは、駕籠屋が使へるからである。さうして、甚兵衞だのお照だのといふ役名に隱れて、巧みに事件を暗示した。南北の際物當込みの狂言は、大抵成功してゐる。幸四郎三津五郎半四郎の三頭目に、松助團十郎といふ、若手揃ひの大一座だつた爲でもあらうが、この當込みも又利いて、當時としては記錄を破る大入りを占めた。大入りの芝居は、狂言の全部を演じないのが例である。この時も、最初は「駕籠屋」の場までしか演らず、九月十五日になつてから、「道行」と「捕り物」の場とを出した。少し客足の落ちかける時分には、この新幕で又客を呼んで、十月まで打ち續けた。「道行」に出る女夫團子も、當時市中に流行した行商の當込みで、これが頗る客の氣に入つたのであつた。

通し狂言だけに、全部を生世話にせず、序と終りにお家を附けて、結構を大きくした手法に、南北式の巧みさがある。序の毒藥事件は、越後騷動を匂はせたものらしい。「侍塚の場」では三津五郎が兄弟の早替りを演じ分けて、先づこれが第一の評判になづた。幸四郎が、丈左衞門のお家の敵役と、甚兵衞の世話の敵役を仕分けたのも、例の如き喝采を得た。二幕目は時候がら、吉原の俄を見せ、「駐春亭の場」に役者の濡れ事を添へたのは、女の見物客の弱點を摑んだ趣向である。「小塚ッ原」のだんまりの凄味、「山崎屋」で與次兵衞の實事、いづれも役者を實に巧く使ひこなしてゐる。「駕籠屋の場」は全幕中の山で、爰では半四郎が娘と

年増の早替りに、見物の目を驚かした。大詰の「捕り物」も、短かい幕だが、なかなかに凄味のある場である。

初演の折の役割は、左の通りである。

山崎屋與次兵衞（助高屋高助）倉岡丈左衞門。橋本次部右衞門。駕籠の甚兵衞（五世松本幸四郎）南與兵衞。南方十次兵衞。月見の三五郎（三世坂東三津五郎）次部右衞門娘、お照。奥女中關屋實ハ甚兵衞妹お早。三五郎女房お石（五世岩井半四郎）角力年寄り、幻竹右衞門（尾上松綠）山崎屋與五郎。野手の三（尾上松助）下駄の市實ハ三原傳藏（七世市川團十郎）藤屋吾妻（二世澤村田之助）鴻野後室、纈纈御前。藝者、都實ハ甚兵衞女房お早（市川團之助）山崎屋淨閑。鷲の森の長吉（澤村四郎五郎）荒川左近。米屋仁右衞門（市川門三郎）倉岡新三郎。書畫佐渡七（花井才三郎）三原有右衞門（嵐新平）山崎屋手代、權九郎（市川宗三郎）嫩巫女、小松（岩井松之助）李法印、簑坊（坂東簑助）

お染久松色讀販（そめひさまつうきなのよみうり）

文化十年三月の森田座へ書きおろした、お染久松の書替へ狂言である。俗に「お染の七役」といつて五世岩井半四郎に、七役を早替りで演じさせ、目にもとまらぬ替りやうの鮮やかさで、客を呼ばうとしたのである。

早替りといふ事が、芝居の技巧の中でも、あまり藝術的なものでない事は明らかであるが、江戸劇史の中でも特に文化年間は、非常に早替りが流行した時代であつた。流行した原因は、要するに觀客が平凡に倦きて、珍らしいもの〳〵とばかり求めてゐた際、たま〳〵忠臣藏の七役などが喝采を得てから、急に早替りといふ事に注目し、二役三役から終には七役十一役の早替りで、單に目先だけの刺戟で、客の好奇心を滿足させようとしたのである。一部の觀客には、兎に角非常に受けるので、南北も相當に早替り芝居を書いてゐるが、流石にそれも狂言中の一つの趣向として使つてゐるばかりである。ところがこの「お染久松色讀販」は、單に早替りをさせようといふのが眼目の狂言である。理窟からいへば、箸にも棒にもかゝらない筈なのであるが矢ッ張り南北は南北だけの事はある。出來上がつた狂言は、早替りといふ技巧を除所にしても、立派に存在の價値がある。早替りをさせる手法に至つては、元より得意な一流である。斯うして、見た目の非常に面白いところから、この狂言は現今猶上演を絶たないのである。

初演の役割は左の通りであつた。

油屋娘、お染。同丁稚、久松。奥女中、竹川。お染、母、貞昌。久松云ひ號け、お光。喜兵衞女房、土手のお六、賤の女、彌土手のお作（五世岩井半四郎）五百

崎の百姓、久作。演廻し、佐次兵衞（七世市川團十郎）山家屋清兵衞（尾上新七）油屋丁稚、久太（桐島儀右衞門）油屋太郎七（市川門三郎）同番頭、善六（澤村四郎五郎）同手代、九助（阪東善次）鈴木彌忠太（大谷紋次）刀屋彌吉（澤村川藏）中間、權平（市川成藏）百姓、寺島の彌五兵衞（阪東重太郎）油屋多三郎（阪東大太郎）藝者、お糸（中山龜三郎）髪結ひ、中の郷の龜（阪東鶴十郎）竹川召使ひ、お勝（岩井芳之助）油屋下女、お園（岩井梅藏）松本屋左四郎、鬼門の喜兵衞（五世松本幸四郎）

浮世柄比翼稻妻

この狂言は、南北が六十九歳の春、文政六年三月の市村座へ書き卸したもので、南北が作中では、興行度數も第一に位し、作そのものも非常に優れてゐる。南北が得意な手法、二つの世界を一つに纏めて、複雜な筋を立てる事が、この脚本では非常に成功してゐるのである。即ちこれは、不破名古屋の「稻妻表紙」と、權八小紫の「比翼塚」とを打つて一丸としたものである。初演の際は勿論、興行する毎に、いつも大入をしめた狂言である。有名な不破名古屋の「鞘當」――それは團十郎の希望によつて、古劇を改作したものではあるが、この脚本がその初演なのである。

山東京傳は、歌舞伎に由緒ある不破名古屋の世界から趣向を構へて「昔語稻妻表紙」といふ五冊物の讀本小說を作り、文化四年に發行した。これが非常に好評で、續編の「本朝醉菩提」まで出した程であつたから、程なく歌舞伎で、これを脚色、上演した。それは大阪であつた。その頃の江戶は、戲曲と小說とは互ひに相犯し合はぬといふ暗默の契約があつたので、小說の脚色は多く大阪で行はれた。文化の初年は、殊に大阪では小說を劇化する事が流行したので、この流行小說は、翌文化五年の春に、角座と中座の兩方で同時に競爭的興行をする事になつた。角座の方は、一月二十五日初日で、きのふは不破の關樣まゐる、けふは名古屋の山樣まゐる、と角書をして「けいせい輝草紙」。脚色者は近松德三で、不破を四世市川團藏、名古屋を二世嵐吉三郎、葛城を中山富三郎が勤めた。鞘當の場は無いが、小說にも出る梅津嘉門の筋を、插話的に添へてある。中座の方は、一月二十九日の初日で、稻妻表紙は姿の彩色、十帖源氏は意の寫繪、と角書をして「けいせい品評林」。脚色者は奈河篤助であつた。この方には梅津嘉門の筋は無いが、代りに佐々良三八の件に力を入れてある。不破は三世中山新九郎、名古屋は三世中村歌右衞門、葛城は中山よしを、であつた。この兩脚色を比較して見ると、不破名古屋の件に大して違はない。大體原作に從つて、草履打から山左衞門殺し、名

古屋の讀住居、上林での愛想づかしといふ順になつてゐる。兩者とも評判はよかつたが、後世多く興行されたのは「品評林」の方であつた。江戸でも度々上演してゐる。

南北も、勿論この小說が行はれる所から思ひついたのだらうが、流石に「稻妻表紙」に拘泥せず、權八小紫を交へて卽かず離れずに脚色し、しかも原作の眼目の個所は悉く取入れてある。殊に「鞘當」といふ古劇復活の一幕が非常に利いたので、この狂言は長く殘つたのである「鞘當」は、團十郎菊五郎が、その最近まで不和であつたのを、前年の顏見世、半四郎の仲裁で和解したのが幸にもこれへ持ち出して、舞臺で和解を見せたので、半四郎が留め女に入るのも、その故から來てゐるのである。

初演の役割は左の通りであつた。

名古屋山三元春。三浦屋小紫 實ハ 本庄娘八重梅（三世尾上菊五郎）茶屋廻り、鶴の長吉（尾上三朝）六角左京之進（中山錦車）本庄助八（大谷馬十）本庄助太夫（市川男女藏）佐々木桂之助（市川鰕三郎）白井權八 後ニ 紫屏蝶。長兵衞女房、お近（五世岩井半四郎）笹野才藏（松本錦吾）佐々木額五郎（市川小團次）遣り手、お爪・石塚玄蕃（大谷門藏）奥女中、榊。八百藏女房お吉（吾妻藤藏）下部・段八。唐犬權兵衞（尾上榮十郎）三浦屋女房、お高（市川おの江）所化、願哲（尾上[illegible]）家主、[illegible]（[illegible]十）詞人、善六（大谷音[illegible]）[illegible]、又平（澤村四郎五郎）山三下部、八内・[illegible] 後ニ 白井[illegible]（二世關三十郎）[illegible]、[illegible] 後ニ 上杉の[illegible]・[illegible]の[illegible]、お國（五世瀨川菊之丞）[illegible]、不破伴左衞門重勝 後ニ 寺西閑心（七世市川團十郎）[illegible]一子、長松（市村[illegible]左衞門）

脚本にも記してある通り、大詰の「八[illegible]」から「長兵衞の内」は、脚本が出來てゐたばかりで上演はされなかつた。尤もこの幕は「敵討天下茶屋聚」の人形屋幸右衞門の件を、俎板の長兵衞へ結びつけたものであるから、この一幕を預かられたとて、南北もさほど殘念では無かつたであらう。脚本にはこの場の役名を、お傳（市川門之助）貞の次兵衞（市川男女藏）等にあてゝある。この門之助は、病氣で出勤が出來なくなつたので、最初、門之助に當てゝあつた小紫の役を、菊五郎が兼ねた次第であつたが、中日過ぎには門之助も全快したので出勤し、小紫の役を勤めたのである。

盟三五大切

文政八年九月、中村座で上演した二番目狂言である。五大力へ忠臣藏を持込んだ趣向であるが、當興行の四谷怪談

が大當りだつたので、その後日狂言といふ觸れ込みで、多少の因縁を附けて出したのであつたが「近年になき面白き作なれども入りなく、十月十四日に舞ひ納めけり」と記錄にある。入りは無かつたか知らぬが、實際南北の世話物としては上乘の作だ。充分圓熟した筆致で、せりふなぞ殊に巧く、練れたものである。

薩摩源五兵衛 實ハ不破數右衛門。家主くり廻しの彌助 實ハ神谷下部土手平（五世松本幸四郎）藝者菊野（吾妻藤藏）富森助右衛門。德右衛門同心了心（市川宗三郎）判人 實ハごろつき五平（坂東善次）賤ヶ谷伴右衛門（市川染五郎）里親おくろ（鎌倉平九郎）ますく坊主（成田屋銀之助）夜番太郎七（中村千代飛助）娘分お弓（岩井春次）廻し男幸八（市川伴十郎）慾張り内びん虎藏（松本虎藏）出石宅兵衛（松本小次郎）若黨六七八右衛門（三桝源之助）藝者妲妃の小まん 實ハ神谷下女お六（岩井粂三郎）船頭笹野屋三五郎 實ハ了心悴千太郎（七世市川團十郎）船頭お先の伊之助（中村傳九郎）

續歌舞伎手代記を見ると、斯う書いてある。

「大切夜討の場、四十七人の義士、高野家來と入り亂れ、大タテあつて道具廻ると、向う一面海にて浪幕、浮畫にて佃島等を遠く見せ、すべて高輪濱の景色、前に笘をかけたる船あり。大薩摩にて笘を切つて落すと、團十郎、義士の形、大高源吾にて、師直の首を抱へる見得よく、せりふあつて上の方より義士大勢、提灯を持ち出で來り、見得よく並び、先づ今日はこれぎりといふ趣向」

併し、本卷に收錄した脚本には、この場が缺けてゐる。どちらが本當だか解らない。本筋と關係のない幕を、如何に大詰を引立てるとは云へ、しかも前狂言の大詰で討入を見せて置いた跡で、おまけに時候も大分違ふのに、又ぞろこの狂言で討入を見せるとは、頗る受取れない話しである。恐らく脚本に出來てゐながら、實演しなかつたのではあらうが。いづれにせよ、無くて事缺かぬ幕である。

例に依つて、カタリその他に關し、山形の秋葉芳美氏から有力な援助を戴いた事を、爰に記して謝辭にかへる。

編纂校訂責任

渥美清太郎

鈴木倪

日本戯曲全集・第十二卷
鶴屋南北世話狂言集・第十五回配本

著作權者檢印



昭和四年九月二十二日印刷
昭和四年九月二十五日發行
（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　高見靖雄
製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋　五一・六四一
　　　　　　三七・八八一
振替東京　一六一七八

（小石川區諏訪町・常磐印刷所）

